

ホグワーツと月花の狩人

榎澤卯月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヤーナムの獣狩りの夜が明けておよそ2000年。

狩人の業は今もなお継承されている。

存分に狩り、殺したまえよ。

筋力99，技量99の脳筋主人公がホグワーツ関係者の脳を震わせる話

目次

19世紀

揺籃期の終わり

1

1991年

列車

7

墓蛙

12

組分け帽子

19

4階の廊下

32

杖

39

安らぎの水薬

47

箒

55

青い秘薬

69

呪文

74

トロール

90

開心術

99

クイデイツチ

109

呪い

116

蛙チョコレート

126

賢者の石

134

竜

145

一角獣

155

警句

165

三頭犬

172

チエス

178

人形

186

金のアルデオ	209
寮杯	229
写真	242
1992年	
時計	245
狩装束	265
空飛ぶフォード・アングリア	279
ピクシー	304
競技場使用許可証	326
猫	339
魔眼	354
ブラッジャー	372
バジリスク	384
決闘	408
マートルのトイレ	429
マダラスの笛	451
秘密の部屋	474
アクロマンチュラ	515
靴下	543
ロスマリヌス	580
マント	608
鋏	625
継承	636

19世紀

揺籃期の終わり

救える者を普く救わんとするは、人らしき足掻きではないか。

血の誓約、ヤーナムの血を身に宿したその瞬間までは、月の狩人は意識を遡らせることが出来た。否、させられたとするのが正しい。助言者ゲールマンに因る葬送を受け入れた後、目覚めたのは血と消毒液が臭い立つヨセフカの診療所であった。

ならば、ゲールマンを目覚めさせることで、悪夢は醒めるのか。これもまた否。月の魔物は狩人を誓約の直後まで連れ戻した。

上位者達の瞳を受け入れ、そして月の魔物の血を拝領したところで、自らが上位者となっただけのことであり、悪夢は繰り返された。

血の遺志を継承することは、記憶や知識を継承するものではない。故に、何故悪夢が繰り返されるかも、悪夢から解放される術も、自ら探る他ない。繰り返す度に浴びる月の魔物の血は、狩人にとって使者との通貨でしかなかった。狂人達と異なり、人の進化も上位者の智慧を得ることも狩人にとってはどうでも良い事だった。

絶望の果て、狩人は思う。上位者が悪夢を見るのだと。狩人の悪夢はゴースの遺子が、メンシスの悪夢はメルゴーが見る悪夢。月の魔物を倒してなお、悪夢が醒めやらぬ理由。悪夢は繰り返されているのではない、悪夢を上位者となった自分が繰り返しているのだ。おそらく、ゲールマンの目覚めを受け入れるか、受け入れないにせよ上位者の瞳を得ていなかったときは、月の魔物による繰り返しが起きていた。そして、三周目になり、自身が上位者となってからの繰り返しは、自らが望んだ繰り返しなのだ。

あの夜に救えなかった者がいる。初めに我が身を導いた同胞、ガスコイン神父の娘。彼女は、狩人にとっての悪夢である。青ざめた血と成ってなお刻まれた自らの無力という罪。自分のみが夜明けを迎えるという罪。それらが、やり直しを求めている。この罪業から解放されなければ、悪夢は醒めない。

見慣れた病室で目覚めた瞬間、狩人はオドンの地下墓へ走る。頭を埋めるは間に合え、間に合えと願い、祈る声。それは最早獣の咆哮が如きそれ。しかしてその咆哮は、慟哭へ変わる。誓約を交わした時、既に少女の母、ガスコイン神父の妻は命を落としていたのだった。

神父は神を呪い、獣を殺し尽くす力を望んだ。その力への渴望こそが、人ならざる者への変態の呼び水となることを知っていてなお、神父はそれを望まずにいらなかった。人ゆえに抱いた当然の想いが人を獣に変える。

上位者の力に、それを弄ばんとする狂人達に、とめどない怒りが沸く。しかし、その怒りは狩人を獣とはしない。誓約を交わした時に見えた獣。あれは自らの獣性である。それに打ち勝った故、月の魔物に魅入られ、狩人となったのである。そして今や自分は月の魔物そのものになってしまっていた。

襲い来る神父を葬送の刃の一刀にて切り伏せる。せめて、獣になりきってしまう前に。百を超える繰り返しの果て、狩人は旧代の月の魔物を一撃で葬り去る力にしていた。

神父とその妻を埋葬する。妻、ヴィオラが握りしめたブローチは預かった。形見もないとは、少女があんまりではないか。

程なくして、目を血走らせた古狩人、ヘンリックが襲い来る。身を斬られつつ、言葉を投げかけるが、既に彼の脳は獣のそれとなっていた。幾度かの繰り返しの中、ヘンリックとガスコインは家族であることを知っていた。烏羽の狩人、狩人狩りの狩人アイリーンが酷く疲れた声でそう呟いていたのだ。

ヘンリックもまた、夫妻の隣に葬る。斧と鉞、二つの墓標が並ぶ。此度はアイリーンが来ていない。そもそも、ガスコインが死した事を知ったヘンリックが狂気に陥り、そしてそれをアイリーンが知るのはまだ先のことなのだ。しかし、この二つの墓標を見て彼女は察するだろう。

ブローチを握りしめ、少女のもとへ向かう。返り血を浴びることもなく、土埃一つついていない狩装束がかつてないほどに重く感じられた。

父と母の死を告げる。

一周目では、この行いは彼女の絶望の契機となった。おそらくは家の中で家族との想い出に浸りながら自死したのだろう。しかし、此度はそれをさせない。狩人は家に入れてもらい、少女を説得した。

父が獣狩りに出たのはヤーナムを、即ち家族を護るためであり、母が父を探しに出たのもまた、父が獣とならぬ様、引き戻す為である。その二人の愛によって、辛うじてではあるが生きている事実。少女が生きていることは、二人の生きた証であり、二人に対する義務であるのだと。

少女は涙を流しながらも、耐え忍ぶことを決意していた。

これで問題がないと確信し、狩人はメンシスの秘儀を打ち破った。

浅はかであった。

ロマの覆い隠した赤い月は人と獣の境界を曖昧にさせる。即ち、少女は獣と化した。

狩人はまたも目覚めをやり直すことを誓う。

答えそのものはなくとも、断片は既に手の内であった。

乳母を倒し、メルゴを女王ヤーナムに返し、メンシスの悪夢を終わらせる。そして、狩人の夢を繰り返す月の魔物を継承する。そのためにはまず、ロマによる秘匿を打ち破らねばならない。しかし、秘匿を破るとは、赤い月、その狂気の光を露わにすることである。赤い月のもたらす狂気に堪え得ることが出来なければ、人として目覚めることはできない。

では、狂気に堪え得る者とは誰であったか。まずは狩人である。元より永劫の悪夢に囚われている古狩人達は別として、アイリーンと旧市街に住まう古狩人デュラ。彼らはかつて夢を見た。つまり月の魔物との契約があったからこそ月の狂気に飲まれなかったのである。月の魔物のもたらす狂気なのであるから、月の魔物と誓約を結んだ者がそれに耐え得るのは道理であろう。

狩人でなければどうか。特別な知恵を持つというあの男性は幾分

か堪えていた様に感じる。おそらくは確かに特別な智慧を持つていたのだろう。上位者の声を聴き、視る瞳は尋常な人として得ることはできない。

医療教会は、上位者の血を注ぎ続けることで脳に瞳を得ようとしたあの悍ましい実験の果て、患者たちをついには失敗作であれ上位者の眷属とならしめたのだ。智慧を持たぬものに上位者の血を注ぐと、脳が肥大するか、ブヨブヨとした青い獣になる。そして、少女はヨセフカの診療所で受けた実験により、それになったことから、智慧を持たないと分かる。

ヨセフカ、と呼んで良いのかは分からないが、彼女は狂うことなく赤い月を受け入れていた。言動こそ狂人のそれであったが、あれは血を弄ぶ教会の人間の戯言であり、そしてまた、瞳を得た事を明確に表したものであった。

思えば、此処にも少女への執着があった。少女は一周目に自死し、二週目は下水道に蠢く豚の餌となり、そして三週目の診療所では、非道な実験の材料となった。遂に安息を得たと信じた末の所業に前後不覚となる程の怒りを覚えた。そして、次に眼前に広がったのは、肉塊となったヨセフカと、その胎から覗く、上位者の赤子であった。

一方、オドン教会のアデーラとアリアナ。二人とも血の施しを行うが、結果は分かたれた。アデーラは変態こそしなかったが、狂っていた。アリアナは狂わず、上位者オドンの赤子を産んだ。

上位者の赤子を産んだヨセフカとアリアナ。二人には共通点がある。カインハーストの血を継ぐ事だ。

聖歌隊。それは処刑隊がカインハースト討伐時に連れ帰った子どもが育った姿。ヨセフカはその装束を纏っていた。

アリアナが身に纏うドレスはカインハーストの意匠から成るもの。

ここから導き出されるは二つの可能性。カインハーストの血は赤き月の狂気に耐性がある。もう一つは、カインハーストの血は上位者の赤子を孕み、その赤子が赤き月の狂気を退ける。

余談となるが、おそらく初めて邂逅したヨセフカは、メンシス学派

の者であろう。診療所の地下にうずたかく積み上げられた死体、何かを護らんと徘徊する教会の巨人。トウメル人の特徴を色濃く残す巨人を使役するは、ヤーナムの女王を擁するメンシス学派の者であろう。メンシスの悪夢最奥部にヨセフカの輸血液がある。輸血液はヤーナムの女王からもたらされるものであるのだから、エーブリエタースと共にある聖歌隊がその様な特別な輸血液を手に入れようはずもない。

いずれにせよ、ヨセフカと名乗る両名が無辜の民を実験材料としていたのは変わりなく、救う気はなかった。狩人は獣を狩るのだ。人面獣心の者を救う道理はない。

狩人にはカインハーストの女王アンナリーゼと交わした血の契約がある。

狩人がこの事実を直視したのは、彼女を救うと決めてから、十回目の目覚めであった。

可能性とは、手段と等しいことではない。他に考えられる手段は尽くした。

秘匿を破り、直ぐに月の魔物を継承すること。失敗した。時空の捻じれている悪夢において、時間の多寡程度では歯車は軋まなかった。

アイリーンやデュラの血を輸血すること。アリアンナを残し、失敗した。元よりヤーナムの血の医療を受け容れた者は、既に一度あの獣を見ているのである。そして、使者に魅入られていないということ。は、自らの獣性に抗えない者であるということだ。

狩人の血を輸血すること。全て失敗した。上位者の血の輸血は脳の肥大しか生まない。上位者ではない聖母ヤーナムの血を輸血するからこそ、血の医療と狩人の業はなる。上位者と混じり合った人の血こそ、智慧を持たぬ人が受け入れられるものであるのだ。上位者の血そのものの輸血は、実験棟と星輪草の庭に蠢く怪物に人を変態させるだけである。苗床となった少女の頭を撥ね飛ばした感触を二度と味わいたくはない。

娼婦と聖女には、教会にも診療所にも行かせず、少女の家へ向かう

様に伝えていた。かくして一堂に会した彼女らに、狩人は絶望に限りなく近い想いで告げる。

幾度も繰り返し、幾度も救えぬ結末を迎えたこと。手はもう他にないこと。この手段を受け容れず、救えなかったとして、赦して欲しいこと。己の無力を赦して欲しいこと。

説明のつもりであった言葉は、いつしか懺悔となった。女達の前に跪き、頭を垂れる狩人に、少女は告げる。

子を成そうと。

使者に見えて終ぞ一度も獣に身をやつさなかった狩人は、その一時だけ、獣であった。

救えなかった少女を救おうと、千歳を以つて悪夢を繰り返す。幾度もの狩りの果て、ついに狩人は目覚めを迎えた。

しかし、夥しく積み重なった呪いは記憶として残り、月夜が明けてなお、悪夢は現世と常世との狭間に残り続けた。これを、ヤーナムの聖杯という。

上位者がそうである様に、ヤーナムの女王がそうである様に、月の狩人とその妻達は不老となった。そして、その子等を皆、狩人とした。イズより旧く、ローランより旧く、トウメルより旧く、辿りきれない太古の昔の上位者の子、それが人間である。上位者に見えずとも、神秘を扱う者。それが、魔法使いである。

魔法使いの発狂とは、つまり、獣への変態。赤き月は因子の一つであつて、原因そのものではない。魔法使いの血に蠢く虫が魔力を生み、狂気を生むのだ。魔法使いがいる故に、狩人の夜は明けない。

赤い月の再来に備える為に。

魔法使いの変態からなる悲劇を食い止める為に。

あのヤーナムの夜を繰り返さない為に。

獣狩りの業とは残虐な殺人ではなく、葬送の儀式である事を忘れない為に。

狩人の子等はヤーナムの聖杯を揺り籠とする。

ここにもまた、揺籃期を終えた狩人が一人。

1991年

列車

「行って参ります」

「君に血の加護があります様に」

向き合い、礼をする。狩人の一礼とされるそれは、赤子を抱えるが如く左腕を丸め、右腕は垂れ下げたままとする。一見だらしない所作に見えるが、常在戦場の狩人の心構えを表すものである。常在戦場であるならば、礼を交わす暇も無いであろうが、ともすれば狂気に陥りかねない狩人の生業において、人らしき所作は自らを人に留める、よすがとなる。

同胞にしばしの別れを告げ、向かうは墓碑。跪き、手を翳せば、紫の妖しい光とともに使者と呼ばれる小人達が地面より溢れ出る。目を瞑り、一瞬の引きずり込まれる感覚に身を任せ、そして開く。眼前に広がるは、キングス・クロス駅。

使者達は特定の地点にある灯りを移動拠点としている。移動鍵や煙突飛行とは異なる移動術であり、誓約を結ばなければ利用する事は出来ない。灯りが魔力干渉を受けない限りは無制限に利用出来ることが利点であろうか。

現代のヤーナムがそうである様に、灯りもまた神秘によって秘匿されている。非魔法族のみならず、それを追い求める者でなければ、魔法族であってもこれを目にする事は出来ない。ともすれば地面から生えた様に見えるだろうが、見える者はいないのであるから騒がれることもない。ヤーナムのヴィクトリアン・ゴシックの街並みは景勝地となるであろうが、ヤーナムは徴税記録か古い旅行記にしか名を残さない。仮に統計調査員が訪れたとして、山間にある小さな廃墟にしか感じ取れないだろう。

現在のヤーナムは狩人達の隠れ里となっている。

ヤーナムの統治者、父王と女王達はじきに齡二百に届こうとしているにも関わらず、肉体年齢は悪夢の夜とほぼ変わらないのだ。上位者

の赤子と言うからには、上位者にも加齢の概念はあろうが、その時間は限りなく悠久に近い。生物とは、子を成せる様になればそれは大人の肉体であり、それ以降の変化は老化である。上位者の血は、概ね十七、八の頃になると肉体を不老とした。故に、その子等もまた、数は少なけれどもほぼ不老である。そして、仲睦まじい男女のする事と言えば、子作りに他ならない。歳の頃が僅かしか変わらない様に見える、実は半世紀のもの隔絶がある、そんな兄弟もいる。

幸いと言うべきか、上位者の子を孕む可能性は限りなく低い。赤い月の出現は上位者と人との間が近づくことである。メンシスのあの狂人は上位者の繁殖機会を提供するつもりはなく、自らが上位者となることを望んでいたのであろうが、結果として彼はクピドとなったのだ。

懐から入学許可書なる羊皮紙を取り出す。ホグワーツ魔法学校。英国唯一の魔法族教育機関。

ホグワーツ城には行ったことがない為、灯りを用いて向かうことは出来ない。元よりホグワーツはヤーナムと同じく、招かれた者にしか開かれていない。面倒ではあるが、一度は列車に乗っていく必要がある。先達と言うべきか、同胞は城内の灯りを用いて行くので一人で行けと言ひ、茶を飲んでいた。聖杯探索には幾らでも付き合ってもらい、付き合つて来たのに些か薄情ではないかと言えば、何かあれば鐘を鳴らせと取り合ってもらえなかった。

そうではない、ただ単に寂しいのだと言いたいが、それを口に出せば、往時のアイリーンよろしく煙たがられるのは目に見えていた。

漠然とした不安を感じることはない。敵を前にした不安は緊張を生み、集中を生む。一方で、漠然とした不安は気を払う必要性の有無に関わらず、全てに注意を払うこととなり、漫然とする。故に、これから迎える新生活など、成り行きに任せれば良いのであるから、不安は毛頭なかった。

ホグワーツは全寮制という。学閥間の抗争が激しいらしく、まかり間違つて同胞と争うことになることは恐ろしかった。不安があると

すれば、その一点だ。

ベルトに括り付けた時計を見ると、発車30分前であった。

9と3／4番線などというものが何を指すのかは分からないが、ひとまず進まなければどうしようもない。禁域の森に比べれば、どの様な迷路でさえ児童戯に等しく思える。

酔ってしまいそうな程に人が多い構内を歩いていく。特段音を立てたつもりもないのだが、道行く人が何人か振り返る。狩人の業がそうさせるのか、裸足で森を歩く時であっても、硬質の革靴が石畳を叩く音がしてしまう。11歳の少女とは言え、女とは生まれた時から淑女なのだ。恥じらいはある。

名を人形というホムンクルスからすれば、それもかわいいとの事だが、あれは蛞蝓や亡者であってもかわいいと言う感性を持っている。信用は出来ない。

その9と3／4番線とやらは一目瞭然だった。狩人の業を継ぐ者達だけの秘匿通信たる手記が散らばっていた。

「素晴らしい隠し道」

「一步前に出てみたまえ」

「走れ！」

「ああ、協力者よ！」

ありがたき先人達の教えを伝える使者達を撫せてやると、微かに震えた。

まだ時間はあったので、他の柱に立ち寄ってみると、そこにも手記があった。

「ローリングが有効だ」

見れば、それを伝える使者はうなだれており、他の狩人達から酷い評価を多数受けたのだろう。面白味があって良いと思う。少なくとも、狂女と赤蜘蛛が犇く聖杯の仕掛け前に置かれる手記よりは。

列車は小さくはなかったが、シートがボックスタイプとなっている。およそ1000人程度が収容される様になっており、あまり利用しないが、ロンドンの地下鉄よりもずっと収容力が低い。学生同士で友誼を深めよとも言おうことだろうか。ホームの端、列車最後尾に乗

る。わざわざこの辺りまで移動することが面倒なのか、全く人がいない。

遠くに目をやれば、学生の多くは息を荒くしてトランクや鳥籠やらを運んでいる。こちらは身ひとつである。というのも、狩人の服には様々な仕掛けが施してあり、背丈を超える様な物までもポケットに入る事が出来た。ホグワーツ制服にも同様の細工を施したが、その上に教会の黒装束を羽織る事を決めている。素足が出ているのは様々な意味での防御力が足りない。

手持ち無沙汰であるので、すぐに着替えたところで列車が出発した。流れ行く風景。灯りの移動によっては得られない風景を暫くは楽しんだが、車窓から得られるものが英国らしい曇天と特筆すべきものがない山肌ばかりとなり、飽きてしまった。

「ぐええええつ」

とろとろと思考を眠気に預けようとしていたところ、汚い鳴き声が耳朵を打った。音源を見やれば、ヒキガエルがこちらを見つめていた。寝起きにこれは最悪の部類であり、懐から得物を取り出しかけたが、ホグワーツの入学許可証を思い出す。ヒキガエルはペットとして持ち込み可能という事だった。おそらく、生徒のペットなのだろう。家の周辺でならともかく、公共の場で放し飼いとは、なんと騷のなっていない生徒だろうか。

足先で小突き、部屋の外に出そうとすると、カエルは飛び上がり、器用に足の甲に乗った。

「くっ……」

醜悪な獣や上位者とは幾度となく対峙している。見ただけで発狂するものもいた。あれは邪視でもあろうが、多分に悍ましい外見が寄与している。

他にも、その人間性から悪し様に言うことは憚られるが、ルドウイークも発狂こそしなかったが似た様なものである。文字通り屍山血河であった為に、あの色、あの臭い、ぬめり。統合すればメルゴアの鐘楼に吊るされた脳や再誕者とも比肩しうる。

それはそうとして、今履いているのは、足の甲が広く空いている、ア

リアンナの靴である。アリアンナお姉様が入学祝いとして誂えてく
ださったものだ。

びちやり、と湿った感触が足先から脳髓を震わせた。

「もうやだあ……家帰りたいい」

思わず、素の言葉が出てしまった。

蟾蛙

「ねえ、ヒキガエル見なかった?」

やけになって鎮静剤と血酒を飲み、若干のトリップ状態になっているところ、急にコンパートメントのドアが開かれた。声の主はいやに髪のもつさりした女の子で、加えて高圧的だった。

ノックもなしにドアを開け、開口一番に蛙がどうこうと話す人間には関わり合いになりたくない。おそらく蛙とは先程のアレだろうが、知ったことではない。追い出した後に、また入ってこないようにドアを閉めていたのだ。

「何これ? お酒? 血?」

「そのどちらでもある。我らにとって血とは祝福であり汚瀆である」

「貴方、吸血鬼なの?」

「貴公、友人が少ないんじゃないか? 仮にそうだととして、そうだよと喜んで言う吸血鬼がいるかい? そうでないとして、人外のそれにとえられた人間は嬉しく思うかな?」

「……貴女の血についての感想はそうとしか思えないわ」

吸血鬼の生態など知ったことではない。脳喰らいなら分かるが、人語を解する脳喰らいがいるとも思えない。あれらは脳を美味と感じているのだろうか。大きなげっぷから、満腹感はあるようだが。

「人の詮索をして憚らないその態度。大方、さつきも同じ様な事を誰かに聞いたのだろうか。そうだな、かの有名なポッターか。今年入学らしいからな。『貴方がハリー・ポッター? 教科書と参考書にいくつも記述があるわ。額の傷を見せて? どんな魔法でヴォルデモートを滅ぼしたの?』とでも」

「概ね間違っではないけれど、額の傷については否定するわ。身体的特徴をどうこう言うのは人としてどうかしてるわ」

恐らく、この人物は吸血鬼というものに対して、忌避感情はないらしい。それ故に先程の質問が出てきたのだろう。

伝え聞くところでは、ヴォルデモートに与する者ではなく、廃村や僻地に僅かばかりの集落を築くらしい。直接目にしないことには何

とも言えないが、獣に比べれば余程安全ではないか。

「そうか。肌の色や額の薄皮がどんなものであれ、人間の本質に比べれば大したことではあるまい。むしろ、それで騒ぐ連中の方がおかしい」

皮を剥けば獣も人も単なる肉。人たらしめるのはその血に宿る精神である。連盟長曰く糞袋であり血族狩り曰く内側の粘膜とのことだったが。あの粘膜とは子宮を意味するのだろうかと思う。上位者の赤子を孕むことを悲願とするカインハーストの一族。故に、その粘膜を裏返すことは根絶やすことが目的のではなく、血族の象徴を徹底的に破壊するという意思の表れなのだろう。彼の悲願は確かに一度叶えられ、そして無慈悲に破られた。カインハーストの女王は今も健在であり、また、現在のヤーナムはある意味その血族とも言えるものになっている。

「それで、結局あなたは何者なの？」

「人の秘密を詮索するとは感心しないな。だが分かるよ。秘密とは甘いものだ」

眼前の少女は瓶に手を伸ばしていたので、それを掴む。いつかの聖杯で体験したそれ。我が名の元となった時計塔のマリアの真似。強く、気高く、美しく、そして慈悲深い。今のヤーナムに生まれた女は必ず彼女に憧れるものだ。それは、歌劇で言うズボン役に似た倒錯をも含むものだったが。

「人に何かを尋ねる時は、まずは自分から。違うかな」

「質問責めで悪いとは思いますが、知らない事がいっぱい不安なですよ。こっちで上手くやっていけるかしらって。ハーマイオニー・グレンジャー。両親はマグル。友達は多くないけど、多く欲しくも無いわ」

そもそも、向こうでも上手くいっていたのだろうか。

「ボーンだ。マリア・アイリーン・ボーン。両親は狩人だ」

「狩人？」

「そうだ。闇祓いの様な物だ。血の契約によって、人外の力を得る魔

法の継承者。ああ、知らない事は恥ではない。魔法界においても珍しい一族だからな」

闇祓いという単語には特に疑念を示さない様であるから、おそらく相当魔法界について予習してきたのだろう。からかうつもりで教科書云々と言ったが、間違いではなかったらしい。

一方で自分はヤーナム以外の魔法界がどうなっているかなど、さしたる興味を持たなかった。来る日も来る日もより良い血晶を求め、聖杯に潜り続けた。むしろ、非魔法界の甘味を求めて小遣いを握りしめ、灯りを用いてロンドンをうろつくばかり。

随分と努力する11歳だとハーマイオニーに感心する。

ハーマイオニーは蛙探しを忘れたのか、対面に座った。当初の印象は不躰な少女であったが、未知に触れ、不安と興奮に震えているのだと考えれば、可愛らしいものではないか。

「それで、どんなものを狩っているのかしら。熊？ 鹿？ それとも何かの魔法生物かしら」

「人だ。血に酔い、狂った魔法使いだ」
「え」

「そう驚くことでもない。そちらの警察機構と同じ様なものだ。もつとも、我々に警邏任務はなく、犯人を捕縛することもない。対象の殺害を以って狩りの成就とする」

獣喰らいのヴァルトールがそうであった様に、ヤーナムは完全に外部と隔絶されていたわけではない。火薬庫の源流となるオト工房もまた、外よりもたらされたものだ。

現代のヤーナムもまた、人を受け容れないだけで、知識と技術は魔法族と非魔法族の違いなく吸い上げる。故に、ヤーナムはグリーンゴッツを利用せずとも、英ポンドと米ドルを蓄えることが出来ている。マリアもまた、興味が無いだけであって必要十分程度の非魔法界知識は身に付けている。

工房の職人も、狩人も、ヤーナムの全ては獣狩りの成就の為にある。「なんだ、言っていることは物騒だけど、特殊部隊みたいなものなのね。とても立派な事をしているのに、知らないなんてごめんなさい」

成果だけに着目すれば、確かに貴い行いであろうが、実態は陰惨で汚濁に塗れた呪いの業だ。特に、あの漁村で起きた殺戮は狩人の恥部であり、人間の好奇心の恥部である。露悪趣味でもないのです、ハーマイオニーの好意的勘違いはそのままにしておく。

「気に病む必要はない。狩人の業は狩人自身によって秘匿され、そして他の魔法族にとっても気持ちの良いものではないからな。血統以外の方法で血統魔法を継ぐ、その有様は、特に純血主義にとって都合が悪かろう？」

「純血主義……魔法使い同士で血を繋いでいくっていう思想よね。確かに、魔法を生得的なものではなく、技術として継いでいくという思想は相容れないでしょうね。でも、何故他の魔法族にもその……あまり好かれていないのかしら」

「需要と供給のバランスだろうな。古き時代は狩人が必要とされていた。だが、魔女狩りも減り、信仰が民草を救済する事は減り、狩人の獲物は減った。技術と娯楽は信仰を駆逐する。祈ればそれで救済された気になれる時代はとうに終わったのだ。

魔法族は狂気に吞まれ、その狂気の果てに救済を求めた時、獣に変態する。猿の手は知っているだろう？ 血に含まれた魔力が、本人の希望を最悪の形で叶える。だが、このご時世、祈りの寄る辺も、祈るべき価値のあるものもないだろう？ 大抵の狂人は、狂人のままその生涯を終える様になった」

「だから、狩人の仕事の価値が分からず、良く分からない人達ということになったのね」

首肯する。

軍人と同じく、暇であることは良い事なのだろう。ヤーナムの民は金に困っているわけでもない。魔法省からの僅かばかりの補助金が今更なくなろうと、さしたる影響もない。

業腹なことに、医療教会が育んできた医療技術はいわば外貨獲得の手段として有効だった。魔法族は魔法によって治療を行う。故に、非魔法族的な外科治療は不得手としている。生きながら頭蓋をこじ開ける、実験と称した凶行は麻酔や切開、縫合技術の発展を生んだ。

医療教会は旧市街を焼き捨て、そして大橋を封鎖し、権威は地に墮ちた。だが一方で、確かにそこにはまつとうな医療者であり、聖職者であろうとした人間も存在したのだ。彼らの遺志と技術は今のヤナムにも息づいている。

「マリアは入学するまで、どんな事をしていたの？ 私は教科書を全て暗記する程読んだし、幾つか呪文を試してみたわ。それくらいしいと、魔法使いの家出身の生徒には追い付けそうにないもの」

呪文を試した、ということには少々疑問が沸いた。未成年は非魔法族の面前で魔法を使つてはならない。ハーマイオニーは非魔法族生まれであるのだから、当然それに抵触するはずであるが、罰則を受け様子は無い。彼女は見栄を張る様な人間にも見えず、おそらくは規則が正しく運用されていないのだらうと結論付ける。

魔法族の倫理観は非魔法族のそれに比べて稚拙である。記憶操作が簡便である事が大いに影響しているのだらう。ヴォルデモートの台頭した時代がある種の宗教的意味を持たせて恐れる割には、ともすれば死傷者の出かねない行為を悪戯として受容する風潮がある。一生忘れられない恥辱や恐怖といったものは、忘却術によつて拭い去られるのだから、殺人さえ犯さなければよい。誰もそう考えている様に感じられる。

「暗記できているかどうかは分からないが、一通りは目を通したな」
聖杯の中と外では時間が繋がっていない。教室棟には実験器具も書物もあり、そしてその学習結果の標的にも事欠かなかった為、いくらでも実用的な学習が出来ていた。一年生程度の学習で使う教科書に書かれている程度の事は、普段の狩りの中で自然と覚えてしまうものだった。

実のところ、暗記をするつもりは全く無かった。ハーマイオニーにとつては一種の教養として覚えるべきことではあつたのだらう。だが、魔法族としては教科書の暗記によつて得られるものは教科書通りの事でしかない。そして、それを学びに行くのであるから、入学前にそれらを詰め込んだところで徒労に終わる。

調べれば分かる程度の事を暗記したところで、それが何になるとい

うのか。真に必要なのは、情報と情報とを統合し、新たな智慧とする事だ。そうした積み重ねによって、父王は秘匿を破り、獣狩りの夜を終わらせたのだ。

西暦993年にホグワーツが開校したことを覚えて何になる。重要なのは、何故今まで魔法学校はなかったのか、何故その時期に魔法学校は作られたのか、どの様な事が開校した影響で起きたのかという、物事の意味と流れである。頭を使わない知識の探求は漁村の惨劇を生み出すのだ。

「ふーん。余裕なのね」

ポッターかどうかは知らないが、他の乗客に語ったときは、何かしらの反応があったのだろう。ハーマイオニーの努力を特に驚きもせず、称賛もせず、否定もしない態度は、11歳にしては大きすぎる自尊心に小さな傷をつけた様だった。

「そうだな。闇祓いと違い、狩人になるには学業の成績等何ら意味を為さないからな。ただの鉄塊で相手を殴りつけるだけの狩人も存在した。それに、授業を受けてみれば自ずと分かるだろう？ 努力が足りなければ、より努力すればいい。先んじているのであれば、より先に進めばいい。食べてもいない料理の味を語る術はないさ。」

ところで、甘味は好みかな？ 入学式が終われば食事会があると聞いているが、どうにも腹が持ちそうにない。スコーンとはいかないが、ビスケットくらいならあるぞ」

懐から取り出すのは、ベルギー産のビスケット。脳が震えるほど甘い糖蜜パイと異なり、僅かな苦みと仄かなシナモンの香りが蠱惑的である。

「嫌いじゃないけど、直ぐに歯を磨けない場所では間食をしない様になっているの。私の家は歯医者だから、虫歯が出来た日には親が泣いてしまうわ」

そう言われてしまえば、自分ひとりだけ食べるわけにもいかない。空腹を堪えて入学式を迎えるのかと考えると、気分は少し落ち込んだ。

「何かしらっ？」

少し離れた客室から騒ぎ声が聞こえた。騒がしい声は途切れることがなかったが、剣呑な雰囲気を持つ声は珍しい。しかし、どうでも良いことだ。兄弟から聞いたところでは、生徒同士のいざこざで呪いをかけあうなど、日常茶飯事である。

「さあ？　気になるなら見に行ってみたらどうだ？　蛙が見つかって騒いでいるんじゃないか」

「ああっ！　トレバーのこと忘れてたわ！　私、行ってくるわね」

ハーマイオニーが席を立ってしばらくすると、車内に到着5分前を知らせる案内が流れた。5分もあれば、ビスケットをかじるのには十分だ。

「うん、おいしい。全く、甘い物で人はこんなにも幸せになれるというのに、何故上位者の智慧だのなんだの、そんなものに拘る……？」

カインハーストの血は甘いと言うが、糖尿の気でもあるのだろうか。

膝に散らばった破片を払い、立ち上がる。

「さて、ホグワーツの食事が美味しいのだけど」

組分け帽子

列車から降りると、そこは小さく、暗いプラットホームだった。吹き抜ける風は湿り気を帯び、夏を終えたばかりとは思えない冷えた夜気が身体を舐める。ちようどそれは、ビルゲンワースに続く禁域の森に似る。

上級生と思しき生徒らは談笑しながら列車を降りてくるが、新入生たちは降りるにももたつき、降りてからも寒さに震えながらあてどなくうろついている。憐れなことだ。

「マリア」

呼ぶ声に振り向くと、同胞達がいた。

「兄上、姉上」

「まずは灯りを」

兄、デイルクが指し示した先には古びたランタンが吊り下げられていた。デイルクお兄様は5つ上の異母兄。アデーラ女王を母に持つ。短く刈り込まれた黒髪は、茫とした月光に照らされている。

言われた通り、ランタンに近づき、使者と契約を交わす。狩人にか見えない紫の光が灯った。

「こんなところ、全く使わないがな」

それもそうだろう。彼らは城内にある灯りを用いる。以前、同胞を見送った後、クリスマスまで会えないのかと少し寂しい想いをしたが、その日の内に白い丸薬を忘れたと帰って来た事があった。特急を用いないのだから、駅に寄る必要も無いのだ。

学生生活を送る上で、劇毒でさえたちまちに解毒出来る薬が必要になる事態は理解できない。

「これから小船に乗って移動する事になるわ。絶対に落ちない様にね」

「はい、姉上」

1つ上の異母姉、イングリットお姉様は柔和に微笑む。同じ女にしてみれば、ずるいとすら思える程の笑顔だった。お兄様はホグワーツの同級生達がみな不美人に見えると、自慢なのか嘆きなのかよく分か

らない事を言っている。

「イカに気をつける。魚人どもは校長が手懐けているが、イカは言葉の通じない畜生だ」

「ここは漁村でも悪夢の辺境ではないでしょう」

「ああ。あちらはピクニックに絶好だが、こちらで遊びたいと言いついたら、すぐに鎮静剤を飲ませるからな」

「ご冗談を」

「残念だけど、お兄様の言う通りよ」

普段より、デイルクお兄様は冗談の類を発する事がない。イングリットお姉様もまた、お兄様に同調している為、イカとやらは偽りなき脅威なのだろう。悪夢より恐ろしい学校が存在する方が余程悪夢的だ。

「ではマリア。また大広間で」

「本当に気を付けるのよ」

当惑している間に、二人は灯りに触れ、消えていった。

一年生も半巨人と思われる大男の周りに集まっている。ランタンを震わせる姿は、教会の大男と同じそれ。巨人の血が入っていないのであれば、とうに滅びたはずのトウメル人の末裔か。

「イツチ年生！ ついてこい！」

酷い訛りだ。

その声に従い、新入生たちがぞろぞろと動き出す。巨大なムカデにも思えるし、カルガモの親子にも思える。

群れは鬱蒼とした森の小径を往く。獣狩りの夜を幾度も超えた身にとつて、霧立ち込める森でさえ僅かな月光があれば白昼も同じである。足元の石や木の根に躓き、滑る生徒たちの足取りはあまりにも遅く感じられた。

上から投げつけられる火炎瓶と、引き倒そうとする亡者どもを避けながら、油が撒かれた沼地を全力疾走する。それが出来なければ死であるのみで、そしてそれが出来てなお、先達の恐れるイカとは何であろうか。

入学式と言うが、この隊列についていくことが入学試験なのではな

いか。

他国の魔法界がどうであるかは知らないが、英国魔法界人口は極めて少ない。独自の文化を形成できたことすら奇蹟的な程に。それは、出生率が低いのではなく、ここで刈り取られているせいではないのか。落伍したものは死に、遺族には忘却術がかけられ、その児の存在は消し去られている。

ああ、素晴らしき協力者よ。同胞の助言は忘れまい。

「うおおおー」

前方から悲鳴が響く。

遂に獣が現れたか。

悪夢の辺境に蠢く這い寄るものたち。それすら凌駕するイカとやら。吾が狩りを知るがいい。

懐に手を差し入れ、得物の柄を掴む。もう少しすれば、森が開ける。そこに地獄はあるのだろうか。

そこには、湖があった。深淵の如き黒さを湛える湖。大量の水は、眠りを守る断絶であり、故に神秘の前触れである。

向こう岸には山が聳え立ち、そしてその頂上には城が見える。

森に囲まれた、湖の畔の崖にある学徒の家。

なんとということだ。ホグワーツとは、ビルゲンワースそのものであった。

頭の中で、大きな鉄扉が啓く音がし、その隙間から人ならぬ声がする。

求める者よ、その先を目指したまえ

一部の学徒は、海、即ち大量の水に面する漁村に在りし、上位者ゴースを弄んだ。それは、先を求めた故の行いであったのだろう。そしてまた、自分も学徒としてホグワーツに連なる者となる。

ウイレームの開いたビルゲンワースよりもホグワーツの方が古い。ならば、あの悍ましい研究欲を生んだビルゲンワースの源流は、ホグワーツに求めることが出来るのではないか。

己を規定しなくてはならない。学徒としてそこに在ろうと、自らに流れる血は、その血に宿る意思とは、狩人のものでなくてはならない。

たとえ、甘き快樂がそこに在ろうと、それに身を委ねてはならない。心を冒す獸性に抗い、狩りを全うした父王の偉大さよ。

求めるは、人であらんとすること。その先とは、上位者を超克すること。人として上位者に伍することこそ、学祖ウイレームが到達した、進化の意味である。

「四人ずつボートに乗って！」

大男が岸辺に繋がれたボートを指した。漣に揺られる儂げなボート。

大男の号令でボートは動きだす。湖面に映る月を割り、船団が進みゆく。いつイカの触手が小舟に絡み、引きずり込もうとするのか。恐怖から、自然と息が荒くなる。同乗者がいれば、船酔いに苦しむそれに見えただろうが、吐き出すのが吐瀉物であれば良い。血か臓物であるかも分からないのだ。

近づく城に圧倒されたか、声を発する者はいない。水音だけが辺りを包む。

「頭、下げー」

静寂を切り裂く、大男の声。見やれば、先頭集団が崖下に差し掛かっていた。身を屈め、頭上に蔓延る鳶を避ける。僅かであるが、動いた様に感じられた。

鳶が覆い隠した先には洞窟があり、しばらくした後には船着き場に着了いた。飛び出す様に船を降り、大きく息を吐いた。地面に足がついていることの幸せを味わう。

同胞が列車で学校に向かわないのは、単に退屈な旅を避けたかったのではない。通学は死の恐怖と隣り合わせにあるのだ。

夢を見る狩人は聖杯の内で死ぬことはあれど、それは繰り返すことの出来る死である。故に、死を身近に感じ、死の感覚に麻痺する。

否である。

誰よりも死を恐れているのは、狩人である。死を恐れるが故、様々な装束を誂え、様々な武器を拵え、様々な戦術を練る。死を恐れないのは、狂人が獣である。痛みは耐え得るが、死は耐えられない。醜くとも、生に縋り付こうとするは、人たる証左。生き延びた後に、死の

脅威を排除する。人は獣と違い、学び、考え、克服することが出来る。そうして強大な獣を学び、狩ってきたのだ。

入学式が終われば、直ぐに城内の灯りを探すと決めた。

船着き場を離れ、石の階段を登る。樫で出来た門扉が一同を迎え、大男は三度殴りつける様なノックをした。思い出すのは、ヤーナムの大橋の下に焚かれる、陰惨なキャンプファイヤー。その傍で何事かを呻きながら門扉を叩き続ける獣狩りの下男。どこもかしこも獣ばかりだ。

門が開かれ、現れたのは背の高い女性だった。口元は真一文字に結ばれており、新入生へ向ける表情とは思えない。アリアンナお姉様と父王がキスを交わしているのを見たアデーラ女王の方が、余程人間らしい表情と言える。

アリアンナ女王はヤーナムの民に自らをお姉様と呼ばせている。「女王と言う柄ではない」とは本人の言だが、その態度もまた、アデーラ女王を苛立たせる。生まれながらにして、聖女の血に伍する特別な血を持つアリアンナお姉様を、調整を経て聖女となったアデーラ女王が嫉むのは不可思議なことではない。

獣の病の元凶たる医療教会に属するアデーラがヤーナムの統治者となることに反感を持つ人間は多かつたと聞く。尤も、娼婦であったアリアンナも、ただの少女フローラも同様であろう。元より人間性の暗いヤーナムであり、惨劇の直後とあつては誰が統治者となろうと容易には受け入れられまい。

「マクゴナガル教授、イツチ年生の皆さんです」

「ご苦労様、ハグリッド。ここからは私が預かりましょう」

大男の名はハグリッドと言うらしい。マクゴナガル教授の物言いからするに、やはりハグリッドは下男であったか。

マクゴナガル教授が門を開けた。そこから覗く玄関は広く、ヤハグルに続く水盆教会を思わせる。掲げられた松明が石壁を照らしている。天井は遙か高く、ヤーナムであれば憐れな上位者の落とし子、ア Mendローズが張り付いていそうだった。

マクゴナガル教授に連れられ、エントランスホールを進む。右手側

からはざわめきが聞こえるが、そちらではなく、小部屋に案内された。普段は物置にでもなっているのだろうか、少し埃の臭いがする。

部屋に集められたのは、百名に満たない。英国唯一の魔法学校であるにも関わらず、同じ年の子どもは百名以下。非魔法族の科学技術は一部において魔法技術を上回っており、次代を継ぐ人間もおらず、魔法族は黄昏の時代を迎えている。否、自分たちの代は、ヴォルデモート絶頂期にある。その時分に子を成すことは憚られたのだろうか。ヴォルデモート没落後の代は人口爆発と言わんばかりの出生率である。次の代はこの部屋に集められることはないだろう。

「ホグワーツ入学おめでとう」

マクゴナガル教授が口を開く。その表情は歓迎というものとはかけ離れていた。

やはり、登校までが入学試験であったのだ。入学許可証とは、入学の権利を知らせるだけの通知であり、登校して初めて入学となる。あの森で隊列から落伍し、彷徨の果てに命を失った者。湖で異形に引きずり込まれ、溺死した者。長い歴史の中で、それらは珍しいものではないのだろう。

世紀の犯罪者ヴォルデモートもまた、この学び舎で過ごしたのだ。ホグワーツは修羅の国である。

「新入生の歓迎会が間もなく始まりますが、大広間の席につく前に、皆さんが入る寮を決めなくてはなりません。寮の組分けはとても大事な儀式です。ホグワーツにいる間、寮生が学校での皆さんの家族の様なものです。教室でも寮生と一緒に勉強し、寝るのも寮、自由時間は寮の談話室で過ごすことになります。

寮は4つあります。グリフィンドル、ハッフルパフ、レイブンクロー、スリザリンです。それぞれ輝かしい歴史があつて、偉大な魔法使いが卒業しました。ホグワーツにいる間、皆さんの良い行いは、自分の属する寮の得点となりますし、反対に規則に違反したときは寮の減点になります。学年末には、最高得点の寮に大変名誉ある寮杯が与えられます。どの寮に入るにしても、皆さん一人一人が寮にとって誇りとなる様望みます」

スリザリンという名をマクゴナガル教授が口にした時、近くにいた赤毛で長身の男子生徒が小さく嘖き出し、金髪でオールバックの男子生徒がその男子生徒を睨みつけていた。

その後、身だしなみを整える様にと言われ、慌てた様子で鼻を擦る赤毛を見て、金髪は鼻で嘲笑った。

準備の為、マクゴナガル教授が小部屋を出ていくと、途端に部屋は騒がしくなった。多くの者はどの様に組分けが行われるか、自分がどの寮に組分けられるかを不安そうに話していた。

しかし、これは異常である。自分の様に全く関心がなかった人間を除けば、家族に聞いているだろう。それでいて、この有り様は考えられない。落ち着いて見回してみると、彷徨う子羊の群れから離れている者がいた。まるで犬の交尾を眺めるがごとく、周囲を睥睨している者。まるで子ども砂場遊びを眺めるがごとく、微笑む者。

教えを乞うなら当然後者である。

「すまないが、組分けについて説明してくれないかな」

「ええ、構わないわ」

腰まで届きそうな長い金髪の女生徒に話しかける。快く笑顔を返してくれた。

「組分けは、帽子を被るだけ。組分け帽子っていう魔法の道具があつて、それが被った人の適性や望みを見抜いて、入寮先を宣言するの」「……それだけ?」

「そう」

「他人の事を言えたものじゃないが、何故それだけの事を皆知らないんだ? 非魔法族生まればかりというわけでもないだろうに」

「多分、こういうわくわくとか、そわそわ感を味わって欲しいっていう、心遣いなのかな。私の家は、『取り乱すことが無いように』なんて言われて、種明かしされちゃったけど。多分、ドラコ、壁際にいる男子のことね、彼もそんな感じじゃないかな」

犬の交尾を見やる者、ドラコは腕を組み、壁にもたれかかっていた。その泰然とした様は良家に生まれたのであろうと推測させるに十分だった。彼の脇には大柄な男子生徒が2人控えている。2人は双子

か。

ドラコの目には、心底くだらないという言葉がありありと浮かんでいた。

双子も同様かと思っただが、彼らの表情には知性を感じられない。知性を感じない大柄な双子と言えば、聖堂街の円形墓地から続く階段を下りた先にいる、獣狩りの下男の二人組を思い出した。獣化した住人達は体毛と牙が伸びている。獣狩りに出たはずの群衆が獣になっているとは悪趣味だが、他方、下男は身体が肥大した程度であり、尋常な人間の外形からは然程離れておらず、表情も分かる。それ故に、その表情から知性の欠落を窺い知ることが出来た。付き従うだけの下男には、およそ意思たるものは感じられない。

「そうか、となれば、兄妹たちのいる寮にと願えば、それでよいということだな」

「家族が先輩なのね。組分けのこと、教えてもらえばよかったじゃない」

「訊く前に別れてしまったからね」

「一緒に来なかったの？」

「ああ。かわいい子には旅をさせろというやつらしい」

「なら、訊いても教えてくれなかったかもね。ご兄弟はどの寮なの？」
「スリザリんだと聞いている」

興味がなかったので、そこが多くくの純血主義者の入る寮であり、ヴォルデモートを輩出した過去があるという程度にしか知識がない。尤も、ヴォルデモートを輩出したということであれば、ホグワーツ自体がそうであり、英国魔法界がそうである。

「なら、私と貴女は同じ寮になるかも」

「貴女はスリザリン志望者か？」

「私個人の志望というなら、落ち着いて勉強出来そうなレイブンクローだけど、両親は私がスリザリンに入って欲しいって思っているわ。直接私にそう言ったことはないけれど、祖父母も、曾祖父母もそうだったから」

「良家の娘と言うのも大変だな」

「あら、家柄を自慢なんてしていないつもりだけど。それとも、何か気に障った？」

「いや。素直な感想だ。私はマリア・アイリーン・ボーン。同じ寮であろうと、別の寮であろうと、よろしく」

「ダフネ・グリーングラスよ。よろしくね」

脈々と続く純血の一族が存在する。聖血の一族。グリーングラス家もまた聖血を冠する一族だ。純血主義に積極的に賛同するつもりはないが、純血主義は特権意識の塊と断じることもない。

魔法使いの創成期、魔法使いはまず間違いなく、特権階級にあつただろう。魔法族と非魔法族との間で交配が可能であるのだから、祖は同じ猿である。他の猿に出来ないことが出来る猿、それは当然、支配者であることを意味する。支配者は富を集中させ、あるいは容姿に優れた者を伴侶に選ぶ。その子は富と優れた容姿を引き継いだ者であり、その子もまた、自分と同程度の階級の者を伴侶に選ぶだろう。そうして一族としての格が生まれ、特権階級になったのだと容易に推測できる。

つまり、純血の一族を尊ぶのは、その血に連なる富と力への憧憬であり、純粋な純血主義とはそれを保存し、発展させるという思想なのだ。そういつた背景があるのだと考えれば、反純血主義が如何に嫉妬という感情によって為されるものであるかが分かる。

合理的に考えて、金も品格もない不細工と連れ添う特権階級がいるはずもない。そういうものは、安いピカレスクだけで十分だ。卑屈な悪夢のヤーナムにはそういった物語が溢れていた。異邦の官憲、ヴァルトールもまた、住民たちの悪趣味によって獣を喰らうこととなったのだ。

ダフネと話していると、壁から亡霊達が現れた。トウメルの聖杯では見慣れた光景であるので、さして驚くことでもなかったが、ダフネは顔を蒼白にしていた。彼女は亡霊が蔓延る様な場所に立ち入ることなどないであろうし、家にそれらが寄り付けば、たちまちに排除されるだろう。

戻ってきたマクゴナガル教授は、戦慄している新入生たちに別段配慮することもなく、大広間に連れていく。亡霊達が新入生を驚かすのは毎年恒例の様だ。

大広間はエントランスよりもさらに神秘的で、荘厳だった。医療教会の大聖堂を思わせる。足を踏み入れた瞬間、またも頭の中でざわめきが聞こえた。

何千もの蝋燭が宙に浮かび、寮ごとの4つの長机を照らしている。使者の灯りが広間の隅にあった。

聖歌隊は上位者と共に空にある宇宙に思索を巡らせたが、この広間の天井にも夜空が広がっていた。ビルゲンワースの蔵書にあった『ホグワーツの歴史』には、星空を投影する魔法がかけられているということだった。

マクゴナガル教授は広間の奥、教職員の机の前に新入生を並べた後、中央にスツールを置いた。その上には、古く、色褪せ、汚い帽子が置かれていた。あれを被ることになるのかと思うと、頭がかゆくなりそうだ。ホグワーツ創立から在り続けた帽子。そこに集った者たちの手垢と汗が染みついているのだ。あれが生き物であれば、狩りの暁には莫大な遺志を得ることが出来るだろう。

見つめていると、突如帽子の裂け目が口のように開き、歌い出した。

私は綺麗じゃないけれど

人は見かけによらぬもの

私を凌ぐ賢い帽子

あるなら私は身を引こう

山高帽子は真つ黒だ

シルクハットはすらりと高い

私はホグワーツ組分け帽子

私は彼らの上をいく

君の頭に隠れたものを

組分け帽子はお見通し

被れば君に教えよう

君が行くべき寮の名を
グリフィンドールに行くならば
勇氣あるものが住まう寮
勇猛果敢な騎士道で
他とは違うグリフィンドール
ハツフルパフに行くならば
君は正しく忠実で
忍耐強く真実で

苦勞を苦勞と思わない
古き賢きレイブンクロー
君に意欲があるならば
機知と学びの友人を
ここで必ず得るだろう
スリザリンではもしかして
君はまことの友を得る
どんな手段を使つても
目的遂げる狡猾さ
被つてごらん 恐れずに
興奮せずに お任せを
君を私の手に委ね
だつて私は考える帽子

歌が終わると、広間は万雷の拍手で包まれた。反響し、重なり合い、生き物の様にうねる。

帽子は4つの寮にお辞儀をした後、静かになった。デイルクお兄様、イングリットお姉様よりも遙か年上に兄と姉がいる。彼らもまた、スリザリンであつたという。ポーン家がスリザリンに組分けられる理由が分かつた。どんな手段を使つてもという性質はまさに狩人の在り方であり、工房の在り方であり、医療教会の在り方であり、カインハーストの在り方であり、ヤーナムである。

手段に善悪は存在しない。目的に沿うか否かが善悪である。恐ろ

しいことだが、仮に漁村の惨劇によって、確かに脳の中に瞳を見出し
ていたのであれば、それは偉業の為の僅かな犠牲として認識されただ
ろう。あるいは、栄光の礎として、犠牲とすら思わないのではないか。
「ABC順に名前を呼びますので、呼ばれた者は帽子を被って椅子に
座り、組分けを受けてください。アボット・ハンナ」

金髪のおさげの子が慌てて一団から抜け出た。最初の一人になる
とは思っていなかったのだろう、ひどく緊張している。恐る恐る帽子
を被り、椅子に腰かけた。

「ハッフル・パー！」

数秒の沈黙の後、帽子の宣言があつた。黄色のネクタイを付けた生
徒たちのテーブルから歓声と拍手が轟いた。

「ボーン・マリア・アイリーン」

Bで始まる姓であるから、早い方だろうと考えていたが、二番目だ
とは思わなかった。緑のネクタイの生徒たちに視線を向けると、デイ
ルクお兄様が珍しく微笑みを湛え、イングリットお姉様が友人に何事
かを囁いていた。

帽子をつまみ上げ、なるべく浅く被り、椅子に座る。スツールは汚
れていないのは僅かな救いだった。

「また君らかね。全く、不老は構わんが、いい加減子作りを止めろと父
に伝えるといい」

夫婦が仲睦まじいのは良いことだろうか？ 人の家庭に口を挟まな
いでもらえないか。

「それで、一応聞こうか、どこの寮が良い。恐るべき敵に立ち向かう勇
気を求め、力を求め努力を重ね、真実を求め研鑽し、その果てに夜明
けを待つヤーナムの狩人よ」

スリザリン。

「次の子は入学許可証ではなく、スリザリン入寮許可証を送る様、校長
に進言しよう」

それがいい。次の子を作る様、父に伝えておこう

「スリザリン！」

拍手を受けながらスリザリンのテーブルに向かうと、お兄様とお姉

様がハグで迎えてくれた。

「お前たち、俺の妹に手を出したら殺す」

「貴方たち、私の妹に手を出したら切り落とすわ」

「恥ずかしいのはハグではなく、物騒な言葉で威嚇する兄姉たちだった。」

4階の廊下

噂のハリリー・ポッターはグリフィンボールと宣言されていた。その際、生徒達はざわざわと、あるいはひそひそと話しながら、彼の事を観察していた。背は高くもなく低くもなく、黒い癖つ毛をそのままに、酷いセンスの丸眼鏡をかけていた。それだけの事だった。

つまり、彼は生き残った子であるだけで、勝ち抜いた子ではないのだ。ただ、それは本質的には本人にしか関係のないことで、周りごとくやかく言うものではないだろう。隣に座るダフネもまた、さして興味のない様子だった。

全ての生徒の組分けが終わると、宴となった。

些か下品に感じる金の皿には、肉料理と芋と豆、つまり英国料理が盛り付けられている。家庭の事情で食べることが出来ない豚肉を除き、味は確かに素晴らしいと思えるものだったが、彩がない。スープが無いことも不満だ。魚料理と思われるものはフィッシュアンドチップスである。食事というよりは、パブランチである。これが、英国の食事文化。

聖杯の中において、食事を摂ることはない。浴びる血が満腹感と誤認されるのか、腹が減ることは無い為に。それは尋常な精神を持つている者にとって、幸せだと言える。人が臓物をまき散らし、それを啜る獣たち。病巣の臓器。とろけた胎児の死骸。腐った黄色い背骨。それらに囲まれながら摂る食事とは、どの様な味がするのか考えたくもない。

その様な過去があるせい、現在のヤーナムは食に対して貪欲である。近いところでは独仏伊、遠くは日本まで、様々な国の料理が食卓に並ぶ。全ての民が狩人であるわけではない。むしろ、狩人となるのは圧倒的少数。しかし、その想いの一つ。二度とあの様な悪夢は繰り返さない。故に、様々な技術を発展させていったのだ。食文化の流入は技術の吸収と共に在った。

食事と言うべきか、軽食というべきか、ともかく肉と芋と豆を味

わった後、食卓に出されたのは数々のデザートだった。

「甘味。それこそが魔法。そうは思わないか」

「マリア、身体壊すわよ」

ダフネはラズベリーとマスカットのアイスクリームを皿に盛っている。ここまで素晴らしい甘味を前にして、よくもそこまでお上品に食べられるものだと思心させられた。

「甘味を控えれば、長生きはするだろう。だけど、だけどね。健康に良いものを食べて心貧しく死ぬよりは、幸せに食べて早死にするべきだろう！

人間というものは、甘味と塩を求めて止まなかった。歴史を紐解けば、いくらでもその象徴的出来事がある。塩は身体に必須だが、甘味はそうではない。熱源を得たいのであれば、豆でも食べていればいい。だが、そうはならなかった。つまり、甘味とは、精神にとつての必須栄養素。魔法を学ぶと言うならば、まず真つ先に製菓を学ぶべきだ」

喫茶文化が発展したせいも、英国の甘味事情は他国のそれに劣らない。劣悪な土壌や水質、腐敗が前提の流通、それらを誤魔化す為に非魔法界の英国人達は調味料を発展させた。だが、菓子はそれらの影響を受けない。基本的に、小麦と砂糖があれば甘味は出来るのだ。他方、魔法族は百味ビーンズやペロペロ酸飴などといったものを作り上げた。味覚に対しての冒瀆である。

「面倒臭い事を言っているけれど、甘い物が大好きってことよね」

「大好きにさせる甘い物が素晴らしいという話をしているんだ。ダフネ、いったい私の何を聞いていたんだ？」

「……何も聞いてないわ」

「そうか。いつかきつと貴公も分かるだろう。ああ、そっちのプディングをとつてくれないか。未だ食べていな——なんだと？」

未だ大皿には美しく震えるプディングが残っていたというのに、一瞬にしてテーブルからは一切のデザートが消えてしまった。これが甘き夢の目覚め、全て忘れてしまうのか。

ダンブルドア校長が立ち上がった。

「さて、全員よく食べ、よく飲んだことじやろうから——」

「未だだ、未だ食べていかなかったのに……おのれ校長」

「静かにしてなさい」

ぼそりと呟いた呪詛をダフネが咎めた。

兄や姉たちに甘やかされて育ってきた為、こうして対等に物を言う存在は非常に新鮮だった。グレンジャーもまたそうであったが、彼女の場合は交流というよりも、情報交換といった趣だった。ダフネはまだ友人というわけではないが、その萌芽にむず痒さを感じた。

「——構内にある森に入ってはならん。これは上級生にも、特に何人かの生徒にも注意をしておこう」

その目はグリフィンドールのテーブルに注がれていた。赤毛の双子が肩をすくめている。

「次に、フィルチ管理人より、授業の合間に廊下で魔法を使わない様にと注意があった。他には、今学期は2週目にクイディッチの予選がある。寮のチームに参加したい人は、フーチ先生に届け出る様に」

校長が指し示した先には、短い白髪の女性がいた。猛禽を思わせる鋭い眼をしている。

「最後となるが、酷く痛い死に方をしたくない人は、今年いっぱい4階の右側の廊下に入ってはならん」

やはり Hogwーツは魔界である。

危険がある。それを放置し、単に注意喚起があるのみ。

死にたくなければ近づくな、近づいた者は勝手に死ぬということだ。常識で言えば、その様な危険があるのであれば、全力で排除しようとするだろう。学期が始まる前に危険があることを認識していないから、何の対処もせず、生徒の自己責任とは、教師が聞いて呆れる。

宣告を聞く上級生たちも別段騒ぐことが無いのであるから、Hogwーツでの生活は常に危険に満ちており、死と隣り合わせであることが分かる。入学試験を生き残ったからと言って、安穩としてはいられない。常に淘汰の圧力が生徒にかけられている。この程度で命を落とす様な不用心な人間は、魔法界の秘匿を破る事態を起こすということだろう。種族保存の為、弱者を切り捨てる。実に野生的でありなが

ら、学生という未熟な状態にある内にそれを処理するという、人ゆえの合理性はある種の美しさすら覚える。

先程は無警戒に食事をしてしまったが、迂闊だった。毒が入っていたらどうする。

魔法使いを魔法使いとする原因は、その血に住まう虫である。一般的に魔法界での認識がどうなっているのかは知らないが、少なくとも狩人の間では常識だった。その虫が精霊たる軟らかな瞳を媒介とし、上位者の住まう宇宙への交信を行う。そして神秘の魔法を顕現させるのだ。

獣狩りに用いられる、あるいは獣が用いる毒の類はその虫に作用するものであり、正しくヒトにとっての毒ではなかった。つまり、魔法族であるか否かは、その毒を摂取することで分かるのだ。非魔法族の前で毒に苦しめば、直ちに露呈する。おそらく、異端審問の時代にはそうして選別された者が火刑に処されたのだろう。

幸い、一度に大量に摂取しない限りは、虫自身がそれらが無毒化する。組分けに因って知った、クラブとゴイルという名のマルフォイの下男のように、貪り喰わなければ影響はない。テーブルマナーを覚えさせつつ、毒の対処法を覚えさせ、そして学ばない者に死を与えると考えれば、これほど都合の良いことはあるまい。

良家の生まれであるマルフォイもダフネも、その食事の所作は美しいものだったが、それは家格が原因ではなく、生存を理由としていたのだ。甘味に我を忘れてしまった事を恥じる。ダフネの「身体を壊す」とは、正しく忠告であり、気づきを与えようとしていたのだ。組分けしかり、食事しかり、ダフネの柔和な面持ちの中に、冷静さがあり、かつその表情通り慈愛が溢れている。ああ、素晴らしき協力者よ。

「ダフネ」

「何？」

「生き残ろう」

「……近づかなければいいだけじゃない」

「甘い。デザートよりも。ここは、ホグワーツだ。貴女は二度も私を救った。報恩はいずれ」

何の事やら、と困惑しているダフネ。恥をかかせまいと、その様に惚けるのだろう。何と高貴な振る舞いか。次の長期休暇はアンネリーゼ女王に拝謁し、身の振る舞いを学ぶことを決意する。

「さて、寝る前に校歌を歌おう」

校長が杖を振るうと、黄金のリボンが滑らかに流れ出て、空中に文字を描いた。それは、尋常ならざる奇妙な歌詞だった。

ホグワーツ　ホグワーツ

ホグホグ　ワツワツ　ホグワーツ

教えてどうぞ僕たちに

老いても禿げても青二才でも

頭には何とか詰め込める

面白いものを詰め込める

今は空っぽ　空気詰め

死んだ蠅やら　がらくた詰め

教えて　価値のあるものを

教えて　忘れてしまったものを

ベストを尽くせば　あとはお任せ

学べよ脳みそ　腐るまで

尋常ではない、だが、理解できた。全ての源流を。

教会が脳に瞳を求めたその狂気を。

狩人が脳に文字を刻むその意味を。

メンシスの狂人が肉体を木乃伊とした理由を。

脳が震えそうだ。

思わず身をかき抱いてしまう。

この歌詞は、上位者との再会を求めている。遙か古の、神代の頃に魔法族を魔法族たらしめた上位者への再会を求めているのだ。上位者に見えるための智慧を求め、そして、上位者の赤子である事を思い出せと。

月の魔物の子たる我らヤーナムの民。それは、更なる上位者に見え

るための、英国魔法界の成した儀式の一環なのだ。かつてヤーナムが悪夢に飲まれたのは、メンシスの狂人共が上位者になる為だと考えていた。しかし、この悍ましい歌を聞いて思う。彼奴らは上位者となり、更なる上位者に見える為に月の魔物を呼び寄せたのだ。

月の魔物が何故人の血を流し、上位者としてあまりにも人に近い姿をしていたのか。あれは、偉大な上位者ではない。太古の上位者の使者なのだ。そして、その性質を今のヒトに継ぐ為の供儀の贄。

特別な赤子とは、我らの事ではない。我らより遥かに血を濃くした、いずれ来る我らの子と太古の上位者との赤子の事。

即ち、獣狩りの夜は、未だ明けていない、という事だ。

ウイレームに学んだ学徒は上位者との血の交わりを情けない進化と蔑んだ。人として上位者に伍するという、ウイレームの教えによるものだろうと考えていた。だが、違う。上位者となり、更に旧き上位者に見えようとするその行いを、退化だと断じていたのだ。

ウイレーム先生は正しい。その言葉に含まれた意味は、重い。

足取り重く、監督生に連れられて向かうは地下牢。学徒でありながら囚人である様は、実験棟の患者と同じものを感じる。あの校歌の通り、頭に詰め込んだ結果が、失敗作ではないか。

スリザリン寮生は他寮に比べ少ない。全校生徒約一千名であり、4寮が存在するのだから、多少のばらつきはあれど、1つの寮毎に250名であるはずだが、スリザリン寮生は200に満たない。故に、上級生には個室という名の独房が与えられ、下級生には4人の共同房が割り当てられる。今年の新入生は少ないが故に、2人で使用して良いとのことだった。

ダフネには旧知の新入生が何名かいたが、同室となってくれた。普段から家の付き合いがある為、ここでも一緒では変わり映えがしないとのことだったが、後で詳しく聞けば、それらは面倒な人間だからだという。躲し方を知っているだろう人間と、対して数時間しか一緒にいない自分の方が面倒ではないかと訊けば、知っていてなお面倒に思う人間に付き合うより、自分と付き合う方がまだ好意を持てる可能性

があるということだった。

打算に基づくといいことを率直に言われたのは、こちらの反応を試しているのだろう。好意を持てることを期待している、ということだ。同室であることを許す程度には心を許しているという意味表示であり、友人となろうという意思表示だ。

明日の授業の支度を終え、寢床に入る。いかな狩人の装束の収納機能が優れているとはいえ、直ぐに取り出すには整理が必要だった。トランクが不要であることにダフネは驚いたが、原理はトランクに掛ける空間拡張の魔法を服のポケットに施したものと説明すれば、得心がいった様だった。次の休暇には、仕立屋に同じ細工をさせると言う。

「おやすみ、ダフネ」

「おやすみ、マリア」

疲れているのに、ダフネの静かな寝息がする頃になっても、眠れなかった。

父王と女王達は何故この様な場所に我らを通わせるか。あれだけ我らを愛し、育む者達が、何故その吾子を死地に送り込むか。

それには理由がある。

王たちは仰せなのだ。

秘儀を破れと。

杖

ホグワーツは城であり、城とは外敵からの防衛施設である。内部を知らない者は身内ではなく、排除されるべき外敵となる。その防衛設備は学徒をも容赦なく迎撃対象とした。

仕掛けの封印を解かなければ開かない扉。

上っている内に下の段から消失していく階段。

曜日によつて接続先の異なる階段。しかも、この階段の接続先は禁忌の東側4階廊下である。不出来な新入生に対する殺意は本物の様だった。

スリザリンでは、こういった脅威を新入生に教える為、授業に空きがある上級生が新入生の教室まで引率をしてくれるのだった。

「迷ったとき、基本的にゴーストは信じるな。あいつらは壁や床という概念を忘れている。親切心で教えているつもりらしいが、教えてもらえないのは直線的な経路だけだ」

「それと、他寮出身のゴーストはスリザリンに対する親切心なんて持っていないからね。いい？ ホグワーツは3寮とスリザリンで構成されているの」

「そういう風潮の中、我々は6年連続で寮杯を獲得している。それは何故か」

「「我々は家族だからだ」」

スリザリンの寮生は排他的であるが故に、身内は非常に強固な関係にある。元々、純血の家系の多くが集まっていることもあり、実際としても血縁関係のある生徒が多い。パーキンソンが言うところでは、ポーン家はヴォルデモートに滅ぼされた家系であり、その傍系にあたるのだろうかということだった。

いくつかの世代を遡れば、確かにその滅ぼされたポーン家とヤーナムのポーン家は共通の祖先をもった。自分でも一切気にしたことはなかったが、広義の純血と言えば純血なのだろう。ただ、本家のポーンは聖血の一族に数えられていない為、おそらく遥か上の世代は魔法使いではないのだろう。

これを知ったパーキンソンと彼女の同室のブルストロードと共に、一緒に行動することが多くなった。態度には出さなかったが、血によって付き合う相手を変えるのかと呆れた。ダフネが面倒に感じていたのはこういうところなのだろう。

3人ともイングリットお姉様を「お姉様」と呼び、懐いているのは、姉を取られた様で少々面白くない。それを見てか、デイルクお兄様が構ってくるが、それに対してお姉様が苛立っているあたり、いい加減に妹離れをしてはどうかと思う。あるいは、お姉様もお兄様に構ってもらいたいのだろうか。

多くの授業は他寮と合同授業となった。学年全体で授業を受けることもあるが、大抵は2寮で行われる。スリザリンはグリフィンドールとの合同となることが多い。スリザリンはマルフォイが妙に赤毛の生徒とポッターに絡む他は我関せずといった様子で、グリフィンドールは何かとこちらを目の敵にしていた。そういう具合であるから、獅子寮との授業が印象深く思われたのかと考えたが、数えてみればやはり多かった。デイルクお兄様に理由を問うた。

「確かかは分からないが、反目しあう寮を当てることで、お互いに切磋琢磨するだろうという教授陣の意向らしい」

「反目？ 我らとグリフィンドールは分かれますが、ハッフルパフとレイブンクローもですか」

お兄様は魚人に祭祀者の骨の刃を突き立てた後、魚人同士が傷付け合うのをのんびりと眺めていた。ホグワーツでの生活に不安を感じ、毎晩ヤーナムに戻っては、ヤーナムの聖杯に潜り、修行を積む事になっている。偉大なる聖杯文字、9k v 8 x i y i の聖杯では、夢遊病が如く意識が曖昧なまま歩き回ることが出来る為、修行にはならない。

トウメル、ローラン、イズの汎聖杯と呼ばれる、真なる聖杯を模した仮想世界。聖杯文字とは、その汎聖杯の有り様を規定する、いわば呪文である。

「ハッフルパフは学校生活によって勉強よりも友誼を学ぶべきという風潮がある。レイブンクローはその真逆。レイブンクローは寮とし

ての連帯感是最も薄い、ハツフルパフ生を馬鹿と蔑むことについては全会一致している」

魔法族の教育機会はたった7年しかない。我ら時間と切り離された身と異なり、限られた学校生活を勉学に充てようとするのは、学生にとつては当然と言えよう。尤も、あれが学校であればという前提が付くが。

しかし、友誼を結ぶこともまた、無価値ではない。特に、我らにとつて友というものは、仲良しこよしの関係を指すものではない。どちらかがしくじれば、共に死ぬ。究極の合理的必然。協力しなければ、死ぬのだ。

「レイブンクロー生の人間性は昏い。おそろく、過去のヤーナムよりも。談笑のさなか、席を立つた者がいれば、たちまちにその者の陰口を叩く。試験勉強では嘘を教え合い、ペンやインクは盗まれる。卵が先か、鶏が先かということになるだろうが、そういった風潮から、狭量な自助自立の精神が育まれるということだ」

ダフネよ、貴女にレイブンクローは似合わない。

「ハツフルパフはどうなのですか」

「ハツフルパフはハツフルパフで、レイブンクローを根暗ガリ勉クソぼつちと思っているな。あるハツフルパフ生は言った。

ツルむダチもないから、教科書がおホモダチなんだよ。あそこはあそこがついてないカマ野郎と股に蜘蛛の巣張った奴しか行かない寮だ。

ああ、分らなければいい。酷く下品な表現だからな。むしろ分かるなくて兄は安心したぞ」

その様子では、血縁で固まっているスリザリンはさしずめマザーファツカーだろうか。

呪詛の言葉が挨拶である悪夢のヤーナムで長い時間を過ごしたのだから、分からないということはない。むしろハツフルパフ生の罵倒の言葉の程度の低さに呆れる。だが、お兄様が安心していられるのなら、純粋な妹を演じよう。

どうにも男子という者は、女子の発達について誤解がある様だ。マ

ルフオイがポッター達に絡むのを見て、同輩の女生徒はどの様に見えるか。「可愛らしい」である。あるいは、赤毛を加えて、「尊い」である。

男色に興味はないので、同輩たちが「いいよね」「いい……」などと超次元の思索を語り明かしているのは怖気が走る。

薬草学の授業は新鮮だった。薬効や用途については知悉していたが、その栽培については全くの未知となる。墓所カビや死血花といった薄暗く、湿度の高い場所に生えるものについては分かるが、それ以外の薬草については知識として知っていても、実践となると知識だけではどうにもならないことがある。それを考慮すれば、知識だけで乗り切っているグレンジャーの努力には頭が下がる。

一方で、知識だけが試される歴史学は退屈だった。ピンズ教授は教科書に書いてあることの一部のキーワードを板書するのみで、教科書の内容を補足するでもないのだから、授業を受ける価値はなかった。魔法族であれば、細かい年号は試験前に詰め込むとしても、おおよその文脈は分かる為、何が重要かそうでないか等、何となくわかってしまふのだ。

そういった態度を見ていたのか、グレンジャーは魔法史の授業後に、自分の解釈があっているかどうかを確かめにくるのだった。断る理由もなかったので、口の中で飴玉を転がしながらそれを聞いている。初めの頃は、同じ寮にも魔法族生まれがいるだろうにと思ったが、どうやら獅子寮の中に親しい人間がいらないらしい。別段こちらも親しいつもりはないが、頼られるのは悪い気がしない。パーキンソンとブルストロードは嫌な顔をし、ダフネはそれらが嫌な顔をするだろうから避けた方が良いと忠告してくれたが、憐れな少女に救いがあってもよいではないか。

最初に杖を振るうことになったのは、変身術の授業だった。当初から感じていた通り、マクゴナガル教授は厳格な人間で、初回であるだろうから仕方がないだろうと大目に見ることはせず、遅刻したポッターとウィーズリーに説教をしていた。ここで赤毛の生徒がロナル

ド・ウィーズリーという名であることを知った。マクゴナガル教授は副校長であり、グリフィンドルの寮監である。自らの寮の生徒であつても厳しく接する態度には好感が持てるが、他寮の生徒にはより強く接する可能性もあるので、下手なことはしない様にしようと思つた。

1年生が吸収するには複雑な変身術理論を丁寧に板書した後、マクゴナガル教授は燐寸棒を生徒に配布した。

「皆さんには、これからこの燐寸を針に変えてもらいます。必要なのは、イメージをする事です。どの様な物に変身をさせるのか。具体的なイメージがなければ、たとえ何かに変わったとしても、それは何かでしかありません。変身術は高度な理論と、ほんの少しの才覚によつて為される、学術たる魔法です。単に魔法的な能力によらず、かといつて、一切の魔力を使わないということはありません。変身術の授業では、その機微を正確に理解し、調和させる術を学んでもらいます。不適切な呪文は危険を生みます。ですから、いい加減な態度で臨む者は、授業を受けさせるつもりはありません」

その点、脳に文字を刻めば、望むと望まざるとに関わらず外見が変態する狩人の業の容易な事よ。

マクゴナガル教授は手を叩き、実践する様にと告げた。皆一斉に杖を取り出し、振り回したり、燐寸をつつき回したりした。

自分の杖はその様な動作は出来ないのです、どの様にしたものかと思案したが、特に良い方法も思い当たらなかった。いつものやり方でもやってみる他あるまい。

懐から杖を取り出すと、マクゴナガル教授は目を見開いた。

「ミス・ボーン、それは？」

「は？ 杖ですが」

「それはワンドではなく、ステッキではないですか」

「……スターリングシルバー、獣の腱。長さ不定、性質は高潔。地元では一般的なのですが」

仕込み杖。鋸鉈、獣狩りの斧に次いで、初めに狩人が学ぶべきとされている獣狩りの仕掛け武器。

懐に飛び込む事を覚える鉈。

リゲインという狩人の生きる感覚を覚える斧。

敵との間合いを図ることを覚える杖。

この三種を扱える様になって初めて、狩人としての二歩目を踏むこととなる。杖は単純な火力では他の仕掛け武器よりも劣る為、その分丁寧な立ち回りを意識させられる。そうして敵の動きを覚えれば、別の武器に持ち替えたとしても、よりの確に敵の弱点を抉ることが出来る。

当時の仕込み杖は鋼線と歯車を用いた鞭剣であったが、今はその髓に獣の腱、つまり魔法生物の素材を用いることで、魔法使いの杖として使える様になった。獣狩りにおいて、木材から成る魔法使いの杖はあまりにも心もとない。この改良は、元は人であった獣を用いるという点で冒流的であったが、故にそれは、戦いの内に高まる獣性を省みる戒めとなる。

「貴女のお兄さんもお姉さんも使っていません」

「そうなのですか？ でしたら、私もその様にしましょう。こちらではいかがですか。材質は明かせませんが、浮遊や呼び寄せといった物体移動呪文に最適」

星輪樹、エーブリエタースの触角。29センチ。

狩りの内で切り取った星の娘の触腕と言うべきか、翼と言うべきか、ともかくそれに生える細長い肉。聖杯は無尽蔵の資源を生み出す。杖から水を生み出すことも出来るのだから、聖杯から物体を持ち帰ることも同様に可能である。まさに魔法。

ヤーナムの財力を支えるのは、これら聖杯から取り出す希少な魔法薬素材と輝く硬貨である。獣狩りの夜明けを迎えたのだ、遂に硬貨の使い時となった。

今すぐ用意できる杖として、最も現代魔法使いの杖に近い形、大きさをしているのはこの星輪樹の杖だろう。これでも不適とされたならば、一度ヤーナムに戻り、新しい物を作る必要がある。工房に頼めば茶でも飲んでいる間に作ってくれるだろう。

他の携行品としては、旧主の番犬を芯とした獣狩りの松明がある。

火の魔法に優れる。小アメンの腕は、それそのものが杖となるが、あんな冒瀆的な物を衆目に晒す事がどの様な結果を生むかは分かりきっている。

「良いでしょう。」

ミス・ボーン、申し訳ありませんが、学校として画一的に教える以上、先ほどの杖による最適の方法を教えることが出来ません。もちろん、貴女の変身術の才能が優れていて、いえ、そうでなかったとして、貴女が望むのであれば、個人的に教える時間を設けることはしましう」

「ありがたいお言葉です。しかし、未だ若輩の身。教授のお時間を頂く前に、まずは私が何に向いているのか、どういう魔法使いになれるのか、見極めてからにしたいと存じます」

至極自然に断ったつもりであるが、上手くいったらどうか。

自分がイレギュラーであるとされ、個人授業の呼び出しとは、罠に決まっている。

厳格な人物であることは分かっている。授業の規律や風紀を乱すものは排除すると先程言っていた通り、ホグワーツ教育の基準に合致しない者は、ホグワーツの為に削除するつもりだ。

父王も、ガスコイン神父も、狩人狩りの狩人アイリーンも、外からヤーナムに來たりし者。月の魔物に魅入られる条件がどの様な物かは未だ分からない。だが、間違いなくヤーナム共同体の外にある者ということとは共通項として見て間違いないだろう。即ち、ヤーナムにとっての異物であるのだ。

幾つもの神話に於いて、異物とは何かの引き金になる。その影響の善悪に関わらず、もたらす変化は既存の秩序の変革を意味し、そしてそれは、秩序に重きを置く為政者である副校長からすれば、許されざるものなのだ。

悪しき芽は摘み取らねばならない。マクゴナガル教授の目はそう語っていた。あるいは、あまりにも露骨な罠を示唆することで、二度は無いという警告なのだ。

怯えながら燐寸を変化させようとしたが、中々難しいものだった。例えば、石ころを投げナイフに変えたり、瓶に変えたりといったことはしてきた。だが、それは模写に近いものであったし、その模写にしても幾度となく練習してきたから出来る様になったことだ。針に変化させようと試みたことはなかったし、針をまじまじと眺めたことはなかった。つまり、明確な針のイメージがない。

「うーん。理論は理解出来るんだけど、いまいち実感と合わないね」
ダフネは杖を燐寸に向けるも、銀に変色したのみだった。

他方、自分の燐寸は赤く着色された頭葉が栗の実の様に棘だらけとなった。

「何それ」

「瀉血の槌という。見れば見るほど精巧に出来たものだと思うぞ。全く授業の加点にはならないが」

「メイスね。見事じゃない。廊下に飾ってある甲冑に持たせるといいわ」

「皮肉か？」

「半々ね。この棘だけを折り取ったら？」

「糸通しの穴を付けなさい」

マクゴナガル教授は後ろから覗いていたらしい。

授業が終わる頃に燐寸を針に変身させられたのはグレンジャー1人。見事な針だった。

ダフネは見事な銀の燐寸棒を作り上げていた。

こちらは肥大し、メスが出来上がってしまった。これはこれで毒を塗り込めば実用に耐え得るものだろうが、偶然の賜物なので、次は期待できないだろう。

マクゴナガル教授はグレンジャーを褒め称え、僅かな微笑みを見せた。

グレンジャーは授業が終わった後に、満面の笑みを浮かべ、こう言った。

「歴史学じゃ教わってるけど、変身術は私が教えてあげるわ」
成程、友人が居ないわけだ。

安らぎの水薬

闇の魔術に対する防衛術は歴史学に比肩する無価値な授業だった。防衛術に関しては、危険生物と呪いについての講義、そしてその対処法から成る。しかし、ビルゲンワースの蔵書はホグワーツで学べる程度の事は網羅されていた為、教授のたどたどしい説明を聞いたところで得るものはなかった。

アフリカのゾンビを駆除したからターバンを贈与されたという話をしていたが、ゾンビは西アフリカに存在する。西アフリカはサバナ気候であり、イスラム教徒でもなければ、ターバンを用いない。それだけで断定できるものではないが、具体的な顛末を他寮の生徒が問うと答えられなかったのだから、やはりその経験談は嘘なのだろう。

上位者の研究には、ゾンビ、グール、キョンシー、木乃伊といった、ヒトの肉体を加工する術からの取り組みもあった。

メンシスの悪夢では、頭が鴉で胴が犬、あるいはその逆の動物や、頭はヒトであり、身体が蜘蛛といった冒瀆的試みがあった。あれは人の心を持ちながら、上位者となるための方法の1つとして研究されたのだろう。つまり、上位者の首を自身のものと挿げ替えようとしたのだ。

一学生、それも燐寸棒を針に変えることすらできない学生が知っている程度のゾンビの知識を語れないとは、何たる無能教師か。年間授業計画を聞くに、実践は無い様だったので、以後この授業は変身術の練習に充てることを決意した。

週末には魔法薬学の授業があった。

担当するスネイプ教授はスリザリンの寮監であるが、滅多に談話室に来ることもなく、大抵は研究室に籠っていた。先輩方の話によれば、スリザリンにとって素晴らしい協力者であり、教師として、大人として軽蔑すべき人間であるという。

初週の授業はこれが最後となり、引率の先輩方はこれで今年も遅刻者0名だと誇らしげに帰っていった。尤も、教室はスリザリン寮から近い地下牢の一室である為、これで迷うのであれば錯乱しているに違

いない。

他寮もスリザリンに対抗したいのであれば、引率者を付けければ良いものを、真似をしたくないという幼稚な自尊心がそれをさせない様だ。既にグリフィンボールとハツフルパフは遅刻によりそれぞれ10点が減点されていた。

スネイプ教授は出席をとった後、魔法薬学を学ぶ意義を説明した。「この授業では、魔法薬調剤の微妙な科学と、厳密な芸術を学ぶ。ここでは、大仰に杖を振り回したり、馬鹿々々しい呪文を唱えたりはしない。

沸々と沸く大釜、そこから立ち上る湯気。精緻な配合と順序によって、生み出される魔法薬。それが血管を這い巡り、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力。

我輩が諸君に教示するのは、名声を瓶詰にし、栄光を醸造し、死に蓋をする芸術である。

これらの美しさを満足に理解できる者がいるとは期待していないが、ほんの僅かでも脳を持っている者がいれば、この芸術の虜となるだろう」

思わず、拍手をしてしまった。周囲の視線が集まるが、知ったことではない。

「素晴らしい。素晴らしいですスネイプ教授。つまり、生まれ持った能力は関係なく、純粋に知性によって為される学問であると。なんと、人間的な美しさを持った学びでしょうか」

科学とは、「誰が行ってもそうなる」という法則を学ぶものだ。感情や偶然に因らず、また、持つて生まれた性質に因ることもない。上位者やら悪夢やら、当事者であるものにも関わらず得体の知れないものに比べ、なんと明確な合理性だろうか。

人類は混沌とした自然を観察し、そこから法則を見出し、理解し、そして征服してきた。魔法族も非魔法族もヒトとしての根幹はそこにある。上位者からの借り物の魔力などに頼らない、生物としてのヒトの能力、知性によって成る学問の気高さよ。

「スリザリンに5点をやろう。君がその熱意を成績として残すことを

期待しよう。ところで、ポッター。我らがスター。アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると何になるか」

スネイプ教授の視線が教室の奥に伸びた。それを追うと、ポッターが緊張と困惑とが入り混じった表情をしていた。それもそうだろう。一年生で行う内容ではないし、仮に分かつていたとしても唐突に問われれば答えに窮するのも仕方あるまい。その隣のグレンジャーが大きく手を挙げていたのには感心する。

たった2種の材料で同定は出来ないが、思いつく中で適切なものは生ける屍の水薬だろうか。問われたのはポッターであるので黙っていたが、ポッターは一向に困惑した顔をするのみだった。ここでウィーズリーであれば、「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えたもの」とでも答えそうなものだったが、スネイプ教授はその様な冗談を笑って受け容れる人間ではないだろう。

「どうやら有名なものは額だけで、その頭蓋の中はそう素晴らしいものではない様だな。では、チャンスをやろう。ベゾール石を探すならば、どこから探すかね」

山羊の胃。推測をしなくても構わない、単なる知識を問うものであれば、教科書を眺めていれば分かることだ。これにはダフネも「山羊だか鹿の胃だっけ？」と小声で訊いてきたので「反芻動物ならどれでも取れるが、一般的には山羊」と答えた。

どうせ弄ばれるのだから、スネイプ教授の薬品庫とでも答えればいいものを、ポッターは教授を睨んでいるだけだった。

「分かりません」

談話室でマルフォイが吹聴しているので、ポッターはマグル育ちだと知っている。だが、グレンジャーは先程より大きく手を挙げていたし、他の生徒もうずうずとしているので、単に彼の努力不足だろう。「そうかそうか。優秀な我らがスターは予習など不要と、そう思召していらつしやったということか。では、他の質問をしてよろしゅうございますか？ モンクスフードとウルフスベーンの違いは何でしょうか？」

音を立ててグレンジャーが立ち上がる。グリフィンドール生は同

じ寮の生徒が辱められているということに怒りを感じているようだったが、その怒りの片隅にはグレンジャーの態度もある様だった。ウィーズリーは非難がましい視線をグレンジャーに送っている。

グレンジャーにあるのは、寮への貢献と自己顕示欲の半々だろう。自分が回答することで獅子寮への得点を獲得できると考えているようだ。

「分かりませんが、ハーマイオニーが分かる様ですから、彼女に聞いてみてはいかがでしょうか」

グレンジャーにはポッターを貶めようとする意識はないだろう。だが、ポッターはそうとは思わなかったらしい。彼にとって、グレンジャーは自分の無知を嘲り、それを踏み台にして自分の得点にしたいと考えている性悪な女だろう。ポッターは教授への憎しみがこもった目のまま、グレンジャーを見て言った。

「座りたまえ」

教授は舌打ちをしてから言った。グレンジャーには目もくれなかった。

「さて、先ほどからおしゃべりに夢中な様だが、ミス・ボーン、答えたまえ」

「1生ける屍の水薬ないしはその解毒薬2山羊の胃3呼称。これでもろしいでしょうか」

「それぞれの意味を説明したまえ」

「生ける屍の水薬は睡眠薬。用法用量を誤れば二度と目覚めない程の眠りをもたらす、強力な睡眠作用があります。その様を、生ける屍と。

ベゾアール石は反芻動物の胃にある結石であり、魔力の有無に関わらず作用する万能の解毒剤です。

モンクスフードとウルフスベーン、それとアコナイトは同じもの。トリカブトを指します。ですが、教授は違いを述べる様仰つたので、違いは呼称ということになりましたでしょうか」

「見事だ。君も兄同様、魔法薬学への適性がある様だ。今後に期待し、スリザリンに5点。だが、私語は慎む様に」

「ええ、その様に」

「諸君、何故ミス・ボーンの説明を記録しないのだ。それとポッター。勉強に対する不遜な態度によってグリフィンドールより1点減点」

そこかしこからガリガリと羊皮紙に書きつける音がした。ダフネは生ける屍の水薬とモンクスフードだけを書き込んでいた。

本日の実践は出来物を治す薬だった。教科書を読みながらであれば、初めて魔法薬を作る者であっても出来る程度の簡単なものだ。先程の問答は新入生が満足に答えられるものではなかったが、実践となれば適切な難易度を設定することから、スネイプ教授はやはりスリザリンに対しては甘いのだろうと察せられる。レイブンクローとハッフルパフであれば、手順を間違えれば文字通り爆死する様な調薬をさせたのだろう。この薬の作成手順を間違えたところで、逆の効能、つまり出来物が出来る程度の事でしかない。

素材には蛞蝓を用いるが、精霊たる蒼き蛞蝓ではない。いずれにしても、この薬を肌に塗りたいとは思わない。非魔法族の町に行けば、より衛生的で、肌にも良く、香りも良いものが手に入るのだから、作る為だけに作る薬になった。

ダフネとペアになって進めたが、どうにもダフネの手際に不安を感じる。手順は教科書通りで正しいのだが、動作がぎこちない。蛇の牙を砕く時も、せっかく厳密に計量してから乳鉢に放り込んでいるのに、何回もこぼしてしまっていた。見かねて手を出せば嫌がられ、仕方なしに黙って見ていれば手伝えとやかましい。自尊心も実利も望む、我儘なお嬢様である。

マルフォイはスネイプ教授に気に入られている様で、明らかに不出来な仕上がりであれば、優しく改善点を伝え、平凡な出来であれば称賛した。そのマルフォイのツノナメクジの茹で加減が絶妙であると、グルメリポーターの様な評価をしている時、グリフィンドールのテーブルから緑色の煙が生まれ、地下牢いっばいに立ち込めた。火にかけてられているはずの鍋は捻じり切った様な層となり、噴き出した薬液はその作成者の肌を出来物だらけにした。その斑となった皮膚と肥満体型から記憶をたどれば、列車でペットの蛙を無くしたという男子生徒だった。名はロングボトルだったか。いや、ロングボルトだった

か。痛みで泣き喚いている姿は、凶体の割に高音で泣く蟊蛙を彷彿とさせる。耐えよ少年。亡者の吐瀉物を浴び、肉が腐りゆく痛み無比れば、蚊の刺したようにも感じまい。

こぼれた薬液が床に広がり、周囲の生徒の靴に穴を開けた。

「熱い！ 痛い！」

「ぎゃあああつ！ 足がああつ！」

「爪が、爪がなくなってる！ 肉が溶けるぞこれ！」

過去の授業で床に染み込んだ成分を吸収したのか、より酷い薬品に性質を変えている様だった。教授が憤怒の形相で杖を振ると、薬液は消え去り、残るは悲鳴を上げる生徒だらけとなった。肉が溶けゆく足に触れれば、今度はその指が溶け始めるのだ。その様子を見て、女子生徒が嘔吐し、それにつられて別の者が嘔吐すると言う連鎖反応が起きた。

言葉を為さない悲鳴を上げながら悶え、嘔吐する様は人のそれではない。獣の病とはよく言ったものだ。惨劇に心を病み、そしてその痛みによって自らも獣となり、惨劇は拡大する。

「ダフネ、鍋に吐くなよ？ あの連中の様に顔が無くなるぞ。せつかく綺麗な顔なのだから、大事にするんだ」

「吐かないわよ。淑女の意地があるもの。でも、次の休暇になったらこの記憶を消すわ」

「おや、褒めたのに反応がないとは淋しいな」

「この惨状で口説かれたって嬉しくないし、顔が良いなんて言われ慣れているから。お願い、口を開かせないで。気を抜いたら吐くわ」

「ふむ。吐瀉物まで値段が付きそうな美しい顔、というのはどうかな」
「……努めて和やかに申し上げますけど、可及的速やかに死ね変態」

「淑女がはしたない言葉を使うものではないぞ」

ダフネが無言で殴ってきたので、仕方なしに安らぎの水薬を与えてやる。まさかこの程度で発狂し、獣に変態することはないだろうが、友人の尊厳の危機を坐して眺めることは寝覚めが悪い。

ビルゲンワースの鎮静剤でも良かったが、一般的な魔法薬を投与することにした。先程の視線だけで射殺す様な表情から、平常のたおや

かな乙女のそれになった。

「ミス・ボーン。無傷の者の内、動揺している者にそれを与えたまえ。消費した分の材料は都合してやろう」

「スリザリンに加点もお願い申し上げます」

「スリザリンに15点！ 見事な調薬とその冷静な態度と強かさにだ！ 少しでも薬品の掛かった物は医務室に連れていくので手を挙げよ！ 残った者は何故この惨事が起きたかレポートをまとめ、次週提出する様に！」

「恐悦至極。さあ、飲みたい者はこちらに並べ。そのグリフィンドール生、飲めとは言わないが、淑女の尊厳を失いたくなければ飲んだ方がいいんじゃないか」

東洋系の整った顔立ちの生徒が蒼ざめた顔で肯き、列に加わった。

「おい、騙されるな！ あいつはスリザリンだぞ！」

「なんだウィーズリー。貴公にこの場をどうにかする術があるならば是非ともご助力頂きたい。なければさっさと荷物をまとめて教室を出ることだな。さもなければ、私が叩き出すぞ。」

——さあ、あーん、だ。あーん、するんだ。大量に摂取すれば眠ってしまうからな」

合同授業でウィーズリーの頭の出来は見ていたつもりだったが、その予想の遥か下を行く、驚く程の馬鹿であった。

「スリザリンの出す薬なんか信用できるか。飲んだらもつと酷いことをさせるつもりだろう！」

「そんなに生徒の苦しむ様を見たいのか？ それとも、この中に貴公の想い人でもいるのか？ だとすれば随分と歪んだ情欲だな」

「マリア、これは上級魔法薬ね。同じ1年生なのに凄いわ。魔法薬でも負けてしまうなんて、ちよつとショックね。そうそう、さっきのネビルの失敗だけど、多分ヤマアラシの針を入れるタイミングが原因よね？ 確か安らぎの水薬もヤマアラシの針を使ったはずだけど、タイミングを誤れば同じ事が起きるのかしら。それに——」

「グレンジャー、後にしてくれ。君の後ろに何人も並んでいるんだ」

「あら失礼。けど、私だってスプーン一杯を飲ませる事くらい出来る

わ

「そうか、ならその赤い駄犬よりは役に立つところを見せてくれ。それとダフネ、落ち着いたなら貴公も手伝って……いや、やはりいい。貴公は自身が考えているより不器用だ。飲ませすぎたり、口からこぼしたりしそうだ」

「私がポタージュスープをこぼすだけでも言いたいなの？」

「無きにしも非ず、かな」

「失礼ね。それこそ淑女の尊厳に関わるわ」

長い一週間だった。

自身が重点的に受けるべき授業と、やはりホグワーツの授業は新生生に対する殺意を剥き出しにしていることを理解できた上、25点も獲得したのだ。得たものは大きい。

ダフネは失った淑女の尊厳を取り戻す為、魔法薬学に力を注ぐ決意を固めていた。その意志に敬意を払い、スープを飲む時に凝視するのは止めてあげようと思った。女たるもの、努力とは白鳥の様に。必死などころを見せてはならないのだ。

初週を生き残ったせいか、どの新入生も緊張の色が薄くなってきた。特に、非魔法族生まれの者にその傾向が大きい。生まれによって淘汰される事は無く、死は等しく手を抜いた者に降り注ぐという事が分かったのだろう。

馬鹿と蔑まれるハツフルパフ生ですら蔑むロングボトムだが、高名な闇祓いの息子で、純血という事だった。確かにロングボトムの名は聞き覚えがあるが、そのロングボトムがこのロングボトムだとは思えない。

この事実は大多数の魔法族生まれに衝撃を与えた。血こそが能力の源であり、マグルやマグル生まれよりも魔法族は生物的に優勢種であると、心の底で考えている人間だ。それは決して少ない数ではない。自分に出来る事が出来ない人間を劣っていると、子どもの純粋な感性が訴える。

彼らの理屈が正しいのであれば、ロングボトムは非常に優秀なはずだが、奇跡の人（ハツフルパフ生曰く、入学出来たことが奇跡の意）ロングボトムはどの分野でも逆方向に非凡な才能を見せた。

この都合の悪い事実に対し、レイブンクローが提唱した仮説がある。

「ロングボトムは蛇寮から獅子寮へ送られた工作員である。だから穴熊寮ではないのだ」

という説だった。

荒唐無稽に思えたが、スリザリンを憎悪する者からすれば「スリザリンならやりかねない」であろうし、ロングボトムは「グリフィンドールらしくない」生徒であり、「ハツフルパフではない」という事実は、誰の心にも消すことができない霧を生み出したのだった。

先日の生体腐食事件も、本人は多少の出来物が出来た程度で、その周囲にいた獅子寮の生徒の方が大きな被害を受けた事もその言説に合致した。いわば彼は自爆テロリストだった。

レイブンクローがグリフィンドールの内部不和を生み出す為のプ

ロパガンダだと、おそらく真実であろう反論をする者もいた。だが、それまで「寄るな、馬鹿が感染する」とロングボトムを病原体扱いしていたスリザリン生は「ロングボトムは我が英雄、我が誉れ」と歓呼し、そして即座に「自ら犠牲となつて寮に尽くすなんて、グリフィンドールお得意の騎士道精神じゃないか！ 血の裏切り者め！」と掌を返すのだから混沌を極めた。

グレンジャーは冷徹な知能と高慢な慈悲によつてロングボトムを更生させようとした。

「ネビル、あなたがからかわれるのは、あなたがちゃんとしてないからよ。分からないことがあるばなんでも言つて。しっかりと教えてあげるから」

それがかえつて惨めな少年の僅かばかりの自尊心を蝕んでいることは分からない様だった。憐れ、彼女に人の心は分からない。魔法界の常識で言えば有能であるはずの自分が、マグル生まれの異性に一挙一動を漏らさず叱咤される。男子の間であれば、教授への愚痴であったり、あるいは猥談だったりと気を紛らわせることも出来ただろうが、彼女の吐く正論は彼の逃げ場を塞ぎ、処刑台に追い立てるのだった。

彼の困り果てた力のない笑顔を、映画で見た覚えがある。何だったかと思えば、レイブンクローの上級生が放った「微笑みデブ」の言葉で思い出した。

当然、二週目も同様の惨劇が生まれるだろうが、先週より酷いことになりそうだった。

「この時を待つてたんだ。一年生は自分の箒を持ち込んでならぬ。一年生はクイディッチの代表選手になる資格がない。全く、無能なマグル生まれの為にどれだけ僕たちが我慢させられてるんだ？ なあテオ」

「そう言うなよ、ドラコ。我らが親愛なるロングボトム君が、ホグワーツは純血にも優しいってことを知らしめてくれるさ」

木曜日の朝食。大広間に集う一年生は皆一様に飛行術の話をして

いた。非魔法族は不安から、魔法族は期待から興奮し、マルフォイはいつにも増して自慢話を盛るのだった。彼の話はいつもヘリコプターを危うく躲したところで終わるが、今度はそれを追跡し、追い抜いたということになっていた。

彼の家柄であれば、敢えて魔法界の秘匿を破る事などしないだろう。とすれば、彼の話に嘘があるか、彼は接近してくるヘリコプターを認識できない程に飛行が下手なのだろう。

「君はどうなんだい、マリア」

「気安く女子の名前を呼ぶものじゃないぞ、マルフォイ。で、何がどう、なんだ」

「何って、箒に決まってるじゃないか。君の兄君も姉君も代表選手だろう」

お兄様とお姉様はチエイサーである。自分自身はそこまで興味がないが、お兄様は来年度が最高学年となるので、その1年だけはチームに加わりたいと思っている。自分に才能があるのかどうかは分からないが、人並み程度には乗れるだろう。高低差が尋常ではないヤナムでは、飛行術は非魔法族の自転車と同じ程度に必須の技術である。

「さてね。精々恥をかかない様にと祈るばかりさ。ああ心配だ」

「やっぱり魔法族でも出来る子と出来ない子がいるのね。ああ良かった」

「グレンジャー、アンタのカレシは出来ない子よ」

どこから湧いて出てきたグレンジャー。パーキンソンは野良犬を追い払う様な仕草をした。

「ネビルはそんなじゃないわ」

「じゃあ何？ アンタの子？ マグルから生まれたのなら、あの無能さも納得ね」

「勝手に言ってるといいわ。それでマリア、何かコツとかないの？」

飛行術に関する本は図書館で片っ端から読んだけど、どれも箒が身近にあるってことを前提にしているから、より上手く飛ぶコツばかり紹介していて、何の役にも立たないわ。魔法界ってやっぱり教育制度が

稚拙だと思わ。だから倫理や社会性が欠如しているのね」

「それこそご勝手に、よ。所詮、アンタは魔力を持ったマグルでしかないもの。魔女じゃないわ」

「そう、そのマグルに一つでも試験の成績が勝てるといいわね」

パーキンソンの言うことは純血主義狂信者のそれであり、スリザリオン生の中には顔を顰める者もいた。スリザリンに入寮したからと言って皆が純血でもなく、むしろ両親が非魔法族であるという者もいる。他寮にとっては意外に思われるだろうが、彼らの序列は最下層ではない。純血が尊ばれることは間違いないが、純血でないことによつて蔑まれることはない。聖血とまで称される純血はたった28の一族であり、それ以外の者が圧倒的に多いのだから、そこで純血以外を排除しようという考えは現実的ではない。何より、組分け帽子がスリザリンに選んだという事実は、血は異なれども同じ性質を持つ者として、少なからず連帯感を生んでいた。スリザリンの最下層とは、蛇寮、即ち家族を裏切る者であり、裏切りとは他寮に敗北することである。純血が最も尊ばれるという風潮はあるが、純血がそれに違わず優秀であることも事実だった。

「感覚というものは教える、教わるといふものじゃないだろう。君が誇る変身術の様にね」

「マリア、まだ燐寸棒を針に出来ないの？ マクゴナガル先生が言つてたじゃない。具体的なイメージが大切だって」

しばらくは獣血の丸薬を飲むことがないだろう。今のグレンジャーの言葉を思い出すだけで、獣性が高まる。

「マリア、抑えて。ステイ、マリア。ステイ、よ」

「そうかダフネ、スープを満足に飲むことも出来ない貴公は変身術が出来ない私を人以下の犬畜生だと思つていてというわけか。そうかそうか。姉上に言いつけるからな」

「グレンジャー、ハウス。私に飛び火させないで」

「生憎と私は可愛らしい子犬じゃないわ。私を帰らせたいなら飛行術のコツを教える事ね」

「なんなのコイツ？ 狂犬病じゃないの……？」

「狂犬病？ 魔法界にもそんな医学知識があつたなんて新しい発見だわ。魔法界には細菌やウイルスなんて概念がなくて、病気は全て呪いで起きると思ってるんだと考えていたけど。ちなみに目の前のものへの攻撃性は犬にしか起きない症状で、ヒトが感染した場合は水を恐れる様になるわ」

「いいからもう帰りなさいよ」

幸いなことに、忌まわしい時間はそう長く続かなかつた。

フクロウ達が手紙や荷物を運んできたので、グレンジャーもグリフィンドールのテールブルに戻っていった。ここで手紙を開けば、たちまちブルストロードあたりに取り上げられ、音読されただろう。ブルストロードは大抵の男子よりも長身だった。後数年すれば男子の成長期がやってきて、追い越されるだろうが。

「思い出し玉だ！」

ロングボトムが叫んでいた。見れば、手に小さな水晶玉を持っていた。

「何か忘れてると、この玉が教えてくれるんだ。見てごらん。こういう風にぎゅっと握るんだよ。もし赤くなったら……あれれ」

「なあネビル、その玉が思い出し玉って知ってるんだよな？ その玉

は前から持ってたのか？」

「うん、そうだよ。ばあちゃんは僕が忘れっぽいことを知っているから……」

「多分、その玉を家に忘れたことを忘れてるんじゃないか」

「……うん、そうだったみたい」

一度赤い煙が立ち込めた水晶玉だったが、白色に戻った。

「へえ、面白い物を持つてるじゃないか。忘れたことだけを教えて、忘れた物は教えてくれないっていうのか。実に馬鹿らしい」

馬鹿らしいのはいちいち絡みに行くマルフォイもそうだろう。

ポッターとウィーズリーは大きく音を立てて立ち上がった。それに応じるこの2人も馬鹿らしい。

「何だマルフォイ。パパにねだって買ってもらったらどうだ」

「残念だなあ。僕の家の様に、格式ある家ではこういうおもちゃは買ってもらえないんだ。まあ、ウィーズリーの家じゃ、娯楽に費やす金はないんだろうけど」

ウィーズリーの髪と顔が同じ色になった。ポッターはマルフォイの鼻を殴るか顎を殴るか見定めている様だった。

「おお、言ってくれるじゃないか、マルフォイ坊ちゃん」

彼らの後ろから、双子の赤毛が現れた。まるで台本を用意しているかの様に、全く同じ台詞を吐く。彼らはグリフィンドールのビーターで、お姉様が仰るには、連携攻撃に優れ、翻弄されるということだった。双子の容姿を利用して、自らの位置を偽装し、相手を混乱させるとも。

「いやいや、落ち着いてくれよ。別に喧嘩にしやしやり出てくるつもりはないんだ」

「義兄としてはね」

「どういうことだよフレッド！」

「聞いてくれよジョージ！ どうやら僕らのロニーはモテ期が来てるらしいんだ！」

「何だってフレッド！ 俺たちだってフレンドがいないんだぜ！」

「悲しい事実はさておいて、僕らの妹、ロニーはスリザリンのマルフォイ坊ちゃんから懸想されているらしいんだ！」

「わあーお！ なんてこった！ 僕らの可愛い妹に!? でも残念だな、グリフィンドールとスリザリンじゃ、障害は大きいぞ！」

「障害が大きいからこそ、愛は深まるってもんだぜ！ ああ、ロニー、ロニー、どうして貴女はグリフィンドールなんだ!? ってね」

「そうか、だからこうして事あるごとにグリフィンドールに近づいてくるってわけか！ 健気じゃないか！ ロニー、投げキッスの一つでもくれてやれよ！」

「焦らせる女の方がセクシーだぜ」

「さて、ドラコ坊ちゃん、どっちがフレッドでどっちがジョージでしょうか」

余りの勢いに面食らっていたマルフォイは、漸く自分に対する侮蔑

を理解した様だった。病的に青白い表情は今やウィーズリー兄弟の髪よりも赤く染まっていた。グリフィンドールの男子生徒は指笛を吹き鳴らし、女子生徒は黄色い声を上げていた。

「……僕を同性愛者だと言うのか！ 血を裏切った血族が！」

「どうかしたのですか」

冷徹。その声を評すなら、その一言だった。一瞬でグリフィンドールの生徒達は静まり返り、紳士淑女の清々しい朝食風景を作り上げた。それは魔法のようで、人形たちが変身術をかけられた様に思えた。「……ロングボトムが思い出し玉を見せびらかしていたので、見てあげようかと」

「そうですか。気は済みましたか」

「はい」

「ならば食事に戻りなさい」

マクゴナガル教授は為政者ではなく、処刑者だった。

「さすが寮監！ 愛してるぜ！」

「でしたら、変身術の授業も愛して欲しいものですね」

良く晴れた日だ。時折吹く穏やかな風が、遠くに見える禁じられた森の木々を揺らした。それは波の様に一体となり、森そのものが一つの生き物の様にも思えた。

こんな日は、サンドウィッチでもかじって小腹を埋め、温かな日光を背中に浴び、可憐な花に集く蝶を愛でながら、狙撃の練習をしたくなる。ヤーナム聖杯に昼はなく、その他の聖杯はそもそも地下遺跡なのだから、日の光がある時はそれを満喫したい。

そんなことをぼんやりと考えていると、フーチ先生がやってきた。

「遅いー」

グリフィンドールの生徒達は、我が寮よりも大分遅れてやってきた。蛇寮は大半の生徒が魔法族生まれであり、日常的に箒に乗っているのだから憶するものがない。一方で、獅子寮の生徒はそうでないのだから、服装の支度をするにしても、心の支度をするにしても時間がかかるのだろう。スカートで飛行するという破廉恥な事をしたいの

であれば別となるが。

「さっさと箒の傍に立ちなさい！」

フーチ先生ではない、フーチ教官が言った。

「右手を箒の上にかざし、上がれと言いなさい。そうすれば、自ずと箒が掌に飛び込んできます」

生徒は一齐に上がれと言った。そんなことをせずとも、身をかがめ、拾えばいいだけの事だが、これもまた箒を乗りこなすための儀式の一環なのだろう。普段の女子組は「上がってごらんなさい」だの「上がって頂戴」だのと気取った言い方をするのかと思えば、上がれとだけで、期待外れだった。

「お嬢様は箒になんて乗らないのかと思っていたよ」

「スプーンを持つよりは上手いと思うわ」

「貴公、いい加減にしたまえよ」

「絶対に忘れないからね」

「恨むならロングボトムを恨むことだ。アレの凶行で貴公が醜態を晒すことになったのだから」

「醜態って言ったわね？」

「撤回しよう。痴態だ」

箒で尻をはたかれてしまった。

未だ箒を痙攣させるに留まっているロングボトムを待っている間、男子生徒は早く飛びたいと跨っていた。途中でグレンジャーが泣きついてきたので、仕方なしに教えてやった。

「貴公はいちいち包丁を握る度に、「握る！」などと叫んで握るのか？ それをいちいち意識することもないだろう？ それと同じことだ。上がるかどうか等、そもそも意識することがおかしい。包丁は切るためのもので、箒は浮かび、飛ぶものだ。物事の本質を見れば、自ずと結果はついてくる。」

教官の言ったとおりだよ。自ずと箒が掌に飛び込んでくる——そうだ」

箒を上げたグレンジャーはキスでもしてきそうな勢いで喜んだが、ひとしきり喜んだあとで、「飛行術でも負けたわね」と狂犬病を再発さ

せた。

次に教官は箒の跨り方、握り方を示した。大きく変わることはないが、家で乗っている箒と製造元が異なれば、若干のズレが生じる。また、飛行術専門の家庭教師を雇う家等あるはずもないのだから、それぞれにとつての体得した正しい乗り方というものは異なる。教官はそれを許さず、全ての生徒に誤りを指摘した。マルフォイもまた教官に指摘され、それをポッターとウィーズリーは嘲笑っていたが、それで飛行出来るのであれば問題はあまい。マルフォイも同様に考えているらしく、教官が離れた途端に、慣れた握り方に変えていた。

「しかし酷い物だなこれは」

「そうね。見てこれ。全て右によれてるわ。多分、ぶつかった後にしつかりと整備しなかつたんでしょね」

「こつちは柄がぐらついている。こんなもので速度を出せば空中分解するだろうな」

「ちよつと脅かすのはやめてよ」

「残念なことに私たちも怖いんだ。よくも男子はこんな箒で楽しそうに騒げるものだ。ロングボトムがスリザリンの回し者なら、あれらもグリフィンボールの回し者なのではないか？」

「グレンジャー、マリアの言う通り、冗談で言っているわけじゃないの。整備不良の箒に説明不足の教師。またロングボトムがやらかすわ」

ダフネの予言通り、ロングボトムは勝手に飛び上がり、勝手に加速し、勝手に落下した。行為の主体がロングボトムなのか、箒なのかは分からないが、生徒達の眼前で手首を折ったことは、言うまでもなく生徒全員に飛行の恐怖を与えた。

「これで箒に正しく乗ることの重要性が分かったでしょう。ロングボトムを医務室に連れていきます。それまで、地に足を着けている様に」

箒に正しく乗っているか否かが原因とは思えなかったが、生徒は一樣に壊れた人形のように首を上下させていた。それに従わなければ次は飛行中に叩き落されるだろう。

そもそも、この程度の事故は予想されて然るべきであるし、事実そうだったのだろう。我らの持つ箒の至る所に激しい衝突痕や擦過痕があった。それでいて、フーチ教官はロングボトムが墜落するまで、戻ってこいと罵倒するばかりで、何ら対処をしなかったのだ。ホグワーツの淘汰圧はこんなところにも及んでいた。

その様な恐ろしい現実を目の当たりにして、哄笑するマルフォイには狂気を感じた。

「やめなさいよ、マルフォイ」

「へえ、グレンジャーだけじゃなくて、パチルもあいつに気があるってわけ。流石我らのロングボトム。浸透工作は完璧ね」

パーキンソンとパーバティがにらみ合っていると、マルフォイは草陰にかがみこみ、何かを拾い上げた。その手に握られていたのは、ロングボトムの思い出し玉だった。

「ロングボトムのバカ玉だ。いくら何でも、奴は骨折の痛みを忘れなだらうな。おっと、どうやら僕も何かを忘れているらしい。なんだらうな、奴の惨めな泣き顔かな。もったいない、むこう一年はあれで愉快にさせてもらえと思ったのに」

バカ玉呼ばわりしておいて、いざ自分が握ると赤い煙が出始めたのだから、マルフォイも馬鹿なのだろう。女性の方が精神の発達は早いと言うが、同年代の男子とはここまで馬鹿なものだろうかと呆れる。隣のダフネは完全に興味が失せていて、可哀想な箒の枝を整えている最中だった。

「それを返せ、マルフォイ」

「ああ返すさ。君ではなく、ロングボトムにね」

マルフォイは箒に飛び乗り、我らの上空を旋回した。

「どうするつもりだ！ マルフォイ！」

「我らがロングボトム、彼の練習に付き合っただけよと思っただけよ。どこか高いところに置けば、頑張っただけよを覚えるだろうか？ 半年もすればきつと取り戻せるさ。もっとも、奴はこれを失くしてしまっただことさえ忘れてしまうかもしれないけどな！」

「やめろマルフォイ！」

「嫌だね。僕は善意でやっているんだ。君の自己満足な正義感を振りかざすなよ。やめてほしければ、ここまで上がってくるんだな」

「ああそうしてやるさ！ お前の手首を折り取って、ネビルの前に飾ってやるよ！」

ポッターは自殺願望でもあるのだろうか、箒の柄を握った。マルフォイの自慢話は誇張されていただけで、概ねは事実に基づくものだった。整備不良の箒を危なげなく乗りこなしている。

「ダメ、ハリー！ フーチ先生が仰ったでしょう。動くなつて。あなたの規則違反が寮全体にとって迷惑なの。マルフォイがどこにあれば置いたつて、先生に言えば取り戻してくれるし、マルフォイが罰を受けるだけよ。マルフォイの言う通り、あなたの自己満足を振りかざさないで」

グレンジャーが飛び出し、ポッターに叫んだが、ポッターは無視し、獅子寮生はグレンジャーを軽蔑の眼差しで見た。だが、確かにグレンジャーの言う通りだ。ポッターが英雄気取りでマルフォイに突貫したところで、無様を晒すだけだろう。仮に、ポッターが上手くやれたとしても、得られるものは彼の自己満足でしかなく、教師に任せただ方がいい。

それでも、ただ一つ、得られるとすれば、それは誇りだ。たとえ無様を晒したとしても、賢しらに振る舞ったところでは得られないものだ。

夜明けを迎えた狩人は、誇りを失わないからこそ、獣に身をやつすことがなかった。いかな絶望にさえ、歩みを止めず、神という名の上位者に祈ることがなかった。ルドウィークが己の導きを狩りの中のみ見出した様に、誇りとは、人が人である為の導きの光なのだ。

マルフォイもまた、誇りを持つ。純血の家に生まれ、成功を約束させられている。幼稚な性格から甘やかされて育っている様にも思えるが、彼の学業成績は優秀な部類に入っており、修練の形跡が見られる。故に、自らの導きである魔法使いの血、その誇りを穢すロングボトムは無能さに怒りを覚えたのだろう。彼にとってポッターの物言いは、まさしく己の正義感を満たすためだけと感じられただろう。事

実、そうなのだから。

「行くぞマルフォイ！ 箒から叩き落としてやる！」

ポッターは地面を強く蹴り、宙に上がる。少し地面を離れたところで急上昇し、マルフォイの居る高度まで上がったところでループし、マルフォイに向き合った。箒に乗ったことはないだろうに、歪ながらも十分な機動だった。

何事かを言い合い、ポッターはマルフォイに肉薄する。マルフォイはロールして躲したが、ポッターは急激なヨーイングで追撃態勢に入っていた。ウィーズリーが大声で解説し、獅子寮の連中は拍手までしている。マルフォイにせよ、ポッターにせよ、整備不良の箒でこの様な機動を行うとは、死にたいとしか思えない。それでいて、やはり惹きつけるものはあった。

「ああっ！ あの野郎！」

マルフォイが思い出し玉を放り投げた。不安定な箒の上とは思えない綺麗な姿勢で放られたそれは、9月の蒼く高い空に、僅かな煌めきを残して曖昧となっていく。結果として、思い出し玉を失うこととなったが、マルフォイの敗北で、ポッターの勝利だ。マルフォイは建前上ロングボトムのために思い出し玉を奪ったのだから、それを放り投げたということは、自ら敗北を選んだのだ。ドラコお坊ちやまの矜持はこの程度か。

思い出し玉を目で追うのを止め、宙の2人を見上げると、ポッターが前傾姿勢をとっていた。

「追う気か？」

確かに、ポッターの腕は並みどころか才能ある部類だが、いかに才能溢れた者として、道具が無ければ何にもならないのだ。素手で獣を狩ることは出来ない様に。

だが、ポッターは玉を追わなかった。地表に向かって飛んでいく。遂に制御が利かなくなると観衆が悲鳴を上げた。そこでようやく、ポッターの思惑に気づいた。玉の軌跡を追うのではなく、玉の終着点のみに狙いを定めて飛行している。そして、獲った。

爆発の様な歓声を受け、ポッターは思い出し玉を掲げた。それは陽

光を受けて輝き、そして赤い靄が生まれた。

「えっ」

なんともしまらないものだ。

「ハリー・ポッター！」

その声は明らかに冷静を欠き、普段よりも高くなっていた。声の主は、聖職者の獣、マクゴナガル教授。

「なんとということ……首の骨を折ってもおかしくなかったのですよ……？　こんな事はホグワーツ史上でも……」

どうやらポッターの首の骨が折れる事を期待していたらしい。獅子寮の生徒は彼を擁護したが、マクゴナガル教授は一顧だにしなかった。憐れ、ポッターは恐怖に震えながら、マクゴナガル教授に連行されていった。

「見たか、あの小鹿の様なポッターを。残念だなグリフィンドール諸君。君らのポッターは学校をお辞めになるそうぞぞ」

「マルフォイ、黙れよ。お前は無様な敗北者だろ」

ウィーズリーが勝ち誇つて言った。ウィーズリーが何かをしたわけでもないのだが。

「敗北者？　取り消せよ、今の言葉！」

「絶対に取り消すもんか！　だつてそうだろう？　ハリーは初めて箒に乗ったのに、お前を追い詰めて、あのサイコーにクールなダイビングキャッチを魅せてくれたんだ。

それに比べてお前はどうか？　普段から自慢している割には、ハリーが怖いからつて、思い出し玉を投げたじゃないか！　ハリーから逃げたんだろう？　とんだ腰抜け野郎じゃないか！　自慢がしたいならパパとママに聞いてもらうんだな！　もうお前みたいな敗北者の自慢なんて、ホグワーツじゃ誰も聞いてくれないぞ！」

マルフォイは顔を紅潮させ、下男たちに目配せした。

「止せ」

「なんだマリア！　君まで僕を馬鹿にするのか！」

「私をファーストネームで呼ぶな。見ろ、教官が戻ってくるぞ」

フーチ教官は一同を見回し、皆が地に足を着けていることを確認し

た。

獅子寮は英雄であるはずのポッターが受ける仕打ちを想像して震えており、蛇寮はマルフォイの傷を抉ろうと思う程、子供じみてはいなかった。

「ハリーが退学となつても当然よ。言い付けを守らなかつたんだから」

グレンジャーは獅子寮の輪に戻らず、ダフネに話しかけていた。箒の状態について嘆いていた時、ダフネに無視されなかったことは、少なくとも知人程度の関係性を構築したと考えているらしい。こういう事を言っているから自寮で友人が居ないのだろうか、スリザリンであれば友人が出来ると思っているのだろうか。

「さあ。でも、マクゴナガル教授は彼を罰する様な雰囲気じゃなかつたと思うけど」

「だったら連れて行ったりしないわよ。その場で減点を言い渡してお終いでしょ。ああ、減点されなくて良かった。それにしても、どうしても減点されなかつたのかしら」

「貴女に人の心はないの？」

「同じ寮になつただけの他人だもの。彼は私が変身術の授業で獲得した点よりも多く減点されてるのよ。可哀想だけど、自業自得だわ」

人の心はないらしい。

「しかし、確かに妙だ。ポッターを連れて行つたのなら、事の次第を見ているのだろうか？ 何故マルフォイも連れていかない？」

「うん。気になるよね。もしかしたら、マルフォイ家は教授も手が出せないんじゃないかな」

「いや、それこそ、ポッターだろう。彼を退学させてみる。英国魔法界がホグワーツを消し飛ばすぞ」

「きつとスネイプ先生に伝えるわ。ハリーだけを連れて行つたのは、私の寮監がそれだけ公平ってことね。信賞必罰よ」

グレンジャーの言葉には、確信というよりも願望の色があった。

青い秘薬

毎晩の日課には、鍛錬ともう一つがある。校内の踏査だ。ビルゲンワースの源流たるホグワーツ。未だ続いているらしい上位者の研究を打ち破る為には、こうした地道なことから始めなくてはならない。

日中、校内で灯りを発見したとしても、即座に使者と契約を交わすわけにはいかない。灯りは狩人以外には見ることが出来ない。学友が頻繁に何も無いところで屈んでいれば、心か腹を病んでいる様に思うだろう。その為、夜間にしか寮を抜け出せない、ということだ。

学則では、天文学の授業を除き、夜間外出は認められていない。風紀を守る為とのことだが、悪戯と称した学閥抗争で呪いをかけあうこの学び舎で何の風紀があろうか。

男子生徒は反骨精神、あるいは助平心によって夜間外出に怪しげな期待をしていたが、幼稚なことだ。女子生徒の躰を舐める視線に気づかないとでも思っているのだろうか。

上級生女子の中には、それが分かかっていて態ときわどい姿勢を取る者もいた。尼僧の如き副校長には汚物を見る目を向けられていたが。

副校長と修道服の組み合わせを想像すると、この上なく似合った。ハツフルパフの亡霊、太った修道士がそうである様に、宗教者と魔法とは必ずしも相反するものではない。信仰の為した奇蹟は、真であるのか、魔法であるのか。病人の為に癒しを施せば、たちまちに異端として磔にされる時代があったのだ。教会に身を置き、信仰に因る奇蹟としてそれを施した方が、都合が良い。

ダフネが寝静まるのを見て、青い秘薬を飲み干す。上位者の血から精製される秘薬は、上位者に身を近づける薬効を持つ。故に、精神と肉体が分かれたれ、尋常な者であれば麻痺を起こす。しかし、狩人であれば、脳ではなくその血に宿る意思を以つてその不浄の肉を動かすことが出来る。

上位者ともいえず人とも言えぬ肉。曖昧とは、秘匿である。隠し街ヤハグルが如く、現世と常世の狭間にあるヤーナムが魔法使いからも秘匿されていることと同じ様に。ヒトに近しき上位者の落とし子ア

メンドーズは、蒙を啓かねば見ることが出来ず、しかし、確かにそこにいることと同じ様に。

赤い月が現出し、悪夢と一体となって初めて姿なきオドンが女を孕ませたことから分かるが、上位者は常世にのみ存在する。アメンドーズは曖昧であるからこそ、常世と現世を繋ぐ階となつているのだろう。メンシスの悪夢たる教室棟へも、狩人の悪夢へも、アメンドーズの導きによって辿り着いたのだ。尤も、では常世の存在であるはずのゴースは何故ビルゲンワースに狩られたのか、という疑問が生じるが、父王の原初の記憶から数十年も昔の事、その答えを記した記録はない。

探索自体はそこまで難しいものではない。罨や隠し道の前には遙かな先輩の狩人達が遺した手記がある。ボーン家以外にも狩人はいるが、家格がどうこうと言って、恭しく接してくる。お兄様に敬意を払うならばともかく、下級生にまでその様な態度は止めて欲しい。ここは地獄の学び舎であり、同じ狩人であれば、上下関係などない。諸共に死ぬべき関係であるべきだ。

周りがこういう環境であつたからこそ、血に拘らないグレンジャーと、血に臆さないダフネには感謝している。どちらも偶に小馬鹿にした態度を取ることはいただけないが。

本日は城の東側に向かう。4階廊下が禁忌とされている為、後回しにしていた。

狩人の掟として、未知の土地には独りで行かなくてはならないというものがある。先達と共に行けば必ず、どこかに油断が生じるからだ。狩人の共闘とは、依存ではなく共存でなければならぬ。足手纏いを連れて狩りをする 것도、寄生して狩りをする 것도、双方の死を招く。鍛錬の為といった精神論ではなく、合理性に基づいた掟だ。いかな上位者の血を持つボーン家でさえ、殺されれば死ぬのだ。血を流すものは皆傷付ければ死ぬ。殺せぬ道理などない。

外に通じる隠し道は多い。それもそのはずで、攻め入られた時に退路と敵の進入路が同一であれば、畢竟死ぬことになるのだから、隠された退路を用意しておくことは当然である。魔法界が非魔法族に秘

匿され、外敵がいなくなった今でもこの様な魔境なのだ。築城当時の苛烈さは想像もつかない。赤蜘蛛がエントランスに犇めいていたのだろうか。あるいはあの忌まわしき裸体の巨人が転がり回っていたのだろうか。狩猟犬と人喰い豚が跋扈する、あの聖杯の庭園が再現されていたのだろうか。考えるだに恐ろしい。

しばらくして、上階で何かの割れる音がした。他にも校内を徘徊している人間がいるらしい。この騒ぎを聞きつけ、教師や監督生らが大声してくるだろう。青い秘薬は完全に秘匿するものではなく、足音や衣擦れを消すわけでもない為、注意深く見る者には気付かれる。また、仮に見つからなかったとしても、寮内で点呼を取られれば、外出していることはすぐに露呈するだろう。今晚はここまでか。

最寄りの灯りから一度ヤーナムに戻り、それから自室に移動した。幸い、睡眠の深いダフネは騒ぎが聞こえなかったのか、落ち着いた寝息を立てたままだった。ダフネは整然とした寝姿であり、周りに花を敷き詰めれば、永久の眠りにについている様である。そのくせ、目が覚めた直後は非常に機嫌が悪く、無理に起こせば、見る者を凍り付かせる邪眼が開く。夫となる者は覚悟せよ。

翌朝。朝食のテーブルには普段にいや増してまとまりのない髪の毛のグレンジャーが現れた。最早獅子寮で食べる事すら許されない程嫌われているのだろうか。憐れなことだ。

グレンジャーと敵対と言える程嫌い合っているパーキンソンはマルフォイの傍に侍っている。ブルストロードもまた同様だ。どうやら、昨晚の騒ぎはポッター達がやった事で、マルフォイはポッター達を嵌めたらしい。確かにマルフォイは夕食の時間、ポッターとウィーズリーに絡みに行っていた。いつものことであるから大して気にもしなかったが、気にしたところでもくだらない理由だろう。

ダフネはもう諦めたとばかりに、グレンジャーに席を勧めた。

「ねえマリア、ダフネ」

「おはよう、グレンジャー」

「ああ、そうね。おはよう。それでね、ちよつと訊きたい事があるんだ

けど」

「食事中だ」

「見れば分かるわ」

「朝食とは英国で最も美味しい食事の時間だ。食べ終わってからにしてくれないか」

「あら、マリアはお菓子だけ食べているのかと思っただけど」

「数ある中で最も優れているからこそ、価値が生まれる。そうだろう？ 生徒が1人だけの授業で最高得点を獲ることになるのの意味がある」

「グレンジャー、貴女もまだ食べてないでしょ。羊皮紙を食べられるって言うなら好きにすればいいけど」

「そうね、じゃあバケットを取って」

フクロウが飛び交う中、朝食を終え、ミルクティーを注いだ。

「それで？」

「マリアは魔法動物にも詳しいの？」

「ある程度の事であればな。専門は獣であつて、動物ではない。その道の人間には劣るだろうな。例えば、ドラゴンテイマーであれば、ドラゴンの鳴き声を聞いただけで品種や産地が分かるらしいが、私にはできない」

「じゃあ、3つ首の犬って何か分かる？」

「ケルベロス」

声が重なる。この程度であれば、特に狩人や魔法動物学者でなくとも分かる。グレンジャーが分からなかったのは、単純に魔法族生まれではないからだろう。

「ダフネも分かるの？」

「幻の動物ではないし、ギリシア辺りにブリーダーがいるから。けど、突然どうしたの？ 強盗でもするつもり？」

「強盗？」

グレンジャーが眉を顰める。

「ケルベロスは番犬だ。双頭の犬をオルトロスという。どちらも蛇のたてがみを持ち、1頭ずつ交代で眠る為に、不眠不休で大切なものを

守る」

「そう。だから、あんまり普及はしていないけれど、強盗対策に使われるかな」

「どうして普及しなかったのかしら」

「餌代かかるから。防犯だったら、魔法をかけた金庫にでも入れればいいし、大切なものが犬臭くなったら嫌でしょ。その、トイレの処理だってあるし」

「それに、調教が不十分な個体は飼い主すら攻撃するからな。稀に手に負えないからと魔法省から駆除依頼がかかることがあるな」

「駆除？」

「ああ。どこにでもいるものだ。好奇心で飼ってみた方がいいが、育てきれなくなつて野生化させる素人が。非魔法族もそうだろう？ 淡水サメやワニがゴルフ場や下水道で発見されるだろう」

扱いきれないというのであれば、ロングボトムの蛙もそうだろう。せめて自身で殺処分することが飼い主の責務だろうが、あれにその様な責任感も覚悟も見受けられない。同じ事を考えたらしく、グレンジャーは苦い顔をしていた。

呪文

敗北者、ドラコ・マルフォイ。

彼とポッターの飛行術での一幕は、ポッターに特例となる1年生クイディッチ寮代表選手への道を与え、最新型の箒を与え、一年生中の羨望を与えた。翻って、敗者に与えられるものはない。実に空虚だ。

上級生から聞いたところでは、グリフィンドールは昨年度卒業したシーカーの後任選手を用意できず、今年度は対抗試合棄権かと囁かれていた。お兄様に伺うと、グリフィンドールチームのキャプテン、ウッドがそれを許さなかっただろうと言う。シーカー不在で勝つためには、相手より常に160点優位に居なければならぬ。その為、チェイサーにはパス回しではなく各個で迅速に妨害を抜く練習をさせ、ビーターの双子兄弟はシーカーのみを撃ち落とす練習をさせていたという。

いずれにしても、勝機をみすみす潰したのだ。マルフォイは戦犯として後ろ指を差される立場にあった。

「やあ、マルフォイ。ハリーを選手にしてくれてありがとう。来週からのクイディッチシーズンが楽しみだよ」

「ハッ。栄光あるスリザリンには、拾い物の勝利なんて似合わない。相手と対等の立場になって、それを屈服させてこそ、栄光のある勝利なんだ。知っているか？ ライオンは狩りをせず、他の動物が倒した獲物を横取りする、浅ましい動物だ。そんな君らからしてみれば、どんな勝利でもありがたんだらうね」

「お前が選手でもないのに、何が勝負なんだい？ それに、お前はハリーがグリフィンドールに入ったら、スリザリンと対等だって、そう考えるって事かい？」

「そうか、ハリーの実力を認めたんだけ。そうだろうなあ、実力の無い奴に、『君が』負けるはずはないよなあ？」

マルフォイがやり込められてから、ウィーズリーとポッターがマルフォイに絡みに行くことが多くなった。攻守逆転だとレイブンク

ロー女子がやかましい。パーキンソンはマルフォイを汚らわしい目で見るなど以前よりマルフォイに付きつ切りとなったが、それを獅子寮共は「マルフォイは女子に守ってもらってる腰抜け野郎だ」「あいつは雌だろ。芋引いたらもう男じゃねえよ」と揶揄う。マルフォイはパーキンソンに八つ当たりこそしなかつたが、同じ様な事があれば引き留める様、ブルストロードに頼んでいた。

この様子では、来年マルフォイもシーカーになるだろう。あれから幾度かあった飛行術の授業では、むしろマルフォイの方が上手いと思える場面があった。単純に経験年数に因るものだろうが、それはそれで一つの武器だ。どの様な手段であれ、どの様な理由であれ、優るといふことは素晴らしいことだ。ただ、ポッターはこれから実戦経験を積んでいく。いかにマルフォイが長期休暇の全てを飛行術に費やしたとして、それは覆せない経験差だ。演習と実戦は異なる。理屈を捏ね、戦術を練ったとして、その通りに身体が動くわけではない事は、狩りの中で痛感する。

一方でポッターの武器は、才能と集中の爆発力の様だった。普段の飛行術に於いて、目を見張るものはない。

ポッターは勉強同様、地道な努力や単純な反復には全く適性が無い様だった。スネイプ教授からの嫌味には耐え続けており、忍耐は知っている様だが、グレンジャーに教えを乞うといった向上心は無い。忍耐と言うよりは諦観と受容と言うべきか。虐待でもされていたのだろうか。ふと頭をよぎるが、英雄ハリー・ポッターが虐待児童とは何の冗談かと馬鹿々々しくなる。非魔法族の下で育ったのも、魔法によつて両親を失った事に対する配慮だろう。両親を失い、預けられた先は家庭内暴力が吹き荒れていると言うのか。それを許さない程度の倫理観はこの混沌とした魔法界に存在するはずだ。

入学してから1ヶ月と少しが経ち、校内はハロウィン一色となった。

ますます勉強に没頭する様になっていたグレンジャーも、今日ばかりはご機嫌な様子で朝食を摂っていた。流石にスリザリンのテーブルで食事をしたのは、ケルベロスの事を聞いてきた日だけだった。そ

れだけケルベロスが彼女にとって何か重要なものらしいが、それ以降何も聞いてこなかったので、興味を無くしたか自分で調べたのだろうか。

ポッターが罰則を受けず、代表選手となり、あまつさえ副校長から私的なプレゼントを受けたことは、彼女の信仰を大いに汚したらしい。副校長からのプレゼントについては、緘口令が敷かれていた様だが、三馬鹿の言い合いの内にウィーズリーが口を滑らせていた。以来、グレンジャーは模範的な生徒であることを価値観の至上に置いた。

本日の午後の最後の授業は呪文学だ。

簡単な浮遊術の呪文であり、杖が無くとも呪文詠唱が無くとも出来る為、そもそも受ける必要がなかった。獣狩りでは、死体から輸血液や水銀弾を得る時、いちいち屈みこんで物色しては、命が幾つあっても足りない。無意識の内に、物体移動の術は全般的に習得してしまっていた。

必要性は全く分からないが、ペアを組んで練習させられる。ダフネと組めれば良いと思っていたが、フリットウィック教授は「いつもと同じ人では面白くないですからね」と余計な気を回し、マルフォイと組むことになってしまった。マルフォイを嫌っているわけでもなく、幼稚な男子同士のやり取りを馬鹿だと思っているだけなので、別段どうということもないが、パーキンソンが瞳孔の開いた様な目で見てくるのは頂けない。

「ウインガーディウム・レヴィオサー……上手くないかな。どう思う、マ……ポーン」

ファーストネームを呼ぶなど言ったことは覚えていたらしい。

「発音が違うんじゃないか。教授は『レヴィオサー』と言っていた様に思う」

「なるほどね。優等生様は違うな」

「いや、私も詳しくは分からないな。何となく出来るというだけだからな。もし、試験が結果ではなく過程に点数をつけるものとした

ら、悲惨な点数となるだろう」

「随分と謙虚なんだな。あのマグル生まれの出しやばりにもその機微を教えてやるといいさ。それか、いい加減、あいつと付き合うのを止めたらどうだ？ 君も曲がりなりにも純血の誇りはあるんだろう？」「ないぞ。それに、付き合うというよりは、付きまとわれていると言った方が正しいな。別に振り払うつもりもないが」

純血の誇り自体を否定するつもりもない。その誇りを保つ為、努力を続けてきた先人達はあるのだろう。だが、狩人と虫の湧くこの血を誇るという思想とは相容れない。

「そうかい。じゃあ次は君の番だ」

浮け、と言葉で念じるまでもない。見えざる手が自身に生えている感覚で、羽を摘み、中空に持ち上げる。意識したことはなかったが、改めて考えてみると、アメンドーズのそれが1つのモチーフとなっているのかもしれない。

「おお、ボーンさんが一番乗りです！ スリザリンに5点。次に出来た人は4点をあげますからね」

フリットウィック教授が拍手をしてくれたので、会釈して返す。マルフォイは「何の参考にもならないじゃないか」と泣き言を吐いた。視界の端にこちらを睨むグレンジャーをとらえた。

マルフォイが苛々しながら羽を弄んでいるのを横目に、教室全体を見回してみる。ダフネは羽に息を吹きかけていた。何をしているのか。パーキンソンの発音は良さそうだったが、動きがぎこちない。ブルストロードはパーキンソンの逆で、滑らかな動きであるのに発音が悪い。

目立ったのは長身のウィーズリーが叫びながら杖を振り回している姿だった。あれが松明であれば、ヤーナムの獣化した群衆そのものだ。

「ウインガーディアム・レヴィオサ」

「待って ストップ！ 振り回すと危ないわ。それと、発音も間違ってるわよ」

ペアであるらしいグレンジャーがウィーズリーを止めた。

「レヴィオーサーよ。あなたはレヴィオサー」

内容として間違ったことは何一つないが、態度が間違いだろう。

「なら自分でやってみろよ。さあ、さあ!」

ウィーズリーが怒鳴った。この程度のこと、グレンジャーが出来ないはずもないだろうに、頭の憐れなことだ。グレンジャーは返事もせずに、完璧な発音と完璧な動作で羽を高く浮かべた。

「見事です、グレンジャーさん。グリフィンドールに4点!」

加点されたのだから喜ばしいものを、グレンジャーはまたこちらに挑戦的な視線を投げつけるのだった。

授業が終わると、外は鈍色の空になっていた。もうコートを出さなければならぬ時期に差し掛かりつつあるが、夜は雷雨になるとのことだった。

「だから、誰だってあいつには我慢できないんだよ!」

内庭で獅子寮の男子生徒が連れ立って歩いていた。ウィーズリーが騒いでいる。

「レヴィオーサー! あなたのはレビオサー! ムカつくよ! だからあいつには友達がないのさ。スリザリンのボーン達に相手してもらってるけどさ、あいつらだって心の中じゃあいつのボツチ具合を笑ってるさ。スリザリンとつるまなきやいけないうって事には同情するけどさ」

グレンジャーは早足で群衆を避けて歩いて行った。

「聞こえたかな?」

「気にするなよ。いい気味さ」

「ああ、聞こえたさ。陰口なら静かに、悪口なら面と向かって言うことだな」

流石に腹に据えかねたので、獅子寮の連中を呼び止めた。ダフネは寝起きの邪眼を向け、ブルストロードもまた思うところがあつたのか、拳を固めていた。パーキンソンはマルフォイとの時間を取り戻すのに必死で、どこかに行っている。

「ああ、やっぱりハーマイオニーはスリザリンとお友達ってわけか」

「あのさ、君いったい何なの？ 確かにドラコは君としよつちゅうけんかしてるよ。それも、『特別な関係』に見えるくらいね。でも、それはスリザリンとグリフィンドールだからなの？ スリザリンが君に何かした？」

そもそもダフネはレイブンクローに入りたいと考えていた。それでもなお、家の期待を裏切れないからと組分け帽子にスリザリンに入れる様にと願ったという。そうして入ったスリザリン寮を偏見で見るウィーズリーは気に食わないのだろう。

「何かしたって言うなら、つまり、存在してるってことかな。名前を言っただけじゃないあの人しかり、闇の魔法使いはみんなスリザリンじゃないか」

「なら、グリフィンドールは清廉潔白ってわけ？」

「へえ、清廉潔白なんて言葉、ブルストロードが知っていたなんてね」「マリア、殴っていいかなコイツ」

「止めておくといい。非魔法界なら、格闘技経験者が手を出すと犯罪だぞ。それに、手が穢れる」

「そんな大きなお手で殴られたら、トロールだってノックアウトだろうさ」

「やっぱり殺そう」

「ああ怖い怖い。死喰い人の養殖場は言うことがやっぱり違うよ」

ブルストロードはぶつぶつと「小指を折る……腕を振じ上げて、肘の反対側に突き上げる」等と、予行演習をしている。

「グレンジャーに同情する、だったか？ 私も同情するよ。こんなクソガキ共と同じ寮だなどと」

「左様でございますか、ミス・ボーン。有意義な時間だったよ、スリザリンのブス共。少なくともハーマイオニーはグリフィンドールにもスリザリンにも同情される可哀想な子ってことが分かったからね。さて、行ってもよろしゅうございますか、お嬢様方？」

「失せろ下衆が」

「お望みのままに」

3人で苛々しながら談話室に戻ると、パーキンソンがソファアークつろいでいた。一緒に茶を飲んでみると、不意にパーキンソンが「あなたのはレビオサー」とグレンジャーの真似をし始めたので、ブルストロードが強烈な張り手を食らわせていた。これからはブルストロードをミリセントと呼ぶこととする。

泣きじやくるパーキンソンにダフネが説教をし、更に泣かせたが、友人に叱られたことと、流石にグレンジャーが可哀想だと反省した様だった。それで態度を改めないのがいつもの事だろうとダフネが追撃すると、パーキンソンは自室に逃げていった。

男子と違い、女子には薄いながらも寮を横断した繋がりがある。グレンジャーの子どもじみた対抗心に呆れながらも、結論としては獅子寮の男子はあまりにも幼稚だということでもまとまっている。

カップを片付け、副校長に質問をしようと私室に伺う。副校長は確かに恐ろしいが、かといって変身術がグレンジャーに一步劣ることに甘んじていられるわけでもない。死地についてこいと言うわけでもなかったが、ダフネは「マリアが行くなら私も行く」と言ってくれたことは有難かった。真意としてはパーキンソンの後片付けが面倒なのだろうが。

「校則を破ればプレゼントをもらえとも思っていないかもしれませんが、私はプレゼントをもらうために優秀な生徒であろうとしているわけではありません。優秀な生徒であろうとするから校則を守り、勉学に励むだけです」

部屋の前に着いた途端、グレンジャーの叫び声がし、部屋を飛び出してきた。その目には薄っすらと涙が浮かんでいた。気まずい沈黙の後、逃げ出そうとしたグレンジャーの腕をダフネが掴んだ。

「マリア、グレンジャーを捕まえていて」
「んん？」

「ちよつと副校長にご挨拶してくるから」

「……死ぬなよ。私は友人が少ないんだ」

「なんで死ぬのよ。じゃあ、その辺りで待ってて」

「この状態で待て、と？」

「うーん、じゃあ、トイレでいいでしょ」

女子の社交場と言えば、甘味処かトイレと決まっている。

えぐえぐと泣き続けるグレンジャーの手を引いてトイレに連れ込んだ。既に授業時間となっている為、利用している生徒はいなかった。

スリザリニー年生は放課後となったが、グリフィンドールの連中の行き先を見るに、未だ授業があるのだろう。あの下衆共は授業を受けながら、優等生のグレンジャーが出席していないという事をどう思うだろうか。

こんな時、どんな態度をとるべきか。アリアンナ女王とイングリットお姉様の親子を思い浮かべる。とにかく言葉を吐き出させて、自分が何を思っているのか、何にショックを受けているのかを整理させる。女子とは泣きじやくるとそれにつられて我を忘れる、面倒な生き物なのだ。

「で、何があつたんだ」

「……」

「まあいいさ、甘い物でも食べるといい。キャンデイでいいか」

「……こんな不衛生なところで食べたくない」

「……」

「……」

ダフネ、私には無理だ。早く来てくれ。

天を仰いだが、薄暗い天井が見えただけで、それ以上の事はなかった。

長い沈黙の後、ダフネがやってきた。ダフネの素晴らしい話術によつて、漸く顛末を掴むことが出来た。

副校長に呼び出されたから私室に訪問した。勉学の為、大量の教科書と参考書を携帯する彼女を見かねて、副校長はグレンジャーに空間拡張された鞆をプレゼントしようとしたが、グレンジャーは固辞した、ということだったらしい。

「それだけか」

「マリア、黙ってなさい」

「……ああ」

ダフネは眉間を揉みながら、閉じられたドアに向かって言葉を紡ぐ。

「共感は出来ないけど、気持ちには分かるよ。」

グレンジャー、頑張ってたから。

マグル生まれだから、不安になって頑張った。

頑張ってるのに、マリアに勝てないから頑張った。

なのに、頑張つてない、目立ちたがり屋の男子がプレゼントをもらうだなんて、ムカつくよね。

それで、あんな連中と同じになりたくないから、頑張ってた。

それを、友達がいらないから勉強してるなんて酷い言葉言われたら、疲れちゃうよね。たまに見てるけど、あなたはアドバイスしてるだけで、けなしてなんてないのよね。まあ、面と向かって言われるとムツとするけど。マリアの燐寸棒、覚えてる？ マリアがあんなに子どもみたいな怒り顔するなんて——あ、マリア、じつとしてなさいよ。

……だけど、そんな酷い言葉を言われても、負けたくないから、頑張ってた。

なのに、頑張ってるからプレゼント、だなんて、副校長はあなたをあんな連中と同じに見た。それが嫌だったんだよね」

グレンジャーの信仰は汚され、その上、誇りが傷付けられた、ということか。

個室から聞こえる嗚咽は先程よりも大きくなった。

「アドバイスだけどき、もうちよつとき、楽に考えても良いと思うよ。あなたさ、入学してきたときには、知らない事を知ることが楽しいって、そんな顔してた。」

けど、今は競争しちゃってるんじゃない？ 私だって、他の生徒よりいい成績だったら、嬉しいよ。でも、それって、自分で決めることだよ。

なんて言うのかな、周りとの勝ち負けなんて、後からくつついてくるだけ。大切なのは、自分が頑張つてると思えるかどうかじゃないか

な。ウィーズリーだとか、マクゴナガルだとか、周りがどう思ってるかなんて、勝手に思わせておけばいいじゃない。頑張ってる、頑張った結果に満足出来て、それで十分じゃない。満足するために頑張ってることは、誰にも否定できないよ。

あなたは頑張ってる。それだけは、私も知ってるし、マリアも知ってる。

さつき、詳しいことは聞かなかったけど、マクゴナガルは応援したかったんだって。子どもが頑張ってるって貰えるご褒美なんかじゃないんだよ。まだマクゴナガルを好きでいられるなら、後で鞆をもらいに行きなよ。なんかシヨック受けてたし。

私が言えるのはこのくらいかな。マリアは何かある?」

この後に何を話せと言うのか。

「あー……まあ、落ち着いたら、パーティーに来るといい。甘味は心を癒す。もし、行く元気がないというなら、今度茶会でも開こう」

探索によって、屋敷しもべ妖精犇めく厨房への隠し道を見つけていた。菓子をくれと言えばすぐに用意してくれるだろう。

「はい、ということなので、私たちは帰るわ。後はあなたの決める事」
嗚咽は止まなかった。次に、マリアと呼び掛けられたら、ハーマイオニーと呼ぼうと決めた。

寮に戻れば、パーキンソンは未だに自室に籠城していた。

ミリセントはもう匙を投げた様で、ソファアに座り、雑誌を読んでいた。片手にボールを握り、握力を鍛えている様だった。

ダフネは部屋のドアを叩き、叫んだ。

「じゃあドラコの隣、私とマリアが座るからね! 良いのね!」

「私は嫌だし、どうせあいつも下男を侍らせるだろう」

「マリア、黙って」

ミリセントに睨まれた。

ドアは暫くしてから開かれた。

「母親の様だったな。聖母ダフネだ」

「お姉さんと言いなさい。こういうの、妹がいるから慣れてるの」
「あら、ダフネは妹がいるのね。妹さんもお姉様って呼んでくれるかしら」

「もちろんです。お姉様」

イングリットお姉様に新たな妹が加わるらしい。

グリフィンドールのテーブルにグレンジャーの姿はなかった。今頃、自室で寝ている頃だろうか。あれだけ泣けば、疲れてしまうだろう。

パンプキンパイに舌鼓を打ち、もう一切れ、と手を伸ばした時、けたたましい音を上げ、広間の扉が開いた。防衛術の無能教師だった。教員たちも鼻に突くニンニクの臭いを嗅がずに料理を味わっていたものを。

「トロールが！ トロールが地下室に！ お伝えに参りました」

それだけを校長に伝えると、ぼたりと気を失った。

たちまちに阿鼻叫喚の騒ぎとなったが、狩人達は冷静だった。

7年生のジェラルド、5年生のヘルマン、2年生のドロテア。互いに目配せをすると、騒ぎの隙に広間を出ていった。ボーン家もさて出ていこうとすれば、校長が爆竹を鳴らし、騒ぎが収まってしまった。

「監督生よ、直ちに寮生を連れて寮に戻りなさい」

それからは粛々と蟻の行列の様に巣穴に戻っていく。

だが、気がかりが一つ。

「パチル！ ブラウン！」

「ボーン？ 何？」

獅子寮の列に近づき、怯えながら歩く二人に声をかける。ダフネもまた同様についてきていた。

「グレンジャーは？」

「呪文学の後から行方不明よ」

「まだ寮に戻っていないの？」

「ええ。ハリーとロンのチェスが長引いてたから、談話室に最後までいたけど、ハーマイオニーは見えてないわ」

「マズイな。ダフネ、行ってくる」

「私も行くよ」

「狩りはあまり人に見せられるものじゃない」

「その後どうやって先生に説明するの!? パイを食べそこなったからトロール狩りに行ったとでも言うつもり!?!」

「分かった。だが、覚悟しておくことだ」

2階のトイレに走る。まだトロールが地下にいるならば、同胞達が始末してくれているだろう。だがそうではなかったとしたら。ここは現世。やり直しの利く世界ではない。治療は出来ても蘇生は出来ない。父王がガスコイン神父を救わんとした時も、この様な気持ちだったのだろうか。間に合え、間に合えと。

前方から走り寄る者がいるので、誰かと思えばポッターとウィーズリーだった。

「何をしている!」

「そっちこそスリザリンが何をしに来たんだ!」

「黙ってるウィーズリー!」

馬鹿が噛みついてきたので、鼻を殴り、黙らせる。こんな時にスリザリンだのグリフィンボールだのと、知能は鼠以下か。

「こつちに来ちゃだめだ! トロールがいるんだ!」

「どこに!」

「女子トイレさ。閉じ込めてやったんだ」

ポッターはしたり顔で折れた鍵を弄んだ。

「なっ……なにしてんの! 馬鹿じゃないの!」

「マリア! こいつらに構ってる暇ないよ!」

グレンジャーは寮に戻っていない。

トロールを女子トイレに閉じ込めた。

それは、当然の帰結。

甲高い悲鳴が響いた。恐怖の絶叫。かつて、ヤーナム市街の至る所で聞かれた声。

嫌だ、聞きたくない。

何が楽しくてあんな悪夢を繰り返さなきゃならないの。

その理由がようやく分かった。

「畜生！ 畜生ばかり！」

どこもかしこも、獣ばかりだから。

トロールも。友人を追い込んだこのクソガキ共も。

そんな畜生共を狩りつくさないと、悲劇が終わらないから。

狩りを全うするためには、力が必要だから。

ドアの鍵は折れている。なら、ブチ壊すしかない。

懐から取り出した爆発金槌を下から降り上げる。穿った穴からは、部屋の隅に追いやられたグレンジャーと、それに迫る灰色のトロールが居た。

間に合った！ 生きてる！ 救える！

柄に仕込まれた撃鉄を起こすと、金属音と共に炉が唸りを上げる。地獄の番犬たるケルベロスよりも遥かに恐ろしい獣、旧主の番犬の火を孕む炉。

「ブツ飛べ！」

振り降ろし、接触した瞬間、炉の焰が解放される。ドアどころか、壁の一部まで巻き込み、粉碎する一撃。道は開かれた。

爆音に釣られ、トロールがこちらに振り向いた。

墓石の様な鈍い灰色の皮膚。

歪に肥大した巨体。

身体に埋め込まれた様に小さい禿頭。

脚は短く、反比例した様に長い腕。右腕には棍棒。

軀に纏う悪臭。

「マリアー！ ダフネー！」

「ハーマイオニー！ 無事だな!? よし、大丈夫だから。大丈夫。大丈夫だ。もう安心していい。じっとしているんだ。安心して。」

絶対にこれを、狩ってやる」

トロールは棍棒を振り下ろしてきた。遅い。

前後ではなく、上下方向の攻撃など、飛びのくことなく回避できる。

2歩下がり、得物を構え、撃鉄を起こす。

棍棒は空を切り、床のタイルを割った。破片が飛び散り、脚の皮膚

を裂いたが、どうでも良い。どうせ獲物の血を得ればすぐに回復するのだから。

体勢の崩れたトロールの右肩に、槌を振り下ろす。骨が砕かれ、肉が潰れる感触が伝わった。重低音の絶叫を上げるトロール。左手で振り払えばいいものを、痛み故にその手は右肩を掴んだ。更にその左手の上から殴りつける。トロールの右腕は胴と分かれた。肉の裂け目から白い骨が見える。

返り血が制服を汚した。温かい血が傷口に触れた途端、快感を伴う熱となった。

最早トロールは失血死を免れない。今まで散々に獲物を捕食してきたのだろう、自分がどうなるのかを理解している様だった。だが、憐れみなど持つものか。人から成る獣ですらない、ただの畜生。人が肥大した様に見えて、その中身はただの畜生。

その頭に、最後の一振りを加えた。

「……かねて血を恐れたまえよ」

血に酔うとは、殺生に麻痺する事。幾度となく聖杯で獣狩りという殺戮を繰り返してきた。だが、今日のトロールは違う。友人を救うという明確な大義があった。大義の為に殺す事の、なんと罪悪感の無いことか。故に、血を得る快樂のみが身に残る。

そうであつてはならない。故に、血を恐れなくてはならない。

「ハーマイオニー。無事でよかった。無理にでもパーティーに連れだせば良かった。それと、ダフネ。吐くなら男子トイレを借りるといい。ここにはもう個室が無い」

「……そうする。男子たち、音聞かないでね」

惨状を見て、ダフネが蒼白な顔をしていたので声をかける。いつだったかの淑女の尊厳もどこへやら、よろよろと弱々しい足取りで隣の男子トイレへ向かった。

暫く呆然としていたハーマイオニーだったが、隣室の水を流す音でようやく我に返った様だった。

「マリア、今のが、狩り？」

「いや、獣狩りではない。獣狩りは、人が変態した果ての、憐れな獣を

狩り、安息を与えることだ。今はただの、殺しだよ。悍ましいか?」
「……見た目だけは。けど、助けてくれてありがとう」

「こちらこそ。生きていてくれて、ありがとう」

救いたかったけれど、救えなかった狩人。

貴方の心は、どれ程傷ついたのでしょうか。

その救えなかった者の娘を救う為に、どれだけの悪夢を繰り返したのでしょうか。

ああ、偉大なるお父様。

バタバタと足音がして、部屋の外で止まったと思えば、大声が響いた。

「ポッター！ ウィーズリー！ あなた達はとうとうつもりですか！

まだトロールが——」

「もう駆除済みです。副校長」

廊下で説教を始めたので呼び掛けると、わなわたと震えながらトイレに入ってきて、その惨状に息をのんだ。同胞たちと、クイレル教授とスネイプ教授もいる。

「誰も怪我はしていません。備品が壊れた程度です。しかし、遅かったですね」

「ああ、マリア。ごめんなさい。地下牢で先生たちに捕まっちゃって」
「当然です！ 地下室に向かえば、生徒達が集まっている!? どんな悪戯好きの生徒だって、こんな事はしませんでした！ ミス・ボーン」

「はい」

「貴女じゃありません！ ミス・マリア・ボーン。ミス・グレンジャー。こちらに」

「何でしょうか」

怒り狂っている副校長はトロールよりも恐ろしい。血に塗れた金槌を壁に立てかけ、左手をポケットに入れた。直ぐに短銃を取り出せる様にするために。

正直目を合わせたくないが、少しでも動きを見逃せば、直ちに杖を抜かれ、拘束されるだろう。警戒しながら、歩み寄る。

瞬間、副校長は腕を広げた。ほおずきの抱擁を彷彿とさせる。全身が粟立ち、バックステップで回避しようとしたが、後ろにはハーマイオニーがいる。回避すれば、彼女がこれを食らうことになる。

ああ、同胞たち。あなた達に血の加護があらんことを。

「本当に、無事なのですね」

抱きしめられ、殺されるのかと思えば、ただ単に確認の言葉だった。

「ええ。それよりも、お召し物が血で汚れますよ」

「服の事などどうでも良いのです！ もう二度と、この様な事はしない様に」

「承服致しかねます」

「何を言っているんです！ 貴女は生徒で、私達は教師です！ 危険な事に首を突っ込まないでください！」

副校長を押し返し、同胞の元へ向かう。デイルクお兄様が満面の笑みで迎えてくださった。

「マリアの申し上げる通り。我らヤーナムの民は、生徒にして学徒に非ず。生徒の前に、狩人であります」

「民草の赤子の赤子、ずっと先の赤子まで。獣の病が血に蠢く限り、我らは狩人であります」

「マリア、名乗りたまえ」

「我が名はマリア・アイリーン・ボーン。ヤーナムの統治者、月の狩人とその妻フローラの子。月花の狩人であります。以後、お見知り置きください」

礼をする。狩人の一礼とされるそれは、常在戦場の狩人の心構えを表すものである。

トロール

ジェラルドが杖を振り、返り血に染まった服を清めてくれた。副校長はハーマイオニーの濡れた服を乾かしている。

「ありがとうございます。ジェラルド先輩」

「お気遣いなく。マリア様」

「何度も申し上げていますが、ヤーナムの外ではただの先輩と後輩です」

「ではその様にお申し付けください」

嘆息するが、ジェラルドはこの調子を崩さなかった。主従の関係にあると思うのであれば、主がそれを望んでいないと知れば態度を変えるだろうに、屋敷しもべ妖精の如き頑固さだった。下僕としたつもりもなく、狩人として遙か高みにいるジェラルドを尊敬しているが、こういうところはあまり好きになれない。

「マリア。何故爆発金槌を使った？」

ヘルマンはトロールの死体を眺めて言った。スネイプ教授はトロールの死体を検分している。

「まずは、ドアを破る為です。当然、ドアの傍にハーマイオニーがいない事は確認しました。次に、あまり血が出ない武器であることです。ハーマイオニーにしても、ダフネにしても、汚らわしい獣とはいえ、人の形をした物が血を流すのは些か刺激が強いかと」

「死体は語る。痛めつけてから殺しているだろう。そもそも君が得意とする武器ではない。本当に友を救いたいだけであれば、この程度の獣は聖剣の一突きで屠ったはずだ。」

君、獣を憎んだな？」

「ヘルマン。友達を怖がらせた敵を憎むのは、当然の事でしよう」

「狩りは宗教儀式でも敵討ちでもない。そうだろう、ドロテア。たとえ愚かな獣とて、その一撃は死を招く。狩りは成就したが、感情に溺れて手段を誤ったことは、省みなくてはならない」

「精進致します。ですが——」

「マリアがハーマイオニーを救おうとした、それは確かな事だと思

ます。狩人じゃないと分からないことなのかもしれないし、正直、狩りがここまで凄絶なものだとは思っていませんでした。ですが、それがなんだって言うんです。

マリアは友達を救おうとした。それは手段によって否定されるものなんですか？」

男子トイレから戻ってきたダフネの顔は蒼白ながら、目には光が宿っていた。

「意思と異なる手段を選んだことを否定しているだけだ。意思そのものは否定していない。狩りは授業ではない。改善の機会があるかどうか等、分からないんだ。だから、狩りの成就について、歓喜に震えるのではなく、後悔に震えるべきなんだ」

唇を噛む。ヘルマンの言う事はもつともだった。

最後の学徒、ユリエを祖に持つ狩人ヘルマン。上位者と共に空を見上げ、上位者の智慧を得ようとした聖歌隊。その試みは、星の子への変態を招いた。ユリエはその聖歌隊の人としての生き残り。手段を違えた事を知った彼女はビルゲンワースに身を寄せた。ヘルマンが手段に拘るのはその後悔を継いでいるからだろう。

「あなた、大切な事を忘れているわ。マリア。現世での初めての狩り、その成就を心から祝福するわ。あなたを狩人に迎えられて、私たち狩人は僥倖よ」

イングリットお姉様が頭を撫でてくださいました。もうその様な年齢でもないのだが、柔らかい温もりが獣性を鎮めていった。

「そうね。おめでとう、マリア。ヘルマン、だから貴方はモテないのよ。理屈ばかりで、少しも女の子の気持ちは分かってないわ」

「理屈を解する相手を見つければいい。感情に左右されて、『仕事と私のどっちが大切なの』なんて言われてみる。考えるのも悍ましい」

「言われたことがあるわけ？」

「言われたくないから選んでいるんだ」

「あーあ。これで聖歌隊の血脈もお終いね」

「へえ？　じゃあ君は赤い月を迎えたっていうわけかい」

「最低」

血。上位者との交わり。意図するところはそういうことだろう。尤も、女性の狩人にとつての赤い月とは、ヘルマンの言うものとは別なものを表す隠語だが。

「生きていて良かった。次も生き残れる様に思案を巡らせよう、ヘルマンはそう言っているんだろう?」

「その様にも解釈できますね」

ヘルマンはお兄様の加勢を受け取ることがなかった。

「やはり貴公は女性を知らぬ様だ。憐れな男だ」

「デイルク・シスコン・ボーン先輩はさぞおモチになる様で」

「我が妹らを目にして石ころ如きに心が揺らぐと思うか」

「つまり、女は顔だと、そう言っているわけですか。そうかそうか、つまりあなたはそんな人なんですね。外形のみに囚われるなど、学祖ウイレームがさぞ悲しむことでしょう」

デイルクお兄様とヘルマンとはこれでいて仲が良い。下級聖職者であるアデーラ女王と、カインハーストの血を継ぐ上級聖職者、聖歌隊のユリエ。その子らのやり取りには、あの陰惨なヤーナムの終焉を見る事が出来た。

奥歯が割れるのではないかと思われる勢いでお互いに一撃ずつ殴りあつた後、ジェラルドが「ボーン家に手を出すとは! 報いあれ!」と叫び、ヘルマンの鳩尾に一撃を加えた。時として臓腑を引きずり出す、致命の一撃。

唐突に始まり唐突に終わった喧嘩について、副校長はかける言葉が見つからない様だった。お姉様とドロテアがいつもの事だから気にするなど言えば、ダフネは顔をひきつらせていた。

「あなた方が狩人であるという事は分かりました。闇祓いに与さず、闇の陣営にも与さない、旧き強者たち。ですが、なぜここに、そうではない生徒がいるのです?」

「名誉の為、申し上げられません」

「マクゴナガル先生。みんな、私を探しに来てくれたんです。私がトロールを探して、ここまで来たんです。私……私一人で倒そうと、そう思っていました」

そういうことにしたらしい。獅子寮のクソガキ共の所業も、そんなクソガキ共を叱る事もせず、ポッターだからと箒をくれてやった副校長にも責任を負わせる事無く、全て自分の罪とするらしい。ダフネの言った通り、ハーマイオニーが決める事。ハーマイオニーがそうすると決めたのであれば、そうしよう。ダフネに目配せをすると、静かに首肯した。

「ハーマイオニー、何を言っている？ 止めておくんだ」

「マリア、いいの。貴女に勝ちたくて、そうしただけの事だから。そうしたらみんな、私の事を認めてくれるんじゃないかって」

「……名誉の為、とはそういう事ですか」

ハーマイオニーも意図を理解した様で、上手く乗ってくれた為、副校長はいとも容易く騙された。先程、自分がハーマイオニーにしたことも一因だと誤解しているのだろう。確かにハーマイオニーがトイレに籠ったことは副校長にも責任の一端があるので、全面的に誤りというわけではない。

模範的生徒であろうとするハーマイオニーが、承認欲求の為にこの様な事をするだろうか。否、それすら揺るがしてしまう程、自分は生徒を傷つけたのだと副校長は考えるだろう。

別段意識したつもりはないが「名誉の為」とは非常に多義的な言葉だった。事実を部分的に知る者によって、その意味は異なる。

大勢の者にとっての「名誉の為」とは、ハーマイオニーが承認欲求を満たそうとしたという罪を覆い隠す。

副校長にとつての「名誉の為」とは、副校長の行いによって、ハーマイオニーが無謀な挑戦をしたという、副校長の罪を覆い隠す。

ポッターとウィーズリーにとつての「名誉の為」とは、心無い言葉を投げつけた為にハーマイオニーが死の危険に瀕したという、獅子寮の罪を覆い隠す。

事実は、単にハーマイオニーが一人で傷ついていたことを晒したくないが為に放った言葉だったが、実に都合が良い。

「もし、ハリーとロンが、マリアとダフネを呼びに行ってくれなかったら、私、今頃死んでいました。私……私、本当に愚かな事をしました」

庇われているポッターとウィーズリーは、それに気が付いているのか、その後ろめたさにうつむいたままだった。悪くない。副校長からは、同級生の女子を頼らなければならなかったという羞恥に苛まれている、と見えるだろう。

「本当に、本当に、愚かな事です。あなたの事を認める?」

ハーマイオニーは震えていた。副校長が言葉を止めた為、滝の様な水音だけが部屋を支配した。

「こんなことをせずとも、あなたの事はもう十分認めています! 他の先生方もそうでしょう! スネイプ先生、クィレル先生!」

副校長は全身を震わせて叫んだ。

「……不本意ながら『我が寮の』ポーンを除けば、吾輩の授業をまともに理解しているのは彼女だけでしょうな」

褒められたわけではないだろう。どうあつてもハーマイオニーを手放して称賛することはしたくないという意図が透けて見えた。

クィレル教授は壊れた人形のように首を縦に振った。そもそも、防衛術の教授であれば、トロールが地下にいるうちに始末しろと怒鳴り付けたくなるが、今はそのタイミングではない。

「そういう事です。ミス・グレンジャー。ですが、あなたの行いは先生方を失望させるものです。グリフィンドールから5点減点。この5点を直ぐに授業で取り返す事を期待しています。あなたにはそれが出来るのですから。」

ミスター・ポッターとミスター・ウィーズリーを除いた者は寮に帰って結構です。パーティーの続きはそれぞれの寮の談話室で行われています

「加点は頂けないのですか?」

「確かに1年生でトロールを圧倒できる者はそういません。ですが、それについては校長先生が判断なさる事です。日を改めて、報告会を開きます」

ここで、「では箒を贈りたくなる程に飛行術に秀でた1年生はどれ程いるのでしょうか?」などと嫌味を言える程の実力は未だない。所詮、トロールを殺した程度だ。副校長であれば、トロールなど杖の一

振りで圧殺できるだろう。

トロールの侵入とその撃破は学校にとってもイレギュラーだったのだろうか。おそらく、トロールの侵入を利用して、監督生の有事対応能力を見ていたのだろう。侵入者がどれだけいるのか分からない状況で、分散するなど愚の骨頂だ。大広間に生徒を留めたまま、少数の教員が校内で捜索した方が遥かに安全だ。しかし、そうはならなかった。

校長は既にクイレル教授からトロールが1体侵入していることを知らされていたのではないか。そう思えば、クイレル教授がトロールを始末せずに大広間にやってきたことも、気絶して直ぐに他の教員を案内することが出来なかったことも理解できる。そもそも、防衛術の教室は4階にあるのだから、地下からの侵入者の第一発見者がクイレル教授となることは偶然とは考え難い。

成程、掌で踊らされていたというわけだ。だが、直ぐに加点が出来ないという事は、基準を定めていなかったということであり、撃破は想定していなかったということだ。一矢報いたと言っていいたいだろう。「ボーン、君はもう少し慎みを持ちたまえ」

「得点の全てはスリザリン寮の為。我らは家族であります故に」

「スネイプ教授は談話室にいらっしやいますか？ 我が妹の功績を寮生に知らしめてやりたいのですが」

「生憎と教職員は時間がないものでね。例えば、壊れたドアの修繕や、壁に散った血糊の掃除がね」

「ご愁傷様です」

「……何を他人事の様」

寮監にあしらわれた為、帰路につく。ハーマイオニーを除けば蛇寮である為、彼女が1人になってしまふ。送っていくと伝えれば、同胞たちは菓子を確認しておくかと返してくれた。

フロアを上がって、漸くトロールの悪臭がしなくなった。生態系の上位に位置するだろうに、あの悪臭であれば獲物は直ぐに接近を察知するだろう。どの様にしてあの巨軀を維持できるだけの栄養を摂取しているのかは気になるところだ。

獅子寮の入り口は肖像画の裏にある。合言葉で開くというが、それを聞くわけにはいかない為、ハーマイオニーに飴玉を渡してからそこで別れた。

「さて、寮に戻るか」

「じゃあケジメの時間だね」

「何？」

「あいつらの事、ハーマイオニーは許してたけど、本当にその意味が分かってるのかなって」

「そうか。ところで、ダフネもハーマイオニーと呼ぶ様にしたのか？」

「前からマリアのいないところじゃそうだったよ。貴女が変に意地張ってるからそう呼べなかつただけ」

「何だど？ 前から2人して私の変身術を嘲笑っていたのか？」

「貴女どれだけ根に持つてるのよ」

ダフネの言葉は聞き捨てならなかったが、階段を上がってくる足音が聞こえたので、足を止め、黙っていた。

「2人で10点は少ないよな」

「2人で5点だろ。ハーマイオニーの5点を引くと」

どうやら、副校長はあの後ポッターとウィーズリーに加点したらしい。一体この連中のどこに加点されるところがあるのか分からないが、都合の良いことを言ったのだろう。

「そりゃ、彼女が僕たちを助けてくれたのは事実さ。けど、そうなのは彼女の日頃の態度のせいっていう事実もあるんだぜ」

「そう、『僕たちが彼女を助けに行った』っていう事もね。あれだけ騒ぎになる位、トロールは恐ろしいんだろう？ そんな中で僕らが彼女を探しに行ったって事は、もう少し点をもらったっていいと思うんだけど」

「それにしても、やっぱりスリザリンは異常者ばかりだ！ 見たかい、あのトロールの死体！ 頭がぐっちゃぐちゃで脳みそが漏れてたぜ。僕、しばらくベジタリアンになるよ」

「ウエー。思い出させないでよ——あ」

ウィーズリーは言葉を止めたポッターに怪訝な表情を向け、その視

線を追い、こちらを見た。

「ダフネ。言うべきことは」

「何も無いよ。こいつらには、人の言葉は通じないもの」

「そうか、無駄になるかもしれないが、私から言っておこうか。」

ハーマイオニーは、少し突っ走るところもあるが、根は優しい人間だ。自分だけが優秀であればいい、そんな人間であれば、一々他人の失敗には口を出さない。人間性の浅い人間は、自らが定めた者しか、自らの感情に組み込まないからな。事実、私は貴公らがあの獣に殺されたとして、何の痛痒も感じないだろう」

知らぬ内に、自分の目から涙が溢れていることに気づいた。

「そんな彼女だから、自らの信念を曲げてまで、お前達を救ったんだ。お前達は努力もせず、失敗ばかり繰り返し、彼女に嫉妬し、彼女を貶めた。その結果が、この様だ。副校長が知ったら、なんと言うだろうな」

「お前、チクる気か？ スリザリンはやっぱり卑怯者だな」

「彼女が守ったお前達の名誉を私が穢すわけがないだろう。これだけの事をしでかして、口から出るのは身の保身か？ 恥を知れ。知っていたならば、舌を嚙んで自死するだろうからな。」

それで、お前らは彼女を救っただと？ ポッター、英雄気取りのお前がやった事は、彼女を殺しかけたんだぞ？ 私は忘れない。あの時の満足感に溢れたお前の馬鹿面を」

「仕方がないだろう！ あそこにハーマイオニーが居たなんて、知るわけないじゃないか！」

ポッターが吠えた。自分達が加点されたという、僅かばかりの幸福感を穢されたくない、というわけだ。

「そうだな。どこに居るかも知りもしないのに彼女を探したというわけだ。お前のやるべきことは、自分たちの罪を寮監に告げ、彼女を救う様に頼むことだった。叱られるのが怖いから、露呈する前に彼女を探しに行ったということだろうか？」

卑怯者が。ウィーズリー、お前が卑怯者と蔑むスリザリン生も、お前達の行いは軽蔑するだろう。我が寮は勝つ為には何でもする。だ

が、寮の為に勝つのだ。お前達と違って、自分自身の為に同胞を貶める勝利など、そんなものは存在しない」

ウィーズリーは何かを言い返そうとしたが、酸欠した様に口を意味もなく開閉するばかりで、何の表音もなかった。ポッターは睨みつけてくるが、「なんてボーンは嫌な奴なんだ」程度の感情しか読み取れない。

「談話室に戻れば、お前達の所業を全て水に流して、ハーマイオニーが迎えてくれるだろう。少しでも人の心があるのであれば、せめてその優しさを受け容れ、罪悪感を覚えることだな」

「もういいよ、行こう。マリア」

「お前達は談話室に戻り、口先だけで謝って、許された気分になるつもりだろう？ それでもいいさ。謝罪など、罪を自覚していないお前らが出来るべくもないだろうからな。精々、私達が事の顛末をチクらないかどうか、震えて眠るがいい。私達は卑怯者なのだろうか？」

お休み、ボク達」

蛇寮の入り口まで戻っても、2人の涙が止まるまで、談話室には入れなかった。

2人して唇を噛みしめ、松明の揺れる炎を眺めていた。

憐れじゃあないか。彼女が。

あんまりにも、憐れじゃあないか。

開心術

甘い物にも、鎮静剤にも頼るつもりはなかった。悲しみも、怒りも、薄めてはならない様に思えた。談話室に戻ると、誰もがトロールを殺したことへの称賛を口にしたが、それも結局、虚しさを際立たせるだけだった。

冷え切った11月。木々が葉を落とすし、宿木が僅かな緑を残すばかりとなった山々は、皮膚をはぎ取られた獣に似る。お兄様やお姉様が興じるクイティツチのシーズンであるというのに、心は浮き立つことが無かった。

「また、だね」

「ああ」

ハーマイオニーはトロールの件以後も変わらず接してくれたが、ポッターとウィーズリーの傍にいたことが多くなった。彼女が何を思い、赦し、そうしているのかは分からない。だが、彼女がそうすると決めたのであるから、口を挟むこともない。たとえ、彼らが未だにハーマイオニーへの仕打ちを心から反省していないとしても。その事実を伝えることは彼女をどれだけ傷付けるだろうかと考えれば、甘い嘘に塗れていた方が、彼女の為ではないか。いや、ではそれが露見した時にはどうなるのか。負う傷はより深くなるのではないか。考えれば考える程、心が曇天の様に濁っていく。

今日も3人は寄り添って歩いていた。そこをスネイプ教授が通りかかり、何かを没収した後、こちらに歩いてきた。

「こんにちは、先生」

「ボーン、グリーングラス。校長がお呼びだ。放課後、校長室前に来る様に」

「はい」

「その様に」

脚に怪我でもあるのか、スネイプ教授は脚を引きずって歩いて行った。

「何だろうね」

「報告会、というものだろう」

「そつちじゃなくて、寮監の脚」

「気になるが、聞いて教えてくれるとも思わないな。それに、聞いたところはどうしようもない。ホグワーツの教員が怪我をし、直ぐに治す事の出来ない事態に生徒がどう対応する」

「それもそうだけど、気にするなら勝手でしょ。魔法薬の研究かな。実験で亡くなる方もいらっしやるし」

「さてね。そこまで気にするのであれば、労ってやればよかつたものを」

「媚びを売ってるみたいで嫌じゃない。魔法薬は実力でいい成績をとりたいの」

その言葉通り、ダフネの魔法薬学の成績は上から五指に入る様になっていた。スネイプ教授が仰った通り、お兄様は魔法薬学に秀でていたため、談話室で質問をしているのをよく見かけた。

ダフネはスネイプ教授の事を、人間としては好きになれないが、ポッターを嫌っているという一点でのみ、信用しているという。厳格な副校長ですらポッターに箒を贈るのに、最初から今に至るまで常にポッターを嫌い続けているという寮監の態度の一貫性は信用できるということだった。それもどうかと思うが、一応は筋の通る話だとも思った。

「もうお着きだったのですね。お待ちせ致しました」

「構わん——レモンキャンデー」

スネイプ教授がガーゴイルに告げると、道を譲った。背後にあつた壁は左右に裂け、その奥には階段が続く。階段に足を掛けると、エスカレーターが如くうねりながら上階へと誘った。最果てには檜の扉があり、グリフィンを象つたドアノッカーがついていた。スネイプ教授はそれを使うことなく、手でドアをノックした。

「校長、ボーンとグリーングラスを連れて参りました」

「ご苦労じゃった」

扉の奥から声がかかけられ、扉は自然に開かれた。

そこは円形の部屋で、統一性のない家具や奇妙な小物に溢れていた。おそらくは、歴代の校長たちが持ち込んだものが、そのまま遺されているのだろう。

「ダフネ・グリーングラス。グリーングラス家が長女。お呼びに参りました」

「マリア・アイリーン・ボーン。参りました」

「そう堅苦しくなくてもよい。砂糖は幾つ欲しいかね」

校長は杖を振るうと、ティーポットとカップを現出させた。3名分という事は、寮監の分はないのであろう。

「ありがたいことですが、結構です」

「そうかね」

校長はそれだけを言うと、自分の分だけを注ぎ入れた。

「……報告会と副校長より伺っておりますが、何を報告すればよろしいのでしょうか」

「事実については、概ねスネイプ先生より聞いておる。わしが聞きたいののは、2人がどう思ったかじゃ」

「どう、とは」

「何でも良い。あの夜に思ったことを、聞かせて欲しいのう」

「生徒の意見としては、ただただ恐ろしい。それに尽きます。マリアがああ場に居なければ、ハーマイオニーはもう写真の中でしか会えなくなっていたでしょう」

「君とグレンジャーさんとが、麗しき友情で結ばれていることは、マクゴナガル先生から聞いておるよ。ボーンさんは？」

「間に合って良かった。それだけです」

校長の眼鏡の奥。透き通った青色が、吸い込まれる様に光っている。校長の声は、鼓膜ではなく脳を震わせるように響く。

「グレンジャーさんは、トロールを倒せば周りに認められると思っただから、単身で立ち向かおうとした、と言っておったそうじゃな。ふむ、確かに筋は通る。じゃが、あのグレンジャーさんが、その様な事を考え、実行するとは俄には信じがたいのう。そこまで考えると、あの場におった生徒達は、グレンジャーさんがそうしようとした理由を知っ

ているか、あるいは理由そのものであると考えるのが、妥当なところじやろうて」

「副校長にもお伝え致しましたが、名誉の為に申し上げられません。真実はくだらないとだけ申し上げます」

「然り、真実が常に価値あるものとは限らんじやろう。しかし、君がグレンジャーさんを救ったという事実は、価値のあるものだと思うがのう」

そうだろうか。ハーマイオニーが救われる羽目になったのは、至極くだらない理由だ。結局は、運だった。ハーマイオニーに降り注ぐ、数ある不幸の中で、間に合った事だけが幸運だった。それは、自分にも、ダフネにも言える事。

狩人としての力も、結局は陰惨な業を見せただけの事。

「謙遜せずとも、君は狩人として、すべきことを為したのじやろう。」

甘い、赦しの言葉。

赦し？ 誰に赦しを乞う？ 何への罪だ？

待て、今校長は、何についてを語った？ 校長の声が頭蓋の中で反響している。五月蠅い。頭の中がざわめいている。言葉にならない音。音にならない言葉。脳をかき乱し、捏ね回し、そこを覗く瞳を得ようとすする狂気。

「開心術ですか。不愉快です。」

……実に、不愉快であると言わざるを得ません」

「それはすまなんだ」

校長は悪びれる様子が全くなかった。スネイプ教授は驚いた表情をし、ダフネの表情は曇った。

脳を探る音は既に消えた。見破られた為に術を解いたのか、あるいは全てを理解したからであるのか。

瞳とは、上位者と交信する器官。それを脳に求めたのは、上位者の心を知ろうとする試みの一つ。思考無くビルゲンワースの制服を模した様に、医療教会は物理的に脳を探るといふあまりに愚かな儀式を継承した。おそらくそれは、開心術に源流を持つ。

「申し上げるものは申し上げます。ですが、それは申し上げられるも

のに限ります。守ると決めた名誉にかけて」

「では、君の事を聞こうかの。君は加点を求めたと聞いておる。それを踏まえて、お主は純粋な意志で、グレンジャーさんを救ったと言えるのかね。怒りに任せ、敵を殺し、それが恥ずかしい事だから、それを誤魔化そうとして加点を得ようとした。あるいは、誰も褒めてくれないから拗ねて得点を求めた。そうは思わんかね。守るべき名誉とは、誰の為のものだったのかね？」

「それは……」

継ぐ言葉が無い。ハーマイオニーを救おうとしたか。それは、分からない。ただ身体が動いた。それはハーマイオニーを救わんとしたことだったのだろうか。ハーマイオニーが居なくなると寂しいという、自分の為の行動だったのだろうか。父王は繰り返し返しの果てに女王らを救ったと聞く。それはどの様な想いで為されたのだろうか。校長が指摘する様に、純粋な意志の下に為された奇蹟だったのだろうか。

「それは時系列を混同しています！ マリアがハーマイオニーを救ったという事実は揺るぎません。マリアが救おうとした事実も揺るぎません。後に抱いた感情がどんなものであっても、大広間を離れたあの時に、私達が抱いたハーマイオニーを想う気持ちは、誰にも否定させません」

ダフネの言葉には、温かい怒りがあつた。だが、その温もりは、刺さった棘の僅かな痛みを際立たせた。加点を求めたあの何気ない言葉は、本当に何気なかったのだろうか。

「グリーングラスさん。君が多くを語るのと対照的に、ボーンさんは黙りこくっている。その意味が分からないわけではないわけではあるまいな。ボーンさんは、それを認めているんじゃないやよ。ポッター君達を詰った様に、自分もまた、子どもじみた反発心で、反省をしていなかったと」「アレを開心術で覗いたというわけですか。何のためにそんな尋問してみた事をしたかと思えば、こうしてマリアを責める口実を見つける為ですか。浅ましい」

「言葉を慎め、グリーングラス」

「良い、セブルス。開心術で覗いた、それは違うのう。ポーンさんは聡明じゃ。開心術の『か』の字ですぐに心を鎖してしまったからの。1年生で使うには、驚くべき精度じゃった。

答えは、わしはあの場におったのじゃ」

「……ふざけていらっしやるんですか？」

ダフネの指先は、強く握られ、紅く色づいていた。それを目にしたのは、こうしてただどこを見るでもなく、項垂れているからだ。もう一度校長の目を見てしまえば、全て余すことなくあの青に飲み込まれてしまいそうだった。

「あの場において、アイツ等を咎めることもなく、諭すこともなく、あなたはこうしてマリアを責め立てている。一体どういう事ですか？

正直、教育者として狂っているとしか思えません」

「グリーングラス！」

「マリアとアイツらが同じ？ 断じて違います！ 自らの心を恥じることと、他者への恥ずべき行いを省みない事は違います！ 校長、お答えください。あなたはマリアを責めているのと同じ様に、彼らを責め立てたのですか!？」

「しておらん。彼らの行いは既にポーンさんが彼らに気づかせたじやろう。じゃから、わしはお主らに同じ事をしているだけじや」

「あなた何様なの!? 学校の管理者でしょ!?! それが校内に侵入した外敵を排除した者への態度なんですか? トロールがハーマイオニーを殺しそうになっていた時、あなたが何をしていらしたかは知りません。他の先生方も同じです。ですがマリアは、確かにあの場所に居たんです。それをなぜこんな言い方をするんです! マリアを責める時だけは教育者ぶって、為すべきを為さなかったのはあなたじゃないですか! 私は狩人の事を全く知りません。ですが、マリアは狩人としてすべきことをして、ハーマイオニーを救った。その何が無満なんですか!」

「君らが彼らの理由を無視して、一方的なものの見方をしたからじゃ。もちろん、わしは本気でお主らを傷つけようなどとは思っておらん。じやが、お主らの一部を殊更に強調すれば、この様にも見えるじやろ

う。事実がどの様なものであれ、事実の見方を変えれば、真実はどの様にも変わってくるのじゃよ」

「彼らの理由？ 理由があれば、それを認めろと？ 私が考える、彼らの理由とは、アイツらがあまりにも馬鹿なだけです！ 両親がいないから、貧困家庭の末弟だから、心が育たなかった。だからなんだと言うんですか！ それがハーマイオニーが傷つき、死にそんな事になつて、それを救ったマリアが不当に貶められる事を仕方ないと言える理由なんですか？」

ダフネは苦しそうに息を吐き、一方で校長は大きくため息をついた。スネイプ教授は形容しがたい表情で壁際に立ったままだった。脚の痛みが増しているのかもしれない。おそらく自分と思つてしていることは同じだろう。

もう、やめてくれと。

「そうは言うておらん。彼らを貶めるには、君らは彼らを知らないと言つておるのじゃ。わしがお主らの一面を抉り出したのと同じ事を、お主らはしていると言うだけじゃ」

「納得がいきませんし、したくもありません。罪人を非難するには罪を犯せと？」

「それは詭弁じゃ。何故その者が凶行に及んだかを知れと言つておる。復讐であつたかもしれないし、自衛の為であつたかもしれないし、愛する者を守る為であつたかもしれない。それを知つたからといって、彼の者の行いが正しいものであると言う事も出来ぬし、彼の者を赦せと言うつもりもない。じゃが、それを知らずして行いだけを責めると言うのは、あまりに浅慮じゃなからうか」

「アイツらの理由なんて充分に知っています。先程言つた通り、アイツらが馬鹿な子どもで恥知らずだというだけです。そしてその馬鹿が起こした事件を解決したマリアが傷つけられている。本来事件を解決すべきであり、生徒の安全に責任を持つべき人間によって。それだけで、私がアイツらを憎み、アイツらの非を詰る理由は十分でしょう。それに、どんなにあなたが薄汚れた誤解をしていたって、私がマリアもハーマイオニーも友達だと思つている事を穢そうとした校長

は赦せません」

校長は茶で口を潤すと、先ほどより大きなため息をついた。

「しかし、彼らとグレンジャーさんは、もう友達になつていようじゃ。なのに、お主らが彼らを赦さないというのは、それこそお主らの方が子どもじみているのではないかの。大人というものは、寛容さを得るといふことじゃよ」

「なら、校長ご自身が寛容さを表してください。マリアに対するこの仕打ちは残酷です。それに、ポッター達がハーマイオニーの傍に居るのは、虐めたままであることが後ろめたいか、それが副校長に露見することが怖いだけでしょう。校長は私達がアイツらを貶めたと仰いました。まさしくそうだったのでしょうか。私達はアイツらに、何の罪の気づきも、反省も与えられなかった。アイツらは私達への怒りだけを剥き出していました。そんな連中が、どうして反省して、彼女の友達になつたというのでしょうか。友達になるといふのは、買い物ではありません。積み重ねです。尊敬を集め、人が集まってくる校長には分からないことでしょうが」

「話は平行線の様じゃの」

「はい。永久に交わらないことを祈ります。それと、個人的なお願いですが、マリアにトロール討伐の点数をください。校長のお考えでは、そんなことよりも私達がポッターとウィーズリーを貶めたことの方が重大な関心事の様ですが、私はマリアがハーマイオニーを救つたという事実を、私達があんな連中と同じだなんて酷い侮辱で上塗りされたくはありません。浅ましいとも、なんとでもお考えください。マリアは学校の為にもなる、正しいことをしたんです。副校長は校長より――」

ダフネの腕を掴み、その言葉を止めさせる。

「いいんだ。純粹な意志ではなかった。気づかなかつたが、そんなのかもしれない。気づかなかつたという事は、愚かだという事だ。智慧が、足りなかった。ダフネの想いはありがたい。ありがたいからこそ、それだけでいいんだ」

「確かに、それは忘れておつたの。スリザリンに20点」

「要らないと申し上げております。あの血に塗れた業を見て、それでも私を友人としてくれる者がいる。それだけが、私が得た勝利です。校長の仰る通り、ハーマイオニーを救う事が、純粋な意志に因るものでない、汚洗されたものであるのだから、それで得た寮杯もまた、汚れてしまう」

「そうは言っておらん。そうして、拗ねた物の見方をすることもまた、子どもらしさじゃよ。本心からじゃが、グレンジャーさんを救ってくれたこと、感謝しておる。そうでなければ、ハリー達が新しい友を得ることもなかったじゃろう」

「要らないと言っているでしょう！　なんとわれようと、自らの罪を知ってなお、彼奴らの行いが罪であることは絶対に撤回しません。そんな連中と自分の友人を近づけた。そんな事に加点なんてされたくはありません！」

「……マリア。本当に、いいの？」

肯くと、ダフネは分かったと一言、校長の傍に歩み寄った。

「開心術を使うのなら、私のすることも分かりますよね」

ダフネはテーブルに置かれた2人分のカップを取り上げ、そして床に叩きつけた。

「子どもじみた反抗だという事は分かっています。ですが、子どもにだって、子どもなりの矜持があります。あなたの大切なポッターの様に。」

スネイプ寮監。さあ、25点を減らしてください。『あなたの』生徒である私達が、ここまで侮辱されているのに、あなたは何もしてくれなかった。せめて、これぐらいはして頂きますよね」

スネイプ教授は、その言葉に何の反応も示さず、先ほどと変わらぬ表情のまま、じつとダフネを見つめていた。

「行こう、マリア。ここにいちや、ダメだよ。ダメになつちやうよ」

手を引かれ、歩き出す。入室時と同じ様に、櫛の扉は自ずから開き、閉じた。掌から伝わるダフネの温もりは、焼くように熱い。螺旋階段もまた、同じ様にうねり、2人を運んだ。同じであるはずなのに、どうしてこうも変わってしまったのだろう。

ダフネは大声で泣いた。驕りでなければ、彼女にとって2人もの友人が、理不尽に傷ついた様に感じているのだろうか。

だが、それも純粹な意志なのだろうか。友を想って泣くのか、友を想う自分の為に泣くのだろうか。校長の言葉は、見えない心をさらに秘匿する。

校長の言葉は、呪いだった。

クイデイツチ

その晩、悪夢の狩りは精彩を欠いた。

豚の突進に轢かれ、メンシスの悪夢どころか、ビルゲンワースにすら辿り着かずに目覚めを迎えた。自分でもあまりの醜態に驚き、呆然としていると、ヘルマンはしばらく狩りを止めろと言う。

「何故だ。いや、あまりに不甲斐ない事は分かっている。だが、それ故に修練はやり切らねばならない。何故それを止める」

「マリア。今の君では、何も君の糧とならない。よく頭を冷やせとは言うが、心まで冷えていては成功も失敗も全て無価値だ」

「悪食とて血肉にはなるだろう」

「ならない。水を飲み続けても、痩せるばかりだ」

「うるさい。私が修練をしたいと言うのだから好きにさせてくれ。それと、女性に肥るだの痩せるだのと言うな」

「学校を出ればわがままお姫様というわけかい？」

「ああそうだ、私は友人の危機にすら昏い喜びを覚えるクソガキだからな。だから狩人として無心に狩りを全う出来る様にしようとしているんだ。助言でもなく小言だけなら口を閉じていろ」

「また酷く子どもじみた拗ね方だな。まるで反省していない」

「反省しているから狩人として——」

「いい加減にしろ。自罰的になるのも、我武者羅になるのも、反省ではない。思考停止でしかない。それらは手段の一つでしかない。手段如きに意思を奪われるな。意志を実現する為に思索を巡らせ、手段を選ぶのが人であり、狩人だ。狩人の意志すら忘れた君の何が狩人だ」

「うっさいなあ！ だからモテないって馬鹿にされるんだろう！ 君は何度もドロテアを泣かせてきたのを忘れたのか！ 反省するのは君の方だろう！」

言葉も崩れる程苛立ち叫ぶと、ヘルマンは大仰に肩をすくめ、溜息を吐いた。

「悩み事があると言うから問題点を指摘すると癩癩を起こす。女性とというのは度し難い。同じ生き物とは思えないな」

「そうやってさきも自分は冷静だという体を装ったところで、慌てているのは分かっているんだよ！ ドロテアが泣く度にお兄様に泣きついているのは知ってるんだよ！ こういう時に女が求めているのは意見じゃなく同意だって言われ続けたでしょうが！」

あの場で忠告をしたのはヘルマンであり、その忠告は正しいものだった。それを真に吸収できていなかったからこそ、校長の言葉に打ちのめされたのだ。であるならば、ヘルマンに教えを請うのが良いと思った。しかし、彼は教える事なく、ただ仕込み杖を振るうばかりであつた。

自分のことながら甘つたれた考えだと思うが、心も骨も折れた時に必要なのは正しい添え木なのだ。時間に任せてしまえば歪んだままとなり、更に刺激を与えれば折れたままとなる。

お兄様であれば、悪夢の狩りを一緒に過ごしてくれるだろう。お姉様であれば、茶を飲みながらじつと話を聞いてくれるだろう。ドロテアであれば、彼女の失敗談を話してくれるだろう。ジェラルドは論外だ。

ヘルマンであれば、厳しくも正しい添え木になってくれるだろう。そう考えていたのだが、ヘルマンは正しい導きにもならず、僅かに残った髓すら砕こうとしていた。

人形が抱きしめてくれたが、灰血を宿す硬い指には温度が無かつた。ダフネの手は温かく、軟らかかつた。しかし、あの温もりが事実であつたとして、その心が如何なるものかは分からない。ダフネであれば、純粹な意思を持てるのだろうか。仮に彼女が狩人であれば、私心無くハーマイオニーを救う事が出来たのだろうか。こうして友人の事すら、疑念と嫉妬無しに見る事が出来ない。それがこの心の弱さ、心の幼さだと、校長は喝破したのである。

人形でさえ、主人の悪夢の終焉に祈りを捧げ、髪飾りに心を震わせた。血を流すだけで、意思を持たず、無様に感情のまま喚き立てる少女が、クソガキではなく何と言うのだろうか。理解していてなお、この感情を狩る事が出来ない。

ささくれだつた気持ちのままに寢床に入ったところで寝られる訳

もない。どうせ悪夢の中にいれば現世の時間は経たないのであるから、何をするでもなく、ヘルマンが杖を磨いているのをぼんやりと眺めた。ヘルマンは「泣き出さないだけドロテアよりマシか」だの「今度は奥歯じゃすまないかもな」だの、独り言が激しい。メンテナンスが終わると、ヘルマンの説教が再開された。

「何があつたかは大体が想像出来る。誰に言われたかは知らないが。言われた事について僕が言えるのは、人の話を鵜呑みにするな、だ」「それは『クレタ島民は嘘つき』だ、では？」

「エピメニデスのパラドクスの事か。あれもまた鵜呑みにするから起きるパラドクスだ。クレタ島民の大半は嘘つきだとしているだけかもしれないし、宗教、国家、民族、複数ある内のある特定の事物に対して嘘つきだとしているかもしれない。そもそもが、エピメニデスのパラドクスの元は、信仰心からの嘆きを切り取った、何の論理性もない文言だ。切り取られたものを元にしていいるのだから、前提が隠されている。隠された前提を考慮せずに、ただ表面的な文言をなぞるから理解に苦しむ事になる。

それに、僕は鵜呑みにするなと言っただけで、否定しろとは言っていない。所詮は人の言う事。感情と論理は不可分だ。いかに論理として正しくとも、その論理の源は人の感情だ。正論が正しく正論であるとは限らない。正論を振りかざす人間の感情が正しく善意であるとも限らない。もっとも、これは君がよく実感したことだろうな」

「話が長い。まとめろ」

「人の話を鵜呑みにするな」

「そのままじゃないか」

「それ以上のことはない。さっさと目覚めて、寝るんだ。明日はディルクとイングリット、それにドロテアの試合だろう」

目覚めて、寝る。言葉にしてみれば奇妙な事だが、こんな生活をもう2ヶ月は続けている。

「ヘルマン達は？」

「ジエラルドは出るはずだ。僕は補欠さ。ジエラルドが肋骨を折りやがったから。観戦するなら、厚着していくと良い。選手と違って、風

の吹きつける観戦席に座っているだけなのは辛いだろうさ」

「それも鶉呑みにするなと？」

「……早く寝なさい」

寮対抗であるのだから、実況を一人の寮生に任せる事は間違いではないか。詩文でも詠んでいる様なグリフィンドル代表選手の紹介と、極めて事務的なスリザリン代表選手のそれ。

クイデイツチを知っていて、その上で興味がない身にとって、同胞たち以外に見所はない。非魔法族生まれにルールを説明すると、誰もが口を揃えておかしいという。それでいて興奮しているのだから始末に負えない。

もちろん、寮生の一人としても、妹としても蛇寮の勝利を願う気持ちはあるが、それはクイデイツチの勝利ではなく寮の勝利に向かうものだ。

ダフネは「お姉様ーっ！ お姉様ーっ！」と絶叫し、武術を嗜むミリセントは無言で魅入っており、パンジーはマルフォイの蘊蓄に聴き入っていた。

獅子寮の観戦者を見やれば、「ポッターを大統領に！」という意味不明な文言が縫い付けられた横断幕を掲げている。ラスベガスのネオンサインもかくやと色鮮やかに光るそれは、ハーマイオニーが変身術を施したものだという。遠くに行ってしまったものだ。

試合開始。

猛然と緑の閃光が2つ走った。お兄様とお姉様だ。

「珍しいスタイルです！ 普段のスリザリンは嫌らしいカウンターの後に得点を奪っていきますが、どうした事でしょう！」

お兄様がクアツフルを抱え、お姉様はそれに続く。それから、遙か高く、それこそマルフォイの言う、ヘリコプターの飛ぶ高さまで上つていった。あまりの高度と上昇速度に、ブラッジャーも反応する事がない。

「どういうことだ？ どういう意図がある？ マルフォイ、説明してくれ」

「君の兄君と姉君は最高だつてことさー！」

「訳が分からない」

「クイディッチでは、クアツフルをゴールに入れるか、スニッチを掴む事ではか得点がない。ああしてクアツフルがゲームに絡まなくなるとどうなる？ スニッチを掴むしか無いんだ。つまり、シーカー対決だ！ あの2人は、ポッターを試しているんだ！」

呆然としていた観客達に、理解が伝播する。

「汚いなスリザリンさすがスリザリンきたない！あまりにもひきようすぎるでしょう！」

興奮のあまり、言語能力が著しく低下した実況者が叫ぶ。

「卑怯？笑わせるなよ、ジョーダン」

スリザリンのキャプテン、フリント先輩が喉に杖を沿わせ、拡声魔法をかけて観客に語りかけた。クアツフルは遙か彼方にあるのだから、チエイサーである彼にすることは無い。悠然とコート中央に浮かび、観客席を睥睨している。

「オレ達は確かに勝つ為にはなんだつてする。ラフプレーは当たり前だし、精神攻撃は基本だ。だがなあ、オレ達はいつだって、ルールブックには反していない！」

ところがどうだ？ グリフィンドールの期待の新人は、規則に反して1年生でありながら代表選手だ。規則を曲げて、それでいてなお許される存在。であるならば、紳士たる我らは敬意を払おう。敬意を持って、その能力を見せてもらおうとしよう。そう考える事の、どこが卑怯なんだ？

これを卑怯と考えるオマエの考えが透けて見えるぜ。実戦経験がないから、1年生だから、マグル育ちだから、不利だと考えているわけだ。チエイサーの援護がなければ、グリフィンドールは負けると。

だがそんなものは関係ない！ 才能で特例を認められたんだ！ 才能を見せてみる、ミスター・ポッター！

この、大観衆の前で！ オマエの価値を証明してみせろ！ オマエの血に流れる、才能の力を！」

試合展開は一方的だった。全てをスリザリンが支配していた。

ポッターがスニッチを見つけたかと思えば、すぐにブラッジャーが打ち込まれる。赤毛の双子がブラッジャーにお兄様とお姉様を狙わそうとするも、数百メートルも離れた場所に鉄球を打ち込む術などない。味方のチェイサーを囮にし、ブラッジャーの高度を上げさせようとすれば、ビーターのドロテアがそれを撃ち抜いた。

ブラッジャーは2つある。それらが狙うのは、スリザリンのシーカー、チェイサー、ビーター、キーパーの5名、グリフィンドールはさらにチェイサー2名を加えた7名である。当然被攻撃数が増えるグリフィンドールだが、ビーターの数はスリザリンと同数。防御の手が足りないのは明白だった。

「諸君！ つまりは、こういう事だよ！ グリフィンドール期待の新人は、確かに飛行術には優れていた。それは1年生なら良く知っている事だろう！ だがしかし、まるで全然、クイディッチの選手としては、程遠い！ だというのに、何故ポッターはクイディッチの代表選手になったのか？ 遺憾だが、真に遺憾だが、オレを含め観客はある疑念を抱かなくてはならない！」

教授陣は、ポッターだから代表選手に据えたのではないかと！ 魔法使いとして生まれ、箒に乗る人間なら誰しもが憧れるだろう。代表選手として、空を駆ける自分に！ 防御をすり抜け、ゴールにクアッフルを叩き込む快感！ 荒れ狂うブラッジャーを殴りつけ、味方を護る充足感！ 迫り来るチェイサーとの瞬きすら許されない駆け引き！ 勝利に至る、栄光と共に掴むスニッチ！

さあどうだ諸君。自分は観客席にいる。かたやポッターは特例の代表選手。随分と差がついたものだ。悔しいでしょうねえ」
「てめえ、ふざけた事を言うなよフロント！ ハリーは代表選手となるだけの才能がある！ 何度も練習を積み重ねてきたんだ！ 俺たち選手はみんなハリーの事を信じている！ お得意の精神攻撃は効かないぞ！」

ウッドだったか、グリフィンドールのキャプテンもまた、拡声魔法を用いた。

「ああ？ ……なあオリバー。どうして反論した？ オレ達がポツ

ターの事を過小評価しているなら、オマエらにとって好都合じゃあないか。ってことはだ、今のオマエの発言は、ポッターが何の事はない、フツートの1年生だって事を暗に認めてるってことだな」

「そうやって胡座をかいているといい！ 最後に笑うのは俺たちだ！」

「おたくのポッターは胡座すらかけないみたいだぞ。ヒヤハ、ヒヤハッ

「ヒヤハハハハハアーツ」

ポッターは暴れ馬に乗るが如く、箒に振り落とされそうになっていた。空中をジグザグに飛び、速度は不規則に加減速している。あれに乗り続けられるという点では、確かに飛行術に優れているのだろう。

双子が直ぐに近寄り、ブラッジャーから守りつつ、ポッターを飛び移らせようとしたが、双子が近づくと、ポッターの箒はそれに反発する様に高度を取った。

「せめてもの情けだ。試合はもう終わらせてやろう」

試合開始からスニッチを目で追いつけていたらしいジェラルドが、フrint先輩の言葉を受けて進みだした。相手が万全の状態でない時に全力を出すのは気が咎める様だったが、このまま醜態を晒し続けるのも酷だと思ったのだろう。グリフィンドール側のゴールポストの根本にある煌めきに飛んで行った。月の僅かな光を反射する水銀弾すら見逃さない狩人の目は、晴れ渡る寒空に輝くスニッチなど、容易に見つけ出すことが出来る。

ポッターが箒の制御を取り戻したのと、ジェラルドがスニッチを掴むのは同時だった。

「呪いを掛けられていたんだ！」

ウツド先輩が20分に亘り抗議し、確かに正常な挙動には見えないとするフーチ教官だったが、スリザリンチームが何かをしたという証拠もなかった。抗議むなしく、結局、0対150点で終着となった。

何より、フrint先輩の大演説は、グリフィンドール以外の寮に決定的な疑念を与えていた。

呪い

ある意味劇的だった蛇寮対獅子寮初戦。あれはポッターを貶める為に予定されたものではなかったと言う。元々、スリザリンはラフプレーが無くともクイディッチチームとして優秀だ。魔法族生まれ故に個人の飛行経験は多く、チームとしても親戚同士であり、連携練習をプライベートで重ねている。それでも敢えてラフプレーを用いるのは、確実な勝利のためだ。ラフプレーは対戦相手の戦意を削ぎ、恐怖を刻み付ける。

それでいて、何故ポッターを試したか。それは、獅子寮の氣勢を削ぎ、リーグで勝つ為である。

仮にポッターが有能なシーカーであったとする。であるならば、獅子寮と寮監は勝利の為に規則を捻じ曲げたという誹りは免れ得ない。普段から蛇寮対他寮として団結している連中であるのだから、それを裏切った獅子寮に対しては、蛇寮に向けるよりも大きく気炎を揚げて挑むだろう。

仮にポッターが凡庸なシーカーであったとする。であるならば、各チームは経験の浅いポッターを狙い撃てば良い。元々の獅子寮のプレイスタイルは、キーパーのみに守備を任せ、ビーターはチェイサーの援護、シーカーはチェイサーが十分に点数を取ってからスニッチを得る、という攻撃偏重のものだ。ウィーズリーの兄は名シーカーで、援護が要らない選手だった。即ち、獅子寮のプレイスタイルは、シーカーが自由である分、シーカーは独力で脅威に対処しなければならぬ。しかし、後任シーカー不在を想定して為されてきた獅子寮の練習は、そのプレイスタイルとも、スピリットとも噛み合わなかった。チェイサー同士で連携を取らず、オールストライカーとしてプレイできたのは、守りを捨てた攻撃型ビーターの援護があつたからだ。それが、以前にも増して無謀な攻撃と、不慣れな防御では、機能不全に陥るのも当然の事だ。寮生の気質が独断専行気味である事と、攻撃偏重で守備を省みないスタイルのグリフィンドールは、その様な事態になつてなお、キーパーの指揮に従わない。否、従う訓練をしていない

のだから、聞いてはいても実行が出来ないのだ。

また、シーカー不在という事態に、多少の憐れみがあったところを、凡庸でありながら教授陣が特例で認めたポッターがシーカーに据えられる。実力の選抜を受けた選手であれば、思う所の1つ2つはあるだろう。

「という事だ。分かったか？素晴らしいぞ、ヤーナム一族も、これを実現したプリント先輩も」

「貴公、クイディッチ好きは本当だったのだな」

マルフォイに説明を求めた。矢鱈早口で説明するので、理解が十分であるかは自信がないが、他寮の思惑を補完すればこの様になるだろう。

「で、実際のところ、ポッターの実力はどうなんだ？」

「見ただろう？無様なものさ」

「いや、それは違う。確かにポッターは優秀だ。特にあの予測力と対応力は無視出来ねえ」

プリント先輩がいつの間にか聞き耳を立てていた様だ。

「オレ達はアイツを何度も狙ったが、全てすんでのところで躲かされている。身体の柔軟性、瞬発力、箒の機動性だけで躲せるほど、ブラッジャーは甘くねーよ。その軌道を予測したとして、身体がついていかなければ、それもまた同じ。ドボン、だ。ポッターは才能と肉体が両立した、悪くないどころか優秀なプレイヤーだ。」

ただ、グリフィンドールの中で最も優れているのはウツドだ。流石クイディキチなだけあるぜ。アイツはポッターが狙われることを見越して、箒上の回避だけに訓練メニューを絞ったんだ。スニッチを探しやすい様に、スニッチを見失わない様に、位置を変えずに回避出来る様にしたんだろうな」

マルフォイのポッター評は幾分か濁っていたらしい。これだけ好きなもの嫌いな人間が長じているとなれば、歪むのもむべなるかな。自分に置き換えて、マルフォイと同じ心境になるだろうことは断言できる。心がそうであれ、それを表に出すか否かという事が、マルフォイに感じる幼稚さだろうか。他人事でない事も分かっている

が。

「意外ですね。敵を賞賛するとは」

「クイディッチに関しては、オレは公平さを重視する。公平な目で見なければ、敵の強みは小さく、敵の弱みは大きく見える」

フリント先輩はグラスを呷った。野卑な様でいて、聖血の一族。所作は優雅だった。

「勝利の理由は見えねーが、負けの理由はいつも明白だ。負ける理由を潰していないからだ。負けつつのは、つまるところ不足だ。等の性能が足りねーのは金がねーからだ。個人の技量が足りねーのは、訓練時間と質、そして才能がねーからだ。足りねえ物を補う事は難しい。誰もそんな穴なんぞ作りたくもねえのに、自然に出来ちまった穴だ。なら、どうやって相手の穴をより深く、より広くしていくかを考える。それが勝負だ。」

フレッド・ウィーズリーがジョンソンと喧嘩したことも、ジョージ・ウィーズリーがマダム・フーチの前で銀の矢を悪く言ったことも、ウッドが興奮し過ぎて安らぎの水薬を処方されたことも、ポッターが不安のあまり朝メシを食べられなかったことも、全ての穴を見逃さなかった。そうした全ての下準備が、自信に繋がる。自信のないプレイは、つまり、悩みだ。勝利の為に一切の思念は要らねえ。目の前のゴールにどうやってクアッフルをぶち込むか。それだけを考える。不安をねじ伏せ、雑念を切り捨て、そして最後に残る一投、それが集中ってことだ」

「……集中、ですか」

言葉を反芻する。

それは、狩りにも通じることだ。迷いのある踏み込みは隙を生み、敵の攻撃機会となる。迷いのある攻撃は敵の皮を撫でるに過ぎず、骨を断つことはない。鍛え上げた武器と血晶石、研ぎ澄まされた意志による一撃こそが、価値ある一撃となるのだ。

「そうだ、集中だ。結局、オレの演説もそこだ。ポッターは優秀だった。だが、それを知れば、他の寮は委縮するだろう。つまり、集中を乱される。クイディッチは700を超える反則が定められた、複雑な

ルールに思えるが、本質は至極単純だ。クアツフルをゴールに投げ入れ、スニッチを掴めばいい。それだけだ。

だというのに、委縮してポッター対策などと特別な事をしてみる。どの寮もグリフィンドールの連中の様に、作り上げてきたプレイスタイルを自らブツ壊すことになる。だから、俺はポッターなんて雑魚だという幻覚を見せてやったのさ。といつても、大方の筋書きはお前のところのヘルマンが考えたんだがな。オレがやったのは、整えただけだ。よりポッターが学校に鼻屑されていると思わせる様に、よりポッター自身のメンタルがブツ潰れる様にな。あいつもまた鬼だ。勝負の鬼だ」

普段はスポーツについて、軍事教練を薄めた物程度にしか捉えていないヘルマンだったが、それでいて彼にもクイディッチに掛ける情熱はあつたらしい。

「もちろん、ポッターが優秀なところを見せれば、マクゴナガルが副校長という立場を利用して不公平を行ったと、他の寮を焚きつけてやったさ。普段クソ真面目で通つてるマクゴナガルが、自分の趣味の為に校則を捻じ曲げるなんざ、その真面目な裁定に減点を食らった連中は今頃燻つてるだろうさ。少し息を吹きかければ、あつという間に燃え上がる。ま、どつちにしたって、他の寮を鼓舞するつもりだった」

観客を恐怖に陥れた、あの狂気じみた哄笑にも納得がいきかけたが、疑問が浮かぶ。

「何故他寮に有利になることをしたのです。そのままポッターに委縮しているようなら、その方が都合良いでしょうに」

「分かってないな、ボーン」
「何だ、マルフォイ」

マルフォイは髪を撫でつけながら言った。目を見張る様なブロンドをオールバックにしているが、それが名家の気品ある髪型とは思えなかったし、むしろより幼く見えた。その辺りをパンジーは素敵だと言うが、彼女に言わせれば何もかもが素敵なのだろう。マルフォイはこれだけでスリザリン女子生徒から人気がある。家名と富もそうだが、他寮に向けるそれとは違い、蛇寮に向ける態度は寛大だ。そう

言ったところから、少し背伸びした可愛い男子として人気がある。パンジーがあざとくマルフォイに侍るのを忌々しそうに見る女子生徒も少なくはない。だが、聖血マルフォイ家に嫁入りすることが出来そうな者は少ない。その資格を持つ故、パンジーはダフネを警戒しているというわけだった。

「グリフィンドールだけが、スリザリンチームのラフプレーに委縮していかないからさ」

「その通りだ、マルフォイ。スリザリンに委縮する、レイブンクローとハッフルパフ。そいつらがさらにグリフィンドールにも委縮してみろ。オレたちが持つ、鷲と穴熊へのアドバンテージをグリフィンドールにもくれてやる事になる。クイディッチは勝利数ではなく、総得点数を争うリーグ戦だ。ポッター対策なんてしてみる。超攻撃型のグリフィンドールはスニッチを上回る点をクアッフルで楽々稼ぐだろうさ」

「ですがそのポッターは無視できるというものは、勘違いでしょう。正確に事を見極めることが重要だと仰ったではないですか」

「現時点で、ポッターが特別視する程のシーカーじゃねえのは事実だ。フツの未熟なシーカー対策をすればいい。ポテンシャルはかなりのもんだが、経験がないってのは致命的な欠落だ。」

それに、勘違い結構。自信ってのは、楽観的勘違いに似ている。その勢いのまま、精々3寮で潰しあっている。根拠のない自信は、慢心だ。そして、グリフィンドールが自身に打ち込んだ楔だ。あいつらは練習を重ねてきたから問題ないと慢心していた。だが、結局シーカー対決に持ち込まれれば、その技術は未だ実戦レベルじゃねえって事に気づいた。すぐにはあの歪んだプレイスタイルを矯正できねーだろう。それは、他の寮の連中も気付いただろうさ。

シーカーの本質的な役割は、探して、追跡することだ。ブラッジャーを撃ち込まれた程度で見失う様じゃ、まだまだシーカーとしては未熟なんだよ。恐怖ってものは、理屈じゃねえ。ドとミとソの和音が心地よく感じる様に、心がそう出来上がっちゃってる。それをねじ伏せるのは圧倒的な集中、そして、思考や感情が入る余地もない、経

験による反射だ。ポッターには未だそれが無い。

お前の言った通り、幾つか試合をすれば、ポッターも仕上がって来るだろう。ウィーズリーズのお守りが要らなくなるくらいにはな。だが、レイブンクローとハッフルパフチームが自分達の慢心に気づく頃には、オレたちがトップを独走だ――

つたはずだが、一つケチが付いた。あのポッターの動き。あれは間違いない、箒かポッター自身に呪いが掛けられていた。お前も分かるだろう、ドラコ」

急に水を向けられ、マルフォイがむせた。マルフォイは上品にクラッカーとチーズを齧っていた。下男たちがいない事が幸いだった。あれらもまた、名家の生まれのはずだが、豚の様に食するというマナー違反を咎めた者はいなかったらしい。

「認めたくはないですが、ポッターは箒に乗る事については十分な技量がある。それに、箒は高度な安全性が保たれている。それが、あんな暴れ方をするなんて考えられない」

「ああ。途中までは十分以上にブラッジャーを躲していたんだからな。だからこそ、オレは箒乗りとしては十分だが、シーカーとしては未熟だと喧伝したのさ。だが、ああも酷い有様を見せられれば、誰もが何かの妨害を受けたことは薄々感じるだろう。そして、悩むだろう。ポッターは優秀なのか、無能なのかつてな。オレはポッターが優秀であったとしても、無能であったとしても、どちらも利用するつもりだった。だが、この結果は望んだものじゃない。ムカつくぜ。なんでオレに気持ちよくプレイさせないんだ！　どこのどいつだ、こんなふざけた事しやがったのは」

スポーツマンシップという言葉からかけ離れたフロント先輩のクイディツチ観だったが、彼は彼なりに真剣であるらしい。そこに水を差されたことは、彼にとって耐えがたいものだった。

ミリセントはジョギングに出ており、パンジーは昨日の観戦後から体調を崩していた。ダフネがもそもそと身支度を整えるのを待って大広間に来れば、同じ様に遅起きの寮生たちが気だるげに朝食を摂っ

ていた。蛇寮生は遅くまで談話室で騒ぎ、獅子寮生は悔しさに眠れず、といった理由か、テーブルのほとんどは空席となっていた。

「マリア！ ダフネ！」

「おはよう、ハーマイオニー」

「おはよう、マリア、ダフネ」

「この流れは何度目だ。とにかく、話があるなら朝食を終えてから――」

「騒々しい今のうちの方がいいの。何でもないフリをして聞いて。ハリーは呪いをかけられていたの」

「二知ってる」

プリント先輩の説明は理に適っていたし、あのマルフォイでさえ肯定したのだから、疑う余地はないだろう。

「そう、それもスネイプに」

「ないとも言いきれないが……」

「ないよ。校長のお気に入り呪いなんて掛けるはずがない」

「証拠ならあるわ。ハリーの箒が暴れていた時、スネイプは瞬き一つしないでハリーを見ながら呪文を唱えていたもの。だから、教員席に忍び込んで、スネイプのローブに火をつけたの。そうしたら、ハリーの箒は落ち着いたわ」

呪文が分からないので何とも判断がつかないが、聞いた限りの状況を考えれば、スネイプ教授が怪しいとは言える。他の可能性を考えれば、共犯者の存在もあり得るが。

「だとしても、何のために？ ポッターに恥をかかせるためか？ 寮監は確かにポッターを晒し上げることはするが、自ら手を下したことはないぞ。今までがそうだっただけで、これからは違うと言われれば否定は出来ないが」

「それに、寮監はスリザリンを贖罪するけど、手助けは絶対にしないよ。クイディッチに勝たせる為にポッターを呪ったりはしらないと思う」

いい加減ポッター達も学んだらしく、彼らはスネイプ教授にとっての反抗的な生徒ではなく、ただの不出来な生徒になる様に努めてい

た。努力の方向性が馬鹿らしいとは思いますが、スネイプ教授も初期程の減点は出来ていないことから、一応の効果はある様だった。

「あの4階廊下には、ケルベロスがいるの。スネイプはそこに護られている何か、ニコラス・フラメルにまつわる何かを奪おうとしているのよ」

「……は？」

「ケルベロスの事、前に聞いたじゃない。ちよつとした事故であそこに入ったんだけど、あそこにはケルベロスが居たわ。最近、スネイプは脚を引きずっているでしょ？ あれはケルベロスにされたんだわ」

ニコラス・フラメル。聞き覚えはあるが、それがどういう人間であつたかは思い出せない。おそらくビルゲンワースの教室棟で知つたものだと思うが、上位者研究の多岐に亘る思索の中でどういった分野のものなのか。

「待って、ハーマイオニー。それは話が飛びすぎてる。寮監がポッターに呪いをかけた事とケルベロスの護っているものとの間に何にも関係がないじゃない」

「ダフネの言う通りだ。別に我が寮監だから肩を持つというつもりもないが、少なくとも寮監がポッターを呪うメリットがない。ケルベロスの宝を狙うにはポッターを呪う必要があるのか？ そもそも、ケルベロスにされたのかも分からない。ケルベロス如き、学生でも殺せるぞ」

「それは貴女たちだけでしよう」

「いずれにしても、あまりに短絡的だ。確かに、ハーマイオニーの言う通り、スネイプ教授はポッターに何かをしていたというのは、そうかもしれない。理由は全く分からないがな。だが、その他の事は、状況証拠も物的証拠もない。ただ単に、怪しい人間は怪しいと言っているに過ぎない」

ハーマイオニーが怒った表情をしたので、口を噤んだ。剣呑な雰囲気だ。何人かが振り向いたが、すぐにそれも喧噪の内に消えていった。

「ハーマイオニー、別にあなたを否定しているつもりじゃない。けど、

寮監がなんだったつけ？ ニコ……ニコ・フラメルっていう人の何かを奪おうとしているってことは、否定も肯定も出来ないよ。判断材料がなさすぎる」

「そう……そうね。ちよつと感覚的過ぎたかも。あと、本題なんだけど」

今までは前文だったということか。

彼女がスネイプ教授に放火したという事は、品行方正を心掛けていた彼女にとって、衝撃的な事だったのだろう。それをしてまでポッターを助けたいと思ったのであれば、それを一々咎める事はないが、友人が嫌いな人間と仲が良いというのは寂しさと嫉妬を覚える。醜悪な感情だ。

「ニコラス・フラメルってどういう人なの？ 何をした人？」

「名前には聞き覚えがあるが、詳しくは知らないな。それなら副校長に訊いたらどうだ」

「そうだよ。あれから、副校長のところに行つたの？」

「……まだちよつと、気まずくて。マクゴナガル先生が私を避けているみたい」

無理もないだろう。だが、これから副校長の後ろめたさはより大きくなるだろう。ポッターに箒を贈り、自寮の代表選手に据えたこと。フrint先輩のあの大演説で、その意味はより大きくなっていくはずだ。フrint先輩によれば、副校長もまたクイディキチらしいが、その副校長の人間らしい感情は、人間らしい理性を苛む事だろう。そこでハーマイオニーに鞭を与えるという事は、正しく学生として努力するハーマイオニーに対するものであったとしても、より負担となるに違いない。だが、その鞭が手元にある限り、ハーマイオニーの誇りを傷つけたという事実は心を苛み続ける。

「ハーマイオニー。どうするかは貴公の自由だが、鞭を貰いに行くべきだと思う。どういう形であれ、副校長の善意から成ったものなのだろう。副校長は悪人とは思えない。恐ろしいとは思うが」

「そうだね。早めのクリスマスプレゼントとしてもらえばいいじゃない。それなら、鼻屑もご褒美も関係ないよ」

「……そうね。二人とも、クリスマスプレゼントは期待してなさい」
窓から見える空は、昨日とは変わって淀んだ曇り空だった。冬が来る。もうじき雪も降るだろう。ジョギングから帰ってきたミリセントは、季節感のない恰好で大量の肉を皿に盛っていた。

蛙チヨコレート

「クリスマスに学校に残る者はこのリストに署名しておく様に」

珍しく寮監が談話室に姿を見せたと思えば、それだけを言っただけで、ぞんざいに羊皮紙をテーブルに放り、帰って行った。

「貴公らはどうする?」

「残った方が面白いけど、家から戻って来いって言われてるし」

「私も。ダフネとは一緒にマルフォイ家のパーティーに出るけど」

パンジーにとって、ダフネは一方的な恋敵である。マルフォイがどう思っているのかは見当もつかないが、ダフネがマルフォイの事をさして意識していないのは明白だった。恋は盲目というやつだろうか。「私ははつきりとは言われてないけど、親は家に戻って欲しいみたい。前から薄々感じてたけど、ホグワーツの事、あんまり好きじゃないみたい」

こんな時にも、ミリセントはダンベルを使って鍛えていた。狩人は血の魔力を使って筋肉を賦活させる為、これといって筋力トレーニングを行う必要はない。それだけに、ミリセントの日々の鍛錬は彼女の意志を感じさせ、好ましく思えた。

「そうか、寂しくなるな」

「マリアは帰らないの?」

「ああ。ベルリンの壁崩壊以来、家は少し忙しくなっていてな。クリスマスの間だけでもと、兄上とジェラルド先輩は狩りに駆り出されている。家に戻っても家族が集まっていないんだ」

「ソ連が崩壊したら大変そうね」

宗教を批判したところで、神を共産主義に置き換えただけのこと。イデオロギーの死に殉じる教徒もいるだろう。ソ連圏内で起きる事故は、ソ連当局が対処するのだろうが、それらと付き合いのある英国魔法族への影響はこちらで対処せざるを得ない。英国魔法省の役人達が粘り気を感じる様な修辞と共に協力要請をする事は容易く想像できた。

「外国にも狩人っているの?」

「完全に同じとは言えないが、いるぞ。日本の神職や陰陽師、マタギが近いだろうか。もつとも、あちらでは獣を鬼と呼ぶらしいが。実物を見た事はないが、紙とペンで狩りをするとか聞く。まさに東洋の神秘だ」

「色々よく分からないわ、あの国。料理は美味しいらしいけど」

「英国料理と比べればなんだったって美味しいでしょ」

「仏国料理は伊国の料理人を招聘した事で開花したと聞く。何故英国はそうしなかったのか……」

皆、私の代わりに家族との食事を楽しんで来るといい。私は独りで肉と芋と豆で腹を満たす事にするよ」

オルゴールからは、安らぎを与えるメルゴの子守唄。

お祖父様からお祖母様に贈られ、お祖母様からお母様に預けられ、お母様からお父様に亘り、そしてお母様に返ったオルゴール。それを模したものだ。幼き頃にねだったところ、お父様は駄目だと言った。代わりに工房が作り上げたこれを渡された。あのオルゴールはきくと、夫婦の想い出なのだ。夫婦だけの想い出なのだ。

お父様にとっては、救えなかったお祖父様への哀悼。そして、お母様を救う為の意志、正しく狩人の確かな徴。

お母様にとっては、お祖母様から継がれた、お母様への愛情。

おそらく、お祖母様は既にお祖父様が夢から醒め、血に酔い始めている事に勘付いていたのだろう。だから、オルゴールを持たずに連れ戻しに行った。お祖母様はオドンの地下墓までたどり着いたことからするに、お祖母様もまた狩人の業を身につけていたのだろう。ヘンリック曾御祖父様の血を引いているのだから、不思議な事ではない。

オドンの地下墓でお祖母様は物言わぬ屍となっていた。人のままだに亡くなったのは幸いだったのか。あるいは、祈る神すらなく、絶望の淵に沈んだのか。握りしめていた真っ赤なブローチには、お祖母様の名前と、お祖父様からの愛情が刻まれている。きっとそれだけで、お祖父様は人に帰れたはずだったのだ。お祖母様の御顔を見れば、人に帰れたはずだったのだ。お祖父様が人に帰れないという事は、お祖母様の死を意味する。それでもなお、お祖父様が帰る寄る辺を求めた

時、お母様がお祖父様の導きとなる様に、お祖母様はお母様にオルゴールを遺したのだ。

「哀しい曲ね」

「いや、愛に溢れた曲だ」

お母様がこの曲を流した夜は、お兄様が露骨に夫婦の寝室から遠ざけようとするのが常だ。それでもなお漏れ聞こえてくる嬌声がやまじしい。愛情と性愛とを結びつける事が不潔と思う程、純粹な子どもでもないが、外泊するなりして欲しい。純粹さは悪夢の中で擦り切れてしまった。

寮内は家に戻る生徒達が荷造りを進め、広間はクリスマスの装飾が進められ、暖を取れる場所はどこも騒々しかった。ヤーナムの民は神に祈ることをあまり好ましくは思っていない。神に祈り、近づくことで、惨劇が生まれたのだ。上位者を払い、祈るべき神を失ってもなお、建物としての教会が残っているのは、その過去を戒めとするためだ。クリスマスもイースターも、世間一般での行事であるから、それらしいことをしておこうというだけのことであり、特別な意味はない。

唯一暖を取ることが出来、静かに時間を潰せる図書館に向かう。司書のマダム・ピンスは図書館をミサ中の教会と考えている様だった。

図書館の蔵書は多岐に亘る。学校の図書館らしく学習に役立つものから、読み物としてすらおよそ価値を感じられないものまで、いったいどの様な資料収集方針が設定されているのかが全く分からない。開架でこの様な具合なのだから、閉架資料や禁書棚はどれ程の混沌が渦巻いているのだろうか。掲示板には、最近追加された書籍リストが貼りつけられていた。

『相手を泣かせたくない男の閉心術』

『英国魔法界の食卓 ——如何にして我らはマズメシを食べる様になっただか』

『金持ちになりたいなら屋敷しもべ妖精になれ 〳顧客に喜ばれる奉仕の方法〵』

『ギフト 恩師から不倫相手まで、想いを伝える贈り物選び』

『グールお化けとのクールな散策』

※8冊目の複本購入です。以後、汚損・紛失者には実費請求と懲罰を与えます

『現代決闘の作法 お辞儀編』

『コンメンタールマグル保護法』

『猿・マグル・魔法族』

『死の瞬間 死を受け容れる4つの過程 ゴーストとの対話』

『趣味と実益を兼ねたドラゴンの育て方』

『職場をレダクトしたい貴方に送る、嫌な上司への嫌がらせ呪文百選』

『数秘術クイックリファレンス1991』

『すぐやる思考術』

『ソ連崩壊 ノストラダムスの大予言は早まった』

『ゾンビアポカリプスに備えるサバイバル教本「第17版」』

『DIYで作る闇の魔術への対策』

『できるキャリアアウター魔ンだけがやっている七つの習慣』

『できる！ 自動筆記ペンプログラミング』

『泣き寝入りしたくない女の開心術』

『日出づる国の斜陽 或る経済大国に贈る先輩からの助言』

『マグルの知らない水の力 EM菌の生み出す水素水からの伝言』

『元SAS現闘被い』

『夢を叶えるガネーシャ インドに学ぶ成功への道』

『揺り籠から墓場まで マンドレイク完全自動栽培マニュアル』

『妖精の魔法と呪文学の違い』

『錬金工学の世界』

『どういうことだ。』

特設コーナーからいくつか手に取り、流し読んだ。サバイバル教本は、継戦能力の重視や遮蔽物を利用した撤退、拠点構築と生存者との協力など、似た様な事態の経験者としては賛同できる記述も多かった。閉心術については覚える必要を感じたが、おそらくこの程度の書籍では覚えることが出来ないだろう。『猿にも出来る』だの『明日から始める』といった題名が付く書籍は身につかない。ああいったものは

入門書ですらなく、単にレシピ本と変わらないのだ。他人のノートや教科書を借りたところで、自らの知にはならない。基礎を学ぶことが無ければ、現実的な応用は出来ないのだ。

啓蒙を得る瞬間に感じるノイズ。それが校長から開心術を掛けられた際に気づくことが出来たきつかけとなった。だが、結局は完全に打ち破ったわけではない。この学校の秘儀を解き明かすには、校長をはじめ教員たちに感づかれるわけにはいかない。気づかれれば、忘却術で廃人にされるか、不慮の事故として処理されるだろう。それを防ぐにはどうするか。単純な事だ。自らがその手法を学べば良い。おそらくそれが記された書物を手にするには、禁書棚の閲覧権が必要になるだろう。

その道を知る者であれば、その強みも弱みも知る事となる。フリント先輩の言葉には、多くの学びを得ることとなった。上位者を求める狂人の智慧よりも、クイディキチの智慧の方が余程為になる。ウッド先輩にも話を伺ってみたいものだ。

ギフトはクリスマスプレゼントに悩んでいたのでもちようど良かった。例年は非魔法族の菓子を探して振る舞っていたが、自寮で付き合っている友人たちは魔法族の良家。それらを贈られても家族への説明に困るだろう。対して、ハーマイオニーは非魔法族生まれ。魔法界の物の方が喜ぶだろう。

幾つかを見繕った後、アルバイトの生徒に複写依頼をした。自動筆記ペンがそれを済ませるまで、『日刊預言者新聞』を捲って時間を潰す。相変わらず低俗な記事ばかりだった。有名人の離婚等、当人の好きにさせれば良いものを。学校であるから需要がないのかもしれないが、業界新聞の取り揃えは悪く、『医薬新報』や『日刊呪具』程度しかない。『医薬新報』の一面は、脱狼薬の副作用と思われる脱毛症例報告は誤報だったという記事だった。脱狼薬はいいものだ。人でありながら獣となってしまう、人狼の呪い。それは血に因る悍ましい獣への変態とは違う。単なる動物を殺す事と、獣化した人を殺す事は違う。人を襲うから殺すのではない。獣化は殺す事では救えないから狩るのだ。本来の獣狩りとは、慈悲の心だ。狩るべきでない者に刃

を向けることはただの殺人であり、血に酔う事だ。

他には公報も置いてあった。スコットランドのケルト文化保護区の縮小と、IRAの活動に伴うマグル保護法適用の一部改定について記載されていた。

「マリア」

呼び掛けられたので振り向けば、ハーマイオニーと不愉快な連中が居た。連中は心底嫌そうな顔をしており、それだけ嫌なのであればさっさと失せればいいだろうと思う。関わり合いにならない方が、お互いの幸せになるだろう。

「休暇前にも図書館とは、まだフラメル氏の事を調べているのか？」

「ハーマイオニー、気は確かか？ そいつに喋ったのか！」

「すまない、ハーマイオニー。失言だった様だな」

「ちよつと、ロン。図書館で騒がないで。追い出されちゃうでしょ。」

「そうなの、マリア。まだ何も分かってないわ。マリアの方はどう？」

「……私も調べることになっていたのか？」

「酷いじゃない。こんなに真剣に調べているのに、気にもしてくれていなかったの？」

「気にはしていたが、多分副校長に訊いて解決しただろうと思っただけさ」

ダフネが言うには副校長は機嫌がよさそうだったとのこと、おそらくハーマイオニーと時間を作る事が出来たのだろうと推測していた。

「さすが優等生。なんで僕らは気づかなかっただらう！」「マクゴナガル先生、ニコラス・フラメルについて教えてください。スネイプがきつと4階廊下にある彼の物を狙っています」って訊けばよかったなんて！

「馬鹿だからだろう」

「何だって!？」

赤毛の言葉に率直に返せば、眼鏡が敵愾心に塗れた目を向けてきた。

「ハーマイオニーには悪いが、馬鹿としか言い様がないだろう。それが本当に問題だと考えているならば、まずは貴公らの寮監に報告すべきだ。それが憚られるなら親にでも相談するべきだ。ウィーズリー、貴公の父親は官僚だろう。貴公の父親が何をしているかは知らないが、校内で犯罪が起きる可能性があると言えば、魔法省も動くだろう。然るべき大人に然るべき対処も求めないとは、単にそれを楽しんでいる様にしか見えないが」

つまり、英雄願望というものだろう。やはりトロールの件から何も学んでいないのだ。あれもまた、寮監に一言伝えていれば、ハーマイオニーが危険に脅かされることはなかったはずだ。あの時何も出来なかつたくせに、とは言わない。我が身を振り返ってみれば、自分とて幸運に恵まれて間に合っただけの事だ。ブラウンとパチルがグリフィンドールの列の最後に居たからだ。もし、知っている獅子寮の生徒が居なければ、全てが手遅れになってから副校長を探す事になっていたかもしれない。

「あー……マリアが図書館にいるなんて珍しいわね」

「随分と雑な話題の変え方だ。まあいい、単に知識欲からだと思う事にしよう。私は暖を取りに来ただけさ」

「猫みたいね」

「なあーお」

そういえば、ヤーナムの悪夢には猫がいない。聖杯の片隅に猫の死体はあるが、獣化した猫はいない。鼠や鴉は死血を得れば肥大化し、犬は獯猛になるのだから、猫もまた何かが変わっていてもおかしくはないのだが。

「お前は蛇だろ。冬眠場所でも探しているよ」

「そうか、獅子はネコ科だったな。貴公のペットの名は何だったかな。非常食だったか。今度味を教えてください。サバイバル教本によれば、鼠もまた喰えるらしいからな」

あの汚濁に住まう鼠に何度齧られたことか。ただでさえノミや伝染病を媒介する衛生害獣を傍に置くあたり、ウィーズリー家の困窮振りに対するマルフォイの揶揄は当を得ているのだろう。

先程複写を依頼した生徒が羊皮紙の束をおずおずと差し出してきただので、それを受け取る。ハーマイオニーはどこか申し訳なさそうに、残る連中は中指を突き立てん表情であったので、笑顔で手を振ってから図書館を出た。

ハーマイオニーの様子からするに、この調べ物が馬鹿らしいことには気づいていた様だったが、それでいて何故付き合っているのかは全く分からない。聡明な彼女の事だ。何かしらの理由はあるのだろう。

休暇前の四寮混交の女子会には、ハーマイオニーも参加する様になり、獅子寮の友人も出来た様だった。ポッターとウィーズリーを侍らせているという事で揶揄われていたが、男子として意識したことはないつきっぱり告げていた。ポッターの素行はどうあれ、顔立ちは整っている方だ。ハッフルパフの女子からの評価は悪くない。レイブンクローからすると、先日のクイディッチの件もあり、鼻肩されるのは当人の非ではないにせよ、好ましからざる者である様だ。

一方でウィーズリーの評価は醜聞の一言である。背の高い小型犬というダフネの言葉が強烈だった。

クリスマスの朝。もう三日目となるが、ダフネのいない朝は快適で寂しいものだった。サイドテーブルには彩り鮮やかな包装が為されたプレゼントが小山となっており、監獄には似つかわしくない差し入れだと思った。

皆一様に菓子を贈ってくれたのだが、ハーマイオニーに嫌いなものを伝えていなかったのは失敗だった。ハーマイオニーの好意はありがたいのだが、山ほどの蛙チョコレートのお包みには嘆息が漏れる。一つの箱を開け、蛙を捕まえる。投げナイフを取り出し、その首を刎ねた。しばらく痙攣し、ただの悪趣味な造形のチョコレートとなったことを確認してから、ホットミルクに混ぜて飲んだ。後何杯飲むことになるのだろうか考えると、甘さからではない震えが起きた。

賢者の石

休暇が終わると、前にも増して騒がしくなった。寄宿学校とは言え、1年生でも11歳なのだから、ホームシックもなにもないだろう。親の目を離れる事の方が嬉しい様だった。

非魔法界に住む生徒に話を聞くと、年末に数時間もかけてロンドンと生家を行き来することが億劫とのことだった。その点、煙突ネットワークや、保護者に転移術を掛けてもらえる魔法族は楽なのであろうが、パンジーからは「煙突は煤で汚れるし、転移は酔うから嫌。ペルシアの空飛ぶ絨毯が一番ね」とおよそ英国人らしくない感想をもらった。

「ああ、言い忘れていた。みんな菓子をありがとう。順番を付けるわけではないが、パンジーのチョコレート詰め合わせが特に気に入った」

「そう、良かった。取引があるシヨコラティエに作らせたから、また食べたくなったらいつでも言ってちょうだい。それと、あんなに凝った物贈ってくれるなら先に言っておいてよ。お母様に叱られてしまったじゃない」

「あー、うちもそう。あれどうしたの？」

「作った」

ドラゴンの革と孔雀石のビーズで作った腕輪。スリザリンであるのだから、エメラルドをあしらうところだが、そこは学生の身。小遣いで用意出来るもので、かつ加工出来るような物はこれくらいだった。彼女らの家の財力を考えれば、エメラルドも孔雀石も大した違いはないだろうから大目に見てくれるだろう。

「作ったって、いつの間に」

「貴公らが帰った後にな。サプライズがあった方が良かっただろう？」

正確には、ヤーナム聖杯の教室棟で、だが。尤も、さして時間はかからなかったので、談話室の暖炉の前で作業すれば良かったとも思った。

どうやら教員たちも休暇明けは本調子ではないらしく、教科書の同じところを2度も読んだり、休暇前の範囲からかなり離れたところから講義を再開したりしていた。ハーマイオニーがそれらを逐一指摘していた。死者であるピンズ教授だけは変わりが無かったが、変わりが無いのは生徒達も同様で、机に突っ伏して午睡に勤しんでいた。

ミリセントに貰ったハーブとダフネからのクッキーとでアフタヌーンティーを楽しんでいると、マルフォイが嫌に上機嫌で談話室に入ってきた。下男たちも口の端を釣り上げている。

「やあパンジー、ダフネ。この前のパーティーは楽しんでくれたかい」「ええ、とつても」

「そうね」

「そうか。ボーン、君の話も上がっていてね。父上は優秀なスリザリン生に興味があるんだよ。この学校の理事としても、僕の父親としてもね」

「そうか。光栄な事だな」

「次の休みには君たち4人で我が家に来るといい。華が増えれば母上も喜ぶだろう」

「気が向いたらな。ところで、何をそんな楽しそうにしているんだ？

「次のスリザリンの試合は未だ先だろう」

「クイディッチはクイディッチで面白いな。次のグリフィンドールの試合には、スネイプ教授が監督を務めるらしいからね。けど、それよりもロングボトムが傑作だね」

寮監が監督とは。前回の試合でポッターに呪いをかけていたという事だが、それが真実だとすれば、どういうことか。

まず考えられるのは、教員たちの中で疑われ、審判にさせられたと来ないだろう。結局、あれ以後ポッターに掛けられた呪いについては、捜査が大々的に行われた様子はない。それは順当だろう。学生如きが呪いをかけられるのならば、国際試合は屍山血河だ。非魔法族でさえ、フットボールの試合ではフリーガンが発生している。倫理観の欠

如した魔法族の暴徒など、飛行中の選手の箒に消失や粉碎、燃焼などの魔法をかけていることは容易に想像できる。それに対抗しているのが箒の防衛機構なのだ。となれば、教員が呪いをかけたとしか考えられず、生徒達の前で教員達が捜査を行うとは思えない。

もう一つの可能性としては、寮監が自身で審判を買って出たという場合だ。教員しか箒の防衛を貫く程の呪いを掛ける事が出来ず、かつ、ポッターに対して日頃から敵意を向けている寮監は、他の教員からすれば確定的な容疑者だろう。ならば何故審判を買って出るか。それはアリバイ工作だろう。おそらく共犯者がいるのだ。寮監が監視されている間にまた呪いが掛けられれば、「確定的」から「非常に疑わしい」程度には警戒の度合いが下がるだろう。実力を経験したわけではないが、教員は文字通り教える者というだけのもので、一般の魔法族に比べて特別に技術が秀でていてという事を意味しない。ハーマイオニーは寮監に放火したことで呪いの効果がなくなったという。それは、寮監が単独犯という事を意味しない。

「なんだボーン。訊いておいて考え事か？」

「ん……ああ、すまなかった。で？ ロングボトムがどうしたと」

「ロングボトムに足縛りの呪文を唱えたのさ。クラブとゴイルは凶体が大きいが、肥満というわけじゃない。そうだろう？ ミリセント」

「……はあ。そうだね」

「ところが、ロングボトムは違うのさ。だから、僕の練習ついでに、アイツを運動させてあげようと思ったんだ。笑えたよ。グリフィンドール寮まで芋虫みたいに床を這いずって行ったぞ」

「なるほど、訊かなければ良かったよ。マルフォイ、貴公が純血の名を穢すロングボトムに怒るのも分かるがな。父君の事を考えれば、もう少しやり方を考えたらどうだ。息子が校内で他の生徒を攻撃しているなど、理事としては面目が立たないだろう」

褒めてもらえるとも思っていたのだろうか、マルフォイの頬には朱が差し、眉間には皺が寄った。言葉通り、マルフォイの想いは分かんなくはない。ロングボトムには可哀想な事だが、血と家名を重んず

るマルフォイにとって、その様に生まれたのにその様に成果の出ているロングボトムは怠慢に見えるのだろう。

「気に食わないな。ロングボトムの肩を持つのかい」

「貴公の父君の肩を持っているんだ。お会いしたことはないが、名士なのだろう。その恩恵に与りながら、その家名を継ぐ貴公がそれを穢してどうする。ウィーズリー家と違い、ロングボトム家は血を裏切る者ではないのだろうか？ 聖血の盟主たるなら、同胞を導くべきだ。たとえそのつもりでロングボトムに呪いをかけたのだとしても、その他の者からは単なる攻撃としか見られない。だから、やり方を考えろと言ったんだ」

「……」忠告はありがたいが、僕らには僕らの流儀があるからね」

マルフォイの流儀として、「分かった、次から改める」とは言えないのだろう。分からないなら分からないでいつか別の機会があるのだろうか、その表情からは一部については納得しているであろうことが分かる。

「はいそこまで。ドラコ、マリアの言ってる事は私も前から薄っすら言ってきたでしょ。マリアも、もう少し柔らかく言ってあげなさいよ。パンジーが怒ってるじゃない」

「そうか、すまなかつたな」

「無表情だけど、謝ってるのか？」

「笑顔で謝っても馬鹿にしているとしか思えないだろう。笑うという行為は本来攻撃的なものであり、獣が牙をむく行為が原点だ」

「笑顔になれとは言っていないぞ」

「そうか。次から貴公に謝るときには顔を覆うことにしよう」

「それこそ馬鹿にしているじゃないか」

「いいからその連中を連れて行ってくれ。私の菓子はやらん」

下男共が物欲しそうにテーブルの上を見つめていた。随分と血色の良い欠食児童だ。

夜。蛙チョコレートの残りを全てホットチョコレートにして、パンジーに振る舞った。ミリセントは甘い物を控えていると言い、ダフネ

は夜に甘い物を摂ると太ると言って断られた。パンジーが「私、太らない体質だから」と言い放つと、ダフネは「胸もでしょ」と応戦した。「蛙チョコレートカードかあ。懐かしいね」

「今どこにあるんだろう。捨てちゃったのかな」

「え？ みんな集めているものなの？」

「歴史とか、社交の勉強にね」

「私は紳士録とか家系図とか読まされていたわ。今でもそうだけど」

幼少期を懐かしんでいるダフネとミリセント、パンジーは買ってもらえなかつたらしい。家庭毎に教育方針が異なるのは当たり前のことだ。

「マリアは？」

「お兄様にあげていたよ。その後お兄様がどうしているかは知らないが」

「ふーん。あ、メルキオールだ。私もこれ5枚くらい持ってたよ。他のは……クリオドナ、ウエンロック、マージョリバンクス、パラケルスス、エイサロン、ブロクサム」

「ん？ パラケルスス？」

「パラケルスス。16世紀の錬金術師。武器軟膏の開発者。また、大気中からの魔力吸収理論と人造人間研究にて著名、だつてさ」

「……錬金術師だ。そうだ、思い出した。ニコラス・フラメルは錬金術師だ」

教室棟には錬金術に関する資料もあつた。上位者の声を受け容れる為に肉体を変質させる技法として、人体錬成も研究されていた。有力なアプローチは人造人間を錬成し、それに自らの魂を移し替えるというものだったが、結局出来上がった人造人間は四肢のある蛞蝓のようだったとある。否、それはどうでも良い、必要なのはニコラス・フラメルがどういう人間であつたかだ。何故ニコラス・フラメルの研究をビルゲンワースが重視しなかったのか。重視したのであればより克明に研究記録が残っているはずだ。上位者、肉体、変質、錬金術。錬金術は素材を組み合わせ、より上質な物に高める事。人間の肉体をより上質に高める。血の遺志、否、より根源的な変質。学徒が求めたも

のは、強化ではなく、変質だ。学徒は人でありながら智慧を求めた。血を受け容れる事ではない。となると、ニコラス・フラメルの研究は、肉体そのものの変質ではなく、受け容れることで変質するものだった。

「ああ、分かった」

「何が？ さつきからぶつぶつと、不気味ね」

「宿題の答えが分かったという事さ」

賢者の石。

あらゆる金属を黄金に、液体を不老の霊薬エリクシルに変質させる錬金術の極致。大錬金術師、ニコラス・フラメルはそれを生み出した者だ。

翌日、ハーマイオニーにニコラス・フラメルの事を伝えると、自分達も答えに行き着いたという。校長の蛙チョコレートカードにニコラス・フラメルの事が記載されていたとのことだ。前に読んだ本に載っていたのに手間をかけて悪かったと謝られた。その様子を見て、自らの中に教えてやろうという驕りがあったことを恥じた。

「ハリーは入学前にハグリッドと一緒にグリーンゴッツ銀行に行ったらしいの。その時、ハグリッドは校長の使いとして何かを受け取ったらしいわ。そして、それが預けられていた金庫に侵入した人がいる。それから、4階の廊下は理由も説明されずに閉鎖されて、ケルベロスまで配置されている。もう決まりよ」

ハーマイオニーが鞆からスクラップブックを取り出した。魔法界の羊皮紙とは異なり、パルプの上質な白色が際立つ。新聞の切り抜きが貼られ、ハーマイオニーの細かな注釈が加えられていた。

7月末、グリーンゴッツ銀行に金庫破りが入ったが、侵入された金庫はその日の内に中身が持ち出されていたという。

銀行に侵入するというのは、手の込んだ自殺だ。だが、盗人は何もせずに帰った。という事は、単なる物盗りではなく、その金庫に何が入っているのかを知っていて、かつ、その重要性は他の金庫に入っている財貨では代替できないという事だろう。それだけ盗人はその中

身についての下調べをしている。犯罪者としては犯行声明もなく目的を明確にするなど三流もいところだ。どうせ侵入出来たのであれば、攪乱の為に他の金庫も破っておくべきだった。

「それが賢者の石であるという根拠は何だ？」

「ハグリッドがそう言ったもの。正確には口を滑らせた、だけど」

「なるほど。あの管理人が欺瞞に長けているとは思えない。事実として賢者の石が護られているか、彼自身が騙されているかだな」

「騙されているって、どういうこと？」

「彼がそう思う様に欺瞞され、石は全く別のところに保管されているか、そもそもニコラス・フラメル氏に関連するものではないという可能性だ。」

私が護る立場ならば、入学式にそうしたように、4階の廊下に何かを封じていることを喧伝する。だが、ケルベロスを越えた先には何も置かず、ただ罫を仕掛ける。要は誘蛾灯だ。正しい手順で入室しなければ、足を踏み入れた瞬間に失神か石化呪文が発射されるか、筋弛緩剤を気化させておくだろうな。石は最強の魔法使いとして名高い校長が携帯しておけばいい。

後は、銀行に入っていたものが仮に賢者の石ではなかったとしても。それと同じ物が学校内にあると知らればどうなると思う。私が犯罪者ならば、生徒を拉致し、人質として使う。それを考えれば、ホグワーツで護られている宝は金庫破りが望んでいる物とは違うと思わせておいた方が良く。

いずれにしても、学生如きに自らの護る物を伝える程度の人間であるのだから、それに真実を伝える愚は犯さないだろう。学生の安全という視点からすれば、盗人の狙いが石ではない事を祈るばかりだ。本当にグリーンゴッツ銀行に預けられていた物が賢者の石であり、4階の廊下にそれを封じているとすれば、この学校という名の魔界は狂気そのものだ」

単なる学校に犯罪者の狙う宝を収め、それでいて何ら権力による保護も施さない。どの様な目的があるかは知らないが、これが真実であるならば、漁村やヤーナムで広げられた悪夢と同じ精神構造である。

目的の為に、無辜の民が害されることを何ら躊躇わない。狩人マリアが覆い隠そうとした、人の願いの歪み。恥。それらが、年端もゆかぬ子等に向けられたものではないと願う位は、このホグワーツという魔界においても許されて良いはずだ。

ホグワーツでは魔法界の隠匿の大義の下、不出来な生徒を選別する為に、数々の狂気じみた試練が課されてきた。だが、賢者の石にまつわる事であれば、全く道理が通らない。まさに理不尽である。理性と道徳とは相反しながらも人の精神の根幹である。そのどちらも欠落しているのであれば、本能に従うだけの獣と何が異なるうか。

「……マリアだったら、賢者の石は何に使う？」

「俗物的な答えになるが、金を得て、菓子を買うさ。」

……冗談だ。金を求める者は、真に欲する物すら金に変えてしまう。

病に伏す者、死の床にある者に生命の水を与えるだろうな。苦痛の中で、人は人としていられない。死を受け容れられず、獣になる者もいよう。人らしい最期を迎える事は、尋常な人にとっては最も人らしい幸せだろうな。家族や友人に囲まれ、旅先で待つ事を伝える。そういった優しい時間を求めることこそ、人が技術を発展させてきた理由だろう」

それが与えられることの無い者。人間性を失い、しかし獣ともならぬ血に酔った狩人。それに与える慈悲。狩人狩りとは呪われた業にして、かつて民を護った狩人への、慈悲のはなむけなのだ。

「貴公は？」

「私は……分らないわ。金にしても、不老不死にしても、それに変わるという事が、どういうものなのか分からないし。想像できないものは想像しようとするべきじゃないわ。不必要なものまで手に入ると、きつとそれまでの自分じゃいられなくなるもの。」

だから、あなたからのプレゼントはとても嬉しかったわ」

ハーマイオニーに贈ったものは、ドラゴンの革で作ったロールペンケース。留め具にはグリフィンドールの色、真紅に擬えた薔薇輝石をあしらった。

「そうか。賢者の石が欲しかったと言われなくて良かったよ」

結局、4階の廊下にあるものが賢者の石であろうとなかろうと、ポッター達が出来ることもすべきことも関係がない。いかな謀略がホグワーツの中で渦巻いているようと、単なる1年生にとっては関わり合いになる事ではないし、狩人にとっても学校そのものの秘儀とは関わりがない。普段と変わらず、生存と鍛錬に力を注ぐのみだ。

ミリセントとパンジーはクイディッチの試合を見に行った。パンジーはクイディッチというよりもマルフォイ目当てと言うべきだったが、いずれにしても、この凍空の下、よくも外出しようなどと思えるものだ。

本日の対戦カード、グリフィンドールとレイブンクローにとつては、順位の入れ替わりをかけた重要な一戦だったが、300点以上先行しているスリザリンにとつては、どうという事のない試合である。グリフィンドールの調子は未だ上がってきているとは言いがたいものであり、下手をすれば今期はこのままではないかという事だった。それでも樂觀せずに観戦に赴くのがプリント先輩だった。

ハウスエルフ犇めく厨房の一面を間借りし、観戦後に冷え切っているであろう寮生の為にホットワインを作る。製剤の練習の成果か、ダフネの手つきは年度始めに比べれば良くなっていた。それを伝えてやれば、良いも悪いも、檸檬を輪切りにして砂糖と香辛料を入れるだけではないかとダフネは反論したので、成る程それすら覚束なかったのだからむしろ恥じるべきかと思った。

煮立たせない様に火力を調整するのもまた魔力制御の練習となる。これはダフネが得意だった。物体に燃焼という変化を与えるものであるのだから、呪文学と変身術の分野である。ハーマイオニーが規格外とはいえ、ダフネもまた聖血の才女であり、並みの1年生とは一線を画す。

作るものを決め、レシピを選び、実行する。

味覚という才能に左右される事も、明確な完成形の想像図が無ければ十分に具現化されない事も、魔法と料理とは似通う部分がある。一

一般的な魔術工房と異なる、アトリエと呼ばれる錬金術師の特殊な工房では、料理をも錬金術の一つとして扱うという。素材の内なる魔力を引き出し、異なる素材と組み合わせ、変質させるという過程はまこと料理そのものである。事実、古代の錬金術師の研究成果の中には、養生食として流通しているものもある。

薬学と錬金術とは似ていながらも明確に異なる点がある。それは、術者に魔力の素養があるか否かである。錬金術が術者の魔力を仲立ちにして素材同士の魔法的結合を生み出すことに比べると、薬学は潰す、刻む、煮る、混ぜるといった工程を経ることで抽出した成分の結合を目的とする。よって、術者によって結果の異なる錬金術は恐ろしく再現性が低くなる。錬金術の典型例である杖の作製も同様で、同じ木の枝、同じ生物の芯を使ったとて、同じ杖にはならない。

スネイプ教授は薬学と錬金術の違いを説明した事があった。絶望的に不器用でない限り、基本的に忠実であれば同じ物が出来るのが薬学であり、それをまともに出来ないのは単純に頭の構造が悪い。その様に、間違いなくポッターに対して語っていたのだが、それを鑑みれば、確かにポッター達が教授を疑うのも分からないではない。賢者の石によって生み出される霊薬。それを素材にすれば、より薬学の可能性は広がるだろう。あるいは、教授が好むという闇の魔術においても大きな意味を持つだろう。不老不死の研究は、翻せば死そのものの思索に繋がる。命を繋ぐことは、死を退けることだ。

だが、ダフネの言う通り、寮監が校長に齒向かう事をするだろうか。校長の目を逃れるため、表向きは従っている様に見せかけるという可能性もあるが、だとするならば、校長のお気に入りであるポッターを目の敵にする理由もない。

個人としてのセブルス・スネイプ氏の人となりを知悉しているわけでもないが、他人の研究成果である賢者の石を利用するよりは、石に頼らずに霊薬を作り出す方法を探る方が想像しやすい。粘着質な嫌味からは、合理性よりも自らの能力に依って事を為すという気質がうかがえた。

「こんなものかな」

「私としてはもう少し甘みが欲しいところだが」

「それで飲み過ぎても大変でしょ。ねえ、その子。寮まで運んでくれるかな」

「かしこまりました、お嬢様」

ダフネに呼び止められたハウスエルフは恭しく返事をし、鍋と共に消えた。校内で転移術は使えないはずだが、狩人の灯りと同様、転移術とは異なる技術があるのだろうか。

「じゃ、戻ろっか」

「待て、幾つか菓子を買ってからにする。貴公ら、いつも感謝しているぞ」

「勿体なきお言葉にございます」

賢者の石に興味はない。甘味だけで人は幸せになれるのだから。

竜

「こ、こんにちは。ミス・ボーン」

「ごきげんよう。クイレル教授」

ニンニクの臭いが鼻をつくのが、淑女としての挨拶はするべきだ。

漸く春めいた日差しが雲間から差し込み、何の気なしに散歩をしてみれば、防衛術の無能教師と遭遇した。トロールの一件から、より無能の印象は強まっている。あの日、この人間が大広間で報告すべきは、トロールの侵入ではなく侵入したトロールの駆除報告だった。そう出来なかったのは、発見者がトロール如きに劣る無能であるからだ。

こと防衛術については第一線の専門職に比べれば劣るものの、学校で教わる範囲のことは遙か昔に習得している。劣るものは、経験とそれから成る判断力だ。座学では身につかないものを講義に求めても仕方がないため、防衛術の授業は歴史学同様に自習時間としている。叱られることもないので、教授としても別段気にすることはないのである。

「では、失礼致します」

「あ、あ……」

「何か？」

「き、君は羽ペンと羊皮紙ではなく、マ、マグルの文具を使っていますね」

意外と生徒を見てはいるらしい。もともと、シャープペンと消しゴム、リングファイルを持ち込む生徒が目立つといえはそうなのだろうか。

「ええ。経済的ですし、書き損じを修正しやすいですから。文具の指定があるのでしたら、次回からは改めますが」

羊皮紙での論文提出を求める教授もいる。文書、その本質は筆記具ではなく文章にあるはずだが、呪文の発音や杖の振り方の様に、形式に意味を持たせる何らかの魔術的要素があるのだろうか。

「い、いえ。それは構わないのです。わ……私は以前、マ、マ、マグル

学の教授でしたから、つい、気になってしまっ

「そうですか。マグル学……お辛い仕事でしたでしょう」

「辛い？」

「ええ。マグル学は非魔法族からしてみれば何の目新しいことも無い日常的な話ですし、魔法族からしてみれば単なる単位稼ぎか見世物小屋を眺める感覚でしょう。その程度の子供達に興味を持たせて指導する、というのは難しいことかと」

おそらく、マグル学の発端は魔法の隠匿にある。魔女狩り、異端審問への魔法社会による対策なのだ。火刑に処されたところで、耐火の薬なり術なりを備えれば良いが、寝ている内に引き摺り出されれば耐え得る者はいない。それを防ぐには、そもそも魔法など存在しない事にする事で根本的な解決を図ったのだろう。今となつては、魔法の片鱗であつてもそれを目にした非魔法族は狂人扱いされる様になり、魔法族は魔法族で、魔法を使えず石油に頼る不便な生活が知りたいなどといった、無自覚な優越感に浸る連中ばかりである。

一方で、家格の高い生徒の一部には熱心な者もいると聞く。それもわからないことではない。魔法界は、市場規模があまりにも小さい。ロンドンにおける最大の商圈があの小さな横丁なのだ。未だに本位貨幣が幅を利かせているという事もその矮小さを表している。グリゴンゴツツで換金手数料を取られるとしても、非魔法界で商売を行った方が余程利益になるだろう。その為には、非魔法界の常識や法律を学ぶ必要があるということだ。

「……貴女もマグル学を履修するつもりですか？」

「いえ、私には今のところ必要ありません。」

「勿体ない、というのは教師の驕りでしょうか」

「さて。私には分かりかねます。それに、勿体ないなどとそれこそ勿体ないお言葉です」

吃音症を詳しく知る訳ではないが、クイレル教授の普段はそれと思われる。しかし、今日は妙に落ち着いている様に思えた。人狼症の様に、薬によって抑制されるものなのだろうか。

「先程の辛いという言葉ですが、それでもありませんよ。確かに生徒

の大半は生まれを問わず凡愚です。まるで私を見ている様です。ですが、素晴らしい知性に巡り会う事もあります。教育者としては失格でしょうが、そういう存在に触れる事に私は喜びを得ているのです」

言葉を紡ぐ教授の表情は、いつもの崩れた愛想笑いではなく、慈しみを湛えた微笑みだった。

「私は教鞭を執った事などありませんので分かりませんが、それもまた教育の一つではないでしょうか。全ての生徒に力を注ぐよりも余程効率的かと」

「お若いですね。ミス・ボーン。効率とは、選別の為の手段に過ぎませんよ。例えばミスター・ロングボトム。彼は確かに学力としては秀でていませんが、彼の力を求める意思は貴いものです。知性とは学力ではありません。何が正しいのかを追求する意志、そしてそれを成し得る力こそが知性です」

確かに、人の形をしていたとして、血に酔った狩人は知性のある存在ではない。古狩人ヘンリック。曾祖父にあたる狩人の動きは、歴戦の猛者のそれだった。しかし、血走った眼には狂気が爛々と輝いていた。

「レイブンクロー生の血圧が上がリそうなお言葉ですね。教授も驚察の卒業生と伺っておりますが」

「ええ、終ぞ卒業までにその事に気付くことはありませんでした。同輩との優劣に心血を注ぎ、他者を陥れ、蹴落とす事で自らの安息を得ようとしていたのです。完全なる知性とは、それそのもの自身が唯一の価値になることですよ。そして私は旅の果てにそれに見えたのです」

「それは良き出会いでしたね」

「はい。僥倖でした」

「ではなぜその様に悲しげなのですか」

「おや。その様に見えますか……だとすると、それは私がある存在にあまりにも遠いと感じているからでしょう」

「お気持ちちは分かります。私も持て囃されてはおりますが、未だ若輩者。兄弟にも、同輩にも及ばぬところは数多くございませぬので」

才女たるハーマイオニー、慈愛の人ダフネ。

狩人としての生活で得た知識や経験は、確かに蒙を啓き、人と獣とを区別することとなった。だが、只人として、努力を重ねる人の在り方を表す彼女達の方が、人として優れている様に感じられる。血によつて上位者足らんとするは、情けない進化。人として上位者に伍する事こそ、ビルゲンワースの最期の教え。故に、その最後の学徒ユリエの末裔、ヘルマン・ツァイスは意思とそれに合致する手段に重きを置くのだろう。

「励むと良いでしょう。友を大切に。志を同じくする者と歩む事は、幸せな事です」

「肝に銘じます。楽しいお話をありがとうございました」

一礼し、その場を離れた。

厨房に立ち寄り、菓子をねだつてから談話室へ向かう。

入学時からクイレル教授には既視感を覚えていたが、漸く思い出した。あの頭巾、あの怯えた口調。禁域の森の、恐ろしい獣だった。

ハロウィーンの夜以降、あの女子トイレを利用する者は皆無になつたと言つていい。陰惨な地縛霊、マートルの棲みつく2階のトイレ共々、乙女の尊厳が危機的状况に至らない限り、誰もがなるべく近づかない。もつとも、乙女を自負する者達は、極限の状態が迫るほどに、我を忘れて紅茶と会話を嗜むことはないのだが。

トロールの干からびた肉片が壁に貼りついているのだの、便器はトロールの骨で修繕されたのだの、果ては、水を流せば別の意味でも血が流れるといった呪術じみた噂話まで囁かれている。隅々まで女子トイレを清潔にするスネイプ教授など想像したくもなかったが、マクゴナガル教授に「隅に血痕が残っていますよ、セブルス」などと言われているのだろうかと思えば面白い。

そういう理由で、このトイレは密談をするにうつつけであり、秘密の部屋と呼ばれる様になっていた。

図書館でダフネの勉強に付き合っていると、ハーマイオニーは聖堂を歩く様な厳肅さをもって歩み寄り、手を引いたのだつた。ケルベロスの事といい、また何か厄介な事に首を突っ込んで、いや、突っ込ま

れているのだろうか。ダフネに目配せすると、ダフネは目を瞑って眉根を揉んだ。

トイレに誰もいない事を慎重に、念入りに確認した後、ハーマイオニーは言い放った。

「ハグリッドの家にはドラゴンがいるわ」

「そう」

まあ、驚くべきことでもない。ここはホグワーツだ。校長からして異常なのだ。森番が清廉な人間であるとも思えない。

「反応が薄いわね。魔法界の高貴な家庭では普通の事なのかしら。貴女達のペットって幻獣なの？」

「家と言うより、街ぐるみで猫犬はいるが……愛玩動物ではないな。あと、特に多くの住人が豚嫌いだ。ああ、回教徒ではない」

「私の家はペット禁止なの。妹は欲しがってるみたいだけど」

「まあ、竜は一般的ではない、というよりも調教師の技術を持っていないければ、成人の魔法族とて殺されるな」

「ハグリッドにそれがあると思う？」

「あつたら彼はとつくに森番を辞めていると思うな」

そもそも、森番といい、管理人のフィルチといい、魔法によって何かをしている素ぶりは見られない。無能者は非魔法界で暮らすか、一部の才覚在るものは芸によって身を立っていると聞く。単純労働こそ魔法によって補われるのであるから、絵画や音楽など、魔法によってではなく人の精神によって作り出されるものに労働需要が存在するのは道理のことだ。

「で、それがどうしたと」

「マルフォイが、ハグリッドがドラゴンを飼ってるって事を知ってるの」

他人を貶める事については賢い彼の事だ。今頃舌舐めずりをしながら森番を利用してポッターを陥れる算段をつけているのだろう。「そうか、放っておくことだ。数日のうちに新しい森番が着任するだろう」

「まあ、それが一番無難じゃないかな」

その答えは予想していたというハーマイオニーの心中が表情に浮かんでいた。

「……ロンのお兄さんがドラゴンの研究をしているの。その人に引き取ってもらえるんじゃないかって思ってるんだけど」

「魔法省の査察が早いから、アイツの兄が間に合うかどうかだね」
「他に何か手はないの？」

ハーマイオニー自身、その案が十分でない事は分かっているのだろう。かといって、魔法界の常識を知らない自分には何も対案が思いつかない、その様な苦悩を抱えている様だった。

嘆息する。

友人として、何か言葉をかける事が出来れば良いのだが、ハーマイオニーが求めているのは解決法であって慰めではないだろう。そんな彼女に言える事は、彼女の期待する全員が幸せになる方法などないという現実だった。

「伝聞でしかないが……神代の獣ならいざ知らず、竜とて火を噴く蜥蜴に過ぎない。幼体であれば縊り殺せば良いだけのこと。竜の強靱さは魔力を帯びた鱗にある。衝撃や圧力そのものには弱いものだよ。トロールや巨人でなくとも、成人男性であれば首を折ることは出来る」と聞く。

もつとも、鱗と筋肉の発達した成体になろうと、対戦車ロケットの数発もあればただの肉塊。ソ連崩壊が秒読みな今なら安く流出品が手に入る。壁が崩壊して以来、東側はフリーマーケット状態だ。中東、アフリカ、アイルランド、掘り出し物を掴むのはどこだろうな」
「マリア、そういう事を聞いてるんじゃないの。出来る限り穏便な方法ははないのかしら」

「ない。そもそも、卵を所持しているだけで違法なんだ。それを孵化させてしまった？ 人界においては、故意でなければ孵らぬ卵だぞ。森番とて教職員の端くれ。知らなかったは通るまいよ」

非魔法界におけるワシントン条約とは趣旨が異なるが、1709年魔法戦士条約、通称ワーロック法によって、竜の飼育は禁じられている。適切な技能を持つ者の畜産や研究目的であれば認められている

ので、ウィーズリー家には優秀な人物がいるのだろう。

「竜の事を思えば、森番が自首する他ない。もつとも、その後適切なブリーダーが引き取るか、食肉加工業者に引き渡されるか、単純に殺処分されるかは根回しと運次第だが。」

森番を優先するならば、一刻も早く竜を殺すべきだ。殺せるうちにね。竜にとっては可哀想なことだよ。勝手な人間の興味で母から引き離され、人界に生まれ落ちて、勝手な人間の都合で殺されるんだ。資格、その意味を森番は理解しているのか知らないが、技術としても精神としても、彼に生き物の命を扱う資格はないと思う」

ハーマイオニーも渋面を作りながら頷いていた。ペットとは紛れもなく生命の一つなのだ。無責任で独り善がりの愛情は幼子が玩具に向けるそれと何が変わろうか。

生命と向き合う重みは人故に感じる重み。それを忘れた者が微睡みの末に狩人の悪夢に墮するのだ。

「第一にだね、ハーマイオニー。貴公はこれが問題だと思ったから相談に来たのだろうけど、これを聞かされる我々の身にもなつてくれたまえ。現在進行形で違法な行いがされていると聞かされれば、善良なる市民としては通報の義務が生じるのだから。これを怠れば、犯人隠避というのだったか、犯罪になるのだよ。もつとも、通報せずに竜の殺処分を提案したのだから、犯罪教唆の誹りは免れ得ないが。」

いずれにしても、非魔法族であるから魔法界の法律に知悉していなかった、という弁明は通ったかもしれない。だが、それが違法行為だと認識している以上、それを警察機構に連絡しないというのは罪だよ」

「それは……いえ、それは私の間違いだったわ。迷惑をかけてごめんなさい」

「まあ、私はいいさ。その竜が人を殺める前に処理するのであれば、我らの家名は何の傷も負わない。人に仇なす獣を殺す事が我らの責任の取り方だ。それに、証拠隠滅と犯人隠避を教唆しているのも私だからね。」

しかし、ここにおわしますダフネ嬢は英国に名高き聖血28氏族の

次期当主様であらせられる。若き故の過ちなど許されぬ高貴なお方を蠍如きで悩ませてはならないだろう」

「マリア、私にかこつけてあれこれ言うのはやめなさい。まあ、血筋云々は置いて、厄介ごとくに気軽に巻き込まないでつてことは概ね合つてるんだけど。」

ねえ、ハーマイオニー。貴女、アイツらに対して何か企んでるのは分かるんだけどね、それでアイツらに染まってきたくない？ 私たちつてただの学生じゃない。法を変える権力も、現実を切り拓く実力もないんだよ。こればかりは、貴女の努力とか関係ない分野だと思うよ」

素晴らしい家柄の者であれば法を犯しても問題ない、というのは物語の中の話だ。権力によつて揉み消せる物はあるにせよ、権力によつて超法規的存在になる事はあり得ない。神から王権を得た者でさえ、大憲章に制約を受ける。それに、権力者にはその権力に応じた責務がある。ポーン家にもまた、ヤーナムの長としての生き方がある。グリーングラス家も同様のことだ。

「それにだね、貴公も分かっているんだろう？ 我々に相談したところで学生にできる程度の答えしか返ってこない。ということとは、貴公が思いつかないものは我々も思いつかない。かといって、寮監や校長に言えば好転するということでもない。彼らは責任者なのだから、責任のある行いをしなければならぬ。事が市井の者に露見すれば、一義的には森番の責任としても、管理責任は免れ得まい」

「子供を預かる施設で、危険生物が職員によつて違法に飼育されている。どう考えても、冗談で済ませられる問題ではないよね」

「修道院の庭で大麻が栽培されていて、ついでに尼僧が花を売っている様なね」

「マリア、下品」

「生憎と高貴な家の生まれではないからね」

「とにかく、ハーマイオニー。少し頭冷やしなよ。4階の廊下の事も、卵の事も。馬鹿騒ぎに付き合うのもいいけどね、馬鹿そのものになっちゃいけないと思う」

無論、我々が賢いと言うつもりもないのだろう。彼奴等よりは幾分弁えているとは思うが。それよりも先に立つのは、ただの嫉妬だ。蛇蝎の如く嫌う連中と連れ立っているのを見て良い気持ちはしない。

「まあ、あの校長の事だ。露見したところで、教材にする為に取り寄せたとしても言つて有耶無耶にする事も出来るだろう。彼自身が研究者としても名を馳せている。だが、その出所は追及されるだろうし、高名な人物だからと手続を無視する事が出来る程、英国魔法界は腐敗していないだろう。結局のところ、竜と森番、どちらともが救われる道はない。ウィーズリー家の伝手が間に合うかも分からない。

何が最善かは分からないが、幸せになる人間の数で勘定すれば、竜を殺して湖にでも沈める事だな。後はマルフォイが何かと見間違えた事にでもすれば良い。いかなマルフォイ家の長子とて、未成年の証言だけで徹底的な追及は出来ないだろうよ。それを掘り下げる程、当主様もお暇ではあるまい」

「むしろ、子どもが通っている学校の名前が傷付く事は避けると思うよ。うちの家なら、こつそり転校させるもの。そんな下賤な人間から教育を受けるなんて、家名が穢れるもの。」

「マグルだつてそうでしょ？ 淫行教師から教育を受けたなんて醜聞が広まったら、その子どもも被害に遭つたんじゃないかとか言われて価値が下がるじゃない」

「ダフネとしては当然の事なのだろうが、自身を家の財産とする価値観には閉口する。」

「青い血からのご意見ありがとうございます。とにかく、ハーマイオニー。救うべきものの優先順位は間違えない事だ。貴公が残酷な意見を告げて、森番が何も決断しない様であれば、直ぐに寮監に告げるべきだ。森番が責任を取れるのはそこまでだ」

話はここまでとばかりに、ダフネは胸を反らし、腕を伸ばした。齡11にしてこの発育の良さは羨望を超えて圧倒的な敗北感を覚える。日頃から、容姿は財産と公言して憚らない彼女は、趣味ではなく義務として美容に血道をあげている。それもまた、家の為、というもののだろう。

「まあ、手遅れになる前に言ってね。グリーングラス家ではなくて、私個人で出来る事がある内に……って言っても、マリアみたいに実力行使ができるわけじゃないけど」

「狩道具をいくつも見繕っておこう。竜殺しは初めてだ」

ハーマイオニーの表情が晴れることはなかった。

一角獣

或る朝から、ハーマイオニーは孤独な秀才ではなく勉強の出来る馬鹿呼ばわりされる事となった。

グリフィンドールからはハーマイオニー、ロングボトム、ポッターがそれぞれ50点ずつ減点され、スリザリンではマルフォイが20点減点されていた。

塞ぎ込んだハーマイオニーを慰めようとすれば、赤毛が「お前達がチクつたんだろ！」と犬歯を剥き出しにして喚いた。

マルフォイからよくよく話を聞いてみれば、ウィーズリーからマルフォイに情報が漏れたのだった。だが、マルフォイ自身も減点された為、別の告発者が居ると妄想したらしかった。

それを、どういう思考回路をしているのか分からないパンジーは「ドラコを売ったの!？」と糾弾してくるので、ミリセントが無言でパンジーの頬を叩いた。

ダフネは赤毛に「存在が障るから死ね」と一言、以後は本当に赤毛を知覚出来ていないかの様に振る舞っていた。

ロングボトムは蛇寮の圧倒的独走に貢献したとして、軍神ロングボトムの名を冠する事となった。

ポッターに関しては「訳もなく同輩の脚を引っ張る行為」として概念化され、蛇寮では減点されると「ポッターなよ」などと揶揄されるのだった。

午前1時に人気のない天文台にいた男女について、ある者はロマンスを想像した。最初は単に逢引して星を見る程度の話であったのだが、マルフォイのドラゴン云々という言葉は荒唐無稽過ぎて何かの隠語であろうとされ、ポッターのドラゴンがエネルギーとしてペトリフィカス・トタルスという猥談に変わっていた。少年達の中には意味が分からない者も居たが、早晩先輩達から教わるであろう。大英帝国の復興は近い。

最悪だったのは、マクゴナガル教授すら、ハーマイオニーを見る目が変わってしまった事だった。これは真相を知る者としてはあまり

にも彼女が報われない結末であり、ダフネと共に申し立てをする事となつた。

「失礼致します、マクゴナガル教授。今お時間頂けますか」

「ええ、構いませんよ。変身術の事ですか？生憎と、試験についてはお答え出来ませんが」

「いえ、その事ではありません」

「そうですね。この時期になるとその様な生徒が多いものですから。まあ、貴女達の習熟度であれば、特に難しいものではありませんよ。どの生徒にも伝えていますが、普段通りの事をしてください。試験にのみ注力するのではなく、日頃の研鑽が実力となるのですから」

「いえ、そうではなく。ハーマイオニーの事です」

それまでにこやかとは言えずとも穏やかだった教授の表情は、電源を落とした様に温度を失った。

「貴女達が彼女と良い友達である事は知っています。ですが、彼女が行った事は彼女が向き合うべきです」

「彼女が行ったこと、それを教授は全てご存知でいらつしやるのですか」

「彼女は深夜に男子生徒と寮を抜け出した。それが全てです」

「ハーマイオニーがポッターに対し性的魅力を感じるかどうかはともかく、その認識は誤っています」

ダフネの顔に浮かぶのは、校長に対する嫌悪感とはまた別の、失望の色だった。整った顔立ち故に、冷たい彫像の様な印象を受ける。

「教師である私よりも、貴女達の方が知っている事があると」

教授は否定された事に苛立った様だったが、それを受けてダフネもまた軽んじられた事に気炎を上げた。

「ホグワーツの教師であるならば、むしろ知っていなければならぬ事です」

「ハーマイオニーは森番と親しくしているのはご存知ですね」

「ええ」

「森番は竜を孵化させたのです。どうして、どの様に、というのは意味がありません。とにかく、森番は竜を孵化させました」

「そして、ハーマイオニーは我らに頼りました。しかし、我らは彼女にとって優しい選択肢を提示することが出来なかった。結局のところ、とある竜使いがこれを引き取る事になり、その引き渡しの日時と場所が、あの夜の星見の塔であったということですよ」

「ですから、ハーマイオニーを叱責する前に、森番の責を問うべきではないでしょうか。もちろん、ハーマイオニーに非がないとは申しませんけれど」

マクゴナガル教授は鷹揚に椅子に腰掛けると、震える手で眼鏡を下ろした。

「なんと、なんと愚かな事を」

「ええ。ちなみに、寮監に伝えない様にと助言したのは我々です。まずは森番が責任を負うべきことだと。ハーマイオニーから寮監に伝え、森番が失職する様な事があれば、彼女の心は傷付くでしょう。責任ある立場であれば、学生の側で違法に危険生物を飼育する人間など、当然免職するでしょうから」

「それが分かっているからこそ、彼女は何一つ弁明せず、減点を受け、処罰を受けようとしています。ありもしない卑しい疑惑の目を受け続けてなお。その意味はお分かりですか、教授」

「名誉の為です。彼女はハロウインに続いて、またも名誉の為に汚濁に塗れるのですよ。彼女を殺そうとしたトロールは教師ではなく私が殺しました。森番が生み出した竜は彼女が助けました。貴公らは、あと何度我々に負わせるのですか」

知性とは、何が正しいのかを考える力。クイレル教授はそう評した。

ハーマイオニーは、結局自らの身を犠牲として、竜と森番を救った。優しさ故の愚かさは、旧市街を護り続けた狩人に似る。だがしかし、それは狂気でも優柔不断でもなく、自身の中の正義と向き合った結果であろう。我々の提示した、森番か竜を見捨てる選択肢よりも、あの馬鹿共の案を採ったことに一抹の不満はあれど、自らの名誉を汚す危険を冒してまで、他者の生命と尊厳を守ろうとした、その決断までの葛藤には敬意を払うべきだ。その苦惱こそが、知性ではないか。

日頃より彼女を評価している人間こそ、彼女の苦悩を知るべきだ。
「返す言葉もありませんね」

教授は羞恥、悔恨、悲哀、様々な感情のこもった表情で、それだけをほつりと漏らした。

「ですから、彼女の名誉の為、彼女には寛大な処置を。誤認であったと校内で発表してください。ついでに言えば、ポッターとロングボトムも。此度に関しては彼らも巻き込まれた被害者でしょう」

「……それは出来ません」

「は？ 今何と」

仮に邪眼の能力があれば、教授はたちまちに発狂し、血を吹き出していただろう。自分の眼球を抉りだせば、それだけの眼光を放っているに違いない。擦れば彼方より星を呼び出す程に。

「それでもなお、彼女が夜間外出したという事実は変わりません。彼女がその覚悟でその行いをしたのであれば、その結果の責任は負うべきです。彼女はハグリッドと竜を助けようとした。ならば、それは叶えましょう」

「それは、ですが……あまりにも無慈悲でしょう！ それに、彼女がそうしなければならなかった原因を無視していらつしやる！」

「原因がどうあれ、採った手段が誤っているのであれば、それは反省をすべきなのです」

「お言葉が過ぎます。反省するのであれば、貴公らが学生に危険を及ぼす職員を任用している事でしょう。職員の不祥事の責を学生に求めないで頂きたい」

「……私も心苦しくはあります。副校長として、管理責任がある事は間違いありません。貴女達が彼女を思いやる気持ちに応えられない事も、彼女が思いやりの為に行った事も——」

「それを見誤り、彼女が淫行に及んだと考えた事もでしょう」

「そうですね。ですが、これが最も彼女にとって良い事なのです。考えて御覧なさい、この違法行為に手を染めた者達を。これらが公になったとき、ハグリッドはもちろん、名は伏せていましたが、チャーリー・ウィーズリーは職を失い、短期的ながらアズカバンに収監され

るでしょう。悪戯でマグルを揶揄うのとは訳が違います。それだけの事をしたのです。それだけの事を、彼女達は隠蔽しようとし、失敗したのですよ。今になって処罰の撤回をすれば、なぜ撤回したかという理由探しが始まります。そうなれば、彼女達が守ろうとしたハグリッドにいずれ辿り着くことになるでしょう。畢竟、彼女達は何も守れず、それどころか、校則違反者ではなく犯罪者となるのです」

隠蔽しようとした。それは、自分にも言えることだ。ただ単に、事が失敗し、友人が罰を受けるから、直接関わりがない身として安全圏から救いの手を差し伸べている気になっているに過ぎないのかもしれない。

だが、彼女が罰を受けることは、彼女が為そうとした善そのものを否定する様に感じられる。そもそも森番の狂気がなければ、生まれなかつた咎であるのだ。それを、より良い結果のために彼女に泥を被せたままとする副校長の言を易々と受け入れる訳にはいかない。

「成る程。トロールを殺した実績のある生徒が校内を散歩していたら誰が放ったか見当もつかないが竜が都合よくいたので殺した、そういう筋書きであれば誰も彼もが幸せだったと。次からはそうします。念入りに武装して校内を徘徊しましょう。クイディッチの熱に浮かされたのか、服従させられたのか分からない輩も多数おりますので。常在戦場の心構え。流石ホグワーツ。闇の帝王を生み出した英国の誉れ高き学び舎です。彼の者の全盛期は呪詛と怨嗟の声でさぞ賑わった事でしょう」

「教職員の尻拭いが出来る生徒がいてお幸せでしたね、教授」

「そういう事ではありません。誤った手法を取るのであれば、その目的が善であれば、その結果が大なるものであれ、その誤りについては対価を支払うべきなのです」

「対価と仰るならば、債務者は森番であると再三申し上げたつもりですが」

「それを負おうとしたのが彼女達です。彼女達は確かに貴い善なる意思を持っていました。一個人としては、褒め、そしてお詫びをしなければなりません。」

ですが、まず教育者として、正しい意思に基づくならば違法行為も許されるとする事は出来ません。次に、彼女の覚悟は処罰を受け入れていきます。ですから、撤回したとして、彼女がそれを受け容れる事は無いでしょう。彼女の心をより傷つけるだけです」

ハーマイオニーの動機を知らず、何を言うかと思えば。もともと、責任を取らなかつたのは森番で、責任を負つたのは彼女なのだ。彼女が口を開かない以上、彼女の事情を副校長が知るはずもないのだ。ポッターやウィーズリーが弁明をしない辺り、森番とウィーズリー家の為、ハーマイオニーが口止めしているのだろう。

「かのユダヤ人の大工も十字架の上で神を恨んだと言うのにですか」
「宗教談議をするつもりはありません」

「そうですか、ではマクゴナル教授。最後に一つだけ申し上げておきます。どうか貴女だけは、彼女を信じていて欲しかったです。それではごきげんよう」

「私からも。武装するという言葉に偽りはありません。友人に何かあつた時、貴公らが次こそは間に合うとは信用できませんので。例えば、禁じられた廊下からは何やら洗っていない犬の臭いがしますからね。では、失礼」

正直なところ、校内で元凶は森番である事を触れ回りたかつた。しかし、それでは彼女が禁を犯すに至つた覚悟を汚すことになる。それは、業腹だがマクゴナル教授の言う通りであつた。

そして、今更森番の家に竜がいたなどと騒いだところで、その物証は無くなっているだろう。どの道、寮を深夜に抜け出していたところを現行犯逮捕された、という事実は覆らない。

鈍色の空。夜には雪が降るだろう。凍てついた風が、ダフネの黄金の髪を揺らした。

翌朝、ハーマイオニーの顔は蒼白だつた。50点の減点が公開された時の比ではない。

「処罰はそこまで酷いものだったのか。おのれ森番……よくも校舎内に顔を出せたものだ。自らが原因だというのに」

「違うの。処罰そのものは……いえ、処罰も酷かったけれど、多分、例のあの人が復活しようとしているの」

「……順を追って説明してくれ。まるでわからない」

ハーマイオニーは辿々しく説明していく。

処罰は森に棲む一角獣が近頃殺されている事件の調査であつたこと。

一角獣の血を啜っている人物がいたこと。

それを撃退したケンタウロスが予言したこと。

聞いてもなお、やはり全容が掴めないのは、それを体験したのがポッターであり、ポッターの推測が大いに加えられているからだろう。

「まず、何故直接ポッターを殺害しない？」

となると、その不審者はポッターの殺害を計画していない、あるいは優先順位が低いという事だ」

「ただ、賢者の石を狙っている人間という事は間違いないと思うよ。生命を永らえさせる必要があるという事は、それだけ生命を縮める様な事をしようとしているって事だもの。寿命が近いから血を飲むんじゃない？」

「賢者の石が本当に銀行にあつたとして、犯人が同一人物であるとするれば、銀行の小鬼と竜の守護をすり抜けて金庫にたどり着く技量のあつた人間だからな。死に瀕した者がそれを成し得るか考えると難しい。延命ではなく強化が目的とするダフネの考えが正しいと思……いや、逆か。一角獣の血を飲んだからこそ、金庫破りが出来たのか。そこに賢者の石があると確信していれば、血に呪われたとして賢者の石で解決できるからな」

ポッターがすぐに殺害される訳ではない事と納得したのか、ハーマイオニーはひとまず安心した様だった。普段の彼女であれば、この程度の事相談するまでもなく自分で思い至つただろうに、余程混乱しているに違いない。

「とはいえ、どの生徒にとつても危険である事は変わらないな。寮監には？」

「まだ伝えてないわ。それに、罰則の中でそんな人物を見たなんて、何か当てつけみたいじゃない」

「そんな事を言ってる場合か。いいか、森番が可愛いペットを飼うのとは話が違う。明確な敵対者がいて、それは校内にある物を狙っている可能性が高い。なら、前も言った通り、次に標的となるのは学生だ。一人一人拉致して、人質にするんだ。それから、賢者の石と交換だ」
「よくある手口だよ。人質っていつでも、生かし続けるメリットないから殺しちゃうんだけど。解放したら憂いの篩で面割れしちゃやし、それを防ぐ為に忘却術使うくらいなら殺した方が手っ取り早いからね。うちの家系にも同じ事されて亡くなった人いるし」

聖血の一族は魔法界有数の貴族であるのだから、その財産を狙った凶行は数多い。権力憎し、純血憎しで犯人を義賊扱いする恐るべき人間もいる。非魔法族ではなく、非魔法族生まれを穢れた血として排斥するのは、それも理由の1つなのだろう。憎悪と恐怖とは決して相反する感情ではない。

感情とは度し難い故に、死喰い人とされた一族も小鬼の運営する銀行に金を預けているのだ。小鬼はヒトの血がどうあれ、金勘定に感情は持ち込まない。小鬼にとって、誰が持とうと、1つの金貨は1つの金貨の価値しかない。

「純血が魔法界を支配しているとか、民衆を虐げているとか、笑っちゃうよ。純血同士で固まっているのは、ただの安全保障なのにね。まあ、今のところ校内で失踪だとか脅迫だとか、そんな事にはなっていない。どうしてかな」

「ダンブルドア先生よ。例のあの人が恐れる唯一の存在。だから手を出せないんだわ。少なくとも、ハリーとロンはこれで納得したみたいだけ」

「……馬鹿2匹はしておくとして、あまり納得のいくものじゃないな」

「私も賛成できないな。人質というのは、相手の行動を制限する事に意味があるんだ。警察に連絡したら人質を殺す。引渡し場所に一人で来なければ人質を殺す。武装していたら人質を殺す。標的が強力

であればあるほど、人質は効果が高くなる。たとえ人質の生存が望み薄でも、可能性がある限りは対応を迫られるからね。なのに、それをしないっていうのはおかしいんだよ。予防策は基本的にはないかなあ。念入りに報復して見せしめにするくらい?」

「貴族の子女ってみんなこうなの?」

「ブルストロード家は女子供、果ては屋敷妖精に至るまで、何らかの戦闘訓練を受けさせられるそうだし」

「うちの家は追跡魔法がかかっているから、転移術で誘拐されても直ぐ捕捉出来るようになってるよ」

「ヤーナムの場合は加害者の一族一人を残して車輪刑だな。その様を残った一人に見せてヤーナムに危害を加えるという愚かさを心の底にまで刻み込む。まあ大抵心が壊れるらしいが」

「車輪刑って……?」

「車輪を用いて四肢を砕き、その車輪に軀を縛り付けて掲げる。その後は身動きの取れないまま鳥に啄まれて死ぬ。残酷かもしれないが、別段ヤーナムに限ったことではないよ。少なくとも、犯罪者を吸魂鬼に引き渡して処罰した気になっているだけより、ずっと社会公益にも被害者の慰撫にもなる」

「吸魂鬼?」

「この世で最も穢れた生き物の一つ、とされている。儀式もなく魂喰らいが可能……というより魂そのものが食糧なのだから恐ろしいものだ。つまり、飢えた獅子の檻に罪人を放り込み、それで刑罰としているのだよ。まあ罪を犯さなければいいだけだ。もともと、森番はそれに値することをしたわけだが」

「とにかく、いい? ハーマイオニー。あなたがすべきことは学生らしく試験勉強に打ち込む事だよ。森番が私の考えられる限り最低限の知性であったとしてもこのことは校長に伝えるだろうし、一緒に居たドラコがお父さんに伝えるでしょ。それだけ校長を信頼してるなら、寮監に伝えて後は忘れた方がいいよ。マリアだって変身術練習してるんだから」

「またその話か。流石に針はもう燐寸に変えられる」

嗅いだり、舐めてみたりと奇行を繰り返し、漸く燐寸を再現できる様になった。これが試験に出るとは思わないが、初歩の初歩すら出来ないのであれば成績など望むべくもない。

ハーマイオニーは「確かにそうかも」と一言。切り替えた後は魔法史の教科書と参考図書の細かい文言の違いについて延々とどちらの解釈が正しいのか質問責めにしてくるのだった。

警句

期末試験は肩透かしも良いところだった。変身術の試験は鼠を嗅ぎ煙草入れに変える事だった。ポーン家にはパイプや葉巻はあれど嗅ぎ煙草を嗜む者はいない。嗅ぎ煙草入れの模範的な形というのは想像出来ず、自暴自棄になってオルゴールを模してみれば、マクゴナガル教授は試験の重圧の中で付加価値をつけた事に一人で大層感激し、満点を頂いた。

逆に、得意であると考えていたフリットウィック教授の試験では苦戦した。机の端から端までパイナップルをタツプダンスさせる事が課題だったが、まずパイナップルに足を生えさせなければならず、それは変身術の領域だ。仕方無しに星界からの使者を模したパイナップル人形を作り出したが、そこから先が進まない。タツプダンスなど見たことがないからだ。そもそもダンスなど、カインハースト城で催される舞踏会やバレエ程度しか知らず、楽しむよりも礼儀作法として叩き込まれた面が強く、アンネリーゼ女王には申し訳ないが、好みではない。音に聞くタツプダンスといえば、アップテンポで激しく身体を動かすもの程度の知識であり、ロンドンのストリートで見たアップリーな音楽に合わせたあれだろうかと、奇妙な果実に踊らせてみた。「それはブレイクダンスです」

フリットウィック教授からは普段の陽気さは消え、重々しく口にした。

「生憎ながら、華やかな文化には疎いもので」

「昨年、貴女のお姉さんも同じ事を言って、素晴らしいウインナーワルツを披露してくれましたよ。やはり血は争えませんね」

「そうでしょうとも。やはり我が姉上はいつも優美でいらつしやる」「褒めているわけではないのですが……。まあいいでしょう。これはこれで楽しいものを見せてもらいました。満点とは言いませんが、十分な点数を与えましょう」

そうして若干の屈辱を味わいながらも、試験は概ね順調に終えた。ダフネは一年をかけて絶望的な不器用さを人並み程度に改善し、調

薬だけが不安であった魔法薬学の試験も満足いく出来だと言う。そもそも、不器用さというのは緊張によつて手が震えるだけの事であった。こうして蛇寮のいつもの面々は、それぞれ自分の得意な分野は順当にこなし、苦手な分野は相応の成績を残したのだった。

夏が来てからというもの、空は黄色く煤けた青色となり、湖は陽光を受けて煌めいていたが、地下牢は湿度が増して蒸し風呂の様子を呈していた。談話室でこそ淑女然として律儀に制服を着ているが、女子房に戻れば誰もがキャミソールやタンクトップに下着姿である。男子に至つては半裸に近い格好で談話室に鎮座し、クイディッチ選手達はその精悍な肉体を惜しみなく曝け出していた。ヘルマンは僅かにネクタイを緩め、シャツの釦を外すのみであったが、ちらりと覗く素肌についてドロテアはいやらしいとヘルマンを詰つた。気を引きたいならもつとマシンな言葉があるだろうに。

「一年のボーン、いるー?」

「はあ、ハーンに」

例に漏れず、ひんやりとした石壁に身体を貼り付け、涼をとつていると、女子房の入り口から声が投げかけられた。

「客だよー。談話室の前に待たせとくからねー」

「はいただきますー。ダフネ、ちよつと出てくる」

ダフネはうつ伏せのまま、片腕をあげて応えた。

身支度を整えてから談話室を出ると、客とは、案の定と言うべきか、ハーマイオニーだった。肩で息をしていることから、随分な距離を走ってきたらしい。どうしたと声をかける間もなく、手を握られて秘密の部屋に連行された。

「どうした。今更試験がどうこうもないだろう」

「そんなことじゃないの。石の護りは今日にでも破られるわ」

「……何故?」

「ハグリッドは竜の卵を譲ってもらう時、ケルベロスの弱点を話してしまつたのよ」

ケルベロスの弱点。それは豎琴の奏でる音楽によつて眠つてしまふという迷信だろうか。神話が生きている頃にはあり得たかもしれない

ないが、今もそんな弱点を抱えているならば番犬にはなり得ない。誰が好き好んで獣臭い置物を財貨の前に備えるのか。

「それで？」

「それでって……偶々竜の卵を持つてる人が現れて、ケルベロスが音楽に弱いなんて事を聞き出すと思う？」

偶然にしては出来過ぎているとは思いますが、それよりも竜の卵の入手経路の方が気になった。自身の浅はかさで生徒の名誉を汚し、それで行くところと森番を続ける様な人物であるのだ。その倫理観からすると、大方まともでない繋がりから卵を得たのであろうと思つてはいたが、自発的なものではなく得体の知れない人物から貰った物らしい。拾い食いをする犬と変わりがない。

「まあ、怪しい事には怪しいし、石を狙う者だろうとすれば道理は通るな。その場合、下手人は学内の人間であるということになるが」

「そうでしょうか？ あのトロールの夜の事を思い出して。スネイプは脚に怪我をしていたわ。ハリリーの箒に呪いもかけていた。それに、ハリリーはクイレル教授がスネイプに脅されているのを何度も見ているの」

「ほう？」

脅迫を受けるクイレル教授、これは初耳だった。それが事実であれば、寮監がクロである事は濃厚だ。

「その事をマクゴナガル教授には？」

「伝えてないわ。石が危ないとだけは伝えただけ、取り合ってもらえなかった」

「……校長には？」

「今日は外出していらっしやるそうなの。戻るのは明日らしいわ」
「なるほど、それで今日にも破られる、か」

夏季休暇に入り、生徒が居なくなつてしまえば、学業の面倒を見る手間が無くなり、教員達の防御も手厚くなる。そもそも教員を防御装置として捉える事自体が間違っている様にも思えるが、仮に賊が押し入ったとして、人質を取られる危険性は減る。

「だから、私達で校長がお戻りになるまで、何とか持たせなきゃいけな

い。こんな事を言える立場じゃない事は分かつてる。けれど、お願い。助けて」

「ダメ」

答える前に、いつのまにか入口にいたダフネが答えた。イングリットお姉様とドロテアも無表情でこちらを見ていた。

「それはダメだよ。本当に危ないと思ってるなら、私たちが関わっちゃいけない事だよ。今の話を全部副校長に伝えて、それでお願いします。だってそうでしょう？ そんな大切なものを学校に置いているのは学校の都合。生徒がそれに付き合わなきゃいけない事もないし、付き合ったところで、ろくな事にはならないよ」

「分かつてるわ！ けど、それでも」

「分かつてないよ。確かにマリアは、狩人達は凄い力を持つてる。けれど、その力をあてにしているって事じゃない。貴女は幸運にも、マリアが助けてくれた。あの時は貴女のせいじゃない。けど、今回は違う。自分から危険に近づいて、それを助けろっていうのは虫が良すぎるんじゃない？ 力ある者の責務は、自らに課す精神であって、他者に求めるものじゃないよ。それに、貴女は友達だからっていうだけの理由で、その力を振るえっていうの？ 仮に寮監が本当に悪人だったとして、マリアにその力を以って寮監を殺せと言ってるって事、分かかってる？ マリアは都合の良い道具じゃない。私と貴女の大切な友達だから。それを間違えないで」

「ダフネちゃんの言う通りだよ、マリア」

「これは狩人が立ち入るべき事ではないわ。これは狩りではない、貴女の闘争。たとえば、貴女が命を落とす事になろうとも、狩人として貴女を助ける事は出来ないわ」

ハーマイオニーはごめんなさいと呟き、俯いた。

発端から今に至るまで、全てに違和感がある。ハーマイオニーはあの馬鹿共と行動を共にし、子供じみた英雄願望に身を任せていた。つまり、彼女もまた馬鹿なのか？ 否、それはあり得ない。突飛な言動は多かったが、この1年で見てきた彼女はそうではない。今に至るまで、何度も伝えた学生の領分ではないという忠告は悉くが結果的に無

視されているが、その時点では確かにその意味を理解していたのだ。では、何故彼女はこうして手遅れになるまで放置し、自らも理解している様に、無関係な狩人に助力を願うという無理までしているのか。自らの意思は自由でありながら、自らの行動を歪める。

そう、それはダフネと話していた事ではないか。人質による脅迫だ。

茹だる熱気が肌を舐る。遠く、潮騒の様に蝉の声がする。脳の中で騒ぐは獣の咆哮。だが、それに身を委ねてはならない。それはあのハロウィンに学んだ事。

校長に黜られ、ヘルマンに諭され、フリント先輩に明かされた、目的と行為の合致。純然たる意思。父王が絶望に苛まれ、なおも求め、そして悪夢の果てに至った。そこに、獣性はなく、ただ願ったものは、人の救済。

王よ、偉大なる父よ。

我が血が拝領した愛と力は、この為に在る。

「私は征くよ、ハーマイオニー」

「マリア！ 私が心配しているのは、ハーマイオニーだけじゃない。マリアのこともなんだよ？ マリアと一緒にいっても、不安が1人から2人になるだけの事なの。狩人の作法なんて知らない、ただの友達なんだよ。心配させないでよ！」

「こういう時、自分の語彙力の無さが悔やまれる。なんというか……まあ、明るく喋るとだな。」

ホントにスナイプならクソザコなメクジだよ。噛み付かれたんだか引つ搔かれたんだか知らないけど、犬畜生も無傷で倒せないザコが、狩人殺そうなんて無理。ってか、扉の奥に犬がいるって分かってるなら、扉の隙間から毒餌でも毒ガスでも流せばいいんだって。そんな事も思いつかないくらいのエグい馬鹿なわけ。どんなゴリ押しで銀行強盗したか知らないけど、もう今じゃ処女厨の馬の血イ飲まなきゃやってらんないでしょ？ もう、頭回らないし身体はボロツボ口。そんなのが、血を飲むだけで開放骨折から内臓破裂まで快癒する様な生き物に勝てるわけないって。ね？

だから安心したまえよ」

「……ええつと、マリア。真剣な話してる時にそれはないよー。安心させようとしたんだろうけど、ふざけてる様にしか聞こえないよー。ってか、アルフレートさんみたいなテンションの落差がパスみあつて怖い」

ドロテアの口調を真似たつもりなのだが、それを本人に馬鹿にされるとは。

「うるつさい。ヘルマンみたいに面倒な言い回ししないせいで余計ムカつく。いつペン目覚めろ。墓生やしてやろうか」

「ダフネ、ごめんなさいね。ウチの子、結構な癩癩持ちで単純だから」
「お姉様まで私をバカにする！ 友達を安心させようとしてるの！

フオローしてくれた方がいいじゃない！」

「まあそれは知ってます。寝言も寝相も酷いし、本人が自覚してる以上の子供っぽいですよ。それはともかく、マリアの見立てはあつているんですか？」

「樂觀的ではあるけれど、悲観的であるよりはよっぽどいいと思うわ。ダフネ、みんなと一緒にお菓子作って待ってましようね。それと、グレンジャーさん」

「はい」

「貴女の言い分はあるにしても、やはりこれは狩人としてのマリアも友達としてのマリアも侮辱しているわ。それに怒りが無いわけではありません。私だって、マリアの姉だもの。」

自分の都合で危険に飛び込むのに、友達だから助けろなんて、気軽に言うことじゃないわ。けれど、それでもマリアは貴女と友達だから行くの。だから、貴女はそれほどまでに、マリアに愛されている事を知りなさい。それを分かっついて、それでも貴女達を留めようとするダフネをより深く愛しなさい。お菓子は貴女の分も用意するから、後でたっぷり反省すること。

それでいいわね、お兄様達」

お姉様が外に声をかけると、手だけが視界に現れ、ひらひらと揺らめいた。

「やはり女性の話は長い。化粧室の前にたむろする男子になどなりたくはなかったのだが」

「有り体に言つて変態ですね。まあ、妹が心配でそろそろと集団徘徊してる時点で相当アレですが」

「それは王たるボーン家への侮辱か？ また私の制裁を食らいたいか」

「馬鹿は放っておくとして、マリア、お前も相当な馬鹿だぞ。だが、友を救う為に血を沸かす姿は、兄としては誇らしい。この辺りは性差というものか。イングリットは愛を説き、細かい道理はヘルマンがどうとでも女々しく弄ぶだろう。そんなものは想い出でいい。今は単純で良いのだ。間違えるなよ。救う為に走り、救う為に振るえ。そう、旧く、そして今も継がれる警句だ」

「かねて血を恐れたまえ」

三頭犬

「遅かったじゃないか」

衣摺れと囁きが僅かに耳朵を打つ。ポッターは透明マントを持っているという事だったので、それで包まれているのだろう。青い秘薬は狩人の存在を曖昧にする。待っている間にやってきたゴースト達は、ゴーストでもなく人でもない、勝手に憐れんでから過ぎていった。

「なんでお前がここに!?!」

ウィーズリーか。

お互い見えてはいないが、声からは大体の位置が察せられる。

「貴公こそ。力も無く、知恵も無く、それでいて何が石を護る、だ。くだらない事で騒ぐな。怪物に気づかれるだろう。」

……では、征こうか」

元よりそうなっていたのかは知らないが、木の扉は僅かに開かれており、獣の臭いが漂っている。服や髪に染み付いていないか、淑女としては気になるところだ。

禁忌を護るもの。

過去のヤーナムとは、禁忌を秘匿から暴く事こそ探索の目的であった。遺跡を暴き、上位者に見えたビルゲンワース。その罪業を覆い隠した時計塔のマリア。ビルゲンワースの失敗の後も頭蓋を暴き、瞳を求めたメンシス学派。その狂気を覆い隠した白痴のロマ。

ヤーナムの街区を区切る一般的な仕掛け扉ですら、魔術によって保護されている。極東の聖堂たる神社では、禁忌を護る為に、戸に紙を貼るという。物理的には頼るべくもないそれは呪いの一つであり、その禁忌を破ろうとするものの心に作用する。一方で、この扉は禁忌を護るにはあまりにも無防備である。

さらに、そもそも禁忌を秘匿しなければならぬ校長自らがここに禁忌がある事を表したのだ。まるで、禁忌に触れよと言わんばかりではないか。あるいは、事故として不出来な生徒を処理する為の誘蛾灯か。悪夢の辺境で人頭蜘蛛に突き落とされるのは狩人の通過儀礼だ。

いずれにせよ、進まぬ事には何にもならない。扉を押し開けた。
「さて、何だこれは」

そこに居たのは冥界の番犬ケルベロスではなく、ただの三つ首の犬であった。三対の目は焦点の定まりなく部屋を見渡している。ケルベロスは、蛇のたてがみを持ち、竜の尾を持つ多頭の怪物だ。眼前に構えるは、多頭を模しただけの醜悪で哀れな犬だった。死体の寄せ集め、再誕者を思わせる。女王ヤーナムを人質にとられ、ヤーナムから人を拐かす人攫い達。秘儀が破られれば、屍となりて醜悪な怪物の血肉となった。メンシスのおぞましき狂気は、源流たるホグワーツにて今もなお息づいているというのか。

「……竜といい、犬といい、生命を弄ぶ事に何ら躊躇いはないと。腐り果てているな、森番」

おそらく、悍ましい試みの果てに生み出されたのであろう、異形の怪物。犬として巨きすぎる体躯は、尋常な飼育方法によって生み出されるものではない。こんなものが普通であるならば、今頃赤毛の鼠は人ほどの大きさになっているだろう。

青銅の咆哮には程遠い、ただの獯猛な呻きをあげる犬に何の恐怖が湧くものか。只人であるならば叫び声をあげて逃げ出そうものだが、狩人にとつては憐れみを誘うだけのこと。

「どうする。驚くべき事に、本当に音楽が効くらしいぞ。番犬どころか赤子ではないか」

部屋の隅には、豪華な豎琴が鎮座していた。先行者が用いたものだろうか。

「どうって……何を？」

ポッターは怯えながら言った。見えていないにせよ、三頭犬は嗅覚と聴覚を用いて、何かが室内に居る事は知覚している。間合いに入れば攻撃されるだろう。

「後顧の憂いを絶つならば、始末しておくべきだ。負傷して戻ってきた時に、腹を空かせた犬が居るのは頂けないな。そもそも都合良くあの扉を開けたままじっとしているとも思えないしな」

犬の足元を見れば、床に扉が備えられている。道はその先にあるの

だろう。万事首尾良く終えたとして、犬が邪魔で戻れないとは笑うに笑えない。

「ダメだ！ あれはハグリッドの飼いなんだ。ドラゴンを手放したのに犬まで居なくなってしまう」

「やかましい。その大切な駄犬の餌になりたいのか」

竜にしても犬にしても、森番の行動からは愛というよりも偏執しか感じられない。

「帰りの事はさて置くとして、殺さぬとならば音楽はどうする。ハーブの心得は私にはない。いや、むしろ、だからか？ あれは元からここに在ったとすれば、あのハーブでなければ犬は警戒を解かない、そういう罠なのか」

「いいえ。前に入った時はあんなもの無かったわ。歌じやいけないのかしら」

「歌ってもいいが、復讐の炎は地獄の様に我が心に燃えだとか、あまり難しいのは無理だ。そもそも何を以って犬が音楽と認識するのか分からないな。ヒトの歌と獲物の断末魔とを聴き分けられるのか疑問だな。アリアを演って食いつかれてはかなわん」

猟犬が犬笛を吹けば走り寄り、号令によって飛びかかるのは訓練されているからだ。獣の声は音としてしか分からぬ様に、音に意味を持たせるものは、それを聴いた者である。言葉など、呪文など、自己の想像を魔力によって具現化する為の道具に過ぎない。ラテン語でしか魔法が使えぬのであれば、アジアに魔法社会は存在しない事になる。音楽も同じ事。それがラテン語であれ、ドイツ語であれ、当時侮蔑されたヘンデルによる英語のオラトリオが今日では世界中で愛されている様に、宗教音楽の本質は神に対する崇敬の念である。

「僕が笛を持つてる。ハグリッドからもらったんだ」

「話を理解していないのは分かったが、まあ好きにしろ。ダメなら即座に頭を刎ねるだけのことだ」

後方でガサガサと音がして、それから歪な笛の音色がした。A440でもA415でもなく、ろくに調律されていないそれは、ポツターの技法と相まって絶望的な調べとなった。それでいて、三頭犬は臉を

閉じ始めていた。まさに駄犬。

「耳が腐りそうだ」

「じゃあお前がやってみろよ」

「男子が口につけた笛を吹く趣味はない。だが、旋律らしきものがあれば何でも良いということは分かったな。もういい、ポッター。これが冥界下りの模倣だとするならば、曲は決まった」

ポッターが演奏をやめた途端、犬はまた首を擡げ、辺りを警戒し始めた。大きく息を吸い込む。獣臭い空気が肺に流れたが、ヤーナムの下水道や実験棟の死体溜まりに比べればまともである。

「Amazing grace how sweet the sound. That saved a wretch like me. I once was blind but now am found, Was blind but now I see」

これまで音を立てているのだ。最早青の秘薬の効果も消え果てた。だと言うのに、犬は舌をだらしく垂れ下げ、完全に眠りこけている。「Twas grace that taught my heart to fear, And grace my fears relieved, How precious did that grace appear, The hour I first believed」

歌いながら犬に近寄り、扉を塞ぐ脚を退けた。用心として剣の柄に手をかけていたが、犬が意識を取り戻す事はなかった。後ろを見やれば、透明マントが外され、3人の姿が現れる。

「Through many dangers, toils and snares I have already come. 'Tis grace hath brought me safe thus far, And grace will lead me home」

扉の奥には何も無く、ただ暗い穴になっているだけだった。輝く硬貨を振りまくが、反響音がしない。ハーマイオニーと顔を見合わせて

いると、ポッターが飛び込んだ。

「The Lord has promised good to me, His Word my hope secures; He will my shield and portion be As long as life endures.」

「大丈夫だ！何かクッションみたいなものがある！無事に降りられるよ！」

しばらくして、ポッターの声がした。それを聞き、ウィーズリーが飛び込んだ。問題は行けるかどうかよりも帰ってこれるかどうかなのだ。装備もなく垂直登攀するつもりか。

「Yes, when this heart and flesh shall fail, And mortal life shall cease, I shall possess with in the veil, A life of joy and peace.」

どうしたものかと悩んでいると、ハーマイオニーが囁いた。

「マリア、大丈夫よ。先生達は護りを施して、それから帰ってきてるんだから。きつと横道か何かが校内のどこか隠し通路にあるのよ」

ハーマイオニーの言う事にも一理ある。崩落している場所はどこか、現実のヤーナムからメンシスの悪夢に至るまで、基本的にはどの地域も繋がっている。しかし、ビルゲンワースの湖はそうではない。湖であり、湖でないあの場所は、使者のランタンによって移動する他、抜け出る術がない。

「The earth shall dissolve like snow, The sun forbear to shine; But God, Who called me here below, Will be forever mine.」

ハーマイオニーは目を閉じ、3つ数えると穴に飛び込んでいった。悩めどもどうしようもない。それに、ハーマイオニーの言葉には怯えこそあれ、何か確信めいたものがあつた。

「When we've been there ten thou

s a n d y e a r s , B r i g h t s h i n i n g a s t
h e s u n , W e , v e n o l e s s d a y s t o s
i n g G o d , s p r a i s e T h a n w h e n w e ,
d f i r s t b e g u n .」

部屋の隅に匂い立つ血の酒を投げつける。獣も狩人も酩酊させる
芳しき血。遺志を持たぬそれは、忌むべき性と知りながら、至高の甘
露である。

神の酒ネクタール。それは奇しくも、賢者の石によってもたらされる
生命の水の別名でもある。

チエス

落ちながら、ケミカルライトを折り、下に投げつける。ヤーナムで起きた最後の獣狩りの夜は19世紀。それから200年近くも経っているのだ。精神が変わらずとも時代は進む。現代の狩人は非魔法的な懐中電灯を用いる。しかし、ホグワーツでは電化製品が使用できないため、ヤーナムに戻った時に買い揃えておいた。

床が近い。何が下にクツションがある、だ。緑の光に照らされているのは、どう見ても石の床だ。五転着地で衝撃を吸収する。見渡してみれば、3人は蔦に締め上げられ、何事かを喚いていた。なるほど、悪魔の罠がクツションとなるはずが、光によって退いていたのだろう。「しかし、これで悪魔を冠するとは随分と温いことだ」

ライトを放り投げてやれば、3人に絡む蔦は瞬く間に消え失せた。蔦が再び這い寄ってきたが、松明に火を灯せばどうと言うことはない。

「これで帰り道が無ければ雑草刈りが必要だな。酸欠が気になるが、必要であれば燃やすか」

壁には蔦の出入り口と思われる穴がいくつかあった。油壺の用意もある。

「ありがとうマリア。それと、素晴らしい歌声だったわ。また聞かせてね」

「面映ゆいが賛辞は受け取っておこう。だが、お姉様はもっと艶やかな高音が出せるし、お兄様の力強く語り掛ける様なビブラートも良い。ジエラルド……我が寮の7年生だが、あれも多才なものだ。彼のイタリアオペラは素晴らしいの一言に尽きる。誰も寝てはならぬ辺りが聴きやすいが、聴きやすいからこそその歌声の良さが浮き立つ。分かりやすいものを勧めると馬鹿にしてくる人間もいるのだがな、普及しているものを低俗として扱い、珍しいものを高尚なものとしてありがたがる自称専門家どもには辟易する。確かにハンバーガーが世界一美味しい物とは言えないだろうが、シユールストレミングこそ違いの分かる人間の食い物などとはざく様な物だ」

「遠足じゃないんだ。さっさと行こう」

ポッターが不機嫌そうな声で言った。

「それもそうだ。呆けて上を見ていても仕方ない」

入り口は遠い。教会の古工房と市街を繋ぐ立坑よりはまだ浅いにせよ、姿勢が悪ければ墜死するだろう高さだ。慈悲の刃を壁に突き立てていけば、登れるかどうか。松明で周りを確かめながら進むと、大きな木の扉があった。獣憑きでもいればいよいよヤーナムじみてるが、何のことはなくすんなりと開いた。

「あれは……鍵か？ ととなると、あの扉を開く鍵が群れの中の1羽ということか。面倒な」

先程とはうって変わり、扉を開けたそこは星明かりが照らす吹き抜けであった。その高みを羽の生えた無数の鍵が悠々と回遊している。

「いや、考えてみれば、ここに賊が居ないということは、既に扉を開けているのだろう。鍵は不要かもしれないな」

ウィーズリーが取っ手を左右に回し、扉を押ししたり引いたりしたが、開く事はなかった。

「退け」

教会の石鎚を一振りしてみると、明らかに扉に当たる前に弾かれた。おそらく、頑強な防御がかけられており、鍵によってしか開けられない様になっているのだ。

「駄目か。銀色で、大きい物……あの羽の歪んだ物がそうだろうか？」

鍵と錠とが同じ材質として、目星をつけるならあれであろう。羽は捕獲された時に損傷したものでしょうか。

いよいよ分からなくなってきた。何故強固な防壁を張りながら、鍵をその前に置くのか。そして、何故その鍵を獲る為に、箒が備えられているのか。鍵は校長室なり職員室なりに保管するのが当然であろう。犬は森番の口を割れば良く、この場合は箒の才があれば良い。いかにもポッターに御誂え向きの状況ではないか。

「気に入くないな。喜劇の端役にでもされた気分だ。狂言回しとしてもこんな茶番には付き合いたくはなかった」

「マリア」

「ハーマイオニー。全てが終わったら安心して話すといい」

やはりハーマイオニーは何かに脅迫されている。故に、この様なふざけた事態に巻き込まれているのだ。聡明な彼女がこの様な愚図共と連れ立っていて、この状況に違和感を持たぬはずはない。それでいて、何も明かさぬとすれば、話さないのではなく話せないのだ。首謀者を断罪し、ハーマイオニーを解放しなければならない。

「さて、憂き晴らしだ」

大筋はその首謀者の望み通りにしなければならぬとはいえ、全て筋書き通りになどしてなるものか。血に意志を込め、悍ましい虫けらが騒ぐ。只の魔術師であれば、それは何のことはない、1年生の初歩の初歩、念動の様に見えただろう。だが、狩人は懐かしき物を幻視するだろう。虚空より現れ、虚空に帰す、アメンドーズの幻の腕を。魔力によって生み出した第三の腕は、知覚出来ぬ壁となつて鍵を捕らえた。

「そら」

羽を筆り取り、まるで魚の様に痙攣する鍵を赤毛に放る。心底嫌そうな顔をするが知った事ではない。扉の近くにいたのだからウィーズリーに寄越すのは道理の事だ。それに、豚の尻に腕を突き込む感触に比べれば大抵のことはどうと言うことはないはずだ。お母様は髪留めのリボンを腕に巻き、豚の内臓を肛門から引きずり出すという。少女王等と揶揄されることもあつた様だが、古狩人を祖に持ち、そして父と交わる事で上位者に至つたのだからその程度の事造作もないだろう。

「この鍵で合ってるみたいだ。鍵はどうしよう」

「挿したままにしておけ。帰りに閉まっていたら餓死する羽目になる。」

……ん？ ならばそれも良いな。ここで引き返し、鍵を校長なり副校長なりに渡せば良い。あとは休暇中に干からびた賊の骸を漁るだけだ。

冗談だ。生命の水を得た人間が木乃伊になろうはずもない。面倒だからそう言ったまでの事。次はそうだな……ウィーズリー、おそら

くお前が役に立つ事になるだろう」

「なんだよそれ」

「いいから開けろ。何も肉壁として役に立てと言う事ではない。開けた瞬間に矢が飛んできたり、ギロチンが下りてくる事はないはずだ」
「スリザリンらしい物騒な発想だな。確信してるならお前が開けろよ」

「ほう？ 騎士道を誉れとする獅子寮は婦女子を盾にすると言うのか。如何なる時もレディファーストとは素晴らしい紳士の振る舞いだな。褒めてやろう」

「狡猾なスリザリンの言う事だから警戒してるんだろう。第一、お前がここに居る事だっておかしいじゃないか」

「ハーマイオニーの為にここに居るんだ。馬鹿2人が犬の餌になろうと、鳶の養分になろうと知った事ではない。だと云うのにハーマイオニーが行くと言うから仕方無しにここに居るんだ」

「いい加減にしてくれ。僕らはスネイプから石を護る為にここに来たんだ」

「利口な事だ。子犬は怯えたから5点減点。冷静なポッターには5点やろう。差し引き0点だ。それとも、あの時の様に、2人で0点は少ないとでも愚痴を漏らすか？」

重ねて言う。さっさと開けろ、ウィーズリー」

「……これで死んだら末代まで呪うからな」

「生憎と狩人は既に呪われた身だよ」

赤子の赤子、ずっと先の赤子まで。

狩りのカレル文字とはトウメル遺跡に於いても見られる、魔力継承を可能とする儀式魔術である。その継承の能力にゴース、あるいは漁村民であるのかは分からないが、それらからの呪詛さえも継承する様になった。

ビルゲンワースが墓暴きに勤しむ頃、既にカインハーストでは些か快楽主義に傾倒していたが、上位者にならんとする試みが為されていたのだから、狩人の起源を漁村に求めることは誤りだろう。だが、血に酔い、悪夢に落ちるといふ呪いは確かに漁村で生まれた。

狂気の探究心は、墓を暴き、頭蓋を暴く。始まりの女が林檎を食した事が、原罪として後に生まれる者にも累が及ぶとされる様に、ヤムナの狩人となった者は全てがその罪の記憶を負う。贖罪はその罪の始まり、助言者ゲールマンらによって為されたが、父王によってゲールマンの罪は雪がれ、今や父王こそが上位者にして断罪者である。父王の胤を継ぐ者は、不老の身として、獣を狩り続けなければならない。その終焉はいつになる事だろうか。

戦争の度に獣は増える。魔法族は自らに流れる血が魔力をもたらず虫に汚染されているとは知らず、人の矜持を棄てた時に、血に宿る虫はその身を獣に変える。宗教が廃れても人類は主義の為に戦争を続けた。共産主義の灯が消えようとしているが、次は何によって戦争を生み出すのだろうか。学閥などくだらない事で差別し、攻撃する有り様からは、夜明けが程遠い事を感じさせる。くだらない事だ。「ぼうつとして、どうしたの?」

「いや、あまりに不毛な会話に自分でも呆れてな。きつと甘味が足りないんだ。さつさと終えて、ダフネ達の作ってくれた菓子が食べたい」

「……ごめんなさい、マリア」

「気にはするべきだが、悔やむ事はない。意思なき決断には責任などないのだから」

扉を開け、暗闇を数歩進むと、燭台に火が灯る。照らされた広間は白と黒の床があり、石像が立ち並んでいた。

「……ウィーズリー、貴公はチェスが得意なのか?」

「さあ。少なくとも、兄弟の中じゃ一番だし、ハリーとハーマイオニーよりも上手い自信はある」

「つまり、そういう事だ。ウィーズリーの魅せ場なのだろう」

「お前はどうかんだよ」

「チェスの技量の話か? 規則は覚えているが、8つの時に指示を聞かない駒をすり潰して以来、触った事はないな。私の魅せ場の話なら、そんなものはない。私は招かれざる客だからな」

「どういう意味だよ」

「どうでもいいことだ。さて、この部屋はチェスに勝たなければ通れない。白の駒が動かないということは、我らが駒として上がらねばならない。そうだな？」

手近な騎士の駒に問うと、頷いた。

「なるほど。気に入らん。押し通るぞ」

言いきる前に、騎士は馬上槍を突き出してきた。牽制だったのか、疾くもなく、範囲も極少であり、古老の如き追尾があるわけでもなければ、躲すのに困る事はない。

「ふん。貴公らは盗賊の傀儡となつて、白の軍勢を打ち負かし、道を開けたというのか。騎士道とは護りの誓い。貴公は何に忠誠を誓ったのだ。気に入らんとはそういう事だ。己が騎士道に恥じるならば、馬を降りよ。その首斬り落としてやろう」

騎士は震えて槍を落とし、馬から降り、跪いた。その腰から剣を引き抜き、肩に当てる。

「良かろう。貴公の屈辱も分からぬものではない。だが、賊を打ち払うではなく、貴公らが創造主マクゴナガルの学徒たる我らに刃を向けた事。この罪は贖わなければならない。そこに跪き、我らの戦を見ているがいい。ともがらと共に戦列に並べぬ屈辱を受けよ。我らの勝利の暁には勝鬨を上げよ。それが貴公に与える罰である。」

ウィーズリー！ 貴公が馬に乗れ。私は女王の座をもらおう。2人の配役は任せる」

黒の女王の前に立つと、女王は椅子から降り、一礼をした。自らの騎士をも護れぬ王になど払うべく敬意もないが、礼を失すれば自らの誉れも失う。両手を腹に当て、腰を折る。教会の一礼とされる所作だ。

今の格好はお爺様の狩装束である、神父の狩装束。無論、意匠がそくなつていてというだけのこと、現代の狩装束は魔術と科学の最新技術をふんだんに用いた戦闘服である。トロールの一件以来、工房にホグワーツ制服を模した狩装束も誂えさせたが、流石に一点物。5キロドルを超える価格では、今後の成長も考えると、流石に何着も揃える事は出来なかった。その点、人形の服やマリアの狩装束など不朽の人

気を持つ製品は流通量も多く、価格が安定している。

盤面は互角と言っていていいだろう。幾分か黒の駒が抜け落ちているが、人間は一人として斃れていない。王だけでなく兵ですら守らねばならない状況で、よく互角にまで持ち込んだものだ。そこはウィーズリーを賞賛しよう。

「ポーン」

「なんだ」

女王の動きを駆使し、敵陣深くに突き進んでいる為、ウィーズリーの顔は見えない。女王の駒は、椅子に座っていれば勝手に椅子が進むだけであったので楽でよい。ポッターは何度か近くの駒が破碎された際の破片で負傷した様だった。額を抑えてうずくまる場面もあった。

「ごめん」

「だから、なんだ」

「あと5手先で、お前がポーンをとってチェックをかけた後に、別のポーンにやられる。その次の手で僕のナイトがチェックをかけた後にやられる。その後、ハーマイオニーのビショップが効いているから、ハリーのルークが突っ込めばチェックメイトなんだ」

これから5手で何がそうなつてそうなるのかは分からないが、そう言うならばそうなのだろう。

「勝ちが見えてるならもう勝利でいいのだろうか？」

「いや、駄目だ。チェスは相手が負けを認めるまで終わらない。たとえチェックメイトになることが分かっても、チェックメイトの宣言がされるまでは負けを認めないはずだ」

「そんな！ ローン！ 駄目だ！」

「動くなポッター！ 動けばルークが動いた事になる。ウィーズリー、他に手は？ さつきも見せた通り、私は躲せるが、お前はそうはいかないだろうか？」

「無いよ。出来るなら、お前だけを犠牲に出来る指し方をしたかったさ。でも、今の盤面じゃ、これしか手は無い」

「なるほど。覚悟は出来ているのか、ウィーズリー」

「出来るわけないだろ。けど、これしかないならそうするしか無いんだ」

「私を囚にする事は気に入らんが、それはそれとして貴公の騎士道に敬意を払おう。ひとまず、私が獲られるまで進めろ。貴公の生命は鴻毛の如く軽いが、勝利に殉ずる意志だけは認めてやろう」

勝ち筋が見えただけあり、その後の展開は早い。赤毛の言う通り、ポーンが剣を振るい、玉座を刺し貫いた。ハーマイオニーは悲鳴を上げたが、片手を上げて応えてやれば、安堵の息を漏らした。

「ウィーズリー、まだ動くなよ」

盤は降りず、白の王を見据え、言葉を紡ぐ。

「我が名はマリア・アイリーン・ポーン！ 旧き血を継ぎ、なおも常に新しきヤーナムの民であり、王の子である！ 先の言葉は聞こえたであろう、白の王よ！ 貴公らの兵は我等の歩みを阻む事はない。我等が斃れようとも、後に続く者が貴公を玉座から引き倒すだろう！ 貴公が地に伏すまで、いたずらに配下の骸を重ねるつもりか。我も王の血を継ぐ者。その痛み、知らずして冠を戴くは愚かなり。王とは冠と共に、臣民と剣とを戴く者なれば。」

故に、王たる者として、貴公に慈悲を与えよう。兵の生命が惜しくば、冠を棄てよ！ 誇り高く自死せよ！ 然らざば、追われた畜生の如き死を選ぶがいい！」

返答は、轟音と共にあった。

白の王が打ち捨てた冠は、石床に落ち、砕けた。

「貴公の意志、確と見届けた！」

振り返れば、黒の騎士が槍を高々と掲げている。

「貴公の罪を赦そう！ ともがらと共に、我等の勝利の凱旋を待ち、讃えよ！」

白の軍勢は列を成し、王道を開く。その先に扉はあった。

人形

「マリアの魅せ場って、これのことじゃないわよね」

扉の隙間から覗くと、腐臭が漂ってきた。この不快な臭いはトロールだろう。

「だとすれば二重の意味で不愉快だ。台本に盛り込まれていたことも、不愉快な事を思い出させたことも。マントを羽織れ。殺す事に何ら手間も躊躇もないが、仮に配役されているならばそれに乗るのは不愉快極まりない」

青い秘薬を飲み干す。味よりも人間の感覚が薄らぐ感覚が不快である。

「マリア、何それ」

「簡単に言えば、気配を隠す狩人の秘薬だ。只人が飲めば昏倒する魔法薬の一種だ。開けるぞ」

目に入ったものは、倒れているトロールとその陰部だった。成人男性の胴ほどもあるそれからは、気絶によるものだろう、小便が垂れ流されていた。息を止め、早足で次の部屋を目指す。これ以上この部屋の空気を肺に入れたくはなかった。排出されたばかりの尿が無菌である事は知識としては知っているが、感情としては受け入れたくはない。

次の部屋の中央には薬棚があった。部屋に入り、漸くまともに呼吸が出来ると振り返ってみれば、黒い炎が立ち上り、退路を断っていた。対角にある進路の扉も炎に包まれている。

「なんだ。ようやく畏らしい畏があるかと思えば、どうやらこの薬のうち、正解を飲めば進めるということらしい。身体も解れて頭も使う、石の護りとは随分健康的だな。賊徒も案外楽しんでるのではな
いか？ ハーマイオニー、問題を解かずとも正解は分かるが、解いてみるか？」

「解かずに分かるって、どういうこと？」

「それを言ってしまうば、つまらないだろう。それにこれは、ハーマイオニー。君の魅せ場だ」

問題文の書かれた羊皮紙をハーマイオニーに渡す。ハーマイオニーは柵と羊皮紙を交互に眺め、柵のいくつかを指差した後、再度羊皮紙をなぞった。

「分かったわ、これね」

「正解だ。ただ、飲むならば1人だけだ。それしか残っていないのだから。」

さて、種明かしだが、賊が此処に居ないということは、先に進んでいるということ。呪いを受けてまで延命をしなければならぬ者が毒を呷ったのならば、その辺りに冷たい死体が転がっているはずだ。あるいは、毒に怯えて薬を飲まず、火に炙られながら先に進めるはずもない。となれば、量が減っている薬瓶こそ、正解の薬というわけだ」

「ずるいじゃない。カンニングをしているみたいだわ……つて、そんな事言つてられないわね」

「私の分は要らないぞ。おそらく火も耐えられる」

黒い炎に近づき、手をかざしてみれば確かに熱を感じる。だが、燃えているにしてはその臭いと音がない。炎は石壁と扉を舐め回しているが、それらに何ら影響は無い様だった。試しに腕を差し入れると、刺す様な痛みが駆け巡ったが、服は燃えていない。つまり、この炎は触れた者の脳に、燃えているという感覚をもたらす魔術らしい。

幻惑による結界は思い当たるものがある。幻視の王冠を戴くと、炎は消え失せた。こればかりは先行者も薬に頼る他なかったのだろう。誰も彼もが手軽に幻影を打ち破る術を持つわけではない。

「面白いな……さて、誰が飲むか決まったか？」

「僕が行く」

ポッターはあらぬ方向を見て言った。青の秘薬の効果は充分に残っている。

「そうか。まあ好きにしろ。助力は期待するな」

脚本家もそれが望みだろう。ポッターは頭痛か負傷か知らないが、額をさすっていた。ハーマイオニーは柵に並ぶ薬瓶の中から、一番右の瓶を選び取った。

「戻る為の薬は一つだけ。ロン。戻ってマクゴナガル先生に伝えて。」

石の護りはもう持たないって」

「なんで僕が！ 戻るならハーマイオニーだ。君はその……女の子だ！」

「戻るのはあなたしかいないの。ここまで来たけど、外に出られる隠し通路や扉は無かったわ。箒に乗って、フラツフィーを躲すなんて事、私は出来ないの。おわかり？」

ウィーズリーはハーマイオニーに渡された丸い薬瓶をしばらく眺めた後、一息に飲み干した。

「うえーっ。身体中を氷が這い回ってるみたいだ」

「効果がどれぐらい持つのか分からない。さつきと行った方がいいぞ」

「お前に言われなくても分かってるさ」

「さつきと行け」

ウィーズリーは駆けて行った。

「マリア、ハリー。気をつけて。私はここで待つてるから」

「読書でもして待つてるといい。もう2年次の予習くらいは始めるつもりなんだろう」

「マリア。本気で心配してるんだから」

「こんなありきたりなハリウッド映画みたいな茶番劇なんだ。呆れる様なハッピーエンドしかあり得ないな。フォースとライトセイバーは無いが、魔法と武器は揃ってる。ブーン、ヴォーン」

敢えて姿を晒し、擬音と共に月光の聖剣を弄んでみれば、ようやくハーマイオニーの表情は柔らかくなった。

「そうね。オビワン・ケノービは魔法省に行ってるし、ハン・ソロも居ないけど」

「じゃあ行ってくるぞ、レイア姫」

ハーマイオニーとポッターには見えているのだろう炎の中を幾らか進むと、最後の部屋にたどり着いた。何がそうなってこの様な造りになっているのかは見当もつかない。そもそも縦坑を自由落下で降りねば入れぬ区画など、気が触れているにも程がある。確かに古い城はこうした作りの下水溝があり、そこから侵入されることもあるが、

内部にこの様な設計をする事の便益は考えられない。石の護りの為に改築したのだろうか。部屋の中央には鏡と思しきものが一つ。その前に立つ者が一人。

「貴方が！」

「いかにも。私だ」

ポッターは馬鹿だ。背後を取っているという優位性を捨てた。もつとも、クイレルの声に驚きはなく、追跡者の存在自体は気付いていたのだろう。それでいて何ら対策をしなかったのであるから、クイレルには絶対の自信があると見て取れる。

「ポッター。君にここで会えるかもしれないと思っていたよ」

「でも、僕は……スネイプだとばかり……」

「セブルスか。セブルスは良い困だったよ。誰も彼もが彼を疑うだろう。彼の側にいれば、誰だって、か、可哀想な、ど、吃りのク、クイレル教授を疑いやしないだろう」

あの晴れた日。クイレルが見せた落ち着きは、それが異常だったのではなく、これこそが真の顔という事だった。

「でも、スネイプは僕を殺そうとした！」

「いいや。いや、いや、いや。君を殺そうとしたのは私だ。セブルスではなくね。君の聡明で愚昧な友人、ミス・グレンジャーが彼のローブに火を着けたとき、私にぶつかってね。それで私は君の箒から視線を外してしまったんだ。それで詠唱が途切れてしまった。全く、セブルスが反対呪文を唱えていなかったら、さっさと君を殺せていたものを」

「スネイプが、僕を救おうとしていた？」

「その通り。彼が何故次の試合で審判に就いたか。それは君を護る為さ。全く無駄な事だよ。一度失敗すれば、その手は二度と使わない。私は君に屈辱的な死を与えたかったんだ。屈辱だけは味わった様だが、同じ手は二度と使わない。ダンブルドアの監視もそうだが、失敗してもなお同じ方法を試みるのは、馬鹿の極みだからね。セブルスは随分と気を揉んでいたが、無駄な事だよ。

君はここで惨たらしく死ぬがいい」

ポッターを殺す事は目的ではない、それは外れていた。だが、1年もの間、この阿呆は暗殺に失敗し続けたということになる。

一方で、ポッターもそれに並ぶ馬鹿で、ポッターが勝利出来るとすれば、相手の慢心につけ込むことだけであったが、その勝ちの目をみすみす潰してしまった。案の定、ポッターはクイレルが現出させた縄によって縛り上げられた。

「ポッター。君は様々な所に首を突っ込み、そして失敗してきた。だが、それらは間違いなく、私の邪魔にはなったのだよ。ハロウインの夜も、君が罰を受けた夜も」

「ハロウイン？ あなたがトロールを校内に？」

「そうだ。私はトロールの扱いに特別な才能がある。だが、トロールは君らが爪弾きにしたグレンジジャーにつられて、広間ではなく人気の無い廊下に向かつてしまった。広間でトロールが暴れていれば、もつとこの部屋を調べる時間は稼げていたのだがね。まさかトロールの方が憐れな肉塊になるとは思ってもみなかったよ」

クイレルの罪がまた一つ増えた。ポッターの罪がそれで雪がれることはないが。

「なんだねその顔は。気付いていないとでも思っていたのかね。私とて教育者の端くれ。そして虐げられていた学生でもある。どういう人間がどういう人間に疎まれ、どういう扱いを受けるかなど、聞くまでもない事だ」

「違う！ 僕は虐めてなんていなかった！ それに、今では友達だ！」

「そうかね？ 君達獅子寮の人間は、彼女の事を都合の良い物知り少女程度にしか思っていないのではないかね。少なくとも私には、敬意を払い、肩を並べる間柄には見えなかった。他人より少しばかり優れているだけで、望まれるのはその力ばかり。憐れな小娘だよ。学業の成績など、その人間の価値を表すものではない。本当の強者とは、ただ優れているだけの者ではない。あらゆる者を屈服させ、崇敬され、そして導く者の事だ。」

……さて、死にゆく小僧への人生訓はここまでだ。私はこの鏡を調

べなければならぬ。私が仕える本当の強者の為に」

クイレルは苛立ちながら、鏡の縁を指で叩いている。横丁の入り口や、校内の隠し通路がそうである様に、特定の順番でなぞれば、隠しているものが現れるというものだろうか。メンシスの悪夢において、ミコラーシユは鏡から鏡へ瞬時に移動してみせた。あれがメンシスの生み出した悪夢に固有の能力ではなく、純粹な魔術によってそんな芸当が可能だったのだとすれば、鏡という呪物にその様な物理的な仕掛けなど施すだろうか。

例えば、この石を封じた鏡も、聖杯の様に夢幻の記憶でありながら実在する世界を生み出すものだとしたらどうか。鏡の世界に石を鎖ぎす。であれば、鏡である必要はない。ヤーナムでは、盃を模した祭具に記憶と悪夢が封じられ、儀式素材を奉じる事で夢幻世界を現出させる。

形は本質ではない。指環や本といった日常的なものに封じれば、携行するとして何ら不思議はない。以前に考えた通り、あたかもこの部屋にある様に見せかけて、実は校長が常に側に置いているという事もあり得るのだ。クイレルはこのこと畏に嵌った馬鹿という事になるが。

一方、校長が真に石をここに封じたとして、では何故校長は鏡による護りを選んだか。単純に守護とするならば、強固な結界を何重にも敷き、寮監の創り出す死ぬ事はなく疲れる事もない自動人形を備えればいいだけの事。それをせずして鏡を用いた理由は、間違いなく鏡の特性を用いた防衛機構があるという事だ。

鏡の特性。それは「映す」事だ。

鏡とは真実と愚かさの象徴。湖面に映る鏡像に恋をしたナルキッソス。確かにそれは彼の美しさを表したが、同時に彼の愚かさを表す。仏教における最後の審判には、鏡が用いられるという。生者としての善悪全てを鏡が映し出し、死後の魂の行き先を決める。しかし、象徴としてはそうであっても、鏡の中にあるものは虚像である。ナルキッソスは虚像に焦がれ、得られず、果てた。即ち、この鏡からは愚かにも鏡の中に石の虚像を求める者には何も得る事が出来ない、そう

いう仕掛けになっているのだろう。求める者に幻影を見せ、それでいて与えぬ最も残酷な罠というわけだ。

どうすれば取り出せるかは分からないが、クイレルには取り出せない。

「みぞの鏡……望み、か？　何故だ……鏡の中の私は我が主人に石を捧げているというのに！」

やはりそういう事なのだろう。心を暴き、望みを知り、そしてそれが叶う幻影だけを与える呪具。人の心を弄ぶ悍ましい罠。それを据えた者の心の悍まじきよ。憐れクイレルはここで悩み、やがてやって来る武装した教員達に捕縛されるだろう。おそらくこれは、そういう筋書きなのだ。友人達と障害を踏破し、そして黒幕に一人で対峙する。詰めは教員が整え、力及ばぬとも、教員達と肩を並べ立つ、英雄ハリー・ポッターの物語。そして、その筋書き通りに進行させる様、ハーマイオニーは強制されているのだ。

「御主人様！　導きを！　私をお導きください！」

悲痛な叫びが部屋にこだまする。

「小僧だ……小僧を使え」

唖れた、それでいて圧のある声でした。クイレルの位置から発せられたものであったが、クイレルのものではない。ポッターは何か秘策でもあるのか、芋虫の様に地べたを這い回り、鏡に近付こうとしていた。

「畏まりました。ポッター、ここへ来い」

クイレルが手を叩くと、ポッターを縛り付けていた縄が消失した。ポッターはのろのろと立ち上がり、クイレルを睨みつけている。

「ここへ来いと言った。ポッター。」

鏡を見て、何が見えるかを言え」

ポッターは言われるがままにクイレルに近づいていく。ポッターの後ろで息を潜めているためにどの様な表情をしているかは分からないが、怯えていることは分かる。自業自得とはいえ、11か12歳の子供にとって、普段接している大人が豹変して犯罪者であったことを告白されれば怯えるのも無理はない。失禁してないだけまとも

だろうか、と思いいその下衣に目をやれば、衣囊には先程には無かったふくらみが在った。

まさか、石がそこに在るのか。

「何が見える」

「僕が……ダンブルドア校長と握手している。僕の活躍で、グリフィンドールが優勝したんだ」

「そこをどけ」

石に関わるものを見たわけではないと判断したのだろう、クイレルはポッターを退かせ、再び鏡の前に立った。ポッターは膨らみのある右脚を擦る様に5歩後退する。やはりそこに石は在るのだろう。

「小僧は嘘を吐いている」

また、嗚れ声が出た。

「ポッター！　ここに戻れ！　真実を話せ！」

「もうよい……余が話す」

「ご主人様！　未だ御身の力はお戻りでは……」

「よい、と言ったのだ。この為には余の力を振るおう」

クイレルは頭に手をかざし、ターバンを解いていった。剃り上げた頭が露わになっていくにつれ、辺りに腐臭が振りまかれる。この男、まさか水浴びもしないのだろうか。垢で皮膚を覆えば感染症対策になるという迷信を未だに信じているのか。

全ての布を剥がすと、クイレルが振り向く。果たして、その後頭部には、もう一つの顔が在った。

「ハリー・ポッター。この様を見よ。余の肉体は滅び、魂の影となった。この忠実な下僕はこの一年、一角獣の血を啜りながら我が復活の為に力を尽くした。体を腐らせ、魂を食む呪いを受けながら、石を求めてここまで来た。

さあ、小僧。その懐に忍ばせた石を献ぜよ」

見抜かれていたらしい。ポッターが後退した。

教職員はどこでこれを見ているのだろうか。そろそろ加勢に入ってもよさそうなものだが。

「命は投げ捨てるものではない……余に仕えよ。さもなくば両親と同

じ最期を辿ることとなる。泣き叫びながら、命を乞い、そして死んでいった」

「嘘だー！」

「ほう……勇氣は讃えよう。其方の父は勇敢に戦い、無様に死んだ。其方の母は其方の助命を乞い、そして死んだ。さあ、両親の死を無駄にしたくなければ、石を渡すのだ」

「渡すかー！」

「捕らえよ」

ポッターが燃え盛る扉に走るが、クィレルの方が早かった。後ろを向いていたはずだったが、身体を呪いに蝕まれていたとしてもやはり大人の体躯。未だ成長期に至らぬ瘦せぎすの子供を捕まえるなど、造作もないらしい。

さて、どこまで仕込みなのだろうか。このまま扼殺されるという事にでもなるとハーマイオニーへの義理が立たない。かといって、ここでポッターを助けるのは筋書きとは異なるはずだ。

言動からしてクィレルが犯罪者なのは間違いない、石を得る為の障害となるのであればポッターを殺せばいい。となると別段クィレルがポッターに手加減をするはずもなく、つまりは捕らえよというもう一つの顔の命令に忠実なのだろう。

では石を手に入れたら次はどうなる。炎の先で待っているのはハーマイオニーだ。つまり、ハーマイオニーに危害が及ぶ。かといって、ここでポッターを救うとなると筋書きが異なる為、結局ハーマイオニーの安全が保障されない。

さつさと監視役には出てきてほしいものだ。流石にこれだけの遊戯施設を設えておいて、本当にポッターが死ぬ様な事態はあり得えない。かといって、今にも殺されそうな人間がいる様子を黙って見ているのも気分が悪い。

「ああああああああっ！」

ポッターは分かるが、何故クィレルも叫ぶのか。そういう加護がそもそもかけてあったのだろうか。あの薬を飲んだからポッターに加護があるのだとするならば、同じく服用者であるクィレルにも同様の

加護があるはずだ。

知らず、首をかしげてよくよく眺めてみれば、クイレルの手は焼け爛れていた。

「私の手が……手があ……」

「ならば殺せー」

泰然としていた嗚れ声は、遂に焦り始めたのか怒りを孕んだ。

捕らえるだけであれば、手を使わず先程の様に縄で縛り上げればいい。それに思い当たらない程に両者は焦っているのだろう。そもそも犬を出し抜くのに数か月もかかる阿呆であるのだから仕方ないことかもしれないが。

「アバ——」

死の呪文か。いよいよ不味い状況だが、教職員は出てこない。何をしている。

「——ダ・ケダ——」

流石にこれ以上は静観出来ない。仕込み杖を変形させ、振るう。

クイレルの肉を引き裂きながら絡めとり、引き倒すはずの一撃は、ポッターのクイレルへの突撃によって空を切る。

ポッターは憎しみの表情でクイレルを掴み、その顔を覆った。

「やめろ馬鹿！ 殺す気か！」

制止の声は虚しく、ポッターは苦悶の絶叫を放ちながら、クイレルの顔を離さない。

クイレルの皮膚は焼け落ち、そして、ポッターが意識を手放した。

「うあああ……あああああッ！ 顔が、顔が灼けるうううッ！ ああ、我が主よ！ 申し訳ございません！ 私は、私はあああ！」

黒い靄がクイレルの身体から放たれ、そしてどこかに消え失せた。

ゴースの遺志、それを思わせるものだったが、今はあれこれと考えている場合ではない。

「くそっ、ポッターの馬鹿め！」

はしたないとは思いつつ、ポッターの衣嚢をまさぐり、賢者の石を取り出す。酒瓶に石を入れると、瓶そのものが黄金に輝いた。これで生命の水が出来ているかは分からない。精製水でなければ、不純物に

よって生命の水が成り立たないとも限らない。しかし、今はこれに賭ける他ない。

唇など最早なく、砂と成りかけているクイレルの顔に瓶の中身を注いだ。

「ああああ……ヒイツ、ヒイツ……」

「どうやら効いている様だな」

焼け落ちた瞼は再生され、記憶している限りでは蒼白だった肌の色は朱をさした。ポッターを抑えた腕は焼け落ちているが、徐々に肉が生えてきている。暴れ始めても面倒なので、ターバンに用いられた布で縛りあげた。

呼吸は荒々しいが、痛みには喘いでいるだけで、死を迎え入れるそれではない。

「ああ、ミス・ボーン。何故貴女が……痛ッ……。貴女はこの様な馬鹿共の友人ではないと思っていましたか」

「友人ではないし友人になる気もない。まあ、ポッターにはひとつ学ばされたな。怒りによつて我を忘れるとは、ここまで愚かで醜いものだとはな」

「それで、どうして私を助けたのです」

「助けたつもりはない。訊きたい事があるだけだ。

何、官憲のつもりはない。お前の罪業などどうでもいい。いや、極々個人的に殺意が沸くほどのものはあるが、それで殺せばポッターと同じ地平に堕ちる。ポッターに感謝するといい。私のお前に対する怒りよりもポッターに対する憎しみの方が強いからな。

さて質問だ。まず一つ、あれはなんだ。お前の主とは何だ」

「我が主とは、闇の帝王ですよ」

「ほう？。そうか。そこに無様に転がるガキに殺されたと聞いていたがな。まあ、よくよく考えてみれば、世界に混沌をもたらした者が赤子に殺されるのもおかしな話か。

さて、お前は以前、旅の果てに強者に巡り合つたと言つたな。それはどこだ」

「何を訊くかと思えば、そんな事ですか。アルバニアですよ」

「何故アルバニアに？」

「貴女はマグル社会に通じているからお分りでしょうが、今のアルバニアには何も無いのですよ。神を廃し、さりとて社会主義も廃れ、アルバニア人の中に残る共同幻想と呼べるものは、民話として語り継がれる魔法の痕跡のみ。ですから、それは浮き彫りにされ、旧き神が新たな神として再誕するかもしれない。その芽生えを見てみたかったのです」

人文学研究者としては正しい好奇心と言えるだろうが、その目にはミコラーシユと同じ狂気が宿っている。ビルゲンワースの墓暴き達もまた、漁村に踏み込んだ時、同じ目をしていた事だろう。クイレルの言葉を思い出す。

「つまり、力の探求か？」

「ええ。私は休暇の度に旅に出て、それを追い求めてきました。そしてついに、私はアルバニアの森で、運命に見えたのです」

その瞬間の歓喜を思い出したのか、眼前の男は震えだす。それは絶頂の様であり、怖気が走る程不快だった。

「なるほど。さて、本題だが、お前の言うヴォルデモート卿……仮称ヴォルデモートとしておこうか、それは森に居たとの事だが、それをお前が見つけたのか？ それとも、あれがお前を呼んだのか？」

「それは私の、唯一の輝かしき功績だ。私は愚昧な者共の話から得た断片を繋ぎ合わせ、ヴォルデモート卿の座す森に参り、拝謁したのだ。そう、そしてヴォルデモート卿は我が肉体に宿り、私を支配した。弱き者である私から、ヴォルデモート卿に仕える私に変わってゆく事を感じた」

陶醉するにつれ、口調が変わっている。それは、過去との訣別を表しているのだろう。もつとも、今となつては両腕を失った芋虫の様を晒しているのだが。

「そうか」

知りたい事は知った。ヴォルデモートは、人を知らぬ上位者の様に、存在するだけで周囲を狂化する者ではない。単に口と頭の回る詐欺師だ。学生の頃から劣等感に苛まれ、自らの弱さを剋する為に、強

い者に縋ろうとしたクイレルの愚かさに付け入り、苗床とした。上位者を求める狂人と、それを弄んだ上位者との馴れ合い。ヤーナムの悪夢、その不完全な焼き直しだ。

「分らないな……生きる意味とは、究極的には食べ、寝て、胤を残すだけ。だというのに、何故人は皆、力だの智慧だのに拘る？ それが無くとも、各々の幸せがあるだろうに」

「やはり若い。考える事が出来るからこそ、人は弱い……人には信ずるものが必要なですよ……それが、神であれ、主義であれ。寄る辺を求めた弱者達が、群れとなつて同じ幻想を見る。寮だの、家だの、瑣末な違いを殊更に掘り出して、集う為の理由を見出す。貴女としてそうでしょうか？ 信ずるものもなく、ただ暗い海の中、一人で泳ぎ続ける事は出来ない。力ある者を除いて」

「そしてその強者とやらも、純血主義という神を奉じる仔羊というわけだ」

伝え聞く、名前を言つてはいけないあの人とやらは、純血主義を掲げ数々の罪を重ねたテロリストでしかない。その手法の悪辣さにこそ知性はあつたが、主張には何ら肯定できるものはなかった。純血主義過激派が訴える様に、魔法族が種として非魔法族を優越しているならば、とうに非魔法族など淘汰されているはずなのだ。ミトコンドリアに寄生された種が、それ以外の種に対してエネルギー生産量を圧倒し、爆発的に増殖した様に。だが、現実には科学の力で地球上のあらゆる場所を闊歩する非魔法族と、小汚く狭い路地に追いやられている魔法族。どちらが繁栄しているかなど、分かりきっているではないか。

「それは違う！ ヴォルデモート卿の理念は、純血主義などという易い言葉で語られてはならない！」

「事実そうだろうが。奴がやった事など、奴が個人的に気に入らない数百人を殺した程度だろう。奴の教義は理解されず、群衆は暴力を恐れただけ。人民寺院の方がまだ求心力がある。力がどうした？ 敵を殺した数と同胞を救った数で語るなら、次からはカラシニコフ氏に祈りを捧げる。お前のくだらん宗教などどうでもいい。」

お前を生かし、訊きたい事は訊いた。後は闇祓いに引き渡すだけ

だ。最早お前に人権はない。魔法社会に人権という概念が無い事は分かつているだろうが、その更に下を考えるんだ。幼少期の朝食の記憶まで漁られ、自分が誰かも分からなくなる程度には、官憲があらゆる手段を用いて根掘り葉掘り探ってくるだろうな。

お前が秘匿しようと、お前はお前の救世主を売り渡す。神を裏切るお前には30シツクルをくれてやろう。それを握りしめて死ね」

「黙れエエエエ！ ヴォルデモート卿は私の如き下賤の生命に、力と意味を与えてくださった！ あのお方こそ人理の光！ 私は神を裏切らない！ 憎い！ 憎い！ 憎い！ 憎い！ 憎い！ 救い主への崇敬を表せぬ我が身の弱さが憎い！」

「はっ。力を求めた末路がこれか。力など、求めるものの為に得なければならぬ素材に過ぎない。筋力であれ、魔力であれ、必要だから鍛錬するのであって、手段が目的化している。何が生きるには力が必要、だ。恋人でも作り、寄り添いあって生きていけばいいだろう。結局、お前は何も与える事のできない、強者とやらに巢食う寄生虫だよ」

強き者に弱き者が縋る。ならば、強き者は誰に縋れば良いのか。

狩人達の長、新しき古都ヤーナムの王。

果てを知らぬ長命が尽きるまで、父はそうあらねばならない。

その責務を、その重圧を、その恐怖を、その愛を知らず、ただその輝きを拝するか。

それは最早、弱者ですら在り得ない。虱の如き虫けらである。

「力を……より強い力を！ うああ……うあああああつ！」

「精々喚いている。強者が強者たる理由を知らず、ただその恩恵を貪る。口を開けば力への憧憬だけ。お前の憧れは、理解から最も遠い感情だ」

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺すウウウ！ 我が忠誠を侮辱するなアアアア！」

「あまり強い言葉を遣うなよ。弱く見えるぞ」

瞬間、クイレルから噴き出る魔力の奔流。

頭蓋の中、鉄扉が軋みながら啓く。

「殉教者の獣クイレル」

人ならぬ声がした。鉄扉から漏れ出る囁きは特別な智慧。

獣への変態。聖杯の記憶で見た、お爺様や教区长エミリアのそれと変わらず、金色の光とともに肉体が隆起し、人の理を失う様。果たして、クイレルは獣となった。

「なん……だと……？」

皮膚を覆い隠す体毛は、蛇の群れの様うねる。下半身に比べ明らかに大きい両の腕からは、爪であるのか骨であるのか分からぬ刃が飛び出している。

足下に転がるポッターを蹴り飛ばし、獣の視界から外す。ポッターが知らぬところでクイレルであろうとヴォルデモートであろうと勝手に殺されていればよいが、獣だけは違う。獣を慈悲によって葬り、人を守るのが狩人の責務。いかにポッターが憎かろうと、それを理由に為すべきを為さざるは、人の理性を持つていたとして獣に墮す事になる。

ポッターを蹴った反動で後ろに飛び退く。豪風に前髪が戦いだ。

「間一髪、か」

ほんの僅かでも遅れていれば、鼻が削がれていただろう。見た目よりも間合いは広い。否、事実として見た目通りではないのだろう。恐ろしい獣の様に、瞬間的に関節を外し、自らの腕を伸ばし、鞭の様にしならせている。

対処法は2つある。

1つはこちらも仕込み杖や獣肉断ちの様な刃鞭を用い、間合いの外から攻撃を加える。

1つは懐に飛び込み、鋸鉋の様な隙の少ない得物での近接攻撃。

だが、前者はポッターが狙われる可能性がある今、長期戦になる戦闘法は避けなければならない。後者は相手の立ち回りを把握していないままに、視野の狭い戦闘法は致命的な一撃を避けられない。この状況で取れる最善の戦闘法は、こちらに注意を向けさせ続けながら、間合いを迅速に回り、近接攻撃に移ることだ。

「ならば、これでどうだ」

獣狩りの銃器、P90。装填の時間は無防備となる。ならば、装弾

数の多い銃を愛するのは当然の事だ。同じく装弾数の多い Speck tree を用いる狩人も多いが、銃把は女の手で扱うには少しばかり大き過ぎる。

制服の狩装束を作る為に訪れれば、工房は当然の様に銃の在庫を持っていた。生産国ですら一部の特殊部隊にしか配備されていないのに、ヤーナムにそれがあろうか。その疑問に対して、「あるよ」と無愛想に返すのが工房の連中だった。狩人はそれらに對し、「あるのか」と返すのが決まり事となっている。

「チツ……痛がりもしいないな」

出血はしているが、それまでのこと。あるいは、恐ろしい獣がそうであった様に、銃に対して異様な耐性を持つとも考えられる。一般的な拳銃弾よりも打撃力に優れるとされる弾丸であるが、獣への効果は内包する狩人の血を混ぜた水銀に依るところが大きい。過去、血に依らぬ銃器としては大砲がそうであったが、対物銃や擲弾銃が存在する今、大砲など製造されておらず、そして学内という狭所での戦闘を考慮していた為にそんなものは持ち込んでいない。カインハーストの血を継ぐアリアンナ女王の系譜でもなく、物理的な戦闘技能だけを磨いてきたこの血では、決定的な攻撃を与える事も出来ない様だった。怯みもしないのであれば、やはり獣には仕掛け武器か。

時折獣肉断ちを振るいつつ、間合いを測りながら小刻みに撃ち込み、得られた感想は諦念だった。牽制にもならない銃撃だったが、無意味ではない。遠間の挙動はある程度把握した。攻撃を受けても、回避し持ち直すことは出来るだろう。

だが、恐怖は残る。恐れを持たぬ狩人など、獣と何が変わろうか。狩人狩りアイリオンはそう言つて、狩人を励ました。しかし、それは死や痛みへの恐れだけではない。護るべき民を失い、帰るべき家を失い、血に酔う事への恐れ。それに比べれば、獣と対峙する恐怖など。ひとまず護るべきものにポッターの生命があるというのは腹立たしいが、失うものはそれだけではない。

「ハーマイオニーが待っている。ダフネを待たせている。それだけで、奮い立つには十分だ」

袖口の隠しポケットから鋸鉈を引き抜き、発火ヤスリで撫で上げる。

揺らめき、燃え盛るは刃の息吹。

右手から繰り出された一撃を潜り抜けながら、一閃。

「軟いー!」

血の遺志を得ていない、生まれたばかりの獣。仮称ヴォルデモートに魔力を吸い上げられていた事も影響しているのだろう。その肉は脆かった。バターの様に、とまではいかないものの、手応えは獣狩りの群衆と同じ程度だった。クイレルが振り向くまでに、更に脚を斬りつける。4本脚ならいざ知らず、二足歩行の生物は片脚でも致命的な損傷となる。回転に合わせて踏み込み、背後に回る。脚の腱を切断し、転倒させてしまえば、胴と頭を切断するのみだ。

「ん? ……ッ!」

その位置から攻撃が来る事はないという慢心があった。

斬り裂いたはずの腕が振るわれ、腹を掠めた。それだけで、肋が折れている。

「痛…!!? どうしてっ!」

跳び退いて追撃を避け、距離を置く。衝撃の度に痛みが走るが、それに怯めば更に攻撃を受けるのみだ。追撃として襲い来る左腕を躲し、さらに続く右腕を転がりながら回避する。確実に回避が間に合う程度まで離れ、ようやく回復の好機が訪れた。輸血液を取り出し、腿に注射する。虫が血を食べ、賦活する。僅かな酪酊の後に痛みは失せた。

違和感があった。

ただの獣化者と変わらぬ防御力で、何故銃が効かないのか。理由は歪に盛り上がったクイレルの傷痕に求められる。大型の獣等がそうであった様に、回復しているのだ。それも、傷を負った直後に。

殉教者の獣クイレルは生命力に優れた獣であるか。

否、人である内から魔力に乏しく、なおも蝕まれた血による獣への変態が、これまで対峙した全ての獣を凌駕する生命力など持ち得るはずがない。ならば、その力はどこから生み出されたものか。

「恨むぞ、ポッター。本当に何においてもお前は邪魔だ」

たった酒瓶一本分の生命の水が、一角獣の血による呪いを塗り潰し、クイレルに力を与えている。

仮称ヴォルデモートは消え、賢者の石を得られなかったクイレルは失意の内に死んだだろう。だが、それは吐くべき情報を吐き出させてからだ。それすらも考えず、ただ己の憎しみの為にクイレルを殺そうとしたポッターの愚かさ。そしてそれは、あのハロウインの自分に似る。

眼球を狙い、弾丸を放つ。兇戯とて当たりどころが悪ければ脳まで穿たれる程、眼窩とは弱い部分である。確かに銃弾は獣の眼球を切り裂き、頭蓋の中を掻き回した。瞬間の硬直の後、獣は表音出来ぬ咆哮を上げ、走り寄ってくる。

「回復するなら、殺し尽くすまで！ 生命尽きるまで死に続けろ！」

鉈の炎上効果を強制的に解除し、袖に仕舞う。

次に取り出すのは、回転ノコギリ。

柄を捻り、発動機を起動する。拍動とともに、鋸歯が残虐な唸り声を上げた。

突き出された拳に真正面からぶつければ、果実の様に獣の腕は裂けた。そのまま鎖骨まで割砕く。斬りつけるそばから回復する肉と骨が刃を押し返すが、腕力で強引に捻り込む。貫通させる事はせず、常に獣の肉に刃を食い込ませ続けた。

「あああああああああああつー！」

駆動音を塗りつぶす絶叫は自分のものか、獣のものか。

返り血が頭から脚先までしとどに濡らす。狩帽子であればいくらかは防げたものを、王冠は血を吸う事なく輝いているのだろう。だが、獣血に塗れた王冠こそ、ヤーナムの長の誉れ。狩人はヤーナムの為に非ず、狩人の為に非ず、獣と墮した人の罪を雪ぐ為に在る。

下着まで血に染まった頃、漸く獣の絶叫は絶え果て、肉はただの屍肉となった。

「……終わった、か」

得物に仕込んだのは濁った濡血晶。

賭けではあった。肉体を苛み続ける毒と出血は、生命の水の回復力を上回った様だ。

死者の蘇生は奇跡と称される魔法。賢者の石は、不老不死の霊薬を生み出せたが、蘇生の業は為し得なかった。回転ノコギリを停止させ、ポーチに仕舞う。大いなる効果の代償に、耐久力を失っているそれは、血と脂に塗れている。駆動部には肉片と獣毛が絡みつき、損耗の度合いは自宅で行う様な修理で済む様なものではなく、工房に持ち込まねば十全には直らないだろう。

「さて、石はポッターに返さなければな。目覚めてから私がくすねたとでも言いかねん」

「わしに返してくれば良からう」

鏡の裏から声がした。

「……クイレルの言葉を借りれば、貴公とはここで遭うと思っていたよ。いつから……いや、最初からか？ 転移術の音もしなかった。大方、魔法省に出向いたというのも偽りなのだろう？ 憐れなポッターが縛り上げられるのを眺めていたというわけだ」

「おお、ミス・ボーン。話をする時は、相手の目を見るものじゃよ」「自分のした事を思い出すがいい。人の心を窺視するのが趣味とは、とんだ教職者も居たものだ。確かにあの時、貴公の言葉は一部の真理を有していた。憎しみに駆られた行動を、救う為だったと誤魔化しているクソガキを諫めるのは間違っではないない。

だが、そう言えば良かっただけだ。

私の心を暴こうとした時に、些かの好奇心も無かったと言えるか。それこそ、純粹な意思とやらの偽りの無いものだったと誓えるのか」

開心術は眼を通して脳を暴く魔術。狂人どもが瞳を媒介に上位者の智慧を得ようとした事は、おそろくここに起源がある。即ち、開心術を用いる者は皆、その狂気に至る可能性を持つ。

「目上の者に払うべき敬意も覚えるべきじゃの」

「敬意を払うべき相手を目上と言う。私より高々百年以上先に生まれただけで権威付けとは片腹痛い。年嵩を誇りとするなら、原初の罪人

に絶対の恭順を誓え。さすれば考えてやらんでもないが」

「ふむ。それは確かじやのう。さて、石は返してくれるのかね」

言っても分からぬか、とでも言いたげな声色であったが、それはこちらとて同じことだ。その動機がどうあれ、心を暴くということに、些かの罪悪感をも抱かぬとは。

「ポッターにだ。ホグワーツが施した護りは、結果的にはポッターに破られた。ポッターが居なければ石が鏡から取り出される事も無かつただろうが、いずれにせよ、渡るべきでない相手に渡りかけたのは事実だ。そして、ポッターがクイレルを殺し、石を護った。ならば、ポッターから貴公に返すのが筋だろう。そういう筋書きなのだろうか？」

「ハリーは殺してはおらんよ。それにしても、筋書きとは？」

「獣としてのクイレルを殺したのは私だが、奴ほどの道死んでいた。ポッターの手が何なのかは知らんが、触れただけで相手を灼き殺すとは、大した呪いだ」

ダンブルドアが床に寝転ぶポッターに向ける視線には、家族愛に似たものがある。それが別の感情であれば、ではその眼差しはなんだという事になるが。何にせよ、かける言葉があるのだろう。いつ意識が戻るかは知らないが。

「鏡の仕掛けに興味は無いのかね」

「ない。細部は違うだろうが、望めども得られぬ幻想を見せる呪いだろう。求め、焦がれ、飢え、渇き、死ぬ。そんな悍ましいものと知り、誰がそれを暴くか」

ポッターが英雄になる為の台本。それを書いたのはダンブルドアだ。そうでなければ、ポッターが鏡から石を取り出せたはずがない。鏡の仕掛けが正しく作用しているから、クイレルには石を取り出せない。それを見抜いた仮称ヴォルデモートは、ポッターを使った。何故ポッターであれば取り出せると考えたのかはわからない。

だが、その試みは果たされた。即ち、ポッターには作用しない呪いであったか、ポッターには取り出す事が出来る様に調整されているのだ。あの状況でポッターが鏡の中に何を見たのかは分からない。だ

が、ポッターの吐いた嘘の様な、グリフィンドールが寮杯を得る姿だったとは思えない。あのガキは、殺されそうになっていた時に、自らの失態が同輩の枷となった事などを悔やむだろうか。

あり得ない。ポッターが望んだものは、石であるはずだ。いつの日か、マルフォイが放った水晶玉を追った時の様に、ポッターは何の根拠もなく、何の道理もなく、自らの勝利を求める性向がある。それは、幼稚さから来る対抗心がひたすらに肥大化したものであるのかもしれないが、その形成要因などはどうでもいい。

重要なのは、ポッターが石を望んだとすれば、鏡の呪いはポッターに石を手に入れた幻想を見せるはずだ。だが、そうはならなかった。同じく石を求めるクィレルとポッター。何故ポッターだけが石を取り出せたのか。

答えは単純だ。それが、ポッターだから。

肉の記憶という魔術がある。触れた者を識別する生体認証技術。非魔法族が指紋や虹彩により個人を同定する様に、魔術によつてそれを為す。同様の魔術で、鏡に石を封じたダンブルドアは無論の事、ポッターも鏡から取り出せる様に登録しておけばよい。

かのアーサー王伝説に在る選定の剣も同じ事。英雄に選ばれる条件を流布し、特定の間人が選定された様に見せるだけで、後は周囲が英雄視する。

「呪い。君は望みを呪いと呼ぶか。ふむ。面白い見方じゃの。身に刺さる言葉じゃ。強すぎる望みは人を盲にし、虜にする。その鏡に映るものは、見た者の心の底から湧き上がる祈りを模つたものじゃよ。栄光を掴む我が身を見る者もおる。懸想する相手を見る者もおる。失った家族を見る者もおる。自分の未来を見る者は幸せじゃろう。その幻が現実になる様に進む事が出来る。その鏡は、本来その様に使うべきものじゃ。

自分の欲するものは何であるか、自分とは何かを思い出させる為の道具じゃよ。人は継る者が無ければ生きてゆけない。クィレル先生の言葉は、間違つてはおらん。人は皆、求めるものに向かって進みゆく。それを求める相手が、他者であるのか、未だ見ぬ理想の自分であ

るのかの違いじゃ。

じゃが、取り返しのかぬものを見る者には、余りに残酷じゃの。誰も、時を繰り返す事は出来ぬ。失敗は反省という呼び名で癒す事が出来る。されど、ただ失われたものをまざまざと見せつけられれば、心を擦り減らすじやろうて。

確かに、呪いとは言い得て妙じゃ」

「そしてポッターは鏡を見た。映し出された、石を得る自分の幻影から石を受け取ったと言うわけだ。求める幻影を見せるのであれば、ポッターが石を取り出せるはずもない」

「それはわしのちよつとした細工があつての。賢者の石を求める者には石を与え、賢者の石の力を求める者には与えられぬ様にしたのじゃ。強すぎる力はそれを持つ者を惑わせる。故に、その力のみを求める者の瞳には、何も写ることはない。

力を持つが、振りかざさぬ事。それが、賢く、強き者の意志じゃと思う。ハリーは、窮地にあつて本質を見失わぬ賢さを持つ子じゃつた」

「くっ……くはははははっ！　つまり、賢者の意志だと？　ああ、入学して以来、最も笑える冗談だ」

作られた英雄に何の意志がある。ポッター自体に意志などない。ウィーズリーがそうした様に、ポッターもまたダンブルドアの敷いた盤上の駒でしかない。ハーマイオニーを用い、そうなる様に仕向け、そう考える様に動かしたまでのこと。糸繰り人形を弄び、これを人形の意志とほごくか。ダンブルドアはポッターの中に賢者の意志など見出していない。植え付けようとしているだけだ。

意志ある木から彫り出された人形はやがて人となった。愛を注がれた彫像は人となった。愛を識らぬ人形とて涙を流し、愛を識つたのだ。

ならば、人の形をした肉はどうなるのか。

「全く、学校教育とは面白い。賢さを確かめる為に、反社会的勢力の教祖とその教徒に引き合わせるとはな。

さて、冷えてきた。私は帰る。ハーマイオニーは演じ切った。手を

出すなよ」

「温かくして寝ると良い。監督生用のバスルームを使うのも良いじやろう」

「気遣い無用」

寒気を覚えたのは、血塗れの服のせいではない。ダンブルドアのポッターに向ける表情、それに含まれる慈愛による。

ポッターに対し管理された障害を設え、管理された死の危険を与え、管理された勝利を与え、そして心の底からポッターを賞賛している。それは、畜産家が家畜を褒めるのと何が異なるのか。人の意思を思うままに統御し、そしてそれに些かの疑問も抱いていない様は、狂気だ。

人の原罪を贖う為に遣わされたと自認する男ですら、その使命と苦痛を与えた神を疑った。人であるが故に信じ、人であるが故に迷い、人であるが故に疑い、人として死んだ。故に、そこに人の贖罪は為された。ならば、人の身にして困難を与え、その計画の成就を心から喜ぶ眼前の老人は何者か。

神を気取る狂人ではないか。

金のアルデオ

「ハーマイオニー」

「マリア！」

血塗れである事を気にも留めず、ハーマイオニーは飛びついてきた。腕を差し出して制止する。

「汚れるだろう」

「そんな事……それと。本当にごめんなさい」

「何も貴公が謝る事はない。ダフネに心配をかけた事は償うべきだが。ああ、安心するんだ。ポッターは無事かどうかは知らんが生きている。校長が診ている」

「ずっと私、酷い事をしてきたわ。マリアにも、ダフネにも」

「後で聞かせてもらうさ。それより今は、熱いシャワーを浴びたい。後は洗濯だな。ここまで酷く血に汚れたのは久しぶりだ」

「今度、洗濯に使える魔法を調べておくわ」

「そんな危険な場所に連れて行くつもりはないぞ……いや、すまない。前言撤回だ。少しそこで待っていてくれ」

どの様な仕組みになっているのか分からないが、炎は消えていた。だが、気絶していただだけのトロールは目覚めていた。扉の隙間から様子を窺うと、クイレルが担っていたのであろう制御は失われ、痛みに因って狂乱していた。頭蓋は割られ、目はその外傷によるものか、像を結んではいない様だ。舌は犬の様に垂れ下がり、膠で固めたかの様に唾液が粘ついていた。

人であれば死しているだろう有り様だったが、生命力故に生き長らえてしまっている。

袖に手を差し入れ、聖剣の柄を握る。月光の聖剣を模した聖剣。模倣とは、贋作である事を意味しない。神秘の力を持たぬ者は、美しい月光剣よりも、武器としての基本性能を高めた聖剣を恃む。

トロールは棍棒を振りかざし、床に叩きつけた。それはあのハロウインの時よりも遥かに大きな衝撃だったが、遥かに単調な軌道だった。見えぬまま、痛みそのままに振り回す攻撃に当たる道理がどこにあ

ろうか。

背後に回り、腰を落とし、身体を捻る。

魔力を武器に流し込む。剣先が発光した瞬間、全体重を乗せて剣を振るう。

放たれた剣は皮を貫き、肉を裂き、脊骨を割る。

引き抜くと共に現れた大穴に手を差し入れ、心臓を掴み、潰す。

幾度となく繰り返した動作に意思は無く、そこに在るのはただ相手を殺すという意志の帰結。

これこそが、ヘルマンの言う意志に違わぬ手段であり、フリント先輩の言う集中。

「眠れ、安らかに」

呻き声をあげることすらなく、トロールは地に伏した。

「もういいぞ、ハーマイオニー」

「見てたわ……一撃。たった一撃で？」

トロールから発せられる悪臭に血の臭いも混じっているが、ハーマイオニーは鼻を抑える事もなく、ただ茫然とトロールの骸を眺めていた。

「恐ろしいか。悍ましいか。これが我等、狩人という生き物だ」

「いいえ。けれど、寂しさは感じるわ。こんなにも遠いんだって」

遠い。それは獣となったあの弱者も零した言葉。

「……そう言ってくれるな。私はただの変身術の劣等生だよ」

「まだそれ根に持つてるの？」

「向上心を無くした者は馬鹿だからな。飽くなき向上、それこそが人たる証左だよ。行こう。食欲が失せる」

遊技場に戻ると、粉碎された駒達は既に元通りになっており、跪いて道を開けていた。

「出迎え」苦勞。貴公等の護り、我等が果たした。故に、貴公等の勝利である。勝鬨を上げよ！」

兵達が各々の武器を打ち、その音を背後に聞きながら、鍵の部屋に進んだ。

何のことはなく、鍵は悠然と飛び回り続けていた。羽を挽がれた正

しい鍵は力尽きたのか、鍵穴に挿さったまま動いていなかった。

その次の蔦の部屋は来た時と同じ様に松明を掲げれば問題はないが、その後が問題となる。

「さて、箒の二人乗りに問題はない。が、犬をどうするか……」

ウィーズリーがここに居ないという事は無事に抜け出したのだろう。血の酒を投げつけていたのが効いたのか。

だが、この服に染みついた血は酒よりも更に濃厚な臭いを放つらしい。見上げれば、三頭が我先にと狭い穴に首を突っ込み、吠え立っている。

「眠らせたところで首は動かず、となれば、銃殺してから刻んでいくか？」

「絶対に嫌」

「だろうな。犬を見たら吐く程度の精神外傷を負わせるのは本意ではない。しかし、現実としてどうする。聖歌でも演りながら救い主を待つか？ ウィーズリーが上手くやっていたら副校長がその内来るだろう。来なければ犬の餌になったということだな。糞になる前から切り出してやらねばな」

「その必要はありません」

声の方向を見やれば、光り輝く猫が宙を舞っていた。

「おお、我等が救い主。演目はH a i l h o l y Q u e e nに致しましょうか」

「マリア、何それ」

「米国で公開中の映画の劇中歌です」

「修道院長は副校長と瓜二つでした」

「よく似た他人です。学期中になぜ内容を知っているのです。そんな事より、二人とも、怪我は有りませんか？ ミスター・ポッターはどうしたのです？」

「はい先生。ハリーは校長先生がついてくださっています」

肋骨の数本が折れたが、既に治っている上、それを敢えて伝え、ハーマイオニーに心配をかけるつもりはない。

「どうなのです。ミス・ボーン」

「ええ。どうということはありませんでした。そう、驚く程に。一体なんだと仰るのです。破られる事が前提の護りに、なんの怪我を想定していたと」

まるで心配していたかの様に声をかける副校長には、爆発する様な怒りを覚える。

「副校長。私は貴公に怒っている。あのハロウインの夜、貴公が見せた心配は真なるものだと思っている。故に、故にこそ、校内に賢者の石を備えるという校長の狂気を野放図にした貴公には、激烈な怒りを感じている。狂人は自らの善性を疑わない。だが、正気の者であれば、自らの行いを善と悪との天秤にかけ、選ぶはずだ。何故貴公はポッターという一人の為に、数多の者を犠牲にしたのです。社会に仇なす存在が付け狙うものを学び舎に持ち込み、学徒にそれを喧伝する？ 正気ではない。まこと、正気とは思えない」

「ボーン、それは——」

「何故、と訊くならば、より残酷な疑問がある。何故貴公は、ハーマイオニーを見捨てたのですか。」

分かつていたはずだ。ポッターらが幼稚な自尊心の為に、ハーマイオニーを貶していたことを。

分かつていたはずだ。そのポッターらに連れ添い、賢者の石を探っていたことを。

分かつていたはずだ。規則を重んじ、聡明な彼女であれば、すぐに寮監に伝えていたはずであることを。

分かつていたはずだ。ハーマイオニーは利用され、ポッターを助ける為に動かされた駒だということ。

これだけの事を無視し続け、ポッターに破られる為に作られた石の護りに、教え子が向かってから心配するとは、どういうことですか。石を護る気など、無かつたのでしょうか？ チェスに勝てば道を開くかどうか？ ならば何故、あの者達に心を与えた！ 彼奴等は生み出された理由と反し、賊徒の傀儡とならねばならなかった事に惑い、恥じた。心とは、傷付くものだとは知っていて、何故ハーマイオニーを見捨てた。何故駒に心を与えた。

……校長は狂っている。故に悪意なき邪悪に墮している。だが、貴公は違う。その理性に、何ら悖る事は無かったと仰るのですか」

「……理由は言えません。ですが、必要な事であると」

「成程。つまり、罪は無いと。自らの選択ではなく、穢された意思であつたと。その言葉、努々お忘れなき様。

さて、どうやって帰ったものやら」

「そこで待っていないさい。管理人に縄を持って来させています」
「拾い上げるではなく縛り上げられそうですが」

副校長は医務室にも連絡を入れてくると言い、飛び去った。

暫くして、管理人は扉の前には来たものの、犬が暴れていて入れないと怒鳴り出した。呆れ果てて歌う気力も無かったため、蛇寮に声をかける様に怒鳴り返した。

それから少しして、再び副校長の守護霊がやってきた。

「まだ居たのですか。校長はもう執務室に戻られていますよ」

「は？ ここを通らずに？」

「教職員がわざわざここを通るはずもないでしょう。ミスター・ウィーズリーの様に曲芸飛行が出来るというならともかく」

「管理人は犬が怖いと仰せなので先輩を呼ぶ様伝えました。管理人がそれを了承したのですから、夜間外出には当たりませんか？」

「そうですね。先程見かけたあなたの先輩も同じ事を確認していましたよ」

「ああ、ではそろそろですか」

遠くで大きな音がした。おそらく扉が開かれた音だろう。その直後、トランペットが高らかに響く。続き、ヴァイオリンが乗り、イングリットお姉様とジェラルドのコーラスが重ねられる。

「あ……これ」

「聖歌168。冥府からの生還を讃えるといったところか。さて、縄梯子も下りて来たところだ。上がろう。箒でもいいが、せっかく管理人が持ってきたんだ」

登りきって部屋を出ると、ドロテアが大爆笑した。

「生還おめでとう。それにしても汚いし臭い」

「なあドロテア、前に僕がそれを婉曲的に言ったときに君は僕の前歯を折ったぞ」

「女が女にそれを言っても傷にはならないけど、あなたは男でしょ」「度し難い」

ドロテアの親愛なる罵倒に顔をしかめていると、管理人がより酷い顔でこちらを睨んでいた。

「ああ、血の汚れなら私が掃除しておきますので、お帰りになって結構です。妹達の為にありがとうございます」

イングリットお姉様が杖を一振り、こそばゆい泡が全身を包んだ。床に垂れた雫はヘルマンが杖先から温風を出して消し飛ばしている。「あら、グレンジャーさんも汚れているじゃない。こっちにいらっしやい」

「……よろしければ、今度教えてください」

「そうね。まずはお菓子でも。副校長、グレンジャーさんを連れていきますが、よろしいですね？　もう夜間外出はしてしまっているのですから、今更早いも遅いもないでしょう」

「構いませんが、ミス・グレンジャーは明日私の部屋に来る様に。ミス・ボーンはスネイプ先生に報告をしなさい」

「どちらのボーンですか？」

「一年生のボーンです。全く、何度同じやり取りをさせるのです」

副校長の猫は淡い光の粒となって消えた。

「さて、じゃあ地下牢……には入らない方がいいと思います、寮監から教室を借りた」

「ウチの談話室に獅子寮生ってあり得ないもんね」

「大鍋いっぱいにミルクココアを作ってあるわ。ダフネがかき混ぜてくれたけどちよつとしょっぱくなってるかも」

「言っておくが、グリーングラスはブチギレという言葉じゃ形容出来ない程ブチギレてるからな」

「捨てられた女」

「手負いの獣」

「厄介だ」

道すがら、デイルクお兄様とヘルマンは抜群の連携で煽ってきた。普段殴り合いの喧嘩をしている様で、年相応に騒ぐときはいつも連れ立っている。それを後方から見守るのがジェラルドだったが、来年は居ないのかと思うと寂しく思う。

「捨てるも何も、待つと言ったのはダフネです。それを信じ、こうして帰って来た。ダフネは私を笑顔で迎えてくれるでしょう」

「これはひどい」

「こう、淑やかさというか……」

「アンナリーゼ女王の慈愛を見習え」

救いを求めてお姉様に目を向けると、目を逸らされた。

「……そうだ、獣と言えば、クイレルがヴォルデモートを名乗る輩に憑依されていて、獣に変態しました」

「はっ」

複数の声が重なった。

思い返してみれば、何があつたかなど話していなかった。道理で先輩たちの出迎えが出来な妹を揶揄う様なものだったわけだ。

教授陣の用意した遊技場で少し転んだ程度の感覚だったのだろう。この魔境での遊戯場という時点で何も思わない辺りが毒されているとも思うが。

「クイレルの頭のおかしいターバンは頭部に憑依していた頭のおかしい輩を隠すためのものであり、やはりあの部屋の最奥に在る賢者の石を狙っていた様です。結果、ポッターに傷付けられたクイレルではそれを達成できないと判断した仮称ヴォルデモートは逃亡、クイレルは獣に変態し、それを狩ってきたというわけです」

死の恐怖を感じたものの、終わってみれば所詮雑魚。ポッターを護りながらという条件さえなければ見極め、完封出来る相手だった。別段恐れるべき相手でもなかったが、説明すればするほど狩人達の目は鋭くなっている。

「イングリット。お父様に連絡を。手すきの工房にも声をかけろ。魔法省に先を越される。死体を直ぐに回収させろ」

「はっ」

「ヘルマンは俺と来い。ジエラルドは二人を警護して教室へ。ドロテアは先行、ダフネ嬢及び室内の消毒後、ジエラルド組を待て。ジエラルド組が入室したら、俺か寮監が来るまで死守しろ」

「はいっ」

「はっ。グレンジャー様、失礼します。マリア様は自力でお願いします」

「えっ……きゃああああああっ！」

ジエラルドはハーマイオニーを横抱きにすると猛然と走り出し、階段の吹き抜けを飛び降りた。普段紳士然としている彼がそこまで焦るのだから余程の事なのだろう。同じく続いて、飛び降りる。

着地の衝撃を回転して殺すが、ジエラルドはハーマイオニーを抱えているためそうもいかない。聖歌の鐘を鳴らして回復させてやれば、直ぐに体勢を整え走り出した。

「マリア様ー！ 早く早く！ ダフネちゃんも部屋も問題無し！」

教室に入ると、狩人の遺骨を使って先行していたドロテアはガスマスクを着け、銃架にM2重機関銃を備え付けていた。ジエラルドの様に敬称が付いている辺り、ドロテアの緊張が感じられる。

「ドロテア……一体これは」

「あーごめんね、学内で獣化なんて考えなかったから、誰も説明してなかったもんね」

「いや、だから何を」

「学内で獣化する様な儀式があつて、それを行える様な危険人物が居て、それに何ら対処されないって確信する程度には、校長を信用してるからね。それにヴォルデモート卿自身でなくても、その信奉者が未だ潜伏してる可能性があるよね。それが逃亡ついでの報復にマリア様の周囲の人間を殺害か拉致することは十分にあり得るでしょ」

「成程、そういう事か。すまない、すっかり浮かれていた」

「分かった？ 反省は後で。じゃあダフネちゃんとグレンジャーちゃんを奥に。机倒して障壁作つて。魔術障壁もとりあえず15層まで貼つといて。マリア様だとそれ以上は戦闘継続に支障出るでしょ。あ、当然弾丸は水銀弾じゃなくて通常弾に切り替えといてね。ジェラ

ルド先輩はマスク作成して」

目を回している一般生徒2人の前に、大理石でできた机を突き立てる。大理石は軟らかく加工しやすい故に耐久性には難があるが、他に使い物になりそうなものはこれしかない。

「マリア、いったいどういう事？ 名前を言っってはならぬかの帝王？」
「クイレルがその信奉者で、それにヴォルデモート卿とされる人物の思念体が憑依していた様だ。危険性評価があまりにも甘かった。すまないダフネ。独りにしてしまった。本当にすまない。今更だが、命を賭して護ろう」

「マリア様、命の優先順位は間違えちゃダメだよー。そんな状況になつたら先輩に先に死んでもらうからね」

「マリア様のご友人とも身命を賭してお守りいたします。とにかくこれを」

「……ガスマスク？」

「ガス攻撃は密閉空間で有効性が高い。爆弾なら投げ込まれる前に撃ち落とすし、爆発術も魔術障壁で防ぐが、ガス自体は魔術でも防げない。泡頭なんて2人とも未だ使えないだろう。何事も起こらなかつた、ならいい。起きてしまったでは出来る後悔もない。早く。それから耳を塞いで口を開けているんだ。爆轟で鼓膜が破れる」

ダフネの顔は蒼白となっている。貴族故にこういった恐怖は現実感があるのだろう。あるいは、既に体験済みであるのか。

そうして30分が経ち、扉が叩かれた。

「言えー！」

ドロテアが声を張り上げた。

「夜分に君たちは何をしているのかね。出てきたまえ」

ねっとりとした声が呆れた様に返ってくるが、ドロテアは引き金から指を離さない。

当然の事だ。声と口調こそ寮監のものだが、薬を用いて寮監に変身しているか、魔術で変声している可能性もある。

「名乗れ！」

「……セブルス・スネイプだ。ドロテア・グリム、その不遜な態度でま

た減点されたいのかね」

「では今日私が減点された得点を答えよ！」

「……0点だ。減点などしていない」

「いいでしょう。」

「……先輩、配置に。場合によってはあたしごと」

「カウントを」

ドロテアは扉に近づき、ハンドサインでカウントする。

1, 2, 3.

ドロテアが扉を開け放つと、そこにうづくまる寮監が居た。扉で鼻を打つたらしい。

「……私の知ってるスネイプ先生はこんな感じじゃないんだけどなあ」

「ならば撃つか」

「何をしているのかねと訊いている」

顔を上げる前に治療を施したらしく、鼻が潰れているという事は無かった。迫る扉に驚きながらも、とつさに退いたのだろう。ドロテアもまた力に優れた狩人であり、その力が頭部に直撃していたら鼻血程度では済まないだろう。

「クイリナス・クイレルは死喰い人、あるいはそれと同思想を持つ犯罪者でした」

ジェラルドが説明を始める。

「これにマリア様が対応。無力化はしましたが、学内に他のスタッフが存在する可能性を考慮しました」

ドロテアがそれを引き継いだ。扉をぶつけてしまったことに対し、さして気後れする様子もなく、袖口からは短剣の柄が見える。未だ警戒を解いていない。

「なお、当時我々はごく個人的な事情により、蛇寮区画でのパーティーを開いておりました」

「この許可者について寮監はご存知でしょうか」

「……吾輩だ」

「その申請者は」

「ヘルマン・ツァイス。その時の言葉は『寮監に責任を押し付けられるつもりはありませんが教職員の怠慢と傲慢による非常に不合理な経緯によって我が後輩の友人が悲しんでいますのでその慰撫及び期末試験終了記念パーティーを行いますのでその許可を頂きたく。それと先程の試験は自己採点の結果94点でした。上位成績である事は間違いないでしょうから来年もよろしくお願いいたします。あとドロテア・グリムの評定は厳しくしてください。つけあがるので』」

「ありがとうございます。あたしの前に居る人物が間違はなくセブルス・スネイプ教授であることを確認しました。扉をぶつけたことは非常に不運な出来事ですが、お気持ち晴れなければツァイス先輩の試験成績から引いてください」

「その誠意の見られない態度につき減点したいところであるが今は捨て置こう。いい加減にその滑稽な面を取り、野蛮な武器から手を離したまえシュミット」

「後輩の微笑ましい嫌がらせの応酬はそこまでとして、状況説明の続きを。」

同胞を除けばマリア様にとって最も有効な人質となるのは、御学友のダフネ・グリーングラス様とハーマイオニー・グレンジャー様です」
「潜入作業員の危険性について把握した後、マリア様と同行していたグレンジャーを回収し、パーティー会場たるこの空き教室でグリーングラスを保護。安全確認が出来るまで同教室にて待機していた、という状況です」

「グリーングラスの状態について報告を」

「身体的外傷はなく、記憶の連続性も確認済み。本人確認もしています。服従の可能性については入室時の状態から考慮外です」

「入室時の状態とは？」

「それは申し上げられません」

「ところで、仮に闇の帝王が全力を尽くしているとして、グリムが成り代わられている可能性を考慮しないのかね。普段はボーンに敬称を用いないだろう」

「……やっべ。バレては仕方ないですね。死んでもらいますよ」

ヘルマンのくだりで緊張がゆるみ、敵対者を演じる余裕まで出て来たのだろう。どこから取り出したのか、寮監は教鞭でドロテアの頭を叩いた。

「有事の備えが無い学生にしてはよくやったものだ」

「それを言うなら先生、駄目ですよちゃんと開心術かけないと」

「それはボーンとグリーングラスが嫌がるだろう。吾輩とて、優秀な生徒には目をかけているつもりだが」

「それを仰るならなぜあの時何もしてくれなかったのです」

「……校長の開心術を見破る学生がいる等、考えられずに放心していた」

「嘘くさ」

「グリム、本当に減点されたいのかね」

「今更減点されたところでウチが独走ですよ。ジェラルド先輩は栄光の7冠です。ほら誇って誇って。先生は祝って祝って」

「おめでとう」

「嘘くさ」

「……5点減点。それで、このバカ騒ぎはいつまで続くのかね。ここまで酷い教室の修繕はフィルチ管理人には出来ないと思うのだが」

床に聳え立つ大理石の机を見たら発狂するだろう。部屋の中央に在る食品を載せた机は無事だが、障壁となった机は見るも無残だ。

「そりゃああたしたちが直しますよ。ダーティボムが使われたわけでもありませんし」

建物が倒壊しているならばともかく、内装が傷ついている程度であれば工房の職人に依頼するまでもない。複雑な魔術機構の搭載された呪具でもなく、ただの机と椅子である。物理的損傷であれば杖の一振りで直すことは造作もない。

「ならばよろしい。教室の鍵は明朝に返したまえ。では諸君」

「先生も食べていきますか？」

寮監が無視して部屋を出ていった後、同胞たちが帰ってきた。

「間違いなく獣だったし、死亡も確認した。本当の意味での初の獣狩りだな」

「お父様は口には出していなかったけれど大層ご立腹よ。フローラ女王が悲しまれたから」

「うわあ……ヤーナムに帰りたくないなあ」

「こんなテロリストが一年間も居た場所に安穏と居られるのか？ 僕は嫌だ」

「だって赤ちゃんに殺されて、マリアにまた殺されてる人のシンパより王様の方が怖いでしょ。別にあたしたちが悪いことしたわけじゃないから王様もただ不機嫌なだけ。だからそれをあたしたちはどうにもできないしー」

「獣の死体はどうになりました」

「工房が回収したぞ。そうそう、犬は『お座り』と言ったら普通に部屋の隅でうずくまった。番犬どころか本当はただの畜生ではないか」

「アレはデイルク先輩の圧でしょう。尾が垂れ下がっていましたし。……さて、茶番はここまでだグレンジャー。明かしてもらおうか」

狩人達の雰囲気はジェットコースターのように乱高下している。ダフネを見やると、もう諦めたとばかりに無表情で大鍋からココアを掬っていた。

「ヘルマン、年下の女の子に大人気ないわよ」

ドロテアが牽制するが、ヘルマンの双眸は鋭く光るままだった。

「つまり、年上の男には何をしても良いと。君が事あるごとに僕にあれこれと言ってくるのはそういう事か。甘えるのもいいが、甘えさせても良いと思うくらいには年下の女性らしくしてくれ。」

ハーマイオニー・ジーン・グレンジャー。僕は未だ君をあれこれと批評するつもりはない。音に聞く獅子寮の才媛、あのスネイプ教授でさえ認める知性。それが何故、ここまで愚かしい騒動の中に居たのか。それが明かされない限り、君の夜は明けない。元を絶たなければ、悪夢は何度も巡り続けるぞ」

ダフネと共に、気になってはいたが踏み込めなかった友人の心。何故あのハロウインの夜から、馬鹿2人と連れ立って過ごす様になったのか。幾度も危険から離れる様に忠告したにも関わらず、何故依然として関わり続けたのか。

ハーマイオニーはしばらく目を瞑った後、口を開いた。

「私は、元の世界でも成績優秀な生徒でした。歯科医……歯を専門とする癒者の様なものですが、その下に生まれ、規律正しい優等生でした。ただ一つ、友人が居ないという点を除けば。私は優秀でしたが、これと言つて特別な才能もなく、ただ知識を学ぶ、それについて特別に興味のある人間です。ですから、私と同じ授業を受けていて私よりも成績の劣る生徒は、ただ単純に知らないか知る努力をしていないだけの事、そう思っていました。」

ある日、ホグワーツから手紙が届きました。私はそこに記された、魔術という常識では学べない知識に強く惹かれ、入学を決めました。両親の反対もありましたが、科学世界の勉強も続け、魔法界の勉強もするという約束で、入学が許可されました。それが出来るという自信はありましたし、実績もありました。不安だったのは、私が未だ何一つ、魔法界について知らなかったこと。それはつまり、私が劣るという事です。教科書を揃えて予習をし、参考図書で魔法界の常識を学ぼうとしました。それらの準備は十分だと思いました。明らかに情報不足のキングス・クロス駅のプラットフォームへの入り方も推理して列車に乗る事が出来ましたし、車内で会う魔法族の新生たちよりも私の方が優秀に思えました。

ところが、マリアさんは違いました。今まで読んだどの書籍にも、狩人という人達の情報はありませんでした。学業には興味が無いという言葉も、今まで聞いてきた様な愚者の言い訳ではなく、将来狩人になるにあたっては必要ない知識だと、明確な目標があつて切り捨てる、この価値観には触れたことがありませんでした。

私には智慧だけではなく無知を恐れる勇気があると言い、組分け帽子は私を獅子寮に選びました。獅子寮の雰囲気はご存じかと思いますが、やはり私には友人が出来ませんでした。口を開けばクイディッチばかり、授業の予習復習には何の興味もない。そんな子供達に私が抱く感情は軽蔑しかありません。

私の価値は成績優秀である事。ですから、学業に興味が無いと言つていながら、私よりも優秀だったマリアさんには苛立ちを覚えました

し、ですが聞けば教えてくれる、その関係に高揚を感じていました。いがみ合っている獅子寮と蛇寮ですが、それでも対等に接してくれるダフネさんと友人となりました。こんなことになっても未だ、友人と言って良いのか分かりませんが。ダフネさんもまた、純血の子女として日々努力を重ねる人でした。マリアさんとは未だ壁がある様に感じていましたから、二人でこっそりとマリアさんの子供っぽいところや、マリアさんの変身術を揶揄ったりしていました。

そうして、ハロウインの日になりました。ウィーズリー君の態度や陰口には苛立ちを感じる事さえ面倒になつていましたのでどうでも良かったのですが、副校長から贈り物があるとされたとき、私は私の全てを否定される様な衝撃を受けました。私は褒めてもらう為でも、鼻負してもらう為でもなく、ただ私がそう在るべきだから努力をしています。その努力をしてなお、マリアさんやダフネさんに劣っている科目があるから、焦つたのです。ですから、その私の在り方を、あんな成績不良者達と同じ価値観で計られている事に愕然としました。

私は私が子供であることを痛感しました。自己を確立した大人であれば、きつと他人の尺度に揺るがされることは無かつたでしょう。ですが子供の私は、惨めに泣き喚くことしか出来ず、マリアさんに慰められ、ダフネさんにその痛みを理解してもらえました。この時、私は彼女たちと友人で在りたいと、心の底から思いました。そうして、泣くのを止めるとそこにはトロールが居ました。頭の中の情報はそれがトロールだと言いますが、心はそれを私の死だと叫びました。自分の喉が悲鳴を上げているのに、それを他人事のように眺めている自分が居ました。こうして、何も出来ないまま饅えた臭いに塗れた肉片になるのだらうと。

ところが、扉から轟音がして、そこに居るはずもないマリアさんが居ました。マリアさんは泣きそうな顔なのに、目はいつか見た宇宙の写真の様な光を灯していて、酷く怒っていました。そして、瞬く間にそのトロールを、私の死を狩りとつたのです。その後は皆さんも知る通り、教師達が来ました。

その後、私は副校長と共に校長室に呼ばれ、言われました。トロー

ルに襲われたことは、学校の責任ではあるけれど、私の責任でもある。私が他人に心を開き、獅子寮の生徒達と仲が良かったとすれば、生徒達と離れ、独りで居たことは無かったと。智慧を求めるその姿勢は評価するが、人との繋がりによって得られるものを知らない。だからそれを学べと。マリアさんやダフネさんとの関係を大切に思うのであれば、その2人を傷付けた自身の孤独を克服する様にと。

そして、唐突にポッター君の話を始めました。彼は幼い頃に自身の力ではない偉業によって名声を得てしまったと。そして、周囲は彼自身を見ずに彼の幻影を崇めていると。彼自身とその幻影との間に彼は苦しんでいると。その彼の為に、冒険を学内に用意したと。彼らは私に対して大きな負い目を感じているから、その冒険を通して親交を深めよと。それが友人で在るマリアさんやダフネさんの為でもあると。

それからの私は、彼らにとって優秀な生き字引となりました。彼らが私に対して親愛の情を持っているかどうかは分かりません。無知による結果とはいえ、結果的に殺しかけた人間に対し、何の臆面もなく接することが出来る人間がいるとは思えません。そしてその無知こそ、私が最も厭うものです。

私の知らない事も多く在り、マリアさんやダフネさんに頼る事も多く有りました。その度に、彼らに関わるのは止めた方がいいと忠告してくれましたが、いえ、私自身そう思う部分は大いに有りましたが、今世紀最も偉大な魔術師の言葉に、私は盲目となっていたのでしよう。厳格で知られる副校長が私財を投じて特定個人に箒を贈り、規則を捻じ曲げて競技選手とすることも、ハリー・ポッターという少年を、学校を挙げて英雄にするための布石なのだろうと。竜の孵化、その隠匿といった明らかな犯罪行為についても、これは冒険の一環だと。学校の用意した冒険なのだからと、自分に言い聞かせていました。

冷静に考えてみれば、おかしいことだったのです。ですが、マリアさんやダフネさんと友人で在るとい言葉は、私にとって、何よりも甘い毒でした。

そして、森番から冒険の手がかりを得させるためだけに禁制品を用

意する等、最早これは学校の管理する冒険ではないと考えた時点で、恥知らずにも、友人ではなく、狩人としてのマリアさんに助けを求めたのです。

そうして、マリアさんはそれを汲んだ上で私を助けてくれました。ダフネさんはそれを汲んだ上で私達を止めてくれました。私には獣が何かは分かりません。ですが、マリアさんは血に塗れ、服が切り裂かれているのに、事も無げに帰ってきて、あまつさえ私がその返り血で汚れる事などを心配してくれました。

告白します。私は、私の愚かさによつて、あなた達を陥れる事となりました。赦してくださいとは言えません。本当に、ごめんなさい」言い切った後、ハーマイオニーは慟哭した。

ダフネは、静かに嗚咽を漏らしている。

ハーマイオニーの口から出づる「マリアさん」「ダフネさん」と、よそよそしく呼ぶその声が、哀しかった。

「なるほど。確かに貴女は愚かで、憐れだ」

「ちよつとヘルマン！」

「憐れだと言っている。それに、高潔だ」

ジェラルドはハーマイオニーに黙って近づくと、肩に手を置いた。「貴女の愚かさへの恐れ。それは、貴女が正しくない事を恐れているからです。善く在ろうとするだけでは、それが徒花となる事もあるでしょう。私の師であったアルフレートという狩人も、その蒙昧な善性によつて最期を迎える未来がありました。ですが、その無知ではなく、蒙が啓かれたことで、私が今ここに居るのです。

貴方が正しく善く在ろうとするその意志、それは私達の言葉に於いて、黄金と言います」

「多くを知っているからこそ、知らぬものへの恐れは大きくなる。そしてなお、無知への恐れを抱き続け、友の為に、友を捨てる覚悟で脅威に立ち向かう。その退かぬ黄金の意志。マリア、いい友を得たな」
「ダフネもね、自分も行けば良かったってずっと泣きながら、それでも待ってたのよ。グレンジャーさんがずっと何かに苦しんでいたのに、それに触れられなかった、それを聞き出せなかったって、とつても悲

しんでいたの」

「イングリット、それ言っちゃあダメじゃないの？」

「だって、言ってあげないとダフネはずっと抱えたままじゃない。

マリア。2人への言葉は？」

急に水を向けられても困る。自分でもこの感情にどういう名をつければ良いのか分かっていない。ただ、涙が頬を伝っているだけだ。「……まずは、ダフネ。待たせた。ただいま。貴女はずっと優しくかったから、それに甘えていた。2人で一緒に居たから、きつと分かってくれるだろうと、分かってくれているから傷付けていないだろうと、甘えてしまった。ごめんなさい。

ハーマイオニー。少しだが、私は怒っている。あのクソツタレのガキ共の流した噂のせいで、私は緋色の淑女やら血塗れ女帝だなんて言われたこともある。そんな人間に、私のためだからクソガキと付き合っているなんて理由が分かるはずがないだろう。陥れられたも何も、ハーマイオニーは何もしていない。私が怒っているのはその事だけだ。全力で怒るとすれば、あの狂人だ」

ドロテアに背を押され、ハーマイオニーに近づく。ダフネもそうだったのだろう、つんのめって前に出た。それから、3人で抱擁を交わし、自分の声なのか、誰のものとも分からぬ泣き声が、重なり合った。

「うん、美味しい。演奏にお菓子作りとジェラルド先輩ってホント何でも器用にこなすよね。ヘルマンも見習って」

「あのさあ、君、この光景眺めながらクツキーをつまむのか？」

「綺麗なものを見ながら食べるともつと美味しくなるもの」

「まあダフネ嬢が一番か」

「どこ見て言ってるんですか先輩」

「どこだと思う」

「顔、胸」

「ヘルマン、ホント、サイテー」

「どうして僕なんだよ。それに、包み隠さずありのままの自分である事、それが今回の教訓だと思うんだけどね」

「なら全裸で期末パーティーに出るのか」

「そうやって言葉の表層だけをなぞる事の愚かさ。先輩にはグレンジャーの涙が見えないんですか」

「貴公、期末パーティーに出られるのか？ ジェラルドが血走った目で貴公を見ているぞ」

「ジェラルド先輩だつて拳を真つ赤にして期末パーティーに出たくはないでしょう」

「車輪がいいのかヘルマン」

「……とにかく、そろそろ泣き止んでくれないか。グレンジャー、明日は副校長のところに行かなければならないだろう。泣き腫らした目で送り出せば僕らが君を虐めたとても思われかねない」

その言葉に、ハーマイオニーがしゃくりあげながら顔を上げた。

「まず、校長の言葉は、呪いだ。別に術式化されたものじゃない。君の心を暴き、君の心に沁み込ませた、言葉という毒だ。それは分かっているね。だから、校長と話すときは、目を合わせない事だ。寮監も否定しなかつた通り、校長は自覚的なのか無自覚なのか知らないが、開心術を使っている。だが、いかに開心術の名手としても、無言かつ無杖で心を閉じている相手に完全な開心術は不可能のはずだ。今すぐに開心術なんて習得出来るはずもないが、視線を合わせない、腕を組む、口を隠すといった心を鎖す者の無意識の動作は、意識的に行えば確かに心そのものに作用する。

それと、赦しは要らないとしてもだ、それで君の心が晴れることはないだろう」

「はい」

「だから、もしかしたらだ。もしかしたら、校長は年度内にさらに凶行に至るかもしれない。その時に君を口実とする。君にとつてとても残酷な言葉となるかもしれないが、それを以って君の贖いと成るだろう」

「ヘルマン、何を」

「いや、外れていて欲しい予想がある。それはあまりにも残酷な行為だから、いくらあの校長でもそれはないだろうと期待する自分が居

る。だから、正直なところグレンジャーの贖罪の機会なんて思
いたい」

「だから何を」

「もしこれが外れていたとしたら、それはそれを思いつく僕があ
の校長より残虐である事の証明になる。だから、その時が来るまで黙
っていたい。僕は未だ、ただの捻くれた聖歌隊で在りたい。言
つておくと、それは年度内に起きるだろうし、その時に必要となるのは神秘に
優れるデイルク先輩とイングリットだ」

「私達？」

「……分かんが、何も無いことを祈ろう。」

さて、泣いて疲れたろう。甘味を摂って、それから眠るといい。歯
科医の娘とて、夜食が嫌いなわけでもあるまい」

寮杯

かくして、その時は来た。

やはりというべきか、ドロテアの減点が反映されていたものの、蛇寮が他の追隨を許さずに総得点首位であった。

広間の壁は緑と銀に覆われ、上段には蛇寮の横断幕が掲げられていた。当然ながら蛇寮は大いに騒ぎ、ジェラルドは感涙に咽ぶ。ヤーナムの狩人として、7年も過ごした学び舎に思うところはあるのだろう。

その喧噪が静まったので何が在ったかと思回してみれば、広間の入り口にポッターが居た。その後、何日も医務室で寝たきりだったらしい。そんなにも強く蹴り飛ばした覚えはないのだが。

直後、校長が入室し、腰かけた。

「また1年が過ぎたのう！」

君たち、宴の前に老いぼれの戯言を聞いてもらおうかの。何という1年じやったか。君たちの頭に詰め込まれたものは、この夏休みに全て消え去ってしまうことじやろう。

それでは、ここに寮對抗杯の表彰を行おう。

- 4位 グリフィンドール 312点
- 3位 ハッフルパフ 352点
- 2位 レイブンクロー 426点
- 1位 スリザリン 482点

爆発の如き歓声が蛇寮から上がる。勝利は既に分かっていたことだが、それでもなお、実際にそれが確定するという喜びは大きいらしい。自分自身としては別段思うところはないが、ジェラルドを7冠の栄光と共にヤーナムに帰らせるのは喜ばしい。

「よくやった、スリザリン。じゃが、最近の事情も勘定に入れねばなるまい」

困惑と共に、静けさが広間を覆った。隣に居るダフネに目をやると、蒼白な顔をしていた。視界の端では、ヘルマンが驚愕に目を見開いていた。

「まずは、ロナルド・ウィーズリー君」

まさか。

「この何年か、ホグワーツの中で見る事の無かった最高のチェスゲームを見せてくれたこと。これを讃え、グリフィンドールに50点を与える」

獅子寮から歓声が上がった。

見せてくれた、とはやはり、見ていたのだろう。最奥の部屋ではなく、最初から。

「次に、ハーマイオニー・グレンジャー嬢に、火に囲まれながらも冷静な論理によつて正解を導いたことを讃え、グリフィンドールに50点を与える」

またも、獅子寮から歓声が上がる。

その中に居るハーマイオニーは、顔を抑え、震えていた。

「3番目に、ハリー・ポッター君。その完璧な精神と、卓越した勇気を以つて困難に立ち向かったこと。これを讃え、グリフィンドールに60点を与える」

その精神とやらは、それを讃える本人の狂気とハーマイオニーの悲哀、そしてこの広間に居る全ての人間を贄とした冒険によつてもたらされたものだ。あれは一体、何を言っているのか分かっているのだろうか。

ダフネの唇からは、血が零れていた。白磁の肌に、鮮やかな紅が一筋。それを拭うこともなく、ただ怒りに染まった眼を壇上の校長に向けている。

だが、校長がその冒険者に花を持たせようと、蛇寮の得点には至らない。それが分かっているからこそ、蛇寮の生徒達は曖昧な拍手を贈った。

「勇気にも様々なものがある。敵に立ち向かうことだけではなく、味方に立ち向かうことも大いなる意志が必要となる事じやろう。その勇気を讃え、ネビル・ロングボトム君に15点を与えよう」

その言葉は、理解されるまで時間がかかった。誰もが、あのロングボトムに加点があるとは考え難いものであり、また、その加点対象となる行為も具体的ではなかった。ポッターについては、ウィーズリー

が喧伝した禁じられた廊下の冒険、それが評価されたのだろうか。だが、ロングボトムに何が有ったというのか。そして、その加点の意味するところは、獅子寮の勝利である。

獅子寮は爆発の如き、否、事実杖先から火花を噴き出しながら狂気の歓声を上げ、それを祝った。

「……馬鹿な。こんなことが赦されていいのか」

「これが、ホグワーツ」

デイルクお兄様とイングリットお姉様は、ただ愕然として獅子寮の狂乱を眺めていた。

自らの手を見れば、握り潰した杯の破片が皮膚を食い破り、血を迸らせていた。

「あたしの……あたしのせいだ。あたしが先生に軽口を言ったから。あの5点が無ければ……先輩……先輩ごめんなさい……何が誇れだ……私が、私が……ッ」

ドロテアは身を震わせ、涙を流していた。あの5点さえ無ければ、寮杯は得られずとも、敗北は無かった。そう悔悟している。

滂沱の涙を流すドロテアに、かける言葉は無い。

校長の言う冒険には、最初から校長が帯同していたのだ。

ならば、自分さえ征かなければただの期末試験慰労会で在ったのだ。

それに狩人を逸らせ、ドロテアの心を乱したのは、自分のせいではないか。

「違う。得点に根拠などない。あれはただ、得点に合わせて帳尻を合わせただけだ。何故君が減点されたかは知らないが、君が気に病むことはない。仮に君が10点減点されていれば、ロングボトムに10点が与えられただろう。僕が言ったのはそういう事だ」

ヘルマンは、ドロテアの頬を撫でた。

「さて、飾り付けを変えねばならんよう」

校長が手を叩く。

広間の端から、緑と銀が、赤と金に塗り替えられていく。

紅く染め上げられていく蛇の旗は、血を噴き出し死にゆくその様

だった。

「どうなつてやがる」

「こんなことで……こんなことで、俺達の7年間が、ここで終わるのか……？」

「邪悪すぎる。あれは人間なのか？」

「こんなのつてないよ」

「畜生、ちつくしよおおお！」

7年生達はあまりの事に恐慌を起こしている。それもそうだろう。栄光の7冠は、蛇寮どころか学徒の大半にとって意味の分からない理由で奪われたのだ。

「ボーン家の狩人。あれを止めてください。神秘に優れる者が必要になるとは、そういう事です」

そう、ヘルマンはこれを予見していた。

言われるがままに、デイルクお兄様とイングリットお姉様が杖を振り、蛇の尾を食らう獅子の動きを止めた。

「未だ清算するべきものは残っております」

横断幕の抵抗にどよめく広間に、ヘルマンの声は、朗々と響く。それは、獣達の叫びの中に轟く声。

「勇敢なミスター・ポツターの介添えとなったマリア・アイリーン・ボーンの行いは、いかほどになりましたか。未だ加点されていませんか」

「確かに彼女は力を示した。じゃが、わしが評価したものは、恐れに向き合い、恐れに打ち克つた勇気じゃ。

自らの身を投げ打ち、友を護る勇気。

自らの答えを信じ、友に託す勇気。

未知に立ち向かい、先に進む勇気。

友の敵となろうとも、信念を貫く勇気。

ミス・ボーンに力がある事は認めよう。おうとも、それは間違いないことじゃ。だが、力を持つ者が為すこと以上に、力及ばぬ者が示す勇気にこそ、わしは敬意を表したい」

ジェラルドが、ゆらりと立ち上がった。

「校長よ、眼前の獅子寮生を見るがいい。理由も分からず、蛇寮にもたらされた理不尽に快樂を得る愚昧さを。故に勝利を逃し続けてきたのだ。」

我らスリザリンは卑怯だから6年もの間、杯を得てきたのか。

否！ 断じて否！

我らは吹き荒ぶ嵐の中を、我等だけで生き延びてきた。成功は讃えられず、失敗は嘲られ、それ故に我らは勝利しなければならなかった！ 勝利は追い求めるものではなく、義務に成り果てた！ 魔法界の醜悪な統治が生んだ公共の敵、それが我等だ。

個人の意志などなく、血を問わず、生まれを問わず、属する者は全て悪となるとされる毒沼の蛇。だが、そこに属する者が、他寮の生徒の為にその力を振るい、勝利を得た。何故それが、当然の事だとされなければならぬ！

我が仕えるボーン家が令嬢、マリア・アイリーン・ボーンは、貴様らの小間使いとでも言うのか！ 私の愛しき主、愛しき後輩、愛しき妹を英雄に侍る婢女などと貶めさせはしない！」

「先輩。落ち着いて。ここで怒号を上げれば、僕等は杯を恐喝した事になる。それは間違っている。貴方の意志は正しいが、誤った手段は誤った結果を産む。心配なさらずとも、先輩の花道、僕が作りましょう」

いつもは皮肉を投げるヘルマンだったが、故に誠実な言葉には重みがある。ヘルマンにとってジェラルドとは狩人として大いなる先輩であり、学徒としても先輩なのだ。

「なるほど、マリアはクイレル教授という獣を屠ったに過ぎない。どれ程恐ろしく、強大な獣であろうと、立ち向かうは狩人の義務。義務から生じる行動には道徳的価値がないといったところでしょうか。いずれにせよ、死と隣り合わせにある我らの業には敬意を払うべき勇氣はないと仰せの様な。」

しかし、狩人としてではなく、マリアとしては何故加点されないのか。友を裏切ろうとも別の友の為に進む勇氣。校長が先程示した基準であれば、マリアは加点される事になります。しかし、加点は

為されない。これはどういうことでありましょう。

次に、マリアには力がある故に加点をしないとされた。ならば、何故ミスター・ロングボトムが最高得点ではないのか。彼が立ち向かった者は、闇から生き延びたミスター・ポッター、学年一の英才であるミス・グレンジャー。決してミスター・ロングボトムを貶めるつもりはないが、彼にとって両名に対峙することは、加えて、対峙した事を寮内のみならず校内に触れ回りそうなミスター・ウィーズリー……ここで口を挟まないでくれたまえ、双子の諸君。とにかく、力及ばぬ恐るべき同輩に刃を向けるという勇気を持つ、ミスター・ロングボトムこそ、もつとも優秀で勇敢な獅子寮生ではありませんか。それにも関わらず、それを行った彼の得点は何故最も低いのか。

矛盾。ここには大きな矛盾がある。勇気を重んじる寮の内、最も勇気を持つ者が、最も低い評価をされる。その矛盾の解はどの様に為されるのか。単純です。加点に理由などない。加点する為に加点されたのだから。それは、誰かのための冒険譚を、華々しい栄光で結ぶ為の加点なのだから。

問おう、ミスター・ポッター。何故、校長の監視をすり抜け、宝にたどり着くことが出来る賊徒を、貴方の様な著しく筈に秀でただけの学生に対応できると思っただのか。

問おう、ミスター・ウィーズリー。何故、父君に連絡しなかったのか。貴方の父親は魔法省に勤務していると聞く。所掌が異なるとはいえ、同じ行政機関に属する者の言葉だ。闇祓いも警戒はするだろう。

問おう、ミス・グレンジャー。何故、彼らの行いを寮監に伝えなかったのか。マクゴナガル教授は厳格で公正な、教育者だ。何ら訓練のされていない未成年が犯罪者の撃退に挑む、そんな計画が愚かである事を、君の脳髄は見抜けなかつたわけでもあるまい。少なくとも、伝え聞く貴女はその様な愚昧な人物ではない。

さて、愚昧と言えば、此度の実行犯も愚かなことです。相手が高潔であればあるほど、邪悪な手段は意味を大きくする。私が悪逆の徒であれば、まずはどこかの寮生を塵殺するでしょう。グリーンゴッツを破

る程の力量があるのです。学生の200や300殺す程度、造作もない。その後、さらに殺されたく無ければ、宝を差し出せと告げるでしょう。

ところが、それは為されなかった。校長という存在は、確かに抑止力となっていたのだ。しかし翻つていえば、その程度の力量しかない無能なのだ。三つ首の犬如きに数ヶ月も手間取る雑魚が、馬脚を現すのに時間はかからなかったでしょう。だが、校長は闇祓いを呼ぶ事もなく、自ら手を下す事もしなかった。つまり、泳がせたのです。

そして、護りとやらが設えてあると聞けば、1年生ですら破る事の出来る簡単なものでした。なんだったのですあれは。娯楽施設ですか？　そして、その罫は悉くミスター・ポッターとその友人達にとつて都合の良いものでした。親交のある森番が躡けた犬、箒で飛ばせば手に入る鍵、負ければ賊にすら道を開けるチエスの駒、ご丁寧に正解のある論理パズル。純粹に暴力による防衛機構は犬とトロールだった。何故、呪詛と竜に阻まれるグリングッツすら破る程の盗賊に対し、この程度の護りしか置かないのか？　これら全ての答えは簡単です。ハリー・ポッターが英雄になるためだけに、我が学び舎は利用されたのだ。

先程の疑問に立ち返りましょう。ミスター・ロングボトムが何故加点されたのか、何故友人達よりも少なく加点されたのか。

それは、もとより彼もハリー・ポッターの英雄譚に組み込まれるはずであったところを、逃してしまったからだ。聞けば、ミスター・ロングボトムは薬草学については並々ならぬ情熱を持ち、頭一つ抜けた才能を持っているそうですね。ならば、悪魔の罫が仕掛けられていたことも道理でしょう。熱と光に弱い、その程度の知識さえあれば、これを抜けるのに特別な才能は要らない。人より多く知識を蓄えておけば良い。

確かにミスター・ロングボトムには特別な才はないと聞きます。ですが、忍耐を持って学び、慈愛を持って植物にも他人にも接する、その様な人物であるとも。

そんな彼にうつつつけの障害とは思いませんか、スプラウト教授。

そういえば、スプラウト教授も石の守り人であったそうですね。例えば、正規の手段で入室しない場合、マンドラゴラが一斉に鳴き叫ぶといった罫を作る事が出来たはずでしょう、スプラウト教授。貴女はその職にかけて、我ら学生に仇なす者を捕えようとしたのですか、スプラウト教授。

誓って申し上げますが、私は蛇寮の同輩の為、我が友人の為だけに怒りを覚えているわけではありません。自分達の目論見の為、学び舎を危険に晒した貴方方全ての教員に怒りを覚えている。手法を選ばなかったことではなく、教育者の皮を被りながら、多くの学生を賭け金にして、たったひとりの英雄を作ろうとしたことに。

より大いなる善の為に。

分かりやすい功利主義的思想だ。

この思想に従えば、ミスター・ポッターを活かす事は残りのホグワーツ在校生が幾人殺害されようと清算出来る程の便益があるとお考えですか。

教え導く者として、その矜持に恥じぬ行いですか。教職者としての意志があるのですか。何が目的です。歳を重ねた貴方たちは、ハリー・ポッターという生き残った子供に、これ以上何を押し付けるつもりだ」

ヘルマンの憤怒は静謐で、凄絶な微笑みとなって表れた。

そう、加点などしなければ良かったのだ。本人さえも気づく事がなかった、ポッターの為に整えられた舞台であったとしても、それを讃える者達はいた。暴かれるまでは、ポッターは虚飾された栄光に浸っていた。

だが、自らの為した事が単なる見戯であり、その時に覚えた恐怖も、生還の歓喜も全て造られたものであると識ってしまった。杯の得られぬ栄光どころか、全てが無為であった。自身が何の手出しもしなければ、クイレルは呪いによって死ぬだけの事であり、鏡の中に石は封じられたままのはずだった。

穴熊寮のテーブルから拍手が起きた。穴熊寮は本日3位となるはずであった。しかし、意味不明な理由によって獅子寮に加点され、最

下位に転落した。穴熊寮が矜恃とする忍耐と誠実は素行に現れる。こうした事で加点されるということは好ましくないのだろう。

「ミスター・ポッター。何も気に病むことはありません。全ては予定された事だったのですよ。貴方は、悪くない。貴方は貴方の瞳で信ずべき者を見定め、そしてそれらに踊らされただけです。貴方はハリー・ポッターであるというだけで、期待され、失望され、妬まれ、嘲られてきた。それを理解し、憐れに思わない同輩はいないと思いたい。別段、私は貴方を責めてもいない。ただ貴方は貴方に見合った脅威に立ち向かい、そしてそれを剋してみせた。それは見事だと讃えましょう。ですが、その為に、蛇寮の敬愛する先輩たちのみならず、この1年を通し勉学に励んだ学徒全てが犠牲となろうとしている。それを貴方が無邪気に喜んでいいとは思えない」

校長は鷹揚に手を掲げ、各寮のテーブルを睥睨して言った。

「見事な推論じゃの。して、証拠はどこに」

「証言ならあります。ですが、貴方がここまで残酷だとは、思わなかった。証言者の名を開陳しようと思っていました。ですが、それはあまりに無慈悲だ。ここまでの悪意なき冷徹な暴虐が為されるとは、思いたくもなかった。故にこれを言う事は、不正無き邪悪に墮することだ。

これを言えないと分かっているからこそ、その様な態度が出来るのでしょうか。しかし、これだけの状況証拠があつて、他の生徒にはわけのわからない獅子寮への加点が為され、まだ言い逃れする気ですか」「言い逃れとは言うがの、わしは何一つとして、言い逃れするべきことなどない。そうじゃろう。わしはポッター君達が4階の廊下に挑んだ勇氣について加点したのじゃから、何もおかしな事はあるまいて」「つまり、勇氣を持って校則違反をすれば加点されると。あそこを立入禁止としたのは校長ご自身だ」

「わしの記憶が正しければ、酷く痛い死に方をしたくない人は、今年いっぱい4階の右側の廊下に入ってはならんと伝えたはずじゃ。つまり、何も無闇矢鱈に禁じたわけではない」

「成程。」

校長。我等がどの様に申し立てをしようかと、貴方がマリアの行いに加点する事はないでしょう。ならば、非常に残念ながら、マグゴナガル副校長に責任を取ってもらう他ありません。

さて諸君。もうしばらくご静聴頂きたい。

獅子寮の卒業生である、アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア校長は驚くべき理由によって、何故か獅子寮にのみ加点された。ですが、その寮監であるミネルバ・マクゴナガル副校長は、非常に厳格だが、ある特定の遊戯を除いて、それも、ある特定の生徒をその遊戯の選手とするくらいには偏りのあるものの、概ね公平な人格者である事は周知の事実でしょう。

思い出して頂きたい。或る朝、獅子寮から150点が、蛇寮から20点が減じられた事を。その理由は、公表されていないが諸君の知る通り、夜間に外出をした事です。そして、つい先程、ミスター・ロングボトムが加点された理由は、さらに減点対象となる行いをしようとした、獅子寮の3名を引き留めるためです。校長は立ち向かった勇氣に加点したと仰せですが、彼が対峙した理由については、獅子寮の者から聞き及んでおります。

お分り頂けたでしょうか。未だ清算すべき事柄は残っているのです。ミスター・ロングボトムが加点されましたが、その対となる減点が為されていないのです。

さあ、マクゴナガル副校長。夜間外出の罰としてスリザリンに20点の減点を。グリフィンドールに150点の減点を。

無論、マリアを除けば、私達とミス・グリーン格拉斯はスネイプ寮監に夜間にパーティーを行う許可を取っており、その上で夜間外出についてもフィルチ管理人から許可を得て、それを貴女が追認していますので何の咎もありません」

獅子寮生達はヘルマンに怒号を飛ばす事もなく、ただ纏る様に副校長を見ていた。彼ら自身、ウィーズリーの喧伝した冒険の事は知っているだろうが、その加点の経緯、加点の基準にはヘルマンの言に納得してしまっているのだろう。

「マクゴナガル副校長。どうしたのです。貴女の心と、口と、行いと、

生活から、ミスター・ポッター達を減点しないという事は赦されざる事でしょう。さあ、為すべきを為してください。

マリアが力を持つ者として当然を行った様に、貴女もそれを当然の事として為さなければならぬ。結果として石を護ったから免罪されるという事はないでしょう。結果だけ見るのであれば、マリアが加点されないという事はあり得ません。

校長は石を護った事に加点されていません。勇気を見せたという過程に対し加点されている。つまり、その過程に対しても責任が及ぶと仰せです。そこに内包される意思こそが、重要であると。この思考は一貫しています。ミスター・ロングボトムは、脱出しようとする寮生達を止められなかった。ですが、止めようとした意思を、自らの弱さを自覚しながらも獅子寮の為になろうとする意志を持っている事が加点対象となったのです。

一方で、その寮生達は制止を受けてまで脱走したのです。減点される事を理解した上で行ったことであり、つまりは減点されるという意思があるという事です。ところがそれを校長は何故かご指摘なされない。ならば、その機構の予備装置に働きかける他ありません。私はマクゴナガル副校長の心に対して問いかけています。貴女だけを糾弾している様になって見えるでしょうが、指摘したいのは、評価制度が適切かつ公正に運用されていないという責任についてです。その能力によるものか、自身の極々個人的な事由からなのかは図りかねますが、その責任者がその職権をほしのままにしているという状況です。その責任ある立場の一端に在りてこれを見過ぐすという事について、普段の副校長であればどの様にお考えになるか。その様に副校長の心に問いかけています。

もし、これを見過ぐすというのであれば、今まで副校長に減点された生徒達に対する釈明を今から考えるべきでしょう。また、ホグワーツでは古い文化は廃れ、新しい文化が根付くことになるでしょう。

則ち、『バレなければ犯罪ではない』から、『バレても犯罪ではない』です。加点は望まれた者にしか与えられず、減点は為されないというのであれば、あらゆる制約のない、完全な自然です。

それは、校長の仰る純粹な意思に拠るもので満たされる、罪を知らぬ者の樂園でしょう。自分より容姿の良い者の顔面を裂き、自分より成績の良い者の頭蓋を砕けば、自らにとって素晴らしい未来が拓かれる。罰せられる事はありません。それは、自らを高めるという意思の下に行われる、倫理観や遵法意識といった雑念なき手段なのです。ら。

そう、酒に酔って理性を失い、石の護りを暴露したとしても、そこには意思が無く、酒を飲みたいから飲んだまでのこと。竜が欲しいから卵を温める事も何ら問題はない。それが法に反する事であるから隠蔽しようとする事も、友人を助けるという意味に合致しますから何の咎となりましょう。

罪の意識がないのであれば、そこには罰もない。では、誰が罰を与えるのでしょうか。それは、神なる者だけです。全知全能にして至上、その暴虐に疑問を抱く事すら許されず、不信心者には死後の安息は得られない。

そして、ホグワーツの神は、自らを崇める者を罰さなかつた。つまり、彼の者には何ら罪は無く、意思ではなく義務によつて武器を振るつたマリアよりも貴い存在であると言う事です。神がそう裁定するならば、仔羊達はそれに従うまで。物事の理非は神の御心のままに。心貧しき者のためにこそ神の国は在る。主の御名を讃えよ。其はダンブルドアなり。

結果、過程、いずれでもなく意志をこそ重んじる神は何を祝福するのか。それは、神を信じ、神の意のままに動く者。そして、神の見定めた者です。

カインが捧げた供物。それは捧げるといふ意志のみならず、見返りを求めるからこそ神の御心に適わなかつた。そして、神に偽りを告げ、罪を覆い隠した事こそがカインの罪。ならばこそ、マリアの神からの見返りを求めない献身は加点が無くとも誉むべきでしょう。マリアにとって、友人のささやかな安息こそが此度に求めた夜明けなのです。故にその過程で振るわれた力は些事に過ぎないとし、それがならぬら価値を持たないというのは、神の視座からすれば確かに道理でも

ありましょう。教育者としては自殺的主張であると思いますが。

さて、震えるばかりでは仕方ありません。分かりました。ミスター・ポッター達の榮譽を夜間外出への減点で穢す事が憚られるならば、もう一つの加点対象を挙げましょう。

ミス・グリーングラスの事です」

「はい？ 私？」

長く、ヘルマンの弁舌に聞き入っていた聴衆たち。広間中の視線が、小首を傾げるダフネに注がれた。

『敵に立ち向かうことだけではなく、味方に立ち向かうことも大いなる意志が必要となる』ならば、彼女にも同じ様に、加点が必要ならば。

ミス・グリーングラス。貴女には得点を求める権利がある。マリアが得られなかったそれを、求める権利がある」

「私……私は……」

ダフネはしばらく俯いた後に、決然とした表情で声を上げた。

写真

「ほんとダフネちゃん大好き！」

ドロテアがダフネに抱き着いている。ダフネは困り顔で抱擁を返した。

灯りで帰るかと思えば、ジェラルドがロンドンまでは鉄道で帰ると言うので、それに倣って後輩狩人達もそろそろと列車に乗り込んだ。

「改めて礼を。誠にありがとうございます」

「そんなシュミット先輩……結局、純粋な7冠というわけではありませんでしたし」

ダフネは5点の加点を求めた。このままでは先輩達が快く卒業出来ないことと、在校生にも確執が残るからとのことだった。これには校長も何も言えなかった様で、獅子寮と蛇寮は同率首位となり、それぞれの首席生徒達が苦々しい表情で共に杯を掲げた。

他寮も納得以上に感心したらしく、パーティーの間はダフネに拝謁するための行列が出来ていた。その傍ら、ヘルマンは「ああ疲れた。大勢に注目されるって緊張する」と腑抜けた事を言い、未だに泣いていたドロテアの頭を、子犬を扱う様な雑さで撫でていた。

「ヘルマンはお礼言ったの？ あのまんまだったらグリフィンドールから何されてもおかしくなかったんだから」

「手紙でね」

「ツアイス先輩」

「ヘルマンでいい」

「そうですか、ヘルマン。あれ、感謝の意だったんですか？」

「私も読んだが、修辞が多すぎて肝心な部分があまりにも少なすぎたぞ。あの広間の演説も、何を言っているのか分からない生徒は居たんじゃないか」

ヘルマンは懽然とした表情で嘆息した。

「予行演習も無く校長に盾突くなんて、冷静でいられる訳ないだろう」
「ドロテアが泣いてたしな」

「うるさいですよティルク。貴方だってイングリットと一緒になつて

杖を掲げていただけでしょう」

「ホグワーツ城そのものの儀式魔術に干渉するのがどれだけ辛いか、一度やってみろ」

「疲れ過ぎて食事も出来なかったわ」

「お疲れ様でした」

全く労いを感じられないが、皮肉を言わないだけヘルマンも疲れているという事だろう。

「そうだ、ヘルマン。貴公にも礼を。普段はその憎たらしいよく回る舌に苛々させられますが、私の栄誉は貴公とグリーングラス様に守って頂いた。ありがとう」

ジェラルドの礼にはヘルマンも驚いた様で、その差し出された手を、須臾の間をおいて握った。

「照れるじゃないですか。そんな日頃から評価してもらっていたなんて」

「評価……？」

まあ、いつもの事だ。その「いつも」も、後数時間すれば無くなってしまうことが、少し切ない痛みをもたらしただ。

英国らしい厚ぼったい雲が浮かぶ空を眺めながら、この空をハーマイオニーも眺めているのだろうと思う。その心はいかばかりか。ダフネも物憂げに車外を眺めていたが、生え始めた奥歯が痛いとのことだった。

結局、あの大演説の後、ヘルマンが全校生徒から陰険眼鏡呼ばわり——事実なのだが——される様になってから、ハーマイオニーとようやく話せたのはつい先刻、学舎のプラットフォームで乗り込む直前だった。

ハーマイオニーは変わらず、あの2人との付き合いをやめるつもりはないとのことだった。校長の言葉は確かにポッターの為の冒険にハーマイオニーを加えるためのものだったのだろう。だが、一方で、友人を増やさなければならぬというのも事実であり、その過程で真に友人となる事を期待されていたのかも知れないとも。

それは幾分か人の善性を信じ過ぎではないのかと言えば、「ツアイ

ス先輩だつて、私の名前を言わなかったじゃない」と返すので笑つてしまつた。

そこに通りがかったポッターは、「一応言っておく、ありがとう」と言うので、「ポッター、私はお前が嫌い、憎んですらいるが、憐れんでもいる。お前の立場も、その……難しいものだろう」と返した。

ポッターは顔を顰めたが、「いいんだ。僕はここに自分の起源を知りに来たんだ。ハグリッドから貰つたアルバム、これが僕の起源なんだ。だから、僕はこれでいい。僕は交通事故で死んだイカレた夫妻から生まれたわけじゃなくて、英国中から尊敬される偉大な人間でもなくて、子を護ろうとする普通の親から生まれた、普通の子供だった。それを知る事が、あの鏡の答えだったんだ」と、手を差し出した。

握手は返さず、「またな」とだけ返した。

あの呪具に何を感じたかは知らないが、その答えはきつと、彼の夜明けとなつたのだろう。

1992年

時計

ドロテアに連れ出されて工房の試験場に向かった。

現代の多くのヤーナム民にとつて忌まわしき土地、それは漁村ではなくヤハグルである。住民は拉致され、血肉をトウメル神、その再誕の贄とされた。僅かながら正気を保っていた住民達が夜明けと共に目にしたものは、反吐と腐臭に塗れた人とも獣ともつかぬ何かの死骸である。

隠し街の壁に施された彫刻は脅威から逃げる民衆を象る。嘆き、叫び、ある者は別の者を踏み越え、ある者は子を護る様に抱え、そのどれもが生の感情を克明に表している。

その一方で、民衆という群体ですらなく、一つの生物が如く混じり合った悍ましいものもある。救いを求めて手を伸ばしている様にも、或いは救うために手を差し伸べている様にも見えるそれは何を意味するのか。

悪夢で見えた人頭蜘蛛、鴉と犬の掛け合わせは身体と頭部の繋ぎ替え、そしてメンシスの檻は脳の保護と交信を表す。即ち、隠し街ヤハグルの開闢は、神との一体化を目的とするメンシス学派の狂気と共に在った。

メンシス学派に服従している様に思われるトウメル人達は、おそらく従っている様に振る舞いながらも、神を降誕させ、それによって開かれた孔、赤い月を通して夢に渡り、女王を奪還するつもりであったのだろう。赤い月とは悪夢から現実への産道だったのではないか、とするのが現代の狩人の仮説の内の一つである。

その様な経緯故にヤハグルは徹底的に破壊され、現在は実験場や訓練場として扱われている。歴史を忘れる為ではなく、忌まわしい歴史が故にそれを改める為に破壊された、そう信じたいところである。

そしてその一画に、ドロテアによって連れ出されたのだった。

「つづ」

「自由研究の成果のお披露目ってとこ。来年はルーン学取るから、その予習も兼ねてさー」

「そうか、三年生になると選択科目があるんだったな。して、その予習が、これか？」

「そ。工房のみんなに作ってもらったの。マリアが王様に「ドロテアはよくやってくれました」なんて言ってくれたから、王様からお小遣い貰えてさー」

「何も起きなかったとはいえ、迅速に行動していたんだ。あの状況に對して呆けていた私からすれば、よくやった以外に言葉は無いさ」

終わってみればあつけない獣狩りの夜。賢者の石の恩恵を受けていたにしては、クイレルという殉教者の獣はさして強くなかった。それでも、闘争の熱とハーマイオニーの無事に高揚していた。そして緩み切った理性のまま、同胞達に後始末を全て任せてしまっていた。

「それに、そもそもボーン家の姫様なんて扱われているが、敬われるべきはお父様だけで私はその娘というだけだ。そのお父様も「成り行きでそうなった、どうしてこうなった」と、ここ数日は毎日の様に頭を抱えてぼやいているんだが」

「そりゃー、医療教会は崩壊してたし、関係者は恨まれてるし、頼れるのは無所属の狩人だけ。その狩人の中で狩人狩りのアイリーンにも信用されてる最強の狩人ってなったらそうなるでしょ。誰もそんな立場を引き継げるなんて思わないし？」

「娘としてはじっくり休んで頂きたいものだが」

「その娘が学校で騒動に巻き込まれたことも忙しい理由の一つだと思うけど。ま、とにかくこれを見てどう思う？」

ドロテアが指し示すのは、ルーンが刻まれた架脚と、コイルの巻かれた筒。コイルは架脚にハンダ付けされているが、電子機器に有るはずの回路基盤がない。代わりに、筒にはびっしりと見慣れぬ記号が刻まれていた。

「どうもこうも……なんだこれは」

「コイルガン」

「……コイルガン？」

「そー。磁力を使って、磁性体を撃ち出す装置。とりあえず見てなつて。」

おじさーん！　　いっくよー！！」

工房の職人が遠くから手を挙げて応えた。壕の中に退避したのを確認してから、ドロテアは装置に触れ、魔力を流した。瞬間、何とも気の抜けた音が鳴った。

「いいねー、だいせーこー」

「もう終わったのか？」

「そだよー。」

……あちやあ、的には当たんなかったみたい。まあ目的は達成出来たからいいでしょ」

職人は的中せずとの表示を掲げていた。

「で？　当初の目的とは？」

「うん、ホグワーツ城って電子部品が動作しないでしょ？　だからね、ルーンやカレル文字でそれを代用して、魔力を電力に変換したらどうなるかっていう実験。ホグワーツの機構は分からないけど、もらったお小遣いで実験場と同じ様な状況を作ってもらったの。この状況下でもちゃんと動作したから実験成功だよ」

「おめでどう、でいいのか？」

「うん。電子回路に魔術で保護をかけるっていう先行研究はあったし、現に実用化されてるけど、魔術的な記号で回路を作って、電子回路に見立てて動作させるってのは実証されてなかったはず。保護をかけ続けるよりも、そもそも保護する必要がないっていう堅牢性が利点かなー」

「詳しくはないが、実用化の目途が立ちそうな試みとしては初、ということか」

「初といっても、そんなあたしが凄い事したわけじゃないんだなー。大して必要が無かったからだね。ほぼほぼホグワーツに特化した技術なんて開発も研究もする意味無かったし。あそこでENIAC動かしたい人なんていないでしょ？」

ドロテアは謙遜するでもなく、自分の業績を腐してみせた。普段は

「えへへーすごいでしょー褒め称えたつていいんだよー」と些細な事で絡んでくる一方で、こうした分野では真剣である。

「だが、必要になったから考えたのだろうか？ 本当に無為であれば無聊の慰めにもならないだろう」

「まーね。工房も実験が成功したら回転ノコギリの改良が進むだろうって喜んでたよ。マリアの回転ノコギリは特注品でしょ。この前に壊したやつ、分解修理は魔術保護を一からかけ直しだってエーレンベルクのおじさんが嘆いてたよ」

「道理で時間がかかると連絡があつたわけだ。ただ、費用と手間がかかるにしても、別段困るわけでもない。何故これを創ろうと思ったんだ？」

「コイルガンに成つたのはあたしと工房の趣味。

仮にね、ホグワーツの防御を攻撃に用いるとしたらどう？ 電子機器が使えない空間を任意に作れるとしたら？ 通信は出来ない、発電機も動かない。非魔法族にとっては致命的だよねー。城の建造から仕込まれた魔術だろうからそう簡単には出来ないだろうけど、1000年も前のふっるい技術ならそれより強力で便利な術はその内できるでしょ。

それにさー、別に電子機器の無効化は魔術だけが可能なわけじゃない。仮にねー、クイレルに憑いてたのが本当のヴォルデモート卿だとして、非魔法族界を壊滅させようとしたらどう思う？ まずは米ソどちらかの大統領を服従させて、先制核攻撃するね。で、高高度核爆発でEMP攻撃して、電力供給と通信の遮断。それから連携の取れなくなった基地を一つ一つ潰していくかな。

だから、科学技術と同じ機構を持つ魔術的な機構つてのを作らなきゃならないなって」

自分を含め、狩人達は先日公開された映画に大興奮だった。工房の職人たちも鑑賞したのか、それぞれが劇中に登場した銃器を推していた。ドロテアの語った内容はスカイネットによる審判の日と酷似したものだつたが、恐ろしいのはスカイネットを魔術師に置き換えれば、それが現実として可能であろうという点だった。

もちろん、米国にしてもソ連にしても、対魔術師部隊はあるのだろうし、魔法界自体にも警察機構がある。しかし、ヴォルデモートという稀代の犯罪者を生み出した英国魔法界、その政府たる魔法省と英国内閣とに密接な関係が感じられないというのは不安要素だ。

「そーゆーわけでさ、対ヴォルデモート卿についてみんな色々考え始めると思うよ。魔法大戦の頃だって技術革新が大分進んだし。こないだビルゲンワースの資料編纂室でバイトしてきたけど、グリーンデルバルドの頃まで遡って資料を引っ張り出してたよ。第二次大戦が起きなきゃいいけど」

夢の中に在るビルゲンワースと違い、現在のビルゲンワースは図書館兼学校兼研究所として復興した。教育を担っていた教会は大半が損壊しており、逆に現実の教室棟は多少の埃と黴に目を瞑れば綺麗なままであったという理由らしい。もともと、夥しい眼球や臓器のホルマリン漬けが鎮座していたため、生き残った狩人達はまずそれらを処理しなければならなかったという。

恐ろしい獣の居た風車も近代化改修が施された風力発電所となり、谷川を利用した小規模水力発電、沼から湧きだす石油による火力発電と、現在の森は電源地帯となっている。これだけ魔法界らしからぬ街がどこにあるのか。

「ああ、それで我が家の書齋が凄まじいことになってたのか」

「今度肩でも揉んであげたら？ 学校と魔法省から色々面倒持ち込まれてそうだし」

「校長の策略が原因とはいえ、お父様や街の手を煩わせたのは私が関わりを持ってしまったから、か」

「結果的に獣狩りになったけど、そもそもは狩人が関わるべき話でもなかったからね。けど、マリアが友達の事で本気になったから、みんなも応援してるんでしょ。本当にマリアがやらかしたって話なら、自分で始末を付けろって王様もビルゲンワースの長老達も言うよ。そういう気持ちを考えないで、ただ自分のせいだって言うのはお姉さん感心しないよー？」

「……ありがとう」

「そーそー、そういう凹む時は凹むし、喜ぶときは喜ぶ素直さもマリアの良いところだよ。間違ってもヘルマンみたいにはならないでねー？」

ドロテアと共に聖堂街に戻ると、お母様は菜園で木苺を摘んでいた。ドロテアはお母様から籠いっぱいのをそれを受け取り、自宅へ帰っていった。収穫を手伝おうとすれば、お父様が書齋で待っていると云う。

書齋には紙とインク、そして甘い葉巻の匂いが充満していた。ドロテアの考えている通り、お父様の忙しきは日に日に増していた。

「ジェラルド君やヘルマン君から聞いたよ。クイレルという教師が獣へ変態した。それについて、目の前に居た者から直接聞きたくてね。よっぽど強い力と想いがあったか、それとも何か特別な儀式を経たのかな」

事件直後にあれこれと訊かれなかったのは既に報告があったからかと得心する。あるいは、狩人ではなく父と娘としての時間を優先していたのかもしれないが。

「んん……元々クイレルには巨大な獣に変態する様な才は無かったと思います。彼の変態の理由は力の渴望でしたが、であれば、逆説的にその様な力は持っていなかったという事になりましたよ。」

確かに賢者の石から成る生命の霊薬を与えはしましたが、それによつて超常の力を手に入れられるのであれば、そもそも学祖ウィレームたちは上位者狩りなどしていないでしょう」

「ふうん……続けて」

「となれば、やはりホグワーツには秘匿された何かがあると考えることが道理でしょうか。お父様の在学中は何かありましたか」

「秘匿かあ……随分前に森に蜘蛛が居るってアウレリアから聞いたことはあるけど、別にただの大きいだけの蜘蛛だって話だったし」

「アウレリアお姉様はこう……物事の基準が……」

同じ両親を持つ20程離れた姉、アウレリアお姉様。金を意味する名の通り、お母様譲りの美しい金髪を戦がせながら、斧槍を振るう狩人。「最上の戦士とは戦闘をし続けられる者である」との信念から、何

より強靱である事に重きを置く狩人である。

「アウレリアはなあ……ほんと嫁に行くときに心配したよ。行かせていいのか？　って。初期型のガラシャの拳で聖杯制覇とか本気でやったのあの子が初めてだよ」

「何がお姉様をそうさせたのか……」

「俺にも分からないよ。とにかく、俺はホグワーツの事は何も分からないよ。訪問したことさえないし」

「ダームストラングで魔術を修めたのですか？」

「あれ？　言ってなかったっけ。俺無能者だったからどの学校にも通ってないよ。学歴一切なし」

無能者。魔法族に生まれながら、魔術を使うことが出来ない人間。

12年生きて来た中で、最大に近い衝撃である。お父様が無能者であつたという事も、それを伝えられていなかったという事も。

ヤーナムの民に無能者は居ないため詳しく調べたことはないが、そもそも無能者が後天的に魔術を使える様になるものだろうか。

「うーん、そつかあ。ごめんね、あんまり思い出さたくない事だったから伝えてなかったか。ホグワーツで訊かれたと思うけど、ヴォルデモートに滅ぼされたボーン家って聞いたことあるだろう？　その数代前の当主から生まれた無能者が俺。話は長くなるし、そこ座って」

お父様は椅子にまで散らばっている資料を、杖の一振りですとどめ、空間を作った。つい先程の自分は無能者であつたという言葉が性質の悪い冗談にしか思えない程、魔力の揺らぎもない美しい精度だった。

「11歳の9月。いつまで経っても魔力の兆候は無く、何時まで経ってもホグワーツの入学許可証が届かなくて、俺は夜に目を眺めて、鼻を待った。鼻は夜行性だから夜に来るのかも知れない、そう願って、庭ですっと目を眺めてたんだ。そうして、気付いたら朝になつていた。それ以来、夜明けってね、辛い時間だったよ」

父の悲痛な過去を聞かされるとは思ってもおらず、相槌すら打つことが出来なかった。ただ黙して顔を伏せていると、お父様が続けた。

「家に入るのは嫌だったけどさ、庭に居たって仕方ない。昨日と変わりにない今日、魔術師として生まれたのに魔術が使えない人間として生きていく、そういう絶望がちよつと増しただけ。そう強がって扉を開けたら、母さんは目を腫らしながら俺を待っててさ、抱きしめてくれたよ。」

でもそれは長く続かなかった。そもそも、名家で世継ぎが無能者一人きりだなんて状態が10年続いたのがおかしかったのさ。1年して、弟が生まれた。200年近く離れてるけど、マリアの叔父さんだ。父さん……君のお祖父さんに似た、淡い碧の目をしたかわいい子だったよ。12も歳の離れた子だからね、俺もあやしたり、おしめも替えたさ。

屋敷妖精は居たし、俺と一緒に世話をしてたけど、無能者に合わせるの大変だったろうね。魔力がないとはいえ長子は俺。いずれ主が代わったらこんな無能者に仕えなければならぬって、口には出さなかつたけれども絶望してたんだろうね。思うところはないでもないけど、屋敷妖精は名家に仕える事を誉れとする、そういう生き物だ。力の有る存在に仕え、その力の一つとなる事を喜びとする……それを変えろというのは生物としての在り方を変えろというものさ。

弟はね、名家から生まれるべくして生まれた神童だったよ。1歳になる前には部屋中の物を浮かべて遊んだり、おしめが濡れたら周りを水浸しにしたり。それを見た父さんは柔らかな笑顔をさせる様になつたし、母さんは狂喜したよ。それから、俺は家に居場所がなくなつた。

多分、純血の名家から生まれた無能者の存在は、妻の不貞を疑うには十分すぎるものだったんだろうね。父さんは母さんを信じきるこゝとが出来なかつたし、母さんは魔法使いを産むことで赦しを乞うたんだろう。今となつては、俺が実際に不貞の子なのかどうかは分からないけれど。

弟が話せる様になつたら、母さんが付きつ切りで魔術の指導をする様になつた。父さんも離れに連れて行って、色々と教えてみたいだね。今にして思えば、離れに連れて行ったのはきつと俺を憐れんで、

俺が弟と自分を比べて絶望する事が無い様にしていたんだろうけど、当時の俺からしてみれば疎外感が増すばかりだったよ」

異母姉妹ではあれ、イングリットお姉様は憧れとするあのマリアに似る。故にお姉様との力の隔絶には悔しさどころか苛立ちまで覚える事もあった。だが、だからといってお姉様から遠ざけられれば、きっと今の自分は無かっただろう。今ではカインハーストの血の業も、お姉様が得意とする狩人の業の一つとして受け止められる様になった。

ヤーナムの長の子は、炎を扱える事を望まれているのではない。どれ程の敗北を重ねても、どの様な手段を用いても、最後には夜明けを齎すと信じられる者である。

だが、お父様はどうだったのだろうか。魔法界の名家の子として望まれたものを持たず、得る術も無く、故に存在を曖昧にされた。幼き少年であったお父様の苦しみは、推し量る事さえ出来ない。

「俺には何も無かった。当時、魔法界の名家が長子を非魔法界の学校に通わせるなんてありえない話だったから、今更学校に通うわけもない。農村であれば未だしも、生家はファルマスの割と近くにあった。当時の英国非魔法界では学も職能もない子供なんて、死ぬまで酷使されるか窃盗で生計を立てるくらいしか出来なかったんだ。今じゃ魔法界の子の方が酷い教育水準だけだね。

幸い、生家は裕福で、俺は本を読んだりヴァイオリンを弾いたり、料理をしたり、父さんから会計を学んだり、今まで通りに過ごしていたよ。家庭教師はつかなかった。名家の長子が無能者だなんて、どんな噂が立つか分からないからね。

後は体を鍛えたりだね。当時戦争はままあることだったから、軍人になる道も考えてね。ファルマスは港だから、戦争を思わせるものはいくらでもあった。母さんは「せめて、マグルの野蛮な球遊びは止めて頂戴」って懇願するから、軍人に成るのは思い留まったけど。

弟が11歳になった。予定通りというか、弟には入学許可証が届いた。嫉妬が無かった訳じゃない。けれど、11年成長を見守ってきた、かわいい弟だ。嫉妬から憎悪するには時間が経ち過ぎた。その頃

には俺もなんだかんだ薬草栽培と製剤で稼げる様になっていたんだ。もつとも、ボーンの名が有って売っていたんだろうけどね。

……あれはいい学問だよ。知識と研鑽を裏切らない、それでいてれっきとした魔術的学問だ。魔法への憧れを捨て切ってしまう程、俺は家族との関係を割り切る事は出来なかつたし、割り切られたくもなかつたんだろうね。

とにかく、その稼ぎでささやかな入学祝いとして、幸運薬を渡したんだ」

「幸運薬……作れるのですか？ 難度の高い物と聞いていますが」

「今はね。その時は既存の幸運薬を飲んでから作ったんだ。めっちゃくちゃ高かつたよ。改めて考えればそれを渡すのが合理的なんだろうけど、ほんの少しの幸運と努力で俺はどうにかやっていけることを示したかつたんだろうな。それに、弟は11歳にして無能者の兄を心配出来る程、優しい心が育っていたんだ。俺は弟の優しさに応えたかつた」

幸福薬は服用者の能力を極限まで引き出す薬。それは奇跡を起こす薬ではなく、奇跡を起こせる様な全能感、つまり勘違いを齎す薬だ。それを飲むことで成功したのであれば、それはその成功を実現させるだけの能力が備わっていたことを表す。お父様は真に研鑽によつて薬学の高みにたどり着いたのだ。

「そして、それを弟に渡した途端、母さんはそれを奪い取って床に捨てた」

「……えっ?」

「本気で恐れていたんだよ。俺が嫉妬に狂い、弟を毒殺するんじゃないかと」

「えっ」

「滅多に実家に帰ってこない忌み子が、自分より優れた弟の為にやってくるとしたら、やる事は間違いない。母さんはもう、自らの胎を痛めた子に心を鎖していたんだ。弟は青ざめた顔で、俺に謝っていたよ。自分が親の愛を奪い取ってしまったと。俺はそれ以来、弟に会っていない。彼が悪いわけでもないのに、彼は自分を責めるからね。」

むしろ、謝るべきは俺の方なんだよ。俺がもつと早く魔法使いとしての俺を諦めて、本当の次期当主を作る様にと言えていたら、父さんも母さんも俺をただの子供として扱っていただろうし、弟ももつと早く両親と逢えていたはずなんだ」

「……それは結果論としても正しくはないでしょう。親としての気持ちなど私には分かりませんが、それを言ったところでどの道お祖母様の心は壊れてしまうのではないのでしょうか。もし私が狩人として不出来であるから義絶しろとお父様に訴えたとして、お父様はそれを善しとされるのでしょうか。」

私がどんな私で在っても、お父様や3人のお母様達が私を愛してくれると知っていますし、信じています。その愛を疑い、自分を諦めてより善い子を作れなどと、どの様な拷問を受けても言えるはずありません。ましてや、ただの少年であった頃のお父様が何を言えたでしょうか」

お父様は目を閉じ、噛みしめる様に幾度か首を振った。そこに在る感情は、喜びの様でも哀しみの様でもあり、納得した様でも諦念した様でもあった。

「父さんは床に散らばった液体が本当に幸運薬であると分かっていたよ。無能者であつても俺が生きていけるように、父さんは様々なきつかけをそれとなく用意していたんだ。音楽や芸術、それに会計学だつて、魔術が使えなくとも身を助ける。料理だつて、生きていくには必要だからね。父さんは俺の父親であることを疑っていた。けれど、俺を愛していないわけじゃなかったんだ。その父さんが、顔を歪めながら言った言葉は辛かったよ。「君は生まれるべきではなかった」と。

俺を憎むでもなく、心の底から憐れんでいたんだ。その憐れみが、かえって辛かった」

「それは……」

あんまりだ。

愛していてなお、それを口に出してしまう程に、祖母の狂乱は凄絶なものだったのだろう。

「今になって思えばね、あれはボーン家に生まれるべきではなかった

という事だと思う。元々家の中では口下手な人だったしね。

普通の家に生まれた無能者であれば、誰も傷つける事無く、ただの人間として社会に溶け込むことが出来ただろう。あるいは、魔法界でも魔法を使わなくなつて生きてはいける。どの様に生まれたかは、どの様に生きていくかを決定するものじゃない。なのに、ボーン家に生まれたから、ボーン家の長子として生きなくてはならなくなった。その運命を憐れんでいたんだと思うよ。もちろん、想像でしかないけれど。

ただ、今なら父さんは弟と同じ様に、俺も愛していたと信じられる。家を出るときにこれを渡されたんだ」

お父様は釦の孔に括りつけた鎖を引き、時計を取り出した。

「何の魔法もない、発条で動く、普通の懐中時計。純血の名家にあるまじき、非魔法の機構で動く、時を支配する叡智。それを俺に与えたんだ。弟にも入学祝いとして渡すつもりだったらしい」

英国魔法界では、成人の祝賀として時計を贈る風習がある。だが、ヤーナムに於いては初めて狩りに赴く時、狩装束として与えられる。

当然、お父様がお祖父様より時計を賜った時、お父様はどうに成人している。お父様は17歳の時、お祖父様から時計を贈られる事は無かつたのだろう。お祖母様の話を伺う限り、お父様を魔術師として扱う事は禁忌となつていたのではないだろうか。

「つまり、魔術が使えるかどうかは関わりなく、兄弟は共に同じ時を生きていると？」

「多分ね。けど、俺はその時に何を得たのか分からなかつた。その日の内に荷物をまとめて、東に向かつた。薬学の探求のうちに知つた、旧き医療の街とされる、ヤーナムを目指して。当時は別にヤーナムは秘匿されていなくて、とんでもなく排他的で外との交流がないってだけだったから、辿り着くのだけは楽だったよ。そして、輸血された。その時、無能者という病を克服して、狩人としての目覚めを迎えたんだよ。」

その後、幾度もの敗北で自分を失つたり、何故ヤーナムに来たのかも忘れてたりしたね。自分宛ての手紙を残したり、アンナリーゼ陛下に

協力してもらったり、様々な事があつた。

それで、マリアも知る通り、夥しい上位者の血を得ることで、魔法使いどころか上位者と呼ばれる存在になつたつてわけさ」

ヤーナムに根付いて以来、お祖父様と顔を合わせることは無かつたのだろう。父であり、最強にして最上の狩人とは思えないぼんやりしたヤーナムの実質的統治者、その表情がここまで悲愴と苦痛に歪むことは稀だつた。

それにしても、ヤーナムが当然の様に科学技術と魔術を融合させている理由が血の医療であつたとは考えてもみなかつた。科学技術を魔術師が取り込んだのではない、血の医療によって魔術が蔓延したという逆の経緯。

「つまり、血の医療とは血液感染する魔術師という病？」

「その辺りの詳しい話は未だマリアには早いかな。実感の伴わない言葉はただの呪縛だよ。デイルクも受け容れるのに時間がかかつてたし、イングリットにも伝えてない。

ま、そういうわけで、こうした経緯で妻を何人も娶り、君たちが生まれて来た。今は幸せだよ」

「そう仰せならば幸いです」

相手を崩すかと思えば、お父様の表情はまた厳しいものとなつた。お父様が手ずから淹れてくださった茶だが、カップに口をつけるのは憚られた。

「俺の経験から言えばね、力への渴望というものは馬鹿にできない。それは英雄を産むこともあれば、咎人を産むこともある。ロンドンの私書箱にね、騒動の解決に立ち会つたということ、マリアに対する丁寧な感謝とヤーナムの子らに対する少しばかりの苦言が書かれた、ダンブルドア氏からの手紙が届いたよ。

……そう嫌な顔をするものじゃない。きつと、彼はヤーナムの民を闇に近い者として恐れ、忌避している。だからといって、その全ての言葉がマリアを害するものじゃない。まあ、ヘルマン君の行いは大いに反省するべきだとは思うけど、そのままだと7冠をひっくり返される事になるジェラルド君が可哀想だつたから、やり方を考えなさい

とだけ言っておいたよ。

けれどね、ハリー・ポッターという少年の心を殺しかけた。それは事実だ」

実際のところは校長の描いた戯曲を台無しにした、というところだが。1年をかけてハーマイオニーをはじめとする生徒らを贖とし、無知で無謀な少年を賢者であり勇者にする計画を暴露し、ポッター少年は単なる校長の傀儡であったことを全校生徒の前で示したのだ。彼自身がクイディッチの英傑であることは疑い様もなく事実であるが、クイディッチすらも英雄化計画に用いたとされ、校長への不満を口にする者は少なくなかった。

とはいえ、その状況について彼自身に非があるとは言えない。ポッター自身は有名人であるが故に校長に引き立てられた可哀想な少年であるというのはヘルマンの言う通りである。それはそれとしても、彼の軽挙妄動によって振り回されたことには腹が立つし、実際に死の危険に晒されたハーマイオニーに臆面もなく接する無神経さには憎しみさえ覚える。

それを理解してなお、ポッターは被害者の一人であるとし、ポッター自身はポッターに課せられた脅威に対峙したとするヘルマンの弁舌は見事なものだったが、お父様には何の不满があると言うのか。「何の不满がある、そう言いたげだね。自分が努力してきたこと、それによって成功を掴んだと思ったこと、それをただの予定調和だとされたとき、それが事実であろうとなかろうと、12歳の少年にそれを受け止めきれると思うのかい。」

君たち狩人と違って、世の中の子供たちは自分に向けられる悪意や殺意に触れることはそうないよ。人の痛みを知るなんてことは本質的には不可能だけど、人を傷つけたことを当然と思う人間になってほしくはないよ」

「お言葉ですが、それは校長の咎です。ヤーナムの民とhogwartsの学徒たち、死体より生み出されたトゥメル人の神と番犬に護られた冥界から生還したポッター。無辜の民を贖とし神を再誕させる行いと全く同じではないですか」

「それはその通りだと思ふ部分はある。正直なところ、校長は俺の子供たちや一応はヤーナムの長として責任を持つてる子たちを巻き込んでおいて、どのツラ下げてこんな手紙書いてんだと思ふよ。感謝はあつても謝罪は無かつたし。まあ謝罪したらポッター君の活躍が計画的な物だったと認めることになるから書けないんだろう。」

けれど、ヤーナムの子らにポッター君を辱める権利は無い。少なくとも、公衆の面前ではね。そして君たちがそうではないと思つていられるけれど、それを愉悅に感じたとするならば、邪悪だよ。人の不幸を悦び、それを望む。それがヤーナムの民の多くを獣に堕した。心を純真に、なんて言うつもりはないけれど、自らの心が今、善悪のいずれであるかを省みるようにね」

賢愚は別にして、善く在れ。今更振り返るまでもない処刑隊の言葉。ジェラルドがダフネに伝えた、黄金の意志。それに適う狩人で在るだろうか。我が身を振り返り、顔を覆いたくなる場面は幾つもある。

「それにね、あの映画のダイソン一家を見てどう思つた？ 襲撃者から我が子を護ろうとする両親は、ポッター君の境遇と似ているとは思わないかい」

お父様も妻達を連れてロンドンに赴き、映画を見ていた。その晩、お母様が不自然であつたのは、狩人として死した自身の父親を重ねていたのだろう。街を護る為か、未来を護る為かの違いはあれ、父を喪つた事は同じなのだ。

「そう……ですね。ポッターの傍にターミネーターが居たのか、あるいは彼自身がヴォルデモートに対するそれだったのかは分かりませんが」

「それとね、映画館を出た時に思つたんだよ。あの状況なら、マイルズ・ダイソン氏は犯罪者に屈したか、悪ければ犯罪者の一味として亡くなつたと考えられてしまう。なら、遺族はどうなるのかつて。確かに人類の未来は救われたのかもしれない。けれど、大多数が救われたからって、残された者にとっては救いがない。」

マリア、君がポッター君を嫌う理由もデイルクから聞いたけれど、

彼に不幸な過去があつて、今もなお不遇である事もまた、忘れてはならないよ。彼のご両親は英国を救つたけれど、彼は今まで誰からも救われなかつたんだ。彼に寛容になれだとか、仲良くしろなんて言うつもりは全くないけれど、感情だけではなく、彼を見定めた上で接することだね。

そしてマリア。君の口から聞きたい。この事件の顛末を」

ポッターの状況については、ヘルマンの演説によつて理解したつもりではある。理解してなお、嫌い続けているのは自分の性向故か、幼稚さ故か。

どこから話したもののか。スコーンを齧り、脳に糖分を送る。

「長くなりますが……まず、はじめはポッター。ポッターの入学準備に帯同した森番が、校長の命で何か……後に賢者の石と判明する何かを銀行から受け取るのを見た様です。入学して、校長は4階東廊下への立ち入りを禁じました。いえ、正確には痛ましい死を望まぬならば、とのことでしたが」

「なんだか時計塔のマリアみたいだね」

「事実、そうなのでしよう。秘密を甘やかにちらつかせれば、暴きたくなるのが人の性。校長はそれを狙っていたのでしよう。事故ではあるとのことでしたが、ポッターがそこに入ると、三頭を持つ犬が居たとのこと。後日私が見たところではケルベロスではなく、実験の果てに作られた醜悪で憐れな犬でした。」

そしてハロウィンには、校内にトロールが侵入するという事件がありました。無論、これはクイレルの工作で、奴はトロールについて特別な智慧があると。その騒動の間に禁じられた廊下を調べるつもりだったようですが、スネイプ教授が死守した様です」

「ああ、ディルクから詳しく聞いてるよ。それで友達が増えたんだらう？」

「はい。良き友です。」

それからしばらくして、森番が口を滑らせ、4階の廊下に賢者の石が封じられているとポッター達が気づきます。話が飛ぶ様ですが、程なくして、森番が竜を孵化させました。そして夜間にその竜の処理を

試み、夜間外出が発覚し、ポッター達は森で一角獣の死骸を探すという罰を受けます。その罰の最中に、一角獣の死骸から血を啜る何者か……つまりクィレルに襲われた様です。

試験後にポッター達が森番に聞いたところでは、森番はその竜の卵を正体不明の者から受け取ったとのことですが、引き換えに、三頭犬の弱点を暴露したとのこと。そして、その日に私も同行し、4階の禁じられた廊下に侵入することになりました。

その最奥部には確かにクィレルが居て、鏡の呪具に封じられた賢者の石を取り出そうとしていました。結局、それはポッターにしか取り出せない様になっていて、クィレルの後頭部に憑依していたヴォルデモートらしき人物はそれを看破していました。それが言うには、魂の影とやらで、ゴーストとも遺跡の悪霊とも異なる様でした。

ポッターが取り出した石をクィレルは奪おうとしましたが、ポッターは当然抵抗しました。

ポッターの手はクィレルにとって何らかの呪的性質を持っていた様で、ポッターに触れた所から焼け爛れ、そして瀕死になりました。憑依していた存在はどこかに逃亡し、ポッターは意識を喪失。

私はクィレルに対し賢者の石から成る生命の水を投与した後、尋問……と言つても仮称ヴォルデモートがアルバニアに潜伏していたことと、それが上位者ではなく単なる異常者である事くらいしか聴取出来ていませんが、とにかく尋問後にクィレルは獣化したため、狩りました。

「おおよその様なものでしょうか」

結局、校長が描いた戯曲なのであるから、主人公はポッターである。自身が関わらない部分は伝聞となるため情報量は少なくなるが、かといって自身が関わった部分だけでは意味不明である。

お父様は何も語らず、葉巻に火を着け、静かに吸い込んだ。ゆっくりと口内で煙を転がした後、吐き出す。それを3回。

「おそらく、君の言葉が最後の藁となって、獣にしてみました、それが全てではないにせよ、少なくともその一因となる絶望を与えたことは事実だ。それは受け止めなさい」

「……確かに浅慮でした。肅々と然るべき処置を施し、然るべき機関に引き渡すべきでした」

無力に因って主君を裏切ることには絶望し、救済を求め、そして変態した。考えない様にはしていたが、その引き金を引いたのは誰の言葉であつたか。

賢者の石に望む事、それは死の間際に安らぎを与える事とハーマイオニーに語つたのではなかつたか。自分がクイレルにしたことは、八つ当たりであつた。

「そうだね。」

……けれども、ポッター君にたとえ自衛という形でも、殺人を犯させなかつた。それもまた事実だ。肉体に別人の魂を組み込み、一角獣の血に呪われ、おそらくは余命幾許もない欠片の様な生命だつたらう。だから、ポッター君にかけられた何らかの術が致命的に作用したんだろうね。術者は……この状況を作り出したと思われるダンブルドア氏かな。その様に仮定したとして、加害者をポッター君とするべきなのか、ダンブルドア氏とするべきなのかはともかく、彼らが殺人を犯さなかつたのは、君が蘇生をしたからだ。

獣に成つたという過程を語るのであれば、そもそも氏は賢者の石など学校に持ち込むべきではなかつたし、君にしてもポッター君達を止めて然るべき者に任せるべきだつた。君がそう動いた理由についてもヘルマン君から聞いているけど、グレンジャーさんが脅迫されたと思っただけで実際に脅迫されたわけじゃない。誰もが最善を目指して、誰もが間違えた。誰かが、じゃない。誰もが一つ一つの要素になつている。

だからだろうね、手紙が届いたのは」

お父様は皺だらけになつている羊皮紙を摘まみ上げ、手で包み、燃やした。おそらくは校長からの手紙だろう。

「苦言の内に、ヴォルデモート卿の情報が必要だつたのになぜ殺したとか、獣に変態させてしまったとか、そういう事は書いていなかったよ。もっと寛容になれないのかとだけ」

「寛容ですか。それは、ポッターに対するものか、あるいはクイレルに

対するものか。思い当たる事が多すぎて何とも言えませんね。ただ、申し上げるならば、校長に対しては決して寛容にはなれません。あれが脅迫ではないとしても、子供の心を惑わし、自らの思うままに誘う事は――」

「そうやって子供である事を反感の理由にしてはならないよ。子供で在ろうと、大人であろうと、それ一つはそれ一つの生命であり精神だからね。怒りを覚えるなら、人の意思を弄ぶことに怒りなさい。子供とは小さな大人ではないし、大人とは大きくなった子供でもない。どちらも変わらない、人だよ」

本質を違えることは周りも自らも傷付ける。ハロウインの事件でヘルマンに諭されたことだった。葬送の刃、慈悲の刃。最初期の狩道具に伝わる、狩りの元来の目的は葬送である。これを忘れた者は新たな惨劇を生む。

「はい。心します。ですが、やはり教育者ぶった人間がその教え子を弄ぶ様は不愉快と言いますか、怖いと言いますか……何とも冒瀆的であると」

「そうだね。ヤーナムは復興してから150年間、幾人も子供をホグワーツに送ったし、そのいずれもが優秀な生徒として卒業してきた。彼らから聞くダンブルドア氏を考えると、世で言われる博愛や高潔な精神を持つ人物とは違う者なんだよ。

彼は強大だからこそ自己完結していて、他者を諦めている。俺は寛容という言葉を、自分とは相容れず、自分には理解し得ず、自分にとって利益も興味も無いものに対して、価値を見出そうとする意思だと思っている。彼の考える寛容とはどういうものなのかは分からないけれど、彼の在り方は俺にとっての寛容とは言えないんじゃないかな。マリアや世間一般にとってどうかは分からないけれど。

まあ、校長がどうあれ、俺が子供達をホグワーツに送る意味を考えて、学生生活を過ごしてほしい。単に勉強だけなら、ビルゲンワースで学んだ方がよっぽど高度で実用的で経済的だしね。実際、大体のヤーナムの子はホグワーツからの入学許可証を無視してビルゲンワースで学んでるわけだし。

とにかく、俺はマリアが無事で居てくれて嬉しいし、君が狩りに酔っていない様で安心したよ。狩人は周りのヒトから恐れられる。ちゃんと狩人を分かってくれる友人も居て、その友人の為に武器を振るった。その結果もちゃんと受け止めた様で結構。後の事は親として、ヤーナムの一応の長として、俺の仕事だ。

こちらの立場を端的に言えば、学内にテロリストが居て、それが獣化した。ちようどそこに居たマリアが、狩人の義務を果たしたってだけだからね。これを魔法省や学校にあれこれと言われるのは非常に腹が立つ。けれど、こればかりは武器を振るえばどうこうとなる話でもないからね。

だからマリアはみんなと来期の準備をしていなさい。特に変身術が苦手って事はみんなからよく聞いているよ」

「お父様までそれを仰せですか……」

お父様にしても、ポッターにしても、勉学の出来を親に叱られることもなかったのだろう。

葉巻の匂いの着いた指で、頭を撫でられた。お父様の事を知って、その匂いがより愛おしく感じた。

狩装束

「ロックハート、ねえ」

「あたしもロックハート」

「俺もロックハートだ」

「僕もですが……ホグワーツじゃこれが普通なんですか？」

ボーン家の居宅たる聖堂の応接間に集まる狩人達。7年生になるデイルクお兄様、3年生になるイングリットお姉様とドロテア、新入生のケント。

「そんなわけないだろ。最下級生と最上級生が同じ教科書を用いる事などありえないが、防衛術に於いては全て同じロックハートの著作。新任の教諭は頭おかしいんじゃないですかね」

普段の皮肉も交えず、6年生になるヘルマンが眼鏡を拭きながら嘆息した。

「ごうしましょう。同じ学年のイングリットとドロテアの分だけ買って、後はみんなで回し読み。図書館で借りて済まそうかとも思いましたが、他の生徒も同じ事を考えているでしょうから」

「それでいい。ろくでもない販促活動の片棒を担がされるのはごめん
だ」

「それにしても教科書なのか、これ」

図書館の新刊リストに載っていたのは目にしたが、書名にしても異様な複本購入数にしても、学術書とは思えない。

「普通の通俗小説ですよ。一時期ドロテアに読ませられましたが、どうにも細部で矛盾があるというか、現実性がない。なのに一部ではやたらに凝った描写があつて、いかにも『ここで泣け』『ここで笑え』と作者の心情が伝えられてくるのがうざったかったです」

「貴公、それを理解する程には読んだのか……」

「読まなきや五月蠅いですから。いいかいドロテア、本を薦めるのはいいが、それを読んだ人の感想が自分と同じじゃなきやむくれるというのはね、思想の強制だよ」

お兄様がヘルマンの言葉に呆れながら、クラッカーを掴まむ。先日

お母様がドロテアに渡したラズベリーによつて作られたジャムとクリームチーズがたっぷり乗せられている。

「ヘルマン、お黙りなさい」

お姉様はさらに悪態をつこうとするヘルマンの頭を扇子で叩いた。ヤマムラ家から「倅が今年からお世話になりますので」とのことで贈られたものだ。夜明けの後、あの悪夢に囚われていたヤマムラを追ってきたその弟がそのまま根付いた。あちらでは獣をオニと呼び、ヤマムラの一族もまた獣狩りを継ぐ者であつたらしい。

お父様によると、当時歪な欧化を進めていた日本の風習に四苦八苦しながらも、カインハースト城の舞踏場で歓待したという記憶があるらしい。アンナリーゼ女王の「遠き異邦からの客人だ。礼を尽くせ」との言葉と、鉄面は脱がぬままに日本の民族衣装を着ているという素描が残っている。

床に触れる程に大きく垂れる袖を持つそれは、フリソデと言うらしい。狩装束とは異なり、ジュバンやらソヨケやらとよく分からない物を纏う必要があるとのことだったが、カインハーストの書庫にはそうした作法の指南書も収められていた。どの様に流れ着いたかは知らないが、千景同様に日本から伝来したものだろう。

一年に数回はカインハースト城にて拝謁する機会があるが、アンナリーゼ女王のご尊顔を拝見した事は無い。お父様曰く「語彙力失う程の超絶美人」らしい。それを聞いた夜は寝所がやかましかった。

「姫様……これが英才の名高きヘルマンですか？」

「ああ、学校に行けばもつと頭のおかしいヘルマンが見られるぞ。楽しみにしておけ」

「なんだい、マリアはもう先輩風をふかすのかい。それを言うなら学校に行くとマリア姫のもつとガキっぽいところが見られるんだ。楽しみにしているといい」

「黙れ。いいからドロテアの作った菓子を摘まんでいろ。そして感想を言え」

「昨日も食べたよ。もう少しベリーの食感を残した方が美味しかった」

「……貴公は本当に童貞を貫くつもりなのか？ いや、貫けないから童貞なのか」

「お兄様もお黙りなさいな」

イングリットお姉様は柔和な微笑みを湛えているが、その目は笑っていない。ドロテアの友人として、その乙女心が蔑ろにされているのは気に食わないのだろう。

「Shinoburedo ironi idenikeri……」

ケントがぼそり、と何事かを呟いた。

「ん？ 日本語か？」

「ワカ、というものです。隠しているつもりだけれど、顔に出てしまう恋心の強さを表した詩です」

「隠しているのか、あれは」

「さあ、僕は11歳なので分かりませんね。16歳の恋心なんて」

「ドロテアは13だ」

「……姫様、日本の少女漫画でも取り寄せましょうか」

「日本語は読めん」

ケントが嘆息したので、その頭を扇子で弾いた。

「馬鹿にされた気がする」

「お戯れを」

クラッカーの最後の一つを食べ終え、それぞれ狩装束から着替えた後にロンドンに向かうこととなった。ケントはダイアゴン横丁に行った事は無いとのこと、横丁の灯りに直行することは出来なかった。お兄様はポロシャツにデニムパンツで、飾り気のない服装が逆に顔立ちと精悍な体を強調している。お姉様はカシユクルの施されたチュニックとフレアスカート。ドロテアはオフショルダーのブラウスとスキニーパンツ、ヘルマンは一々考えるのが面倒くさいと、ホグワーツ制服のパンツとシャツだった。

ケントは麻のキモノとセツタとかいうサンダルで、薄い布を帯で締めただけの恰好はどうにも防御力が薄そうに感じる。ハカマはどうしたと訊けば「格式ばったところでなければ、別に袴はなくてもいいんです。不浄の時面倒くさいですし」とのことだった。

お兄様がケントに投げた「下着はフンドシとやらか」との言葉に「今時和服着てる日本人でもそれ穿いてる人少ないですよ」と返す様にはどうにも敬意が感じられない。

「どうにかなんないのそのセンス」

「僕を否定するのなら同じく制服のマリアをも否定することになるぞ」

「どっちも否定してんの」

かたや制服のパンツとシャツ、かたや制服のスカートとシャツ。

ドロテアからしてみれば、せつかく着飾ってきたのに当のヘルマンは普段と同じ格好な事が気に食わないのだろう。

彼女の感情はともかくとして言っている事はもつともだが、面倒なものは面倒なので仕方がない。お姉様にしてもドロテアにしても、寮生活なのだから服をそんなに持っていても着る機会は無い上に、未だ成長期なのだから無駄になるだけだ。

「服なんて礼服と狩装束があれば十分じゃないか。僕らは寮生活なんだからあれこれと着飾る機会もないし、君にしたってイングリットにしたって、これから背が伸びるのにそんなに服を買ってどうするんだ」

ヘルマンも全く同じ考えだったらしい。

「小さくなったらマリアにあげるし」

「君の嗜好はマリアと大分違うだろ。そんなに肌を出した服をマリアが着ているのは想像できない。というか君も歳に見合った服を着なよ。それと化粧だって別に要らないだろ。童顔のローティーンが色気なんて出しても、はいはい背伸びしてて可愛いねくらいにしか思えないんだが」

「後半はともかく、概ねヘルマンに同じ意見だな。あとヘルマンが化粧に気付いたのは少し驚いた」

「こんな暑い日なんだ。無理に化粧しても肌が荒れるだろ。日焼け止めくらいにしておきなよ。リップグロスもツヤというよりテカリにしか見えない。あと、香水は無難にシトラスかハーバルにしたら？甘ったるい匂いで頭が茹りそうだ」

「香りの種類まで指摘するとかもう気持ち悪いな」

「別に僕はファッションが出来ないわけじゃない。面倒くさいだけだ」

「ああ、センスを馬鹿にされたから腹を立ててるのか」

ヘルマンの情け容赦無いサイテーな評にドロテアは「もうヤダ、帰る」と涙目になり始めた。

感想が欲しければそう言えばいいところを、無駄に煽るドロテアも悪い。イングリットお姉様もドロテアをあやししながら若干面倒そうにしている。ヘルマンにもじつとりとした視線を向けていたが。

「じゃ、ヘルマンがドロテア先輩に服から化粧品まで選んで贈るって事で。自分で選んだものなら文句もつけないでしょう。聞いたところじゃ、ヘルマンの拘りはダイアゴン横丁じゃ揃わないでしょうし、今度ヘルマンがドロテア先輩を連れてロンドン巡りでもすればいいでしょう。これでみんな幸せじゃないですか」

「……それでいいな？ ドロテア」

お兄様はドロテアが目尻を拭いながら肯くのを見ながら、ケントの手管に舌を巻いた。11歳とは思えない女の転がし方である。

「ヘルマンは後で聖杯に付き合え。俺の憂き晴らしだ」

「ええ……？ 僕が悪いんですかこれ」

「貴公も悪い」

†

キングスクロス駅の灯りはケントも契約済みだった。数年前にヒースロー空港から日本へ向かうついでに契約していたという。そこから大英博物館、セント・ポール大聖堂を観光がたらランタンに火を灯した後、チャリング・クロスに向かう。

そこには廃墟に偽装された漏れ鍋という酒場があり、その裏手にダイアゴン横丁の入口がある。

「はー、成程。魔術で偽装されてるんですね」

「ホグワーツやヤーナムとは異なるがな」

「秘匿と認識阻害とで術式が異なるんでしょうね。今度メンシスカビルゲンワースの書庫を漁ってみましょうか。青い秘薬と透明マント

の考察とか、いくらでも先行研究あるでしょうし」

「日本にも隠形術という認識阻害の魔術を題材にした童話がありますよ。ある聖職者が悪霊に祟られて、それから逃れるために隠形術の術式を体書き込んでいくんですけど、耳だけに書き忘れて、悪霊は聖職者の耳を引きちぎって帰っていくという話です」

「んん？ その術はびつしりと書き込まれていたのだろうか。字間は阻害出来たのだろうか。いや、それよりも中空に耳だけが浮かんでいたのであればそこに頭があると推測できそうなものだが」

「そこに気が付かないという点が隠形術の効果の証左では？ しかし術式の範囲指定方法も気になりますね。頭部、腕部といった構築は出来なかったんでしょうか。あるいは細かく指定することで効力を高めたのか……」

「東洋の神秘だな」
「ですね」

童話に真剣な考察を持ち込む辺りは狩人らしいと言うべきか、男たちが面倒くさいと言うべきか。

店主に会釈をし、裏口に抜ける。その先にあるものは、魔法族にも煉瓦の壁に囲まれた内庭にしか見えない。

「この傷から3つ上、そこから右に2つ。ここに魔力を通すと、そら」
お兄様が指先で煉瓦を小突くと、たちまちに壁が動き出し、拱門と
なった。

横丁は狭いために人口密度は非常に高く、キングスクロス駅の混雑もかくや、といった様である。

「さあ進め。急がないと壁に閉じ込められる」

「これって物理的に壊したらどうなるんでしょう」

「するなよ？ 試したら魔法省が殺到するだろうな。ああ、灯りはすぐその井戸の横にある」

ケントは使者に指を甘く噛まれながら、ランタンに契約の火を灯した。

「さて、来たはいいが、そもそもケントは何が必要なんだ？ 鍋や秤ならヤーナムで揃うはずだが」

「制服も工房で誂えましたし、後は竜の革手袋と教科書ですね。別に竜でなくともいいとは書いてありましたけど、かといって豚や獣皮というわけにはいかないでしょうし」

「教科書は私の物を使うか？ 書き込みはしてあるが、別に汚くはないはずだ」

教科書にはヤーナムの研究資料との相違や、教諭が試験に出すと言っていたところを強調している。特に薬学についてはどうにもヤーナムに蓄積された知識の方が優れている様に思える。

教科書通りになっているハーマイオニーに比べ、狩人達の造るものの方が高い薬効を持つのはそもそも教科書の内容が十全ではないためだ。口に出すのも憚られる様な人体実験が繰り返されていたのであるから、19世紀以前の魔法薬に関しては一般に流通している知識よりも当然に高次なものとなる。

あるいは、教科書の著者が真実を秘匿し、敢えて曖昧な記述としているのかもしれない。武器輸出に於けるモンキーモデルと言ったところか。それでいてスネイプ教授の手法は教科書通りのそれと同等以上のものであるのだから意味が分からない。

医療の街ヤーナムには新薬に関しても光るものがある。体制崩壊後も正気を残していた僅かばかりの本当の医療者達は、真つ当な知識を継承し、今もなお医療者の志を継いでいる。幾つかの幽霊会社を挟んだ上で、魔法界・非魔法界を問わず医薬品を流通させていた。

神秘に近いところに居た医療者達こそ狂気と獣性に吞まれたのであるから、末端構成員や真に医療者たらんとした者は正気を残していた。アデーラ女王も嫉妬に狂いこそすれ、人を救おうとする意志自体は持っていたのだ。

「そういうわけにはいきませんよ。勉強を教えていただく事はあるでしょうけど、姫様だって未だ1年生と同じ教科書のはずでしょう」

「そうか。なら、手袋を買ってから書店に行くのでしょうか」

「いや、手袋なら竜皮だけ買ってヤーナムの縫製所に仕立てさせた方がいい。ダイアゴン横丁の連中はホグワーツの学生だと足元を見た商売をしてくるからな。小さい手だから補正料がかかるだの、慣れて

いないから予備に2、3双用意した方がいいだの、長く使うことになるから手入れ用品が必要だのと。確かに低級で粗雑なものでも非魔法族の革手袋よりマシだがな」

英国に住まう魔法族は少なく、そしてその学校とはホグワーツだけである。その入学準備となると、小さいながらも確実な商機であり、要するに搾り取れるところから搾れというわけである。

「ですねー。じゃあ赤龍亭でなんか摘まもつか」

「竜皮を買いに何故飲食店に？」

「赤龍亭は竜料理の専門店なの。手袋を作る程度の皮なら分けてもらええると思うわ。本当かどうかは知らないけれど、アーサー王存命の頃に創業したパブよ」

「ハツの串焼き、翼膜のフライとチップス、肩ロースのサンド辺りが定番か。引率者として悪いが、俺はエールも頼むぞ。後は……そうだな、運が良ければキドニーパイや白子のマリネもあるぞ」

「白子？」

「宰丸の事だ」

お兄様がヘルマンの股間の前でチョコキチョコキと指を動かしたので、ヘルマンは大層うんざりした顔をしてお兄様の腹を殴った。

「自分のでやれよ」

「流石に悪かったと思った。赦せ」

「まあ一発殴ったからそれで。ヤーナムじゃ強壮剤の原料として輸入するばかりで、食品としてはあまり流通していないからね。生食は新鮮なうちにしか出来ないから確かに珍しいけれど、男性としてはこう……分かるだろ？」

「共食いか？ そんな事を言ったら私はエッグベネディクトが食べられなくなるぞ」

「マリア、慎みを覚えなさい」

ティータイムのために店は混雑していた。テラス席なら案内出来ると言う店員に、デイルクお兄様は「レディには日差しが強すぎる」と返した。特に肩が剥き出しのドロテアには辛いだろう。イングリットお姉様が微笑んで周りを見渡すと、青年達が「どうぞお使いください

い」と席を譲った。美人は得である。

ティータイムではあるが、全員が冷たい飲み物を注文した。米国の習慣をも吸収しているヤーナムにはアイスティーがあるが、ロンドンにそんなものはない。この暑さの中で、ミルクティーを飲む気にはなれなかった。

「おお、ハツいいですねこれ。噛み応えのある食感も香りも独特の野性がありますね」

「だろう？ モツは臭いという者もいるが、ちゃんと血抜きされていないものを食べたのだろうな」

「あるいはもう腐敗が始まっていたのかもかもしれませんね。魔法界じゃ食品衛生という概念がありませんし」

「ああ、『英国魔法界の食卓——如何にして我らはマズメシを食べる様になったか』だったか」

「産業革命で都市人口が増えて、魔術を秘匿しなければならなくなつたから。空輸も出来ない、冷却魔術も使えないとなると、結局非魔法族の様にとことん焼く、煮る、揚げる、酢を掛けるしか食中毒を防ぐ方法はないと」

「で、検知不可能拡大呪文とルーンの組み合わせで冷凍庫が出来る様になる頃には、もう英国魔法界の食事情は手遅れな状況まで衰退した、か」

注文した翼膜も絶妙な揚げ加減で、外はパリパリと、中はしつとりと肉の旨味が閉じ込められていた。ポテトフライには僅かにアンチヨビソースが掛けられていた。散らされたパセリは油に負けない清涼な香気をもたらした。

舌を火傷しない様、合間にトマトジュースを口に含むが、これもまた絶品だった。トマトにありがちなえぐみのある臭いは無く、それでいて薄めたわけでもない濃厚さ。混ぜられたウスターソースと胡椒が深みのある味わいを作り出している。

「私もここは初めてですが、とても満足です。もっと早く教えて頂きたかった」

「だってマリア、いつもお菓子ばかりじゃない。アイスクリーム

「パーラーで特大のパフェを3つも頼んだこともあったわね」

「私とて甘味だけを食べて生きているわけでもありませんし」

「じゃあ人参嫌いも治しましょうね。この前もガルニチュールの人参を嫌そうに食べていたでしょう。お母様が嘆いていたわ」

「グラッセはダメです。味と香りがかけ離れているものはダメです。人参の香り、バターの脂、砂糖の甘み……獣憑きと血に酔った狩人が聖杯最奥まで同時に乱入してきた様なものです」

「アールグレイは飲めるのに」

「言われてみれば確かに。自分でも不思議ですね」

「結局姫様は人参が嫌いというだけの話じゃないですか」

「いや、マヨネーズがあれば生でも齧るぞ」

「んじやあ、甘い香りなのに味が違うってのが嫌なんじやない？」

「キャラメルフレーバーのお茶とか嫌いでしょう」

「かもしれないな。ドロテアは賢いな」

「でしょ」

店員に会計を頼むと、頼んでいた皮だけではなく、肉も渡された。美味しい美味いと騒いでいたのが聞こえたらしく、それに気を良くした店長がおまけとして付けたとのことだった。店内であったとはいえず、美男美女が味を褒めれば宣伝にはなるだろう。あるいは本当に店主が喜んだか。

「さて、次は書店だが……どうした、何か気になるのか？」

「ディルク様、あれは？」

「ノクターン横丁だ。雰囲気から分かる通り、呪具、非合法の薬品……金さえ払えばありとあらゆるものが手に入る場所だ。血の酒が店頭と並んでいるのを見た時は笑ったぞ。200年物だろうな」

「最近の流行は死喰い人に纏わる品らしいですよ。蒐集家が取引を持ち掛けられたそうです」

蒐集家は現代ビルゲンワースの一部門であり、ヤーナムから散逸した狂気の犠牲となった者の遺体やその一部を回収し、埋葬する。魔術師の遺骸はその呪的性質から魔術師に触媒として用いられるが、獣の病の呼び水ともなりかねない。

「どうだケント、社会見学もしていくか？」

「いえ、それはまたの機会に。祖先の血走った目玉とご対面……とい
うのは、食事の直後には重すぎます」

あれこれと見て回りながら辿り着いたフロアリッシュ・アンド・ブ
ロツツ書店。その前には大きな荷車が店の前に止められており、そこ
から幾つもの本が店内に飛び込んでいた。目で追うと、例のロツク
ハートの教科書とやらだった。

「すいませーん、今日営業してますか？」

「どうぞー！ いらっしやい！」

ドロテアの呼びかけに対して、店の奥からくぐもった応答が聞こえ
た。陳列をしている様ではあるが、ホグワーツ生徒の全員が購入する
と考えても、あまりにも大仰に過ぎる。

「何だろう」

「ああ、これじゃない？」

ドロテアが壁に掲示されたポスターを顎でしゃくる。そこに写る
整った容姿の男性がウインクを投げかけて来た。「ギルデロイ・ロツ
クハート サイン会 7月31日 水曜日 12:30～16:30」
と書かれている。

「防衛術の教員が女性だとすれば、心酔もするわけだ」

「んー。御当主様のがイケてるでしょ」

「そうね……お父様の方が見た目は若いけれど貫禄があるわ」

「ロツクハートは27歳らしいですよ」

「父上は目つきが違うからな」

お父様はあの悪夢を幾度も繰り返し、乗り越えた者である。掃いて
捨てる程に居るただの美丈夫とは纏う空気が違う。ぼんやりしてい
る様で、その目の光は複雑な色を見せる。

「著者がどうあれ、本を買いに来たんだ。さっさと買って帰ろう。皮
の加工も工房に頼まなければならぬんだから」

「皮革加工設備なんてありましたっけ」

「連中は大抵「あるぞ」って返してくるからあるだろう」

「へムウィックの工房に普通にあるよ」

「あるのか」

「今じゃ農地と浄水場だけど、ヤーナムが医療の街になる前は馬借で成り立ってみたいだし。馬の皮には困らなかつたんでしょ。なめしにはたつぷりの水が必要だから、ちようどいい立地だしね」

ドロテアの説明に耳を傾けながら、教科書を手に取る。

ロックハートの著作については全員が使い回すという理由から、全員が均等に出そうとしたが、お兄様が全額を負担することとなった。

先程の食事代も引率だからとお兄様が支払っていた。これ以上甘えるわけにはと反対したが、お兄様が固辞したので、来年はヘルマンが同じ事をするというところで落ち着いた。

「別にこの程度の金額で貸しにするつもりもないんだがな。それぞれ狩人として稼いでいるだろう？ 借りと感じる程ではないはずだが」

「まあ、大半は親に預けていますが、新型車を即金で買える程度は自由にありますよ。ですがデイルク、友人や先輩・後輩といった繋がりでの金のやり取りを曖昧にするのはどうかと思いますよ」

「死んだらその金も使えないんだ。素寒貧になろうと俺は貴公らとの時間を買う方がいい。俺は今年が学生生活最後だからな」

「そうやってハードルを上げないでくださいよ。来年僕が財布に成るのは御免です。」

あ、最後で思い出しました。マリアの箒はどうします？ デイルクとクイディッチをやりたいたか言っていたでしょう」

「そうだったな。箒も買っていくか？」

「お兄様達は何を使っているのです？」

「工房製だな」

「では私もそうしましょう。もつとも、チームに入れるかどうかは分かりませんが。ジェラルドのシーカーが空きますが、補欠は何人もいいでしょう。私にシーカーの才能があるかどうかは分かりませんし」

「キーパーも欠員だが……」

「箒の扱いはマリア程度なら十分だけど、試合終了までゴール前に張り付くなんて、マリア向いてないよね。ヘルマンみたいにビーターで仮登録しておいたら？ ヘルマンはあんまりやる気ないから交代で

出たらどーお？」

「そうだな。学期が始まったらマークスに話しておこう」

ビーターは鉄球を殴りつけるのだったか。飛翔速度と大きさからするに、棍棒の方が砕けそうなものだが、あれもまた何かの魔術的な保護がされているのだろう。

「ディルク様、クイディッチウエアの狩装束って無いんですか？」

「無いな。毎年ヤーナムからの新入生が出るわけでもないし、規則違反になるからな。耐衝撃機能なんてあれば、ブラッジャーを回避する必要もなくなるだろう」

「箒の性能差は認められているのにおかしな話ですね」

「詳しくは知らないが……箒に乗って行こう競技なのだから、箒の性能を追求することについては本質に適しているということなのだろう。ちなみに、クイディッチの本質は狩りだ。スニジェットだったか、幻獣を追い回して狩るのが源流で、競技化されたものがクイディッチだ」

「非魔法族で言う狩猟が貴族の遊びで狐狩りに変わった様なものですか」

「かもな。スニッチとスニジェットはほぼ同じ大きさと聞くが、ならば食材としてはあまりにも費用対効果に欠ける。とすると、何物にも代えがたい美味でなければ、ただ面白半分に狩っていたのではないかと思う」

クイディッチ用品店の前を通りがかる。ニンバス社の最新モデルが展示されており、展示台には少年達がヤモリの様に張り付いていた。お兄様は性能表を一瞥し、そのまま灯りの方へ歩を進めた。

「選抜選手の割に随分と冷めていらっしやるのではありませんか？」

「ジェラルドに誘われただけだからな。当のジェラルドも当時のキャプテンに頼み込まれて仕方なく、という理由だ。で、俺がヘルマンを誘い、ドロテアとイングリットも自然と入部して今に至る。こうして後輩たちと飛ぶのは楽しいが、クイディッチ自体には特別な想いは無いな。マリアもするというなら楽しみではあるが」

「じゃあ僕は来年まで皆様を眺めてるとします」

「ふむ……マーカス次第だな」

空飛ぶフオード・アングリア

休みの間にあったことと言えばグリーングラス邸を訪れたことくらいで、それ以外は聖杯での鍛錬を繰り返したり、アンナリーゼ女王に拝謁したり、ビルゲンワースの書庫整理を手伝ったりと変わらぬ日常だった。

ハーマイオニーの都合が合えば、魔法史の宿題として課された、隠蔽された魔術の痕跡について共同研究をするという話があった。グリーングラス邸に近いコヴェントリーで、ゴダイヴァ夫人の街全体に放った魅了術を考察してみるという計画をしていたが、生憎ハーマイオニーはロンドンで次期の準備をしなければならないとのことで、単身の訪問となった。

ダフネの妹、アストリアは天真爛漫だった。学校で見せる姿と異なり、姉が静かな月であれば妹は太陽といった具合だった。姉が学校に行くようになり退屈であろうと思えば、以前から絵を趣味にしているので然程でもないとのことだった。キャンバスを見せてもらうと、邸内から眺める朝方の庭が描かれていた。絵画に造詣があるわけではないが、10歳の描く画とは思えない美しさだった。朝靄に柔らかな霞む陽光や、それに照らされる薔薇の瑞々しさが静的でありながらも力強さを感じさせる。アストリアを言葉足らずに褒めると、照れながらも嬉しそうに頷いた。

供されたサンドウィッチは邸内の菜園で獲れたキュウリを用いているといい、香気に富んでいた。それを片手に交わす茶飲み話では、マルフォイがシーカーになると息巻いていることや、来期の防衛術教諭は校長の強い意向でロックハートになるらしいと知った。グリーングラス家とマルフォイ家の繋がりを感ずるが、それ以上に職権を振りかざし、教科書とも言えぬ自著をこれだけ購入させるとは恥知らずもいいところだと呆れる。

登校日の空模様は、小雨の降っていたヤーナムとは異なり、ロンドンにはよく晴れていた。

キングスクロス駅までケントと同行し、プラットフォームまで送っ

た。ケントは別段不安がる様子もなく、去年の自分がそうした様に車口から離れた端の席をとり、のんびりと水筒から茶を啜っていた。

ボーン家の応接間に戻ると、お兄様はソファでごろりと寝ている。お姉様とドロテアはファッション雑誌のネイルケア特集のページを開いていた。ヘルマンは離れたところで浮遊術を使ってトランプタワーを作っている。

「そういえばヘルマン、ドロテアとの外出はどうだった」

トランプタワーが崩れたところで、こっそりとヘルマンに聞くと、心底面倒そうな顔をした。

「なんでそれを君に言う必要がある」

「そう邪険にするな。ドロテアの機嫌が最近良いから、悪いものじゃなかったんだらう?」

「……まあね」

「なら何故渋い顔をしているんだ」

「女性との買い物は面倒だなと改めて思っただけさ。「ねえ、これこれどっちがいい?」なんて、既に自分の中で答えが出てるからね」

「ああ、ドロテアはそういうところがあるな。で、なんて答えたんだ」

「無視して僕が選んだのを渡した」

「で?」

「何故か機嫌が良くなった」

「成程」

「理由が分かるのかい?」

「これでも乙女の端くれだからな」

「教えてくれないか」

「ダメだ。それはドロテアに悪いからな」

おそらくドロテアが提示したものは、どちらともヘルマンが指摘した様な年相応のものではなかったのだろう。ヘルマンが本当に面倒に感じているのであれば、どちらかを雑に選んでしまえばいい。そうではなかったからこそ、機嫌が良くなったのだろう。

元よりケントが画策した逢引は、ヘルマンがドロテアの為に選ぶという事が目的であり、その結果がドロテアの好みであるかどうかは関

係がない。ヘルマンがドロテアの為にあれこれと考える事が大切なのだ。

「それで？ どこに行ったんだ」

「ピカデリーだよ。その後中華街に行っておしまいだ」

「ほう。いずれ私が恋愛に興味を持ったら詳しく聞かせてくれ」

「一応訂正しておくが、恋愛じゃない。ただの買い物だ。それで、今は興味が無いのかい？」

「他人のを眺めている方が面白いからな。それに4寮女子交流会ではロクな話を聞かない。獅子寮は先輩と付き合っているのに子供だの、驚寮は自慢ばかりだのと。ま、11歳の恋バナなんて甘酸っぱさも薄味というものだろう。」

もつとも、そのカレシの資格や顔で自分の価値を誇示する者もいるし、寮内の中心人物や上位の者が狙っている男に手を出さない様にと、情報収集の意味もある。恋愛に興味が無くとも、恋愛の話は聞いていて損は無いな」

「全く、女子は怖いな」

「そうだな、同じ歳の男子より2つか3つは上と思って接するといい」

「ドロテアがそうとは思えないんだが」

「貴公が甘やかしてきたツケだろう？」

いま一つドロテアの感情が恋慕なのか親愛なのか分からないが、いずれにしてもヘルマンを好ましく思っているのは間違いない。先程本人が否定した通りに、ヘルマンの抱くものは手のかかる妹に対する様なものに見えるが。

「それより、ヴォルデモート卿の話は何か進展はあったかい？ ヴ卿の生存だとか、ホグワーツ教員が死亡したとか、全く報じられていない。何か御当主から伺っていないかな」

「ヴ卿……お父様に話したらそれきりだ。確かにこれが報道されていないのはおかしいな。ウィーズリーが学内に愉快的冒険を喧伝していたし、それにまつわる校長の所業は貴公が暴いた。親に話す生徒がいてもおかしくはないのだが」

「認知バイアスかもしれないな。そんな事が学校で起きるはずがない

という」

「あるいはヴ卿の生存……と言っているか分からないが、未だなお消滅していなかったというのは、大戦期を知る人間には認めたくない事実だろうしな」

ヤーナムとて大戦の影響がなかったわけではないが、繋がりも薄かったと言われる。

ボーン家は上位者として傲慢に人の世の流れを乱す事があってはならず、かといって仇成す者には容赦せず。その在り方から、ヤーナムは魔法族にとって得体の知れない武装集団として見られる様になった。結果、ヤーナムはグリンデルバルドやヴォルデモートといった暴徒にも与せず、かといって積極的に魔法省に与することも無かった。ただ獣が生まれそうな地に赴き、獣を狩り、そしてその骸を持ち去った。

多くの者は獣が何たるかを理解せず、獣の病の伝承が絶えて久しい今では、魔法省はヤーナムを害獣駆除業者として扱っている節がある。

「魔法省にしても、ダンブルドアにしても、それぞれの思惑が何であれ、僕らは備えるだけだ。人の世がより善くなる事を願うばかりだよ」

「全くだ。学校にしても、今年は何も無いといいんだが」

「去年が異常なだけだ……とは言い切れないな。僕の5年間の経験だと、ホグワーツは学徒達が卑劣に呪いを掛け合う蠱毒だが、死が関わるどころではなかった。だが、クイレルが昨年の間は何を仕込んでいるかは分からない。くれぐれも油断は無い様にするんだ」

「校長にも睨まれているしな」

「それに……校長がポッターに入れ込んでいる以上、彼がいる限りは昨年と同じ事が起きないとも限らない。グレンジジャーを言葉で縛った様に、より狡猾で、より残酷な手段を以ってね」

それからしばらくして、ずっと寝続けていたお兄様を揺すって起こし、狩人の工房に向かう。今や忘れられた古工房は巨大な結節点となっており、非魔法族に於ける立体駐車場の様に墓石が宙で廻ってい

る。その中からホグワーツの墓石を呼び出し、プラットフォームに飛んだ。

「マリア、こつち。こつちに隠れて」

「ん？」

「新入生しか居ないはずなのに、あたしたちが居たらおかしいでしょ」
「なるほど。それより、酷いじゃないか。去年はお兄様とお姉様しか来てくれなかったじゃないか」

「ああ、それは兄と姉が居れば十分だって2人が言うから。ジエラルド先輩は聖歌隊……本当に歌う方の聖歌隊に歌唱指導で呼ばれてたし、ヘルマンは面倒だって言ってたし」

「面倒とは言つてない。その時は、今忙しいって返したんだ」

「何が忙しかったんだ」

「ドロテアに読めと言われたロックハートが何冊も溜まつていてね」

この男、嫌いなものはずると先延ばしにする性格なのかもしれない。

携帯ランタンの光を落とす、ドロテアに貰った飴を舐めていると、暗闇から大きな人影とそれに続く列が近づくのが見えた。こつそりと近づくとケントも気付いた様で、列を離れて来た。

「どうだった、ホグワーツ特急は」

「尻と背中が痛いです。車内販売は甘い物ばかりで、センベイとかスコンブが欲しかったですね。あと、車って空を飛ぶものなんですね」
「何の事だ？」

「車外に見えたんですよ。古い車が空を飛ぶ……走る？ のを」

「俺も知らない。まあいい、その先に灯りがある。こうして後輩を迎える時にしか使わないが、一応契約しておけ」

ケントは軽く頷くと歩いて行った。

「空飛ぶ車か……戦車は要らないけどさ、装甲車とか飛ばせないかなあ。火器にもNBC兵器にも防御力のある飛行手段とか、いいよね」

ドロテアが夢見がちに言う。魔法界での飛行は箒、絨毯といった道具、他には天馬や竜といった魔法生物を用いる。天馬に引かせる馬車

はあるが、文字通り馬力でしかないために装甲化は不可能である。こうした事情から道具、生物共に動力源が曝露されているため、飛行は非常に脆弱な移動手段となる。

「確かに箒に保護を付与するよりは安全だろうな」

お兄様は顎を撫ぜながらドロテアに応えた。特に思考を巡らせているわけではなく、伸び始めた髭の感覚が気になるのだろう。

「最高級の競技用箒なら優れた魔術防御はありますが、逆に物理防御なんて紙みたいなものですね。それだけに、ポッターの乗る箒に干渉したクイレル、あるいはそれに憑依していたヴ卿の能力が窺えま
す」

「いや、恐るべきは寮監だ。箒の制御を上書きしたクイレルの術式をさらに書き換えようとしていたという事だからな。クイレルには準備期間があつただろうが、寮監はそんなもの想定の様がない。既知の反対呪文もない術式を初見で解析して再構築する？ 馬鹿げているにも程がある。

普段は「教科書に書かれている手順すら理解し得ぬとは。ホグワーツとは忌々しい球遊びの訓練場かね？ グリフィンドール5点減点だ」等と宣っている割に、実戦も可能という事だぞ」

「ディルク先輩似てますね」

「ミス・グリム、君に発言を許可した覚えはないのだが」

お兄様が眉間に皺を寄せながら粘り気のある抑揚でスネイプ教授を真似ると、イングリットお姉様が口元を抑えて笑った。

「言葉も口調も、ドロテアを叱る時そっくりね」

「今年は何度言われるかなあ」

「ミス・グリム。君には学ぶという言葉の綴りから教えなくてはならないのかね？ これ以上繰り返す様なら、実に……実に不可思議なことながら、かぼちやジュースにちよつとした魔法薬が混ざっていることもあるかもしれませんな」

ドロテアは嘔き出した。「それ見てたんですか？」と笑いながら言葉をつぐが、笑い事ではなく寮監の前では真面目に黙っているべきだろう。

「何の話ですか？」

ケントはもう戻ってきていた。

「空飛ぶ車の話だ。もし装甲車を飛行させられたならどうかとな」
「そうですね。見たところ慣性が大分働いてたので、IFVとか戦車みたいな大砲は無理でしょう。撃った瞬間には挽肉じやないですか。ま、そもそもガンシップを強化した方が魔術の秘匿にもなりませんし、火力だって十分でしょう。へりは飛ぶもの、車は走るもの。汎用性は専門性に劣るものですし」

「うわあ。この新入生はロマンがないねー。スーパー・スターデストロイヤーとか憧れない？ おっきい、かたい、つよい！」

「設定はともかく劇中だとクソザコじゃないですか。僕はAウイングですね。一撃離脱戦術、高速戦闘と最もヤーナム的ですよ」

「ヤーナム的というならTIEシリーズじゃないか？ 攻撃偏重、防御皆無、ハイパードライブもない」

「ダース・ベイダー専用機にはシールドもハイパードライブもある。僕としては可変機構を備えていて全く形態が異なるBウイングがヤーナム的だと思う」

珍しくヘルマンが下らない話に加わった。

新入生の列を追いながらミレニアムファルコン量産計画やデス・スターとスーパー・スターデストロイヤーの費用対効果比較等、あれこれと狩人達が意見を交わす。トニトルスを改造すればライトセーバーを作れるか、といった話もあった。トニトルスの弱点は耐久性だが、ライトセーバーなら斬ったところで壊れないのであるから、実用化出来れば変人アーチボルトの汚名は雪がれるだろう。

「ケント、湖は——」

「ええ、姫様から伺っております。イカに気を付けろ、ですよね」
「ならいい。では城で会おう」

ケントが再び新入生の列に加わり、小舟が出航するのを見届ける。灯りを用いて城に向かえば、既に在校生は馬車で入城していたのか、玄関には鞍やペットの籠が詰み上がっていた。

「少し話に夢中になりすぎたか」

「その様ですな」

スネイプ教授が壁際に立っていた。視線を上げず、綴られた羊皮紙に何かを書き込んでいる。

「こんばんは、教授。今年度もよろしくお願いいたします。今年は寮監が登校確認ですか」

「左様。ところで、諸君が最後かね」

「さあ。同郷の者で歓談に耽っておりました故、他の生徒についてはつきりとは」

「何か庇い立てしている様であれば、分かっているかね」

顔を見合わせるが、皆一様に思い当たる者は無い様だった。

「あの、何か？」

「これを見たまえ」

スネイプ教授が法衣の懐から取り出したものは、予言者新聞の夕刊だった。その一面には「空飛ぶフォード・アングリア、訝るマグル」と大きく印字されている。

「ああ、それですか。車が飛んでいたことは存じております。それ以上には何も」

「教授のお考えでは、その車に乗っていた学徒がいると？」

「私達ではありませんわ。乗用車を飛ばしたところで、趣味の悪い遊び以外の何物でもないでしょう。落ち穂を拾う寡婦の前に麦をばら撒いて楽しむ様な下賤な行いはいたしませんわ」

「つまらないものはそれだけで良いものでは在り得ないってのがあたしたちの箴言にありますけど、ただ飛ばしたところで面白みは無いですし、目的もなくて面白そうだからやるなんてトーサク的じゃないですか」

「娯楽で人の世を賑やかすならまだしも、車が飛んだところで何が面白いのか。道化の配る風船の方が余程人に喜ばれましょう」

「確かに僕らも装甲車や戦車を飛ばせないかななどと話してはいましたが、ただの車を飛ばすなんて。手間や危険性に比べて、得られる便益が余りにも釣り合いませんね。真面目に自動車を飛行手段として作るなら、外見は軽飛行機に偽装するか、観測者がそう錯覚する様に

魔術を仕込みます。それらが実装されていたとして、不具合が起こり得る段階でロンドン上空を飛ばすなんて真似、僕らはしませんよ」

それぞれがあれこれと寮監に言葉を放つと、手を挙げて静止された。

「もう結構。それで？ 何故これを知っているのかね」

「ホグワーツ特急の上空に飛行中の車らしきものがありました。その記事に載っている物と同一かは断言できませんが」

実際に見たのはケントであるが、行為者を言っていないだけで嘘はない。家が近い者は鉄道を用いずに直接登校しているが、遠く離れた地から狩人の灯りを用いているというのは説明するにも理解されるにも面倒だというお兄様の考えだろう。

「ふむ。行つてよろしい」

「では歓迎会で」

「吾輩は馬鹿共の登校を待たねばならん」

「そうですか。ではごきげんよう」

「吾輩の機嫌がこれ以上悪くなる前にさっさと行きたまえ」

広間では生徒の多くが未だ着席もしておらず、列車内で顔を合わせなかった者と挨拶を交わしていた。女子生徒であれば他寮にも多少は面識のある者もいるので、軽く手を挙げて応えておく。

蛇寮の席に近付くと、男子の先輩に話しかけられていたダフネが近寄ってきた。

「遅かったじゃない。先輩に口説かれて大変だったんだから」

「慣れたものだろうか？」

「大して話もしてないのに下心で肩に手を回されるなんて。そんな安い女に見られたのは初めて」

ダフネは今すぐにでも服を焼いてしまいたいとでも言いたげに、触られたのであろう肩を見た。

「ご愁傷様だ。美人税などとふざけた事を言うつもりはないが、価値があるだけいいだろう？ 私にはそんな事をしてくる同輩も先輩もいないぞ」

「血塗れ女帝に気易く話しかける人がいると思う？ 後輩でも困った

ら？」

「後輩といえ、ヤーナムから新入生がいる。妙なところはあるが、仲良くしてやってくれ」

「貴女より妙な一年生なんているとは思えないけど」

校長が席に着いたため、生徒もそれにならう。

「マリアだけではなく、俺だってダフネ嬢と話してもいいだろう？

いかがかな、レディ」

「ええ。今年もよろしくお願いいたします」

ダフネの様子を見ていたのだろうお兄様が席を選び、その隣にダフネを座らせた。先程までダフネに絡んでいた先輩はお兄様を睨むが、お兄様は羽虫を払う様に手を振って返した。

「こちらこそ。マリアが土産に頂いた茶はとても良いものだった。感謝する」

「先輩のお気に召した様で何よりです」

程なくして扉は開かれ、副校長を先頭に新入生達が入場した。昨年の通り、新入生は組分け帽子の前に並んでいる。ケントは組分け帽子について親から聞いているとのこと、不安げに周りを見回す新入生をよそに泰然としていた。

組分け帽子が、歌い始める。

「器に合わせて注がれる

大きい器にはどぼどぼと

小さい器にはちびちびと

器を選ぶは君であり

器を作るも君である

どんな形がお好みか

どんな色がお好みか

器に合わせて注がれる

大酒飲みにはとくとくと

下戸の君にはそろそろと

何を注ぐは君次第

どれだけ注ぐも君次第

どんな味がお好みか
どんな香りがお好みか

知ってる君は選ぶといい
知らない君は悩むといい

グリフィンドールは赤色の

熱い勇気を注ぐだろう

レイブンクローは青色の

冷たい智慧を注ぐだろう

ハツフルパフは黄金色

甘い誠意を注ぐだろう

スリザリンは緑色

輝く希望を注ぐだろう

私は老いたソムリエで

被った者の好みを聞いて

悩める者に助言しよう」

帽子が歌い終わると、新入生達は帽子を被るだけという事を理解したのか、希望する寮を思い浮かべている様だ。去年もそうだったが、「スリザリンは嫌だ」と言って憚らない者が多い。蛇寮は入ってしまった、友愛に篤いとされる穴熊寮よりも連帯感がある様に思う。他寮から敵視されているためにそうならざるを得ない部分もあるが。

「あの歌は去年と違うな」

「ああ。毎年異なるぞ。俺の時はラップだったな。沸き立つフロア、一夜で生まれたフォークロア、本物のヒップホップがそこにあった。帽子は年中校長室で来年の曲を考えているらしい」

「……度し難い。それにしても、「輝く希望を注ぐ」とは水銀の様ですね」

「錬金術だと水銀は蛇を意味するからじゃない？」

ダフネが事も無げに答える。

「物質的でありながら魔術的、毒でもあり薬でもあり、それは天と地、太陽と月、生と死、分かれたものを結び付け、超越させる触媒。金と違ってそれ単独で完全を表すわけじゃないけど」

「随分と詳しいじゃあないか」

お兄様がダフネの説明に驚いた。

ホグワーツに於いて、錬金術は常設科目にない。特に受講を希望する者が多い年度に於いて、6年生以上だけに開講される事が有る、という程度である。非魔法族の研究に端を発するものが魔法界に於いて軽んじられているという事もあるが、単純に習得の難易度が高すぎるという理由が最たるものだろう。

また、錬金術の過程はひたすらに地味な上に、その成果も分かり難い。杖を一振りすれば砂漠でも水を生み出せる魔術と、様々な素材の性質を調べ上げて綿密に計算した上で魔術を用いてそれらを掛け合わせて普通の水よりも優れた水を生み出す錬金術。後者に魅力を感じる者はそう多くは無いだろう。

「去年の件で、賢者の石やそれに関わる錬金術にも興味が湧いたので」
「成程。マリアは調べなかったのか？」

「言い訳がましいですが、魔法省対策にかかりきりでしたから。結局圧力も何も無かったので拍子抜けでした」

「時間ならいくらでもあったらう」

「……戦闘技術の反省ばかりをしていたのは事実ですが、それ以上に魔法省対策が煩雑だったことも事実です」

ビルゲンワースによる資料搜索はグリーンデルバルド時代にまで遡り、魔法省からの協力要請や当時の通達、高官からの私信、お父様やアンナリーゼ女王の起居注さえもまとめであった。魔法省は文書を元に権力を用いる一方で、過去のものが精査されていないのか、旧来と真逆ともとれる内容であったり、重複するものもあったりと、それらについて逐一ビルゲンワースが注釈を加えていた。まさに繁文縟礼と言うべき状態で、鋸鉈一本で全てを解決出来る狩人職が羨ましいと司書達の怨嗟が酒場に響いていた。彼らもかつて狩人として聖杯を踏破したであろうに。

当時学生であったジェラルドも含め、獣に関わった者には魔法省からの聴取への想定問答集を与えられたが、それらが役に立つことはなく、魔法省からの連絡はクイレル・クイリナスの死亡について文書回

答を求められたただけであつた。無論、これについては死亡したという回答がお父様より為され、以降は変わらぬ日々を過ごした。

「まあいい、今度教えてやろう。ダフネ嬢も望むのなら時間を作るが」「ありがたいお話です。でも、もう少し勉強してからでなければ恥ずかしいです」

「その気になつたらいつでも言つてくれ。7年生だからさして忙しくするつもりも無いしな。」

ウィーズリーはまたグリフィンドールか。Wだからそろそろケントか?」

ヤーナムにもクシランダールという姓はあるが、英語圏でXで始まるものは少ない。次に来るとすればYのヤマムラだろう。

「ヤマムラ・ケント」

副校長に呼ばれ、ケントが帽子の前に進む。使者の灯りにそうする様に、僅かに膝を折り、帽子の天頂に触れると、「スリザリンでお願いします」と語りかけた。

「よかろう、スリザリンだ。ところで、古ぼけてはいるが、私は定期的に手入れされている。手垢塗れならとうに黴でダメになっているだろう」

「ああ、やっぱり心が見えてるんですね。今度洗剤でも贈りましょうか」

被ることなく帽子が答え、何とも奇妙な組分けとなつた。

「ええ……? こんなことありました?」

ダフネがお兄様に問う。

「7年生として言うが、初だな。それもあるが、ケントがあそこまで嫌悪感を表わすのを見たのも初めてだ。余程嫌だったのだろう」

「紳士としてあるまじき態度では?」

「見ろ、副校長が伝統を馬鹿にされたと思つてお怒りだぞ」

「伝統ある式典で帽子を被らずに組分けを済ますなど、副校長からすれば暴挙と言えるでしょう。まあ、私も汚い帽子だとは思いました
が」

「ああ、やっぱりみんな思うものなのね。去年は私も早くシャワーを

浴びたいって思ったわ」

ケントは全校生徒の奇異の目を物ともせず、蛇寮の席に着いた。

「あー、ヤーナムの人ってやっぱりこうなの？」

「7年もすれば俺の様な紳士になるぞ」

「それはまあ……デイルク先輩もヘルマン先輩も紳士だと思いますけど、イングリットお姉様とは方向が違うなあって」

「アストリアとダフネだって大分違うだろう」

「あの子は……そうね。そうかも」

顔立ちや気品は似ているが、慈愛を湛えるダフネと快活なアストリアとは異なる。同じ親から生まれていてこうなのだから、親も師も異なるヤーナムとで同じになるはずもないだろう。

「何だ。俺は冗談で言ったのだが、否定してくれないとこちらが恥ずかしいだろう」

「先輩は本当に紳士だと思っっていますよ。ええ、ちよつと過激な妹想いだなとも思いますけど」

「マリアの友人であるダフネ嬢も妹みたいなものだからな。あと1年しかないが、存分に頼ってくれ。お兄様と呼んでもいいぞ」

「……はい。よろしくお願いしますね」

ダフネは苦笑した。これさえも奥ゆかしい微笑みに見えるのだから、まこと美人とは罪である。

最後にゼフィリヌスという女子がレイブンクローと宣言され、組分け儀式が終わった。

「さて、まずは新入生の諸君。入学おめでとう。わしが校長のアルバス・ダンブルドアじゃ。フルネームは覚えんでもよい。魔法史の試験にも出ないからの。覚えてほしいことは、これから話す連絡事項じゃ。」

例年通りじゃが、いないとは思いが持ち込み禁止の品を知りたい者はアーガス・フィルチ管理人に確認すること。それと、森は今年も教職員の同行なしに立ち入る事は禁じる。少し気になるのじゃが、禁じられた森への立ち入りを禁じなくなった時には何と呼べばいいのじゃろうか。その日の為に、生徒諸君にはぜひ相応しい名前を考えて

もらいたい。

今年の事じやが、東棟4階の廊下は入っても構わん。もう何も残っておらんので、かくれんぼくらいにししか使えないがの。それと、多くの女子生徒には朗報じやろう。今年の闇の魔術に対する防衛術の先生には、ギルデロイ・ロックハートが就いてくださる」

悲鳴の様な歓声が広間を包む。他寮に比べ少ないながらも、蛇寮からも歓声は上がった。去年は相当にはまっていたと思われるドロテアを見やると、案外平静としていた。

「割と我が寮は落ち着いているな」

「だって、あんなに凄い業績があるのに社交界に出てこないんだから、何か裏があるんだろうって噂があるもの」

夏の訪問時にダフネが大した興味も示さずに話していたのはこれが理由であつたか。得心していると、お兄様がダフネに問う。

「ほう？ 少なくとも新進気鋭のイケメン作家だとは思うが。ダフネ嬢の感想は？」

「顔立ちの良さであれば私の方が上だと思えます」

「これはまた随分と大きく出たな」

「先輩が去年惨めに泣いている私を褒めてくださったじゃないですか。その……体もですけど」

「そこだけ切り取ると誤解が生じるからやめてくれ。それに、それはヘルマンが言ったことだ。まあ見目麗しいという表現に否定の言葉はない。作家としては？」

「冒険活劇として読むなら面白いですけど、内容としては信用なりませんね。彼の著書『一般家庭の害虫』、あれを真に受けた者が温室を1棟壊滅させましたから。一部は本当に彼の活躍があるのかもしれないが、実態は幾人かの体験談を幾人かの著者がギルデロイ・ロックハートというブランドで売り出しているんじゃないでしょうか」

「ヘルマンも近いことを言っていたな。文体が似ては居るが知識の幅にムラがありすぎると」

「実際、古くからの使用人は「お嬢様、事実と創作は分けてお考えください」と。全く聞いたこともない新農法を試しませずに鵜呑みにする

様な者を雇い入れたのが悪いとはいえ、グリーングラス家の者は蛇蝎の如く嫌っていますね」

「グリーングラス家の事業は繊維だったか？ とすると温室とは繊維かあるいは染料か」

「はい、染料です。ホグワーツの制服にも使われている藍ですね。染料も生き物ですから、毎年同じ様に栽培して毎年同じ色が出るとは限りません。それを数世紀に亘って同じ色で出荷するところが我がグリーングラスブランドの技術と誇りです。身近なところで言えば、マダム・マルキンで扱う生地の7割は私の家が関わっています。ヤーナムのものは違うみたいですけど」

「ほう、気付いたか。僅かに織り柄が仕込んであってな、魔術式として機能する様になっている。例えば、包丁で刺しても刃が欠けるくらいには強化されている」

「お兄様、それは言ってはならないことでは」

「む。見惚れて口を滑らせたな。忘れてくれないか」

「フフツ。なら、もつと先輩とお話したいです」

ダフネがお兄様に向けるのは、歳に合わない色を含んだ笑い。少し会わないうちに、ダフネが強かな女になっている。去年は気付かなかっただけかもしれないが。

校長が手を挙げ、広間の狂乱が僅かに静まった、その瞬間、広間の奥からその男が表れた。

「やあ、私だ」

およそ人の声とは思えない叫びが幾つも上がり、幾人もが倒れた。

「んほお」

「心肺停止したじゃん訴訟」

「呼吸辛過ぎお詫びに人工呼吸して」

「しんどい。ひたすらしんどい」

「待って????? 殺す気?」

「死んだけど蘇生したわ」

「人類の奇跡過ぎる」

「排卵！ 排卵キター！」

「ギル様産んで授乳したい」

「もう産んだ認知して？」

「生まれてきてくれてありがとう」

地獄か。

主に驚寮女子生徒達が狂人としか言いようのない譫言を垂れ流している。

「ドロテア、これが僕から見た去年の君だ」

「ちよ止めて！ あんなのと違うから！」

ドロテアは割と強くヘルマンの頬を張った。当然だろう、あれと同じ生物扱いは相当な侮辱である。隣のケントもヘルマンの崩れた余波を受け、椅子から落ちた。

「恋する乙女とは大変だな」

お兄様が驚寮の狂態を見て呻く。

「アレは乙女ではありません。メスとして限界の何かです」

「まあ男にも妖女シスターズから胎教で歌って欲しいとか子守唄を聞きながら授乳されたいとか言う輩はいるが……」

「妖女シスターズって男性ですよね……デイルク先輩はそうなのですか？」

「ああ、俺も言っていて狂気を感じる。」

それはそれとして、母性のある女性は好きだな。自分を言うより、自分の子を慈しんでくれるだろうという安心感こそ、母性に惹かれるということではないかと思う」

「あらお兄様。お兄様の蒐集物と言っている事が違うのではなくて？」

身近な母性と言うと、自らをお姉様と呼ばせるアリアンナ女王、その娘たるイングリットお姉様であろうか。事実、アリアンナお姉様はイングリットお姉様と母子ではなく姉妹であると言われれば納得する距離感である。

そのイングリットお姉様が冷ややかにお兄様を見ていた。ダフネもイングリットお姉様をお姉様として呼び慕っているので、お兄様に妹分をとられて腹が立っているのだろう。自分でも関係性が分から

なくなってくる。

「……何を勘違いしているのか分からないが、やめろイングリット。妹とはいえ許さんぞ」

「妹の同輩を妹扱いする様な倒錯はよろしくないのではないかしら」

「何が言いたい」

「申し上げている通り。ダフネを妹扱いするのと淑女として扱うのは違いますわ」

「断じて言うが、俺の蒐集物は妹モノでもないし、仮にあったとしてもヘルマンのだからな」

「あら。ならドロテアに伝えておきましょう」

「止める！ ヘルマンにも人権はあるんだぞ!？」

「それを貶めているのはお兄様ではないかしら」

敬愛して止まないお兄様も年頃の男である。そういう物は持つているだろう。とはいえそれを認めず、ヘルマンを売る姿勢は少し軽蔑する。

ヘルマンはよく分からない。ドロテアにあれだけ迫られていて何の気後れもしていないのであるから、奴は不能なのか女性を愛せないのかもしれない。あるいは本当に妹として見ているのかもしれない。

ダフネには男兄弟がない為か、顔を赤くして俯いている。免疫がないわけではないはずだが、知人の性事情は聞きたくないという事もあるだろう。

騒ぎが収まる、というよりは狂乱している連中が失神した後、ロツクハートは口を開いた。

「こんなにも素敵なレディ達に遭えて私は幸せだ。ここに招いて頂いた校長に改めて感謝を。私は君たちにとって先生という立場ですが、ホグワーツの先輩という立場でもあります。遠慮なく、分からない事は何でも聞いてくださいね——おっと、もちろん、その他の先生よりその道に詳しいなんてことは申し上げるつもりはないですがね。それと、質問の為にと偽ってサインを求めに来ても困りますよ？ ですすが、勉強に励んだご褒美としてなら、いくらでも時間を取りますよ——もつとも、あまり遅い時間になると、男子生徒が嫉妬してしまうので

しようから程々に。では、明日からの授業をお楽しみに」

何と評すべきか、品がない。お兄様の猥談にしても品がないのはそのなのだが、ロックハートのそれはより軽薄な印象がある。いい年をした大人が何を言っているのか、という事だろうか。大人と子供は等しく1つの精神であるとはお父様の言であるが、それはそれとして大人には大人としての言動や雰囲気というものはあるだろう。

何より、真面目に勉学に向き合おうとする学生を揶揄う様な態度が気に食わない。

「どう思う？」

「あれの書いた本に我がグリーングラス家の財貨が支払われたと思うと虫唾が走る、かな」

ロックハートの挨拶に新たに沸く広間の喧騒、それに負けない様にダフネに話しかけると、つまらなさそうにダフネが返した。お兄様も力強く肯いている。教科書の回し読みを提案したヘルマンは正しかった。

「ありがとうギルデロイ。諸君、順番は違うのじゃが、校歌を歌ってから食事しよう。どうやら今のままでは感動し過ぎて食事が喉を通るまいて」

校歌はそれぞれが好きなの旋律で歌う。昨年はウィーズリーズによる葬送行進曲が目立ったが、今年ヘルマンとドロテアが始めたBWV147終曲「主よ、人の望みの喜びよ」が別格だった。非魔法族にとっても聞き覚えがある為に新入生は寮を問わず大合唱となったが、これによりヘルマンは陰険眼鏡の名を不動のものにした。

ヘルマンの昨年度末大演説の内の一節「心と口と行いと生活で」は、BWV147の事である。職権を用いて学校運営をほしいるままにするという事に、何ら良心の呵責は無いのかという文脈であった。これを翌年度の初日に公式行事で行うという生き様はクラシックにしてパンク過ぎる。ダフネから聞いた、校長の意向でロックハートを招聘したらしいという事が相当に気に食わないのだろう。

「うむ。新入生にも配慮された、良い選曲じゃった。残念ながら、学期前であるからして加点は出来んがの。それでは諸君、宴の始まりじゃ

！」

何だこの老人はと思う程の大声と共に、テーブルには湯気の立つ食事が現れたが、大多数の生徒達は立ったままであり、新入生達は先輩が座らないので困惑しつつも同じく立ったままである。広間を包むのはいわゆるドン引きという空気であった。元凶であるヘルマンとドロテアは自身に向けられる視線を一瞥した後、さっさと着席してナプキンを取った。

「これくらいいい？」

「もう少し。流石に腹が減ったからね。そうだ、クルトンをもう少し入れてくれ。それとサラダにはたつぷりとドレッシングをかけないと」

「あ、お母さんに言い付けるからね？」

「やめてくれ。ようやく母親の味から逃れられたんだ。健康を気にして薄味だなんて、精神の健康を害する」

ドロテアが当たり前前の様にヘルマンの皿にサラダを盛り付け、ヘルマンはそれに文句を言う。昨年幾度となく見た食事風景が還ってきた。

これを見てその他の生徒もようやく我に返り、それぞれの皿にそれぞれの好物を盛り付けていくのだった。

腹も膨れ、学徒の群れが寮に向かう。今年の蛇寮新入生は去年よりも僅かに多い。比率で言えば男子の方が圧倒的に多かった。卒業生が多かったため、女子房については新入生も雑居房ではなく独房行きとなる様だ。

「監督生は今年も同じだ。アレサンドロ・フランキと」

「ジェマ・ファアーレイが務めるわ。よろしくね」

壇上の監督生達に盛大な拍手が贈られる。寮杯7冠の功労者達であり、昨年同様に蛇寮を栄光に導くに違いない。

「さて、新入生の中で、実はスリザリンに入りたくは無かった、家族に何と手紙を書けばいいのだろう。そう思っている者もいるだろう。よく聞く話だ。確かに、かつて少なくとも重犯罪者を生んだことは間違いいではない。しかし問おう、君たちは犯罪者になりたいのか。そう

ではないだろうか？

我らが蛇寮は、求めば与えられる場所だ。知識を求めれば知識を与えられ、栄光を求めれば栄光を与えられる。己が信念に基づき、己が為すべきを為せば、必ず同胞が応えよう」

「去年も言ったことだけど、例年の監督生が言う事だから伝えておきます。あのマーリンはスリザリン出身者です。そう、マグルの伝説にもある、あのマーリン。確かに、闇の帝王を生んだ寮でもあるけれど、大賢者マーリンを生んだ寮でもありません。

組分け帽子の歌った通り、どうあるべきかは自分次第です。血筋は関係ありません。私も聖血とまではいかないけれども、ここ数世代は魔術師の家系です。けれど、それが理由でここに入寮したわけでもありません。血筋によって組分けられるなら、ウィーズリーやマクミラン、ロングボトムといった生徒がスリザリンではない事がおかしいでしょう。

何を欲するかが選定の基準です。アーサー王は聖剣に選ばれたわけではありません。聖剣を引き抜くことをアーサー王が選んだのです」

「知らぬ者もいるだろう、知っている者は黙って聞け。ホグワーツでは、1年ごとに、4寮で栄誉を争う。それは個人の試験成績とは異なり、授業態度や素行、その他学則、後はクイディッチチームの勝利数に照らして評定される。我らスリザリンは他寮から敵視されているが、去年は悲願の7冠を得た」

「そういった事情から、家の金で得点を買ったとか、コネで繋がったクズだとか、純血主義で固まった差別主義者だとか、他にも……いえ、これ以上は淑女として言えません、とにかく酷い言葉で他寮、特に獅子寮は私達を攻撃してきます。だからこそ、私達は強く団結しなければなりません」

「イタリア人の俺からすれば、英国魔法界の純血がどうこうといったしきたりもしがらみも知ったことではない。肌の色も、訛りもどうでもいい。宗教についてはイエスは処女マリアから生まれたと信じているが。」

俺が重視するのは、それが蛇寮にとって有益か否かだ。純血であろうと蛇寮に仇なす者であれば当然に不穏分子として扱われ、非魔法族から来た者であろうと蛇寮に貢献するならば取り立てよう。別の寮に対して何を言おうと何をしようと、それが蛇寮に有益ならそれで構わぬ。だが、蛇寮内部での卑劣な物言いや行いは赦さん。何故か」

「「我らは家族だからだ」」

「上級生諸君、唱和ありがとう。」

さて、ここにはいらつしやらぬセブルス・スネイプ魔法薬学教授が寮監だ。あり得ざる仮定の話をするのは無意味と分かつてはいるが、仮に……まさに驚くべきことに寮監が人間らしい感性を持つていれば、流石に7冠を得た後も我らに鼻屑をする事は無いだろう。レイブンクロー寮監のフリットウィック教授やハツフルパフ寮監のスプラウト教授は、内心苦々しく思いながらも7冠は偉業ということでも我らに得点を与え、スネイプ教授の不当な採点基準についても黙認していた。これで今年もスネイプ教授が我らに鼻屑をし続けるのなら、職員室内はシベリアよりも冷えていてキューバよりも熱いことになるだろう。諸君には教職員の助力を見込まず、各員の健全なスリザリンの戦術での奮励努力を期待する。

第一の貢献として、新入生には各教室の配置を覚えてもらう。最初の1週間は上級生が案内するので、朝食後は直ぐ談話室に集合する様に。

さて、上級生にとっての連絡となる。クイディッチについて、マークス」

壇上にフロント先輩が気だるげに上がる。

「スリザリנקイディッチチーム、キャプテンのマークス・フロント、6年だ。使えるヤツは使うし、使えないヤツは落とす。選抜は行おうが、それが全てではない。2年生から4年間、選手をやってきたオレの経験で言えば、シーズン中、怪我で飛行恐怖症になるヤツもいた。色に溺れて調子の上がらねえヤツもいた。試合日が罰則期間で飛べなかったヤツもいた。だから、二軍は用意している。たとえ今週の選抜で落とされたとしても、飛ぶ気のあるヤツは二軍に入って練習し

ろ。

今年のスタメン空きはキーパーだ。まあ不人気のポジションだから期待はしてねーが、埋まらなかつたらビーターのヘルマンにやらせるからな。就活のあるヤツも、学業が忙しいヤツも、1年生でも、純血だろうがマグル生まれだろうが、飛びたければ今週金曜に来い。

ああ、例年の事で分かっているとは思うが、暇なヤツは草刈りに協力してくれ。誰であろうと競技場に近づけば呪う、これはどこの連中もやっていた事だが、去年は遠眼鏡で城内から見ているヤツもいた様だ。入学早々のこんな時期にホームシックで外を眺めている奴はいない。疑わしきは発見次第縛れ。見せしめに広間の飾りにしてやろう」

相変わらずのクイデイキチ具合だった。だが気になるのは、1年生もという言葉だ。育成枠だろうか。

「1年生でも？ マーカス、どういう事だ？」

「アレックス、熱心な監督生のお前には悪いが、普段は興味もねー学則を確認した。まず、1年生は自分の箒を持ち込んではならない。次に、1年生は代表選手になれない。

さて、話は飛ぶが、ここで伝えておこう。今季のシーカーはドラコでいく。同学年の連中は知っているだろうが、飛び方にクセはあるが実力もある。マルフォイ家からは箒を寄贈してもらった。最新型のニンバス2001だ。ヤーナムの連中分は要らねえと言ったが、寮に贈るのであって選手に贈るわけでもないとお言葉で、息子の分とは別に計7本だ。つまり、自分用の箒なんぞ持つていなくとも、飛ぶことは出来る。

次のルールだが、1年生は代表になれない。果たしてそうかな？

そう、ポッターが前例を破った。これはもうルールとして通用しねえ。元々どういう立法趣旨だったかは知らねーが、1年からクイデイッチにのめり込み過ぎて授業も参加しねーだとか、試合中にカモられてポロ雑巾にされただとか、何らかの事実に基づいた前例だろう。ホグワーツにそんな事を気にする時代があったとは思えねーが……とにかく、その前例がまさに破られたというわけだ」

フロント先輩は言葉を切り、新入生達を睥睨した。選抜選手の座を勝ち取ってやろうという気概を見せる者も居れば、そもそもクイディッチとは何かを理解していない非魔法族出身の者も居た。いずれにしても、粗野な言葉でありながら、ある種の宗教を思わせるフロント先輩に尊敬ないし畏怖を感じている様だった。

「よつて、どこの寮であれ、能力がある1年生がいれば選手になつても許される……と、解釈されるべきだ。オリバー・ウッド、ミネルバ・マクゴナガル……校内屈指のクイディッチ狂いが揃いも揃つてポッターの居るグリフィンドールだ。あいつら以外に1年生の出場に反対する気のあるヤツはいねーし、あいつらは反対する資格がねえ」

「キャプテン、よろしいですか」

「おう、ヘルマン。言つた通り、ビーターやる気ねえならキーパーに転向させるからな」

「ビーターではなくクイディッチに興味がないんですよ。それはそうとして、マルフォイ君のシーカーとしての実力は？」

「ああ、実戦経験がないだけで新人シーカーとしては並み以上だ。夏の間におれが確認したし、それ以上に鍛えてある」

「そうですか。よろしく、マルフォイ君」

ヘルマンの挨拶に、普段は傲慢なマルフォイも素直に応えた。陰険眼鏡に敵対されたときの報復を恐れているだけかもしれないが。

フロント先輩は演台を下りてソファアに腰かけると、スコッチをグラスに注ぎ、一気に呷った。

「そういうわけで新入生諸君。ようこそスリザリンへ」

「では、今日は解散ね。明日から授業なので、入寮歓迎会は金曜です。女子房はこっち。新入生は荷物を持って。2年生も今年から独房だけど、割当は内見してからね」

ファアレイ監督生に「はい看守長」「イエスマム」などと返しながら、上級生達も連なっていく。

「新入生は独房だの雑居房だの意味不明だろうな。しかし、独房行きか。寂しくなるな、ダフネ」

「うーん、マリアが良ければだけど、また同じところを使わない？」

「……まあ構わないが。どうした？」

「えーつとね、私妹がいるじゃない」

「そうだな」

「いつも妹と一緒に寝てて、去年は貴女と寝てて……」

「なるほど、慣れてないと。私も同室であれば一々ダフネの部屋を訪ねるよりは都合がいい。だが……独りで寝るのも慣れた方がいいのでは？ 来年アストリアが入学したら同室を希望するのか？ 流石に学年を超えては認められないだろう」

「んー、どっちかかっていうと貴女の方が心配なの。去年私を置いて行ったでしょう。放っておくとまたどこか行っちゃいそうで」

「それを言われると返す言葉も無いな。精々貴公の忠犬でいよう」

ピクシー

昨日、校歌斉唱の後に満面の笑みでヘルマンとハイタッチを交わしたドロテアは、根暗に優しい妹系幼馴染として妙な人気が湧いている。そんな事を朝食に向かう道すがら、後輩たちが話していた。

絶好調のドロテアに対し、ハーマイオニーの機嫌は最悪だった。

空を駆ける車はポッターとウィーズリーが乗ったものだったらしく、それで学校まで乗り付けたらしい。これを獅子寮の連中は、夜を徹して模範的獅子寮生の英雄的行為として騒がしく讃えたために寝不足だと言う。

「私は別に構わないが、初日から蛇寮の席で朝食か」

「それが2か月ぶりに会う友人への言葉？」

「ああ、久しぶり。休暇はどうだったかな」

「別に。ロックハート先生のサイン会に行ったらウィーズリー家とマルフォイ家の乱闘が見れたくらいね」

ロックハート先生と呼ぶ声は甘い色を放っている。ハーマイオニーに限って外見で判断するという事はないだろうが、様子見は必要だろう。実際に惚れていたとして、それを頭ごなしに否定するのは躊躇われる。

「おいグレンジャー！ 父上は見世物じゃない！」

聞き耳を立てるまでもなく、マルフォイは聞こえるところに掛けていた。ベーグルと牛乳だけで済ます様だ。

「あらそう。じゃあ透明マントでも被って殴り合う様に伝えたら？」

……と、彼の様子通り、事実よ」

「理由は何だか知らないが、子供に妙な車を与える親と名家の主だ。ろくでもない理由だろう」

「いいえ、先にマルフォイのお父さんが私の親を侮辱したのよ。正しくは、こんな連中に関わるなんて落ちぶれたものだなんてロンのお父さんに言っただけぞ」

「そうかマルフォイ。昨日フランキ監督生はああ言ったが、貴公がハーマイオニーを侮辱したら相応の報いを受けさせるからな」

「ボーン、父上は間違つてないぞ。こんな連中と関わるとロクな事にならない」

朝方であるせいか、マルフォイはいつにも増して血色が悪い。下男も付いていないせいか、普段よりも小さく見える。こういう時こそ狙い目だろうが、パンジーは女子房でお姉様と過ごしていた。

「そうか。牛乳を飲むのはどちらがいい？ 鼻か？ 肛門か？ 好きな方を選べ」

「マリア、相手にしないの。それに下品よ。」

「ダフネは？」

「まだ寝ている。今日は2限からだから起こすなど。起こしてまともな起きたためしはないけれどね」

「朝食はいいのかしら」

「何か持つてこいと昨晚私に命じたんだ。お嬢様の我儘には呆れるよ」

食事を摂る前にダフネの為に厨房に向かえば、お兄様とケントもついてきた。献立に日本食を増やす様に屋敷妖精達に陳情するつもりらしい。確かにフランス料理もイタリア料理もあるが、日本食らしきものはハロウインで出される南瓜の煮つけとたまに供される抹茶プディング、ゼンザイといった甘味が多い。ヤーナムでは日本風カレーやミソスープ等のレシピも流通しているため少々物足りなくも感じていたが、日本食が主であろうケントにとっては特に辛く感じるだろう。腐れ豆を出されてはたまらないが。

「そういえば、帽子を被らなかつた新入生の子、貴女たちのところの子？」

「ああ、面白い奴だろう」

「……日本人って目立たない様にする人達だと思つてたけど」

「あいつは日本の血を引くだけのヤーナム人で、狩人だよ。私の事は普通に先輩として扱えばいいものを、姫様姫様と付き従ってくるがな」

まだ同輩達の前で姫様と呼ばれたことはないが、周りの反応を想えば面倒だ。ジエラルドに続き、今度は後輩を侍らすのかと騒がれるだ

ろう。言っても聞かぬのだから半ば諦めてはいるが、主君と仰ぐのであればその意を聞けと言いたい。

パン・オ・シヨコラと巣ごもり卵を腹に収め、茶を飲んでいると、上空から幾重もの羽音が轟いた。

「毎度思うのだが、食事中にこれは不衛生極まりないないな」

「そうなのよね。やっぱり魔法界って衛生観念が無いんだと思うわ。この城だって、18世紀までトイレが無かったんですって。きつと今でも下水を湖にそのまま流していると思うわ」

「衛生云々を持ち出したのは私だが、そこまで如実に話をされると反応に困る。食卓に上がる魚が淡水魚なら二度と口にしないと決めた」
「ああ、ごめんなさい。先生に下水処理の方法を聞いておくわ。ちゃんとした設備があるなら伝えるから」

「その結果を聞けなかったらそういうことか」

本人としては善意のつもりなのだろうが、二度とその話を持ち出すなどというものである。ケントには予め魚は控える様に伝えておこうと決めた。

『車を持ち出すなんて何を考えているのですか!』

怒声が大広間に響き渡り、シャンデリアが揺れた。

見渡すと、獅子寮のテーブルが騒然としている。マルフォイは食べ終えた皿をそのままに、騒動を見物しに行った。

「何あれ?」

「私も初めて見るが、吼えメールという奴だ。手紙の内容を記述者の音声で読み上げるんだ。主に不倫や汚職の告発、後は解雇通知に使われると聞く。当然秘匿性もないから、相当腹に据えかねる場合のみだな」

「開けなきやいいじやない」

「受信直後に開封しないと爆発、炎上するらしい。 You R e f i r e d ! 　というわけだ。」

事実かは知らないが、非魔法族の夫の職場に送り付けたことで爆殺した例が在ると聞く。不倫を戒める冗談の類かと思えるが、事実として不倫が端緒となつてアーサー王は滅んだんだ、あながち嘘とも言い

切れない」

「魔法界も痴情のもつれの結末は変わらないわね」

「血がどうあれ人の証はその意思だ。特に意思の繋がり、恋愛は独りで出来るものでもない。想うだけでは恋愛にならないし、想い合っただけでも褪せる事はあるだろう」

「急に悟った様な事言っただけ。彼氏でも出来たの？」

「言外にロックハートの事を指したつもりだが、伝わっていないらしい。」

「まさか。お兄様とお姉様より強いことが彼氏の最低条件だな。これは只の母親の受け売りだよ」

「ホグワーツの儀式魔術を妨害出来る人間がどれだけ居るのよ……それはそうとして、お母さんは素敵な恋をなされたのね」

「ん……お母様の視点では出会ったその日に子作りしていたな」

「ええ……？」

「まあ吊り橋効果かもしれないが、相当燃えた様だし、今でも時と場所を考えずいちやいちゃいちゃと……娘の情操教育を何だと思っているのかと思う」

女子生徒は一年次にマダム・ポンフリーによる特別講義が在る。既に赤い月が来ている者もいたが、避妊の為の魔術や薬について親から習っている者はいなかった。なお、ポーン家を問わず、ヤーナムでは聖杯に挑む前にそれらを教わることとなる。狂気は血への欲求だけに作用するわけではない。もつとも、戦闘継続が不可能になれば徴を用いる様に厳命されているため、そうした被害は実際にはない。その恐怖を先に教えておくことで、退き際を意識させるという方針だ。

「マリア、下品」

「生きとし生ける者全て宇宙創世から連綿と続く繁殖の結果だ。性欲は生きている証さ」

「狩人の価値観？　じゃないわね。イングリットさんはそんなこと言ったら怒りそうだし」

「まあ……怒るだろうさ」

もつとも、その母親が最も性に知悉しているのだが。カインハース

トの血を継いでいながら、大聖堂の傍に居を構える娼婦だったのだから、かなりのお目こぼしがあったのだろう。狩人の地位は堕ちていたとはいえ、義父が古狩人であり、自身も異邦の狩人であったお祖父様が下水道付近に住んでいたのに比べれば、アリアンナお姉様は相当な高級娼婦であったことが窺える。流石に訊くことはないが、貴族の服や高い教養からするに、端金で女をひさぐ者ではない。

『お父さんは役所で尋問を受けたのですよ！ みんなお前のせいです！ 今度少しでも規則を破れば、お前を家に連れ帰りますからね！』
最後通告を終え、吼えメールは燃えて灰となった。

「獅子寮生として感想をどうぞで」

「ザマを見なさい、よ。昨晩はパンクだロックだと騒がれて有頂天だったけど、したことはただの違法行為よ。薬物で陶酔して反戦活動家ぶってるのと変わりないわ」

「ウッドストックは嫌いかな？ いや、私達の世代じゃないか」

「ラヴ・アンド・ピースなら春にあった追悼コンサートかしら。ともかくヒッピー文化は嫌い。体制への反抗と違法行為は別物よ。信念も教養もない、ただの犯罪に価値は無いわ」

「ポッター共が錯乱してるんだかクスリをキめたのかは知らないが、罰を受けるのも当然だろうな。エリア51で未確認飛行物体が見えたわけでも、バミューダ沖で幽霊船が表れたわけでもない、ロンドンの上空でフォード・アングリアだ。車種が特定できるほどの低高度で飛ぶ自動車なんて、オカルトかぶれ共の妄言として処理することは出来ないだろう。」

実際、どうなんだマルフォイ」

ウィーズリーの醜態を堪能してきたのだろう、顔を紅潮させる程に興奮しながらマルフォイが帰ってきた。

「どうして僕に振る？」

「去年箒に乗ってヘリと接触しかけたとか追い抜いたとか言っていただろう。非魔法族に魔術を目撃された場合の処罰はどうなるんだ」

「僕とあんな連中は生きる階層が違う。知ったことじゃないね」

マルフォイは顔を紅潮させ、離れていった。要らぬ見栄を張るから

そうなる。飛行技術は十分なのだから、黙っていたところで同輩からの評価は悪くないはずだ。

ハーマイオニーと別れ、寮に戻ると、ダフネは眠そうに目を擦りながら歯を磨いていた。ふと、蛇口から出る水は湖のものなのだろうか、浄水設備はどうなっているのだろうかと疑問が生じ、ハーマイオニーを恨む。どこかで濾過器を調達しようと思いついた。

「これから朝食なんだから歯を磨くのはその後でいいだろう。クロワッサンとスイカのサラダを持ってきたぞ」

「貴女正気？」

ダフネは信じられないものを見た、という表情であった。

「何がだ。スイカは嫌いだったか？ 私もあまり好きではないが、これくらいの仕返しは大目に見てほしいものだよ」

「朝起きて歯を磨かないって女として……いえ、人としてどうなの？」
「頼み通りに朝食を持ってきた友人になんて言い草だ……貴公の様に起きて直ぐに朝食を食べる習慣は無い。ちゃんと磨くし顔も洗うさ。自堕落な生活を送る者は歯も磨かないのだろうなあと思っていたまのでのことさ。」

ああ、皿はそのテーブルに置いておけば屋敷妖精が後で片付けるとのことだ

「そう、ありがと」

「まったく、独房だったらどうするつもりだったんだ」

「起こしに来てって頼むわ」

「我儘放題だな。で、薬草学の教科書は？」

「準備はしてあるよ。マリアと同じ様に、法衣に仕掛けを作ってもらったの。全部その中。」

ん、美味しい」

ポールハンガーにはダフネの制服が吊り下げられている。よくよく見ると、昨年着ていた物よりも大きくなっていった。特に前身頃が若干長く作られているのはその体型のためか。一年を共に過ごしていたせいも、日々の成長に気付かなかつたらしい。背丈にしても自分の未だ来ぬ成長期に焦りを感じるが、未だケントよりは大きい。

「便利だろうか？」

「そうね。これで鞆を持たなくていいのは凄く楽」

「じゃあ、私は談話室で茶を飲んでいるからごゆっくり」

「ええ、ありがとう」

茶を飲んでしばらく待てば、完全な淑女と化したダフネが表れた。あのだらしない姿を知っているのは自分を含めた僅かばかりと思うと、くすぐったい様な感覚になった。

お嬢様組と連れ立って温室に向かう。今日も今日とて曇天である。ダイアゴン横丁へ赴いたあの日は、極めて稀な日差しのある暑さだった。

スプラウト教授は温室におらず、まばらに來ていた穴熊寮生と教室変更連絡があつたかと確認をしあつたが、そんなものはないとの共通認識に至る。温室の中に居るのかと思ひ、幾つかの温室を見て回るが、痙攣している蔦や、極彩色の花を咲かせるサボテン、今まさに鼠か何か小動物を消化中の食肉植物があるばかりで、教授の姿は無かつた。

休講なら何をして時間を潰すかと話し合っていると、漸くスプラウト教授がロックハートを伴って表れた。

「やあ皆さん！ スプラウト先生に暴れ柳の正しい治療法をお見せして頂いてね」

要するにこの男がスプラウト教授の邪魔をして遅れたというだけの事だろう。遠くにある暴れ柳は枝が吊られており、それに用いられたのだろう大量の包帯を教授が抱えていた。

「はいはい、今日は3号温室へ！」

不機嫌さを滲ませた声に追い立てられ、先程の痙攣している蔦の温室に入る。温室内にはラフレシアと家畜の有機肥料の臭いが立ち込め、朝食を摂ったばかりのダフネが呻いた。ポッターは温室に入らずロックハートに絡まれていたが、その表情は全く興味のない宗教の勧誘を受けたそれである。

「今日はマンドレイクの植え替えをします。マンドレイクの特徴が分かる人は？」

手を挙げるが、ハーマイオニーの方が早かった。

「では、ミス・グレンジャー」

「マンドレイク、あるいはマンドラゴラは、魔法薬学や錬金術、儀式魔術に用いられるナス科の植物です。根茎が人の形をしていて、成熟していない苗を土から引き抜くと根は泣き叫び、その声を聞いた者を死に至らしめます。成熟した場合は泣き叫ぶことはありませんが、繁殖の為に自ら土から這い出て居なくなってしまう。そのため、古くは犬とマンドレイクの苗を結び、犬を走らせることで引き抜いていました」

一般的な参考書にも記載されている為、ハーマイオニーは当然の如く知ってはいるのだろうが、流石に刑死者の精液が最も効率の良い肥料となるという話は出来なかったらしい。

犬を用いる方法について、そもそも影響が及ばない程に長い縄を用いる事は出来なかったのだろうか。犬の命と引き換えに引き抜いたとして、泣き止むまでは採集者も近寄れないのだから、やはり犬を使う利点に思い至らない。犬を贄とする儀式なのだろうか。

「大変よろしい。グリフィンドールに10点。では、マンドレイクの薬効について、ミス・ポーンは分かりますか？」

「はい。人体に作用するのは多分に含まれるアルカロイドです。アルカロイドは有史以前より毒として知られ、鏝に塗布したり、飲食物に混入させたりすることで利用していました。他方、適量を用いる事で麻酔、血管拡張、解熱といった医学的利用もあります。魔法薬としては、体内の魔法器系、東洋で言う経絡を刺激し、呪詛に対する抵抗力や回復力を高めます。当然、魔法薬としての効能は魔法器系や魔力の無い者に対しては何ら効果の無いものであり、マンドレイクそのものに呪詛や魔力抵抗作用があるわけではありません。したがって、非魔法族が呪詛を受けたとしても、マンドレイクを投与することは無意味です。瀉血や汚染部の切除が有効かと」

魔法器系は、実際には確認されていない。魔力を持つ者とそうではない者の間の差異。魔法族はそれを説明するにあたり、世界に満ちる力と自らの生命力を魔力に変換する不可知の器官、即ち魔法器系が魔

法生物にはあるとした。純血主義思想が根絶されず、一定の求心力を与えている理由の1つでもある。ヤーンナムでは魔術について、血中の虫が宿主の意思を具現化することと理解されているが。

「非常によろしい。スリザリンに10点」

この程度で10点獲得はかなりの大盤振る舞いである。ロックハートに相当苛ついていたのだろう。

教授は温室の中央に置かれた台に、耳当ての入った箱を置いた。ところどころ土がついているものや、何故か焦げているものもある。その中でも、鮮烈な桃色でふっさりとしたものが異様に目立つ。

「皆さん耳当てをとってください。まだ育ち始めたばかりの苗ですが、学生の皆さんが泣き声を聞けば、数時間は昏倒します。

行き渡りましたね？ 耳当てを外しても安全になれば手を挙げて合図しますので、耳当てをつけてください」

桃色の耳当ては教授が使うこととなった。生徒の準備が整った事を確認すると、葉の植えられている小さな鉢と空の鉢を台に置いた。再度教授は生徒を見回してから、葉の根本を持ち、一気に引き上げた。表れたのは、薄緑の醜い赤子。泣き叫びながら土を求めて宙を這っている。汚物に塗れて泥濘を這う亡者に比べれば、泥塗れの醜い木の根に特段思うこともないが、生徒の大半は顔を顰めている。

気絶したところで耳当ての大きさが合わなかったとしても言い訳が立つかと思ひ、耳当てをずらして泣き声を聞いてみれば、赤子の泣き声というよりは砂粒を硝子板で挟んで擦り合わせた様な音だった。手首から僅かに産毛の様な血の刃が生えたことからするに、精神というよりも血に含まれる虫に作用する呪詛の様だ。

耳当てを戻し、刃をむしり取ってから、顔を背けて鎮静剤を飲む。成熟寸前であれば、多少の痛みを覚える程度には血の刃が生えるだろう。

教授は手早く大きな鉢に苗を放り、土と堆肥を被せた。葉しか見えなくなっただけから手を挙げると、自らも耳当てを外した。

「泣くことでマンドレイクは元気を失います。素早く植え替えてくださいね。では4人組で1つの苗に付く様に。時間になったら知らせ

て回りますので、それまでは耳当てを付けている様に。では始めてください」

パンジーは素手で土に触れるのを嫌がり、寮に手袋を取りに帰った。

ハンドサインでやり取りをするのは面倒で、ミリセントは暴れる苗と格闘し、手首らしき部位をへし折ってしまった。ダフネはそれが露見しない様に、祈りながら土を被せた。自分はいえ、赤子の頭を机に叩きつけて昏倒させ、それをダフネに渡す係だった。

「貴女子供が出来たらああするつもりなの？」

「ミリセントにも言っちゃってくれ」

「……私の子はきつとそんなやわじやないから」

パンジーは結局温室には戻って来なかった。

大した運動はしていないとはいえ温室の暑さと堆肥の臭いに晒された。シャワーを求めて寮に戻ると、「具合が悪いので医務室に行ってくるわ。マクゴナガル教授にはよろしく伝えて頂戴」とパンジーの書置きがあった。

次の授業は変身術。夏の間には研鑽を重ねたとはいえ、苦手意識自体は残る。2年生にもなればどれだけ高次化するかわからなかったが、本日は夏の間には復習をしているかどうかの確認だった。復習といっても昨年の履修範囲であったコガネムシを鉤に変えるだけであり、これは無詠唱でも問題なく行えた。寮を問わず生徒の大半は時間をかければ要領を思い出した様であったが、目立ったのはウィーズリーだった。

獅子寮のブラウンに聞くところ、ポッターとウィーズリーは車で暴れ柳に激突したらしく、その際杖が折れたという。ウィーズリーが怨嗟の声を漏らしながら杖を振りまわすのは好きにさせておけばいいが、その度に火花が散り、腐臭を孕んだ煙が教室中に立ち込めるのは辟易した。

杖は一般的な魔術師にとって生命線である。元より杖を用いない系統の魔術を修めるならばともかく、ホグワーツではその様な指導は無い。振り返ってみれば、一般的な杖に比べてただ大きいだけである

仕込み杖でさえ認められなかったのであるから、副校長は壊れた杖を用いる者にまともな指導はしないであろう。新しいものを用意すればいいものだが、ウィーズリーは貧困家庭である。奨学金制度もあるが、ウィーズリーは成績不良であり、更に杖の損傷は自らの責任に因るものであり、希少植物である暴れ柳をはじめとして学校に対して少なからぬ被害を与えている。ましてや、ウィーズリー家と乱闘をしたというマルフォイ家が理事であるのだから、奨学金など望むべくもないだろう。

昼食になると漸くパンジーも顔を出したが、校医に処方された血飴をたっぷりと生姜の入ったスープで流し込み、また医務室に帰った。血飴は血の酒を嗜む狩人にとっては只の菓子であるが、本来は吸血鬼の血を継ぐ者の栄養補給や、貧血やその他諸々の事情から効率良く鉄分を摂取するための食品である。パンジーは相当重いのだろうが、見舞いに行くのも迷惑だろう。

「次は防衛術か……去年は犯罪者、今年は作家。ホグワーツの教授陣は層が厚いな」

「家庭教師の方がまともかも。ホグワーツでまともに学力を得るなら、教授の個人指導とか研究室に入るしかないかな」

「後は部活動？ 別にクイディッチだけがスポーツじゃないからね。私はブルストロード家の方針があるから関われないけど」

「学生の手習い如きで勝敗を語るな、だっけ」

「うん。ボクシング部とかレスリング部は見たけど、確かに学生のお遊びって感じだった。基礎体力つけてないのに型や技だけ真似たって真髄には至らないよ」

「アレを見る。噂をすればと言う奴か」

獅子寮のテーブルではポッターとロックハートが写真撮影をしていた。撮影者は見たことが無いので1年生だろう。3か月前、ポッターはアルバムを手にしながら自身を普通の子供と称していたので、彼にしてみれば面白いものではないはずだ。知らない者が勝手な期待を寄せ、勝手に失望する様にはポッターとはいえ流石に同情する。

寮に戻ると、眠気覚ましにとフランキ監督生がエスプレッソを振る

舞っていた。これも自主活動の一種で、学年毎の他寮の動向や授業の進行といった情報交換が行われている。紅茶を好む者は多いが、それでも求めてしまう程、彼のバリスタとしての腕前は確かであるという。ジェラルドも教えを乞うていた様だった。

1限か2限が防衛術であったのか、「親の伝手で魔法省に業務改善命令を出させたい」「病的な自己愛者の独演会」「禁固刑有料体験会」「出席するより教科書代をドブに捨てる方が時間を無駄にしないだけ建設的」という評価が4年生からもたらされていた。次のコマがその防衛術であるのだから笑えない。

この情報交換会は古式ゆかしきコーヒーハウスとは異なり、女性も参加可能である。もともと、女子房のサロンでは男子の幻想を打ち砕く様な内容のガールズトークが展開されているのであるから、男子房のクラブでも似た様なものだろう。お兄様の蒐集物とやらもそこで入手したものに違いない。

始業ぎりぎりまで粘って防衛術の教室に入ると、前列は女子生徒で埋まっていた。ハーマイオニーは予想と異なり、最後列でポツターの隣にいた。三人で横並びとなる席は空いていなかったが、ノットが「席移るよ」と空けてくれたので、始業の鐘と同時に着席する。

ロックハートは最前列に居た者の教科書を取り上げ、その表紙に在る自身の写真と自身の顔を並べ、ウイंकをした。獣性が高まる、あるいは脳を吸われた気分になった。

「私——ギルデロイ・ロックハートだ。勲3等マーリン勲章、闇の力に對する防衛術連盟名誉会員、そして、『週刊魔女』5回連続『チャームング・スマイル賞』受賞——もともと、私はそんな話をするつもりではありませんよ。バンシーをスマイルで追い払ったわけではありませんしね！」

なら何故それを話した。

ミリセントは机の落書きにさらに書き加え、ダフネは教科書を読んでいるフリをしていた。顔は見えないが、前列の女子生徒はその笑顔に蕩けているのか反応はなく、男子生徒の中には既に机に伏して寝ている者までいた。

「今日はどれだけ教科書を読み込んで来ているか、ちよつとした小試験から始めましょう」

ロックハートは最前列の生徒達に用紙を裏返して渡すと、最後列まで行き渡るのを待った。嫌がらせて特定の生徒に配らせるスネイプ教授、杖の一振りですれぞれに配布する副校長と比べると新鮮である。

合図と共に用紙を捲る。

『ギルデロイ・ロックハートの好きな色は何?』

何故人生に一切の役にも立たない情報を頭に入れる必要があるのか。

次の設問に目を通す。

『ギルデロイ・ロックハートの密かな大望は何?』

銀幕のスター、その後に魔法省大臣。

自身が語った経歴からして、あながち的外れでもないだろう。

『現時点までのギルデロイ・ロックハートの業績の中で、彼が最も偉大だと考えていることは何?』

ホグワーツ教授職に任命されたこと、とでも書いておこう。

『ギルデロイ・ロックハートが1日の中で最も大切にしている時間は何?』
全て防衛術に何ら関係もない、頭痛を起こす様な問題ばかりであったが、苛立ちに任せた回答をすれば、「どうやらミス・ボーンは私の気を引きたいらしい——けれど、いけませんね。個人指導の時間が欲しければまずは私のことを知ってもらわないと」などと妄言を吐き出しかねない。流し読みで覚えている限りの回答を書き殴り、後は無回答とした。

30分が経ち、答案を回収したロックハートは満点を獲ったハーマイオニーに10点を与えた。彼女は陶醉した顔でその栄誉を受け取った。

「私が教えるのは魔法界で最も穢れた生き物と戦う術です。この籠の中には、今まで君たちが体験したことのない恐怖が秘されています——が、私がここにいる限り、皆さんに危険はないでしょう。落ち着いて……これを見たまえ!」

籠を覆う布が取り払われ、そこには群青色の妖精が群れを成している。ヤーナムには居ないが、あれがピクシーである事は知っている。かつて、赤子を狙う習性を利用して、特別な血を持つ女の赤子を市民から探し出すために医療教会で研究されていた。だが、何のことはなく、その習性とは小さいから襲いやすいために赤子を襲っているというだけの理由であり、ピクシーに関わる研究は凍結されたのだった。「これが危険？　この教室のどっかにトロール・イーターが居ますし」獅子寮のフィネガンが笑いながら言い、周囲の生徒はこちらを見た。その名の由来を知っていて挑発を繰り返すのは、被虐嗜好でもあるのだろうか。

深く息を吐き、思考を一度洗い流す。

ピクシーはヒトを襲うが、深山幽谷や妖精郷と呼ばれる異界でもなく、魔法界であれば偏在する程度の妖精である。場所によつては庭小人や火蜥蜴よりも多く目にするという。生徒達の失笑は至極当然の反応であったが、ロックハートは生徒が恐怖に慄くものと思っていたらしい。

「思い込みはいけませんね。連中は厄介で危険な小悪魔に成り得ますよ！　なら、君たちがこの危険にどう対峙するか、見せてもらいましょう」

自分がいる限り、危険はないのではなかったか。

ロックハートの表情は笑顔のままであったが、言葉にはクソガキにコケにされたという不快感が滲んでいた。

籠から放たれたピクシーは瞬く間に教室中を飛び回り、地獄を顕現させた。

ロングボトムは2匹掛かりでシャンデリアに吊られた。ある者はインクを飲まされ、ある者は手に何本もの羽ペンを生やす事となった。部屋中に掛けられているロックハートの肖像画はピクシーの小便塗れとなり、女子生徒の何人かは法衣を破かれた。ピクシーの何匹かは城外に脱出するために窓を叩き割って硝子の雨を降らせ、それを見上げていた者は光を失った。

「さあ、たかがピクシーでしよう？　捕まえてみなさい！」

流血沙汰になつてようやくロックハートは杖を取り出したが、その瞬間に杖を奪われて窓の外に放り捨てられた。生徒はそれを見て扉に殺到し、目を潰された者は押しつけられ、倒れ、踏まれた。

ロングボトムは外されたシャンデリアごと床に叩きつけられていた。昨年の飛行術の恐怖が蘇つたのか、浅い息を繰り返しながら、血塗れで奇妙な角度に曲がつた脚を抑えている。

「マリアもやりにくそうだし、そろそろ逃げた方がいい?」

「ミリセント、ダフネを頼めるか?」

「うん。マリアも気を付けて」

机の下に一時避難をしていた2人を護っていたが、大半の生徒が教室外に退避したため攻撃が集中し、そろそろ限界が見え始めていた。ダフネは目を抑えて蹲っている生徒の襟を引っ張り、ミリセントは襲い来るピクシーの群れを散らしながら教室を出ていった。

「では残った皆さんでピクシーを籠に入れておいてください」

入り口で恐々と教室内を覗いていたロックハートは、甚だしく無責任な事を言い放ち、扉を閉めた。確かに杖が無ければ何も出来ないだろうが、それにしても教え子を危険地帯に残して逃亡など現代とは思えない倫理観である。

「おい! ふざけるな! イカレてるのかアンタ!」

ウィーズリーが扉に走り寄つて蹴りを繰り返すが、門でもされているのか、開くことはなかった。

飛来するピクシーを獣肉断ちで叩き潰しながらロングボトムに近付くと、アンモニア臭がした。

「ロングボトム、気絶してないだけ貴公は立派だ。こんな状況で気を失えば死ぬだけさ。怯えながらも意識を保っている事は誇れ」

僅かにロングボトムが首を動かす。一応は理解できているらしい。

ハーマイオニーは魔術でピクシーを硬直させ、ウィーズリーはロックハートの著書で殴りつけている。ポッターは流石の動体視力が為せる技か、飛行中のピクシーを正確に掴むが、指を噛まれて放り出していた。

「社会奉仕に忌避感はないが、児童労働を強制されるとは思わなかつ

たな」

シャンデリアの破片を投げナイフに変化させ、それを浮遊術で飛ばす。それだけで5体。次に飛来した群れを鞭へと変えた獣肉断ちで血霞に変え、7体を加える。机を蹴り飛ばし、2体を圧殺。最後に窓から逃げ出そうとする個体に石礫を投げつける。頭蓋を抉られたそれは、狂った機動で壁に衝突し、甲高い断末魔の悲鳴を上げて動かなくなった。

「これで最後……ではないな。既に教室外に2体が脱出している。面倒だな」

壁に礫と成ったピクシーの死骸を引き抜くと、力加減を誤ったか首が腕げた。

「うえっ」

「ウィーズリー、気絶したピクシーを寄越せ」

「何をするんだよ」

「何をと言われても、殺す他あるまい？ これらはもう人を襲う事に慣れた。いや、既に慣れている個体もいたな。こんな惨状を引き起こす無能が管理できるとも思わないし、人の世に出たら今以上の惨劇を引き起こすぞ。それとも自分でやるか？ ヒトに似た形をしているとはいえ、鶏を絞めたことがあるなら抵抗も薄いだろう？」

「……任せるよ」

ウィーズリーが殴り、気絶させたピクシーを放る。鼻から脳漿と思われるものが流れ出していたので、遠からず死にはするだろうが、暴れまわっても面倒なので小刀を胴に突き刺した。

「殺すのは可哀想じゃないか。閉じ込められていたんだから、驚いて暴れただけかもしれない」

「ポッター、動物園の獅子が檻を出てヒトの子供を食べた。さて、その獅子はどうなるかな」

「……分かったよ」

扉に近付けば、人の気配は未だ残っていた。

「室内の消毒は終わった。扉を開けてくれ」

「ああマリア、ロックハートが鍵をかけてどこか行ったから、私じゃ開

けられないよ」

「ミリセントか。こういう魔術は苦手だが……」

開け……ダメか。ハーマイオニーも試してくれ」

「ええ。」

開け……反応なしね。

開け、開け……二重詠唱もだめ。

開け、胡麻の弾けるが如く……自由祈祷でもダメ。

多分、教員の鍵と対になってる、ホグワーツの防衛魔術なんじゃない？」

効果が無かったとはいえ、既にハーマイオニーが自由祈祷に達していた事に驚く。

定立された既存の呪文に任意の文言を加える事によって、出力結果をより意識しやすくする技法である。馴染みのないラテン語の呪文では、結局のところ「蛇口を捻れば水が出る」程度の、動作と結果しか想像が出来ない。これに「滝の様に」「絹糸の様に」「滴る様に」といった、自身の想像をより詳細にする文言を加えることで、その効果の効力や性質を変える事となる。大抵の魔術師は「最大の」と付け加える事で済ませているが、自身の経験や信念から成る語句の方が、より出力結果と意思の結合は強くなる。

開錠術の祈祷文に「開け胡麻」を用いる事は珍しいものではない。しかし、それは『アリババと40人の盗賊』の様に、胡麻の実が弾ける様を「開く」という動作の比喩として用いるものだ。実際に胡麻の実が弾ける様子を見ていないのに、その語句を加えたからといって術効が強くなるわけでもない。

自由祈禱については、妖精の呪文で学ぶことはできない。ホグワーツでは3年次の呪文学になってようやく魔術の基礎理論が始まるが、自由祈禱を学ぶのは5年か6年次であったか。

講義という形で教育を受ける事が少ない魔法族、魔術の理解がない非魔法族、そのどちらに対しても、座学よりは実践で学習意欲を持たせる方がよいという教育方針なのであろうが、ハーマイオニーの様に自主学習が出来る人間にとっては理解の枷となっている様だ。

1年生の段階では、四則演算さえ怪しい者もいるのが魔法界の教育水準である。非魔法界の学力で上位であった彼女にとつて、地獄にも思える低劣さであろう。ホグワーツが学級崩壊を起こしていないのは、ひとえに教員への恐怖による。故に、ゴーストが教員を務める歴史学や、生徒にさえ怯えていたクイレルの防衛術はまともに講義として機能していなかった。

基礎理論は現実のビルゲンワースで学び、9歳から実践のために聖杯と化したあの夜のヤーナムに挑む教育が正しいとは言えないが、いきなり聖杯に叩き込まれる事の無謀さを考えれば、やはり基礎理論から進める方が高効率であろう。

「自由祈禱なんてよく知っていたな」

「ロンが昔やっていたから調べたのよ。その時は鼠を黄色に変えるとか言っていたわ」

「あー……「お陽さま、雛菊、溶ろけたバター」かな。失敗したけど」
ウィーズリーも聖血の一族とされている。親や兄から体系的ではなくとも魔術の知識は得ているのだろう。それでいてあの成績とは理解が出来ないが。

「物は試しに……青ざめた血の空、赤い月。天上に至るヤコブの梯子。遊歩道に導くトランペット。開け」

強い抵抗があり、杖を持つ腕が震える。ハーマイオニーの言う通り、城そのものの防衛機構の一部として機能しているらしい。昨年あの羽鍵の扉も同様であろうし、本来の役割を思えば、おそらく城門は最も堅固な防御が施されているだろう。

術式は異なるのだろうか、発動中の儀式魔術を妨害したお兄様とお姉様の能力を改めて思い知らされる。

「抵抗される位には干渉できたが、打ち破ることはできないか。元々魔術の素養が欠けているとはいえず、精進が足りないかと怒られそうだ。まあ、気落ちしていても状況は変わらない。

「ミリセント、扉を壊すから離れていてくれ」

「わかった」

足音が離れてから、斧で戸板を破る。材質は木であっても、魔術障

壁を重ねられたそれには石にも等しい硬度があった。刃は潰れてしまい、柄も歪んでいる。修理では効かないだろう。

当面の脅威は去ったために爆薬や散弾銃で蝶番を破壊するのは憚られたが、工房の職人たちの渋面を想えばやはり銃器を使うべきだったかと後悔する。

「うん。やはり筋力は全てを解決する……アウレリアお姉様の至言だな。何とかすり抜けられる程度には開いたか。ポッター、校医を呼べ。医務室は野戦病院さながらだろうが、ロングボトムも重症だ。ウィーズリーはロングボトムの着替えを持って来い」

「お前は？」

「この部屋の修復だ。やれると言うなら替わってもらおうが」

「分かったよ。ネビル、直ぐ呼んでくるからね」

持ち合わせの水薬は精神安定剤となるが、鎮痛剤ではない。痛みをかき消す程に投与すれば、二度と目覚めぬ眠りに落ちるだろう。ロングボトムには悪いが校医が来るまで痛みに耐えてもらうしかない。ミリセントが武術の鍛錬の内に覚えたという、鎮痛作用のある呼吸法を知っていたのが幸いだった。

「私も手伝うわ」

ハーマイオニーが杖を振るい、散乱した硝子を窓にはめ込んでいった。僅かに隙間があるのは、医務室で治療を受けているであろう生徒達に破片が突き刺さっているためだろう。

「それで？ ロックハートの感想は？」

「酷かったわね」

「何だ？ アイドルにお熱だったんじゃないのか」

ロングボトムから離れ、ハーマイオニーは声を潜めて言った。

「さっきまではね。本を読んだ時は凄い人だと思っただし、若くて顔もいいから夢中だったわ。ええ、夢中でしたとも。

ちよつと。笑わないで」

「いや、案外俗なことも言うものだなと」

「私だって成績が良いだけの普通の女の子よ。馬鹿にしないでくださる？」

……政治家にも、クリケットの名選手も、敏腕経営者も、みんな代筆者がいるでしょ。代筆自体が悪いこととは思えないわ。誇張しているかもしれないけれど、その内容に僅かでも説得力があれば、読者は夢中になれる。

書店で初めて目にして、それから本を読むにつれて、私はどんどのめり込んでいったわ。けれど、読めば読むほど疑問も湧いてきたの。これは本当に教科書なのかしらって。サイン会でも校内でも、ハリーを何かの道具みたいに扱っているみたいに思えるのも気になったわ」

「で、先程幻想から目覚めたと」

「そう。本の中の彼は、ピクシーに手間取って、その上生徒に危険を押し付けて逃げる様な人じゃないわ。そう考えてから本の内容を思い出すと、幾つもおかしなところが見えてくるの。ただの表現の違いだと思っ込んでいたところが、実は全く違う人の体験なんじゃないかって」

「正解だろうな。ダフネ達から聞いたところだと、ロックハート程の成功があるならとくに社交界に出てきているはずだと。それに、あれの持っている勲章は娯楽や知識の普及といった功労に対するマーリン3等、防衛術協会での位階は名誉会員。どれも著された体験に与えられる栄典ではない。ヘルマンやダフネの見立てでは、ロックハートとはギルデロイ・ロックハートという美男を看板にした作者集団だろうと」

「多分それが分かっている人は大勢いるんでしょね。分かっているも、面白いからそれを認めている。別に小説を出版することが罪ではないもの。ああ、でも、やっぱり恥ずかしいわ」

「これからどうするんだ？ ロックハートクイズ満点女王様は」

「少しずつ薄めていくわ。若いイケメンにうつとりしてる女の子の方が普通でしょ。レイブンクローの子たちは別として」

「連中もアレで才知を誇る学徒だ。早晚気づくだろう。」

研究室に呼ばれるなら貞操には気を付けてくれ。あれだけの容姿と知名度がありながら浮名も聞かないから、もしかしたらロリコンか

もしれない。教員になったのも若い女を求めているのかも知れないぞ」

「想像して悪寒がしたわ」

寮生から聞いたのか、ヘルマンとドロテアが箒とピクシーの瓶詰を持って現れた。瓶には辛うじてピクシーであると分かる青い皮膚が血の中に浮いていた。群れならばともかく、たった2匹をよく見つけ出せたものだと言えば、レッドゼリーを血の酒に浸して誘き寄せたという。言われてみればピクシーの習性に適った極めて効率的な方法ではあるが、その冒瀆的な方法をこの短時間で思いつき、実行する男を頼もしいと言うべきか、恐ろしいと言うべきか。

籠の中に死骸と瓶を入れ、教室の惨状を修復し終えた頃になって、ようやく副校長と校医がやってきた。

「直接的な被害が無かっただけ、前任者の方がまだ教育者としてまともだったのでは？」

ヘルマンが副校長に言い放った。その手はピクシーの血液で汚れており、握りつぶしたのであるということが分かる。

教室の損傷自体は修復したが、壁にこびりつく血や小便に濡れた肖像画はそのままである。被害を受けた生徒達の心もまた治療が必要だろう。

「何故あんな人間を教師として招聘したのかは知りませんが、狩人が3名も動いている事態は認識していらつしやいますか。獣狩りではないただの害獣駆除とはいえ、公的な依頼であれば少なからぬ対価を請求しているところです。もともと、本件も昨年度の獣狩りについても自主的なものです。事実、ホグワーツから一切の支払いはありませんでしたから、これらの惨事は狩人が出る幕もない、学校の統制下にある事態であると認識していらつしやると」

「さつすがホグワーツ。教員の不手際で生徒が大量に医務室に担ぎ込まれても想定内って事ですな〜」

「何人もの生徒が教科書を破られています。また著書が売れてロツクハート大教授様は嬉しいでしょうね」

ウィーズリーも手に持つ教科書以外は引き裂かれていた。新たな

杖も買えない家計を考えれば、これ以上の余計な出費をどこから捻出するのだろうか。

「校長に伝えておきます。それと、スリザリンに15点。グリフィンドールに5点」

「ハーマイオニーだけではなく、ポッターとウィーズリーもそれぞれ駆除に関わっています」

「グリフィンドールに10点」

副校長自身も思うところはあるのだろう。多くは語らず、校医と共にロングボトムを連れて行った。

「ロックハートの言う事に、1つは真実があつたな」

「何が？」

「連中は厄介な小悪魔になる、だ。やっぱりhogwartsは魔境だよ」

医務室で休んでいるはずのパンジーは、今頃悪魔の被害者達に囲まれているのだろう。

競技場使用許可証

多くの者が食堂で昼食時間を過ごす中、蛇寮クイディッチチーム選抜が行われた。広間から離れ、わざわざ森に近づく者は敵性勢力として取り扱われ、容赦なく捕縛された。

「小さい方のボーンはヘルマンとドロテアとローテーションでビーター、ドラコが不調ならシーカーで使う。キーパーはケント。後は2軍だ」

瞬発力で言えば在学中の狩人の誰をも上回る、魔術で強化された筋肉はブラッジャーを粉碎した。魔力を失い、ただの鉄屑となって地に堕ちるブラッジャーの残骸を見て、プリントキャプテンの言葉に異を唱える者はいなかった。

別段ポジションに拘りは無かったが、キーパーについては性格上適性が無い、チェイサーは手の大ききから使える技に制限があるのとことから、ビーターとシーカーの予備として扱われることとなった。

土曜日の午前、ミリセントのジョギングに付き合ひ、早めの朝食を食べていると、クイディッチウェアに着替えたマルフォイが声をかけてきた。

「ボーン。クイディッチだ」

「は？ 貴族の朝の挨拶は「クイディッチ」か？ 寡聞にて知らなかったが、ダフネ達もそんな挨拶はしてこなかったぞ。まあ私が貴族ではないというだけの話かもしれないが……クイディッチ、マルフォイ」「君は何を言ってるんだい？ これからクイディッチの練習だ」

練習も何も、深夜まで行われる蛇寮新入生歓迎会を考慮し、プリントキャプテンは練習予定を入れていなかった。

急かされるままにオレンジジュースでトーストを流し込み、競技場に来てみれば、既に獅子寮生が練習をしていた。先程のジョギングで汗を吸った運動着が肌に貼りつき不快だったが、それ以上に汗の臭いが無いだろうかと気になる。着替えたいが、発注したクイディッチウェアは未だ手元に届いていない。

「よく来たな、ちっこいボーン」

「はあ、おはようございます」

キャプテンはいつにも増して仏頂面だった。ドロテアはヘルマンのものと自分のものとで2本の箒を並べて浮かべ、器用にもその上で寝ていた。

「ドラコ坊ちゃんかな、練習したいと張り切って、ご尊父の旧友である我らが寮監に相談した、というわけだ」

「はあ、それが？」

「で、本日はグリフィンドールの割当日だが、寮監はそれに対してこんなものを用意した」

渡された羊皮紙には、寮監の名において新人シーカーの練習の為に競技場の使用許可を与えると書き込まれていた。

「有効なのですか？」

「前例はねーが、有効ではある。そもそも競技場の使用許可なんぞ、慣習でしかねえ。教官が各寮の申請に基づいて割り当てているだけだ。厠を使うのに許可証もクソもねーが、それが1つしかねーなら紳士的に順番を守れてことだ。あくまで、紳士的に、な」

教育課程さえまともに設定されていないのであるから納得は出来る。だが、一度この手法を用いれば無法状態となる。特にマクゴナガル教授が獅子寮寮監ではなく副校長名義で出してしまえば、他の寮監は校長に泣きつくしかない。寮監は新人の練習のためとは言うが、どのチームにも新人選手はいるだろう。これと言って特に蛇寮だけが優先される様な理由もない。

「協賛者には逆らえない、という事ですか？」

「……情けねー話だがな。後でウッドとは話をつけねーと」

声を潜めて訊けば、珍しく顔を歪めるキャプテン。フリント家もまた純血の名家であり、マルフォイ家とは浅からぬ縁があるのだろう。意気揚々と競技場に突き進むマルフォイの背中に、キャプテンは苛立ちのこもった視線を向けていた。

「フリントー」

直ぐに飛来したグリフィンドールチームキャプテン、ウッド先輩が怒声を上げた。その歩みは、一步踏み込む度に芝が捲り上がる程の勢

いである。

「我々の練習日だ。スパイ目的か、それとも何かを勘違いしているのか知らないが、今すぐ立ち去ってもらおう」

怒りも当然である。既にウェアが汗で濡れていることから、早朝から練習をしていたに違いない。

「そうキレんなよ、オリバー。競技場はこんな広いんだ、別に俺達が居たって困る事はねーだろ」

「ふざけるな！ 予約は予約だ！ さっさと消えろ！」

「汚ねー唾を吐き散らかしてるところわーりーが、こちらにも使用許可があつてな。見ろ」

キャプテンはウッド先輩に許可証を渡す。許可証とは名ばかりで、羊皮紙の切れ端に走り書きされている様なものだったが、スナイプ教授の署名はされている。

「何を馬鹿な……こんな事が……いや、新人シーカー？ 順当にいけばデイルク・ボーンだろう？ ただの配置換えとは言わないが、今更何を練習するって言うんだ」

「シーカーは僕ですよ」

マルフォイが一步前に出た。

「マルフォイ家のお坊ちゃんかよ」

「ヘイ、今年もロニーにお熱かい？」

「まっさか父親までウィーズリー家のケツを狙ってるとは思わなかったな」

「ロックハートに夢中で自分を見てくれないからって大勢の前で大乱闘。貴族ってのはやる事が派手だね」

「ウチは貧乏暇なし、金のある奴は暇だからやらしー事しか考えてないんだろ。羨ましいね」

赤毛の双子は普段であれば揶揄うだけに留まるところが、嫌悪感を剥き出しにしていることから、書店での乱闘は余程腹に据えかねたと見える。

「……マルフォイ家を持ち出すとは、偶然の一致だな」

キャプテンは何かを思いついた様で、邪悪な笑みを浮かべていた。

「偉大なる先輩、ルシウス・マルフォイ様は後進の教育にも熱心でね。こんな素晴らしいものを与えてくださったってわけだ」

キャプテンはニンバス2001を突き出した。傷一つない磨き上げられた柄が、陽光を受けて燦然と輝く。黒を基調に、銀があしらわれたそれは芸術品とも言える美を持っている。前級の2000シリーズに比べて最高速度はそのままに、機動性が高められているという。乗り比べた事は無いので分からないが、耐久性と整備性、積載重量を追求するヤーナム産の箒とは異なるだろう。

「ニンバス2001だ。2000シリーズに比べても相当に水を空ける性能。クリーンスイープなんざ、一掃だな」

グリフィンドルチームは言葉を失い、憤怒と絶望と羨望とが混沌とした表情だった。

「どうして練習しないんだ？ それに、なんでアイツがここに居るんだよ」

「ウィーズリー、僕はスリザリンチームの新しいシーカーだ。父上から賜った箒を、こうして両チームで賞賛していたところだよ」

やってきたハーマイオニーとウィーズリーに対して、マルフォイは箒を見せつけた。クイデイツチに興味のないハーマイオニーと、兄弟が皆クイデイツチチームに所属しているウィーズリーとで、その表情を比べるのは面白い。

「騎士道を誇る獅子寮らしく、そんな老いぼれのロバで戦場に出るかい？ それとも、誰かみたいに教員に箒をねだるかい？ ああそうだ、クリーンスイープを競売にかけるといい。今じゃ中々お目にかかれない骨董品だ。高値が付くだろうね」

ポッターの箒は副校長が与えたものである事は、公然の秘密となっていた。事実、ポッターがスニッチを取った試合では「名将マクゴナガル」の大合唱であったらしい。

「与えられた馬の背に乗って見下す程、滑稽な事は無いわね。願うだけなら誰でも乗れるわ。それが立派な騎士になるか、無様な敗北者になるかは騎手次第でしょ。お金を払って乗せてもらう気分はどうかしら、お坊ちゃん」

「誰もお前になんて聞いてない。生まれそこないの穢れた血め」

穢れた血。それを公的な場で口にすれば地位を失うだろう言葉。ヤナム人にとってはそもそも魔術師に流れる血こそ寄生虫に蝕まれた穢れた血であるため、それ自体は特に意味はない。

一方で、グリフィンドールチームは似た様な悪罵を投げ、双子先輩はマルフォイを痛めつけようと飛び掛かっていた。キャプテンはマルフォイを引き倒す様に後ろに庇うが、ウィーズリーがそれをかいくぐり、杖をマルフォイの眼前に突き付けた。

「ナメクジ喰らえ、マルフォイ！」

閃光と共に爆音が響き、鳥の群れが森から飛び立った。

その閃光は杖先ではなく把から噴き出し、ウィーズリーの胃を直撃した。よろめき、倒れたウィーズリーは、脳喰らいのそれよりも大きなげつぶと共に、ナメクジを吐き出した。

ひたすらに気持ち悪い。

「ざまあないね！ お姫様を護る騎士気取りが！ 残念だったな！」

マルフォイはひとしきり笑った後、赤毛の吐き出したナメクジを見ない様にしながら言い放った。

「ハーマイオニー、杖を貸してくれ。うん。」

……ウィーズリーも偶には役に立つ事を言うものだ。ナメクジを喰らえ、マルフォイ」

杖から出た閃光は、正しくマルフォイに当たる。吹き飛びながらマーライオンの様にナメクジを吐き散らす様に、魔力の加減を間違えたのか、損傷したウィーズリーの杖では本来の出力が出ていなかったかのいずれかと悩む。

「馬鹿やろオボロロロ……ボオオオオン！ 誰ヲボロロロ……撃つてる……ッ！」

「言つたはずだ。貴公がハーマイオニーを侮辱したら相応の報いを受けさせると」

蒼白な肌、ナメクジとくれば、思い出すのは漁村である。ヘルマンは獅子寮との諍いにも一切興味を見せず、棍棒でジャグリングに興じていたが、屈みこんでナメクジを観察し始めた。吐瀉物であるのだが

気にならないのだろうか。

「ワアオ！ 魔術って凄いですね！」

いつから居たのか、先日ポッターとロックハートを撮影していた1年生がウィーズリーを撮影していた。口ぶりからすると非魔法族から生まれた者だろうが、無邪気な邪悪さは穢れと言えなくもない。

「マリア、何なの穢れた血って。魔法界のFワード？」

ハーマイオニーは侮辱的な言葉を投げつけられたのだろうという状況は理解しているらしい。キャプテン同士は離れて何かを話し合い、狩人はナメクジを眺め、グリフィンドルチームは遠巻きにウィーズリーを励ましている。

「そうだな。ほんの僅かでも理性が在れば、そうそう口にしないときれる侮辱語だな。意味としては、いわゆるマグルから生まれた者という意味だが」

「その通りじゃない。パーキンソンから似た様な事よく言われてるけど？」

「そう、その通りだよ。私の知る限り、黒人差別の様に歴史的経緯がある言葉に比べて、この言葉には侮蔑語として取り扱うべき背景が無い。過激化した純血主義思想があり、それらの信者が暴れた事は事実だ。だが、地球が平面であると信じられる程度に、非魔法族が劣った生物であるという風潮が英国魔法界を席卷したことは無い。それにも関わらず、殊更にこの言葉を最たる侮蔑語として扱う事は、結局のところ心の底では非魔法族を蔑んでいる証左だと思う」

「僕なんて、未だ入学して1週間もしていないのにおたくらの寮生から「教室がソイソース臭え」だの「日本人がなんでここに居るんだ？ ドイツとイタリアとよろしくやってろよ」だの言われてますよ。だからどうしたという事もないですし、ハギスを喜んで食ってる様な連中に何を言われたところで僕の誇りは傷付きません。キレルなら、ナメられたという事実だけで十分でしょう。結局、今の状況ってそれと同じ事でしょう」

落ちていた枝でナメクジを刺しながらケントが言った。無表情で何度も何度もザクザクと刺し続けている。言葉とは裏腹に、相当に根

に持っているのだろう。

「どうなのです、グリフィンドールの先輩方。」

私はハーマイオニーを侮辱したという事に怒りますが、どんな言葉でも侮辱されれば同じ様に怒りますし、報復もします。正直私にとつては、蛇寮に対する他寮の侮辱の方が余程酷いと感じる事もありますし、酷いと言うならハーマイオニーの言葉もです。

いえ、むしろハーマイオニーの方が酷いと言えます。飛行術の授業から、ハーマイオニーはマルフォイが飛行術に優れている事を知っています。それでいてシーカーの立場を買ったなどと、彼自身の才能と努力を貶める言葉は、非魔法族から生まれたという事実を指す言葉よりも酷い侮辱と言えるでしょう。ましてや、今日に限って言えば先に仕掛けたのはハーマイオニーです」

「いったい君はどっちの味方なんだい」

どちらかは分からないが、双子先輩のどちらかが言った。

「別にどちらという事ありませんよ。非魔法族の技術、自動車を弄んではしゃぐ貴公らの弟と、ハーマイオニーを穢れた血と罵ったマルフォイト、どちらが正しいか論じている様なものですから。そしてそのどちらもが地に転がってナメクジを吐いている。つまりは人間、誰もが皮を剥けば汚物の詰まった動く肉というだけの話です」

「うっわ僕この子苦手だな」

「ウチのロニーはなー、僕らがスリザリンから受けたいやーな体験談ばかり聞いて育ったからなあ」

「道徳教育の時間はそこまでだ。ウチのシーカーは見ての通り使い物にならねー。グリフィンドールは予定通り競技場を使ってくれ」

ウツド先輩との話し合いが終わったのだろう、プリントキャプテンがパンパンと手を打った。

ケントが突き刺したナメクジが絶命すると銀の煙になったことから分かったが、術は体内の魔力を転換して実体化させるという、一般的な魔術を応用したものである。それを胃から生じさせることと、対象者の意思で止められないという点で、嫌がらせとしては非常に優秀な呪詛となっていた。

放っておけば止まるはずだが、マルフォイは立ち上がる事も出来ず、「父上に言い付けられたくなかつたら早く医務室に運べ」と息も絶え絶えに言い、ハーマイオニーが非常に苦々しげな表情でぼそぼそ謝ってから、杖で操り、医務室に運んだ。

ウィーズリーはマルフォイと同室なんて嫌だと言うので、ポッターが森番の小屋に運んで行った。

「よくやった、ボーン」

キャプテンがマルフォイの箒を拾いながら言った。

「何がです？」

「競技場を使わなくて済んだ」

「元よりマルフォイが攻撃される様に仕向けたのはキャプテンの策でしょう。ウツド先輩とはこれで手打ちですか」

キャプテンはそもそも競技場を使いたくなかったのである。敢えて箒とマルフォイ家を称揚し、獅子寮生達をいきり立たせたのは、マルフォイを凶に乗らせるためだ。ウツド先輩がどこまでその意図を理解しているかは分からないが、クイデイキチ同士の高度な読み合いが展開されていたのだろう。

「ああ。」

勝利とはどんな手を使っても得るべきだが、相手に敗北を認めさせなければならぬ。競技場が予定通りに使えなかったから負けた、妨害されなきゃ勝てたはずだ、そんな言い訳を通すような勝ち方じゃ、いつか這い上がってくるんだよ。徹底的に相手の勝ちの目を潰し、負い目を抉る、そうして屈服させるのが勝負つてもんだ」

「相変わらずですね」

「おう。それとな、純血主義者も反純血主義者もクソ食らえだ。」

オレがクイデイツチに拘るのは、何をやってもフリント家って名前が付いてまわるからだ。成功したところで純血のお蔭、失敗すればざまあみろ、だ。くだらねえ。嘘だと思うだろうが、フリント家は死喰い人とは何の関わりもねえ。だが、蛇寮の純血ってだけで白眼視だ。オマエのダチ、グリーングラスやブルストロード、それにパーキンソンも同じ様に思われてるだろうよ。よっぽど反純血主義者の方が差

別主義じゃねーか。

チームをヤーナムの連中で固めているのも、能力以上に、オレに遠慮がねーからだ。箒に乗れば、何を考えていようと、男だろうと女だろうと、肌の色も、宗教も、生まれも育ちも関係ねえ、同じルールに縛られた只の1プレイヤーでしかない。オレはオレで在り続けるために飛ばし、それには血だの家だのと争うなんざ邪魔でしかねえ。

だから、まあ……感謝する」

「勿体ないお言葉です、キャプテン。私など、ただ疑問を口にしたただけの事。さしたる信念もなく、差し出がましい口を失礼しました」

言葉を返すと、普段よりキャプテンの眉間の皺が減っていた。只のクイデイキチだと思っていたが、その裏の苦悩を初めて知った。

「マーカス、妹を口説くのは止めてもらおうか」

「チビに興味はねーよ」

「妹に魅力がないと言うのか」

「メンドくせーなコイツ」

先輩方と別れ、ハーマイオニー達と医務室に入る頃にはマルフォイの発作はどうか止まっていたが、魔力の消耗が激しく、今度は普通の嘔吐感を呈した。校医が調査したという薬は確かに即効性があったが、代わりに耳から煙が立ち昇る様になっていた。

「えーと、マルフォイ……改めて、ごめんなさい」

マルフォイの滑稽な姿に酷く憐れみを覚えたのだろう、今度は真摯に謝罪をするハーマイオニーだった。

「赦すと思うか！ この穢れた——」

「ナメクジのお代わりか？ なあ、そんなに美味かったか？ トツピングに練乳でもかけるか？」

「……いや、そもそもこれは君のせいだろう、ボーン」

「最初に獅子寮を挑発したのは貴公だ。それを受けてハーマイオニーが貴公を詰った。それに対して貴公が反撃した。これに対して、私は宣言通り報復した。ハーマイオニーは謝罪した。これ以上、何の文句がある。」

第一な、あの言葉はマズいだろう。想うのは勝手だ。家で独り言ち

るのも勝手だ。だがな、それを人に向かって言うのは……例え分別のつかない子供だとして、貴公はマルフォイ家だろう。家で父君が何を言っているかは知らないが、公の場でそれを言う事は無いだろう？ マグル生まれだとか下賤な連中だとかは言う事もあるだろうが。

父君にナメクジの味を話したところで、あの言葉を公然と発した貴公こそ、家名を貶めたと叱られるだろうな。ウィーズリーの様に吠えメールを楽しみたいか？ 私は面白いので構わんが」

書店での乱闘とやらでも、マルフォイ氏からその発言は無かったのだろう。それを言っていれば、今日になってハーマイオニーが困惑するはずもない。

「分かったよ。ぐ忠告通り、心の中で言う事にするさ」

「それでいい。心を縛るつもりはない。だが、舌は縛る。私と私に繋がりのある者への侮辱については、どうなるか思い知ったろう」

「……ポッターはそれに入るのかい？」

「入らん。好きにしろ……と言いたいところだが、精々後悔しない様にしろ。言われたポッターが自死でもしたら、いくらポッターだとはいえ貴公の心は曇るだろう」

「どうかな。喜んで献花に行くかもしれないな」

ハーマイオニーは校医の淹れたココアを舐める様に少しだけ飲んだ。タンパクの焦げる臭いがする程に熱すぎるのだ。

「身内同士の連帯感、身内以外への攻撃性……スリザリン的って言われているけど、別にどこも同じなのね。スリザリンもグリフィンドールも、魔法族もマグルも変わらない」

「賢くなっただじゃあないか、グレンジャー。ああいう正義ぶった連中だって、自分が正しいと思っているから正義面してるだけさ。一つ教えてやろう、お前達は僕らスリザリン生を群れる事しか出来ない臆病者なんて言っているけれど、それはね、独りでいると呪詛を投げられるからだ」

「まさか！ そんなこと——」

「優等生様は知らないだろうね。教員が黙認しているからな。呪われだからと医務室に来て、誰にとか、どうやってとかは知らぬ存ぜぬ

さ。

「そうでしょう！ マダム・ポンフリー！」

「お静かに！」

「はっ。こういうわけさ。他の寮の連中ときたら、アイツ等はスリザリンだから自作自演に違いない、卑怯なスリザリンのやりそうなことだよ、と。スネイプ教授を除けば、寮監連中までそれを信じてる。僕が教員だったら、全生徒の杖を検めるのにね。ダンブルドアが蛇寮に何も言わせないから、他の寮はお咎めなしさ。お前の大きなお友達が育てた竜だって同じ事だろう。ウィーズリーが手を噛まれて毒で腫れた時、校医が気づかないはずがないだろう？ だって、何の毒か知らなければ、何の薬を使えばいいかなんて分かるわけもないんだ。万病に効く薬なんて、それこそお前達が騒いでいた石くらしいものだろう。」

結局、博愛主義者ぶっているダンブルドアは、その実とんでもない差別主義者ってことさ。スリザリン生って敵を作っておけばみんな仲良しこよしだろう？ そんな扱いをしても構わないと、スリザリン生を格付けしているのさ。その下で、自分を闇の魔法使い予備軍に立ち向かう正義の魔法使いだと酔っぱらっているのが、お前達さ。」

ハーマイオニーはマルフォイの言葉が信じられない、否、学校という場でこの様な事がまかり通っているという事が信じられないのだろう。昨年度の初期にハーマイオニーが学生から受けた虐めとやらは、暴言と無視だけである。それだけでも尋常な11歳の精神には十分に耐え難いことだろうが、蛇寮生はそれを数段上回る暴力を受けている。元々、医療自体が歪に発達している魔法界では、殺さなければ暴力ではないという倫理観が働いている。それが大人になり、親になり、子をその様に育てるのだから、無邪気な邪悪の拡大再生産は止まらない。

蛇寮女子房にあるサロンで監督生から聞いた話では、純血の純潔を穢してやると強姦され、忘却術や魔法薬によって精神外傷を治療しなければならぬ者も居ないわけではないと聞く。それを処罰することとは強姦されたという事実を浮き彫りにさせるため、結局は秘密裏に

被害者と加害者への忘却術だけを施されているのだとも。その証拠はないが、それが有り得る事実だと恐れられる程には、蛇寮生が受ける他寮からの有形無形の攻撃は日常的となっている。

「マルフォイの言う事は誇張ではなく事実だ。独りで廊下を歩いていたら、トロール・イーター狩りだ、度胸試しだと、背後から呪いをかけて来た馬鹿共がいたからな。ダフネに知らればあれほど独りで歩くなと言ったのにと怒るだろうし、お兄様に知られば加害者が生まれたことを後悔……もとい、自主退学するまで拷問されるから黙っていたが、杖腕の指先から肩までの骨を念入りに砕く程度で赦してやった。骨の髄まで自らの罪を教え込んでやったのに、教師に泣きついて何故か私が減点された。」

……まあ、骨を砕けば髄もないか。その日から血塗れ女帝の名が爆発的に広まったな。そのおかげで直接手を出してくる馬鹿は居なくなっただが」

「グレンジャー、お前が蛇寮の席で食事が出るのも、多分ボーンやダフネの友人だからだぞ？ あいつに手を出したら報復されるからつて。ウィーズリーをはじめとして、獅子寮の男子が蛇寮で食事をする裏切り者を赦すはずがないだろう。そういうわけだから、それを飲み終わったらさっさと帰れよ。僕とボーンがお前を誘拐したなんて噂が立つのも面倒だし、僕がその……吐いたから、お前に助けられたつて事を説明しなきゃいけないのも嫌だ」

マルフォイの言葉には、僅かな親切心が滲んでいた。介助に対する一応の感謝のつもりなのだろう。

ハーマイオニーは目を潤ませ、一気に杯を空にし、医務室を立ち去った。

「僕が言う事でもないけれど、何か言葉をかけてやる方が良かったんじゃないか？」

「……私と共に在る事が、彼女の危険になるとは思ってもみなかった。貴公に言われるまでそれに思い至らなかつた事に少し自己嫌悪している。」

今はなんと言葉を掛ければいいのか分からないし、かといって次会

う時にどう接したのか……」

「二度関わってしまったなら、もう関わり続けるしかないだろう？友人関係を止めたところで、今度はあいつがあれこれと嫌がらせをされるだけだ。だったら、あいつの面倒を見続けるべきじゃないか。」

……去年の今頃にはもう、あいつは獅子寮で邪険にされていたし、君と関わっていた。今更他人になるのは随分と薄情だと思うけどね」「ふむ。貴公、優しい面もあるのだな。驚いたぞ」

「監督生が言っただらう。同輩には優しくしろって。それに、君がまたグレンジャーの報復でもしたら、減点されるのは蛇寮だ」

ココアは少し冷めて、漸く飲める温度になった。口に含むと、存外砂糖は少なく、苦かった。

「では私は行くぞ。それと、分かったとは思うが——」

「グレンジャーの悪口は言うな、穢れた……を言うな、だろ。今度からはこっそりと言うさ」

猫

ハロウィンがやってきた。元々ヤーナムにハロウィンを特別視する習慣はなく、ホグワーツにしても昨年の事件のせいでそう愉快な気分になれるものではない。それはそれとして甘味は素晴らしい出来で、厨房に感謝を伝えるとさらに大量の菓子を渡された。

ケントが教えたという日本文化は既に反映されていて、南瓜を模したネリキリとかいう菓子が可愛らしく、味も好ましかった。その菓子は季節に応じて形を変え、春であれば桜、夏には向日葵といった具合らしい。ヤマムラ家からコンペーターなる砂糖菓子を貰った事はあるが、ネリキリは初めてだった。

屋敷妖精が言うには、ドイツ料理の幾つかもヤーナム人が持ち込んだという話で、その名を訊けば、確かに遠く歳の離れた兄の名だった。ドイツではダームストラングに通う者が大半である。ドイツ系であるカインハースト、その所領であるヤーナムから伝わるまでは、ドイツ料理と言えばキャベツの酢漬けとソーセージだったのだろう。

生徒から感想や要望が来る事は珍しいらしく、あってもアレルゲンフリーの除去食申請者が大半であるから、生徒が純粹に食を求めて訪ねて来るのは楽しみであるらしい。ウィーズリー家の双子も何故かここを知っているらしく、同じ様に突然やってきて菓子パンや軽食を受け取っていくという。クイディッチにしても、懲罰対象者にしても、学内でその名を聞かないところはないと感心した。

「で？ まだ食べるつもり？」

「太らないからな」

「糖尿になっても知らないからね」

ダフネが呆れながら言うが、屋敷妖精達が満面の笑みを浮かべて差し出してきたのだ、それを受け取らないわけにもいかない。盆いっぱい並ぶ南瓜色のパイやケーキやマカロンを、落とさない様に慎重に廊下を進む。

従者を自称するケントこそこの盆を持つべきであろうが、厨房から広間に戻る頃には誰も居なかった。

「おっと、急に止まってくれな。落としたりどうする」

「お菓子ばかり見ないで、ちゃんと前を向いて歩きなさいな。それよ、見て？」

パンジーの指し示す方に、人だかりが出来ていた。地下牢とは逆方向、上階に続く階段で立ち止まり、何かを見上げている。

最後尾にいる者に何だと訊けば、何も分からないが皆が居るからと言い、状況が全く分からない。反響音から、フィルチ管理人が怒鳴っている事は分かるが、「私の——！」「お前が——！」などと、内容はよく分からない。子音がよく聞き取れないが、推測するに「私の帽子」「お前が病気にした」と聞こえる。性病か何かの隠語かだろうか。「なんだろ」

「どうせろくでもないことだろう」

「気になるけど、野次馬は品がないわね」

「ドラコあたりが教えてくれるよ。行こ」

ミリセントが遠回しにマルフォイを馬鹿にしたことにパンジーは気付いていないらしい。

管理人が生徒に怒鳴っているのはさして珍しくもなく、ハロウインの宴で羽目を外した生徒が何かをやらかした程度の事だろう。そう思って階段を下り始めて、甘い菓子の香りに異質な臭いが混じったのに気付く。

「血だ。血の匂いだ」

「え？」

「多分上の騒ぎは流血沙汰だな。それも結構な量だ。殴られて鼻を折ったとか、鉄柵で肌を切ったとか、そんなものじゃない。おそらくバケツ程はあるな……巨人でも無ければ致死量を超えている」

「人が集まるのも当然ね」

「ちよつと見てくる。菓子は私とダフネの部屋に置いてくれ。マルフォイの下男に食べられては困る」

「はいはい、行ってらっしゃい。お茶淹れておくからね」

盆をダフネに渡し、階段を上がる。1段上がるごとに、その香りは濃厚になる。

生徒の間をすり抜けながら3階まで上がると、ハーマイオニーとポッター、ウィーズリーに詰め寄る管理人と、その騒ぎを眺めている狩人達が居た。

「また君か。ゴーストの集会ももうお開きといった所かな」

数日前、ハーマイオニーから「絶命日パーティーって出席したことある？」と誇らしげに聞かされた。生者の為の饗宴では無いのだから行ったところで後悔するだけだろうと思ったが、溢れんばかりの知的好奇心と僅かながらの優越感を滲ませる彼女に何も告げられる言葉は無かった。

「マリアー！ ええそうなの。それで、えーと……成り行きでここに来たら、こんなものが」

「成り行き！ 成り行きでお前達は私の猫を殺したのか！ 殺してやる……殺してやるぞハリー・ポッター！」

管理人がポッターの胸倉を掴んで叫ぶが、ヘルマンがその襟首を掴んで引き離れた。管理人は脚をもたらせて倒れ、濡れている床に尻を着く。

「お兄様、どういう事です？」

「分からん。血の匂いと怒鳴り声があるから来てみれば、グレンジャー嬢とお仲間達が管理人に詰問されていてな。見る」

お兄様が指し示した方を見上げると、「秘密の部屋は開かれたり。継承者の敵よ、気を付けよ」との文が、血で記されていた。むせかえる程の血の匂いの源はこれだろう。

その脇の松明には、管理人の愛猫が尻尾を絡ませてぶら下がっている。成程、先程聞こえた管理人の怒声は「私の猫」「お前が殺した」だったか。

「継承者……何のことか分かりますか？」

「いや、さっぱりだ。知識を継承するという意味なら、学生全てが対象となるが……ならば猫を襲う意味も分からん」

「謎解きはともかく、猫が可哀想でしょう。おろしてやりましょう」

「触るな！ 殺したんだ……お前達が殺したんだ……っ！ これ以上あの子を痛めつけるな！」

血走った目で睨まれたので、両手を上げて猫から離れる。殺したも何も、ここに来たばかりの者に何を言っているのかという気はするが、それだけ気が動転しているのだろう。

「というわけだ」

お兄様は面倒臭いという心情を隠すことなく表していた。

「はい。わかりました。この血文字、ヒトではありませんね。揮発しているのか分かりませんが、遺志が余りにも少ない」

「そうだな。ヘルマン、何か分かるか？」

「見た以上の事は何も。ドロテアは？」

「猫ちゃんかわいそつて事くらい」

「ただの感想じゃないか」

「違うよー。猿じゃないんだから、体重を支えられる様な尻尾はしてないでしょつて。だから身体がカチンコチンなんですよ」

「なるほど。イングリットは？」

「秘密の部屋なんていつも開いているでしょうに、と」

「今年のトロール侵入事件から、あのトイレは秘密の部屋と呼ばれている。」

復旧されてなお、大半の学徒にとってトロールがそこで殺されたという衝撃はそこで用を足す気を削ぎ、密談をするにはうってつけという事もあって、秘密の部屋と呼ばれる様になっていた。

「ケントは？」

「トイレの継承者つて、何を継承するのでしょうか？」

「……下衆で卑猥なことしか思いつかないので、俺はノーコメントで」

「否定したいけど僕も同じく」

「あのさあ」

管理人が怒鳴り散らしているのをよそに、狩人は至極平静である。何か動物が死んだことは間違いないが、人が殺されたわけでもなく、獣に関わる様な狂気もない。狩人としての役割であれば、先日のピクシー駆除の方が余程適している。

男性陣のふざけた回答に呆れた視線を投げるドロテア。お兄様に何事かを耳打ちされたヘルマンは溜息を吐いて応えた。

「情報が少なすぎるが、少し考えてみようか。大抵、こういった謎めいた犯罪予告というのは、実際は犯罪そのものを目的とはしていない。承認欲求、特に自己顕示欲の表れだ。目立ちたい、自分に注目してほしい、自分の価値を認めてほしい。だから、犯罪を起こすことで、多くの人が自分に関心を寄せている状態を楽しむんだ」

「怨恨とか脅迫の場合だってあるんじゃないの？ 後は、テキトーな事書いて捜査の攪乱？」

「それらも考えたが、この文章からはそれが感じられない。例えば、『裁かぬ神に代わり不義に鉄槌を下す』とか『キングスクロスを爆破されたくなければ、1千万ポンド用意しろ』とか。

捜査の攪乱についてはまだ断定出来ないな。既に何かが起きているのか、これから何かを起こすのか分からないから」

「猫とは関係ないのかしら。こうやって明らかに普通ではない形で見せつけるなんて、何かの意図が在りそうなものだけだ」

「妖怪猫吊るし……日本にそんなものはありませんが……猫に纏わる怪異……ああ、ケット・シーとすれば読めますね。猫の王の継承権争いじゃないですか。猫……副校長でしょうか。校長が近く退任するとして、後任は副校長でしょうか、それに反発する派閥の決起声明だとか？ 昨年度の事件から未だ半年も経っていませんから、幹部人事が今まで動かなかっただけで、実は校長の退任は決定している、なんてこともありそうです。犯罪者を教員にしていたなんて引責辞任ものですよ。秘密の部屋はシャドウ・キャビネットの事でしょうか」

「わしはまだまだ退任するつもりはないのう。生涯現役じゃ」

生徒達を掻き分け、校長と教員がやってきた。何故か笑顔のロックハート、若干機嫌の悪そうな副校長、非常に機嫌の悪そうなスネイプ寮監。特に副校長はケントを凝視していた。

「……ふむ。何故諸君がここに居るのかね？」

松明にぶら下がっている猫を一瞥し、寮監はこちらに視線を動かした。

「あたしは野次馬です」

「僕はその付き添いです」

「先輩に連れられて、ですね」

「騒がしかったものですから」

「私は血の匂いがしたので」

「つまり、騒動が起きていて血の匂いがあるため、先日のピクシーと同様かと思い、まかり越したというわけです」

それぞれが雑に並べた理由をお兄様が統合する。

「気は済んだかね」

「今分かる範囲では。少なくとも、ミスター・ポッターがこれをしたのではないだろうこと以外、何も分からないという事が分かりました」

悪びれもせず、ヘルマンは肩を竦める。

「ほう？　日常の苛立ちを猫で憂き晴らしたのではないと何故言えるのかね。ミスター・ウィーズリーと共に凱旋飛行したことも、無関係ではないと吾輩は思うのだが」

「分かっているらしいやうに、寮監も人が悪い。実際の動機も経緯も知りませんが、ロンドン上空を飛行したことは自己顕示欲に起因すると推測することもできます。ですが、それで罰則を受けてなお、犯罪行為で自らの名を知らしめようなどと思うでしょうか」

「アレは違う！　急にキングスクロス駅のプラットフォームに入れなくなっただんだ！」

「そうですね。事実であれば英国魔法界を揺るがす大問題ですね。もしかしたら、壁を壊せば白骨化した失踪者が見つかるかもしれません。魔法省のそういった発表は寡聞にして知りませんが。あるいは君達が急に魔力を失ったのでしょうか。魔法器系が完全に機能しなくなるなんて、聖マンガで検査を受けるべきでは？」

ウィーズリーが吠えるが、ヘルマンはにべもなく言葉を返す。馬鹿にした様に、実際馬鹿にしているのだろう大きな溜息を吐き、眼鏡の掃除を始めた。

「ひとまずプラットフォームの秘匿機能不全が事実であると仮定しましょう。では、何故その場で待たなかったのです？　ミスター・ウィーズリーの保護者はいつまでも入構しない君達を探していたで

しようし、生徒の保護者達は9と3／4番線に住んでいるわけでもありません。その場に居れば、戻ってきた魔法族の誰かしらを頼ることも出来たでしょう。

と、こういったわけで、彼にしても彼の友人にしても頭が悪い。頭が悪いという事は、出来る事も限られます。猫にしても血文字にしても、彼らが何ら痕跡を残さずにこれを為すという事は不可能でしょう。血は未だ乾いていません。どうやって血を運んだのか、どうやって塗り付けたのか、どうやってそれらを処分したのか。幾つか方法は提示できますが、聞き及ぶ彼らの学力で破綻なく行える方法はありません」

血文字に関して言えばハーマイオニーは可能だろうが、藪蛇だろう。彼女は先程、ここでは説明できない何かがあると言外に示唆していた。それを分かっているからこそ、ヘルマンはハーマイオニーの名を出さなかったのだろう。

「さつきからベラベラと！ こいつらがやったんじゃないと言うなら、お前だ！ お前がやったんだろう！ だからそうやって誤魔化しているんだろう！」

「冗談を。僕がやったのなら、ミスター・ポッターにかけられた疑いはそのままにしていた方がいい。それに、僕であればより効果的な方法で、より凄惨にハロウィンパーティーをぶち壊しにしますよ。この程度を僕のせいにする？ 馬鹿にしているにも程がある。クリスマスにトナカイのBBQ大会を開催しようとウィーズリーズに誘われた事の方がまだ理解できる」

野次馬の中から「ヘイ、パイセン！ 今年こそやるかい？」と声が聞こえたが、ヘルマンは無反応だった。たとえ話では無かったらしい。彼らとこの皮肉屋とにそんな友好的な関係が生み出された経緯は全く分からない。

ヤーナム人であればBBQと聞くと思い浮かべるのはあの獣狩りの夜の陰惨なキャンプファイヤー、あるいは生きながら火炎瓶に焼かれる罹患者達の姿である。そのせいか、豚肉の串焼き等はヤーナムで最も狂気的な食物とされている。

聖杯は過去の記憶の再現装置とはいえ、力及ばずお母様の幻像を豚の贅としてしまった狩人もいる。あるいは、オドン教会まで同行する道中でお母様が豚の肛門から臓腑を引きずり出す様を見た者もいるという。また、トウメルの聖杯で堆く積まれた豚の遺骸と、そこから生じる蛆と腐臭は酸鼻を極める。いずれにせよ、ボーンの血を引く者であるなしに関わらず、ヤーナム人は豚肉が嫌いである。

聖杯の中では馬も同様に惨たらしい遺骸を見かけるが、何故か禁域の森の馬の遺骸では「素晴らしき美味」「食事の時間だ」「レバーの病だ」「ああ、協力者よ！」などとといった手記が多く残されている。ドロテアの言った通り、馬をよく用いていたヤーナム人の舌に馬肉は馴染み深いものだったのかもしれない。

「もうよいじやろう。アーガス、一緒に来なさい。ポッター君、ウィーズリー君、グレンジジャーさん。君達も来るのじゃ」

「ダンブルドア校長、私の部屋が一番近い——直ぐ上です——どうぞご自由に——」

「ありがとう、ギルデロイ」

校長が猫を抱えると、喜色満面のロックハートが校長に並び、何かよく分からない妄言を垂れ流している。管理人、ハーマイオニー達がそれに続いた。副校長は寮に戻って休めと生徒達を散らした。

「僕らは無罪放免ですか？」

しばらく壁を眺めていた寮監にヘルマンが尋ねると、寮監が振り返った。その表情は苛立っている様に思えるが、ヘルマンに向けられたものではない様だった。

「後で痛くもない腹を探られるのは御免ですよ」

「所見を述べたまえ」

「動機は自己顕示欲に類する何かでしょう。類するというのは、文言にせよ状況にせよ、自己顕示欲と断定するには要素が薄いためですが」

「続けたまえ」

「単なる加害目的であれば、より狙いやすい獲物から始めますし、この様な犯行声明は行わない。」

動物虐待の多くは、自身が受けている虐待を転嫁することで解決しようとする代償行為、あるいは他者を加害することで性的興奮を覚えるといった精神病質によります。単なる加害欲求であれば、例えば鳥かごの中の梟、学生のペット、それが激化していつて、学生を襲う様になる。

他寮生に呪詛を投げつける事が常態化している生徒もいますが、それは復讐や自寮の為だとか言って自らを正当化した場合か、自身の優越性の示威でしょうか。

ただ、管理人に恨みを持つ生徒は多くいるでしょうが、これ程の呪詛を行う生徒ならばあの管理人程度に見咎められる様な間抜けではないでしょうし、示威行為は他者の目が存在する場合に於いて意味を持ちます。人知れず猫を虐げてやった等と吹聴したところで弱者を足蹴にするカスとしか思われませんかね。つまり、リンチをするなら大勢の前で、という事です。

……寮監、何か？」

「構わん」

寮監の表情は酷く苦々し気であり、構わんという言葉とは乖離していたが、ヘルマンは促されるがままに言葉を紡いだ。

「動物虐待及び加害を目的としていなかった場合、猫を強力な呪詛で石化した事は、こうした文言を残したことも合わせ、何らかの意図を表したものだと考えられます。

そもそも、違法行為をするのであれば、自らの痕跡を敢えて残すという事は愚の骨頂です。にもかかわらず、痕跡をこうも大々的に残すのは、自身の存在を知らしめたいが為。こんな事が出来る自分は素晴らしい、素晴らしい自分を見てくれ、そう言っているようなものです。故に、承認欲求、特に自己顕示欲の発露と。

……あの、寮監？ 具合が悪いのであれば、日を改めて研究室に伺いますか？」

「構わんと言っただろう！ 続けたまえ！ 諸君がこうやって余計な事に首を突っ込んだ以上、吾輩は諸君の潔白を校長に進言しなければならん！ ピクシーを惨殺した件で諸君の立場が悪くなっているこ

とが分からんか！」

「余計な事と言うのは否定できませんが、立場が悪い？ 成程、校長とは頭が悪くとも出来る職業なのです。どう考えても、生徒の安全性を確保できない授業を行う教員とそれを任用した責任者の方が悪いでしょう。」

続けますが……犯人の動機は自己顕示欲としましたが、それにしては、余りにも犯人に繋がる情報が無い。

自己顕示欲を充足するための犯罪は、意味のないパズルや言葉遊びはしない。かといって、特定されたら破滅するわけですから、その葛藤として、何かに擬えた偽名や、自分の名前のアナグラムを用いるものです。そうして、他人が自分に興味を持っている状況を楽しむわけです。もつとも、その自ら創りあげた偶像に陶醉して、それになりきってしまうという倒錯もあり得ますが。

……ドロテア、何か飲み物を持って来てくれ。寮監のお加減かご機嫌が非常によろしくない。

本件に照らしてみれば、秘密の部屋だとか、継承者だとか、何かを臭わす文言はありますが、決定的ではない。

まず、答えに行き着かないという結論を前提にお話しします。

何故今日なのか、から考えてみました。ハロウィンパーティーという年に一度の催事。ですが、文言は全くハロウィンに触れていない。例えば、ケルト人にとって、ハロウィンは父祖の霊との交わりを意味し、それと共にやってくる悪霊に触れないように、魔術的な防御として蕪で作った仮面を纏った。

この学校で行われている、南瓜料理と南瓜菓子を食べる音楽を聴くなんて、ケルト文化の継承者にとっては文化、即ち精神の冒瀆ではない。ですから、生徒を含む学校関係者全員が継承者の敵で、ハロウィンの雰囲気壊すためにケルト人がこれをしたというなら、一応の道理は通ります。しかし、猫とこの場所という要素がハロウィンと繋がらない。

ケントの言うケット・シーは確かにアイルランドの伝承ではありませんが、ケルト文化ともハロウィンとも関係がない。それに、ハロウイ

ンムードをぶち壊したいなら、広間の目立つ場所に書けばいい。ハロウィンパーティーに参加するのは基本的に全校生徒です。やるならここを通る特定の寮だけではなく、全校生徒が暗澹となる様な場所に書くべきだ。僕ならパーティー開催中の広間の壁や、その食卓に並ぶ皿に血文字が突然描かれる様にしますよ。

ではハロウインは何らかの偶然の一致で、犯人にとつては大した意味がないとします。ハロウインそのものではなく、今日という日、3階という場所、水浸しの床、秘密の部屋という文言、それを結び付けるとしたら、昨年今日、マリアがトロールを殺した日です。これならば筋が通る。

……マリアにはトロール・イーター、緋色の淑女、血塗れ女帝といった二つ名が有る」

「止めろ、名乗った覚えはない」

好き好んでそんな名で呼ばれているわけではない。では教員であればあの時どうしたのかと考えたとして、やはりトロールを殺害する他なかつただろう。流血の有無はあつただろうが、結局は為すべき役割を代わりに為したというだけの話であり、恐怖や暴力の象徴として扱われる事は甚だ本意である。

「緋色の淑女は驚寮の灰色の淑女をもじったもの、血塗れ女帝は蛇寮の血みどろ男爵をもじったもの。そして、トロール・イーターはデス・イーターをもじったものだ。ここで新しい要素を加える。トロール・イーターはクイレル・クイリナスを殺害することで、闇の帝王を打ち破った。とするならば？」

「まあ、闇の帝王の継承者、それに敵対する者は私ということになるか。3階の廊下といつても、秘密の部屋はこの棟ではないから、継承者は去年の出来事には詳しくはない……つまり、新入生とも推測出来るな」

「そうだ。それで、猫の要素は何だと思っ？」

猫から連想されるもの……副校長。4つ足。ヒゲ。耳。日光浴。欠伸。かわいい。尻尾。ミルク。魚。湖……違う、飛躍し過ぎか。眼。鳴き声。気儘。かわいい。爪。牙。獲物。狩猟。捕食者。脊椎

動物。ネコ科。

「ああ成程、猫を獅子に見立てたのか。つまり、継承者とは獅子に敵対する……おそらくは蛇寮の者で、かつ1年生。その正体は死喰い人の意志を継ぐ者と。で、つまりこれは私に対する犯罪予告だと。」

ふうん、殺そ」

「と、マリアを擲擧うのはここまでとして、結局最後の欠片が合わない。『継承者の敵よ、気を付けよ』とは、どういう事か。継承者が死喰い人として、何故警告するのか。わざわざ闇の帝王を示唆しておくながら、警告にとどめる意味が分からない。『赦しを乞うて死ね』とか『死を以って贖え』とか、怨恨を感じさせる文言ではない。そうなるかと、わざわざこんな事をするほどの熱量と、その表現方法に整合性がなくなる。」

それに、そもそも死喰い人であれば、恨むのはマリアではなく、ポッターです」

解き明かす様で擲擧われていた。ヘルマンの脛を蹴り飛ばしてから問う。

「ポッター？ 先程の猫の話と合わないだろう」

「ポッターを継承者の敵として、猫はポッターの所属する獅子寮の象徴として置いたとすれば道理は通る。むしろ自分が蛇寮生である象徴とするよりも合理的だ。」

しかし、ポッターは昨年のハロウインの件に限って言えば、関係者ではあれ当事者ではない。とすると、何故学校なのか、何故3階か、水との関わりは何か、何故殺害予告ではなく警告なのか、これらの要素がポッターと結びつかない。

それに、僕が死喰い人であって、本気で彼を殺害するつもりであれば、昼食時の広間で翩りながら命乞いをさせて始末しますよ。闇の帝王を打ち破った英雄を公衆の面前で無様に殺す、死喰い人の本懐でしよう。犯行時には必ず徴を打ち上げる連中です。それだけある種の儀式に拘りのある犯罪者集団が、自らの存在を秘匿しながら犯行に及ぶとも思えません。つまり、この落書きは死喰い人によるものではないと言えます。

死喰い人ではなく、単にポッター……いえ、それが何を対象とするかは特定しないとしても、犯人がどの様な者であれ、加害が目的であればわざわざ殺害目標も教職員も警戒させる様な真似はしないでしよう。よって、加害が目的ではなく、加害する事によって自己顕示欲を充足するものと思われませんが、前述した通り、ここに在る要素は余りにも茫洋としている。ここで論理が破綻する。

かといってただの悪質なお遊びとするには、実際に動物の血を使う辺り手も込んでいる上に、寓意に富み過ぎる。

なので、結局のところこれが誰によるもので、誰に宛てたものなのかも分かりません。しかしながら高度な呪詛、証拠の隠蔽方法から、ポッターではないと」

ヘルマンは長々と喋り続けた後、長々と喋っている間にドロテアが厨房から持ってきた林檎酒を一息に飲み干した。寮監は杯を受け取るが、口は付けずにヘルマンを思案顔で眺め続けた。

「それで？ 諸君が犯人ではないとする論拠は？」

「ありませんよ、そんなもの。むしろ、猫が死んでおらず呪われているだけと僕らが判定していたからこそ、校長も寮監も疑っているのでしょうか？ 犯人以外に何故知っているのかと」

「……何故分かったのかね？ 疑っていることも、呪詛のことも」

「疑っていることについては、寮監がポッターの聴取に行かず、ここにいらつしやるという事が何よりの状況証拠です。あの教師とは名ばかりの無能が何故ここに来たのかは知りませんが、寮監が私室から遠いこの廊下にいらつしやつたのは、校長が招集したからでしょう。しかし、ポッターからの聴取を差し置いて、校長がここに寮監を残したのは、ここに僕らが居たからです。」

猫の状態については、狩人の魔術ですね。開示出来る情報としては、僕らは死血……死んだ魔法生物の血液から魔力を感じ取る事が出来ると言えば理解して頂けるでしょうか。あの猫は管理人と意思疎通し、自主的に学徒を監視していますから、只の猫ではないでしょう。ですが、あの猫からは死血を感じ取れなかった。故に生きていますと判断したまでです。管理人があれほど興奮していましたから誤認を否

定することはしませんでしたが、校長が説明するのでしょうか？

と、いうわけです。校長には、僕らが潔白を証明することは出来ませんので、疑うのはどうぞご自由に、罰するならば拳証をとお伝えください」

寮監は長い溜息を吐いた。これだけ話に付き合わされて、何一つ収穫がないばかりか、校長の思惑すら見抜かれていたのだ。それを報告する立場にしてみれば、徒労感は一とおだらう。

「ツアイス。君の推理は実に面白いものだった。完全に前提が狂っているという点がね」

「どういう事ですか？」

「秘密の部屋とは、生徒諸君が考えている様な手洗場の異称ではない。ポッターを庇うのであれば、もう少しまともな話をでっち上げたまえ」

「お見通しですか。まあ、犯人は僕らや連行された彼らの中にも居ないでしょう。見物に来た生徒達の中に居るはずです。放火魔が燃え盛る建物を眺める様に、自身の成果物が周囲からどう評価されるか、気になって仕方ないはずですから」

寮監は林檎酒を飲み干し、その杯をヘルマンに押し付けてから廊下を去った。

「ご苦労だった、ツアイス教授」

「僕がハンニバル・レクターなら犯人はとづくに自殺してますよ。いくらポッターが可哀想だからと、即興であんな与太話考えさせられる身にもなつてください。オツカムの剃刀は刃こぼれしすぎてもう鋸になつてますよ」

お姉様がヘルマンを労い、空になったヘルマンの杯に杖を振り、再び酒で満たした。ドロテアは「飲み過ぎでしょ」と叱るが、ヘルマンは「明日は日曜だ」と言い返す。

「ケント、途中からだから経緯が分からないんだが」

「ああ……マルフォイ先輩が、ポッター先輩を継承者の敵だと言っているのに、周りは管理人の妄言を信じていたんですよ。あの場で誰かを疑ったところで、答えなんて出るはずもないのに。それでディルク

様がヘルマンに擁護する様命じたんです。人を馬鹿呼ばわりして同時に擁護する論法は初めて見ましたよ」

「そうか」

「あの様子だとマルフォイは秘密の部屋が何であるか知っているな。彼の性格と技量からして彼は犯人ではないだろうが」

壁の血文字に手を伸ばしながら、お兄様が言う。長躯のお兄様でさえ届かない位置に書かれているのだから、浮遊術か脚立を使ったのだろう。

「様子が尋常ではなかったのはハーマイオニーもです。ポッターやウィーズリーがこれをやったとも分かりませんが、ここに居た理由は何か後ろ暗い理由があるのでしょうか」

「だろうな。校長がポッター達に出来る事ではないと知りながら、彼らを連れて行った理由はそこだろう。開心術か真実薬を投与するつもりだろうか」

「これで結局、ポッター達は校長に連行されたと生徒達から認識される。僕の弁舌もまさしく徒労というわけさ。ま、寮監もありがたい助言をくれたわけだし、その辺りから調べてみようか」

寮監が去った後も手掛かりを求めて付近を調べたが、何も新しい知見は得られなかった。これがヒトの血ではない以上、狩人として緊急の事態ではない。継承者の敵が猫だとするならば、なおの事狩人が立ち入るべきものでもない。ヘルマンがほろ酔いとなった辺りで撤収することとなった。

魔眼

あれだけ狩人が悩んでいた秘密の部屋と継承者についてはあつさりと得られた。自室に戻ると、深夜の甘味の魔力と理性との葛藤に苛まれていたダフネがいた。騒動の理由を問われたため、血文字と猫の話をし、秘密の部屋を知っているかと訊けば、知っているは何の事はなく返ってきた。既に入浴を終え、寝間着に着替えているダフネを談話室に連れていくことは出来ず、ひとまずお姉様とドロテアをサロンに呼んだ。

「秘密の部屋は、ホグワーツの伝説ですね。学祖スリザリンが作った部屋で、その中で真の魔法族だけが魔術の神髄を学ぶとされています。そこにはスリザリンが残した怪物が潜んでいて、学校に相応しくない者を排除するということです。その部屋を開けられる者を継承者と」

「ならば、あの猫は学校に相応しくないと？」

「性質の悪い悪戯じゃない？ 猫に関する逸話なんてホグワーツにはないと思うけど」

「んーん。それにしても高度過ぎたんだよねー。あの呪詛はそこらの学生が出来る様なものじゃなかったよ」

少なくとも、教員がその場で解呪できない程度である。無能のロックハートはともかく、初見でクイレルの魔術に対抗していた寮監でさえも、診る事しか出来なかったのだ。

「……猫とその伝承は分けて考えるべきではないかしら。伝承のスリザリンは、純粋な魔法族にのみ魔術を教えるべきとされていたのよ。なら、学生ではない管理人を害する意味が分からないわ。

さつきヘルマンが挙げていた、何故あの場所なのか、何故今日なのか、何故猫なのか。様々な疑問と、伝承との繋がりが見えてこないもの。むしろ、猫そのものに注目する方が見えてくるものがある様な気がするわ」

「そうは言うけどさー、そんな古臭い話の悪戯がされた場所に、偶然にやんこが呪われて吊るされるなんて、なくない？」

「スリザリンとグリフィンドールは決闘までしたと聞きますから、猫を獅子に見立てたという事は？」

「お、ダフネちゃんもそれ考えますか」

「私は同意出来ないわ。確かにスリザリンと直接的に対立したのはグリフィンドールとされているけれども、純血以外の魔法族にも門戸を広げるべきとしたのは、博愛主義者のハッフルパフとされているわ。

それに、蛇寮にだって純血以外の生徒がいるもの。現代に継がれている学祖達の思想からすれば、継承者の敵はどの寮にだって居るはずよ」

「そんなに秘密の部屋の継承者が思想に忠実ならさ、あんな場所に書かないって。あたしがガチの狂信者だとして……そーだね、校長室の真ん前かな。魔法省の関わりもあるんだらうけど、結局入学者を決めているのは校長なんだし、校長は獅子寮出身者で獅子寮鼻貞。これなら猫との繋がりもあるじゃん」

「そこまで信奉しているなら、象徴ではなく本当に鷲獅子の死体を飾るのではなくて？」

それにドロテア、貴女が言った通り。継承者を騙る者であれば、あのような場所に書くこともおかしいし、警告に留める理由もないし、猫を殺さずに石化させるといふこともおかしい。

貴女の言っていることは矛盾しているわ。血文字と猫は別の事柄よ」

柔和な様でいて頑固、軽薄な様でいて頑固。お姉様もドロテアも、根幹では似ているところがある。ダフネは心配そうに目配せをするが、稀によく有る事だと耳打ちする。

「ねー、マリアはどう思うの？」

「私に振るか……んん……そもそも、伝え聞く学祖の思想というものが、正しいという根拠がない。2人の推理はそれに立脚しているが、前提が狂っている仮定では成り立たないのでは？ 先程の我らの推理も、秘密の部屋があのとロールのトイレと仮定して進めていたが、実際は違っていたらう。

少し時代を移せば、事実などいとも簡単に消失する。既に死してい

たゴースの言葉を求め続けたミコラーシユなんていい見本だろう」

「ああ、マリア様……それを言っちゃいますか」

狩人にとって、メンシス学派と同じであるとされるのは、「穢れた血」程ではないにせよ、相当な侮辱となる。2人の眼は剣呑な光を帯びた。

「マリア、言葉には気を付けなさい」

「言い過ぎました。申し訳ございません。」

とはいえ、歴史とは勝者の紡ぐもの。スリザリンにとって都合の悪い様に編纂した歴史が、現代に継がれているとすればどうでしょう。学祖達の肖像画や手記が遺っているわけでもありません。

ホグワーツは戦乱の最中に作られた城なのです。

実はハツフルパフは魔法教育の場ではなく、魔術の素養に関わりのないただの孤児院としてホグワーツを設立した。

実はレイブクロウは魔術だけではなく、科学技術をも教えていた。

実はグリフィンドルは魔術師ではなく、騎士として子供を訓練していた。

実はスリザリンこそ博愛主義者で、子供を戦力とみなすグリフィンドルと対立した。

実は秘密の部屋とは、グリフィンドルに肅清対象とされた者を匿う場だった。

……自察鼻屑の突飛過ぎる発想ではありますが、これを否定する材料もありません。もつとも、蛇寮が地下牢に在るという事実、スリザリンが決闘に負けた結果なのかもしれません。

今伝えられているホグワーツの歴史は勝者によつて都合よく歪められたものであり、秘密の部屋の継承者は真の歴史を知っている者だとするならば、猫にしてもあの場所にしても、継承者にとっては意味のある事かもしれません」

ミコラーシユがゴースの死を知らずに交信を求め続けていた理由に幾つか仮説はあるものの、こうした伝承の断絶や恣意的な編纂に解を求める説は多い。他には、そもそもウィレームを含めたビルゲン

ワースの学徒達がゴースの死を認識していなかったという説もある。いずれにせよ、上位者に関わる知識と知恵には意図的に廃されたものがある。

医療教会ではなく狩人の工房に上位者の赤子の臍帯があった。ビルゲンワースに残る学徒の手記には、臍帯の意味は既に把握されていたことを示す。だが、メンシス学派も聖歌隊も、臍帯血が上位者との媒介である事を知らなかった。

これらから、ローレンスの率いる初期医療教会は次世代に対し、意図的に情報を遮断したのであろう事は間違いないとされている。

教会に関わる建物はその幾つもが損壊・焼失したが、それを前提としてもビルゲンワースから後期医療教会に至るまでの情報が少なすぎる。処刑隊に至ってはその意思を継いでいるはずのアルフレートでさえ、処刑隊の何たるかを知らなかった。

血の医療の名の下に行われた悍ましい過去の実験は秘匿され、幹部にのみ口伝で伝えられるとしても、その研究過程・成果が壊滅的に消失しているとは考え難い。

現在のビルゲンワースは、夜明けを迎え、最後の学徒ユリエに教えを受けたヤーナム生存者たちが継いだものである。教会の上層、聖歌隊の末裔であるヘルマンが何かを知っているもおかしくはないのだが、おそらくは時計塔のマリアや、暗殺者ブラドローの様にユリエは何かを隠し、失伝したのだろうかと言う。

ホグワーツの歴史も同様であろう。

「いずれにせよ、今のままでは右脚を切り落とす事になります」

「右脚を切り落とす？ ヤーナムの諺？」

「思い込みで動けなくなってしまう事の喩えだね。まあ、狩人の始祖は義肢でもあたしより早く走ってたけど」

「ハーマイオニーの情報も気になりますし、それを聞いてから考えましょう」

入浴を終え、歯を磨き、寝床に潜るのは日付を跨ぐ頃だった。ダフネはとうに寝静まっていたが、こちらは遅くに茶を飲んだせいか横になっても寝付けない。気休め程度ではあろうがカモミールティーを

滝れ、ベッドから這い出て机に向かい、獣狩りの夜を想う。

ブラドールが行く手を阻む事は分かる。漁村から始まる呪い、それは血の医療の根幹を揺るがす事実である。古狩人デユラとその朋友はその先の秘密を知り、なおも旧市街を焼いて医療者然とする教会の業を目にし、人の為の狩人である事を止めたのであろう。狩人の悪夢に堕ちたもう一人の友を想い、それが還ってくることを待ちながら。

では時計塔のマリアはどうか。狩人の恥を隠すとシモンは言ったが、ゲールマンの徒弟であっただけのカインハーストの女が、血に酔いもせずに悪夢に身を置き続けるか。カインハーストも上位者を求めて血を弄んでいた一族であり、僅かな記録によればマリアはそれを厭い、出奔したという。漁村の惨劇は狩人の恥であったとて、狩人とは結局は彼女が嫌った血の探求に属する者であり、その恥部を秘匿し続ける意味を狩人の業を隠すためとする事はあまり合理的ではない様に思われる。

自分がマリアの立場であれば、二度と繰り返されぬ様にビルゲンワースも医療教会も殺し尽くし、ヤーナムを去るだろう。だが、彼女は時計塔に眠り、血ではなく技量を以って扱う武器を佩き、それに自らが疎んじた血の力を重ねて、漁村に向かう者を阻んだ。つまり、カインハーストの血を継ぐ者である事を受け容れたのだろうか。

カインハーストの血の特性、それは上位者オドンの子を孕む胎となることである。男性の血族であれば、ゴースの様な女性神を孕ませることも可能であるかもしれないし、あるいは特に女性にのみ発現する性質であるのかもしれない。いずれにせよ、娼婦アリアンナ、ヨセフ力を騙る聖歌隊の女はオドンの子を孕んだ。であるならば、マリアも同様、否、それ以上に相応しい胎となっただろう。

では、ゲールマンの工房に残された臍帯はマリアの子のものとするれば、マリアはオドンの子を産んだのだろうか。

今は亡きゲールマンの遺品、それは人形と髪飾りである。おそらくゲールマンに因るものだろうよく手入れされたそれらとマリアの似姿の繋がり、ゲールマンとマリアとの繋がりだ。ゲールマンとマリアには、単なる狩人としての師弟関係以上のものがあっただろう。

狩人の祖、ゲールマンの徒弟がマリアだけとは考えられないが、ゲールマンがマリア程に特別に扱う狩人の存在は思い当たらない。

だが、ゲールマンの讒言に師ウイレームと盟友ローレンスの名を聞くことはあっても、マリアの名はない。

人形は造物主たるヒトを愛すると言う。だが、髪飾りに込められた愛を識るまで、あれ……彼女は愛を理解していなかった。つまりそれは、造物主は愛するものだど刷り込まれただけの反応であったことを表す。昨年、ポッターが直面した出来事に見せた反応を、校長は賢者の意志とした。結局のところ、それは校長が思い描く賢者たる者の取る選択をポッターが取るように仕向けというだけのこと。ゲールマンが夢の内ではマリアの似姿をぞんざいに扱うのも、おそらくは人形の感情や思考がそうした作り物、あるいはまがい物だと感じたからだろう。しかし、時計塔のマリアを殺せば、人形は枷から解き放たれたと感じていた。つまり、人形は只の模倣ではなく、確かにマリアと繋がっていたのだろう。

繋がり。魂を分かち、物質を錨として留め置く技法があつたはずだが、人形の言う枷と関わりはあるのだろうか。

似姿といえ、同じ喪服を着て悪夢を彷徨うほおずきは何であろうか。異常なのは、外見だけに留まらない。歌いながら徘徊し、抱擁する。あれは恋人か子に愛を注ぐ女のそれである。ほおずきはマリアあるいは人形の見る夢だとして、あれらは何かを愛そうとする表れだろうか。あの歌は愛を歌うものか、それとも子守唄だろうか。

ゲールマンが保管していたマリアの小さな髪飾りを渡され、人形は理由も分らず涙を流す。それをもたらず感情を彼女は、喜びと称した。ゲールマンからマリアへの愛を受け取る事に、その似姿が喜びを得た。マリアと人形が繋がっているならば、人形が感じた喜びはマリアのものでもあるのではないか。

だとすれば、マリアもまたゲールマンを愛し、狩人の為ではなくゲールマンの為に漁村を封じたのだろうか。あるいは、マリアが護っていたものは狩人の恥部でもなく、ゴースの遺子でもなく、マリアとゲールマンの間に生まれた子か。

馬鹿馬鹿しい。

人の営み全ての動機を恋愛感情に起因するとする、ヘルマンの言うところの恋愛脳に陥ってしまっている。そもそもマリアが子を産んだかどうかも分からない。振り返ってみれば、根拠も道筋も無い憶測の垂れ流しだった。案外、眠気を誘うカモミールティーの効果はあつたのかもしれない。

気付けば、湖面から届く幽かな光は月と星のものではなく、薄紫に空を染める太陽のものに変わっていた。

今日は日曜である。ダフネに倣ってブランチにしようと決め、寝床に潜り、瞼を閉じた。

†

安らかな眠りは早々に破られた。

朝食の時間にも至っていないが、ハーマイオニーが来訪したらしい。談話室の前で待たせていると伝えてくれたフアーレイ監督生に、欠伸を噛み殺しながら礼を言う。

身支度を整え、女子房を出ると、既にお兄様とヘルマンがケントの淹れた緑茶を飲んでいた。ハーマイオニーにも外で湯呑を渡しているという。昨晚ダフネから聞いたスリザリンの秘密の部屋の伝承について説明を終えた頃、女子房からお姉様がふらふらとしているドロテアを支えながら表れた。茶は要らないと言うので、そのまま談話室を出ると、ハーマイオニーが石段に腰かけていた。

「おはよう」

「おはようございます、皆さん」

「で、昨晚の件だろう。食堂や廊下ではまずい話かな」

ヘルマンの問いにハーマイオニーは頷くので、トロールの方の秘密の部屋に移動した。

「見えぬ者の声が聞こえる、か」

「ヤバいわよ」

「ヤバいですね」

お兄様がハーマイオニーの言を反芻し、ドロテアとヘルマンが応えた。

ハーマイオニー達が血文字の廊下に居た理由。それは、ポッターにしか聞こえない声を追っていた結果だという。そもその端緒となる獅子寮のゴースト、ポーピントン卿の絶命記念日の宴については些末なことであったか、思い出したいくないものなのか、特に触れられることは無かった。

「やつぱり……。それでスネイプ先生も校長もそれを気にしていらっしやっただのね」

「校長は知っているのかい？」

「ハリーはあそこに居た理由を誤魔化したけれど……おそらく、校長は開心術を使ったと思います。彼の目をじっと見ていましたから」

「またやったのか」

「またとは何です姫様？」

さして興味もなさそうに聞いていたケントの目に、幽かな光が灯った。

「ああ、校長は開心術を使う。それも、無言かつ無杖で、目を合わせただけで発動する程の使い手だ」

「何ですかそれ。下手をしたら魔眼の域じゃないですか」

「魔眼？」

ハーマイオニーの様に真つ当な学生ならば知らぬ者も多いだろう。狩人にとつては、血中の虫を狂わすメンシスの脳やほおずきと、馴染み深いものである。死者を模すことで魔術保護を施された墓守の仮面や、薬草の香気によって保護されている鴉羽のペストマスクといった装備は、技術革新によって外見に因る性能差が誤差の範囲と言える現代の狩装束に於いても、元来の効果にあやかり、未だに根強い人気がある。

「魔眼というのはね、「視る」だけで相手に作用する力、あるいはその眼球そのものの事よ。ホグワーツで教わる魔術は、術式の詠唱や動作が必要な事は分かるわね？ 魔眼はそういった条件もなく、ただ視るという動作だけで発動するの。もっとも、相手の抵抗力を上回るだけの魔力が必要なのは一般的な魔術と同じだけ」

「まー、結局は視線を介した魔術だよ」

眼とは、外界との交信具である。触れるよりもよく相手の形を知り、聴くよりも早く相手の動きを知る。時によっては匂いや味さえも知る事が出来る。相手を知る事について、血狂い達は蒙を啓くと呼び、そしてそれは確かに見えぬ世界を識つたのだ。「瞳を求めよ」の言葉が物理的に眼球を求める奇習の原因となるとは、学祖ウィレームは人の蒙の昏さに絶望しただろう。

「そう、実際のところ魔眼とされているのは「視られる」ことではなく「視られた事に気付く」事が引き金になるものが多い。視られたら狂うとか、生存本能に反する様な暗示を視線だけで刷り込めるのは脅威でもあるけれど、それだけ視覚と思考は繋がっているんだ。

そうだね……うん、かなり身近で意識しないところで説明しようか。例えば化粧。草木の汁を塗布して虫を除けたり、泥によって日光を遮つたりと、始まりは生活に根差した至極日常的なものだっただろう。それがいつしか特定の文様を描くようになり、悪霊や悪魔による目に見えぬ厄災、つまり疫病を払う力があると考えられる様になった。事実、幾つかの薬草は免疫活性化や病原体の殺傷能力があっただろうからね。

そうして文様、敷衍すれば外見そのものに魔術的な意味が見いだされ、そしてそれは文明の発達と共に階級や属性を表すものとなった。

そもそも、魔術師とは珍しい存在ではなかった。竜をはじめとする強力な魔法生物を抜きにしても、肉食獣達が跋扈しているのに、直立二足歩行によって投擲能力を得ただけの猿が生き延びられるはずもないだろう？ これだけ大型化して長命になった生物のくせに、肉体的には非常に脆弱だ。異様な毒物耐性からはヒトは狩猟者ではなく腐食者だったとする学説もあるけれどそれはともかくとして、そんな猿がここまで版図を広げたのは、魔術師の存在に因るところが大きい。幾つかの神話で集団の指導者は祭司者であったり超常の力を用いる者だったりするのはその証左だ。そういった者達にしか赦されない衣服や化粧、道具が存在することは、現代でも諸宗教を見れば分かるだろう。

もつとも、魔術は個人の才覚に左右される体系化し難い技術だし、

魔術師は繁殖力の低い生物だから、文明の発達につれ駆逐された。同じ言語を用いて同じ物を食べるのに、掌から水を生み出し、炎を操る存在が怖くないわけがない。あるいは特権を振りかざして暴政を敷いた者も居たのかもしれない。いずれにせよ、安定を得た大衆が秀でた個人を排除したくなるのも当然の事だろう。

こうして魔術師が排除された後、その権威を篡奪した者は魔術的には形骸化した象徴をも引き継いで、外見という象徴が階級を表すという認識もまた人類史に残ったというわけさ。

階級とは本来、見るだけではそれを判断できないものだ。長靴を穿いた猫なんてそうだろう？ 貧民の三男が、服を盗まれたと言うだけで侯爵の仲間入りさ。服や化粧は属性を可視化する。聖人の聖痕、罪人や奴隷の刺青だって同じことだよ。

ヒトは社会を構築して生きる生物だ。その階級や属性を知って、人は相手の認識を歪めずにはいられない。普通の子供に稲妻型の傷があれば、英国魔法界の英雄として認識してしまう様にね。彼に傷が無ければどうだろうか。英雄と同姓同名なだけの、ただの獅子寮の劣等生だろう。

魔術とは大分離れた様に思えるかもしれないけれど、視覚が与える知覚への影響は分かってもらえたかな。瞳とは、それだけ感受性の高い外界との交信具なんだ」

ポッターが額を見せる様に懇願される光景は、昨年も今年もよく目にした。印象的なものを挙げれば、あのカメラを持った新入生だろうか。子供らしい好奇が為すことだとは言え、気分の良いものではない。他方、入学前にポッターの傷について「身体的特徴をどうこう言うのは人としてどうかしている」とまで言い切ったハーマイオニーの隔絶が、今になってより一層際立って感じられる。

「だからドロテア、自身に合った身なりをしろとはそういう事だよ。君がビッチの恰好をしていれば、誰しもが道行く者は皆君をビッチだと思っただろうし、君らしい恰好をすれば君という人となり分かる。服飾を美の追求や自己表現の手段とするのもいいけれど、それ以前に君が何者であるのかは君が規定するべきだ。単に流行だからとか、視

覚的な体型補正がどうか、そういう要素で外見を糊塗していくのは結局のところ自身の魅力をも埋没させていくよ」

またその話を蒸し返すのかと思えば、ドロテアは頷くだけで特に過激な反応は示さなかった。夏の逢引で既に似た様な事を言われたのだろう。これにはお姉様も驚いた様で、目を瞬かせた。

「けれど、校長の開心術は魔眼ではない。そんな能力があればとづくにヤーナムの民は校長からの警戒を解かれているだろうさ。別に僕らは反社会的勢力でも、無政府主義者でもないし、終末論者でもない。にも関わらず、校長が僕らを危険視しながら僕らを避けているのは、得体の知れない病原体扱ってところだろう。

校長の開心術は眼を用いる事で魔術の干渉力を高めている、そんなものだ。とにかく、校長は視線を介することを利用しているだけであつて、視線そのものが魔術となる魔眼とは異なる。前に教えた通り、無言無杖であればという前提だけれども、目を逸らして意識的に心を鎖す事で十分対抗できるはずだ」

ハーマイオニーはヘルマンの目をしっかりと見据え、頷いた。信頼の表れという事だろう。一方のヘルマンは誠意に耐えきれなかったのか、目を逸らしてしまった。

「ヘルマンの講義はここまでとして、グレンジャー嬢、ポッター少年の状況だな。本当に魔術的な意味で、いや、医学的な意味でもままずいのだが、自分にしか聞こえない声が聞こえるというのは、かなりまずい。それがただの幻聴であればいい。ただ彼が精神に変調をきたしたというだけの話だからな。

彼の今までを振り返ってみて、心には重大な負担がかかってきたことだろう。物心つく前に両親が殺害され、魔法界からは遠ざけられていたところを、ホグワーツ入学となる。見知らぬ世界で英雄と祀り上げられ、失望される。教員達からは誘導され、特例で箒の旗手に成ったり、違法行為の片棒を担がされたり、両親の死の原因に対峙させられた。今年度では、彼の話が事実だとすれば、キングスクロスの安全性に関わる事態であるにも関わらず、詳細は省みられずに処罰対象者だ。信用できる大人は誰一人として居ない。余人に見えない友人を

幻想の中に創りあげても何ら不思議はない。

だが、彼の妄想上の産物ではなく、本当に存在している何かの声を、彼だけが聞き取っているとしたら……最悪の場合、俺達は彼を狩ることになる。

他に情報は？ 何が手がかりになるか分からないから、些細な事であれ、気になったことは教えて欲しい」

頭を肥大させた実験棟の患者や、特別な赤子を孕んだ成り代わりの女医でさえ、頭の中に水音や蠢きを感じただけだ。狩人ならぬ只人が、表音出来ぬ声を声として認識できるほどに変質してしまっているのならば、最早ポッターは狩るべき者である。

「あの部屋で話していたことは……ミセス・ノリスが襲われた理由は、管理人がスクイブ？ だからだと管理人が言っていました。スクイブが何かは知りませんが、校長は特にそれを否定もしていませんでした。後は、マンドレイクが育てば猫は治せることくらいでしょうか」「成程。道理ではある。伝承によれば、学祖スリザリンは選ばれた者だけに魔術を教える事を望み、秘密の部屋を作った。そこには魔術の徒として相応しくない者を排除するための怪物が潜んでいるという。生徒ではなくただの管理人を襲う理屈は分からんが……スクイブか。ま、そうではないかとは思っていたが。」

スクイブというのは、魔法族の両親を持つが魔術を使えない者、つまり無能者を出来損ないと蔑んだ言い方だ。魔法器系を持たない者をマグルと呼ぶようなものだ」

「えっ、マグルって侮蔑語なんですか？ みんな当たり前に使っているし、マグル学なんて授業の名前にもなっていますけど」

お兄様の説明に、ハーマイオニーは蒼白な顔をする。穢れた血という差別意識を投げ掛けられた一方で、実は自らも差別をしていたという現実には彼女にとって受け容れ難いものだろう。

「古い時代はな。例えば「ゴシック」という言葉は「ゴート人の」という言葉から来ている。今ではその様な意味はないが、当時の人間からしてみれば、ゴート人の様に未開で粗野で奇妙といったところだ。同じ様に、「マグル」とは「間抜け、騙しやすい阿呆」が転じたもので、

つまり魔術を使えない連中は劣っていると嘲ったものだ。

しかし、あー……敢えてこの言葉を使うが……マグルと我らとの違いは魔法器系の有無しかない。故に、彼らを指すにあたり、マグルというのは非常に使い勝手の良い言葉なのだ。我らは米国式に非魔法族と呼んでいるが、それも穿って見れば、こちら側を基準にした身勝手な言葉だよ」

「後進国とか、発展途上国、みたいなものですよね。お前らの物差しで物を言うんじゃないよ……と、極東の血を引く者が申し上げます」

「極東は仕方ないだろう。グリニッジ子午線が世界の標準として使われていたのだから。だけど、僕らも狩人ではない者がある種の羨望も込めて只人と呼ぶからね。別に差別がどうか偉そうなことは言えないさ」

ケントはどこまで冗談か分からない。ハーマイオニーを慮って場を和ませようとしているのか、真に自身の起源を想っているのか。

「とにかく、マグルという言葉に今はそういった意味はないから、普段使う事で何か問題となることもない。だがな、非魔法族生まれを排斥するべきという純血主義思想の反対は、必ずしも非魔法族と友好的であるとは限らない。マグルを受け容れてやっている、という優生思想がある事もまた事実だ。そして、それらからも嘲られているのが無能者だ」

「無能者って言葉も、魔術本位の考え方だけど、それ以外に適当な言葉も無いのが現状なんだよね。自身の精神性は魔術師なわけだから、それを非魔法族とすると、人によっては穢れた血って言われた位にキレる人もいるわけだし。なんかいいんかな。なんも語源とかない、まっさらな造語でさ」

「それもまた、自分達の背景を無視した差別だと怒るだろうね。イシユからとったからイシャーだって名づけるくらいには、それぞれものを単語で意味づけるってのは難しいことなんだろう。例えばウーマンリブ運動も、そもそもその名称が既に——」

お兄様が手を叩き、ヘルマンの話を遮った。

「さて、また話が脱線したな。ポッター少年の聞こえた声と血文字と

猫。これらは本当に関係しているのか。これは分からない。だが、グレンジャー嬢、君にも危険が迫っているという事は理解してもらおう」

「まず、ポッターの状態。グレンジャー、君は獅子寮という事と偽装友人という関係性から、ポッターが発狂ないし獣化した場合、その危害が及ぶ範囲に在る。正直に言えば、君の精神衛生からしても彼らと距離を置いた方が良いとは思うが、それは君の決める事だから、気を付けるという言葉以外に言うべきことはない。

次に、秘密の部屋。父母が非魔法族である君は、今日に継がれるスリザリンについての伝承に照らせば継承者の敵となる。血文字はただの悪質な露出狂の類だと思っているが、猫を石化させた者と同一犯だとすれば、思想は愚かだが技量は本物だ。君が狙われる理由には十分だ」

「騒動の中心に居たしね。書いた本人が見てなかったとしても、その内噂になるよきつと」

寮生活では噂話も貴重な娯楽となる。ましてや、友人も少ない成績優秀者であり、なおかつロックハートからの覚えもめでたい生徒である。マルフォイが言うには狩人が抑止力となっている様だが、心配しているという態を装い好き勝手に無根拠な恐怖を植え付けるのはさぞ胸のすくことだろう。あるいは親切な自分に陶醉して「私は本気で心配してるの！ 貴女の為を思って言ってるの！ 学校を辞めた方がいいいわ！」とでも言う輩が表れるだろう。

「そうだな。噂は狩れば済む話でもないから厄介だな」

「噂話は女子の嗜みだよな」

「男子も同じ様なものですよ。ところでグレンジャー先輩、その声って何を言っていたかポッター先輩から聞いていますか？」

ケントとハーマイオニーの顔合わせは終えていた。先輩と慕われることは経験が無かったらしく、未だに少し気恥ずかしい部分があるという。以前、今までの様な学生生活を送ってきたのかと問えば、図書室の女王だと返答があった。

頭の中に響く声。恐るべき獣に対峙するとき、人ならぬ声は狩人の

蒙を啓き、その獣の名を告げる。だが、人の声が響くこともある。

だから奴らに呪いの声を。赤子の赤子、ずっと先の赤子まで。

獣の咆哮でもなく、赤子の泣き声でもなく、はつきりと告げられた声は、まさしく異界に引きずり込む呪いである。故にポッターが醒めながらにして夢を見ているのであれば、何かに酔ってしまったことになる。

「ええつと……殺してやるだとか、引き裂いてやるだとか。後は……そうだわ。血の臭いがするって」

「血の匂いが先なのね。じゃあ、血文字を書いたのは声の主とは別の何か。でも、無関係とも言い切れないわね」

「ポッターを狙う何者かが、血文字を描き、ポッターを招いた？」

「彼が正気であればそれもあるだろうね。ポッターを狙う度胸がある人間がどれ程いるのか分からないけれど。英国魔法界の英雄を敵に回して何をするつもりなのか、何が出来るのか。猫の石化を思えば、クイレルの様に何かが入入しているとも考えられる」

「今年も変なのを採用してるんだし、外側はともかく内側の防衛はすつかすか。ドーナツみたい」

「ドロテア、その変なのに心酔してたのが去年の君だ」

「マジで止めて」

耳が痛いであろうハーマイオニーも俯いた。

「あの、いいですか？」

ケントがこめかみをコツコツと叩きながら、話し始めた。

「これも学校側の思惑って事はないでしょうか。去年度いっぱいを使ってポッター先輩を英雄化する計画がお釈迦になったんですよね？」

なら、今年の新しい仕込みなんじゃないですか？

流星に車の件は予想外でしょうけど、意味不明な人事と秘密の部屋騒動まで繋がっていると考えると、何かまたポッター先輩にやらせようとしているって事はないでしょうか。だって、猫の石化なんて出来るはずもない、ただの第一発見者である先輩たちをあんな状況で連行するなんて、敢えて彼に注目させたいのか、さもなきや馬鹿ですよね」

皆、ケントの言葉を理解するには少しばかりの時間がかかった。そして、溜めた分だけ思考が爆発した。

「その可能性は考えていなかったが道理は通るな。ヘルマンの言った通り、犯人特定に繋がる様な情報がないのも、学校運営者がやったとすれば特定されるわけにもいかない。故にあんな胡乱な文章となつたのか」

「車の処罰だって、計画外の事態を逆に利用したのかもしれないわ。校歌斉唱は始業前だから加点出来ないと仰つたのに、凱旋飛行の件は処罰対象になつているわ。

……敢えて問題児に貶める事が目的だった。彼が汚名を雪ぐ為に、事件の解決に邁進する様に」

「生徒には不可能な高度な呪詛。教員が行つたとすればこれ程合理的な説明はない。管理人の猫が対象となつたのも、学徒を呪うわけにもいかないからだと考えれば、不思議はありません」

「秘密の部屋があるかどうかは分かんないけど、秘密の部屋って伝説は実際に有るんだしね。こんなに都合良い小道具はないよね」

「賢者の石だとか、禁じられた廊下だとか、そんな学徒が首を突っ込む理由が理解できない代物よりも、よっぽど主人公が動きやすいマクガフィンだ。純血主義の犯罪者を打ち破つた英雄ですし、背景としては申し分ないでしょう」

「だからロックハートが採用されたのね。彼に魔術師としての能力は一切ないけれど、作家として、脚本家としての能力を見込んだのね。そうでなければ、トレローニーと同じくらい学校に置く意味が無いもの」

お姉様は占術学教諭に辛辣である。ドロテアと揃って死を予言され、ではその回避の方法を占えと詰めたところごちゃごちゃとくだらない言い訳を始めたので、初日にして受講放棄を決めたという。

お父様は獣狩りの夜を繰り返す事を定められ、そしてそれを打ち破つた意志に依つて今日のヤーンナムがある。定めを知り、なおもそれを受け容れるという言葉には一層の反発を感じたのだろう。

「秘密の部屋が未だに発見されていないのだから、逆に言えば何が秘

密の部屋なのかは誰も知らないという事だ。だったら、賢者の石を封じた部屋の様に作ってしまえばいいんだ。今年のポッターの冒険は秘密の部屋の発見か」

「ああ、ハロウィンもそういうことか。私がトロールを殺した日であるとはいえ、ホグワーツへの攻撃を象徴する日だ。ポッターの冒険の除幕式と考えればその通りだな」

「少年にだけ聞こえた声。それはつまり、彼にだけ聞かせた声という事だ。寮監が残って俺達に接触したのも、去年の様に俺達が物語を破綻させないかと監視する為か」

昨晩不可解であった要素が、学校が首謀者と考えただけで全て説明がつく。

ホグワーツは狂気渦巻く伏魔殿である。その事に慣れていたからこそ気付かず、慣れていなかったからこそケントが至った狂気の再発見。

「とはいえ、ポッターが実際に発狂しているか、あるいは秘密の部屋とは全く関係ない何かに呪われている可能性は排除できない。ポッター計画が事実だとすれば、また君がその中に組み込まれている。いずれにしても、気を付けた方がいい」

「わかりました。ツアイス先輩」

昨年度、校長はハーマイオニーを言葉で縛った事で、狩人の介入を招き、そして計画は破綻した。ならば、今年度は一切伝えず、かつまた、当事者にする事でポッターの協力者とさせようというのか。ハーマイオニーは唇を噛みしめていた。

「じゃあ、とりあえず今日はこんなところで。あたしたちは午後からホグズミード行ってくるけど、ハーマイオニーちゃんはお土産で欲しいものあるー?」

「ホグズミードですか?」

「学校の近くにある魔法族の村よ。3年生になると行けるようになるわ」

「ありがとうございます。ですが、お構いなく」

「そう? んじゃ、そろそろ食堂いこっか。継承者の敵が蛇寮に行っ

て帰ってこない、なんてことになったら戦争になるしねー」

ドロテアの言葉をハーマイオニーは首肯した。

獅子寮の連中は蛇寮生を呪う理由を嬉々として受け容れるだろう。その理由が全くの誤解に基づくものであると分かったとして、蛇寮は普段から純血主義を掲げているからだとても正当化するはずだ。ウィーズリーとマルフォイの諍いでは既に幾度も似た様な発言を聞いている。

マルフォイやパンジーの様な純血主義者を粛清していないという事実がそうさせるのだろうか、こちらからすれば粛清しなければならぬという理由もない。それを言うならば、蛇寮生だからと呪詛を投げる者を粛清しないのは、獅子寮全体がそれを容認している事の表れだと言えよう。

メンシス学派は死体を地底湖に投棄する連中だと言う聖歌隊と、聖歌隊は治療と称してブヨブヨに変える連中だと言うメンシス学派の様なものだ。それが全体の事ではなくとも、そういった要素を持っているだけで全体の問題にすり替える事は、ヤーナムであれホグワーツであれ、不思議なことではない。校長も自らが関わり合ってきた狩人からヤーナム全体を見定めているはずだ。

組織ではなく個人に置き換えたところで成り立つものだろうか、現在知り得る限り、校長の構成要素から善人とはかけ離れている。今世紀最も偉大な魔法使いと評される校長を見る為には、特別な思考の瞳が必要なだろう。それはきつと、交信器となる瞳と同じ様に、頭蓋を開いても見えぬものなのだ。

ブラツジャー

案の定、校長がポッターを連行した事は容疑者扱いの根拠となった。そもそも伝承が正しいとすれば、ポッターは継承者の敵として狙われる側である。純血主義を掲げたヴォルデモート卿を討った、非魔法族の下で育った魔法族。冷静に考えれば彼を避けるべき理由はないのだが、所詮は子供の集まりである。むしろハーマイオニーの様に憐憫の目を向けられる立場でありながら、非魔法族生まれの学生は彼から距離を置く様になっていた。教員達も何らかの声明を出すべきであったが、判断が付かないのか、あるいはケントの予想通り校長の策略であるのか、血文字事件についてもポッターについても何ら態度を表す事は無かった。

蛇寮に対しては予想通りに誹謗中傷が飛び、普段は開かれている寮不問の女子会も立ち消えとなった。監督生から校内移動に際しては必ず複数人で移動することを厳命され、抜け道や隠し部屋といった安全地帯が改めて周知されることとなった。

そうして迎えたクイディッチシーズン開幕戦となる蛇寮対獅子寮戦は、例年に比べても常軌を逸した盛り上がりとなっていた。まさに、熱狂である。

「まず、今日のビーターはドロテアとマリアだ。ヘルマンは今期グリフィンドールチームの分析の為にベンチに居てもらおう」

「良かった。今日は豪雨になるでしょうから」
「つくづくやる気ねーな、オマエ。次に戦術だが、今日はラフプレー無しだ。秘密の部屋騒動で連中は相当気が立っている。連中に引っ張られて判定が不利になるかもしれないねーな。やるならあからさまにではなく、事故に見せかけてやれ。」

それと、ヘルマンの言う通りおそらく試合中に雨が降るだろう。ドラコも練習じゃあ仕上がってるが、実戦経験と天候を加味すると、ポッターに有利だ。ビーターは徹底的にポッターを狙って妨害しろ。あつちのチェイサーは放っておいていい。オレたちがクアツフルをキープし続ければいいだけだ」

「別に、200点差を付けてしまっても構わんのだろう？」

お兄様が不敵に笑う。実際可能だろうと思わせる程の余裕を感じた。

「もちろんだ。ウィーズリーズはウィーズリーズだから優秀なピーターだ。ポッターの護衛とチエイサーの妨害、どちらも同時にこなせるわけじゃねえ。ポッターを磔にするんだ、点は十分に狙えるだろう。」

じゃあ、征くぞー

既に競技場にはグリフィンドルチームが入場しており、3寮の声援とそれに匹敵するジョーダン先輩の解説が轟いていたが、スリザリントチームの入場直後は野次が飛んだ。

「今年はスリザリントチームに新戦力が加わりました。蛇寮は親の金で得点を買うと噂され——いえ、一部の声によると事実ですが、箒でポーションを買った選手をシーカーとして投入しました！ ドラアアアコ・マルフォオオオオイ！」

マルフォイは抗議の為に編隊から外れようとしたが、キャプテンが制止した。

「キーパーにはなんと1年生！ ケンセント・ヤマアアアムラアアアア！ あのアジア系の小さな体格はキーパーには明らかに不利と思われませんが、スネイプ教授が当てつけの為にねじ込んだというのが有力説です！」

抗議の為に編隊から外れようとしたが、当のケントが前に割って入った。

「そして何より、トロールを殴り殺した実績のあるビーター！ マリイイイイア・ボオオオオオオン！ 既に生徒も手に掛けられているのは周知の事実！ その棍棒で叩くのはブラッジャーか人の頭か！」

ケントは抗議の為に編隊から外れようとしたが、制止する。自分の事を否定されるよりも、自分が信ずる相手を穢される方が余程腹が立つというのと同じらしい。

「ジョーダン！」

「いえ失礼しました。ですが高度な心理戦です！ 彼女への恐怖感

選手にとって非常に重たい枷と成るでしょう！ スリザリンらしい巧みで卑怯なやり方です！」

昨年も思ったが、やはり試合カードに関わる寮の者を解説者とするのは誤りだろう。キャプテンはポッターを狙えと仰ったが、ブラッジャーを解説席にブチ込もうと思う。

「何だ？ 何も言わないのか」

「いえ。何か言えば口封じに脅しに来たとも言うでしょうから。黙らせるのは試合中です」

お兄様が気遣って声をかけてくださったが、お兄様もまた瞳に光を灯していたので何かするつもりだろう。

キャプテンとウッド先輩が握手を交わした後、フーチ教官のホイッスルに合わせて選手たちが空に上がる。ポッターがスニッチを探すためにひととき高く上昇し、マルフォイがそれを追った。

「早い！ スピネットとジョンソンの見事な連携でスリザリンのゴールに迫ります！ シュウウウーツ！ 運悪くセーブされてしまいました。やはりあの加速力、新型の箒というのは無視出来ませんね！ ですが気になるのはスリザリンのビーター達！ 何をしていたのか！ 浮かんでいるだけなら試合に出る必要はありませんね！」

ブラッジャーが来なければビーターの仕事はない。お望み通り獅子寮生が棍棒で叩き落されるのを見たいのであればその限りではないが。

流石にもう、我慢ならない。

相方のドロテアを見ると、ゆらゆらと左右に揺れながら飛んでいた。

「マリアー！ ちょっとこっち来てー！」

「何だ？」

「はい、これ。抑えとくから割れない程度にしてね」

近寄れば、その腕の中には抜け出そうともがくブラッジャーが有った。それを突き出し、空中に固定するドロテアの臂力は狩人の魔力が成せる業。

「成程」

「マリアもよく辛抱してたからね。おねーさんからのプレゼントだよ」

軽く棍棒を引き、魔力を込め、ブラッジャーに向けて振りぬく。鉄の砲弾が解説席に向かって飛翔した。

「いえーい！ どう？ どう？ ヘルマンには馬鹿にされたけど、ぶつつけ本番でも案外イケるもんでしょ！ 今度から正式に練習メニューに入れよーね！」

「おいおいドロテア、これは誤射だ。選手以外を狙ったら反則だろう？ 初の実戦で私の手が震えてしまったせいだな。まったく、たかが球遊びで緊張とは、修練が足らず恥ずかしい限りだ」

実況者の肩をかすめた砲丸はそのまま観戦塔を貫通し、場外の芝生に埋まった。周囲の観客は倒れ込む彼に駆け寄る者と巻き添えを喰う事を恐れて逃げる者で別れた。

「あ、そうだったそうだった。いやー残念だね！ んで、デイルク先輩は何してんのアレ？」

お兄様はわざわざその塔に近寄り、再起動したブラッジャーから追われ始めていた。急旋回、急上昇を続け、舞う様に避けている。

「あ、分かった。あれ、急降下してバレルロールする気だ……ああ、やっぱり。そりゃあ妹も後輩も馬鹿にされて黙ってられるお方じゃないもんね」

お兄様を見失い、慣性でそのまま飛び続けたブラッジャーがジョーダン先輩に向かっていくが、副校長が杖を振り、一瞬生まれた光の壁がそれを弾いた。

「うわあ……あの運動エネルギーを弾く防壁を一瞬で？ 副校長もやるじゃん」

ホイッスルが鳴り、選手招集となった。

教官からは次に選手以外にブラッジャーを打ち込めば反則行為とみなすただけ注意が為されたが、副校長からの教育的指導が始まった。

「報復で観客に危害を加える等、前代未聞です！」

副校長が怒りに震えながら叫んだ。フーチ教官は離れ、ブラッ

ジャーを調べている。

タイムアウト前、ジョーダン先輩へ射出した、もとい誤射したブラッジャーは普通に選手を追い回していたが、もう一つのブラッジャーはポッターだけを追跡していた。ポッターも強かなもので、マルフォイに擦り付けようとしていたが、効果は無かった。

「よく言うではありませんか。一発だけなら誤射かもしれない。私に度胸試しと称して呪いをかけた連中も杖が暴発したと言っています。それを受けて報復した私だけを減点し、連中を不問としたのは忘れておりませんか？」

「マリアも初の実戦で緊張しているんですよ。手が震えたって自分で言っていましたしー？」

「お黙りなさいミス・グリム！ 貴女がブラッジャーを撃ち出させたでしょう！ ミス・ボーン、貴女が減点となったのは苛烈過ぎる報復をした為です！ ミスター・ボーン！ 貴方も成人したのでしょうか！ いい大人が何をしているんですか！」

「妹と後輩を想う心でどうしても気がそぞろになったことと、箒の加速が思う様に出来ずに回避に難儀しました。憐れ犠牲となったジョーダン君の言った通り、俺もマルフォイ家から寄贈された新型の箒を使っていればこんなことは無かっただろうと思ひ、反省しています。あるいはポッター少年に何者かが贈ったニンバス2000でもこうはならなかったでしょうに、ああ、財力が無く残念です」

当然、お兄様は箒程度ダース単位で購入できる程に狩人として稼いでいる。余りの白々しさにお姉様が笑った。

プリントキャプテンは不機嫌な様子で、ボーン兄妹の命令違反を咎めるかと思えば、副校長に向かって口を開いた。

「こつちだつて後で困んでボコられるリスク背負つてラフプレーしてんだ。好き放題言つて何も無いなんてそんな虫の良い話はねえだろ。そんなことより、だ。どうなつてんだあのブラッジャー。ポッターを追い続けているのはこつちも妙な疑いが持たれて困るんだが。こうやって呼びつけたのも、ジョーダンがどうこうより、オレらがブラッジャーに細工したかどうか調べるつもりだろう？」

「そんなん、あたしたちが出来るわけねーです。あ、キャプテンのが感染っちゃった。常に飛んでて魔術保護もされてるブラッジャーの機構に干渉するなんて、走行中の車を修理する様なものじゃないですか。それが出来なかったから暴れ柳に突っ込んだ獅子寮生が居るんでしようし」

制御ではなく浮遊術で強引に振り回す事は可能だが、面倒になるため黙っている。ものは試しにと練習中にやってみたところ、魔術保護による強い抵抗があつたが、一応は可能だった。だが、浮遊術に優れるエーブリエタースと星輪樹の杖を使ってさえ、杖先から伸びる鎖付きの鉄球を振り回す様な感覚であり、先程ポッターを追い回していた様な滑らかな機動は不可能だ。

フーチ教官もドロテアの言葉を肯定した。

「ミネルバ、ブラッジャー自体に異常はありません。私が錯乱していないのであれば、これは完全に正常です」

「……そうですか。ではスリザリンの皆さん、正々堂々とした行いをする様に」

「正々堂々とした実況解説を促す様お願い申し上げます。口が滑るのも仕方ないとは思いますが、委縮してまた手が滑る可能性もありますので。そうなったときは……頭でしようか」

「ミス・ボーン！」

「はい？」

お姉様が微笑んだ。

「貴女ではありません！」

「そうですね。でも不安ですわ。実況席に黒猫が居るなんて。マリアが怖がつて、また手を滑らせてしまうかもしれません」

治療を受けているはずのジョーダン先輩は消え、実況席の遙か上で黒猫が宙吊りになっていた。

†

ホイッスルが再び鳴り、試合が再開された頃には雨が降り出していた。

検査の上で放りだされたブラッジャーは、しばらく通常の挙動を見

せた後、またもポッターだけを追跡する様になっていた。

「ドラコ！ さつさとスニッチを獲れ！ コールドになつちまう！」

「見当たらないんだ！ どこにもない！」

キャプテンに怒鳴り返すマルフォイだったが、普段の高慢な態度を取り繕う事も出来ず、悲愴な表情だった。

黒々とした雲の中に一瞬の光が瞬き、遅れて雷鳴が轟く。飛行しながら鉄球を頭にぶつける極めて頭のおかしい競技だが、流石に雷雨の中を飛ぶことは安全性の観点から試合中止となる。そうになると、どれだけクアッフルによる得点があつたとして0対0の引き分けとなる。過去3か月間にわたり続いた試合もあつたらしいが、現在のホグワーツでは規定時間内にスニッチを獲得しない場合も同様にコールドとなる。仮に時間無制限としても、二軍のある蛇寮に比べ他寮の選手層は薄く、交代で休息や授業を受けるといったことは出来ないだろう。

「飛び回って探すな！ 空域毎に定点で見ろ！」

キャプテンがマルフォイに指示するが、マルフォイは焦燥か羞恥からか、顔を僅かに歪めただけで、そのまま離れて行ってしまった。

先代シーカーのジェラルドによると、競技場を概ね9つに分け、それをS字に辿っていくらしい。重要なのは動と静を切り離して見る事。ブラッジャー以上の高速で飛翔するスニッチとはいえ、瞬間移動をしているわけではない。光の軌跡を追えば、見つける事は容易いという。それを補佐するのがビーターで、接近するブラッジャーを迎撃し、シーカーの視点を動かさない事。その言葉に従い、マルフォイと編隊を組んでいるが、マルフォイは一向にスニッチを見つけれられない。

「ボーン！ オマエは見つけられるのか!？」

「いえー！ 暗いだけならまだしも、雨が邪魔です！」

ジョーダン先輩に代わり実況解説に就いた副校長によると、お兄様とお姉様、キャプテンは220点を叩き出し、ドロテアは Cheney 1人を撃ち落としている。ケントも好調で、失点は僅か20点。これが試合中止となると、シーカーの随伴としては顔向けできない。

「自分の無能さが嫌になるな……ん？ ウィーズリースが戦術を変え

たか」

ビーターは暴れ狂うブラッジャーを迎撃せず、ポッターが独力で回避する方針に切り替えている。ドロテアと激しいブラッジャーの撃ち合いになっていた。

「ハッ！ 見ろよボーン！ ポッターが蜘蛛の巣に掛かった蛾みたいだ！」

「笑っている場合かマルフォイ！ こちらの有利に慢心するな！」

こんな時もポッターを嘲っていられるとは、逆に恐れ入る。ポッターは確かに無様とはいえ、通常の機動とは異なるブラッジャーを回避し続けている。その事実は特例を認められる程の能力がある事を証明している。ポッターは知る限り怠惰な人間だが、瞬間的な集中力が為す技能でいえば一線級のシーカーだろう。

同意されなかった事が気に食わなかったのか、マルフォイはわざわざブラッジャーの飛び回っているポッターの傍に飛んでいった。流石に最新の競技用箒である。加速力はヤーナム工房産が劣る。

顔を拭い、マルフォイの後を追うと、既に彼は空中に静止し、ポッターに何かを言っていた。ポッターも言い返しているのか、マルフォイに対峙し、睨み合っている。

違う、ポッターはスニッチを見つけた。マルフォイの後ろに飛んでいるスニッチを。

「マアアルフォオオオオイ！ 後ろだ！ 後ろを見ろ！」

叫んだ瞬間、ポッターが身をかがめ、加速姿勢に入った。その直後、ポッターの真下からブラッジャーが飛来し、彼の腕を折った。

マルフォイもまた、スニッチを獲りにインメルマンターンで方向転換をする。その場でのターンでは加速力が得られないため、適切な判断と見事な機動だったが、高度を上げたマルフォイに対してスニッチは降下し始めた。スプリットSであればと思うが、あの瞬間ではどちらを選んでも仕方がない。マルフォイもループ中にスニッチを見つけた様で、降下を始めるが、先に加速していたポッターの背中を追う形になった。

ブラッジャーはポッターの腕を折った後、慣性のまま上空に上がっ

だが、あり得ざる角度で降下し始めた。何者かは知らないが、ポッターを撃墜するまで襲撃を止めないらしい。

流石に人命に関わるものでは試合も何もあつたものではない。

スニッチをポッターに獲らせることとなるが、いずれにせよ蛇寮の勝利は揺らがない。ブラッジャーの進路に箒を進め、棍棒を振り抜いた。

「は？」

ブラッジャーは先程お兄様が見せた様に、ロールして軸をずらし、粉碎するはずの一撃を逃れた。回避した後、僅かに軌道を変えてマルフォイの箒の尾を砕き、更にポッターを追って行った。

箒が浮力を失い、落下しながら悲鳴を上げるマルフォイを掴んだ頃には、ポッターは地に伏せながらもスニッチを左手で掴んでいた。ポッターは落下の衝撃で気を失ったが、ブラッジャーはその頭に向かって進んで行く。

舌打ち交じりに棍棒を投げて軌道をずらそうとすればそれも躲されたが、その先に居たどちらかは分からないが双子先輩の片方がブラッジャーを捕らえた。

「お前のせいだ！」

「何がだ」

「お前がブラッジャーを見過ごしたから！ 僕の箒ならポッターには負けなかった！ ブラッジャーさえなければ、僕が勝っていたんだ！」

地上に降りた後に、涙とも雨ともつかぬ水滴を撒き散らしながらマルフォイが吐き出したのは聞くに堪えない負け惜しみだったが、一分の理はあるので反論はしなかった。

そもそもマルフォイはポッターに近寄る時にスニッチを見つけたはずだろうし、急降下の恐怖に腰が引けて加速を止めていたのだ、ブラッジャーに関わりなくポッターがスニッチを手に入れていただろうと思うが、それよりもブラッジャーの挙動が気になった。

ポッター以外を回避するという機動は、ブラッジャーを直接操作していた事を表す。マルフォイの箒に接触した事は軌道修正が間に合

わなかったのか、あるいは意図的であったのかは分からないが、少なからず回避を試みた事は分かる。棍棒を回避した後、そのまま直進していればポッターを狙う前にマルフォイの頸椎を粉碎する進路だった。

ブラッジャーは未だにポッターに向かって進もうとしているらしく、追いついた双子の片割れも合わせて抑え込むのに苦勞していた。

「先輩方、手伝いますよ」

「冗談じゃない」

「さつきハリーの頭に向かって棍棒を投げただろう」

「アレはぶつけて弾くつもりでした。ポッターを殺す気ならば、先輩方を放っておいて彼の頭を砕きに行っているでしょう」

「そりやそうか」

あつさりと認めるのは疲れからなのか、元々そういう気質からなるものか。弟の方のウィーズリーに比べれば、蛇寮に対する態度も然程好戦的ではないという噂も聞く。事実、去年はマルフォイに喧嘩を売るといふ事はなく、揶揄っている場面しか見ていない。

ブラッジャーは確かに通常のものよりは遥かに強い推進力を持っていたが、別段抑え込めない程でもなかった。魔術で強化されている狩人にとつてはさして驚くようなこともないが、「オリバーよりゴリラかよ」と口を揃えて賞賛するのは止めて欲しい。

ポッターも目覚めた様で、人だかりが出来ていた。クイディッチ負傷者は珍しいものではないが、彼の初負傷という事で注目もあるのだろう。先日もカメラを構えていた1年生が、嬉々としてストロボを焚いていた。

フーチ教官が収納箱を持ってきた頃には、ブラッジャーは抵抗を止めていた。それと時を同じくして、ロックハートもポッターに駆け寄っていた。この豪雨では靴の汚れを気にしそうなものだが、それ以上にポッターが気になるらしい。やはり、これもロックハートが書いたポッター英雄化計画の筋書きというわけか。

ヘルマンは傘を差し、悠々と歩いてきた。防水加工のつもりなのか、星の娘の様に微小な魔力を放出して、横から吹き付ける雨粒を弾

き飛ばしている。

「何だその……無駄に高度な無駄な技術は」

「濡れるのは嫌いだ。母が怒るから」

「洗濯するのは学校の屋敷妖精ではないのか？」

「他人に自分の衣類を渡すなんて気持ち悪いじゃないか」

「母君はいいのか？」

「洗濯物を渡さないと、面倒臭がって洗っていないだろうとか言われるんだ。いい加減子離れして欲しいね。それより、ブラッジャーは？」

「それそのものに細工された形跡は無かった。おそらく外部から直接操作していたな」

「君の得意な浮遊術でさえあんなザマだったのに？」

「軌道修正どころか加減速まで自由自在の様だった。精進すればどうこうと言った話ではない。そもそも浮遊術でさえないのかもしれない。拳動がおかしすぎる。それ程までにポッターを狙う何者かが居るということだ。そしてあそこに居るロックハート。やはり今年も教員総出でポッターの冒険か」

「つくづく彼は可哀想なことだよ」

見れば、立ち上がったポッターは吐きそうな顔で目を閉じ、折れたはずの右腕を掴んでいた。水風船でも掴む様に、その指は肉に深く沈みこんでいた。

「あれは？」

「骨を消失させたんだろう。魔法界は外科治療の分野に著しく疎いから」

「成程。砕けた骨を摘出出来ないからと、消失させたというわけか。輸血で勝手に治るといっものはやはり便利だな。そう言えば、どうして去年は骨折程度で欠場したんだ？」

「ジェラルドの粛清のせいさ。君の心を傷付けた分その痛みを知れと、輸血液を取り上げられた」

「……あの時は済まなかったな」

トロールの件で冷静さを失った事を諫められ、それに逆上した結

果、諫言したヘルマンがジェラルドに罰された。ボーン家への立場を
考えろという事であったのだが、振り返ってみればヘルマンは完
全に被害者である。

「気にするなよ。それより、ジョーダンにブラッジャーを撃ち込んだ
のは笑ったよ」

「中々いい見世物だっただろう?」

「ああ、血塗れ女帝の名が確たるものになったな。おめでとう」

バジリスク

結局、ポッターがスニッチを掴んだとしても圧倒的な得点差は変わらず、醜聞をまき散らす実況者を叩き伏せ、その上で獅子寮にも勝利した事から、祝勝の宴は盛大に行われた。

最終的な差は30点だった。お姉様によれば、あまりにブラッジャーの挙動がおかしい為、身に覚えがないとはいえ気が引けたからだという。言われてみれば、頻繁にクアツフルのパス回しをしていたことを視界の端で捉えていた。

キャプテンにとっては理想とする明確な勝利とは程遠いものであったため、「たかが1勝に一々浮かれてんじゃねーぞ」と不機嫌だった。

「ドロテアとの連携攻撃見てたよ！ 凄かったね」

ダフネからの賞賛に喜びは湧くが、返せるものは苦笑しか無い。

「いや、誇れる様なものは何も無い。思いついたのはドロテアだし……結局勝利には貢献していないからな。マルフォイにも言われたよ。シーカーを守れなかっただろうと」

「それただの負け惜しみでしょ。雨が酷かったからよく分からなかったけど、自分の後ろにあつたスニッチに気づかなかつた方が悪いんじゃないの？」

「よせミリセント。パンジーに聞かれるぞ」

マルフォイ鼻根のパンジーは、マルフォイに酌をしていた。度数の低いものだろうが、既に何杯も呷っており、マルフォイの耳は赤くなっていた。

生死を賭ける狩りに比べればどうという事はないとはいえ、やはり運動後の食事は心に沁みる。お兄様は鴨のハムとチーズを肴にワインを楽しんでいたが、「伝統的なマリアージュとして正しくはありませんが、チーズの脂肪分は味覚をボカすのでワインには本来向きませんよ」と蘊蓄を垂れるヘルマンの頭を小突いていた。ケントは緑茶を啜り、お姉様とドロテアは蜂蜜酒を舐める様に呑んでいた。

「マリア、寮監が呼んでる。他の同郷の子も呼べて」

後ろからファーレイ監督生に声をかけられ、談話室の入口に目を向けると、騒がしい室内に心底嫌気がするといった表情でこちらを見ている寮監が居た。

「何だろ」

「心当たりはないな。クイディッチの件でこんな深夜に寮監が動くとも思えない」

「だろうね。「どうやらミスター・ポッターはブラッジャーに頭を打たれて宿題という言葉を忘れたらしい。グリフィンドール20点減点」とか言ってるさだし」

「ミリセント、寮監の真似ならお兄様が得意だ。今度拝聴するといい。では行ってくる」

言葉通り、狩人に声をかけて寮監の下に向かうと、寮監は声も無く扉を開けて出ていった。

そのまま無言で寮監の背を追うと、連れられたのは薬学の教室だった。最後に入室したケントが扉を閉じると同時に、寮監が口を開いた。

「コリン・クリービー。グリフィンドールの1年生。両親はマグル。先日の猫と同様の状態で、階段付近に倒れているところを1時間前に発見された。どう思うかね」

寮監の声は、密やかでありながら教室に響いた。

クリービーはポッターの信奉者、パパラッチ、ストーカー、どの呼称が正しいかはともかくとして、ポッターの関係者と言える者ではある。少なくとも、先日襲われた猫よりは関連がある。秘密の部屋とは校長が用意したポッターの冒険譚であるとすれば、まだクリービーの方が適切だろう。

しかし、校長は狂っているが、流石に教え子を直接手に掛けてまでその様な策謀を実行する程ではないだろう。これは備えられた冒険ではなく、現実の脅威なのだ、認識を切り替えた。

「情報が少な過ぎてなんとも。秘密の部屋の伝説は知りませんが、それだけです。寮監が我々を疑っていて、犯人しか知り得ない事を漏らすのを期待しているとすれば、推測を口にするのは憚られます。推測

が理に適っていなければいるほど、我らへの疑いは濃くなるでしょうから」

「校長の思惑は吾輩の及ぶところではない。クリービーに関して、一教員として吾輩が知っている事は諸君に全て伝えた」

「……この聴取は校長から指示されたものか、あるいは寮監個人の意思に因るものだろうか」

お兄様は常に不遜な態度をとっているわけではなく、ヤーナムとしての立場を求められる場合はそれに応じて慎重になる。つまりこれはそういう場なのだ。

「どちらでもあると言える。校長は必要性を仄めかしていらつしやうだが、吾輩としても怪物とあらば諸君に話を聞くことは有効だと思ふ」

「ならばヤーナムに連絡を。我らに専門家としての知見を求めるならば筋を通して頂かなければ。加えて、狩人として申し上げるならば、ただの怪物であれば専門外です。我らは害獣駆除業者ではない。単に慣れているだけであつて、魔法生物に知悉しているわけではありません。単なる学徒の一人として申し上げるならば、即座にホグワーツを一時閉鎖し、魔法省か専門家を投入するべきです。もっとも、魔法省に連絡したところで幾つかの仲介者を経てヤーナムに出勤要請が入るだけでしょうが」

「校長は休校をお望みではない。魔法省の介入もだ。理由は伺っていないが、ここにしか居場所がない者もいるといったところだろう。特に、ポッターの様に」

寮監の言葉を反芻する。つまり、校長は何ら対策を講じ得ず、学徒に危害が及んだ今になってさえ、現状維持を続けるつもりか。それは緩やかな破綻である。

校長の余りの狂気にお兄様が言葉を失っていると、ヘルマンが口を開いた。

「僕たちは校長の策謀を疑っていました。今年度のポッター英雄化計画だろうと。ところが、こうして生徒から実際に被害者が出たためにそれは違ふと思いました。しかし、その後の対応からはやはり何かの

筋書きがあると考えざるを得ません。

運営者が何ら解決に向けた行動を起こせないのに、生徒を留め置き、外部への協力を拒む？ 脅威を統御しているとしたか思えない方針ではないですか。そうでないのならばますます校長の正気を疑う。僕らの必要性を仄めかしたなど、単に我々が校長にとつて都合の悪い行動をしない様に監視したいという意図にしか聞こえなくなったのですが。

寮監。誠実にお答え頂きたいのですが、これはポッターに纏わる校長の計画ですか？」

「尋常ではない。諸君がそう思っている以上に、より近い者がそう思っていると察して頂きたいものですな。

ポッターについては知らん。確かに校長はポッターに対し特別の興味を持っている事は明らかだが、少なくとも今年の学校運営に何ら連絡はない。

人事についてでさえもだ。あのような無能を教員として迎え入れれば、同僚となる吾輩の品位も損なわれる。一教員として学徒たる諸君に伝えるならば、あんな馬鹿げた男に学ぶより、薬学を究める方が余程闇の魔術への防衛には役立つこととなるだろう」

「まああんなので給料もらってるなんて先生の仕事ぶり馬鹿にしてる話ですよ。ご愁傷様です」

「ミス・グリム。吾輩を労うならもう少し真面目に講義を受けるといふ発想はないのかね」

「期末試験で真面目さは出ていると思えますけど？ 同学年上位5人くらいには入ってますよね？ あたし達だけ設問は違うし採点も厳しくなってるのおかしくないですか」

「君とミス・ボーンが同率3位だ。教科書に書かれている程度の事しか記述しないなど君達の実力からすれば怠慢という他あるまい」

「妹達の成績はともかく、この件に俺達に何かを期待するのは止めて頂きたい。学生という枠組みの中で出来ることは限られている。ヤーナムを通じた正式な依頼であれば当然尽力しよう。だが、俺達の取り組みがどうあれ周りの学徒は一度疎開させるべきだ。マンドレ

イクの治療薬があるとしても、別段それは校内に留まらせる理由になるものではない。聖マンガでも治療は可能だろうし、次の事件の予防と考えれば当然だろう」

ランプの芯がじりと音を立てたきり、静寂が教室を包む。

お兄様が語調を荒げて放った言葉が全てである。獣狩りも害獣駆除も、要人救出作戦ではない。狩場に狩人以外の者がいるというだけで、その行動は著しく制限される。それは獣と化したクイレルと対峙した時にポッターが寝転がっていたことで強く実感した。

「では個人的な依頼であればどうかね。吾輩の助手として相応の給金も出そう」

「……何故そこまで？ 失礼を承知で申し上げますが、教授はこの様な事にそれ程の関心を寄せる方ではないと過去6年間の学生生活から考えておりますが」

「吾輩はこの学び舎の卒業生だ。決して……決して楽しい学生生活ではなかったが、その間に少なからぬ友誼を交わした者も居る。その子供が通っていけば、それを守ろうとするのはおかしなことではあるまい？」

「だとしても、教え子にその解決を請うのは道義に悖るものではない？ まずは為すべき者が為す、それが正道というものでしょう」

「無論、吾輩も吾輩の為すべきを為そう。とはいえ、言質を取った様で恐縮だが、学徒で在る前に狩人である、昨年君はそう言ったはずではなかったかね」

「ん……確かに都合よく学徒と狩人としての立場を切り替えるのは卑怯な物言いでした。改めましょう。俺としては後輩も妹達もおりますので、事態の解決に協力することはやぶさかではありません。目の前に怪物が現れれば武器も奮いましょう」

しかし、やはりこの場で承諾は致しかねます。依頼主が誰であれ、前提として狩人の力を奮う事を要求されるのであれば、まずはヤーマムに確認をとらねば。俺から父に連絡をしておきますので、それで許可が下りれば寮監の助手に就きましょう」

「それでいい。感謝する」

寮監は僅かに頷くと部屋を出ていった。

「ダメだ、揺さぶりも効かなかった」

「ああ、やっぱり演技でしたか」

ヘルマンの応答から、お兄様のいきり立った態度は演技だったらしいことが分かる。全く気付かなかったのは妹として恥じ入るばかりだ。隣のケントも愕然としている。一方、お姉様が一言も口を開かないのは本気で苛立っているからだと分かる。右の中指が一定の律動で腿を打っていた。

「こんな魔力の多い土地で、子供とはいえ魔術師が集団で恐慌に陥る？ 月を呼びかねない。ならば疎開させる他ないだろう。だが寮監が私人としても解決を依頼してくるとは予想出来なかった。現場責任者を突き上げて校長を動かそうと思ったが、まさかそこまで見抜いていたか？」

「うーん……どうでしょうね。あたしの軽口に反応してたし、校長に不満があるのは間違いないと思いますよ。ほんとに校長は動かないだろうなつて寮監も諦めてたんじゃないかなと」

どうやらドロテアもお兄様の演技を見抜いていた様だった。その澄み渡った瞳でヘルマンを見る事が出来れば彼の態度も幾らかは変わるだろうが、恋は盲目というものだろうか。

「嫌な信頼関係だな。君と寮監にしても、寮監と校長にしても」

ヘルマンが苦笑とも嘲笑とも取れぬ笑みを浮かべているのに対し、お姉様は機嫌の悪さを隠さずにお兄様に向き直った。

「それで？ お父様にはどの様に報告するのです？」

「暇な狩人を待機させる様にお願いしようと思う。あの様子だと父上から協力を提案しても校長は拒否するだろう。実際に月が顕現したら突入やむなしだな」

「お父様はお怒りでしようね。今年もかつて」

「帰りたいくないな……だが年長者としての責任だ。仕方ないな。来年同じ様な事があつたらヘルマン、貴公が行くんだぞ」

「嫌ですよ。ボーン家じゃないんだし。イングリットが順当でしょう」

「この流れでそれですか？　こう、先輩らしいところを見せてくださいよ」

「やいてー」

ケントとドロテアの攻撃にヘルマンは心底面倒臭そうな顔になり、俄然として眼鏡を拭き始めた。彼なりの苛立ちの表れだろうか。

「どう考えたって正論だろう。報告書は代筆してもいいけど、年長者である事とボーン家の事情は別だろうか？　ヤーナムに連絡するっていうなら、御当主様じゃなくてビルゲンワースに通すのが筋じゃないか。実態はともかくとして、街の意思決定はビルゲンワースとボーン家とカインハーストの合議だろう。黙っているけど、マリアはどうなんだい。イングリットはくすくす笑っているだけだし」

「私にも振るな。まあ、連絡先についての抗議は分からないでもないが、後輩としてはやはりケントの言葉通りだ。

……ああそうだ、お兄様が言っていたな。妹モノが良いんだったか？　よろしくね、お兄ちゃん」

「何を言ってるのか分からないけど、なんとなく事情は分かったよ。デイルク、ほんと貴方クソですね」

「言葉が悪いぞ？」

「ほんと貴方お排泄物ですね」

「よし」

「よしじゃないだろ反省しろよ」

ジェラルドからの鉄拳制裁への恐怖がなくなったせいか、ヘルマンの態度は昨年と大きく異なる。これも新しい一年か。といっても、昨年と変わらないホグワーツの騒乱がすぐ傍に来ていることをじつとりと感じていた。

新入生であるケントを見やると、目が合った。

「何か？」

「いや……お前が随分と順応している様に思えてな。学び舎の中で得体の知れぬ何か学徒を手に掛けたんだ。その状況にしても、それをして何ら対策を取らない運営者にしても、異常という他ないだろうか？

それ故にお姉様は苛立っているわけだが、貴公は平常そのものなの

が気になったのさ」

ケントは幾度か目を瞬かせた後、口を開いた。

「まあ、怪物だか継承者だか知りませんが、ボーン家に害を為すなら斬るだけです。複雑に考えても結局は敵か味方かってところに落ち着くわけで、それはどこでも変わらないですから」

「達観してるな。ゼンとかいうやつか」

「全然違います」

「そうか。私を馬鹿にしてないか？」

「お戯れを」

翌朝、結局狩人全員がヤーナムに帰り、ボーン家で朝食を摂りながらクリービーの件をお父様に報告することとなった。お父様はトーストにマーガリンを塗りながら「ふうーん。ふうううううん。うん、分かった」と目を虹色に光らせて激怒しながら、にこやかに寮監への協力とヤーナムからの支援体制の構築を承諾した。

もつとも、放置すれば夜を迎える事になる可能性を鑑みれば、承諾しないという手はないだろう。校長がこの様な状況にヤーナムを巻き込んだ事への怒りを募らせているのだろうが、怒気を振りまくのは止めて欲しい。ドロテアが蒼ざめている。

「それでね、ハロウインの直後からビルゲンワースには秘密の部屋について調べてもらってたけど、ちょうど昨晚に中間報告があったよ。50年前にも秘密の部屋が開かれたとされる事件があったらしい。詳しいことは資料を読んでね。ま、さっき聞いたクリービー君の件を加味するとまた調べる事は増えそう。しばらくは俺も彼らも残業続きだね。ハゲそう」

「……そうですか。父上、その時期のヤーナムの在校生は？」

お兄様は自分の髪に手をやってから、話を逸らす様に質問を紡いだ。

「当時は第二次大戦だったからね。ホグワーツには行かせてないんだよ。ヤーナムの民はみんなビルゲンワースで学んで、戦場で獣を狩って、幾人かは戦禍でそのまま……ね。だからビルゲンワースでも資料は集まりにくいんだ」

非魔法族の戦争ではない。国と国の戦争である。国に帰属意識のある者であれば、魔法族であれ戦地に赴き、敵を殺した。狂気の渦巻く土地に魔術師が居れば、それは上位者の呼び水となる。

狩人として、夢の中でなければ殺されれば死ぬ。銃弾で心臓を貫かれようと輸血液があれば回復はするが、死の呪詛だけは死を免れ得ない。あれは死をもたらすものではなく、肉体と魂の結びつきを絶ち分かつ技法である。輸血液によって肉体が回復しようと、その肉を動かす魂が入っていないのであるから、即ち死を迎える事となる。ビルゲンワースではその克服を目的とした研究が続けられているが、直接的な対策は未だ確立されていない。

「当時から技術も武器も防具も進化し続けている。だからといって君たちが死なないなんて保証はない。無事に帰ってきてくれ」

お父様は幾人もの帰らぬ狩人を待ち続けたのだろう。長命であることは、別れもそれだけ多くなる。人たる上位者のボーン家に生まれた者として、あと数年もすれば成長が止まり、あと10年もすれば秘匿の為にダフネやハーマイオニーと逢うには容姿を変化させることとなる。それでも、老いていく彼女らの息災を祈る事は出来る。だが、死者に祈りは届かない。

食べた気のしない朝食を終えてホグワーツに向かい、そのまま寮監の研究室を訪ねた。

「ボーンです。よろしいですか」

「入りましたまえ」

お兄様が扉を叩くと、直ぐに返答が返ってきた。

入室した瞬間、熱気が肌をなぞる。ドロテアも「あつつ……」と声を漏らす。部屋中で大鍋が火にかけられ、柄杓がひとりでに中身を攪拌している。寮監が自動攪拌鍋を用いずに自身の魔術でそうしているのは、原料の状態や部屋の環境に合わせて調整をするためだろう。「父の許可が下りました。我々が寮監の下で解決に尽力することはお約束します。また、我らがしくじり、狩人としての仕事を為さなければならぬ場合は、ヤーナムより戦力が投入されます」

「父君に感謝しよう。対価は——」

「一般的には1人あたり稼働日毎200ガリオンというのが最低条件ですが、本件に関しては我ら全体で成功報酬50ガリオンです。我らが狩人として未熟ということもありますが、寮監の心意気に応える様にと父より伝えられております」

一般的、というのは魔法省の出動要請に対する請求額である。当然魔法省にも魔法生物規制管理部という生物災害に対する専門部署があり、その能力を超えた場合に出動要請が掛かる。単純に危険生物の繁殖期で処理能力を超過している場合や、駆逐対象に対応者の生命すら危ぶまれる程の脅威が存在する場合である。当然にその対価は高額なものとなる。

他方、獣の病については魔法省も理解しておらず、それを知る者はごく僅かという。あるいは、マグルと嘲る生物との違いが自らの血に巢食う虫であり、その果てが獣への変態という真実を直視したくはないせいだろうか。光の御子と呼ばれた魔法戦士、伝説におけるその猛り狂った姿は獣そのものであるのだが。

「重ねて感謝する」

「解決にあたり、夜間外出許可を頂きたく。また、毎週月・木曜日に寮監に状況をお知らせする、これでよろしいでしょうか」

「構わん。許可証は追って渡そう」

「それで、何か職員方では何か進展はありましたか」

「皆無だ。吾輩がこうして幾つかの薬を調査している様に、他の教員も何かしら自身の分野で解決を凶っているとは思うが」

「色と香りから察するに真実薬ですか。魔法省の許可は？」

「……調査することは違法ではない。それに吾輩は既にある程度の量までは所持することを許可されている。その内の幾つかを紛失したところで誰が気付くと言うのかね」

「強請るつもりはありませんよ。寮監の本件解決に向ける意思を確認したままです」

真実薬は所持・使用共に魔法省の許可を要する薬品であり、仮に犯人が学生だとすれば、使用など認められるはずもない。それでもこれを用意するという意味は重い。寮監の黒髪は汗で濡れ、額に貼り付い

ている。長時間に亘って鍋の制御を行っている証左だ。

「昨晚語り聞かせた通りだ。吾輩は吾輩の為に吾輩の出来る術を以つてこれにあたる。諸君に助力を請う恥は、護りきれなかった絶望を考えば取るに足らぬものだ」

「……我らも我らの仕事を為しましょう。会議をしますので、空き教室を使ってもよろしいですか？ 部外秘の資料もありますので、いかな寮監とはいえここで話し合うわけにはいかないのですが」

「地下3番を使いたまえ。内鍵がある」

「ありがとうございます。では」

3番教室。そこは滅多に使われないが、理由は単純である。狭く、寮や薬品庫から遠いため、利便性が悪い。逢瀬に用いられそうな条件だが、寮監の管理下に在る部屋であるという一点でどんな利点も霞んでしまっている。

各自が適当に選んだ机と椅子に薄く積もった埃を吹き飛ばし、ビルゲンワースの資料に目を通し始めた。お兄様は机に腰かけ、宙に一枚を留めている。お姉様とドロテアは横並びに座り、2人で一緒に眺めている。ヘルマンは頬杖を突きながら、ケントは普通の学生のように。

『秘密の部屋とはホグワーツの伝説であり、学祖スリザリンとその他の学祖との間に運営方針を巡る紛争の果て、スリザリンが残した施設とされている。その施設にはスリザリンの意向に反する者を排除する怪物が存在し、その施設の管理者をスリザリンの継承者であると考えられている。』

検討の結果、秘密の部屋が実在するとしても怪物の存在は疑義が残り、秘密の部屋の伝承とは先鋭化した純血主義者による犯罪行為を表わすものと考えられる。

ホグワーツ創設者に関する複数の伝承を俯瞰的に考察した場合、実際にスリザリンが秘密裏に何らかの施設を作成したとは考え難い。元より前提が破綻している。即ち、他の学祖3名の合同勢力を排除できる怪物を生み出し、使役することが可能であれば、そもそもスリザリンはグリフィンドールに敗北し、城を退去することは無かったはず

である。また、城の設計者はレイブクローとされており、その能力に干渉して自らの思想のみに都合の良い施設を構築することは不可能であろう。

過去150年に亘って遡り、ボーン家をの他ヤーナムよりホグワーツに通学した400名以上の研究報告書を通読したものの、そうした施設の報告は無い。上位者、あるいはそれにまつわる能力によって秘匿されているのであれば、それに気付かぬはずもない。従って、秘密の部屋が実在するとすれば、一般の生活空間から物理的に隔絶された場所にあると考えられる。

上記の通りスリザリンによる秘密の部屋の設置は疑わしいものの、1942―43年にかけて秘密の部屋はホグワーツの歴史上初めて開放され、複数名の学徒が被害に遭ったとされている。高度な呪詛に因る石化が共通しており、関連性は不明ながら、死亡者も発生している。その被害者は一様に非魔法族の両親を持っており、秘密の部屋の伝承と合致する。この事実は秘密の部屋という伝承に擬えた儀式的犯罪であるか、あるいは秘密の部屋そのものがそうした儀式を表わすものであると考える事が可能である。

ホグワーツ築城以来、増改築が繰り返されており、その過程で秘密の部屋という概念あるいは施設が備えられたと見る事が現実的と考えられる。時期については、今日に於ける保守的純血主義思想と伝承の親和性が高く、純血主義思想の勃興と重なる14、15世紀以降とする事が合理的であろう。

50年前の魔法界ではグリーンデルバルドら純血主義思想過激派による破壊活動があり、かつそれら勢力がかねてより主張していた通り、技術の発展による大量殺戮が現実のものとなっていた。従って、これに同調した者が学内の非魔法族に由来する魔術師の排除を画策し、秘密の部屋を開放したとすることは蓋然性がある。一方でヴォルデモート卿らによる大戦期に於いて開放されず、今年に開放された理由は不明。その時点では継承者が存在していなかったか、何らかの事由によって開放が不可能であったか、いずれにせよ考慮要素が不足しているが、本稿に於いては伝承と純血主義思想の類似から継承者は純

血主義者であると仮定して論を進める。

伝承から、継承者とはスリザリンの継承者を指すと考えられるが、それが血縁であるとは言い難い。魔法族は非魔法族に比べ出生率は低いものの、平均初婚年齢は若年である。1,000年間の世代更新を鑑みれば、廃絶を考慮するとしても、スリザリンの血を引く者は数多くに存在することになる。それらが継承者であれば、今日に於いて秘密の部屋とは秘匿された存在ではあり得ない。従って、秘密の部屋を開くことが可能である継承者とは、何らかの道具あるいは技法を継いだ純血主義思想を持つ者であろう。

秘密の部屋の怪物について検討を行う。序論で述べた通り、怪物と称される魔法生物の存在は疑問である。まず、その生物がスリザリンに所以のあるものだとすれば、蛇あるいは敷衍し竜に関連する魔法生物であると考えられる。石化能力を持つ蛇に関連する魔法生物はバジリスクが挙げられるものの、ヒトを殺傷せしめる程の能力を持つに至るまで成長した個体では少なくとも半世紀を絶食状態で生存することは不可能である。秘密の部屋は50年前に初めて開放されたのであり、秘密の部屋が開かれる時期にのみ摂食機会があることとなるが、1942―43年の事件に於いて食害は記録されていない。湖内に秘密の部屋がある場合はヤーナムの民による踏査は不可能であるものの、継承者・怪物共に水中人から目撃されていないことから、湖は排除出来る。

魔力を食餌に変換する事はガンブによる元素変容法則に知られる通り不可能であり、継承者が給餌するか、あるいはそうした装置が必要となる。しかし、過去の継承者らが数十世代に亘って教職員及び学徒から秘密裏に給餌を行う現実性は乏しく、給餌坑といった設備も発見されていない。秘密の部屋自体にそうした魔力転換機構が備えられている可能性を否定出来ないが、願望の通りに状況を再現する機能という点ではヤーナムに於ける聖杯よりも強力である必要の部屋に於いてもそうした機能はない。なお、5日間絶食した後に必要の部屋に入室したところ調理器具だけが完備されていたという事例報告が為されている。

怪物が自律的に秘密の部屋を脱出し、透明化や認識阻害の様な低観測性を持ち、湖や森、あるいは校内の鼠や梟を捕食していたとしても、排泄物や被食者の遺骸といった痕跡が残るはずであるが、これについてもヤーナムの民や教授陣がそれら全てを発見していないという事は考えられない。アメンドーズの様に夢と現実を移行する能力を持つとしても、その様な上位者に比肩する能力を持つ存在であればなおの事狩人がそれを感知出来ぬはずもない。

以上より、怪物とは生物ではないと言う事が出来る。

怪物の性質から離れ、生物を用いるという点から考察すると、生物兵器を使役する利点は制御することが可能である限りヒトよりも優れた能力を利用できる事である。訓練された猟犬・軍用犬に只人がほぼ対抗する事が出来ない事は検証するまでもない。他方、50年前の事件が真に秘密の部屋によるものとするれば、怪物は何らかの呪詛を用いて石化及び殺傷した事になるが、その様な能力を持つ魔法生物を馴致ないし服従せしめる魔術師であれば、元より自らの魔術によつてそうした加害行為が可能であるとする事が妥当であろう。人外の生物と意思疎通を図った上で本能による捕食ではなく殺傷のみを遂行させることと、呪詛術式を構築し相手の抵抗力を上回るだけの魔力を投射することであれば、後者の方が平易である。

魔法生物の馴致にあたっては前述した継承者の継ぐ特別な道具・技法が怪物についての知識を意味する場合は可能性を否定し得ないものの、スキヤマンダーら魔法生物の権威でさえ竜の馴致による生物兵器化に失敗しており、怪物を馴致するにあたっては刷り込みを利用する他に方法は無いと考えられる。

なお、怪物が疑似生命であると仮定した場合、生物としての問題点を解決し、ある程度は可用性を高める事となる。一般にみられる鳥や蛇等を作り出す魔術や、獣狩りの夜に於ける蛇玉や蜘蛛等が存在する様に、疑似生命は変容法則には矛盾しない。なお、トウメル人による神の再誕はヤーナム及びトウメル人の血肉から成る素体に上位者の精神を結び付けた技法であり、疑似生命には合致しない。しかしながら、呪詛とは魔力の放出であり、その魔力で稼働している疑似生命に

とって、未成熟といえども魔術師を殺傷せしめる程の呪詛は自殺的である。魔力供給を行う事でこの問題は解決が可能であるが、触媒があるとしても転換効率を考えれば前述の通り使役者本人による呪詛の方が遥かに高効率である。今日に伝えられる蛇寮の特性とは目的の為に手段を問わぬ合理性であり、伝承に於ける秘密の部屋の目的に照らしてみれば、極めて不合理である。

秘密の部屋及び怪物が発見された事は無く、目下調査中ではあるが、事実として提示できるものは50年前に怪物によるものとされた事件が発生したことだけである。

怪物が実際の生物あるいは疑似生命のいずれにせよ、それを使役するにあたり要求される高度な技量に対して得られた効用は学生の殺害のみである。伝承の通り外敵の排除が目的であれば、元より死の呪詛を投射すれば達せられるものである。これらを鑑みるに、50年前及び本年の事件については、秘密の部屋の部屋を用いたものではなく伝承に擬えたに過ぎない見立て犯罪であるという意見も諸研究員から提示されている。

ビルゲンワースの現時点での共通見解としては、怪物の育成及び運用は現実性に乏しいことから、秘密の部屋及びその怪物とは純血主義者によって生み出された概念であり、純血主義に基づく破壊活動あるいはそれに用いる魔術儀式をこそ秘密の部屋の開放と称し、その手法を継承されているとすることが相当である。従って、本件の解決は秘密の部屋及び怪物の搜索よりも継承者の調査が有効である。

補遺

在校生に向けた魔法史の説明。

純血主義思想の勃興は元来魔法族のみの土地・文化を形成していた集団(以下「集団A」)に対する、非魔法族と接触を持っていた集団(以下「集団B」)の流入による。旧来の魔法族は、より古代の魔術師排斥運動の経験から、いわゆる隠れ里として集団Aを形成していた。一方で、事故等により魔法生物の血を取り入れた非魔法族や放逐された無能者を起源とする魔術師は集団Bを形成した。14世紀以前に散発的に発生していた異端審問及び魔女狩りは集団Bが原因と考えられ

る。集団Bは発展に伴い、非魔法族を軽視する様になり、火刑の感触を楽しむために故意に魔術を暴露する等の凶行に及んだ。これによって14世紀には非魔法族の魔女狩りが欧州で加熱し、多数の非魔法族が冤罪によって火刑に処された。このことから、集団Bの大多数は非魔法族との接触を避け、集団Aに流入していくこととなる。集団Aにとって集団Bは魔術の秘匿、即ち自身の安全を脅かす存在であったが、集団Bの持つ非魔法族の社会制度や技術は集団Aで形成されたそれらを陳腐化させるものであり、その権威や利益は競合することとなった。このことから、魔法族は魔法族のみで文化を形成することが望ましいとする初期純血主義が勃興した。集団Bからも排斥された自省のない集団Bの一部はアメリカ大陸に渡り、凶行（殺人・傷害・詐欺・窃盗・脅迫等の不法行為を指す。当時の米国魔法界にはそれらを裁く機関はなく、魔法族・非魔法族を問わず被害者となった）の果てに17世紀のセーラム魔女裁判を引き起こす事となる。

これらによって国際魔法使い機密保持法が制定されることとなるが、その反動から生物として上位である魔術師が人類を主導するべきであると主張する純血主義思想過激派が生まれることとなった」

「うわあ……これ書いたのきつとソフィアさんだ」

「だろうな。文字量が尋常ではない」

「話の進め方がそっくりだ。消去法と言うか、否定から入ると言うか……」

「良かれと思つて蘊蓄を入れるところも」

「そんなに似てますか？」

「「似てる」」

ヘルマンが顔を顰めるが、どうしようもなく彼の御母堂に似ている。

「バジリスクって蛇の王でしたっけ。蛇と鶏が癒着した謎の生き物」

「それはコカトリスだ。どちらも石化能力があるから混同するが。とはいえ、禁止されるまでは普通に飼育されていた魔法生物だ。資料の通り、ヒトを殺す程の魔力を持つには数年では効かんだろう。」

教員に劣らず生徒も変人ばかりだが、怪物の餌やりに出歩いていそうな人間など、6年この城を徘徊していて一人しか知らんな」

「お兄様はもう継承者がお分かりなのですか？」

「継承者がどうかは知らんが、怪しいのは森番だ。三つ首の犬を思い出せ。ケルベロスを模したあんな醜悪で不憫な生き物を飼う狂人だ」まさか接ぎ木の様に造られたわけでもあるまいが、酸鼻極まる何かをされた事は疑いようもない。あれはケルベロスではなく、まさに三つ首を持つだけの犬であった。

「あの犬、異様な肥大化が祟って心臓に来たのか、首同士が喧嘩をしたのか、はたまた用済みだからと殺処分させられたのかは知りませんが、死んだらしいですよ。森に埋められたとケンタウロスが言っていました」

「まあ、犬の躰も出来ないのに竜を飼う狂人だからな。竜が恋しくて蛇の化物を飼い出したとしても不思議はない」

「……校長に動きがないのもそのせい？」

森番が下手人として、魔法省を介入させないのは逃がした蛇を捕獲するまでの時間稼ぎだろうか。

「いや、怪しいのは事実ですが、血文字を書く理由がない。いくらあの森番といえども、少しばかり豪華な蛇を飼い始めた位で校内に落書きはしないでしょう」

お兄様も分かっていたのだろう。ヘルマンの言葉に鷹揚に頷いた。一学生が思い至るのだから、教授達は怪物という単語だけで森番を想起したことだろう。それは、校内の人間から継承者らしき者を絞り込むことが困難である事を表す。高揚にせよ沈鬱にせよ、ハロウインの翌日から様子のおかしい者はいくらでも存在している。クリービーの件が周知の事実となれば、ますます反応は読めなくなる。

「しかし、継承者を洗うとしても……どうする？ ヒューミントやプロファイリングの技能など持ち合わせていないしな」

「今年開放されたのですから、今年度からホグワーツに来る様になった者から始めるべきでしょうか。教員、生徒、妖精……他には流通関係でしょうか。食材や学用品を城内で生産しているわけではないで

しょうから。

ああ、ロックハートは除外しましょう。普段の講義で無様を晒しているのが演技としても、あれは校長が招聘した講師ですからね。クリービーの件をポッターの大冒険とするには流石に度を超えている」「業者に関しては寮監に対処をお願いしよう。俺達が調べるわけにもいかないからな。となれば今年の入学生になるが……4寮で200名超。ヴォルデモート明けのベビーブームでここ数年の最多入学者数か。埒が明かないな」

「逆に考えましょう。クリービーは何故狙われたのか？ 非魔法族の両親を持つといっても、その程度の条件なら蛇寮にも極僅かながら適合者がいます。むしろ、スリザリン信奉者であれば、蛇寮生の中に居る純血主義者にとってスリザリン的でない者は冒涇にも思えるでしょう。ところが、そういった者ではなく、クリービーが被害者となった」

「つまり、継承者はクリービーに近い人間。どうだケント。思い当たる者は居るか？」

同学年のケントだからこそ見えるものもあるだろう。しばらく目を瞑った後、ケントはこめかみを叩きながら話し始める。

「蛇寮であるとすれば、新生生ではないですがドラコ・マルフォイ先輩が筆頭ですね。クリービーがポッター先輩の写真を撮っている時にマルフォイ先輩から邪魔されたと愚痴を漏らしました。あれだけポッター先輩を嫌っているんですから、その信奉者とも言えるクリービーを標的にしてもおかしくはないでしょう。」

それにナメクジの件ですね。純血主義者という見立てにも合致しますし、何より彼の性格上、ナメクジを吐いている場面の撮影なんてされれば、報復に走るのも納得できます」

「いや？ あれは他人を痛めつける事に、本心では恐怖している。付き合いは少ないが、あれが自身で攻撃したのは、報復の恐れが少ないロングボトムだけだ。しかもその方法は足を縛り上げただけで、殴ったり切りつけたりしたわけではない。復讐の炎に身を焦がれながら秘密の部屋を利用するという計画を練り、実行する胆力があるとは思

えない」

「同学年の姫様がそう仰せならそうでしょう」

否定の言葉に、ケントは嫌な顔もせず同意した。自分がヘルマンやドロテアといった先達に否定されたとき、そのまま納得出来ていただろうか。そう考えると、ケントを不快にさせてはいないだろうかと気になる。何を伝えるべきかと思い巡らす、その間にケントが口を開いた。

「では、獅子寮1年生のグレンダ・フロスト。魔法族の生まれです。クリービー程ではありませんが、ポッター先輩のかなりのファンです。ファンではあるんですが、クリービーとは解釈違いとかいうものらしくて、理解が浅いだとかにわか野郎だとか言ってクリービーを詰めていたことがあります。現在に至るまでポッター先輩に対する態度の違いは見られず、未だにお熱の様です。筋金入りですね。特に動機は思いつきませんが……例えば、継承者の敵としてポッター先輩を祀り上げれば、より強く英雄ポッターの名を知らしめることになります。そう仮定すれば、英雄をミーハーがもてはやすのは苛立たしいことこの上ないでしょう。」

次にジネブラ・ウィーズリー。ええ、あのウィーズリーです。クリービーとは授業で隣の席だったかと。入学当初は随分と我儘……いえ、勝気な印象でしたが、血文字事件以降はかなり憔悴している様ですね。あのハロウィンを何か魔法界の素敵な催しだとクリービーは思っていたらしく、撮影した血文字の写真を周囲に見せて回る彼に対して、ウィーズリーが止めると叫んでました」

「つまりどちらも純血主義思想ではないな。特にウィーズリー家は血を裏切る者として名を馳せる一族だ」

「そうなんです。ただ、ポッター先輩とクリービー、その両方に関わりのある人間となると僕が知る限りこのくらいしかないですね。それに、技量の問題が解決しません。秘密の部屋の怪物を使役するにしても、秘密の部屋にかこつけた何らかの呪詛を用いるとしても、結局は教員も凌駕する技術力を要求されるわけですから。」

「お力になれず申し訳ないです」

頭を下げるケントの頭にお兄様が手をやった。

「何も謝ることはない。俺だつて秘密の部屋なんぞ6年居ても聞いたことは無かつたんだ。これでお前を責める道理がどこにある」

「そもそも日頃から獅子寮の生徒を注視していることもないでしょうし、ケントはクリービーの事を嫌いそうですしね。「日本人がなんでここに居るの？ マホウトコロつてところに通うんでしよう？ 魔法界ってやっぱ不思議だなあ。スリザリンつて悪い魔法使いが通うところって聞いたけど、日本人だといじめられたりするの？」とか言われてそうだ」

「陰険眼鏡の二つ名は伊達じゃありませんね。大正解です。そんな解像度の高い想像が出来るのにどうして事あるごとにドロテア先輩を泣かせてるんですか？」

「うるさいな」

「ケント、個人の性的嗜好に口を挟むのは野暮つてもものだぞ」

ドロテアが泣く度に毎度困った顔はするので、泣かせるのは本意ではないのだろう。本心から泣かせているのなら軽蔑するが。それよりも、ケントの方がややこしい事情を抱えている。

ケントの怒りとは、クリービーにとつては日本人の血を引いていることが軽んじられる理由になると考えた事に起因するのだろう。ヤーナムに根差しているとはいえ、文化を今もなお継いでいるヤマムラ家にとって、日本とは特別な土地なのだ。その日本が軽んじられる理由であるという事は、ケント本人ではなく父祖に唾を吐かれた事と同義である。だがそれはクリービーにとつては別段違和感も悪意も無い、純粹な疑問なのだろう。故に、クリービーを殴ればどうにかなるものでもなく、クリービーを嫌うという形でしか解決できないものなのだ。

「寮監に伝えられる情報はなさそうだな。伝承通りの秘密の部屋の怪物なる生物は存在し得ないだろう、といった事くらいか。おおよそあちらもそうした推測はしているだろうが、狩人の踏査や上位者の事からより確度が高いと言うだけだ。それらを伝えるわけにもいかないとなると、怪物とは生物ではないだろうとしか伝えられん。まあ、俺

達が歩き回る事で継承者も警戒するだろうから、それで燻せば見えてくる者も居るだろう」

「報告ついでに50年前の事件について詳細な情報を求めましょう。ビルゲンワースの資料も、所詮は外部が調べられる情報と推測に基づくものです。教員のみが知る情報もあるでしょうから」

「ええ。寮監がご存知でなくても、当時の資料はまとめられているはずよ。禁書庫の入室許可も頂こうかしら」

「もう勝手に入り込んでいくくせにか？」

「忍び込むより楽ですもの」

お姉様は袖口から鍵束を取り出した。合鍵まで作っていたらしい。お姉様の魔術師としての技量に改めて隔絶を感じた。扉を物理的に破壊していた自分が恥ずかしい。

「ちなみに防御を抜いたのがイングリットで、あたしが合鍵を作ったんだ。どやあ」

ドロテアも同じ鍵束を取り出し、指に絡めて得意げに振り回している。

「へえ。やるじゃないか。ヤーナムの僕の部屋の鍵もあるのかい？」

「勝手に入られた形跡があるんだけど」

「それは業務上お答え致しかねますってやつだね」

「何の業務だよ」

「禁制品の不法所持疑惑について家宅搜索？」

「そんなものあの母親の下で持っていられるわけないだろ。それにどう考えても不法侵入している君の方が犯罪者だ」

「そのお母さんからいいよって言われてるし」

「僕がダメと言うだろうとは思わなかったのかな」

「思ってるだけじゃ伝わらないよ？ 言葉にしなきゃ」

「僕の、部屋に、勝手に、入るな。これで満足か」

「理解はしたけど同意はしない」

ヘルマンとドロテアを置いて教室を出る。2人がああしてくだらない話をしているのも、ストレス解消の一環なのだろう。仮定に仮定を重ね、それでも結局は分からないという現状は立つべき足元がない

不安感を作り出す。

後代の狩人はビルゲンワースに学び、その後には先代月の魔物の墓、聖杯と化したヤーナムの獣狩りの夜に挑むことになる。だが、お父様には事前知識がなかった。

ゲールマンの不明瞭な助言とギルバート、アルフレートからの情報を基に聖堂街を駆け回り、そして頼るべき教会は既に獣の病に沈んでいたことを知った。

ローレンスの頭蓋に触れ、ビルゲンワースに知識を求めれば、そこには得体の知れない虫人間と問答無用で襲い掛かってくる狩人ユリエ、そして首から蠱の生えた学祖ウイレーム。

ウイレームの指し示すままに湖に飛び込めば、蜘蛛とも言えぬ、獣とも言えぬ何かが這いまわっており、それを倒せば赤い月に見えた。

ここで獣の病とは何か、獣とは何か、ヤーナムを包む狂気そのものに対峙することとなった。

そうして夜明けを迎え、漸く肉の眠りにつけば、目覚めるのは診療所であった。その失望、その焦燥はいかばかりか、推し量ることも出来ない。

「じゃあ、マリアとケントはグレンジャーさんにクリービーさんの事と50年前の秘密の部屋事件を伝えてくれるかしら。それと、無闇に独りで出歩かない様にと。私とお兄様は寮監に伝えてくるわ」「分かりました。では後ほど」

お姉様達と別れ、ケントを連れて東棟へ向かう。

日曜日の10時ともなれば、広間や内庭でテーブルゲームやカードゲームに興じる者も多いはずだが、人が少ない。ケントも首を傾げていたが、その理由は直ぐに分かった。

「何をしに来た！ コリンが殺られたのを噛みに来たのか!？」
殺されてはいないだろうが。

クリービーの件は既に学内に広まり始めているらしい。獅子寮の談話室前に並ぶ自警団らしき集団が、鬼気迫る様子で杖を向けてきた。棒切れを振り回し、罵声を投げかけてくる様は獣狩りの群衆そのものである。

ここでハーマイオニーを呼び出そうものなら、彼女にどの様な危害が及ぶか分かったものではない。

「近くを通ったら騒がしかったもので。特に他意はありません。失礼します」

「ここにスリザリンが何の用だつてんだ！」

「そうよ！ 私達の寮以外何もないのは知っていますでしょう！」

「腐れスリザリンが！ 馬鹿にしゃがって！」

獅子寮の連中は普段胡桃程の脳もなさそうな思考回路をしているくせに、被害妄想を膨らませる事については一級品だった。

「あの人たち自分の叫び声で鼓膜ぶっ壊れてんじやないですか？ きつと文字に起こしたら全ての文節に感嘆符ついていますよ」

「言つてやるな。奴らは声の大ききで階級が決まる生き物だ。一番声の大きい一匹が一番大きいバナナを貰える仕組みなんだ」

呆れた様子の子のケントに小声で返す。こうも話が通じないのは腹立たしいが、かといって煽つたところで何の益にもならない。

ふと、この連中がクリービーの事を知っている理由に思い至る。ポッターだ。

クリービーが医務室に運び込まれたのならば、ポッターはクリービーの身に起きた事を知っているはずだ。そこから獅子寮内に広がったのだろう。ならばポッターを呼び出し、ハーマイオニーを連れだす様に伝えればいい。ポッターが承諾するかどうかはともかく、現状取り得る手段で最も可能性があるのはこれだろう。

「先程はああ言いましたが、実のところ、ポッターがクイディッチで腕を失くした件について、予後はどうかと気になります。可愛い後輩とクイディッチの話をしていたら、ポッターもそろそろ骨も生えそろつた頃だろうか」と。

まあ、あの競技に怪我は付き物とはいえ、暴走していたブラッジャーを迎撃し損ねた私にも責任の一端はある様にほんの僅かながら、スニッチの重さ程度には感じておりますので、見舞いに行かなかつた事にタンポポの綿毛程には疚しさがありませんよ」

「姫様本音隠しきれてないですよ」

ケントが耳打ちしてくるが、こうもポッターに対して下手に出る様な言葉はたとえ方便だとしても受け容れ難い。

「だったらリーにも謝れよ！ お前とお前の兄貴がブラッジャーで殺しにかかってきたんだだろうが！」

「もうむり。かえる。」

これ以上付き合いきれん。ここの公用言語は英語ではないらしい」「独語でも日本語でも意思疎通出来ないと思いますよ」

どう理屈をつけてもハーマイオニーに話が出来る未来が見えない。

「戻ったら茶を淹れてくれ。少し冷えた」

「usuchaでよければ点てますけど、いかがですか？」

「ウスチャ……ジャパニーズティーセレモニーの一種か？ ダフネも呼んでみようか」

「あ、それなら菓子はまだ甘くないものにします。あの方はきつとおやつの時間とか気にされるでしょうし」

こうして無為に時間は過ぎ、月曜日にもなるとクリービーが倒れたという情報を城内で知らぬ者はなかった。どうせ知っているのならばと教員達が考えたかは分からないが、在校生に向けた運営側からの告知は何ら無く、それぞれが自衛策を講じる様になった。

寮監に伺っても「校長は無為に不安を煽らぬ様、普段通りを心掛ける様にと仰せだ」と苦々しく語るだけであった。つまり、学校として対策を検討する事さえ出来ていないという、驚くべき危機管理体制を知る事となった。

決闘

「第9回定期報告を始めます。進展、ありません。以上です」

「……ふざけているのかね」

「真面目に申し上げております。こうしている間にも、イングリットとドロテア、ヘルマンとケントが組となって探索しておりますが、何ら異常が発見できません。

……言い訳がましくはなりますが、こうして何の動きもないことから、継承者も俺達を警戒しているのかもしれない」

寮監の助手として雇われたことで、狩人達は毎晩城内を徘徊し、月・木曜日の夜にはこうして寮監の研究室を訪れて報告を行っているが、本当に何も感知出来なかった。血文字の周りを調べても怪物の痕跡は無く、先達の残した手記を頼りに幾つもの隠し通路を暴いても秘密の部屋は見つからず、やはりビルゲンワースの推測通り秘密の部屋の伝承にかこつけた破壊活動ではないかと思われる程だった。

禁書庫への入室許可は得たものの、学校史の恥部である為か当時の情報は得られなかった。

一向に解決しない事態にますます不安を募らせる者達は聖人の遺骨など出所の怪しげな護身用品をも買い揃えていた。一方でこの状況に慣れてしまった者もあり、際立った異常者を見つけ出す事が難しくなっている。

ハーマイオニーとの情報共有は、寮監に補習という名目で呼び出して頂いた。ポッターはマルフォイを継承者として確信し、ウィーズリーと連れ立って嗅ぎまわっているが、これを異常とするべきか平時の態度から平常とすべきかは判断がつかない。少なくとも、ハーマイオニーの言ではあの夜以後ポッターが見えざる者の声を聞くことは無かったという。

それよりも気になる情報があった。ドビーなる屋敷妖精がポッターにホグワーツを去る様に警告したという。つまり、これらの騒動は何らかの事故や突発的な事件ではなく、計画的に行われたものであることを示す。ビルゲンワース経由で魔法省屋敷妖精転勤室に確認

をとってみるが、あの部署は魔法大戦によって主人を失った屋敷妖精の為に新設されたものであり、登録された妖精の中にはドビーの名は無かったという。

「諸君の影響は一考するべきと吾輩も考えている。職員会議でも話題になっていくのだ。スネイプ教授の助手を謳い、深夜に徘徊する蛇寮生の存在にどの寮生も怯えていると。つまり、諸君が継承者ではないかと疑われている」

「そして英雄志望の獅子寮生が我らをつけ狙い、夜間外出を繰り返すと。何人の生徒を副校長に突き出したか数えきれません。夜間に私室を訪問するのも気が引けるので緊縛して放置したいところですが、それで本当の怪物の餌食になっては困りますからね」

「副校長も獅子寮生を制止してはいるが、納得させるのは難しいだろう。何故蛇寮の者だけが夜間外出を認められるのかと。もともと、血塗れ女帝と切り裂きジャップ以外は——」

「失礼、何と？」

「切り裂きジャップを知らんのかね。君の後輩だが？」

「……なぜ？」

ケントの事とは推測できたが、理由が全く分からない。自分の目に移る彼は、姫様と付き従いながらも偶に不敬な態度を取る後輩である。蛇寮生らしく身内には甘いがかと、かといって自分の様に獅子寮と表立って対立しているわけでもない。

「獅子寮生による授業中の文通によると、1年生の間ではミスター・ヤマムラはミスター・クリービー襲撃の容疑者と目されている。詳しい事情は把握していないが、クリービーとの間には何らかの軋轢があったのだろうか？ その後クリービーがああなっていることや、ハロウインの前後にハグリッドの家禽が殺されていることから、単なる陰口とも言い難い。猫で満足できなかった、とも言われている」

「意図していたものかはともかくとして、クリービーから差別的な発言を受けたと聞いています。まさかとは思いますが、彼を疑っていらっしゃるのですか？」

「吾輩がその様な者に調査を依頼する様な馬鹿だと言いたいのかね」

「滅相ありません」

「私達は自らに降りかかる火の粉は払えます。ポッターの置かれた状態の方を気にするべきでしょう。ハロウインの夜にポッターを連行してから、結局運営側は何も目に見える行動をしていない。故にこそ、ポッターは犯人ではないとされていたのも今は昔。ポッターを野放しにしているから次の犠牲者が出たとされています」

自分を客観的に見れば、獅子寮生から呪われた為に報復した実績のあるトロール・イーターである。疑われるのも無理はない。だが、第一発見者であるとしてもポッターが疑われている現状は拙い。確かにクリービーはポッターのパパラッチであったが、何より技量がな。あれが特別な才覚を見せるのはクイデイツチだけだ。それを無視して騒ぎたてる程にホグワーツは霧に包まれている。ジャック・ザ・リツパーの居た頃のロンドンの様に。

「改めて申し上げますが、やはり休校にし、生徒を帰すべきです。校内で犯罪が起きているにも関わらず警察機構を介入させないのは今更としても、治療薬も取り寄せず、クリービーを医務室に置いておく理由も不明です。怪物が石化した生徒を殺さないという保証もないでしょう。何故校長はこのまま放置しているのです」

「治療については理由がある。あの猫に既製品を試したところ、全く薬効が無い……あるいはほんの僅か、毛艶が良くなっただけだったのだ。つまり、小動物でさえそうなのだから、ヒトに用いるにはより濃密かつ繊細な調査が必要となる。実験動物と新鮮なマンドレイクが手に入るのであれば、これ以上に都合の良い場所はあるまい。」

だが、それ以上の事は分からん。吾輩には校長の考える事は皆目分からんのだ。出入り自由の医務室にクリービーを置くことに反対すれば、友人が見舞いに来られないのはより恐怖を煽ると言う。ならば警備を置くべきと言えば、見知らぬ者を入れれば生徒の息が詰まるだろうと言う。

……あの無能が提案した決闘クラブの設立を、良い気分転換になると承認した時に見せた笑顔。それを見た上で校長から助手に任命された吾輩の気分が分かるかね」

「決闘クラブ……正気ですか。呪詛をぶつけ合う口実にしかなりませんか」

「学閥抗争の激化がありありと目に浮かびます」

「それを懸念してか、フリットウィック教授は助手の任を拒否された。マクゴナガル教授は副校長業務に忙殺されこれ以上の余裕は無く、スプラウト教授もマンドレイクの育成に専念されている。他の教授も、契約外である、決闘には詳しくない、霊体である……と、何かしらの理由をつけて断ったのだ。吾輩はマンドレイクが育つまでは手が空いているとされた」

「心中お察し申し上げます」

「そこで、諸君に助手としてもう一つ仕事を頼みたい。この様なごっこ遊びで怪物に立ち向かおうとする馬鹿者が現れない様に、戦闘の恐怖を教え込んで欲しい」

「お望みとあらば」

十

木曜の夕食後、大広間の机は取り払われ、悪趣味とさえ言える絢爛豪華な金の舞台が設営されていた。予想通り、他寮生を攻撃できる機会を待ち望む生徒が大挙して現れた。既に小競り合いは始まっているが、各寮の監督生がどうか抑え込んでいる状態である。その興奮のうねりはロックハートの登場によつてさらに高まった。無能であるという話は広まっていたものの、それを否定する者、そこさえも尊いとして崇める者、育ててあげたいと妄言を垂れ流す者。狂信者の信仰は根強い。ロックハートは「静粛に」と群衆に呼び掛けているが、その笑顔からは轟く賛美の声を鎮めようとする意思は見受けられない。「校長からこの決闘クラブの開催を許可されました。それは、皆さんに迫る脅威——古の——凶悪で——絶大な脅威について、自己防衛が出来る様にと鍛える為です——詳しくは私の著書を読んでもらうとして」

教科書を読んで学べるのであれば、それに注力すべきだ。何のため
の防衛術の授業か。何故決闘クラブなど開催する必要があるのか。
深淵なる理由があるのかもしれないが、それこそヘルマンの言う通

り、オツカムの剃刀で削ぎ落すべき思考の贅肉だろう。

「助手を紹介しましょう。スネイプ先生です。スネイプ先生が仰るには、決闘について極々僅かにご存じらしい。訓練を始めるにあたり、模範演武を手伝ってください。ああ、ですが、お若い皆さんにご心配をおかけすることはありません——私が彼と手合わせした後でも、皆さんの魔法薬の先生はちゃんと存在します。ご心配めさるな！」
つまりどうということだ。

寮監を再起不能にした上で、自身が薬学教授も兼任するということだろうか。講義もそうだが、何が目的で何をしているのかが全く読めない。全てが継ぎ接ぎの様な印象を受ける。

一方の寮監は捕食者の笑みを浮かべていた。旧主の番人が連れる赤目犬のそれと同じである。

案の定、ロツクハートは寮監に為す術もなく一瞬で葬られた。読み合いも牽制もない。ただ一節の「武器よ去れ」との詠唱で、ロツクハートは杖を挽ぎ取られ、壁に叩きつけられ、床に崩れ落ちた。

この時点で寮監の目論見は達成されていそうなものだが、ロツクハートは僅かに笑顔を曇らせたに過ぎなかった。

「中々良い判断でしたね。武装解除術——こうして私は杖を取られ、戦闘力を失ったというわけです。無論、私にそれが分かるという事は、つまり私はスネイプ先生の思惑を読んでいたという事です。故にこれを止めようと思えばいくらでも手段はありました。ですが、武装解除を受けるとどうなるか——それを見せなければ教育とは言えませんからね。スネイプ先生が苦い顔をするより、私の珍しい姿を見た方が皆さんの記憶にも残るといふものです。

——さて、お次はスネイプ先生のお弟子さん達から催し物があるという事です！」

寮監が苦い顔どころか殺人も厭わない顔をしているところで狩人が呼ばれた。お兄様とお姉様、ヘルマンとドロテアが舞台上上がった。寮監を軽んじるわけではないが、弟子扱いは屈辱でしかない。「イングリット、派手に行こう」とお兄様が苦笑すると、お姉様は既に掌に小刀を刻んでいた。

「マリアはどうするの？」

この集会には貴族のお嬢様組も参加していた。パンジーはマルフォイが行くからという理由で、ミリセントは単純に気になるという理由で、ダフネは2人の付き添いである。壁際に用意した椅子に腰かけ、カクテルグラスを傾けている。

お兄様は狩人の、お姉様は娼婦の一札を交わした。ヤーナムでは娼婦の一札と呼び習わされているとはいえ、一般的にはカーテシーに見えるものである。

「特に何も。私にしてもケントにしても、狩人寄りの戦法が多いからな。ここで披露するには些か年齢制限がな……ピクシーの駆除を虐殺と呼ぶ様な連中にとっては些か刺激が強すぎる。その点、舞台上上がった狩人達は魔術も十分に使える。

もつとも、手の内を明かす様な事はしないだろうから、宴会芸じみたことになるだろうが」

「宴会芸……あれが？」

お兄様が浮かべる幾つもの杖。その先から放たれる様々な呪詛をお姉様は身体に纏わせた焰で燃やし尽くしている。色鮮やかな閃光が次々と緋色に塗り潰される様は幻想的であるが、その熱は荒々しい。時折、焰はお兄様を絡め取ろうとするが、お兄様は僅かに身を逸らして躲した。

「何してるのあれ」

「見た通りだが？」

「見ても分からないから聞いてるんだけど」

「ディルク様は分身術と浮遊術の応用、イングリット様は……まあ、狩人の極一部が使える秘儀と言ったところですよ。高濃度の魔力の塊で呪詛を押し潰してるんですね。似た様な事はヘルマンもドロテア先輩も出来ますけど」

ケントが指し示した2人を見ると、ヘルマンは以前雨粒にそうしていた様に微細な魔力をぶつけてドロテアの呪詛を偏向させ、ドロテアは広間の脇に有った椅子を自分の周りに浮遊させて盾にしている。ドロテアに近いことは出来るが、ドロテアの様に自動化には至らな

い。

「……狩人でなくても出来るの？」

「お姉様を除けば普通に魔術の応用だからな。お姉様のものも悪霊の焰を用いれば似た様な事も出来るが、一番実戦的なのはドロテアの自動防御だろう。同じ自律型の防御でも、守護霊の召喚より難度の低い浮遊術を究めた方が余程省力化出来る。何より自律制御なら精神状態に左右されないからな。その一方で手動かつ一撃ずつ迎撃しているヘルマンの技量はおかしいとしか言いようがない。多分私は彼と同じ歳になつてもあそこには至らない」

彼が日頃立体パズルやトランプタワーを念動で完成させているのは暇つぶしではなく鍛錬の為だ。お姉様も料理では包丁を魔術で浮かせているが、その理由は食材に体温が移るのを避けているためである。

「ディルク先輩は？」

「お兄様も私より遥かに優れた狩人であり、魔術師だ。昨年度末の飾り付け事件を覚えているだろう？ 血の質、つまり魔力量で言えばお姉様に劣るが、自分の力を扱う能力というのはお兄様が在学中の狩人の中で最も優れている。

ほら、お姉様を見てみるといい。大分消耗していらつしやるだろう？ 一方でお兄様は何らお変わりないままで」

お姉様の反撃に対しても、お兄様は魔術で防ぐのではなく紙一重で回避している。そうすることで魔力の消費を防ぎ、常に攻勢をかけ続けている。それを可能にするのは、卓越した自身の能力の支配と相手の能力の分析力である。俗に言う、自分の試合が出来るというものだ。

「ああ、イングリット様の降参ですね。ヘルマン達は……まあ順当な結果ですね」

ヘルマンはドロテアの防御に対して飽和攻撃を仕掛けていた。ドロテアは防御に気を向けず攻撃に専念できるはずだが、ヘルマンの防御を抜けなかったドロテアに勝ち筋は無かった。ドロテアの許容量を見切つてしまえば、後は防御壁の軌道に合わせて一斉に投射するだ

けである。

「ちなみに闇祓いもあれくらいは可能だと言われている。直接交戦した記録は無いが、転移の連続使用で死角を取りつつ、致命的な呪詛をほぼ無尽蔵に投射していたらしいな」

「もつとも、姫様が宴会芸とされた通り、皆様は本気出してませんけれど。デイルク様なら余裕であるの倍の数は魔術投射しながら月光剣を担いで突っ込んできますし、イングリット様なら広範囲爆撃とか炎刃の長大延伸でこの広間毎燃やしますし。ヘルマンは狩人の秘儀を使うでしょうし、ドロテア先輩は銃を持ち出すでしょう」

お姉様はアンナリーゼ女王の血を啜った上位者であるお父様、特別な赤子を孕みうる程の血を持つアリアンナ女王の娘である。そのお姉様はかの時計塔のマリアを模した攻撃を可能とした。もつとも、その素質があつたというだけのことであり、その業を習得するための鍛錬は怠らなかつた。お姉様もまた、マリアに憧れた狩人の一人なのだ。

「……では、スネイプ先生の弟子達に盛大な拍手を！」

まばらな拍手を受けながら狩人達が舞台を下りる。多くの観衆は実力差に打ちひしがれ、愕然としていた。決闘クラブで学べばこうなれるという甘く愚かな幻想を抱く者も居たが、狩人の力の源泉はたとえ夢幻の内としても死闘の過程に得た智慧と技術である。ただのホグワーツ卒業生が辿り着くことはないだろう。

「成程、これで二度と決闘クラブは開かれないな」

「だろう？」

かの預言者の如く、人の海を割って狩人達が帰って来た。お姉様は上気した顔を扇ぎながら、ケントの持ってきたレモン水に口を付けている。

「寮監のぐい期待には応えられた様だな。継承者扱いされている俺達の実力をほんの僅か知ったところでこれだ。もつとも、その俺達が未だに継承者を捉えられないという事実に気付くのも時間の問題だな。

それにしても、イングリットが狩人の業を使うとは思わなかつた」「派手に、と仰せならその様に致しますわ。悪霊の焰の一種とでも思

われるでしょうし、狩人の秘儀というより血統魔術ですから別段ヤナムに面倒な事はないでしょう？ それよりお兄様、次の聖杯探索は私といかがかしら？」

「大勢の前で恥をかかされた恨みを晴らす、などと思っていそうだが、兄としての鼻屑を除いても恥などと思えるものか。目の前で戦っていても美しいと言わざるを得ないものだった」

「さて、どうでしょう」

お姉様の妖艶な笑みからするに、当たらずも遠からずといったところか。焰の華は観客を惹きつけたが、それをお兄様は鮮やかに塞いでみせた。お兄様を慕う者は元々少なくはないが、更に増えたことだろう。一方のお姉様はその美貌を嫉む同性も多い。一方的に思慕を寄せられただけなのに想い人を横取りした等と言いつけられることがあると、ドロテアが密かに教えてくれたことがある。

「吾輩の助手の催しは実に見事でしたな。では、ロックハート……ロックハート教授。どうやら吾輩達もアレに見合った演武をしなければなりませんな。子供のままごとと等しい武装解除術などよりも、より実践的で洗練された死合いを生徒に披露しなければならぬ。そう、吾輩は判断した」

「いえ、ここは学生同士で高め合うことが目的ですからね——誰か、進んで模範になる組はありますか？」

寮監は仄暗い愉悦を隠しきれていなかった。一方のロックハートは随分な役者である。眉尻一つ動かさずに一応は道理の通ったことを言う。

「ならば、マルフォイとポッターはどうかね。ポッターは今年の事件を体験しているとはいえ、昨年の防衛術の成績は同程度。実に相応しい相手ではないかと思料するが」

「名案ですー」

ロックハートはわざわざ舞台を降り、広間の中央に2人を招いた。利点も思い当たらないことから、おそらくポッターが自身と同じ舞台に立つことを忌避しているのだろう。ポッターに寄り添い、何か入れ知恵をしている様だが、滑稽に杖を弄んだ挙句に取り落としていた。

これはポッターに恥をかかせる為の策略だろうか。

マルフォイはロックハートを不安げに見つめるポッターを嘲りながら、寮監の言葉に何度か頷いていた。あれでいて一応は名家の出である。こうした場面で使える魔術は幾つか知っているだろう。

「1——2——3——始め！」

結局ポッターにまともな指導もないまま、号令がかかった。

「蛇出でよー！」

マルフォイの杖先から蛇が飛び出した。細いが長大で、艶やかな黒をしている。禁域の森で見慣れた毒液を吐き出すものとは異なり、愛らしさも感じられるが、学徒にとってはそうではないらしい。舞台の周囲に居る者は悲鳴を上げてのけぞった。

「さあ、偉大なるロックハート先生様のご指導の結果、見せてくれよポッター！」

ポッターは唇を噛むが、杖を向けたままで微動だにしなかった。蛇とポッターの距離は離れている。蛇を無視してマルフォイに呪詛を放ればいいものを、そうしないのはマルフォイへの対抗心からだろうか。しかし、浮遊術なり石化術なり1年生でも扱える魔術で十分に始末できるだろうに、何を躊躇っているのかは分からない。

先程寮監の披露した武装解除術を使えば日頃の鬱憤も晴らせるだろうが、嫌う者の技を使う事には抵抗があるのだろう。それだけは共感できる。ロックハートを真似て笑顔を振りまき美辞麗句を並べれば血塗れ女帝呼ばわりはされないだろうが、それはどこか魂の一部が自分ではなくなる様に思える。

「大方、決闘の真似事と思えば吾輩から何も学ばなかったのだろう……これが吾輩の授業中であれば減点しているところだ。追い払ってやろう」

「私にお任せあれ！」

寮監が呆れ果て、杖を鷹揚に取り出そうとした瞬間、ロックハートが叫んだ。ロックハートが杖を振るうと、蛇は宙に吹き飛び、そして床に落ちた。当然、蛇は怒りに狂乱し、ポッターではなく身近な生徒に向かって鎌首をもたげた。まさかとは思いますが、無詠唱発動を試みて

失敗したのだろうか。

蛇の標的となったフレッチリーは恐怖のままに硬直している。所詮マルフォイが生み出した蛇であり、ヒトを絞め殺す密林の大蛇でもないのに何をそこまで恐れるかは分からない。運が悪くとも腕を折られる程度の事だろう。寮監が黙して手を出さないのも、ロックハートの無能さを浮き立たせるというよりは、大事ではないにせよ事故による決闘クラブの廃止を期待しての事だろう。お兄様とヘルマンも興味無さげに遠くを見ていた。

フレッチリーの鼻先まで蛇が首をもたげた瞬間、ポッターが動いた。走り出すでもなく、まるで蛇の様に、音も立てない歩みだった。ただ、その口は獅子の咆哮の様に開かれ、そこから表音出来ぬ擦過音が漏れ出た。

蛇はポッターに向き直り、とぐろを巻き始めた。それにつれ、広間に満ちる声援と野次は静まり、ポッターの紡ぎ出す音だけが空気に刻まれていく。

「……これは酷い」

お兄様が短剣を蛇に投げつけた。蛇は首を床に縫い付けられ、一瞬痙攣した後に靄となって消え失せた。寮監も先程までのポッターを晒し上げる愉悦ではなく、驚嘆と困惑を緬い交ぜにした表情で杖を掲げていた。

驚くのも無理はない。ポッターの口から漏れたあの音は蛇の言葉である。その内容はともかく、それを発したという事はポッターにとっての地獄の門扉が開かれたことを意味する。

スリザリンの秘密の部屋。その開放を最初に発見した者。

スリザリンの象徴たる蛇。それと言葉を交わした者。

分解してみればただの羅列でしかない断片が、結びついて物語となる。ポッターの笑顔から蛇を制止したのだろうという事は分かるが、それをこの Hogwarts という地獄の住人達が理解するはずもない。

「これで継承者探しは終わるだろうな。これからは迫害の始まりだ」

「ふうん……校長にでも匿ってもらうのかな」

嫌いだからといって咎無くして死ぬ姿を喜ぶ程子供でもない。

ポッターの罪はハーマイオニーを傷付けたという自らの罪を隠し、子供じみた英雄願望の結果彼女を殺しかけた事。そして、その罪を贖わず、さも赦され、友人であるかの様に振る舞っている事。その罪を忘れ、再び石を護る等と息巻いて英雄に成ろうとした事。彼女は人格形成の為に利用しているに過ぎないと言った。赦されていない事を赤毛共々理解するのはいつになるだろうか。

幼稚さから成った邪悪だが、彼の罪と今年の騒動は何ら関係がない。昨年は校長の奸計に踊らされ、余計なことに首を突っ込み、彼女を巻き込んで自殺を図ったと言えるが、今年についてはただの被害者である。故に、勝手に死ぬのは好きにすればいいが、殺されるのは違うだろう。

ポッターが継承者であるとは断言できないが、継承者であると疑った方が楽ではある。その Hogwーツ生の易きに流れる性質は、たった3か月過ぎただけのケントでさえ理解している。ダフネもポッターが直面するだろう悪夢に気付いている様で、同情はしていないにしても思うところはあつらしい。

ざわめきが怒号になる前に、ハーマイオニーと赤毛がポッターを広間から連れ出した。狩人としてはポッターに話を聞きたいところだが、これでポッターに接触しようものなら余計な混乱を招く。いつも通りハーマイオニーを通じた方が良さだろう。

「……結局、杖を振り回したところで蛇にすら対応できぬ。それが諸君の実力だ。少しは日々の授業をまともに受ける気になったことであろう。寮に帰りたまえ」

私語は許されない授業でさえくぐもって聞き取り難い寮監の声だが、此度は水面に石を投げた様に響き渡り、生徒達は列を成して抜け出て行った。ロックハートもいつの間にか姿を消していた。

狩人達は助手として広間の原状復帰を手伝うという名目でその場に残る。もつとも、名目上だけではなく実際に作業も行うが。

それぞれが作業にあたる中、ケントは厨房から茶と軽食を運んできていた。死闘とは程遠い見世物とはいえ、壇上に上がった狩人達には良き補給となるだろう。

「継承者かどうかは判断出来ませんが、まずはポッターの保護を。疑心暗鬼で殺されかねません」

「校長に進言しよう。聞き入れられるかは別だが。それより、どう見るかね」

「継承者がポッターであると判断できる要素は増えましたが、一方でポッターではないと判断する要素も増えました。秘密の部屋の怪物が蛇にまつわるものとして、では何故自らその能力を明かしたのか」「それに、蛇を制止する必要もない。いや、俺達も蛇語を聞き取れはしません、あの様子から推測するに制止したのでしょうか。本当に継承者であるのなら、無能のふりをして蛇に襲われるのを眺め、よりそれらしいとされているマルフォイ少年が疑われている方が彼にとって都合がいいはず」

マルフォイは談話室で「僕じゃないが、継承者とは是非とも仲良くしたいね」等と嘯く一方、他寮生から継承者だと噂されれば気を良くしていた。継承者の敵が純血以外を意味するのならば、蛇寮にもその該当者は少なくはない。それ故に自身がそうではないと告白しているのだろう。マルフォイには幼稚な虚栄心だけではなく、一応の保身も兼ねる程度には賢しい一面もある。

「左様。ポッターは不出来な生徒以上の事はない。ホグワーツ特急とブラッジャー、そして屋敷妖精について、狂言としようにもあれにそんな知恵はない。」

……子供同士の諍いで死人が出るなど冗談にもならん。ポッターを殊更に守れとは言わんが、貌の無い怪物を生み出したくもない」

「秘密の部屋の怪物とは、疑心暗鬼が生む呪い……そんな御伽噺なら性質が悪いですわね」

「殺して終わるなら学生全てを殺さねばならないからな」

「怪物の死体を検めたらただの人間だった、なんてオチもありそうだ。怪物を見る者こそ怪物だった。ハツカネズミがやってきた、話はお仕舞い」

「笑えんな」

寮監が疲れた溜息をこぼすが、怪異殺しの界限に於いては珍しくも

ない惨劇である。

「ええ、ですが元は生徒だったモノを殺める事も覚悟しておりますわ。ポッター君が蛇語を話した後から、血が少し蠢いていますので」

寮監は服従の禁呪が飛び交っていた暗黒期を知っている。そうした時代にはヘルマンの挙げた悪趣味な冗談よりも酷い事実もあったのだろう。

そして、今のままホグワーツが憎悪ではなく狂気に取り込まれれば、それよりもより酷いことになる。恐るべき獣には成り得ないとしても、理性の無い獣人となる事はあり得る。一応は抑制剤が発明された人狼症と異なり、魔法族という血の本性に因るそれに、救済は死を以ってしか得られない。

「何かの比喩かね」

「そうとも言えますし、そうでないとも言えます。いずれにせよ、生徒の精神面での対処は必要になってくるでしょう」

「食事に生ける屍の水薬みたいな精神安定剤仕込むとか？」

寮監は片方の眉を吊り上げた。ドロテアの授業態度について同様に脅して窘めているため、その意趣返しとでも思われているのだろう。

「ミス・グリム。進路希望は漫談師としない方が賢明ですな」

「ドロテアが言ったことなので信じられないかもしれませんが、大真面目に検討して頂きたいですね」

魔法族の子供は感情に因って魔術を発動するでしょう。魔法族とは理性という壁で出来た水槽で、魔術とはその中から必要なものを必要だけ汲み出す事です。

この程度の事を寮監に話すのはマーリンに教えを説く様なものですが、問題は精神の揺らぎはその水槽そのものを揺らす事です。子供の癩癩で多少零れる事は許容できても、大人の力で揺らすのならば、水槽そのものが壊れる事もあり得ます。

悪魔の子、オブスキュラスは水槽の中に棲まう寄生虫ですが、水槽の崩壊は誰にでも起こり得る事象です。他にも細かな条件はありますが、その崩壊こそ、僕らが恐れ、そして防ごうとする獣の病という

災禍です」

「特に魔法族が密集した場では水槽は共振し、増幅し、壊れやすくなる。そして初めに壊れた水槽の破片が他の水槽を傷付け、一斉に崩壊する原因となる。観念的な話ですが、俺達の使命は破片が周りを傷付ける前に、痛んだ水槽を分解すること。そして、父が約束したヤーナムの投入とは、その最終的かつ不可逆な解決方法……塵殺をも射程に含む」

「僕達としてもそんな手段はとりたくはありません。たとえそれが薬によるものとしても、精神の安定を得られるのであれば惨事の予防となります。多少授業の進みが遅くなったとしても、イモリやフクロウの成績が落ちたとしても、死ぬよりマシでしょう。こんな事態を放置して授業を進めている事こそ、狂気そのものですが」

容器の内側から外に飛び出ようとする事、ヤーナム的に言えば救済を求め内在闘争に敗北する事も条件の一つだが、寮監は詳細な情報を求めているわけでもあるまい。

「クリービーの親など、特に危険でしょう。魔法族を生むという事は、魔力の因子が僅かながらもあるという事です。何らかの事由で魔術教育を受けなかった魔法族である可能性もあります。」

いずれにせよ、魔法界という未知の世界に信じて送り出したら、手紙は途絶え、クリスマスにも帰らない。理由を訊けば、訳の分からない怪物に襲われて意識不明の重体で、親元にも返せないし魔法界・非魔法界のどちらの医療機関にも診せていないという。そんな状況では不安どころの話では……

いや、まさか知らせていないのか？」

ヘルマンの疑問はもっともだった。そんな訳の分からないところで訳の分からない事態に陥っているのであれば、治療の見込みはどうあれ自らの下に我が子を取り戻したいと願うはずだ。だが、クリービーが親元に帰るとい話も、親が来校したとい話も無い。

「左様」

「都合がいい。ですが、反吐が出ますね。親を騙して子を奪った様なものだ」

「いや、ヘルマン。事実を伝える事が必ずしも良いことではないだろう。いたずらに無力感やホグワーツへの憎悪に苛まれるよりは、事態が解決したらさっさと退校を決める方が建設的だ。未だ11か12だろう。中等教育に移る前に大病を患ったとすればあちらでの経歴も傷は浅い」

ヘルマンは吐き捨てるが、お兄様はそれを否定する。清濁併せ？むという話でもなく、親の意志と利益どちらに天秤が傾いているかということだろう。昨年ハロウィンの夜にしても、年度末の夜にしても、ヘルマンは理屈こそ並べるがそれは意志を貫くための手段である。

「他の非魔法族生まれの生徒の親も事態を知っていれば心配しているんじゃない？ まさか検閲でもしているんですか？」

ケントが律儀に挙手して言った。

「それはない。副校長が忙しいのは検閲ではなく保護者対応だ。吾輩の授業に対する抗議よりも多い苦情が寄せられるのは初めてのことだ」

「まあ酷い。あの副校長がそんなことを仰るなんて、本当にご苦勞さされていらつしやるのですね。なら、校長のお忙しさは私共の想像も及ばぬことでしょう」

お姉様が皮肉を飛ばす。先程の演武はお兄様の求めに応じたと仰ったが、それが全てではないだろう。校長はすべきことをせず、それでいてままごとで安寧を取り戻そうなどという校長の姑息な態度にお姉様は怒っている。故に、狩人として磨いてきた業でその目論見を崩そうとしたのだろう。

「校長がどうあれ、早期解決に尽力する。吾輩にしても、諸君にしても、すべきことはそれだけであろう。」

吾輩の授業に関しては諸君の出席義務を免除する。試験成績さえ十全であれば何も言う事はない」

「その校長は何をしていらつしやるのか、俺達には全く分からないのですが」

「その答えは既に伝えた通りだ。吾輩も分からん」

非魔法族生まれのフレッチリーは当初ポッターが何をしたのかは分からなかった様だが、純血のマクミランは違った。そのマクミランの言葉を受けて、「彼は僕を殺そうとした！ どうして先生達はあいつを退学させないんですか！」とフレッチリーが声高にポッター脅威論を喧伝するのに時間はかからなかった。

これに一番恐怖したのは蛇寮だった。ポッターも典型的獅子寮生であり、蛇寮生がその攻撃対象となる事は予想出来た。継承者の敵という言葉が非魔法族生まれの者ではなく文字通りの意味とすれば、真っ先にポッターの敵となり得るのは蛇寮生だろう。

しかし、ポッターが蛇語を用いて蛇をけしかけたとするならば、正しくポッターは継承者であり、蛇寮生が襲われるといったことはないだろう。フランキ監督生はそう言っただけで寮内の鎮静化を図った。

だが、ポッターがまず間違いなく恨みを持っているだろうフレッチリーとマクミラン、ついでに獅子寮憑きのゴーストが翌週にまとめて石になったことで、蛇寮の望みは絶たれた。

昨年よりもクリスマスマスに家に戻る者は多い。ミリセントに至っては、ほとぼりが冷めるまでそのまま帰ってこないつもりだという。寂しくはあるが、親の心情を考えれば当然の事だろう。

他寮も同様で、休暇前の慌ただしさだけではなく、幾分か湿り気のある朝食であった。一方、マルフォイは「ポッターが継承者？ ハッ、それこそマーリンの髭さ。それに、誰が継承者だろうと怪物が僕を襲えるはずがない」と言い切っていた。パンジーも同じ調子で「今年もプレゼントはチョコの詰め合わせでよくって？」と、何の心配も無い様だった。

意外な事に、フランキ監督生は帰らなかった。敬虔な信徒であればクリスマスは家族と過ごすだろうと思っていたが、「蛇寮もまた家族であり、騒動の中で家族を捨ててシチリアに帰るなど、それこそ教えと掟に反する」とのことだった。

「マルフォイ、ご機嫌な様で何よりだが、何か父君から聞かされていないのか」

「僕が伺ったことはみんな話したさ。父上だつてその時に在学中だつたわけではないからね。それこそ、君たちはどうなんだい。色々嗅ぎ回っているみたいだけど」

「お手上げだ。私達はボンドでもホームズでもないんだ。地道に虱潰しするしかない」

「マグルの偉人かい？」

「ボンドは公務員として活躍する色情狂。ホームズは私立探偵として活躍する薬物中毒者だ」

「マグルはどうかしている」

「マリアの説明がおかしいだけよ」

無聊の慰めにマルフォイを揶揄していると、ハーマイオニーが朝食を持って現れた。フレッチリー達が襲われてからというもの、ハーマイオニーはポッターの傍に居る事が多くなつた。彼女がこうして朝食を蛇寮の席で摂るのは久しぶりだった。

「グレンジャー、荷物はまとも終わったのかい？ 本をたあーつぷり抱え込んでいるんだろう？」

「ええ、おかげでお純血様より成績優良よ」

「それよりマルフォイ。貴公は帰らないのか」

「父上が忙しくしていらつしやるからね。魔法省や政財界の有力者への働きかけさ。マグルが何人死んだところで知つた事ではないけれど、理事を務める学校の不祥事が未だに収束していないなんてね。もちろん父上のせいではないにしても、敵は粗を探すし、愚物はそれではしゃぐのさ」

「なら顔を見せて安心させるのが子の務めじゃないのか？」

「そんな状態で子供が帰つたら醜聞になるんだよ。他所の子供は危ないまま、自分の子供だけは安全圏に、つて具合で。ウチは只の高額寄付者だからどうつてことはないけど」

「言うなよダフネ」

マルフォイは見栄の裏側を暴いたダフネを睨むが、ダフネは一瞬手を止めて視線を上げただけで、直ぐにトーストにジャムを塗り始めた。

「それだけマルフォイ家の名は重いって事でしょ。次期当主様も大変だね」

「君だっどこか良家の次男か三男を婿に迎えて家を継ぐだろう？君の妹は嫁入りだろうけど、それだっって相手の家の為に尽くすわけだ。」

それから逃げ出したのがウィーズリーだ。しつかりと血の責務に向き合っていればああまで没落することはなかったはずさ。まあ、そんな人間だから公職について好き勝手やるんだろう」

マルフォイが新聞を指し示すと、先のロンドン上空飛行の件で車の所有者であるウィーズリー氏が罰金刑を受けたことが記載されていた。そもそもウィーズリー氏は非魔法界に流入する魔術を規制する立場であり、その職権を私していたという。免職にならない辺り随分と緩いものだ。

「見たかいグレンジャー。これが連中の言う、マグル保護のやり方ってわけだよ。僕の家に呪具の不法所持疑惑だなんて乗り込んでおいて、自身はこれさ。父上がウィーズリー家を蔑むのも分かるだろう？」

「それと私の親を蔑んだこととは関係ないでしょ。血の濃さであれこれ言うつもりはないから、そちら側でどうぞ好きに為さってくださいいな」

「はっ。英雄ポッター様と没落貴族ウィーズリー様に取り入っっておいてよく言うよ。どっちの血が本命でどっちがキープ君なんだい？」

「あら、マルフォイ家のお坊ちゃんも繁殖期だね。犬みたいにいっぱい子宝に恵まれるのかしら」

「そこまでだ。子沢山の話は身につまされる」

パンジーがハーマイオニーを殺しかねないので流石に止める。マルフォイはハーマイオニーについて怪物に襲われて死んでほしい程度には思っているだろうが、友人が代わって殺して欲しいとは思わないだろう。

「そういえば、マリアって何人兄弟なの？」

「ギネスブックに載るほどでもないが多いとだけ言っておく」

上位者故に子供ができにくいとはいえ、年上の甥姪が何人も居る程だ。それらも当然子を成す為、存命のボーンの血族を漏れなく数えるとなるとかなりの時間がかかる。

何やら「私のお婿さんかあ……」と物憂げなダフネの背を押し、友人達を城門まで送った。既に骨と皮ばかりの天馬が待機しており、静かに体を揺らしていた。カインハーストの馬は翼こそないがこの天馬の亜種であるらしい。嗅覚に優れるセストラルは、招待状に染みついた特別な血の匂いを嗅ぎ付け、へムウィックに客人を迎えるのに具合が良かったのだろう。雪に埋まり、走り疲れた身体を冷やす様は可愛らしくもある。

「ロングボトム、気を付けたまえ」

「ああっ！　ごめん！　殺さないで！」

ロングボトムが馬と目を合わせない様にしていたせいで、ぶつかってきた。彼は泥だか馬糞だか分からない地面に転げたが、それよりも血塗れ女帝に触れた事を厭うとは随分と嫌われたものだ。

「……わざとならともかく、不注意でどうこうもない」

「えっ……僕たちのとこだと、君の機嫌を損ねると腕を斬り落とされるって聞いてるけど」

「それは違う。正確には、私を呪ったら杖腕を粉碎する、だ。それより、貴公も帰るのか」

「うん。怪物はきつと僕も殺したいって思ってるから。それに、お父さんとお母さんに会いにいかなくちゃ」

純血でありながら獅子寮であり、劣等生であるという立場は成程血を裏切った者とするに相応しいだろう。マルフォイがやたらとロングボトムを攻撃しているのも、建前上は純血としての誇りを思い出させるためである。そのお純血様がハーマイオニーに何一つ優るところが無いのは、それこそ純血としての誇りはどうしたという話なのだが。

「閹祓いとして名を馳せたと聞いているが、この時勢でも忙しくしていらっしやるのか。警察は大変だな」

「僕の両親はもう閹祓いじゃないんだ。遠いところに行ってる」

「そうか。久しぶりの団欒を楽しむといい。私達も貴公らが居ない間に怪物とやらを切り刻んでおきたいところだが……期待はしないでくれ」

マートルのトイレ

未だに消えない血文字を改めて眺めていると、マートルがその壁の向こうから現れた。

「機嫌がいいねマートル」

「あんたたちも消えればもっと良くなるけど」

ドロテアの挨拶に学徒のゴースト、マートルは暴言で返した。

生前は虐められ、霊体となってもなお在校生に辱められるという在り方から、マートルは大抵の生徒を恐れ、憎んでいる。彼女が自由になれるのは、こうして生徒達のない休暇中というわけだった。

「そう邪険にするな。クリスマスプレゼントに故郷のチーズをくれてやる。ゴーストに大人気だぞ」

墓所カビと豚乳のチーズはとてもヒトの食べられるものではないが、遺跡の悪霊には血の酒以上に効果のある代物である。ゴーストとは味覚が弱いらしく、特にこうした風味付けを好む傾向にある。

過去のヤーナム人が物は試しにと血みどろ男爵に献じたところ、大層お気に召された様だった。

「何？　ゴーストのゲロ吐くところ見て楽しみたいの？」

吐きやがった！　マートルがゲロ吐きやがった！　汚え！　臭え！　って騒ぐの!?

拡声術かけられてゲロ音全校生放送された私の気持ち分かる!?!
生前で27番目に嫌な想い出よ!?!」

「そうか、悪かったな。汚物で思い出したんだが、この学校の下水処理はどうなっているんだ？　水場の亡霊なら知っているんじゃないのか」

「ゲロに飽き足らず今度はクソ扱い!?!」

「クソ面倒臭いなこいつ」

「マリア、下品よ」

窘められはしたが、イングリットお姉様も口を覆っているので、おそらくは同じ様な事を考えているのだろう。

「第一ね、敬意を払いなさいよ！　あんたたちの幾つ年上だと思って

るのよ。私はゴースト歴50年よ！」

「そうか。敬愛すべきマートル様、教えてくれ」

「お辞儀をすれば考えてあげないこともないわ」

「……クソが」

狩人は霊体でさえ破壊することが出来る。魔力を纏う武器であれば、特にその攻撃は鋭くなる。ゴーストに人権があるかは知らないが、人格がある以上痛みや恐怖もあるだろう。

「まあいいわ。地下に訳分かんない魔術が掛かっている区域があるの。そこが多分下水処理場になってると思うわ。クソの行き着く先なんて見たくもないからはずきり見た事はないけど、そんなにクソが好きだなんてあんた変ね」

「そのクソが垂れ流された湖で育った魚が食卓に並んでいたのかと心配になってな。安心したよ」

下水処理についてハーマイオニーは教えてくれなかったが、次々と起きる事件に忘れてしまったのだろう。

「マートルさん、いいかしら」

「何？」

「ゴーストって壁や床を通り抜けられるでしょう。秘密の部屋を知っていたりしないかしら」

「別に何でもかんでも通り抜けられるわけじゃないわ。あんたらもマグルの知識あるでしょう？ 地球はずっと飛び続けているんだから、身体をどこかに縛り付けてないとあつという間に地球においてかれるわ。多分宇宙には間抜けなゴーストが腐るほどいるんですよ。腐りはしないけど。」

ま、宇宙に行ってみたいならいっぺん死んでみれば？」

「あれ？ マートルって非魔法族生まれ？」

「そうよ。当時の魔法族なんて天動説信者だっていた位よ。そんな生まれを鼻にかけて、理論も理解しないで杖を振りまわすばかりの馬鹿達を論破し続けたら虐められたってわけ。毎年いるでしょ、そういう子。それで独りになって泣いてるのを見て嗤って、後で自分が惨めになって泣くのが私の日常よ。憐れみなさい。」

そういえば、何か聞き覚えがあると思ったらそのチビ。あんたも去年トイレで誰かを泣かしてたでしょ。ほんと魔法族って陰湿ね。死ねば？」

「訂正するのも馬鹿らしいが、自分を哀れみ続けるところも見えてくるものが違うんだな。為になつた。ありがとう大先輩様」

この卑屈な亡霊には何を言ったところで無駄だろう。それよりも気になるのは、ゴースト歴50年という言葉。それにはお姉様もドロテアも気付いた様だった。

「んじゃ……もしかして、50年前の犠牲者って」

「ようやく気付いた？ あんたたちが毎晩ごそごそやってるのを見てるのは愉快だったわ。あんたらいつ寝てるの？」

「私達を知っているなら何故教えなかった」

「だって生者がどうなろうと知った事じゃないし、私だけが死ぬなんて不公平じゃない。」

で、秘密の部屋を知っているか……答えはノーよ。私だって自分の死因は知りたいし、50年も生と死について考えたり、水道管を壊してフィルチをからかったりしてただけじゃないわ。女子トイレはもちろん男子の更衣室だって覗きに行っただけど、秘密の部屋なんてものは無かったわ。

まあ、継承者がどっちになるのか分からないのに、性別が関わる様な所には作らないでしょって思ったのは死んでから20年くらいだったけど」

あつけらかんとしたマートルの感性は、やはり死者のそれなのだろう。獅子寮のゴーストも食事中に首の断面図を見せつけているが、あれは嫌がらせではなく余興のつもりらしい。付け加えれば、断頭によって死したゴーストにはそれなりの箔が付くらしく、文字通り首が皮一枚繋がっているとしても自分は首無しなのだという示威行為であるとハーマイオニーが言っていた。

カインハーストの悪霊たちは切り離された頭部を掲げ、悲嘆と恐怖の叫びを上げているが、地域性の違いだろうか。

「よく追い出されないもんだね」

「ダンブルドアの負い目でしょ。だってこの城で殺されて、この城に憑りついてるんだし。当時は校長じゃなかったけど、少しでも人間性が有ったら追い出してしまおうなんて思えるはずないじゃない。別に記念碑建てたり慰霊祭をしてほしいなんて思わないけど、それが無いならこうして自家鎮魂するだけよ」

彼女がけらけらと笑いながら指を鳴らすと、城のどこかで破裂音がして、続いて水音がした。

手間をかけさせるだけで危害を加えないという、赦される限界を見極めているのだから性質が悪い。お姉様もドロテアも呆れ、二の句が継がないでいる様だった。

「3階のマートルのトイレとは貴公が亡くなった場所か」

「そ。多分あんたの知りたいことは、どうやって死んだか、何がそうしたかって事だろうけど、それは分からない。

その日、私はオリブ・ホーンビーに馬鹿にされて、トイレで泣いてた。しばらくしたら、英語じゃない言葉が男の声で聞こえて、追いつ出そうとしてドアを開けたら、大きくて黄色い目が2つ。それから体が動かなくなつて、そのまま真っ暗になった。

ゴーストとして目が覚めたのは、私の死体が宙吊りになって医務室に運ばれる時だったわ。私が虐められてるのを知つたのになぁーんにもしなかつた教師達が、さあ大変だつて顔をしてたわ。あれで気づいたの。

ああ、私死んだんだって。

なりたての頃つてそこに在るだけつて感じだから、私がゴーストになつて居ることは教師も生徒も気付かなかつた。それから何日かして、ホーンビーがそこに謝りに来たの。死んでほしいわけじゃなかつたつて。赦してくれつて。

じゃあ何のつもりなワケ？ もうどうしようも無くなつてから自己満足の為に謝るつてどれだけ馬鹿にしてるの？ つて叫んだら、水道管が破裂してそいつはずぶ濡れ。それから私と目が合つて、気絶してたわ。

知つてる？ ゴーストつて眠れないの。だから、それからまた幾日

かして、すやすや寝てるホーンビーの顔に水滴を垂らしてやったの。それを40日間続けたり、2か月放置してから今度は錆を混ぜて赤くした水をかける様にしたり、食事の度に「私の代わりにご馳走を楽しんでね」って声をかけたりしてたら、頭がおかしくなって辞めたわ。

えへ。えへへへへへへへ

ハーマイオニーと同じ、とマートルは言った。確かにトイレで殺されかけたか殺されたかの違いはあるが、元を辿れば学徒による中傷が端緒となる。死の遠因となったことに罪悪感を抱くだけホーンビーの方がまともであったか、赤毛たちは死ななかつたからよしとするだけか。

「可哀想にな。気になったんだが、今年の事件について校長は貴公に何か尋ねたりしなかつたか？」

「全然そう聴こえないけど？ あんたも馬鹿にしてるんでしょ。顔も性格もブスが虐められて死んだって」

「いや、本心から貴公と御両親を憐れんでいるさ。世界を二分した大戦の最中に全寮制の学校内で殺され、原因は分からず仕舞いなんてな。親の悲嘆はいかばかりか。こうしてゴーストになっている以上、冥福も何も無いだろうが、安らかならん事を祈るよ」

ハーマイオニーが救われたのは、ダフネが居たからだ。マートルが生者を僻み続けているのは、そうした心を預けられる者が居なかつたせいだろう。

「ふうん？ まあいいわ。ダンブルドアは来てない。今年というより、あれ以来私に声を掛けた事は無いわ。多分怖いんでしょ。私に恨まれているかもしれないって。もちろん、恨んでるわ。」

毎年私と同じ様な子が居るって事は、あの頃から体制も気風も変わってないって事でしょ。あの頃から学校に居て、今は校長の椅子に座ってるつてのに、私が寒くて暗くて湿ったトイレで死ぬ羽目になった理由はそのまんま。

私の両親はもう亡くなってるだろうけど、どんな最期だったのか、私に甥とか姪はいるのかとか、誰も教えてくれない。だって、私が死んだ理由なんて誰も覚えてないもの。それだけみんな楽しい学校生

活を送れたんでしょね。

改めて紹介するわ後輩たち。これが素晴らしい英国唯一の魔術学校、ホグワーツよ。

今年も誰か死ぬんじゃない？」

†

お兄様達にマートルの事を伝えると「ではマートルのトイレを探るか」という話になった。マートルの死は継承者に因るもので、その声から継承者は男だったとすれば、女子トイレである事に何かしらの必要性があるか、あるいは歪んだ性癖のいずれかだろう。

マートルによればここで用を足す生徒など50年はいないらしいが、それでも一応は男子禁制という事で、男性陣は入口前で型稽古をしていた。

「ようこそ、寝室に。あんたたちが初めてのお客様よ。寝室って言ったって、永遠に眠ってるし眠れないんだけど」

「その寝室を荒らしてもいいのか？」

マートルなりの冗談なのだろうが、どの様な返答が正解か分からない為に流した。気を遣って笑ってやれば「私の事を嗤った！」等と喚き始める姿も想像できる。獣憑き同様、寝ているなら起こさない方が良いのだ。

「後で直せるならね。あんたたちがやったことまで私のせいになるのは嫌よ。でも、何にもないと思うけど。50年調べて何にも見つからないんだから」

「貴公には酷かもしれないが、生者にだけ反応する様な仕掛けがあるのかもしれない」

「そう。数世紀も前からここに居るゴーストだっているけど、あの連中だっけ見つけてないのはそういう理由かも」

「……こう言うっては何だが、随分と頭が回るんだな。在校生に語り継がれているマートル像とは印象が違う」

「そうやってヒス持ちの根暗ブスって馬鹿する？ 言ったでしょ。虐めの理由は相手を論破したからだって。野蛮な鉄の猪とジュラルミンの鯨に乗って戦争をしてるマグルが、自分達より魔術に詳しいなん

て腹が立つ上に怖いでしょ。連中曰く、魔術師同士の戦争は高潔な戦争なんですって。あの時代はグリンデルバルドがマグル脅威論をブチ上げてたから尚更ね。

とんでもない力を持つてる連中が好き勝手するのはどっちも変わらないと思うけど。今じゃ……何だっけ？ 核？ とか言う爆弾が世界中に有るんでしょ？ 杖一振りで人を殺せるのと爆弾一つで何万人も殺せるのとどっちが怖いかって言われても、死人には分からないわ。

ああ、その鏡に自分が映らないのは元から。私が自分の顔を憎んで鏡を呪ったって噂よ」

ドロテアが鏡を引き剥がそうとする手を止めた。確かにその鏡にドロテアは映っているが自分の姿は映らない。視る者だけを映さない鏡なのだろう。無意味な悪ふざけだが、この城にはそういったものが多数ある。

「お兄様、何か気になることはありませんか」

お姉様が外に声をかけた。

「いや？ そもそも女子トイレの構造なんて俺は知らんからな。おそらく個室が並んでいるのだろうとは思いますが……」

「女性用小便器なんてものもあるらしいですし、そうとも限らないのでは？」

「女性の神秘ですね」

男性陣も真面目に考えているのだろうが、着目点が最低過ぎる。聖母ダフネでさえ苦笑いではなく真顔になる程だろう。

「……覗いてみればよろしいのではなくて？」

「俺は紳士だ。そんなことが出来る訳ないだろう」

本当に真面目に考えているつもりらしい。

「じゃあ、ドロテア、マリア。聞こえているかい」

「ああ」

「うん」

ヘルマンに伝える。

「そこに有る物を全て壊してみてくれないか。秘密の部屋とやらが本

当にあるのなら、強固に防御されているはずだ。翻つて言えば、壊れない物こそ入口かもしれない」

「成程道理だ。マートル、多分直せるから安心してくれ」

取り出した得物は教会の杭と石鎚。石鎚とされているが、現在は合金製である。魔術的な保護を掛けるにしても、石材より金属の方が靱性も耐摩耗性もあり、何より修理がしやすい。教会の杭も冶金技術の向上でより強靱な材質に置き換えられている。

杭を壁に宛がい、石鎚で叩き、穿つ。

「マリア、何してんの？」

「何って……発破準備だが」

「城を壊したいのかな」

「この前は教室の入口を壊すだけで斧が潰れた。部屋ごと破壊するなら爆薬が必要だろう。どの爆薬がどれ程必要なのかは分からないので計算して欲しいが、アンプなりマイトなり持っているだろうか？」

「それは施錠されてたからでしょ。そうじゃなきゃ、トロールでも壊せるのにマリアが壊せないわけないじゃん。だから、壊れない物こそが入りじゃないかってヘルマンが言ってたんじゃん。そういうところ……マリアなんだけどさあ」

「……ああ？」

「いいからそのトンカチで叩いてみなって」

言われるがままに教会の石鎚を振り回すと、個室が砂山の様に崩れていった。

「ね？」

「……はい。ごめんなさいドロテア先輩、私が間違っていました」

ドロテアが咎めるでもなく生温かい目をしているのが、かえって羞恥心を煽った。お姉様はやり取りが聞こえていなかった様に、杖を振るだけで暴風を吹き荒らしていた。その心遣いがさらに心を苛んだ。

獣が暴れ回った後の様になって、それでも残り続けたのは中央の柱だった。いくつも備え付けられていた洗面台や鏡は割れ落ちていたが、たった1つだけが無傷のまま在り続けた。

「その洗面台の蛇口、水が出ないの。50年前からね」

マートルが懐かしそうに言った。その直後に顔を顰めたのは、おそらく何か嫌な想い出があるのだろう。

「マリア、念押しにここ爆発金槌で思いっきりブツ叩いて」
「分かった」

炉に火を入れ、両腕で握り、渾身の力を込めて柱に叩きつける。
「むう」

柄が捻じれ、肩が外れる程の反動があったが、爆炎の内から表れたのはほんの僅かにヒビの入った化粧石だった。

「ドロテア、輸血液を注射してくれ。腕が動かない」
「はい、お疲れ様」

僅かな酩酊感の後、筋肉と骨が在るべき位置に動いていった。失った臓器さえたちまちに治るのだ。それだけに飽き足らず、求めた神の叡智とは何であったのだろうか。聖杯の中の助言者ゲールマンは、黙して語らない。ただ決められた様に、曖昧な助言を繰り返すだけである。

「蛇の彫刻……大当たりね。ドロテア、寮監にお伝えしましょう。マリアはそこで休んでいて」

お姉様が蛇口の側面を撫ぜた。そこにはほんの僅か、ともすれば傷にしか見えない様な、しかし確かな蛇の文様が彫り込まれていた。

「はいお姉様」

「ちよつと？ お目当ての物が見つかったなら直してよね」

マートルがお姉様に文句を付けた。部屋の至る所から水が迸っている。管理人が発狂する前に手早く直したいのはこちらも同じ事だ。

「お兄様達を入れてもいいかしら？」

「さっさと直せるならね。女子トイレに男子を連れ込んでるなんて騒がれたら、みんな嫌がらせに来るでしょ。地獄を生きても、死んでも笑いで。ブスだ根暗だと言われた上に今度は痴女扱い。冗談じゃないわ」

「……そうね。お兄様、入ってくださいいな」

「状況は聞いていた。だが、原状を見ていない以上、どれだけ出来るかは分からないが」

お姉様はマートルを苦手としている様で、お兄様に任せている。お兄様からすれば、日頃そう言つて憚らない通り妹に頼られるのは悪い気はしないだろうから、誰も損をしていない。流石お姉様である。「ならとにかく綺麗にしてよ。前より綺麗になるんなら私も文句ないわ」

「ふむ……ならこれならどうだ」

お兄様が指を鳴らすと、床が滑らかに磨かれた大理石で覆われた。灰色と乳白色でモザイクを成し、原状の荒い敷石を置いただけの物より好ましい。

ヘルマンは元々個室の壁であつた木片に手を翳し、1室だけ作りあげた。ごく暗い緑色であつた元とは異なり、少し柔らかみを感じる淡い緑の仕上がりとなっている。複雑に蔦が絡み合う彫刻が施され、ノブは真鍮で出来ていた。春の日差しを受けて綻ぶ蕾を思わせ、そしてそれは女子トイレという場所においては好ましくない組み合わせだった。

「いいじゃない。この調子でやつて」

「仰せのままに。ではイングリット、寮監を」

「はい」

マートルは単に住環境の改善として受け取つた様で、ご機嫌であつた。お姉様とドロテアはなんとも評し難い表情をしてから出ていった。

「マートルの聞いた外国語とは蛇語だろうな」

「蛇語？ 何よそれ。蛇が喋るつて言うの？」

「その通りだ。無声音……声帯を震わせない、擦過音の様なものではなかつたか？ サアーとかスウーだとか」

「言われてみればそんなものだったかも。とにかく欧州でも聞いた事の無い言葉だったわ。そのチビのお付きの国かもしれないけど」

「日本語の事ですか？ W a k a r a n a i . S h i r a n a i .

K o m u g i k o k a n a n i k a d a

「もういいわ。多分そういうのじゃなかつた」

日本語は分からないが、ケントは雑にマートルをあしらつただけだ

ろう。お兄様の質問への回答でおおよそ分かった。おそらく、入口を開く鍵は蛇語の符牒なのだろう。

語力は遺伝しない能力である。スリザリンが蛇語話者で真に蛇語話者であったならば、誰も彼もが蛇語を話せるはずだ。それを前提に「継承者」という言葉を改めて考えれば、継承されるのは蛇語を用いる知識だろうか。例えばローレンスの頭蓋に触れ記憶を眺める様に、入口の開き方や蛇の召喚方法といった秘密の部屋の知識を封じた道具が継承されていると考えれば筋は通る。

問題は、そうなるとこの入口は強引に開く他ないという事になる。RとLの発音の様な差異は許容されるかもしれないが、「開けゴマ」と「入れてくれ」では流石に話が違う。マスターキーはあるものの、更に部屋を荒らせばマートルが怒りで更に頭をおかしくするだろう。

お兄様とヘルマンは何度も繰り返した事のある様な手際で次々と部屋を直していたが、一方でこちらは水を噴き出し続ける配管を仕込み杖で小突き回していた。妹に甘いお兄様も「俺がやっておくからそこで休んでいろ」などと遊ばせてはくれない。協働に於いて出来る事が有り、邪魔にならないならばやれというのは狩人の鉄則である。

「どうしたケント。冷えるか?」

「いえ。あー、気を遣わせて申し訳ありません。ただ、デイルク様とヘルマンを見て少し……」

「何だ嫉妬か」

「あんな技量の差を見せつけられたら嫉妬さえ烏澁がましいですよ」

あちらは無言で掌をかざすだけで見事な細工まで施し、一方のこちらには杖を用いて元の配管と便器を修復するのが関の山である。

漸く最後の便器を取り付けた後、ずぶ濡れとなった身体にケントが温風をかけてくれた。

昨年の自分を顧みれば、別に血に塗れていようと誰かが取り払ってくれるからと、そういった魔術を習得していなかった。それだけで、ケントは幾分まともではないか。そう伝えれば、ケントは「慰めはありがたいのですが……」と尻すぼみな返答だった。

マートルは「もうここは壊さない様にするわ」とご満悦だった。管

理人も手間が減って喜ぶだろうか。否、無能者を嘲笑ったと恨むだろう。

「さっきの話だがな」

廊下に出てお姉様達を待ちながら、火を着けた火炎瓶で指先を温めていると、お兄様がケントに声を掛けた。

「そんな簡単に追い抜かれては先輩面も出来ないだろう。生まれがたった5、6年違っているだけでも、聖杯の中で過ごした時間を比べればそれに何年も加えることになる。なのに、俺はイングリットに何度も魔術で負かされていたし、その何倍もヘルマンに負かされた。一応は1年生のお前にまで7年生の俺が追い付かれたら、俺は家に帰れん」

「聞こえていらつしやったんですか。恥ずかしい限りです」

「ただ、気持ちには分かる。当時の俺以上に思うものはあるだろう。俺には言い訳があったからな。負けたのは才能の差があるせいだ、だからそれを覆す努力があればいい……とな。」

こういう言い方は好きではないが、イングリットはアリアンナ女王の血だ。母上も天性のアリアンナ女王の血を如何ほど妬んだか分からない。ヘルマンもカインハーストの子、聖歌隊の末裔だしな」

「それでいて結局、今となっては在校生の中で貴方が最上の狩人なのだから自慢にしか聞こえませんかよ。それを言うなら、僕の方こそより優れた血質のはずなのに何故貴方に負けたのか。それはアデーラ女王の血は特別に調整された聖女の血だからだ、と自分に言い訳したこともありましたよ。」

我が祖ユリエを軽んじるつもりもありませんが、カインハーストの血といってもアンナリーゼ女王やアリアンナ女王に比肩する血であるのか分かりませんし。単に狂気に堕ちて瞳が蕩ける事は無かったという程度です」

お兄様にしてもヘルマンにしても、自分からすれば遥か高みにいるためにあまり意識しなかったが、当然彼らにも幼少期はあった。自分と同じ様な事をケントも思い、彼らもまた同じ様に思った。ならば、いつの日か後に続く者を導くことが出来る様になるだろうか。

深く考えず、ケントに向かって先輩風を吹かせていた夏の日が酷く恥ずかしい。

「マリアが何を考えているか大体分かるよ。ドロテアだって同じ事を去年やってたからね。トロールの件で校長に言い負かされて落ち込む君を見て、何も言えなかった事に悩んでいたよ。「あたし先輩としてどうなの?」って。夏に君を誘ったのも、君に何かを伝えたかったんだろう。単に先輩として威厳を保とうと思ったわけじゃないと良いんだけど」

自由研究の成果発表で、というわけではないだろう。そもそも自由研究を始めた原因がヴ卿云々という話だった。あれも含めて、ドロテアにとつては応援のつもりなのだろう。

「いや。ドロテアからは先輩として思い遣り溢れる言葉を貰ったよ。気恥ずかしくて気の利いた事は言えなかったが」

「そうかい。彼女の先輩として安心したよ。少なくとも僕のように共感でも納得でもなく理解だけを求める様な話し方はしていないらしい」「それが分かっているなら改めたらどうです?」

ケントが呆れながら言った。

「君も含めて僕を分かってくれる人達が多いからね。それで特に苦労はしていないし、苦労する事が有ればそれを避けるだけさ。」

……デイルク、ドロテアで思い出しましたが、あまりにも遅くありませんか」

「そのまま職員会議になったのかもな」

「あり得ない話ではないですが……それならば僕らのところに伝令が来るのでは? トイレの修理よりもよほど重要な事柄でしょう」

「じゃあ何だ? あの2人が揃って怪物にやられた、とでも?」

「それもまた、あり得ない話ではない、という事です」

あり得ない話ではない、そう言いつつもヘルマンの語気は荒い。

「マートル、頼みがある!」

「何? 今忙しいんだけど」

お兄様がトイレに向かって怒鳴ると、マートルは廊下の壁から顔を出した。揶揄しているつもりらしい。

「俺達はここを離れる。だが、継承者が来るかもしれないから見張っていてくれないか」

「なんだ、そんな事。あんたの妹を探して来いなんて言うのかと思っただ。いいわよ。というかさっさと行ってくれない？ 気が散って仕方ないんだけど」

「頼んだぞ」

言うや否や、お兄様とヘルマンが遺骨を取り出し、魔力を流す。瞬間、廊下の端まで跳んでいった。お兄様は既に聖剣に光を灯しており、燐光の帯が宙に流れた。

お兄様達に遅れて、同じく遺骨から速力を得て駆ける。旧市街の様に、手摺から手摺に飛び移りながら階下へ進む。アサシンやシノビに比べれば、狩人のそれは洗練されたものとは言えないが、階段を駆け下りるよりは断然に早い。

「お待ちなさい！」

急に制止が掛かり、咄嗟に壁石の縁を掴む。声の方を向けば若い貴人の肖像画があった。大声で呼び止めたとは思えない沈鬱な面持ちである。

「何か」

「……医務室に行きなさい。貴女の姉君もそこに。兄君には既に伝えました」

「お姉様達は!?!」

「亡くなつてはいない、とだけ伝え聞いております」

死んではない。

血と意志さえあれば狩人は闘える。

なら、どうして医務室に？

「姫様。とにかく急ぎましょう」

ケントに肩を叩かれ、漸く正気を取り戻した。

その通りだ。ここで蜘蛛の様に壁にへばりつき、お姉様達を想った所で何も変わりはない。

「ああ」

再び、脚に力を込める。漠とした不安が確かな不安になっただけの

事。死んではいらないと言うならば、どの様にして回復するかを考えれば良い。昨夏、獣と化したクイレルに一撃食らった事を思い出す。その痛みに感うだけであれば死と同じである。生きていればそれだけで勝ちの目がある。

「大丈夫みたいですネ」

「悪かった。先輩面も出来ないな」

「身内の事ともなれば当然でしょう。狩人だからと平然と受け止められる方がおかしいと思います。狩人だって人です。人であるからこそ、家族の痛みと死を恐れるわけですから」

†

息を切らせながら医務室に入り、まず感じたのは花の香りだった。スズラン。

ドロテアが僅かに香らせていた、おそらくはヘルマンから贈られたものだろう香水の匂いが、濃密に部屋中に漂っていた。

「お兄様？」

「……死んではいけない。ああ、そうだ。死んではいけない。安心しろ、と言うのもおかしい話だが」

「校医は？」

「校医は校長室だ。こんな症状、ヤーナム人以外で見る事はないだろうから校医の出来る事はない」

お兄様は呟く様に言った。ヘルマンはカーテンで囲まれた病床の傍に居るのか、脚だけが見える。

「ヘルマン、開けるぞ」

「……ああ」

果たして、そこに有った姿は。

幾つもの槍に貫かれた、ドロテアの姿だった。

「これは……ケント、見るな。ドロテアの為だ」

この姿に劣情を催す事はないだろうが、服は引き裂かれ、肌が覗いている。着替えさせようにも、槍が邪魔でそのままなのだろう。幾つか肌に突き刺さっている乳白色の硝子の破片は香水瓶のものだろう。ピカデリーに在る店で販売しているものだ。

「姫様。先輩の容体は？」

「瀉血だ。血の槍が全身から生えている。メルゴーの高楼、あそこに封じられていた邪眼。あれを拝む骸を、より酷くした様なものさ」

ドロテアの瞼は閉じられていない。涙腺から噴き出した槍によって、開けたまま縫い留められていた。ドロテアもヘルマンにだけはこの様な表情とも言えぬ何かを見られたくはなかっただろうが、ヘルマンはその痛ましい目と視線を結んでいた。

「それで、イングリット様は？」

「ドロテアの隣だが、見るなどというのはドロテアと同じだ。まあ、ドロテアよりは軽傷だった。とはいえ、同様に血塗れでおまけに毒も受けている。いや、むしろ毒の方が大きくあいつを傷付けた様だ」

「毒？ 白い丸薬はお持ちでなかったのでしょうか」

ケントの問いに、お兄様が応える。

「身体の内側から血の槍が伸び、閾値を超えれば大量出血。さらに毒を受けた。その状況下で、鎮静剤か丸薬か、あるいは一時しのぎに輸血するか。その最善の順位は俺にも分からん。

イングリットの取った順序は、状況から察するにまず鎮静剤、次に解毒、最後に輸血だった」

「けれど、毒の治療は血中の虫を賦活させることで無毒化させる仕組みになっている。血を失っている時に丸薬を飲んでも、効き目は僅かだったという事さ。丸薬は灰血病を治せても、獣の病は治せない。それは結局、虫こそが奇跡を齎し、惨劇を呼ぶ悍ましい淀みだからさ。

けれど、では輸血してから解毒していれば今頃僕らに話が出来ていたかというと……毒が回るのが早いか、血が回復させるのが早いか。死んでいないのだからイングリットは賭けに勝った。少なくとも、ドロテアに輸血して、死を食い止めることまではしてくれている」

ヘルマンは身じろぎもせず、ドロテアを見つめたまま囁く様に言葉を紡いだ。

「容体は分かりました。それで、何故輸血しないんですか？」

「自分の血を失い過ぎている。他の生徒の様に、マンドレイクを与えたところで意味はない。ここで輸血すれば、自分を見失い、狩人から

血の常習者に成り下がる」

「だからこうして脈動血晶を持たせて、肉体の治癒力を高めるしかないのさ」

輸血液に因る回復は、生きる感覚を狩人に齎し、その生への渴望が血中の虫を刺激し、治癒の効果をもたらす。石となり、意思のないままでは何ら意味がない。むしろ栄養を得た虫は暴走し、宿主の肉と理性を食い破るだろう。

「死んではいけない。そこに希望を持って、俺達は待っているだけではない。イングリットはドロテアの救命の後、言葉を遺している。自らの肌を焼いてな。猛々しく、誇るべき妹だ。

バジリスク。

湖。

蜘蛛。

何だと思う」

バジリスク。怪物の正体、その可能性の1つとしては拳がっていたが、現実的にはあり得ないだろうとしていた魔法生物。その名をお姉様は遺し、毒も受けているのだから、やはりバジリスクなのだ。

湖。バジリスクの特徴はその魔眼である。マートルの言葉にもあった「黄色い目」とは、その魔眼だろう。故に、その指すところは。「湖の盾。それであれば、視線を遮りながら攻撃出来るでしょう。所詮は蛇です。タネさえ分かれば竜より狩るのは容易いことでしょう。そのタネをお姉様は遺したのではないでしょうか。

ハロウインの夜、あの廊下は水で溢れていた。おそらく、猫はその水面に写る目を通じて呪詛を受け、石化はしても死には至らなかつた。クリービーがどうかは分かりませんが、マクミランとフレッチリーはゴーストの身体を透かして見た。ゴーストは死者であるから、これ以上死なない。

翻って私達狩人であれば、狩装束と湖の盾によって耐えつつ、鎮静剤を適宜摂取すれば戦えるはずです。事実、お姉様もドロテアも直視してなお生きていらっしやるのですから」

「だろうな。昨夏の騒動以来、皆が制服の狩装束を詭えていたのは僥

倅だった。後はその香水か。過去のヤーナムに於いて、鴉羽の狩装束、その嘴の仮面には薬草が詰められていた。香りは血の匂いを覆い隠し、ヒトを人に留める。ドロテアの香水はその効果をもたらしたのだろう。

だが、蜘蛛が分からない。確かに蜘蛛はバジリスクを避けるとされている。だが、イングリットは何故それを強調する必要があったのか。バジリスクという情報さえあればそれ以上に蜘蛛と記す意味がない」

「つまり、蜘蛛は別の側面から考えるべきと」

狩人達はそれぞれに想いを巡らせる。ヘルマンは独り言ち、ケントはザ・ゼンだったか、妙な形に脚を組み、冷たい床に尻を下ろしていた。

蜘蛛。その形から一般に嫌われる虫であるが、狩人にとっては意味が異なる。

上位者の研究に連なる人頭蜘蛛はその悍ましさから特に嫌われている。上位者の叡智を得る為に、上位者の首を切り落とし、自らの首と挿げ替える事で上位者の血を馴染ませようとした試みの1つ。結果、それはメンシスの連中にとつては成功したと言えるのだろう。あの蜘蛛男は悪夢と現実とを渡り歩く力を得たのだから。

他に蜘蛛と言えば、メルゴーの高楼である。巨大な蜘蛛が巣を張り、その鋏は容易く狩人の身体を両断し、魔術まで用いる。銀獣に追われ、邪眼に苛まれ、無頭の巨人に岩を投げられ、漸く辿り着いた場所には夥しい数の蜘蛛が犇めいていた。初めて訪れた時のあの絶望感ほどの狩人も味わうものだ。それに、高楼には眼球から足が生えたと表すべき、奇怪な何かがある。邪眼の封じられた塔、人頭蜘蛛の蔓延る一角には特にそれが多く在り、やはりあれも蜘蛛に関わる何かなのだろう。

そして何より、鐘を鳴らす女が呼ぶ赤蜘蛛である。聖杯中を駆け回り、術者が延々と召喚し続ける夢幻の蜘蛛。銃で怯みはすれど、その数、その速度は術者に近寄る事を赦さない。狂気者を呼ぶ魔女と並び、真つ先に始末すべき対象として認知されている。狂女、アイコレ

クター、魔女といい、旧きヤーナムには物騒な女が多い。

「そういえば、森に大きな蜘蛛が居たらしいですが」

ケントが呟く。

「アクロマンチュラだな。アウレリアお姉様の話だろうか？」

「直接お話を伺ったわけではありませんが」

「毒はあるが石化の力はないな。秘密の部屋と関わる逸話も思い当たらないし、故にビルゲンワースからも報告は無かったのだろう。」

確かにあれは防衛の為に作られた魔法生物で、本来の生息地は熱帯気候だ。何者かがわざわざこの森に持ち込んだ理由はそれなりにあるのだろうが、バジリスクと相容れないものを継承者が使役するとも思えん」

お兄様の仰る通り、それは秘密の部屋とは関わりが無いだろう。

最上の防衛とは、秘匿である。敵対者よりも強い防御力を備えるよりも、敵対者に攻撃対象であると分からせない事の方がより重要である。卑近なところで言えば、封印のレバーの前に醜悪な裸の大男を置くよりも、入口を壁に偽装した方がよほど強大な守護となる。

秘密の部屋の入口は確かに堅固な防衛が施されていたが、少なくとも50年間は余人の目を欺いてきたのだ。対してアクロマンチュラという分かりやすい脅威を防衛に置く事は、設計思想が異なる様に思える。

「森……禁域……湖。湖……蜘蛛。」

ああ……ロマだ」

「どういう事だヘルマン？」

「湖と蜘蛛は組み合わせだ。そして、それだけで非常に多くの意味を包含する。その情報量の多さから、単語しか残せなかったんだ。」

秘密の部屋のバジリスクは実体を持ちながら夢幻の存在で、かといって赤蜘蛛の様に走り回るわけでもない。ロマの様に任意の場所に転移する能力が有るんだ。そして、おそらくそれは継承者が居る限り、赤蜘蛛の様に際限なく分身が現れる。

いつぞやのナメクジ吐きと同じ、魔力による疑似生命だ。そうでなければ、只の危険な魔法生物如きに狩人がやられるはずもない。

ロマが表すものはそれだけじゃない。それだけなら、赤蜘蛛とでも書けばいい。本質は儀式の秘匿だ。あの湖にも、ヤハグルにも、メンシスの悪夢の祭壇なんてものは無い。旧市街の様に入口を塞いだところで、悪夢は現実を侵食していた。これも同じ事だ。部屋の入口を閉じて、儀式は終わらない。怪物を殺しても、儀式が続く限り秘密の部屋は終わらない」

「……お姉様とドロテアは一体のバジリスクを倒した後に、次のバジリスクにやられた？」

「おそらくドロテアは一体目で既に血の槍で串刺しだ。イングリットの血の濃さであれば、ある程度は魔眼にも耐えられるだろう。だから、イングリットがバジリスクを殺した後に、ドロテアの救助を行っていたところで噛まれ、毒を浴びたんだろう」

血。

純血、非魔法族、無能者、継承者、今年の事件はどれも血に関わりがある。ビルゲンワースもカインハーストも、血の求道者であると言っている。

ヤーナムに夜明けをもたらしたのはお父様だが、血と知の探究はそれより遙か旧く、学祖ウイレームは至るべきところまで行きついてきたという。古いビルゲンワースにも、ホグワーツで学んだ者は居るだろう。その中に、秘密の部屋の本質に迫った者が在ったのではないだろうか。

ビルゲンワースは、場所も時間も現実から隔絶された神の墓から力を得る術、聖杯を見出した。さらに墓暴き達はそこに呪物を組み込む事により、聖杯に望んだ悪夢を演じさせる技法を確立させた。

その技法、その思想は後のメンシス学派に繋がる。望みを叶える上位者の棲まう悪夢の招来と、赤い月によるそれへの接続である。

上位者に見え、その血肉を我が物とする事で上位者の智慧と力を得ようとするメンシスの儀式は、ヤハグル、あるいはヤーナムである事に特段の意味はない。上位者を孕む胎、あるいは上位者を孕ませる胤、それと神なるものへの救済を求める祈りさえあればよい。医療教会が行ってきた数々の凶行、眼球を抉り出す事にも、生きたまま頭を

開く事にも、肥大した頭部を斬り落とす事にも、究極的に言えば意味は無かった。

メンシスがゴースに祈りを捧げた理由は不明のままだが、メンシスの儀式の本質は何の事はない、ただの聖餐と拝領である。パンを裂き、葡萄酒を呑む。それはつまり、神を食する行為である。それを神から分け与えられるわけでもなく、神殺しによつて為そうとしたその行いは、正しく冒瀆であり、呪いを受ける。

「ああ、お姉様。ロマとは、そういう事だったのですね。お姉様の導きを感じます」

「秘密の部屋は開かれた。それは、僕らにとつての蒼褪めた血の空の事だったんだ。母さんの言ったことは正しかった。秘密の部屋とは、本当に怪物を召喚するための儀式魔術だった」

「しかし、手が無い。継承者は秘密の部屋の最奥で笛を吹いているわけでもないだろう」

「極普通に、騒動を恐れる学徒の一人として校内にいるのでしよう。こうして襲われたという事は、クリスマスでも帰らなかったということになります」

「今日まで成果を挙げられなかったとはいえ、俺達の捜査は確かに他寮に対して抑止力となっていた。疑心暗鬼に駆られた連中を何人も狩ったからな。だが、それをすり抜けて穴熊寮生を2人。そして今度は狩人を2人だ。候補者はクリスマス休暇で残っている者として露見する事を恐れるはずが、それでも手を出した。継承者は明らかに、狩りに慣れ始めている。」

「とはいえ、ヘルマン。よく読み解いてくれた」

お兄様がヘルマンを労う。お姉様とドロテアは倒れた事で、継承者は増長するだろう。だが、お姉様の残した情報によつて、それは反撃の機会となる。狩りとは、命を刈り取るまでが狩りである。慢心し、胡乱な攻撃は隙を生み、内臓を引き摺り出されるに至るのだ。

だが、ヘルマンは首を横に振った。

「イングリットのおかげですよ。僕は何もしていない。イングリットが残した単語で状況を把握できたという事は、元々僕の中にはそれを

読み解くだけの欠片が揃っていた。けれど、今に至るまで僕は何も出来なかった。

あのハロウインの夜、随分な馬鹿がいるものだと思いますが、その馬鹿に良い様に転がされ、身内に手をかけられた僕は一体何なのか。

正直、こんな痛ましい姿を見て、狩人を辞めて欲しいと思ったくらいですよ。偶々生きていた、偶々貴方の妹が救ってくれただけ。僕は何も守れていない。僕の知らないところで死んでしまったらと思うと、僕は僕でいられなくなる。

君が居なくなったら、僕はどうやって歩けばいい。どうやって笑えばいい。どうやって息をすればいい……生きている事は分かっている。死んでいない事も分かっている。けど、こんなにも心が軋む。御伽噺の様に、キスなんかじゃ目覚めない。僕は待つていることしか出来ない」

「ヘルマン。ドロテアは生きています。まずはそれを喜び、そして継承者に怒りを燃やせ。俺も愛しい妹と後輩をやられて、自分の無様さにはうんざりしている。だが、仲間の傷に怯み、己の無力を責めたところで、獣は倒れない。意志を見失うなどは、お前がマリアに掛けた言葉だ。

狩るぞ。それまでキスはとっておけ」

ヘルマンは息を深く吐き出すと、背筋を伸ばし、立ち上がった。唸りに輝く仕込み杖を握る手は、雪の様に白くなっていた。

グズグズと幾日も不貞腐れていた今年の自分と比べ、やはりヘルマンは先達として仰ぎ見るべき人物なのだろう。

「まずは寮監に伝えましょう。怪物の正体と部屋の入口が分かかった。それと、あまり意味はない様に思えますが、入口の開き方は思いつきました」

「ほう？」

「マダラスの蛇を召喚して、蛇語を話す様に命令してみましよう」

マダラスの笛

「熱い雰囲気のところ申し訳ないんですけど、聖歌の鐘を使えばいいのでは。あれって血に依らない治癒の力ですよ。聖歌の鐘ガンガン鳴らしながら輸血液注射すれば、ドロテア先輩に残るまともな虫は輸血液を正しく呑むでしょうし、イングリット様も追加の丸薬飲むまでの猶予が出来るでしょう」

黙りこくっていたケントの言葉に、医務室は静寂に包まれた。

「……ケント、おまえはかしこいなあ」

お兄様が抑揚なくケントを褒めた。幕を隔てて見えないが、その声がかくぐもって聞こえるのは顔を覆っているせいだろう。ヘルマンも同じだった。

「僕はもうマリアに何も言えない。我を忘れていたよ」

「言うなヘルマン。去年の私は貴公に八つ当たりまでしていたんだ。そこで自分を卑下されると私の立場が無い。するべきはケントの賞賛だろう」

「所詮、俺達も年端のいかぬガキという事だ。二度と同じ経験はしたくないな。ヘルマン、ケントにキスしていいぞ」

「僕に男色の趣味はありませんが、ヘルマンがしたいと言うなら仕方ありませんね」

「うるさい。墓生やすぞ」

ヘルマンは耳を赤くしながら、聖歌の鐘を取り出した。それは一般の狩人が持つものとは異なり、幾分か大きく、より細やかな装飾が施されている。

「何だそれは」

「メンシスの悪夢、そこに聖歌隊の狩道具がわざわざ箱に収められているのはおかしいだろう？ あれはエドガールが間諜としてひっそりと持ち込んだ品で、僕の持つこれこそが聖歌隊に伝わる本当の聖歌の鐘さ。デイルク、イングリットに解毒の準備を。マリアはドロテアに輸血の準備を」

「分かった」

ヘルマンが鐘を振ると、澄んだ音が部屋に響き渡り、温かな光の粒が溢れた。通常のものよりも光の照らす範囲は広く、触れた指先も温かい。術者の技量もあるのだろうが、効果が大きい分消耗も激しいといったことは無い様で、ヘルマンは幾度も鳴らし続けている。

普段よりも白くなっているドロテアの腿に注射器を打ち込むと、その部分からゆっくりと元の色に変わっていく。血の槍もそこから崩れていった。

「お兄様」

隣からはお姉様の声がした。ひとまず安堵しつつ、慎重に押子を動かす。お兄様の仰った通り、ドロテアの血になじまないままに大量の輸血をするわけにはいかない。

「イングリット、生きていてくれてありがとう。まずは丸薬を飲め」
「そう手を握られたままでは出来ませんわ。それとも飲ませて頂けるのかしら」

「起きて直ぐにこれとは、らしいと言えばらしいか」

2本目を使い切る頃に、ドロテアの胸は上下し始めた。ようやくヘルマンは鐘を鳴らすのをやめ、欠乏した魔力を補うために自身に輸血した。言わずともヘルマンの荒い呼吸から察したのか、ケントが自身の鐘を鳴らし始めた辺り、良く出来た後輩である。

†

3本目を打ち終え、ドロテアの傍にヘルマンを残し、お姉様を連れて職員室へ向かう。3本より多くの輸血をしても効果はない。後はドロテアが意識を取り戻すのを待つのみである。

廊下に行くお姉様は復讐の炎を燃やすかと思えば、雪を払う春風のように優しく微笑んでいる。

「私の残した言葉について、ヘルマンの推理がほぼ正解ですわ。逆に、お兄様の推理は間違っていました。私がドロテアを救ったのではなく、ドロテアがいなければ共々命を落としていたことでしょう。ドロテアが私の代わりに魔眼の呪詛を受け、その隙に私が蛇を焼いたのですわ。その後、ドロテアに鎮静剤と輸血液を与えていたところに、次の蛇が現れたのです」

「……もしや」

「ええ。石になったからと言って、意志を失ったわけでもありません。ドロテアもきつとそうでしょう。3本も輸血液を使って起き上がらないはずありません。気恥ずかしくて起き上がらないのか、ヘルマンと2人きりになりたいのか、どちらでしょうね。それとも、今頃ヘルマンにキスをせがんでいるのかしら」

くすくすと笑うお姉様から、お兄様が顔を逸らした。

「ヘルマンのドロテアに向ける感情が恋慕か親愛かは分からないだろう。ドロテアの身を案じての事だ。男が弱音を吐いた事を揶揄つてやるな」

「ふふ。お兄様だって「ケントにキスしていいぞ」なんて揶揄つていたでしょうに。ドロテアからヘルマンに向ける想いは分かっているしやるでしょう？ 想い人からあんなにも熱のある言葉を向けられるなんて羨ましい限りですわ」

「熱と言うより湿度でしたけどね。姫様はどう思います？」

「分からん。頑なにドロテアとは何でもないと言い張るからな。もしかしたら、自分にそう言い聞かせているのかもしれないな。ほら、あの男は……失敗したくない男だからな」

「僕が聞いているのはそういう事じゃないんですが……まあ、ドロテア先輩の気持ちに確信が持てないんでしょね。もし、先輩が自分にただ甘えてきてるだけなら、関係が壊れてしまっつて怖いんでしょ。親公認の仲でしょうに」

私室に勝手に入る事を母親が許可するという関係性である。単なる幼馴染と言うには些か行き過ぎてている。そこから考えるに、ソフィアおばさまはドロテアの後押しをしているのだろう。

「だからこそだろう。普段のあいつは偏執的で神経質だが、裏を返せば不安感の表れだ。だから思考や言動も否定から入る。期待を裏切られたくない、だから期待しない様にする。まあ、その性格に幾度も助けられているからな。友人としてはそれを咎めはしないさ。揶揄いはするがな」

お兄様とヘルマンは同性で年が近いこともあり、そういった話をす

る事はあるはずだ。ヘルマンとドロテアの関係に迂遠な言い回しをするのは理由があつての事だろう。それがこうしたきつかけで？ 出しにされていくのはヘルマンとドロテアにとって良いことなのだろうか。

「そのくせ服はああしろ髪型はどうしろ香水はこれ、だなんて」

「どういう事だ？」

「自分の好みになれって言ってる様なものでしょう。えっ、まさか姫様……」

言われてみればその通りだが、分かるかそんなもの。あれはいつも通りの悪態としか思えなかった。

「そういうところが可愛いのだけれど。ヘルマンもマリアも……お兄様も」

「やめろイングリット。そろそろ仕事の時間だ」

「ええ、その様に」

職員室の扉は開け放たれていた。普段はせわしなく人が行き交い、紙が飛び交う場所だが、クリスマス休暇である事を前提としても、閑散とし過ぎている。人がいない。

「そのの」

「はい、ゴルギアスに何か」

お兄様が窓を磨いていた屋敷妖精に声をかける。雑巾を後ろ手に隠しながら恭しく頭を垂れたので、こちらも腰を折って挨拶を返す。

「これは一体どういうことだ？ 何故職員が誰も居ない？」

「はい、ファッジ大臣とマルフォイ理事がお越しになりました……その……少々面倒が」

「秘密の部屋に関わる事か」

「ええ、その容疑者を引き渡せとのことだ」

「容疑者？ 魔法省では目星がついているのか」

校長が把握している事ではない。そうであれば寮監が狩人に伝えられているはずだ。となると、魔法省は独自に動いていたのだろう。故に、面倒が起きたというところか。

「いえ、それが……50年前の容疑者でございます。あの半巨人です」

「森番か？」

「ええ、ええ。ですがゴルギアス共は半分信じて半分疑っております。あの粗忽者は幾度もこの城や皆様に危険な事をしております。ですが、それは悪意を持ってしようとした事ではない事も分かっております。もしあの半巨人が此度も秘密の部屋の騒動を起こしたと聞けば納得します。そうではなかったと聞いても納得します」

「煮え切らん。それで、俺達も職員に伝えなければならぬ事がある。どこに行つた？」

「半巨人のねぐらでございます」

「そうか。ゴルギアス、感謝する」

「滅相もございません」

妖精に礼を述べると、妖精はさらに頭を下げた。料理番とは面識があるが、こうした清掃員とは言葉を交わす機会も無い。知らないだけで様々なところで様々な妖精の世話になっているのだろう。

小走りで森番の小屋に向かうと、人だかりが出来ていた。学徒達が小屋を遠巻きに眺めている。その視線の先には、校長と森番、大臣、マルフォイ理事と思しき身なりの良い男性と、何故かポッターとウィーズリー、そしてドラコ・マルフォイが居た。

「寮監」

寮監は群衆を監視していた。森番が犯人だったんだと喚く者もいれば、その者の胸倉を掴む者も居た。この程度クイディッチの観戦中であれば日常茶飯事ではあるが、震えた手で杖を握り、小屋に火を放ちかねない程に狂乱している者も居る。

副校長が「寮に帰りなさい」と群衆に必死で呼び掛けている一方で、寮監は「何故吾輩がこんなことを」と、あるいは「全員失神させてしまえばよからう」と言わんばかりの表情であった。声を掛けるとその双眸が一瞬、大きく開かれた。

「……何故ミス・ボーンが」

「狩人の特異体質ですわ。ドロテアもじきに。ご心配おかけいたしました」

「無事で何より」

「無事でもないのですが、収穫はありましたわ。それで、森番なのですか?」

「吾輩も知らん。諸君が知る以上の事を何も聞かされておらん。50年前となると、詳細にそれを知るのは校長と当人だけであろう。当時は副校長でさえ教鞭を執られていない。それで、何用か」

「秘密の部屋の入口と、その怪物が分かりました」

「……少し待ちたまえ。その間ここを任せる」

寮監が小屋に近付くなり群衆が近寄ってきたが、お兄様が張っていた障壁に鼻を強かに打ち付けた。口汚く罵倒する者も居たが、お姉様が微笑みかけると蒼褪めていた。

「この中に居るのかしら」

「居るとすれば震えているだろうな。森番が都合よく容疑者に仕立て上げられたと思っていたら、殺したはずの邪魔者が普段と変わりなく笑っているのだから」

「あら、これでも私は相当怒っているつもりですわ」

お姉様の足元の雪は静かに融け、そこから覗く土肌も乾き始めている。妖艶な笑みは獲物を絡め捕る蜘蛛の糸の様である。

一方で、大臣と理事に詰め寄せられた森番はその巨軀が小さく見える程に覇気が無く、大蛇に絞められた鹿の様であった。

群衆は死んだはずにも関わらず微笑んでいるお姉様に怯え、その隙を副校長達が城内に追い込んだため、狩人はお役御免となり、小屋に近付くこととなった。マルフォイはその場に残ろうとしたが、父親に命じられると蛇寮生の一群に加わり、城へ戻って行った。

「ハグリッドは違う! そんな事するもんか!」

「森番が潔白であるかどうかはこれから調べる。喚くなら自室にしまえ。我々は子供の安全を預かり、英国魔法界を守る者としてここに来ている。それとも、君たちはこの騒動について責任を取れるのかね?」

ああ、英雄のミスター・ポッターが反対した。その通りだ、ハグリッド氏は容疑者ではない。大臣、今日に至るまで何らまともな報告も無かった校長から事件解決の便りを待ちましょう。

そんな事がまかり通ると思っっているのかね。我々の仕事は子供の癩癩を受け止める事ではないのだよ」

理事は羽虫を払う様にポッターをいなした。大臣が直々に来校し、応接室で待つでもなくわざわざ森番の小屋に出向いているのだから、相応の理由がある。ただ森番の潔白を訴えたところで何の意味もないだろう。

「責任と云うがの。学校の責任ならばまず校長に在るのではないかと思うのじゃが。それに、さつきから繰り返し伝えた通り、ハグリッドを連れて行ったところで事件は解決せんよ」

「その通り。校長は責任者として頑なに魔法省の介入を拒み、いたずらに犠牲者を増やした。質問に返される要領を得ない報告に、私をはじめ、理事たちの我慢も限界でしてな。」

では校長がその職位に在りながら、事件解決に向けて魔法省と協調しない理由を魔法省の友人達から聞いてみれば、なんと……50年前の事件の容疑者が、職員として任用されている。しかも、愚息が悪夢でも見たのだろうかと言き流していたのですが、森番は昨年も重大な違法行為に関わった疑惑がある。そこで森番の潔白を訴える小さな友人達もまた同様に。

どうやら、早急にお話を伺うべきだろうと来校すれば、クリスマス休暇だと言うのに校内が騒がしい。どういふことかと愚息に訊いてみれば、在校生きつての優秀な……それも我が後輩にあたる者が2名も犠牲になったという。

この責任、どう果たそうとお考えか」

マルフォイ氏の言葉が真実ならば、校長の不作為は余りにも馬鹿げている。馬鹿々々しいと一蹴したはずの疑いが、50年前の容疑者という事実によってさらに鎌首をもたげた。

寮監をはじめとする教職員たちにも何ら説明せず、ただ時の流れるままにしていた理由は森番を守らんとするがため。真に校長が森番の潔白を確信していたとして、竜の不法所持は事実であり、素行から余罪は有るだろう。それらを隠蔽するために擁護しているとすれば道理も通る。

「わしの目が正しければ、今日犠牲となったものは元気に過ごしてやる。何かの誤解じゃろう。

責任。それはもちろん、事件の解決じゃよ。それにあたり、ハグリッドを連れて行くことは大きな損失となる。生徒達を森に入らせず、森の獣たちを城に入れさせぬのはハグリッドの仕事じゃ。先生方はわしを信じ、事件解決に向けて努力しておる。そこに、森番の仕事も任せなければならぬのは、責任者として受け容れ難いことじゃて」

「職員が職能を発揮する最善の環境を整える事が責任者の仕事……ご高説ごもつとも。ならば大臣、魔法生物規制管理部の支援を要請します。マグルで混雑するロンドンより、懐かしい母校の空気を吸いたい職員も多くいるでしょう」

「要請とな。それこそ、わしの仕事であろう」

マルフォイ氏は唇を歪め、懐から羊皮紙を取り出し、宙に貼りつけた。

「私の、仕事だ。

理事会を代表し、アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア氏の停職を命じる。同時に、事態の収束に向け、魔法省への協力を要請する」

「何の冗談だ！」

森番が吠え、小屋の窓硝子が揺れた。静かに降り注ぐ雪は音を呑むはずだが、音圧で耳を張られた様に感じた。

「冗談？ 幾人もの生徒が襲われているにも関わらず、何ら指揮能力を発揮せず、他方では学校の独立を盾に魔法省の介入を拒否。生徒達に対する防衛策は一切講じられず、生徒間では効果の検証されていない自衛用品が法外な価格で売買されている。凶器を携帯する自警団が校内を巡回し、自警団同士で抗争が起きている。

その様な現状に抗議しても、副校長の名によって解決に精励しているとだけ返される保護者達の状況の方が冗談としか思えん」

狩人が凶暴な自警団扱いは納得しがたいが、マルフォイ氏の現状認識は概ねその通りである。寮監によると保護者へ送られる手紙の検

聞はしていないとの事だったが、真実だったのだろうか。

「先程の生徒達の目を真つ直ぐ見られるかね。いつまでこの事態が続くのか分からない恐怖、自分達を不安に貶める者への憎悪。あの時代の民衆のそれに似ていないかね。隣人が服従しているのではないかと疑い、呪詛を投げ始める。あるいは、そうされるのではないかと恐れ、先に仕掛ける。継承者と彼の帝王を入れ替えても、成り立つ話ではないか。

私はあの時代を生きた者として、息子たちの世代にあの目をして欲しくはないのだ。そしてその解決を阻んでいるのは、ダンブルドア、貴方としか言い様がありませんな」

血の騒めきは日毎に増している。赤い月のそれとは比べ物にならない程の微かな揺らぎではあれ、それは狂気の萌芽である。故にこそ、マートルの様子も日頃とは変わって上機嫌だったのかもしれない。

校長が継承者であると考えた事は無いが、校長が解決の障害となっている事は間違いない。マルフォイ氏の出来過ぎた言動や態度に政治的な思惑を感じなくも無かったが、それを鑑みても校長の排除は狩人にとって有利に働くだらう。

「その混乱を生み出したのはお前だろうが元死喰い人め！ それに分かつちよるのか!? ダンブルドアが居なけりや今度は死人が出るぞ！」

「……どうやら錯乱している様ですな。彼は自分の立場を分かっている。50年前には実際に死者が出た。その事件の容疑者だということに」

「いやいやいや、ルシウス、待った。今ここでダンブルドアが居なくなるのはマズイ。非っ常にマズイ。あくまで森番は容疑者だ。事態の解決にあたって彼が居ないのは困る」

「大臣、その解決の為に、理事会は停職を命じたのです。魔法省の介入も可能になる。大臣にとっても悪い話ではありませんまい。職位にしがみつくなつての英雄を座して見守り、死者を出すのか。それとも、大臣が手ずから辣腕を振るい、事態を收拾するのか。無論、理事会としては魔法省に協力を要請すると同時に、全力で協力することを約束

しましう」

大臣は口髭を舐めながら唸っている。

50年前の容疑者とされていながら森番は処刑されておらず、今年
の事件も有効な解決策はとられていない。つまり、50年前の事件は
自然に終息しただけであり、未解決事件である。となれば、大臣は今
年の事件も同様に時間経過によって収束する可能性があると考えて
いるのだろう。その場合、責任の所在を校長に置いたままの方が、大
臣にとっての危機管理上都合のよい結果となる。解決しなかつたと
しても校長の失態であり、解決したところで校長の手柄であり、大臣
の減点は無い。大臣にとっての決断の刻は今ではないのだろう。

損得勘定の理解は出来るが虫唾が走る。

「よろしいでしょうか」

お姉様が微笑みを湛えながら、にらみ合う大人たちに呼びかけた。
大臣はだらしなく顔を緩めたが、マルフォイ氏の表情の変化はお姉様
の美貌によるものではなく、大臣の説得を邪魔された事への苛立ちに
よるものだろう。

「森番が犯人であるかどうか、それは私達には分かりませんし、校長が
停職となる事も理事会の皆様がお決めになられた事であれば、理解は
出来ますわ。ですが、納得となると多くの学徒にとって少々難しいの
ではと。先程森番が仰った様に、校長を信じる者は校内に多くおりま
すもの。けれど、マルフォイ様の仰った通り、校長として為さってい
る事に安心している生徒は少なくとも私の周りにはおりません。

ですから、小娘の浅知恵ですが……停職はするとしても、魔法戦士
として任じてはいかがでしょうか。それならば、大臣がお望みになつ
た解決のための必要性は残したまま、マルフォイ様の……失礼、理事
会の下で運営出来るでしょうか？

校長は高名な戦士ですもの。校長という肩書が無い方がより自由
に動けるではありませんか？ それで解決出来ないのなら、英国
の誰にとっても難しい事件だった……そう、世の大人たちは考えるの
ではないかと」

「おお、成程成程！ それはいい！ いいところ取りという訳だ！ ル

シウス、その方向で我々としても進めていきたいと本省で検討したい。理事会としてもどうだね」

「私としては反対ですな。中途半端に影響力を残しておけば、現場はやりにくくなるでしょう。ここに派遣される魔法省職員達は誰の指示を仰ぐのです？ 本省にいる貴方か、理事会の定めた校長代理か、それともかの古く名高い魔術師でしょうか」

お姉様の発言によって、自分の浅はかさを恥じる。

校長の行いが狩人にとって無益であっても、校長の存在自体は支柱となつている。森番がそうである様に、現状では何ら成果の無い校長を盲信する連中にとつて、校長の不在は恐慌の呼び水となる。そもそも、多くの学徒にとつて、校長を校長として認識するのは行事のみである。校長としての立場より、戦士という立場はむしろ魅力的に感じる者も居るだろう。

一方、ダンブルドアという個人を排除したいのだからマルフォイ氏はこれを受け容れられない。反論理由も筋が通っており、学内にダンブルドアに継る者がいるのならば大臣の求心力が減じられるというのは当然の事だ。

「理事」

「他人行儀はよしたまえ、セブルス。共に学んだ仲だろう」

「……ルシウス先輩。ぜひ、この娘の言葉を検討してもらいたい。この子等は吾輩の助手であり、その獅子寮生と違いどれも皆優秀な蛇寮生だ。紳士の社交に口を挟み、笑顔で媚びを売る背伸びした馬鹿な小娘ではない。吾輩もドラコの為に尽力しているつもりだが、これらもまた同様に、ホグワーツの行く末を案じている。呑んでくれとも、この場で判断してくれとも申し上げるつもりはないが、後輩の頼みを聞いてはくれまいか。無論、やはり先輩の仰る通りに支障が出る様であれば、当初のお考え通りにすればよろしい」

寮監の助け船が出た。精神の揺らぎ、その結果の獣の病。会話の成り行きであったとはいえ、寮監に行った説明は奇貨となった。

マルフォイ氏は片眉を動かし、杖を撫ぜた後に頷いた。

「後輩の頼みとあれば。約束は出来かねるが」

「恐悦至極」

「とはいえだ、こちらも手ぶらという訳にはいくまい。森番は連れて行く。50年前の容疑者という事は生徒達にも知れ渡った。ここに置いておけば余計な不安が広がるだろう。」

それでよろしいですな、大臣」

「もちろんだ。そのお嬢さんの件、理事会の方でもよろしく検討してくれたまえよ」

大臣としては既定路線となった様で、さっさと職場か家に戻り、熱い紅茶を飲みたいといったところだろう。

「ふざけるな！ 良いわけあるか！ ハグリッドが悪いことをしたなんて証拠はあるのかよ！」

「……ウィーズリー君。父君は君に何も教えていない様だが、逮捕というのは犯罪者ではなく、犯罪の疑いがある者を連れて行くことだ。それに、証拠とは言うがね、50年前の容疑者だった。それだけで魔法界にとっては重大な証拠となり得るのだよ」

マルフォイ氏は面倒そうにウィーズリーを一瞥した。その視線を赤毛は真つ向から受け止めたが、マルフォイ氏の言葉が続くにつれ、その顔は歪んでいった。

「ふむ、ルシウスの言う通りじゃの。して、その逮捕権がおぬしや大臣に有るといふ根拠を、とんと思い出せんのだが、教えてくれまいか」
「逮捕、という言葉が悪かった様ですな。少しばかり学校を離れてもらい、魔法省の職員達と話をしてもらいたいというだけのこと。」

ですが、先程申しした通り、この者がここに居続ける事は一理事としても一保護者としても非常に心配でならない。明らかに疑わしい人物でありながら、それを信じてとだけ言い張り、無根拠に擁護する校長も」

「それじゃ脅迫だ！」

「脅迫というのは、相手に不利益を与える事を告げることだ。私はただ単に懸念を伝えただけ。法の話をしたいたのであれば、まずは父親に話を聞くと良い。マグル保護法の違反者に」

校長はマルフォイ氏に顔を向けていたが、氏は鼻で笑った。閉心術

の心得があるのだろう。

「まあまあまあ、何も問答無用でアズカバンに入ってもらってわけじゃない。アーサーだって罰金刑で済んでいるんだ。そもそもそんな大きいベッドがある房があったかな。紅茶にほんの少し、いや君の場合はたつぷりか、ブランデーを注いで、怪物について話を聞く、それだけだ」

大臣は場を和ませるための小粋な冗談を飛ばしたつもりらしい。これでもよくも大臣にまで成れたものだと思うが、何か特筆すべきものがあるのだろうか。

「いいんだ、ロン、ハリー、ありがとうな。ここに居ちや校長先生に迷惑が掛かる。あー……お前らが蜘蛛を追っかけるみたいに、解決の糸口を掴んでくれれば、俺は直ぐに帰ってこれるさ。」

そんじゃあ、校長先生。ちよつくら行つてきます」

森番は項垂れ、「ちよいと待った、最後に」と愛犬に山盛りのドッグフードを与えてから大臣と理事に連れられていった。

「さて、わしらも戻ろうかの。しかし、ボーンさん。老いぼれに戦えとは、随分と酷いことを言うものじゃの」

「生涯現役、そう仰せでしたので。それより、あれでよろしいでしょうか？ 校長も学校を離れたくはないでしょう？ 校長として、それともミスター・ダンブルドアとしてかは分かりませんが。」

私達も私達の利益の為に、校長には残ってもらいますわ」

「……良いじゃろう。わしを求める者がいるならば、わしはここに残る。それがわしの役目じゃよ。ポッター君達はわしが送ろう。君たちはスネイプ先生と秘密のお話があるのじゃろう」

お姉様は、校長と目を合わせていた。

ポッター達は狩人達が校長を守ったのか、森番を売り渡したのか判断が付かない様で、困惑した顔でこちらを睨んでいた。口の形だけで「失せろ」と伝えると「クソが」と返って来た。

連中の姿が見えなくなってから、お姉様は寮監に頭を垂れた。

「ありがとうございます。寮監のお言葉が無ければ、紳士の社交に口を挟む馬鹿な娼婦になるところでした」

「……嫌味か」

「いえ、本心から感謝しておりますわ」

「俺からも感謝を。少しばかり猶予が出来ました。イングリットの意図によく気付いて頂いた」

「理事の「目を見たか」という言葉で、諸君が望むだろう事は分かっていた。それで、説明を」

「はい。」

まず、秘密の部屋の入口は、マートルのトイレと呼ばれる3階廊下の女子トイレに在りました。そこからおそらく地下に続く通路があります。マートルが言うには、地下に魔術保護のかかった区域があり、それが秘密の部屋だろうと推測しています。

次に、怪物はバジリスク。といっても、雄鶏が産む卵を蟊蛙に孵化させるといふ、一般的なバジリスクではありません。秘密の部屋という儀式魔術によって召喚される、魔術的な疑似生命です。故に、痕跡は残らず、城内のどこにでも現れ、殺しても儀式を終えるまで蘇り続けます」

寮監は暫く黙考した後、首を振った。

「その魔力はどこから得ている？ 怪物の正体は実際に襲われたのだから真実であろう。だが、その儀式を誰がどうやって続けられると云うのだ。守護霊の様なものであろうが、校長でさえその様な強力な術を使い続ける事は出来ないだろう」

「それは……」

お兄様が言い淀む。

まだ分からない。それは継承者の資質によるものか、あるいは術の特性によるものか。いずれにしても、儀式を打ち破るにはそれも解き明かさねばならない。

「あ、仮説ならありますよ。荒唐無稽かもしれませんが」

「何？」

ケントが夕食の献立を思いついた様な気軽さで言った。

「排泄物……つまり、糞です」

「それは言い換えなくても分かる」

「ドラゴンの糞が魔力を含む良質な肥料になるなら、魔術師のそれを集めても同じ事は言えるんじゃないでしょうか。尿はともかく、便の大半は水分と腸内細胞の死骸ですから、新鮮であれば魔力は揮発してないはずですよ。その魔力を使っているんじゃないでしょうか」

「あまり真面目に考えたくはないが、それならトイレが入口である理由も分かるな。マートルの言う、訳わかんない魔術、それがクソの転換機構だとすれば……」

「もう少し上品にならないかしら」

お姉様は窘めるが、話を止めるとは言わなかった。それだけ、ケントの話に聞く価値があると考えているのだろう。

「ケント、お上品に説明しろ」

「マリアの事よ」

「……姫様、何一つ擁護出来ませんが落ち込まないで。」

とにかく、続けます。仮にこの儀式が下水を燃料に行われているものだとして、対策としては各便器に一時的な消失機構を付け、供給を絶ちます。汚泥のままという事はないと思いますが、おそらくは何らかの形で魔力は貯蔵されているでしょう。そこで僕らが秘密の部屋に潜り、貯蔵分の蛇を殺し尽くして、その上で転換機構を破壊することで儀式は継続できなくなるでしょう。

いかがです、教授」

「非常に理に適っている。他に湖や森の中に何かがあるのかと考えてはみたが、そういった何か異常な装置があれば、水中人やケンタウロスが黙ってはいないだろう。城内で怪しまれず、かつ継続的に魔力供給が出来る機構として、排泄物を利用することは非常に合理的である。

しかし、吾輩がこれを職員室で説明する姿を、諸君は想像できるかね」

寮監は心底嫌そうに表情を歪めた。ドロテアがここに居れば減点対象となる程に大笑いしただろう。

「普段の様に淡々と無表情で説明すれば良いのでは？ 冗談で言っているとは思われないでしょう。「諸君、聞いて頂きたい。吾輩の助手

が此度の事件を打ち破る方法を考案した。トイレを改設するのです」
とでも始めればよろしいでしょう。お困りなら代わりに俺が説明しまししょうか」

「吾輩の真似か？ ふざけているのかね」

「至つて真面目です」

隣で聞いているお姉様の口の端が軽く痙攣していたが、笑いださな
いのはせめてもの寮監への敬意だろう。ケントは腿をつねっている。
「俺も糞溜めに飛び込みたいわけではないので真面目に考えました
が、現状、儀式に対する魔力供給について考え得る手段はこれくらい
です。楽しい遠足気分になれる様な場所に祭壇が在るならば、喜んで
その可能性に飛びつくでしょう」

「半日。半日あれば改修は終わるだろう。クリスマス食事会、その時
であれば全員が参集される。諸君はその時に動いてもらう。その間、
継承者が暴れ出せば、教授陣が抑えに動く様に働きかけよう。人質の
多い広間の方が諸君にとっては厄介であろう」

「ではその様に」

†

寮監と別れ、マートルのトイレに行くとヘルマンとドロテアが待つ
ていた。

「ドロテア、良くなったか」

「はい、先輩。イングリットのおかげさまで。あと、ヘルマンに聞いた
けど、ケントもありがとうね」

「どうやらドロテアは聞いていなかった事にするらしい。お兄様が
目配せをするので、頷いて返す。」

「森番が連行されたそうですね」

「ああ、それは別にどうでもいいが、ケントが儀式の秘匿を暴いた様
だ。解呪に続き、またお手柄だ」

「へえ？ 聞かせてくれ」

ヘルマンが眼鏡を抑えた。

「僕がと言うよりも、正確には寮監の言葉が決定的でした。どうやつ
て儀式の為の魔力を供給しているのか。それは、トイレです」

そこまで聞いて、ヘルマンは一つ頷き、眼鏡を拭き始めた。

「ああ、そういう事か。魔術師の排泄物に残存する魔力を使っているのか。地下にあるのはその転換施設。そこで転換された魔力が動力と。だからそれを壊せば儀式は破綻する。よく気付いたね」

「それだけで分かる貴公は大概ですよ」

「推理なんてそんなものだろう。最後の1つが揃わなければ何もかも分からない事もあるし、1つの欠片が全てを埋める鍵になることもある。まあ、継承者の動機は未だに分かっていないけれど、まずは儀式を終わらせよう。それで？　いつ行くことになったんです？」

「……いや、食事会か。学徒を人質に取るだろうから、護る為にはひとところに集めた方がいい」

本当に1つの欠片で何もかもを察したらしい。

「いや待って待って、全然分かんないんだけど。じゃあ何？　私とイングリットはその……誰のだから分からないそれにやられたって事？　私汚されちゃったの？」

「ドロテア、お願い。止めて」

お姉様がドロテアを真顔で見るので、ドロテアも口を噤んだ。

「……まあ、万物は流転するわけですし、その中の魔力を利用しているだけですからそう悲観的に捉えないでください。破傷風の危険も無いはずですし」

「ケントも止めろ。慰めているつもりだろうが、考えさせるな」

ケントは肩を竦めた。

「まあ、どの様なものであれ、攻撃を食らいたくは無い。そこで僕も考えました。考えた末に、初歩的な術で事は足りると気づきました」

「湖の盾を使った耐久ではなく？」

「そもそも、湖の盾なんて持っていない魔術師たちは、どうやってバジリスクという生物兵器と渡り合ったのか。目を潰せばいいだけです。それも、物理的にでもなく、1年生でさえ扱える術で何とかかなるでしょう」

「勿体ぶった言い方をするな」

「僕が悩んだ事をあつさりした後輩に読み解かれて悔しい気持ちを分

かってください。作戦決行前には伝えますよ。教授陣にも死なれては困りますし。今は入口を開きましよう。これで開きませんでした、という訳にはいきません。蛇がダメだったとして、マリアでさえ砕けないなら本格的に爆破を検討しますが」

お兄様は笛を取り出すと、お姉様に視線を向けた。お兄様が蛇を呼び出し、お姉様が服従させる、という役割である。

「言葉は「開け」でいいのかしら？ 他に試すとしたら……」「我は求め訴えたり」ならどうかしら」

「魔術的ではあるが一般的に過ぎないか？ 秘密の部屋に関わるなら、「我は継承者なり」はどうだ」
「穢れた血に死を」

ケントが至極平坦に言う。冗談のつもりもないらしい。

「物騒だな。私なら「純血の為に」だな」

「そりゃ物騒な事するための儀式なんだし。あたしは「光あれ」

「ああ、正解」

「何が？」

「バジリスク殺しの方法だよ。魔眼が脅威なら目を眩ませて遠距離で叩く。これだけで殺すには十分の時間を得られるだろうけど、ピット器官が有ったとして火炎瓶を投げればいいし、嗅覚は血の酒、聴覚はオルゴールを使えばいい」

「模造品とはいえ、お母様の思い出の品を囿に使うのは嫌だ」

「なら时限爆発瓶でも使えばいい。僕らにとって聞き慣れた音でも、畜生にとっては意味不明の駆動音と爆音だ」

「そうね。それで、ヘルマンは何を言って欲しいのかしら」

「単純に「開け」でいいと思う」

「その心は？」

「判断材料がないから。蛇語話者特有の慣用句があるかもしれないし、コブラとアナコンダでは発音が違うかもしれない。こればかりは開くと思ってあたるしかない。」

ダメならマリアを見習って押し入るだけさ」

「馬鹿にしているのか？」

「いや？ 鍵がないなら錠を壊すのは至極合理的だろう」

「そうね。ではお兄様、お願いします」

お兄様が笛を吹き鳴らし、飛び退いた。赤紫の光が放たれ、悪夢と現実とを繋ぐ道が開かれる。そこから、牙を持つ大蛇の首が飛び出した。お姉様がそれに杖を向け、目を閉じた。

「効いたか？」

「ええ」

蛇はゆらゆらと揺れながら、入口となる柱を見ている。お姉様が口を開くと、表音出来ぬ声が蛇から発せられた。

「ほう……帰っていいぞ」

お兄様が撫ぜると、蛇は静かに悪夢へと微睡んでいった。

柱は床に飲み込まれる様に沈み、水道管が剥き出しとなった。そこには穴が穿たれ、人が通れる様になっていた。中は急な坂となり、進むならば滑り降りるというよりも落ちるといふ表現の方が似つかわしい。

「開け」で本当に開くなんて……」

「もしかしたら蛇語なら何でもいいのかもかもしれないな。それを話せると言うだけで継承者候補程度には成れるのかもしれない」

「では俺達も継承者か。随分と安い資格だな。」

さて……行きはよいが帰りはどうする？ 見たところ、レバーや踏石といった制御装置はなさそうだ。秘匿を考えれば、開いたままという事も考えられまい。

と、言っているそばからこれだ」

柱が床からせり出してきた。踏みつけて抑えるが、その速度が緩んだ程度であった。

「姫様、全力ですか？」

「靴底が割れそうな程にな。武器を噛ませた程度では止まらないだろう」

「十分だ。脚を離していい」

「はい、お兄様」

脚を離せば、緩やかに速度を上げた後、柱は配管を覆い、元の手洗

い台となった。

「あんな狭所で蛇を呼び出せば、そのまま悪夢に引きずり込まれま……いえ、そもそもマダラスの蛇である必要がないじゃないですか。ヘルマン、何故マダラスの蛇を？」

「狩人と親和性が高いからね。鳴き声ならともかくとしても、言葉を発せというのは単純な蛇に命令出来るかな。腑分けの双子や蛇の寄生者、それにヤーナムの影程、僕らは蛇を知悉しているわけじゃない」「まあ、心配することも無いんじゃない？ この構造なら、継承者も蛇に押し上げてもらってんだろーし。あたしらも地底で蛇を召喚して、それに乗っかって行けばいいんじゃない」

「それに中がどうであれ、放置していれば緩慢な狂気が蔓延る事になるでしょう。学徒は少なく、一堂に会する今日この日を除いて、機会はありませんわ」

お姉様もドロテアも普段からすれば幾分前のめりになっている様に感じられるが、復讐心に駆られているわけではない。不意を突かれたとはいえ、狩人でありながらも逆に狩られた。その毒牙が、本当に只人に向かつて突き立てられたならば。そう考えれば、解決を急ぐのも無理はない。

ただ血気に逸り、無謀に突入しようというわけでもない。特異な構造の聖杯では、脇道と本道が繋がっているものがあり、そこではレバーを動作させずとも裏から封印された扉を開くことが出来る。この入口もまた同様の可能性があると言えるだろう。

「まあ、帰れなかつた場合を考え、開き方は寮監に伝えておこう。最悪、ポッターならば開けるはずだ」

「そういえば、ポッター先輩が継承者という可能性もまた浮上したのでは？ ここを開いて継承者の権能を得たら魔力も無尽蔵でしょう。蛇の召喚も可能になるのではないでしょうか。」

彼が継承者であるとして、その立場からすれば、彼のしてきたことは自殺行為だというのは分かるんですが」

「可能かどうかと言えば可能だろう。だが、俺が彼であればマルフォイ少年を殺すだろうな。付きまとってくるクリービーや継承者だと

離し立てた穴熊寮生より、余程殺意が湧くだろう。

もつとも、犠牲者は彼に都合が良い人物ばかりである事とは矛盾する様だがな」

ポッターはクリービーから向けられる熱意に気を良くしている様子は無く、フレッチリーとマクミラン襲撃にしてもごく短期的に考えればポッターの悪評が拡散されることを留めていた。直後に口を封じたと恐れられる様になったただけだが。

では、お姉様とドロテアは何故か。

「継承者は今まで狩人を襲わなかったが、何故今になって……それだけ切羽詰まった、という事だろうか」

「僕らはトイレの前でたむろしてましたからね。女子トイレの前に男子の集団が出来ていれば、変態と思うか、それとも……」

「秘密の部屋の入口が曝露されたと焦る。確かに何人か通ったな。デイルク、ケント、覚えはありますか？ 穴熊の7年、蛇寮の3年……あとは獅子寮の双子は除いていいです。僕は途中でトイレに行ったので、その間は誰が？」

お兄様はこめかみを軽く叩き、ケントは目をつむる。

「驚寮と獅子寮の監督生だな。獅子寮の方は赤毛の一族だ。その後双子が来た」

「あの監督生達は何か疚しい雰囲気でしたよね」

「まあ……逢引をするのに隠れる必要があるのか、というのは分からないが」

「ご自分はどうなんです？ モテるのにそういう噂がないのはどういう事だって噂されてますけど」

「妖女シスターズに憧れる女子がいたとして、付き合いたいかは別だろう。それに俺は普段から妹が学内で最も美人だと言っているからな。イングリットと顔の出来で争いたい女が居るか？」

お姉様が咳ばらいをした。

「僕の学年だとドロテア先輩もカワイイ系で大人気ですよ。面倒見良くて距離感が近いのも高評価の理由ですね」

「私はどうなんだ」

「獅子殺しとして崇められていますね」

「美醜の話でそれか」

「それです」

ダフネに教えを乞うべきだろうか。

「それでウィーズリーの……パーシヴァルだったか？ 確かにあいつは俺達の捜索について、何度も夜間外出は止めろと言ってきたな。監督生の責務とやらに血道を上げていたが、それが実は継承者として捜査妨害を試みていた、ということも言えなくはない」

「腹芸が出来ない様に見えてそれさえも演技というなら、一流の工作員になれますよ。あの無能よりよほど。「私にかかれば秘密の部屋はもう見つけたも同然です——あと、ほんの少し、皆さんの信頼を分けて頂ければね」だなんて、よくも言えるものです。僕らが2人も犠牲を出して、漸く掴んだ糸口だというのに」

「ヘルマン。貴公の苛立ちは分かるが、後にしよう。患者の戦は腹ごしらえから、だ」

ヘルマンは仕込み杖、それも刃鞭形態を得意とする。傷を負わないその戦闘法から、血が満ちている時に力を生み出す血晶を好む。

お姉様やドロテアが傷付けられた事の怒りは、臓腑を焼き切る様な熱を持っている。しかし、怒りに我を忘れて武器を振るってはならないとしたのはヘルマンだった。そのヘルマンがこうまでも心を揺り動かされている。その事実にとの口が言ったのかとも思うが、それと同じだけ嬉しく思う。常に冷静で在れとした彼の言葉は、狩人としての矜持に因るものでもなく、同胞を案じるが故の言葉であると改めて思い知った。

ヘルマンの矛盾をそう受け止めるだけの心の置き場は、ケントの狩人だからと平静でいる方がおかしいという言葉によるものか。幾らか心が軽くなった気はする。

「……そうですね。確かに、僕らは食事会にはいけない。今の内に何か食べておきましょう」

「クリスマスのプディングは格別なんだが、残念だ」

「その代わり、血の酒の一等品を出そう。勝利の後に飲む酒、それに優

「るものはあるまゝ」

秘密の部屋

厨房は宴会に向け全力で稼働していた。「皆様が怯えるこんな時だからこそ、幸せな食事を用意することが務めなのです」と、目を血走らせて包丁を握る屋敷妖精達に、6食を特別に用意してくれとは言えなかった。

何か思いついたことがあるとドロテアが言う。お兄様も現況をお父様に報告しておこうと、ドロテアと共にヤーナムに帰った。

広間で自前のチョコバーと今朝届いたダフネ達からのプレゼントを齧りつつ、妖精達の飾り付けを手伝っていると2人が戻ってきた。既に臨戦態勢で、遮光用のゴーグルを首から提げていた。

「父上からは、最後の一撃まで気を抜かない様に、とのことだ。

イングリットとドロテアの件は伏せてある。父上のお気持ちはどうあれ、城の周囲に灯りを持たない父上がここに急行することは出来ない。ただ心配を増やすより、後で小言を頂戴する方が良いだろう」
「小言で済みそうにはありませんが、仕方ありませんわ。」

……ドロテアのそれは？」

ドロテアは30センチメートル程の銀の棒を握っていた。

「トイレ改造スタンプ。この棒の中に、精霊の抜け殻由来のゲルが入ってるの。で、先端にはルーンを刻んであるってわけ。ペコンと便器に一発、その型通りにゲルが押し出されて、それだけで消失機能付与ってね。ちよつと聖杯に潜ってトウメル人に協力してもらったから効果は実証済み」

極稀に火炎瓶でも毒メスでもなく、丸めたクソを投げつけてくる守り人が居る。尋常ではない不快さと、その見かけから想像できない攻撃力から殺害優先順位は高い。

「……特許でも取ったらどうかしら」

「それも考えたけど、それがきつかけで元から消失機能の付いた便器開発されたら意味ないからね。継承者をぶつ殺したら秘密の部屋の解析もしたいね。転換機構を実装できれば夢の永久機関だよー」

「それが実現したら、特許料でヘルマンの年収超えるんじゃないです

か」

ケントがドロテアに渡されたスタンプを器用に指先で回しながら、ヘルマンに笑いかけた、その刹那。

「ディルク・ボーン他5名。職員室まで来い」

寮監の声が拡声され、城内に響き渡った。普段の慇懃な言葉でもなく、無駄のない命令口調から切迫した事態である事が分かる。

遺骨を使い、職員室に文字通り駆け込むと、そこには教授陣が悲愴な顔を並べていた。寮監もまた、その表情には幽かに狼狽と焦燥が浮かんでいる。

「どうしたと言うのです」

「生徒がああ血文字の壁に新しい文言が加えられた事を知らせてきた。「その髪は血よりもなお赤く、その肌は骨より白い。その骸は永久に秘密の部屋に」と。これを受け、各寮の監督生に確認させたところ、諸君を除けば獅子寮の生徒3名が失踪した事が分かった。

ハリー・ポッター、ロナルド・ウィーズリー、ジネブラ・ウィーズリーだ」

「非情な物言いをしますが……継承者からの要求が無い以上、既に死亡している可能性もあります。故に、俺達の目的は飽くまで秘密の部屋の破壊。搜索及び救出は副目的です。無論、可能である限りはそれらも行いますが」

お兄様の言葉に、副校長が震え出した。人の世を知らぬ若輩の狩人にさえ、こうした事件の結末は想像するに容易い。まして魔法大戦を知る副校長である。それを改めて言葉にされれば、その衝撃は大きいことだろう。

「ジネブラ・ウィーズリー。はあ、成程……成程」

ケントはいつの間にか刀を佩いており、鯉口を切っては鞘に戻している。

確かにケントはハロウィン以降に様子がおかしい者としてウィーズリー家の末子を挙げていた。とはいえ、あの馬鹿二人と共に失踪したのだ。ハーマイオニーの代わりに妹を連れ回し、そして同時に拉致されたとしても別段不思議は無い。

「ケント、何か分かるのか？」

「僕の中で道理が立っただけの事です。どうやってというのは未だ分かりませんが、何故というなら。まあ、別に今の状況が良くなるわけじゃありません。それより今は、すべき事をしましょう」

「あたしも何となく、かな。クツソむかつくけど」

ドロテアがケントに「ねー？」と問うと、ケントも「ですね」と短く返した。

「何だ？」

「いえ、これを言ったら姫様ブチギレるので。後にしましょう」

「それは私が後で余計に怒るだけだと思うが」

「とにかく」

寮監が話を遮った。

「諸君には、早急に秘密の部屋に赴いてもらいたい。校長も同行される」

「不要です。俺達は俺達で身を守れますし、俺達の領分、俺達の方法がある。校長はある特定の者ではなく、学徒全てを護る義務があるはずだ。広間で皆を落ち着かせながら、皆を護って頂きたい」

「承知しかねる。諸君も保護されるべき生徒の一人だ。対策が済んでいない以上、諸君だけで立ち向かうのは想定以上であろう」

「対策なら直ぐに。ドロテア」

「はっ。この道具を用いれば、15分もあれば大広間と各寮最寄のトイレ全てを改修できます。便器にこの先端を押し付けるだけで、特に詠唱は不要です。生徒には指定区域のみを用いる様ご命令を」

普段あれだけ軽口を叩いているドロテアの畏まった口調に、寮監も言葉を詰まらせた。あるいは、その瞳に灯る虹色の光がそうさせているのだろうか。

「俺達が帰ってこない様であれば、その時こそ我が街に連絡を。入口の開き方は伝えております。昨年卒業したジェラルド・シユミットあたりがやってくるでしょう」

寒風の様な静寂が職員室を包む。寮監は狩人をまともに学徒として扱った事は無かったが、それでも一応は案じているのか、あるいは

冷徹に勝算を測っているのか。

押し黙ったままの教員も所詮は蛇寮生の事と切り捨てているわけではない。お兄様の言葉に理と利を見出している事が表情から見て取れる。 Hogwatts という地獄で教鞭を執る者ならば荒事にも覚えはあるだろうが、それぞれの得手不得手があるはずだ。昨年度の石の護りは教員それぞれの職能を反映したものとなっていたが、ことバジリスクを模した疑似生命という分野に長ける教員はいないだろう。狩人がそれに長じているとは言えないが、ピクシー事件がそうであった様に、護る闘いは不得手である。

狩人の戦いは己が身を削る、死闘である。故に、広間の防衛を任せられたとして、自分の身を護り、継承者の首を刎ねることは出来ても、学徒の安全は二の次である。人質を取られたとして、それより他に仕方がないのであれば、振るった武器は諸共に貫くだろう。

それがたとえ、ダフネやハーマイオニーでさえもかと問われれば答えに窮するが、今はそうさせない為に研鑽を積む事だけを考えればよい。

「死を覚悟していて、より長じた者が居て、何故君達だけが向かうのか。まこと、ヤーナムとは不思議なところじゃの」

それまで口を閉ざしていた校長が発した言葉は、この場にいる狩人のみならず、ヤーナムの在り方さえも揶揄している様なものだった。「来るべき刻。それが来るまで、我等は恐れながらも歩みを止めぬ者。その歩みは、追い立てられ、屠られる燔祭の仔羊のものではない。我等狩人は皆、心の中に星辰輝く宇宙を宿し、その中に臆病な羊を飼う。他者に拠って立てば、たちまちにその羊こそが狼となり、心を食い尽くす。」

恐れながらも、暗い嵐の中を夜明けへ進む。それこそが、我等の生きる路。たとえその路で倒れても幸いである。続く者が遺志を継ぐだろう。我等ヤーナムは、個にして全。全にして個。同胞と身を寄せ合う事はあれども、寄生するなど死に等しき在り方だ。

……妹と後輩が倒れた時は、心を揺さぶられた己の未熟さを改めて思い知らされたが」

「全く同じ事を、君の姉君からも聞いた。もう20年も前になるかの」
「胎は違えど、愛しき姉だ。」

校長、もうよろしいか。これ以上何を問われても、俺からは問答無用としか返す言葉が無い。俺としては貴公の言葉に別段怒りもしないが、問答を続けたところでそこに価値が生まれるとは思えない」

「……ヤーナムは、変わらんのじゃな。ヤーナムの中でのみ、完結している。それが歪みだとも、悪だとも、わしには言えぬ」

校長は疲れた様に言葉を紡いだ。

気付かぬうちに鋸鉈を握っていたが、お兄様を除けば他の狩人もまた、銘々の武器を構えていた。

「ほう……成程。つまり、私への当てつけか？ 私は Hogwarts のへの帰属意識によって石ころを護りに行かねばならなかったという事か。自らの友人であるハーマイオニーの為ではなく、肩を並べる学徒であるからと。」

故に、私の行いに価値は無く、蛇寮に与える点も無かったと。意志なき行いだつたと。ほう……そうか、そうか」

言葉を紡ぐだけの理性を残せていたのは、やはりハーマイオニーの存在である。秘密の部屋を暴かぬ限り、彼女に安息は無い。ここで職員室の全てを破壊しつくすよりも、秘密の部屋の怪物を殺し尽くす事に力を注ぐべきだ。

「僕から申し上げますが、僕らはヤーナムの他に在る Hogwarts の為にもなる事をしている。それが僕らの使命によるものであれ、それで救われる生命が有るならば、それを穢す道理は貴方に無い」

「おうとも。じゃが、わしは君達に狩人の使命としてではなく、Hogwarts の生徒であるから自らの意志で Hogwarts を援ける。人であるからこそ人の世を想って欲しいと、何年も……そう、何十年も思っておる。それを狩長に伝えてはくれんかの」

「それを言うならば、まずは貴方がヤーナムを知るべきだ。貴方が今の貴方の目でヤーナムを見ている限り、ヤーナムは山々と湖に鎖された因習の蔓延る辺境の地でしかない。」

「デイルク、行きましよう。寮監、トイレの件をお願いします」

なのは手先の器用さだけでなく、どの様な戦闘を想定できるか。ドロテアは十二分にそれらを満たしているだろう。

「さっさと片づけて宴にも出たいものだ。予定通りなら後2時間か。失踪者がいるのは蛇察には伝わっていない。寮監が抑えたのだろう」
「何十匹分有るんでしょうね、魔力」

ケントが暖炉でマシユマロを炙りながら言った。直接齧つてもいいが、珈琲に浮かべても美味しい。

「それこそ50年分溜まっているとしたら面倒だな。便所で飯を食いたくはないぞ」

「様子を見て再編成しましょうか。1人か2人ずつ休憩取れば良いですね」

「ヘルマンにしては珍しく楽観的だな」

「転換機構が僕らの血の秘儀を転換なんて出来るわけありません。もし出来るとすれば、秘密の部屋の設計者は上位者をも超える存在という事です。つまり、あり得ません。銃も秘儀もやりたい放題ですよ。」

「さ、15分経ちました。仕事の時間です」

「アレックス。詳細は省くが結論だけ言うと、トイレを使うなら寮内か広間の傍にする様、皆に伝えてくれ。さもなければ、最悪俺達は死ぬ。ではな」

お兄様の言葉に、怪訝な顔をしながらもフランキ監督生は頷いた。築き上げた信頼によるものだろう。改めて、校長の言葉が理不尽な難癖にしか思えない。

3階の廊下に着いたとき、遠き山に陽が落ちた。マートルが窓ガラスに首を突っ込み、それを眺めていた。

「マートル」

「何？ 私の趣味を邪魔したいってわけ？ それとも、ババアかよつて馬鹿にするわけ？」

「どーでもいーよ。ここ、赤毛のガキが通らなかつた？」

「ガキって、あんただってガキみたいな顔してるじゃない」

「うるっさいよ。いいから答えて」

「はいはい、何か虚ろな目して通ったわよ」

ドロテアの言葉が汚い。

「ドロテア？」

「継承者はジネブラ・ウィーズリー。虚ろな目つてのは気になるけどね。ま、生きてるならそれでいいんじゃない。これ以上校長に文句言われたらあたしだってキレルよー」

「は？」

「行けば分かるってば」

もう十分キレている気もするが、とにかく今すべき事はドロテアへの質問ではない。

お兄様はケントに笛を吹かせ、お姉様が蛇を操った。先程と変わらず、柱は床に吸い込まれていった。

「あんたたちそんなことも出来るわけ？　って、私のトイレに何してくれてんの」

「これこそ、貴公が50年間探し求めた秘密の部屋の入口だ。

俺が先鋒だ。ヘルマンが続け。安全を確認した後合図する。それが聞こえたら残りも飛び込め」

「了解です」

「お兄様、ヘルマン。気を付けて」

「ああ」

2人は暗い穴に飛び込んでいった。程なくして柱がせり上がってきたが、すぐにお姉様が蛇に開かせた。

暗い穴を覗いていると、幽かに指笛が聞こえた。

「先に行くぞ」

「じゃ、次あたしね」

「イングリット様、いかがなさいますか」

「ケントが先ね。蛇の制御が無くなったらケントが噛まれるかもしれないわ」

「かしこまりました」

飛び込むと、当然ながら暗闇に包まれた。滑り降りながら携帯ランタンの照らす僅かな範囲を見る限り、通気管と思われる小さなものに

接続はしているが、通路と言える分岐はない。防衛の為に迷宮になっていることも考えたが、そもそも入口を発見されることも想定していないのだろうか。

それにしても、長い。体感である為に正確ではないが、とうに蛇寮があるだろう高度よりも深く滑り降りている。築城の工程など知りはないが、基礎部分とはこうも深くまで達するものなのだろうか。急に勾配は水平に近くなり、加速したまま空間に投げ込まれた。眼下ではお兄様とヘルマンが武器を構え、辺りを警戒していた。

「見事な着地だ」

「ありがとうございます」

続くドロテアの為に場所を移すと、ドロテアも宙で身体を捻って着地した。

「採点は？」

「9点」

「7点」

「8点」

「優勝待ったなし」

「気が済んだらどきなよ。次が来る」

ケントとお姉様もすぐ降り立ち、それぞれの武器を確認した。

松明を掲げ、改めて辺りを見回すと、そこは石材で出来た大きなトンネルだった。鼠と思しき小動物の骨片や、墓所カビに似た何かの菌類の苗床が有る。幸いなことに、ここを下水が流れているわけではないらしい。となれば、やはりここは通路として設計されたのだろう。「魔力の流れからするに……あちらか」

お兄様の指し示す方へ5分ほど進むと、行き止まりとなっていた。聖杯の隠し道の様に、衝撃を与えれば道が現れるというものでもないだろう。壁には絡み合う2匹の蛇の彫刻が施され、その目には大粒の翠玉が嵌め込まれていた。

「何というか……随分と自己主張が激しいな」

「だよー。秘密の部屋はここですよよくお越しになりましたさあどうぞいらっしやいませ、って一息に早口で言われてる気分」

敢えて秘匿しておきながら、スリザリンを思わせる翠玉をあしらった蛇の意匠。ここまでできれば、むしろ設計者は秘匿などしていないと考えた方が納得できる。

「おそらくは蛇語で開くのでしようが、上層の手洗台を突破されている以上、同じ防衛手法を取る事に何の利点も意味も無い。ここでは本当に継承者の為の符牒が必要というなら分らないでもないですが」「そもそも成り立った背景が違うのかもしれないな。何者かが追われて作ったわけでもなく、何者かを追う為に作ったわけでもなく、元々ここは只の寮室、あるいは教室だった。いつしかそれは忘れられ、今の地下牢こそが俺達に与えられる寝床となった」

「明らかにこの通路と先程の配管は年代が違いますからね。ヤーナムがそうである様に、旧きものの上に新しきものを置く。そうして後の世の者は、自分が何の上に立っているのかを知らない。まあ、トウムル人達はそのまま祀った神と共に忘れられていた方が幸せだったでしょう」

ヘルマンとお兄様が壁に近付き、罨の有無を調べている。壁に埋め込まれた火矢の彫像や柵から噴き付けられる劇薬に優る悪意などないだろうが、それでもここは秘密の部屋である。

「延々と僻墓でツルハシを振るい続けるのが幸せって言うならそれで良いんでしょうが、僕は御免ですね」

ケントがランタンを掲げながらヘルマンに応えた。

「果物も砂糖も無いしな」

「あたしはあの音好きだけだね。焚火の傍に座ってツルハシのガンガンやってる音聞いていると眠くなってくるよ」

「秋の風も冬の夜空も無いのは嫌ね。イズは美しいところもあるけれど」

イズの最奥には、確かに宇宙を思わせる程の聖堂が設けられていることがある。それが単に蜘蛛の巣とある種の菌類の胞子による見せかけの空としても、トウムル人の心に幾らかの安らぎを与えたのだろうか。

「罨の類は無いな。イングリット、準備を」

「はい、お兄様」

上層の入口同様に、蛇によって仕掛けは動いた。蛇の彫像は滑らかに動き、壁は隠し道の様に虚空へ消えた。

「本当に何事も無く開いたな。イングリット、何を言わせた？」

「かねて血を恐れたまえと」

「その通りだ。征こう」

秘密の部屋の内部は、薄暗くはあるが清潔だった。蛇の彫刻が施された柱は灯りも届かぬ高さまで聳え、床は磨かれた蛇紋岩が敷かれている。青い秘薬を呑んでいるとはいえ、靴音は広間に響き渡る。継承者にも侵入は知られているだろう。

擦過音がした。

「そこ」

音の方向にドロテアがクロスボウを撃ち込み、暗闇に銀の煙が立ち昇った。

血に由来する攻撃力に自信が無いのであれば、より多くの血を込めればよい。血に優れぬ狩人の安易な発想は、その単純さ故に、より多くの智慧を取り込む余地があった。

矢という、銃弾より多くの血を内蔵出来る飛び道具に、工房は改めて熱意と血潮を流し込んだ。

射程と連射性能こそ銃弾と較べるべくもないが、魔術儀式を含む特別な工程を経る事によって、矢は魔法生物にとって極めて高い破壊力を持つ様になった。元来の静肅性と習熟難易度の低さから、若人に銃よりもこれを薦める狩人も居る。

ドロテア曰く、未だなお続く火薬庫の職人達はその風潮を嘆き悲しみ、発射音が一切無い銃の開発を計画した。だが、爆炎と轟音による葬送を矜持とする彼らにとって、それは自殺的であった。ある時彼らは試作品にして完成されたそれを仕舞い込んだ。倉庫の奥に、ただ誇りの強きが故に。

「まず一匹、と」

「さて、次はどう出ますかね」

「飽和攻撃だろうな。単純ながら効果は高い。」

……一般的に言えばな」

紫の淡い光の粒が、周囲から一斉に湧き上がる。ヘルマンは彼方へ呼びかけ、その光を塗り潰した。

お兄様も月光波を飛ばし、蛇を煙に変えている。

「んっ……」

背後でお姉様が艶めかしい声を上げたが、それは自らの掌に小刀を這わせたことに因る。僅かに身を屈めれば、その直ぐ上をお姉様が生み出した焰が走った。焰は幾つかの柱を燃え上がらせ、蛇を焼き払う。その劫火に照らし出された蛇の胴を、普通の対物ライフルで撃ち抜いた。本来立射すべきものではないが、大砲さえ片腕で扱う狩人の膂力には造作もないことである。ケントも同様にお姉様が照らした蛇に銃を撃ち込んでいる。

「作業感ありますねこれ」

「気を抜くなケント。天井が崩落して圧死は笑えん。マリア、武器を替える。イングリット、お前もだ。これだけ広ければ窒息は無いにしても、確実に建材を痛める」

「では、これならば」

お姉様の掌からは焰の刃が伸び、その先に有った蛇の頭を刺し貫いた。

マリアの名を頂きながら、自分にはあの狩人の業を扱う事は出来ない。狩人に成って日の浅かった頃は、憧れた狩人の焰を生み出せない事に癩癩を起こしもした。

古強者の系譜である少女王の血は、狩人の基本である身体強化の技法に特に優れる。物理的な破壊力と内臓を引き裂く業については他の追隨を許さぬ程と自負しているが、それでいて何故マリアとアイリーンの名を頂いたのかは疑問である。

だが、賜った名には、必ず意味が有るはずである。お父様とお母様はそれに自ら気付く事をお望みなのか、あるいは未だ伝えるべきではないとお考えなのだろうか。

「と、今考える事でもないな」

「姫様？」

「いや、すまない。私にできる、私の強みを活かそうと思っただけ」
お兄様とヘルマンが続けざまに光を放っているため、蛇にとっては魔眼も何もあつたものではない。ならば、近づき、反撃も赦さぬままに切り刻むまで。

遺骨に魔力を注ぎ、地面を蹴る。直ちに眼前に迫る蛇の腹、そこに慈悲の刃を食い込ませた。素早い連撃に価値を置き、その反面ひと振り毎の攻撃力は心許ない武器であるが、踏み込んだ勢いを利用すれば他の武器にも劣らぬ威力となる。

この力であれば、大蛇の鱗も魚の鱗も変わらない。そうして捲れた皮膚に、腕を差し込む。引きずり出すべき臓腑がどれだかは分からない。どうしたものかと一瞬思ったが、内臓攻撃に拘る理由も無い。穿った穴に脚を蹴りこみ、腕を喉に、脚を尾へ向かって進ませた。

「蛇の手開き……いえ、手足開きですか？」

「あの調理法は嫌いなんだがな。指に臭いは付くし、調理後の見た目も美しくない」

ケントは大振りの太刀を閃かせ、輪切りにしていた。

「姫様って料理出来るんですね」

「困らない程度にはな。お母様が厳しいのさ」

夜が明け、獣化を免れた住民達が目にしたものは、血と瓦礫、そして骸が転がる街並みであった。

そんな有様で、唯一住人達の心の慰めとなったのは、父母を失いながらも気丈に振る舞う少女王の炊き出しだったという。

いつまでこの戦闘が続くのか分からないが、早く片付けて食事に取りつきたいものだ。

†

殺害数が合計300を超えるか否かといったところで、貯蔵された魔力も尽きたのか、新たな蛇は出現しなくなった。ヘルマンとお兄様は目晦ましを行いながら、秘儀と月光波を撃ち続け、注射をし、また撃ち続けた。狩人は皆そのお蔭で、魔眼も毒も、巨躯の体当たりさえ、一切傷を負わなかった。

お兄様達がお姉様とドロテアから輸血液を受け取っている間に、ケ

ントと共に辺りを警戒したが、やはり蛇の姿は無かった。

「未知の場所に赴く時、道を知る者と共にしてはならないとは、やはりよく考えられた掟だな。推測とはいえ、幾分か気が抜けてしまった。怪物の正体を知らず、この場所だけを知っていたならば冷汗をかくこともあっただろう」

「慣れてしまえば狩りですらない駆除作業になってましたからね。ア Mendローズ戦が出荷作業なんて言われるわけですよ」

自分の実力ではなく、他人に任せた狩り。自身の技量や武具を磨くではなく、先達に頼り、攻撃範囲外で安穩とする。それを寄生や出荷と言う。

旧くは医療教会の時代から定められた聖杯深度。より深く潜る権限を得る為にはその区画の長を倒す事が条件となるが、その難関として知られるものが深きトウメルと称される区画のロマ、冒涇と称される区画のア Mendローズである。特に未熟な狩人のうち、魔術や秘儀を主体に闘う者にとって辛いものとなり、出荷を望む狩人は後を絶たない。だが、それは自らの首を絞める事だ。

技量が劣るままに狩りに赴けば、当然に死に近づく事になる。何より、都合の良い救済など獣へ導く潯標である。そうした事から、今日のビルゲンワースは寄生を厳しく監視している。

「ああ。しかし、何故継承者は直接攻撃してこなかった。乱戦となれば必ず隙について、死の呪詛を投射してくるだろう。故に、敢えてイングリットの焰の幕を開けたが、武装解除術さえ無かった」

「それで場所が割れる事を想定したとしても、利益の方が大きいですしね」

「では、お兄様達は敢えて派手に攻撃をしていたと?」

「ああ。ヘルマンの隙は俺が月光波で呪詛を消す。俺の時はその逆。そういうつもりだった」

言わずとも為されたその連携は、長年の付き合いに因るものだ。普段は殴り合いの喧嘩もしているが、2人の間には代えがたい信頼があるのだろう。いずれ自分とケントとの間にもそうした呼吸が生まれるのだろうか。

「まあ、進めば分かる事か。ランタンを消せ。青い秘薬を飲みなおせ。柱の陰に注意しろ。先頭は俺が行く。ヘルマンが殿だ」

「了解」

回廊を進むうちに闇に眼が慣れ、その奥が見え始めた。最奥では天井に届く程の石像が煌々と照らされている。それは石から作られた事を忘れる程に、豊かに波打つローブに包まれた、老齢の魔術師の像だった。美術に明るいわけでもないため、それがどの時代の様式に基づくものかは分からないが、学祖スリザリンへの崇敬の念を感じさせるものだった。

「遅かった……とは言わないよ。辿り着くとも思っていなかったからね。ようこそ、異端者たち」

顔から伸びる顎髭は、そのローブの裾に至る。

その先に、ジネブラ・ウィーズリーが椅子に深く腰掛け、その隣に見知らぬ学徒が立っていた。その輪郭は朧気で、黒い鬘を纏っている。

「僕は5年かかった。複数人で公に行動できたとはいえ、たった2か月で秘密の部屋を見つけ、ましてや開くことが出来るなんて……正直、嫉妬さえするよ」

「貴公が継承者か」

「その問いへの答えは、君達に必要な。君達も分かっているんだろう？」

お兄様の質問に質問で返される。こうした手合いはヘルマンが得意とするところだ。

ヘルマンは眼鏡の位置を直し、仕込み杖で床を軽く叩いてから、口を開いた。

「なら質問を変えよう。貴方は50年前も継承者だったのでしよう？」

「うん、その質問は適切だ。そしてその問いに僕はこう答える。僕は50年前から、ずっと継承者で在り続けた」

継承者の制服は現代の男子生徒の物と微妙に意匠が異なっていた。

ゆつたりと、そして朗々と響く声。背景には威容を誇る石像、小道

具として据えられたウィーズリーの末妹、何もかもが芝居掛かっている。その役者の相貌は、絵画的な美を感じる程に整っている。

「亡霊にしては随分と血色が良いな。ご機嫌な様で何よりだ」

「ああ、何かが癩に障ったのなら申し訳ない。なにしろ、こうして口を使つてまともに話をするのは生まれて初めてだからね」

「随分と口の回る赤子だ。さて、貴公の本体はその娘が抱える本という事か。さしずめ、所持者の精神に作用し、意のままに操る呪具と云つたところか？」

小ウィーズリーの腕の中には、黒い表紙の本。それが人形ならばともかく、そのあどけない容姿と相反する古びた本は、その異質さを際立てた。

「半分正解だね。僕は確かにその本に残された記憶だ。だけど、触れた者の心を冒す能力なんてない。人の心を操るのは、いつだって人だよ。そして僕には、人の心について少しばかり長けたところがあつてね。極めて優れた相談役というわけさ」

「そうか。なら、俺達の相談を聞いてくれ。頼むから死んでくれ」
「嫌だと言つてもそうするんだろう？」

……最後の望みを賭けた蛇が狩り尽くされて、この期に及んで無様に命乞いをするつもりもないし、この娘を人質にして交渉しようなんて気もないさ。けれど、50年の孤独と沈黙に、君達との会話は耐え難い甘露と言える。

それに、君達は真相を知らずとも、ただ同胞の復讐だけで満足してしまう様な人達でもないだろう？」

お兄様が剣に光を灯し、一步、継承者に近付いた。

「生憎と、追いつめられてもあれこれと喋つた後に逆転する、そんな映画の様な展開にはならない。」

言葉を聞かずとも、所詮は道具なのだから解析してしまえばいい。時間稼ぎをするならもう少しマシな口上を用意しておくべきだったな」

「落ち着いて考えてくれ。魔力の供給源は絶たれ、貯蔵も無い。霊体とも言えない、ただの魔力の塊でしかないのが今の僕だ。この娘の杖

を操って魔術を使う事は出来るけれど、君達を傷付ける程の魔力を使えば、途端に消滅するだろう。

僕の存在理由は僕の保持だ。僕に自殺は出来ない」

「そうか、それは可哀想なことだ。心置きなく死ね」

お兄様が更に歩みを進めた。

「だから！ 話を聞けよ！」

「それが本性か。イングリット、どう思う」

継承者の激昂を見て、お兄様が嗤った。相手の出方を伺うという理由もあつただろうが、先程の質問返しにやり返したというところだろう。ペンは剣より強しとはいえ、剣で斬られて死なぬ者はそう多くない。

「話が見たいと言っているのは嘘ではありませんわ。あれだけ余裕を持っていたのですから、余程自信があるのでしょうか？ それを崩してまで叫ぶなんて、私なら舌を噛み切って死にますわ」

「……そうか。」

では、継承者よ。50年前の社交はどういうものなんだ？ ちなみに、現代では自己紹介から始めるものだが、まあ好きにやってくれ」お兄様は床に月光剣を突き立てた。飛び散った床材が、その燐光を受けて煌めいた。

「そうだな……順を追って話したいところだけど……まずは謝罪か。すまなかったね。」

とはいえ、そもそも僕は君達を襲うつもりもなかったし、むしろこの娘にそれを思い留まらせていたんだ。もっとも、君達を狙わなかった理由は、後輩である君達を大事にしたかったわけでもないし、君達に義理があるわけでもない。単純に、君達が怖かったからさ。だからこの謝罪を受け取らなくてもいいし、受け取られるとも思っていないよ。事実、僕は止める事が出来なかったから、こうして破綻した。

でも、理性ある人間なら、まずはこうした事から始めるべきだろうと思うんだけど、君達はこういう人間かな」

「俺の理性が枯渇する前に簡潔に話せ」

「良いとも。と言つても、僕が話せるこの2か月の事件の顛末は、飽く

までこの日記に書かれたこの娘を通したものでしかない。

最初に書かれたのは……そうだね、「あのハリーにまわりついてるブスは何なの」だった。それで僕はこう返した。「こんには。ハリーとは誰ですか？ あなたは誰ですか？」と。

興奮したよ。50年間、眠る事も無く、ただ僕の記憶の中に在り続けただけ。そこに、文字が浮かび上がってきたのは初めてだった。

ああ、自己紹介だったね。僕はトム・マールヴォロ・リドル。薄汚れたマグルの父から継いだ名だから、あまり口にしたくない僕の気持ちをつ分かってくれるだろうか」

「分からん。その様な理由でヴォルデモート卿などという大仰な名前を自らに着けるなど」と

「何だ、知っていたのかい」

「稀代の犯罪者だからな。本名程度は調べようと思えば調べられる。調べようと思わない程に魔法界を恐怖に陥れたというのは事実だが。他にも非魔法族の養護施設で育ったという事は知っているが、父親が非魔法族だったというのは知らなかったな。悪名高き純血主義過激派の原理は歪んだ劣等感でしかなかったと大いに喧伝してやろう」

闇の帝王、その名をヴォルデモート卿。さりとて木の股から生まれ出た者でもない。敵対者を殺し尽くし、情報を全て灰燼に帰したたわけでも無ければ、それに迫る事は可能である。

「ふうん。名前を呼んではいけないあの人、だろう？ 未だに恐れているなんて、随分と程度が低いものだと思うよ。ゲラート・グリーンデルバルドはその名で呼んでいるというのに……ああそうか、僕がダンブルドアに殺されたわけでも、僕の死体が見つかったわけでもないからか。

それで、僕はどうやってあのハリー・ポッターに倒されたんだい？

ああ、去年の事は知っているよ。この娘の兄と、この娘がブスと呼んだ穢れた血、ハリー・ポッター、そして……多分その君の大活躍というわけだ。「スリザリンらしいキレイな目つきをされていて、ハリーに酷いことを言うトロール殺しの野蛮なチビ」だそうだ。なんだ、案外綺麗な顔をしているじゃないか。

君らが未来の僕を出し抜いたらしいね。この娘がハリー・ポッターについて書いたことは、興奮していてよく分からなかったし、多分に妄想も含まれていたんだろうけど、正直……僕は失望した。僕を創り上げていながら、穢れた血にさえ劣るなんて、無様にも程がある。

「どうだったんだい、未来の僕は」

まるで旧来からの友人かのように、リドルは話しかけてきた。音も無く忍び寄り、絡め捕る蛇。安易な表現だが、この態度を形容する相応しい表現が思い当たらない。

「寄生虫だな。自身の信奉者の肉体に寄生し生き長らえる、醜悪な老人でしかなかった。そのくせ古語を用い、威厳を保とうとする辺りは滑稽そのものだった。哀れだな」

「神童もいつかは潰えるという事かな。あるいはその傲慢が身の破滅を招いたのかもしれないね」

「大層なご自身への信頼だが、こうして俺達の前で愚痴を語る貴公も無様というわけだ。」

1981年の10月末日。ヴォルデモート卿敗北の理由は、分からない。何せ生き残ったのはハリー・ポッターという赤子だけ。記録によれば、ポッター家を襲撃した後、ヴォルデモート卿はこの世から去ったとされている。そして夫妻の遺体の傍らに、稲妻の傷を刻まれた泣き声を上げる赤子が一人。これで何が起きたか分かるものは、貴公自身だろうか」

リドルの幻影は、幾度か目を瞬かせた後、その顔に似合わぬ甲高い声で笑い始めた。

「きやははははははは！ なあんだ。簡単なことじゃないか。親の命だよ。命を捧げて護りとする。それだけのことさ。」

なんだ……2か月も恋する馬鹿な乙女の愚痴を聞き続けなくたって、僕の目的は果たす事が出来たのか。本当に、君達と話せてよかったよ。

この娘に未来の僕の事を聞けば怖がって何も書かなかったし、誘導して聞き出そうにも、そもそも知らされていなかったんだ。この娘は貧困家庭のよくある不満をつらつらと書き並べていたけどね、記され

た事から知る限り、他の兄弟よりもよっぽど大事に育てられていたよ。その貧困の中で望み得るものを、彼女は父母から与えられていた。

だからだろうね、ハリー・ポッターというモノが手に入らないという絶望は、彼女の中でとても大きく、豚の様に肥え太っていたよ」

救済を求める声が上位者を呼び、自身を獣に変態させる。クイレルもまた命を削り、帝王に仕え、その果てに力を求め、獣となった。ならば、自らの命を捧げてでも吾子の護りを欲したならば、そうもなるのだろうか。

夏にお父様からポッターの父母についてお言葉を頂いたが、お父様はポッターの護りの仕組みが分かっていたのだろうか。

「この娘が初めて書き込んだのは8月の終わり頃だ。薔薇は赤く堇は青く……なあって、砂糖よりも甘ったるい幼気な恋心に、少しばかり年上の男として助言を続けた。苦痛だったよ。だって、50年ぶりの他者との会話だ。その相手が野望も無い、探求欲も無い、恋する乙女だなんてね。けれど、その苦痛を甘んじて受け入れる程に、僕は彼の話の聞きたかった。この娘は彼に自分を見て欲しかった。一致する利害が、精神の交わりを生み出したのさ。

そうして、この娘は秘密の部屋の開き方を知った。

全ては彼に自分を見てもらうために。

この娘は、この娘の望みの為に、秘密の部屋を開いた。僅かに僕から流れ込んだ蛇語の力を使ってね。この娘は蛇語をまだ十分に使えなかったけれど、蛇は召喚者を襲う様な馬鹿じゃない。

それから、僕の言葉通り、雄鶏を殺して血を壁に塗り付けた。彼にヒントを与えるんだと言えば、この娘は特に何の疑問も無くその通りにしたよ。「穢れた血を殺し尽くす」とか、この娘にとって過激な言葉を使わなかったせいもあるだろうし、「ハロウインの夜にご馳走も食わずに出歩く生徒は居ないよ。誰も君を疑う事は無い」なんて言うておいたからね。

その後は笑ったよ。「学校が大変なの。猫が襲われて、秘密の部屋とかいろいろが開かれたらしいの。それに、あたしもなんだか最近おか

しいの。いつの間にか、私のローブに鳥の羽がついてて、手に赤いペンキが着いてたの。どういうことだと思う？」ってね。

この娘の言いたいことは分かる。「あたしは部屋を開いただけで、蛇をけしかけたりなんてしてないのにこんな大騒ぎになった。そんなつもりじゃなかったの」そんなところだろうね。じゃあどんつもりだったと思う？ ハリー・ポッターと同じくらい刺激的な経験をして、あわよくばそれを自分が解決した事にして、彼に自分を認めて欲しかった。それだけさ。

校内を騒がせたこの2か月の事件。その全容は極めて単純だ。恋心をこじらせた、盛大な自作自演だったのさ。

継承者の記憶を持つ本。それが偶々自分の手元にあって、それを大人に手渡した。そんな事じゃ、彼には見てもらえない。だから、彼と同じ冒険をする必要が有ったのさ。彼と同じ様に冒険を経て、栄光を掴まなければならぬ、そう思っていたんだ。

でもそうはならなかった。

この娘は、猫が死にかけ、ダンブルドアでさえも手に負えない事態が起きたという段になって初めて、自分が何をしたのかを理解した。その現実を受け止め切れず、自身がやったことを正当化するために、自分の記憶と認識を嘘で塗り固めたのさ。

赤いペンキ？ もちろん、血さ。ホグワーツ城のどこに赤いペンキなんかあるって言うんだ。無からペンキを生み出すなんてことは彼女には出来ない。ああ、全くの無能という訳じゃない。才能はあったよ。血を塗る為の浮遊術も、証拠隠滅の為の消失術も、僕が入学前に教えていた事だった。薬学の陰険な課題も手伝ったし、理論だけ知っていたればいい天文学なら尚更に楽だった。僕自身、教師としての才能はあったんだろう。何せ、子供の幼稚な表現だけで書き込まれた情報から、問題点と改善方法を伝えられたんだからね。そうしてこの娘は、優秀な一年生となった。

でもそれは、彼女をより傲慢にしてしまった」

「つまり、貴公の目的とは継承者として純血以外を殺す事ではなく、ポッター少年と話をすること、か」

「成程。それで合点がいきました。あの血文字は自己顕示欲の発露かと仮定していましたが、まさにその通り。貴方はポッターに見つけてもらいたかった。ただの一年生で在りながら、学校全体に関わる事件に首を突っ込み、解決した英雄。ジネブラ・ウィーズリーの記述から貴方の中に結ばれたポッターの偶像は、そうした厄介事に多大な関心を寄せる少年という事ですか」

実際には、校長の奸計によって英雄に仕立て上げられかけた、ただの魔法族のクソガキであるが。

自身の思考に些末な横槍を入れる事で、思考の偏りを防ごうとする。

継承者の言葉はそのまま聞けば成程と思うが、全て真実である確証はない。実は眼前の少女は本に触れる事で脳を冒され、継承者の人形にされていたのではないか。そう考える事で、思考を塗り潰そうとするジネブラ・ウィーズリーへの怒りを押し留めるが、また別の思考も頭蓋の内でも響いている。

今更少女に責任転嫁をしたところで、リドルの亡霊になんの利益があるのか。クイレルの身体に直接寄生していたヴォルデモートでさえ真に操っていたわけではなかったが、ただの呪具にそんな事が出来るのか。

そう考えてしまうと、継承者の言葉はやはり道理が通っている様に思えてくる。

「その通り。確かに僕は僕が秘密の部屋を開く為、継承者で在り続けるようとする意志から生まれた。けれど、まずは僕の生存を優先しなければならぬ。そのためには、未来の僕が何故ハリー・ポッターに敗れたのかを知らなくてはならなかった。分からないのは、彼を知ろうとする欲求は、それは僕がそう作られたからなのか、生来僕が持っていた未知への探求心によるものなのか。

……想像出来るかい？ 自分が作られたものだと分かっているが、それまでの自分の記憶は完全に保持している。いつか来るべき日に備え、いつか使い捨てられる人格で在りながら、僕は一向に僕はまだ。生み出され、自分の記憶に閉じ込められたと分かった時の、僕

の混乱と嘆きは、君達には分からないだろうね。

まあ、今となつてはどうでもいいことだ。

僕は苛々したよ。ハリー・ポッターについて尋ねれば、「ハリーの周りで写真を撮っているマグル生まれがウザい。ハリーの凄さは魔法族にしか分からないのに、有名人の追っかけ気分で付きまとうなんて」とか、「今日もあのブスがハリーに纏わりついてるの。どうしたら引き離せるんだろう」だとか。僕の心中は、いつになったら僕は彼の手元に行けるだろうか、という事ばかりだったよ。ああ、「あのチビの取り巻きがあたしを睨んでる。ハリーと同じ黒髪でも、目は煤の様に真っ黒。不気味」だなんて言葉もあつたね。君の事だろうか？」

「そうでしょうね。心の底から死んでほしいと思います。そのガキも、貴方も」

ケントは表情を変えなかったが、指の骨を鳴らした。

「ははっ、元気な一年生だ。大変よろしい。

そういうわけで、僕も彼女も悶々とした日々を過ごした。状況が動いたのは、クイディッチの試合だった。誰だか分からないけれど、ブラッジャーを操って彼を襲ったんだろう？ その後の彼女の怒りは凄まじかったよ。破れるはずの無い紙に、穴が空きそうな程の筆圧だった。「ハリーが襲われたの！ どうやってかは分からないけれど、あんな卑怯な事はスリザリンの連中がやったに決まってる！ トム教えて！ あの蛇を操る言葉を」そう書き込まれた時、僕は驚いたよ。この娘の中には「自分はやっていない」と「自分がやった」が、同時に存在していて矛盾していないんだ。

イカれた精神は興味深かったけれど、面倒でもあつた。継承者が蛇寮生を襲うなんて、物語が破綻する。致命的ではない様に、それでも少しずつハリー・ポッターに足跡を追わせる。それが肝心なのに、パン屑をあちらこちらにばら撒かれては困るからね」

非魔法族を厭う割に、リドルが用いた比喩は『ヘンゼルとグレーテル』だった。この頃は未だ単なる純血主義被れだったという事か。只の優秀な少年に芽生えた悪意は誰も摘まなかった。あるいは、誰かが育んだのか。

「それで？ 何故クリービーが襲われた？」

「僕は必死に宥めすかした。「そんな高等な事は生徒には出来ない。出来るとすれば教員の誰かだ。そんな事よりハリー・ポッターに近付く方が君の願いに適うだろう。何か彼に変わった事はあったかい？」とね。そうして幾つか下らない愚痴を書き込まれた後、「あの追っかけが苦しむハリーを撮ってたの。あいつならマグル生まれだし、継承者のせい出来るでしょ？ あの時であいつを同じだけ酷い目にあわせてよ」なんて書いてきたんだ。

今度は、僕に言われたから、僕に操られたから、だから自分は悪くない。そう心の底から思う様にしたらしい。僕は確かに他人の心が分かるし、それに適う様な僕を演じてきた。だけど、こんな心の在り方は初めてだったよ。実に興味深いね。

僕はこの50年間で、穢れた血を殺す事なんてどうでも良くなっていた。そもそも秘密の部屋を開いた理由は僕が僕である事を確信する為だった。僕が生まれた理由は僕が僕で在り続けるためだ。穢れた血を殺す事は手段の一つでしかなくて、僕の本能じゃあない。強いて言うなら趣味かな。未来の僕はどうか知らないけれどね。

だから、ダンブルドアの警戒心を煽る様な事はしたくなかったけれど、「しないって言うなら、あたしはあなたを先生に突き出すから」なんて書かれたら、せざるを得ないというものだろう？

僕はそうしてこの娘と契約した。この娘が望む時、僕はこの娘の身体に宿り、この娘に代わって、この娘の言葉を蛇に伝えた。

世界を震撼させたあのヴォルデモート卿が、こんな道理の分からないメスガキに屈服している……そんな事実を、誰が信じるっていうんだろうね。君達もそうだろう？ 僕の話聞きながら、僕の話疑っている。僕の言葉が、君達を陥れるものじゃないかと。

分かるんだ。僕はそういう、人の心を読み解くのが得意だった。一般的に言えば僕の容姿は優れているし、人を惹きつける話術、仕事……何より、信念が有った。教師にも学生にも僕は好かれていたし、君臨していた。そうした環境は、僕の才能をより優れたものにした。もちろん、だから君達を口先でどうにか出来るなんて思っただけはないな

いいし、どうにかしようとも思っていない。僕が話している理由は、50年の虚無の埋め合わせさ」

トム・マールヴォロ・リドルは優秀な学徒だった。大抵の人間は、自身が帝王と関わった事を恥じ、その記録や記憶を改竄した。だが、ホグワーツでは、その痕跡を様々などころで見かけた。首席、監督生、特別功労賞といった榮譽には、どれもリドルの名が刻まれている。

「それでクリービーを襲ったというわけか」

「襲われた、だ。僕じゃない。幸いにして、あのカメラ小僧はファインダーを通してバジリスクの目を見たから石化した。僕だって、こんな段階で殺しをやるなんて計画に無かったからね。そしてその翌日、この娘は僕に何を書いたと思う？」「同級生のコリンが襲われたの！

！でも、怖いことだけじゃなくて、いいことがあったの。あたし、ハリーを傷付けたアイツを石にしたの！ハリーも喜んでくれるかしら」だよ。

ほんと頭おかしいね」

リドルの乾いた笑いが部屋にこだまする。地下深く、風の吹くことも無いだろうに、炎が揺らめいて見えた。

オドンの蠢きにも依らず、こうまでも狂う事が出来るのか。それも、紛争地帯で生きるわけでもなく、少なくとも人を殺めた事はないだろう環境で育ち、その上で自らの手を汚す事を選び、その汚れによつて心を冒す。

たとえ眼前の男の言葉が嘘であれ、その様な筋書きを描ける狂気が、怖い。

「それから何日かして書き込まれたのがこれだ。「あのトロール殺しが継承者を探してうるついで。嫌な気分。ハリーに任せておけばいいのに。ハリーだったら直ぐに解決してくれるわ。いつになったら私に気づいてくれるのかな。ああ、トム。あたし、ハリーに嫌われたらどうしよう」これを見て、僕は焦ったよ。君達はダンブルドアの尖兵で、あれが自分の手を血で汚したくないから使っている暴力装置だと思っていた。ピクシー惨殺の件は知っていたからね。」

……おっと、ダンブルドアの手駒扱いに気を悪くしないでくれ。今は君達がダンブルドアとは全く関係ないと分かっているんだ。ここにあの忌々しい偽善者がいないからね。目を塞がれている僕からすれば、ダンブルドアが目立った動きをしていないのに生徒が好き勝手に動いているなんて、君達がそうだとしか考えられなかったんだ。

嫌われたくないならばらく身を潜める様にと伝えて、僕はこの娘に応えるのを止めた。かなり不安定だったからね。事実、双子の兄が怖がらせてくるから殺したいとか、監督生の兄が気遣うフリをして探りを入れてくるのが腹立たしいので殺したいとか、恐れと怒りが万華鏡の様に目まぐるしく変わっていたんだ。何かきつかけを与えれば、たちまちに壊れかねない。その嵐の中で、この娘を落ち着かせる灯台は、ハリー・ポッターに対する執着心だけだった」

「ああ、やつぱり」

ドロテアが吐き捨てた。

継承者の言葉を聞く前から、ドロテアとケントは怒りを露わにしていた。職員室でジネブラ・ウィーズリーの名を聞いたとき、その思惑を理解したのだろう。2人だけが気付いた理由は有るのだろうか、それは今気にする事ではない。

「君は見るからにそういった事に聡そうだからね。ミス……」

「あんたに名乗る名前なんてないよ」

「そうかい、ドロテア。残念だよ」

「くっそムカつく」

先の戦闘では符牒を用いたわけでもなかったため、ドロテアの名も聞こえていたのだろう。

ドロテアの感じた苛立ちは耐え難いものだったのか、鎮静剤を僅かに飲んでいる。

「その後も何度か書き込まれたけれど、僕は無視していた。もちろん、目を通さなかったわけじゃない。本当に窮地に陥っているのに放置すれば、精神は完全に崩壊するだろう。いや、この状態を未だ崩壊していないというのは語弊があるかもしれないね。とにかく、無視している間にこの娘は安定したのか、次第に書き込まれる内容も「ハリー

があたしに笑いかけたの。私が継承者に怯えているから」とか、「ハリーがまたスニッチを獲ったの。彼が贖罪されているなんて言われているけど、あんな飛び方はチャーリーだって出来なかったわ」なんて、どうでもいいことばかりになっていった。

ところが、だ。急に錯乱した様子で次々と書き込まれた日があった。理解するのに長い時間がかかったよ。要するに、決闘クラブでハリー・ポッターは蛇語を話したと。この娘が狂乱するのも道理だね。自分がバジリスクを操った時、その言葉が聞かれていたら、何もかもが台無しだからね。

一方、僕は冷静だった。「それで継承者が分かっているのなら、君はきつともう投獄されているはずだよ。ジニー、落ち着くんだ」その言葉への返答は「ああ、ハリーはきつと分かっているんだわ！ ハリーはあたしを庇っているの！ だからあたしもハリーに応えなきゃ！ でも誰が継承者なんだろう。今はグリフィンドールの中でも、ハリーが継承者だって虐められてるの。トムには分かる？」だった。

僕はこの子の様子を知って流石に暗澹となった。元々他人に期待する様な性格ではなかったけれど、あれ程他人に自分の命運を委ねる立場を恐れた事は無い。とにかく成り行きに任せる様にと伝えたいけれど、安心は出来なかった。

それで、次に僕の方が呼び出された時には、獅子寮のゴーストと、遠くて紋章が見えなかったけれど2人の生徒が廊下の奥に居るのが分かった。蛇を呼びだして、あれを襲えと命じて、それからまたすぐに本の中に戻って、この娘の書き込みを待った。「トム、ハリーの悪口を言った連中をやったわ。ハリーもこれで助かるはず」だってさ。そんなことをしたら、ハリー・ポッターの信用は地に堕ちるだろうにね。実際、どうだったんだい」

「襲われたのは穴熊寮の2人だ。ポッター少年が彼らにけしかけられた蛇を鎮めたが、彼らは逆に彼がけしかけたものだと思い、学内に自分はポッターに襲われたと叫んで回っていた。その結果は当然、貴公の想像通り、ポッター少年による報復と捉えられた。

俺はその時気付かなかったが、継承者が狙う者は皆、彼にとって短

期的には犠牲になった方がいい者だった。ケントが気付いたのはこの頃か？」

お兄様に水を向けられたケントは、至極平静だった。否、恐ろしいまでに無感情な顔つきだった。

「ええ。彼の信奉者だろうとは。次に襲われるとすれば、グレンジャー先輩だろうとも思いましたし、実際に襲われれば僕の想像は確信に成るだろうと思いました。ですから、彼女がポッター先輩を氣遣って獅子寮に籠っている事は不安でしたし、休暇直前に僕らのテーブルで食事をしたのは安心でした。こうした事件の最中も、僕らと彼女の関係は良好に続いていると見せつけられましたからね。

蛇寮の全員か、あるいはポッター先輩かが継承者だと言われている学内で、敢えてその蛇寮の食卓で食事を摂る獅子寮生。学生全員にとって異常でしょう。そのクソガキは知らなかった様ですが、僕らは反ダンブルドアとしても名が知れ渡っているから、僕らが継承者であると言う連中も居ました。

先輩は身を挺し、僕らが継承者ではなく、継承者への抑止力である事を学内に知らしめたんです。その信頼に応えなくてはとも思いました」

単に休暇前の挨拶とはありがたいとしか思えなかったが、後輩として一步退いた場所から見えるものが有ったのだろうか。あるいは、自分がハーマイオニーにとっての防御であるとしたマルフォイの言葉に甘え、見えていなかったただけだろうか。

「へえ？ 穢れた血のくせに頭が回るものだね。自身の血の濃さだけで僕を友人だと思っていた愚物とは訳が違う。そうした純血が手元に多く居たなら、未来の僕は無様を晒すことも無かつたんだろうね。

次の標的は君の考えた通りだよ。望んだ相手を3人も手に掛け、未だにダンブルドアには何の動きもない。この娘の自信は確実になっていた。日に日に排除対象として書き込まれる名は増えていったし、その順番を考えるのが楽しみになっている様だった。いつも最初に書かれるのは、ハーマイオニー・グレンジャーという名だった」

「だから姫様はブチギれるって言ったんですよ。武器を下ろしてくだ

さい。柄が割れるくらい握りしめてますよ」

ケントの言葉に気づかされたのは、小刻みに痙攣する腕と破片の食い込んだ掌だった。口の中に血の味もすると思えば、怒りのあまり奥歯を割り砕いていた。歯の欠片を噛み砕いて飲み干すと、銃に埋め込んだ脈動血晶の影響で、すぐさまに失われた歯の辺りがむず痒くなった。

「まあ、この子の自信も長くは続かなかった。「パーシーとフレッドとジョージが言ってた。あいつらが女子トイレの前に居たって。あいつらを殺さなきゃ。トム、何とかして」これを見て、僕はこの娘にありったけの罵詈雑言を浴びせて静かな虚無に帰りたくなったよ。

結局ハリー・ポッターには近づけず、聞く限り訳の分からない暴力的な魔術師が僕を殺しにやってくる。ああ、この娘を憑り殺して逃げられたら、どんなに良かっただろう。この娘は僕が考えていたよりずっと自我が強く、互恵どころか僕が搾取されるばかりだった。

とはいえ、未だ完全に終わったわけじゃない。秘密の部屋の入口が分かったところで、誰が継承者であるかは分からない。それに、君達を殺そうにも、クリスマス休暇中で人は少ない。動けばその方が自分の首を絞める。

そう考えていたら、呼び出されてドロテアとそこの君が視界の端に居た。この娘が望むままに、蛇語を引き出された。その結果、君達は完全な死角から襲われた。振り向き様にバジリスクの目を直視した君達は石になることは無いだろう。確実に殺したと思っていれば、血を噴き出しただけ。その上、傷を負いながらバジリスクを殺したんだ。

君達も驚いただろうけど、僕の驚きはそれ以上だ。そんな魔術師がどこに居る。ヒトであるはずがない。流石に2匹目で始末出来たと思っただけ、安心は出来なかった。現場の近くでこの娘を見た者がいるかもしれない。教員か、生徒か、亡霊か。肖像画かもしれないし、あるいは醜い妖精共かもしれない。それを聞きつければ、残った者が血眼になって僕らを探しに来るだろう。そこで僕は、前にもそうした様に馬鹿な半巨人を使う事にした」

「前にも、か。他人を嵌めるのは大得意の様だな」

「いいや？ 過大評価も困るな。あれが危険な生物を飼っていたのは事実だったからね。薬学教室にある小さな薬品庫で、藁の敷かれた木箱の中に何かを飼っていた。僕が陥れたわけじゃない。あれ自身がそうなのさ。声と凶体ばかり大きな不良生徒が怪物を飼っていた。品行方正で成績優秀の監督生が告発すれば、どうなるかは分かっているだろう？」

「ハッ、成程。つまり、貴公は50年前も窮地に陥ったという訳だ。誰にも頼らず、自身の力でそうしていながら、そこに寝ているクソガキ同様、結局は誰か犠牲になる者を頼らざるを得ない程に、追い詰められた。品行方正で成績優秀の監督生が聞いて呆れるな」

余裕綽々の継承者に切り込むが、継承者は長い溜息を吐いただけだった。森番が嵌められた事は殊更に思うものも無いが、他人を弄んだ事を誇らしげに語る顔を眺めているのは不快である。

それ以上に、気になる事もあった。

「僕を挑発したところで得られるものはないよ。それは君にとって君の怒りを自己増幅させる儀式でしかない。先程の様子からすると、君はそのお兄様に甘やかされて育ったのかな？ 随分と短気だ。先輩としては、君は君の従者の言うクソガキと大して変わらない様に思うよ」

「それこそ、そうして私を挑発したところで貴公に得るものはない。自分の短気は自分で分かっているからな。私が激昂して貴公を殺めようとすれば、頼れる狩人達がそれを止めるだろうさ。畜生に堕ちるなど。凶星を突かれ、答えに窮し、暴力を恃むなどおよそ人らしき振る舞いではない。」

ただ、随分滑らかに舌を動かすものだと思つてな。私達が貴公を殺した後、50年前の件は冤罪だったと官憲に伝えるかもしれない。貴公にそんな義理は無いだろう。故に、私達にそれを伝える事は貴公にとって何らかの利益がある。それが何かを知りたくてな。気に障つたなら謝罪するが？ どうぞ続けてくれ」

怒りこそあるが、疑念を抱くだけの冷静さも残している。こうして

話を聞き続けている事こそ異常なのだ。即ち、この会話こそ何かの魔術である可能性もある。顛末を語っている様に見せかけ、実は韻を踏んで祈祷文を詠唱しているのかもしれない。お姉様やヘルマンが黙って聞いているのも、そうした兆候がないか調べているのだろうか。「ふうん？ まあいいさ。こうして僕が君達に話す理由、それは君達に僕を詳らかに伝える事さ。語っていない事があれば、君達は僕を疑うだろうか？」僕の最期の言葉を信用してくれ」なんて言葉より、一から十まで全て伝えた方が余程有意義じゃないか。僕は記憶であって、生きている人格でもある。最期が無意味であるというのは耐え難い苦痛だ。

とにかく、あれをどうにかして利用できないか。そう思っていたところで、また新しい書き込みがあった。「誰かがハグリッドを捕まえて来たみたい。これでみんな安心できるね」と。天祐とはこれを言うんだらうね。「様子を見にいった方が良い。君一人だと危ないから、なるべく多くの生徒達と一緒に行くんだ」そう応えて、僕は生徒達の前であいつが連れていかれるのを想像して待っていた。ダンブルドアは当時もあいつが継承者ではないと見抜いていた様だし、僕がそうだと確信していた。ディペット爺さん……つまり、当時の校長は僕を疑いもしなかった。

夏の頃、この娘からあいつが学校に居るって聞いたときはダンブルドアの正気を疑ったよ。あいつはダンブルドアにとって優秀な手駒か、もしくは偽善を満足させるための道具なんだろうな。だから、ダンブルドアはあいつの無実を主張するだろう。あいつを継承者だと疑っている生徒達や来校者の前でね。それは生徒達を失望させるはずだ。こうして2か月の間に何も出来なかった老人が、明らかに不審な半巨人を庇う。もしかすると、ダンブルドアさえ追いやる事が出来るかもしれない。そうすれば、僕もハリー・ポッターに会えるかもしれない」

「そう思っていたら、殺したはずの奴がその生徒達の中に居た、という訳だ」

「そうだ。この娘はついに、完全に壊れた。僕も全てが終わったと

思ったね。誰のせいだと思っっているんだか、書き殴られる僕への恨みに何も返せなかった。余りにも虚無感が大きすぎた。次第に現実逃避の言葉が書き込まれるようになった。「今日のクリスマスパーティーは楽しみ。でも、トイレの工事があるから広間と寮以外は使っちゃいけないだつて。なにも今日やらなくてもいいのよね」その書き込みで、僕は秘密の部屋の全てが見透かされたと確信した。入口だけじゃなく、部屋の仕組みさえも完全に打ち破られると怯えた。だから、継承者としての僕の生存の為に、全てを賭けて君達を呼び込み、死闘を演じてもらった果てにこの娘を殺してもらおう他無かつた。小汚い日記がこの部屋のどこかに転がっていたとして、それに気付く人間はそういないだろうからね。

この娘にはこう伝えた。「ハリーが助けてくれる。だから秘密の部屋で待ってよう。ハリーに来てもらうために、最初に文字を書いた壁に、文字を書き加えるんだ。それから、ハリー以外の人が来たらみんな殺そう。そんなところにハリーが助けに来てくれたら、どんなに素敵なことだろうね？」そんな言葉を受け容れてしまう程、この娘はもう何もかもが分からなくなっていた。

そうして君達が来た。ダンブルドアも伴わずにね」

リドルの賭けとは、蛇の多重召喚と飽和攻撃。だが、お姉様とドロテアによつてもたらされた情報に基づいた対策は、それらを悉く打ち破った。

「激しい消耗だったよ。僕から蛇語を吸い出し過ぎて、この娘は魔力欠乏で瞬きも出来ない程に衰弱している。君達の何人かは死ぬだろうと思っっていたけれど、まさかみんな無傷とはね」

リドルは長い溜息を吐いた。肉体を持たないのであるから話し疲れる事も無いだろうが、精神は大いに疲弊したらしい。

「それは残念だったな。それで貴公の話は全てか？」

「思い残す事は無いよ」

「いや、俺には幾つか質問がある。まず、何故50年前マートル・ワレンだけを殺した？」

「何かと思えばそんな事か。事故だよ、事故。初回ならともかく、ダン

ブルドアに睨まれていて殺しなんてするわけもないだろう？ 初めはバジリスクの魔眼を受けても死ななかつた。確かに石化の力はあるとされているけれど、文献で多く語られるのは死の魔眼だ。その違いは何だろうか。ああ、何かを通して眼を見た者は、魔眼の効果も薄れるのか、そう気づいた。なら、どれだけ魔力を注げば、どれだけ目を合わせたら死ぬのだろうか。色々試しているうちに、ホグワーツ閉校の話が出てね。そうしたら僕は忌々しいマグルの世界に帰らなければならぬ。それは嫌だった。だから、部屋を閉じることにした。

そうしたら、あの陰気で惨めな女が現れてね。忘却術を使えばよかつたけれど、咄嗟に僕は蛇を呼んでしまった。そのせいで、これから犠牲者が出なかつたとしてもホグワーツは永久に閉ざされるかもしれない。亡霊になつたと聞いた日、僕は禁書庫に監督生権限で入室して亡霊を殺し切る方法を探したよ。僕の顔を見られていたら……そう思うと、何を食べても味がしなかつた。

あんな卑しい穢れた血に、僕が追い込まれる。その屈辱は魂を引き裂かれる様なものだったよ。その怒りと、いつか再びここを開くという決意を基に、僕は作られた。僕がとこしえに、揺るぎなく継承者で在ろうとするためにね。

「お次は？」

砂糖と塩を間違えた、そんな気軽さで殺されたマートルの無念はいかばかりか。これを彼女や遺族に伝える事は、何の慰めにもならないだろう。

「ジネブラ・ウィーズリーはどうやって本を手に入れた？ 誰かを唆し、彼女に渡る様にしたのか」

「知らないな。言つただろう。初めて僕に書き込んだのは彼女だと。それに、自分で分かつている事を質問するのは関心しないな。そんなことが出来るなら、貧困家庭の末子なんかに渡るよりよっぽどいい条件がある。学校関係者であれば教員でもいいし、理事でもいいし、名家の子供でもいい。ああ、魔法省職員でもいいな。何か理由を付けて来校できれば、公務として調査が出来るからね。もつとも、君達こそ、そうして寮監の後ろ盾を得て調査した様だけど。

次はもつと楽しい質問を期待しているよ」

お兄様を揶揄う継承者だったが、お兄様は思案顔だった。先程までの継承者の言葉が真実であり、継承者の傍らで眠る少女が理不尽を撒き散らしていたとして、より上位の存在があれば同様の事件は続発するだろう。継承者は自らを作られた存在と言い、50年間外界と隔絶されていたとした。即ちそれは、自らと同じ存在が幾つもあったとして、それを知り得ないということである。

自分が自分であるという根拠を、自身の記憶にしか求める事が出来ないならば、自分の唯一性は自身には証明出来ない。50年前までの記憶だけを記録したのだと仮定すれば、発言に矛盾は無い。眼前に在る継承者が実は『年刊実録ヴォルデモート』の第1冊目である可能性は否定できない。では、その頒布者は何者であるのかをお兄様は知りたかったのだろうか。

「何故貴公の姿が見える。貴公の話によれば、呼び出された時にしか外に出る事は出来ないのだろうか？」

「良い質問だ。これは僕にも説明が難しい。祭壇と僕自身に残る最後の力を振り絞って…….というところかな。あるいは、君達が殺した蛇を構成する魔力が漂っているお蔭かもしれない。検証はしてみたいけれど、とりあえずは僕の意思の力としておこう。魔力とは、究極的に言えば意思の力だ。明確な想像が変身術の出来を左右する様に、僕は最期を悟り、僕の意思を強固なものにした。僕は、僕を破滅に追いやる連中の顔を見ておくことくらいはしておきたかった。それがもたらしたのは、想像以上に有意義な時間だったよ。後は僕を闇祓いなリダンブルドアなりに引き渡すのだろうか？ そいつらには何一つ語るうとは思わないよ」

「最後に、少年達はどこだ？」

目的は飽くまで秘密の部屋の破壊である。しかし、救出出来るのであればすべきである。この部屋のどこかに寝そべっているのかもしれないし、骸となっているのかもしれない。寝所として寝心地がいいとは思えないが、霊廟とするのであれば見事なものだろう。

「何だい、それは」

お兄様の問いに、リドルの幻影は片眉を吊り上げ、初めて困惑した表情を見せた。

「ハリー・ポッターとロナルド・ウィーズリー。そこのジネブラ・ウィーズリーと共に姿を消した学徒だ」

「知らないよ。むしろ僕が知りたい。部屋の入口を開いたのはハリー・ポッターの蛇語じやないのかい」

「まあいい、とぼけたところで探せばいいだけだ。あの通路のどこかに居るとすれば面倒だが」

「いやいや待ってくれ。この娘もそうだけれど、僕に物理的に誰かを運ぶ力なんてない。この娘に書かせた文言は、この娘についての事だけだろう？ 第一、ハリー・ポッターをどうこうできるなら、この数ヶ月の間、僕はわざわざ狂人に付き合つて何をしていたつて言うんだ。

君達が何を信じるか知らないけれど、君達の神に誓つて言う。僕は知らない」

これには狩人一同が顔を見合わせた。随分と焦っているリドルの様子から、嘘であるとも思えない。お姉様も嘘ではないと領き、ヘルマンとケントは首を傾げた。では何者が連れ去つたのだろうか。

「この娘が口を開ける様になった時、きつと言うだろう。自分は悪くない、自分は操られていただけだと。けれど、僕は操ってなんかいないし、そんな事が出来るなら、最初から僕をハリー・ポッターに渡ししている。僕がこの場で語つたことを信じられないとしても、君達がこのに至るまでに知った事はそれを証明しているはずだ。だから、改めて言う。僕は知らない」

先程の態度と異なり、薄らとした笑みを浮かべる様子もなかった。「いずれ分かる事だ。聞きたいことは全て聞いた。後は部屋を閉ざし、その少女を連れ帰り、貴公を持ち帰るだけだ」

「それなら、その娘が祭壇の中心だ。君達程の術者であれば、術式は見えて分かるだろう」

「潔いことだな」

「勝者へのせめてもの誠意さ」

お兄様はヘルマンに頷いてみせた後、ジネブラ・ウィーズリーの腰

掛ける椅子に近寄った。この構図に、狩人ならば誰しもが思うものがある。

時計塔のマリアである。

「さあ、僕を終わらせてくれ。もう50年の虚無にも飽きた。僕を生ま出しておきながら、僕にも劣る僕に何も思うものはない」

お兄様はそれに答えず、本に触れた。

瞬間、本からは黒いインクが迸り、リドルの幻影は苦悶の叫びを上げながら靄となり、虚空に消えた。ゴースの遺骸から立ち昇るあの靄と同じ様に思え、そして昨夏にクイレルから飛び出したヴォルデモートの靄と同じだった。

「お兄様、何が……？」

手に付着したインクを払うお兄様。腕を振る度に、床に散ったインクが水音を立て、それは銀の靄となった。

「ああ、案ずる事はない。予想した通り、本に触れた瞬間、あれは俺に侵入しようとした。だから、逆にあれの言うところの記憶の世界に侵入し、殺してきた。独自の攻撃魔術や空間改変、疑似生命など、中々新鮮な体験だった。今が18時だから……潜っていたのは2時間弱か。」

語っていた通り、優秀な魔術師だったのだろう。元々そうして作られた存在であったとはいえ、上位者ではない者が自らの内に夢幻世界を作り上げるとはな」

懐中時計を見ながら、お兄様は事も無げに答えた。

やはり、先程までの会話は心の隙間に忍び込むためのものだったのだろう。ポッターを知らないとした言葉の真偽は不明だが、狩人の信用を得ようとしたその必死さは、あれの言葉で言う精神の交わり、即ち交信の為だったのだ。

となれば、その術を直に受けたお兄様には、心苦しいが疑念が湧く。「本当にお兄様かしら？ それとも、お兄様の皮を被った継承者かしら」

「……まあ、それも必要か。俺はディルク。ボーンの血族のうち、アデーラ女王の下に生まれた7の兄弟の末弟。血を恃まず知を恃み、剣

を振るう狩人だ。これでいいか？」

「ヘルマンは？」

「そうですね……継承者が全く気にしない様な、些細な記憶の確認を。今夏、ダイアゴン横丁に行った時、どこで食事をしましたか？」

「赤龍亭。最初はテラス席に案内されたが、イングリットに見惚れた連中に席を譲られ、屋内で食べた」

「では次に、今期貴方が初めに口説いた相手は？」

「……なあ、確認と称して悪ふざけしているだけだろう」

「いえ。継承者はそういった記憶に触れないでしょう。読むとすれば、僕らにとつて重大な意味を持つ、初めて武器を握った日や、仮初の死、そして夜明けを迎えた記憶の方がより表層に浮かんでくるはずです。そうではなく、こうした日常の方がこの場に於いては相応しい」

ヘルマンの言葉はもっともらしく聞こえるが、口の端が歪んでいた。

「真面目な質問をしているつもりなら、そのにやけ面を隠せ」

「いいから、答えろよ」

「ダフネ・グリーングラス」

「大正解です……ふふっ」

言い終わるや否や、お兄様はヘルマンに走り寄り、笑いをこらえきれなかったその顔に拳をめり込ませた。語った内容の整合性や、ヘルマンに対する態度は間違いなくお兄様だろう。

「ダフネ様、お綺麗ですよね」

「だよねー。あたしもイングリットもお気に入りに入り。何食べたらあんならるんだろ」

「それでいて可愛らしいところもありますからね。茶を点でて差し上げたら、茶碗転がして慌ててましたよ。初めての事で緊張してらしたんでしょうね」

ケントとドロテアがしみじみと呟き、頷いた。友人が褒められているはずだが、なんとなく疎外感を覚えた。

「さ、お兄様もヘルマンも気が済んだかしら。それとお兄様？ 継承

者の言葉はどこまでが真実だったのですか？ お兄様にそうしようとした様に、心を冒す事が出来るなら、何故あの娘にはしなかったのでしょうか」

「奴は夢の中で「あの娘がもう少しまともなら、こうはならなかった」と。50年分の記憶を見たわけでもないが、ここ数か月の記憶の断片では、やはりそうした心を弄ぶ能力は無い。出来るのは寄生だ」

お兄様は輸血をしながら鷹揚に答えた。夢の中での戦闘であったとはいえ、精神と魔力は疲弊する。萎れた草木に水を注ぐ様に、飢えた虫達に栄養を注いでいる。あるいは茶や煙草の一服といった具合かもしれないが。

「昨夏のクイレルに対するヴォルデモートがそうであった様にですか？」

「ああ。蛇語という知識を与える代わりに、魔力……あるいは生命を吸い上げていたのだろう。ああして姿が現れていたのは、この場に満ちる魔力か、あるいはこの少女から十分に力を吸い上げたか。先程俺達に蛇をけしかけたのが、結局どちらの意思に因るものかは分からない。少女が発狂した時点で、継承者の意思と少女の意思は最早分かたつ事が出来なかったのではないかとも思う。そして、完全に衰弱したところで、あれは遂にその枷を解かれたという訳だ。

そうして力を得て、遂には成り代わる事が出来る様になった。が、継承者の少女に成り代わったところで、牢獄にぶち込まれるか杖を奪われ非魔法界へ放逐されるか。ならばと俺の心を本の中で殺し、俺の死体に自分を浸み込ませようとした様だ」

「あら……上位者に成り代わろうなんて。お寒いこと」

「魔力や智慧を吸えたところで、脳が理解できるんでしょうかね。未だ人であった時のアリアンナ様から受ける血の施しでさえ、特別な血の力を得る。ただの魔術師が今のポーン家の血を啜ってまともでいられるとも思えません」

「気になるなら、お気に召すままに」

お姉様がヘルマンに向き直り、自身の首筋をそつと撫でた。同じ女でさえ喉が鳴る様な仕草だったが、ヘルマンは顔を顰めただけだっ

た。

「遠慮する。それよりドロテア。さつきから地べたに座ってるけど、部屋の術式は分かったのかい」

「んー……あたしの在学中じゃ無理って事は分かった。細かなところまで完全に解析するのは時間かかりそう。ビルゲンワースの専門職集めても、4, 5年どころじゃないと思う。記述式も文言も古すぎるし、スパゲツティみたいに複雑に絡み合ってる。

んで、なんとなくそう思うってくらいの話なんだけど……これ、本当は蛇を召喚するための術じゃないんじゃないの？ どつちも古い時代のもものだけど、蛇の方はなんか後付けくさいっていうか、紙の余白があったから無理矢理書き込んだって言うか、銃に付属品付けましたみたいなの？ 古文詳しくないけど、使われてる文体もチョーサーとシェイクスピアくらい違う気がする。

……そもそもさ、その入口開く前に、これって本当に防衛施設？ って話したじゃん。やっぱり違うと思う。ここに来るまでの回廊とかもさ、敵は絶対ぶつ殺す！ って感じじゃなかったじゃんね。防衛施設って考えるなら、あの入口も合言葉とか罫とかが無いなんておかしいしね」

「ふうん……確かに。蛇語なら何でもいいなんて、余りにもふざけている。むしろ逆なのかな。蛇語が不得手であっても、開く様にした。蛇語が使えない継承者の為に……いや、それも飛躍し過ぎか。

「デイルク、イングリット。分かりますか？」

「俺もざつと見たところではドロテアと同じだ。そもそも、継承者とは俺達が考え……いや、伝えられている者ではないのではないか？」
「私も術式は分かりませんわ。けれど、ここが何のための場所なのかは、おおよそ」

「と言つてよ。」

お姉様は彫像の持つ杖、そこに絡みつく蛇を見上げた。

「多くの神話がそうである様に、蛇は死と再生、そして永遠の象徴……ここは死者を悼み、祀り、そして継承する場。亡くなった同胞から魔力を継ぎ、生命を継ぐ。私達と同じですわ。」

学祖スリザリンは、ある種の医療者だったのでしよう。この部屋……いえ、聖堂は、継承によって死を克服しようとした、その試み。そして、その意志と教えを継ぐ者を、継承者と。

……迫害か、戦禍か、悪疫か、いつしかその教えはどこかで歪み、忘れ去られ、敵対者に向ける剣をにらぐ、秘密の部屋となった。

この涼やかで可愛らしい蛇の像。今日に伝わる部屋の伝承の様に、魔力を持たない者への憎悪と怨嗟では、これを作れるとは思えませんわ。死者がとこしえに生き続ける事を願い、遺志を後に続く者への餞とする、死者への敬意と感謝の表れでしょう」

先達は皆、新しい狩人に告げる。死者に感謝と敬意のあらんことを。

「成程。証拠はないけれど、僕もそうであつたらいいなとは思う。今の獅子寮の連中なら「死体から魔力を得るなんてうえー、だぜ」なんて言いそうだけど……いや？ あるいは、当時からそうだったのかもしれないね。だから、こんな地下深くに作られ、忘れ去られた」

「ビルゲンワースは正しかつたんですね。秘密の部屋は後の世に作られた概念であり、継承者とは血脈ではなく思想を継ぐ者、怪物とは魔術儀式。細かな部分に差異はあれ、報告書の通りじゃないですか。案外、調査員が来たら解析もさっさと終わるかもしれないですね」

「評価はどうあれ、英国魔法界に於ける大発見だ。誰が暴くかは分かんないが、いつかこの場所に陽が射す日が来るだろう。学祖の教えが、優しく、温かいものであることを願おう」

お兄様が石像に向き直るのを見て、皆横に並び、狩人の一礼を捧げた。

「ドロテアも気が済んだか？」

「はい。トイレで億万長者の夢は遠のきました」

「それは残念だったな。いつの日かそれが成つたら、今度は貴公が赤龍亭で奢ってくれ。」

さて、戻ろう。少年たちの搜索が終わってれば、宴には十分間に合うだろう。で、念のため俺が本を持つとしてだ……気は進まないのは分かるが、誰がこの少女を運ぶ」

空気が一気に陰鬱なものになった。むしろ、この話題が出るのを先延ばしにするために、敢えてヘルマンがお兄様を揶揄った様にも思える。

「誰かが先に戻り、教員を呼んではいかが？」

「また入口を開くのが面倒だ。ポッター達の搜索が途中としても完了しているとしても、教員にそんな余力はないだろうね。呪って歩かせますか？ 制御は面倒ですが出来なくもないでしょう」

「ここで蛇を召喚して、啞えて持つてつてもらおうよ。腿に穴が空いたくらいなら治癒魔術で直ぐに治るし。継承者の言葉が本場で、ディルク様の感触が確かなら、正直誰も触りたくないでしょ、こんなの。禁域の森の恐ろしい獣と大差ないっていうか、それ以下じゃん」

「ドロテアに同じく。浮遊術でもよければ私が。勢い余って高い所へ逝ってしまうかもしれません」

巨体を浮かばせる星の娘を素に作られた杖である。子供一人を弾丸の様に射出するなど造作もない。

「……どうしてもというなら僕が抱えますよ。後輩ですし。イングリット様は最後に入口を開く役割ですし、ドロテア先輩はこれの被害者ですし、ヘルマンはディルク様の次に疲れていますし、姫様はブチギレていますし。あ、その代わり笛は姫様がお願いします」

「私が怒り狂っていると言うなら貴公もだろう」

「僕は武器を壊す程じゃありません」

「なら任せる」

アクロマンチユラ

ケントは無表情で小ウィーズリーを縛り上げ、麻袋に入れて担ぎ上げた。「トウメルの人攫いか」と問えば、「トナカイも居る事ですし」と、ドロテアに調子を合わせた。無論、ふざけているだけでもない。目が覚めた時、何を仕出かすか予想が付かない為である。お姉様でさえ、その乱雑な運び方に異を唱える事は無かった。

「あら、誰も死んでないの？ それとも、その袋の中に在るのが死体？」

「いいや、生きている。辛うじてな」

「残念」

「気になつてたなら見に来れば良かったんじゃないの？」

「言つたでしょ。クソの行き着く先なんて見たくないもの」

マダラスの蛇の背に乗って配管を登り、柱の仕掛けが開いたところで、マートルに声を掛けられた。壁や床が意味を為さない亡霊にとつて、それは立つていると言つて良いものかは分からないが、とにかくトイレの入口に居た。

「それで？ 私の死因は分かった？」

「ああ。やはり継承者によるものだった。バジリスクという蛇があつてな、そいつの目を見た者は死ぬ。貴公が見たのはその目だ」

「ふーん。分かっちゃうと何だか生きがいも無くなった感じね。死んでるけど」

「冥土に行くなら教えてくれ。その前にチーズを供えてやる」

お兄様はマートルに全てを伝えなかった。嘘ではない。真実を全て詳らかに伝えたところで、それは嘆きのマートルをより嘆かせるだけだろう。

「そういえばポッター達を知らないか？」

「ポッター？ ヴォルデモートとかいうのを殺した男の子？ 聞いたことはあるけど知らないわ。そんな有名人が私のトイレに来るわけないでしょ」

「ふむ。見たことはありそうなものだが、男子生徒の顔と名を一々覚

えているはずもないか」

学内を2度騒がせた獅子寮の男子生徒であろうと、亡霊にとっては大河を流れ行く芥の様なものらしい。否、生者であれ使者であれ、究極的に言えば他人とはそういうものだろう。おそらく、過去のヤーナム人もホグワーツに歴史を刻んだ事だろうが、狩人が知られていないという事は、卒業生達にとつては騒がしい学校生活のほんのひとかけらとして沈んでいったのだろう。マートル・ワレンの死を忘れた様に、秘密の部屋を忘れた様に。

「あんたらさつさとシャワー浴びた方がいいわよ。見ただけで埃と黴だらけだもの。ここも掃除していつてほしいくらい」

「ご忠告どうも」

墓所カビの様な呪的性質があるかもしれない、そう言つてドロテアとヘルマンがフラスコの中に付着物を閉じ込めた後、狩人はそれぞれの服を魔術で清めた。とはいえ、熱いシャワーを浴びたいことには変わりない。

†

職員室の扉を開けると、狩人の異様な風体に驚かれはしたものの、ややあつて拍手を受けた。数が少ないのは、広間で未だ来ぬ襲撃に備えている教員も居るからだ。

「失踪者はどうなつたのです」

その中で、副校長は表情を緩めることは無かつた。寮監としての責任は秘密の部屋が破られたとして果たされるものではない。

ケントはお兄様に目配せを受け、麻袋を床に置いた。

「ジネブラ・ウィーズリーです。死んではおりません。手を下してもおりません。殺したいくらいですが」

「女生徒にその様な仕打ちを!? なんということを!」

「近づかないでください。此度の事件の首謀者を継承者と言うならば、これは継承者らの一味です。いつ牙を向くか分かりません。どんな事情があれ、慰めを与えるには未だ早い。」

それより、少年達は?」

副校長の反応は予想していた通りであつた。生存が絶望的な犠牲

者であると思っていれば、麻袋に包まれて虜囚の如くに運ばれていたとなれば、悲鳴を上げるのも道理である。とはいえ、ケントに横抱きで運べとは、どんな拷問を受けても言いたくはなかった。

見回すが、小ウィーズリーへの扱いに衝撃を受けた以上に、教員達の表情は曇っていた。

「やはり、継承者の言葉は真実だったという事になりますね。既に始末していたという可能性もあります」

「彼らを殺していたならば、同様にこの娘を生かしておく必要もあるまい」

ヘルマンとお兄様が交わす言葉を聞く度に、教員達の顔は暗くなっていくが、2人はわざとそうしている。狩人が少女を不当に扱っているわけではなく、理由があるために拘束していると言外に主張しているのだ。

「さて、ポッター達の搜索はともかくとして、依頼主に報告しなければ。寮監はどちらにいらっしやるのです？」

「……校長室です」

ヘルマンの非情な言葉に副校長は怒りを覚えた様だが、教員達は秘密の部屋に何も対処できず、ポッター達の失踪についても何ら手掛かりはない、そうした状況でヘルマンに何を言えただろう。

副校長の言葉に、お兄様は「ならば独自の判断で動くか」と、即断した。秘密の部屋は閉じられているのだから、さしたる凶事に巻き込まれているわけでもないだろう。そう思いたいが、ホグワーツは魔界である。校長と問答を交わす余裕は時間的にも精神的にも無い。

「ディルク、何か継承者からその他の協力者の話がありましたか？
つまり、失踪者もまた継承者の可能性があると思えますが」

「無いな。あれの言葉通り、あれは少年達とは全くの無関係だった。望みとは真逆に、可哀想な程にな」

「なら、秘密の部屋とは全く関わりのない別の襲撃者が居て、ポッター達を襲った。この線は？」

「クリスマスパーティーの余興には楽しい見世物だろうな。それで蛇寮が疑われ、寮監が校長に呼ばれたか？」

お兄様も考えるのが面倒になっているのだろう。継承者ではない何者かとする、想定しなければならぬ事物が多すぎる。

「森番が連行され、そちらに目が向いている以上、襲撃には都合が良いですからね」

「そこから考えてみましょう」

お姉様がケントの言葉に反応した。

「あの後、校長があの子達を城に連れていったでしょう？　その後、彼らはどうしたのかしら」

「僕らはそのままトイレに向かいましたね。ドロテア先輩達は、どうだったんです？　身体が動かせる様になって、ヘルマンと話をして、それでトイレに来たわけで、その間に森番が連行されたって事は誰かから聞いたんでしょう。ポッター先輩達の事は聞いてたりしませんか？」

「何も無いな。ロックハートが上機嫌で「あのハグリッドが犯人だと私は分かっておりましたとも——ええ、ええ。後は秘密の部屋を封印するだけです。私にかかれば秘密の部屋はもう見つけたも同然です——あと、ほんの少し、皆さんの信頼を分けて頂ければね」と」

「何故ロックハートにキレてるのかと思っただらそれか」

「ついさっきまで倒れていたドロテアの前でそれを言う神経はどうなってるのか、頭を開いて見てみたい気持ちでしたよ」

「まあいいじゃん。多分あたしが犠牲者だと思わなかったんですよ。クリスマスカードを送らない女生徒の顔と名前なんて覚えるつもりもないんじゃない」

ドロテアの機嫌が良いのは、ヘルマンに氣遣われたせいだろう。お姉様が顔を背け、小さく笑っていた。

「大層な自信家かしょうもないホラ吹きか。放っておけば、何の事前知識も無く素手でバジリスクを殺したとか言い出しそうですね。それで、偉大なる教授様はどちらに？　まさか僕らが見つけたのとは別に秘密の部屋があるなんて話でしょうか」

「私達が先程こちらに参じた時にも居なかったな」

教授達に目を向けると、誰一人として視線を合わせなかった。

「何か為さったのですか」

「口を開けば益体も無いどころか腹立たしいことばかり言うものから、皆さんが来る前に追い出したんです。ヤーナムの彼らが秘密の部屋を見つけたのだから、早く怪物を倒す様にと。その後、壁に文字が増えていく事を知り、教員が集まってみても、彼はここに来なかったのです」

フリットウィック教授がばつの悪そうに言った。その行いは別段恥じる事でもあるまいが、同じ教育者という立場にあれが居る事が恥なのだろう。

「そうですか。思考の邪魔になっただけでしたね。では、あれは忘れてポッター達の事について考えましようか」

「待て。森番が引つかかる。そもそも継承者は森番を利用しようとしたのであつて、森番は本来今年の騒動に一切関係が無いはずだ。では何故森番が気に掛かる……森番が何だという？」

……そうだ、去り際に少年達に言葉をかけていた。そして、城から消えた少年達。この符合は無意味ではあるまい」

お兄様の言葉に、記憶を辿る。

「お兄様、森番は「お前らが蜘蛛を追っかけるみたいにな、解決の糸口を掴んでくれれば、俺は直ぐに帰ってこれる」と」

「そうか、それが比喻ではなく、本当に蜘蛛だとすれば？」

「継承者は「あれが危険な生物を飼っていたのは事実だった」とも言うていましたわ」

「校長は疑いの晴れぬまま、彼を森番として置いた。そして「生徒達を森に入らせず、森の獣たちを城に入れさせぬのはハグリッドの仕事」と語った……森番が何を育てていたのかを知っていた？」

「ソフィアお婆さんは「怪物を馴致するにあたっては刷り込みを利用する他に方法は無い」ってね。森の中で、森番だけに従う獣が生きているって事だね」

「そして、アウレリアお姉様はかつて森の中でアクロマンチュラに見えたという」

結合する。幾つもの断片が結合していく。校長がこの2か月の間

に何もしなかった理由も、外部の介入を頑なに拒んだ理由も、森番への疑いに何一つ論拠を挙げずに擁護しようとした理由も、全てを説明してしまえる動機がある。

それは、罪の秘匿である。

時計塔のマリアは、座して何を想ったのだろうか。夢の中とて血に酔わず、狩りでもなく、人を殺め、秘密を護る。それ程までに、彼女の隠した何かは、自身にとって、自身が想う誰かにとって、大切なものだったのだろうか。

「貴方達は何を言っているのです？」

「副校長、おそらく少年達は森にいます。彼らは秘密の部屋を解き明かす導きを蜘蛛に見出した。そして、どうやってかは分かりませんが、それが森に居る事を突き止めた」

「50年前に怪物とされた蜘蛛は森に逃げたか、森番が逃がしたか。そして森番はそれを今日に至るまで森の中で育んだ。故にこそ、森番が継承者でない事の証になる」

「アクロマンチユラ。ケトルバーン教授ならお分かりになるでしょう。あれに石化の能力は無い。そして、人肉を好む習性から、マートル・ワレンが無傷の死体で見つかるはずもない」

部屋の隅に居たケトルバーン教授はこめかみを叩きながら独り言を始め、そして頷いた。

「ああその通りだとも。言われてみれば、確かに犠牲者は皆バジリスクに襲われたものと同じだ。アクロマンチユラのものではない。しかし、危険生物なんて飼いならせんよ。飼いならせぬから危険生物として定義付けられているんだ。そんなことが出来るんなら、私はこうして義肢だらけになっていないだろうかね」

「森番はどうやってか50年前に城の中で孵化させ、刷り込みが起きた。それで自分だけは攻撃されない様になつてるんでしょう。森番は「あいつは良い奴なんだ！ ハリーがあいつとちよっぴり話してくれば、俺じゃねえってことぐらいすぐに分かる！」くらいにしか考えてないと思いますよ。蜘蛛にとっては飼い主が気を利かせて活餌を寄越したつてところでしょうか」

ケトルバーン教授の言葉に、ケントがのんびりと応えた。その暢気さはどこから来るのか分からなかったが、太刀を検めているあたり戦闘になる事は覚悟しているのだろう。

「いえ、しかし……ハグリッドがそんなことをするとは」

「副校長、それ本気で言えますか？ 善悪と結果が一致しないなんて、大人ならよーく知ってると思いますけど。そこに転がってる1年生もね、もう片方の継承者によると本人に罪悪感無いらしいですよ」

「森番は保身か、あるいは彼らにだけは潔白を信じてもらいたかったのでしょうか。」

……幼気な子供に眩い導きの光を与え、それが実は残酷な怪物の欺瞞の糸だなんて。寒気がします」

お姉様が吐き捨てる様に言った。

昨年の件からポッターとウィーズリーに対しろくな感情を持った事が無い。だが、そういった感情を漂白すれば、現在の状況は巻き込まれただけの子供である。

「……なら、何故彼らは私達教員を頼らなかったのでしょうか。その結果がどうなるかは、昨年いっばいで分かっているでしょうに」

「昨年で思い知ったからでしょうか？ 教員の用意した遊園地で親の仇……それも、教員の後頭部に寄生する醜く腐臭塗れの老いた愚物と向き合う羽目になったのですよ？ ポッターがどう思っているのかなど知った事ではありませんが、さして興味も同情もない私からしてみれば彼が教員を信ずる理由などどこにもありはしないでしょう。」

ハロウインの夜、衆目の前で連行し、学校中から継承者として疑われることとなった。継承者ではないと話しても、教員達は自分を信用してくれなかった。被害が増え、校内には狂気が満ち、自身にさえ特別と分からなかった蛇語の才を恐れられ、獅子寮生からも疑われる始末。そして、森番が連行されるのを、誰も止められなかった。教員の誰が信用できましようか。

異端者狩りは手続きを以って為された狂気です。ポッターへの根柢なき疑いを、連行と聴取という手続きによってハロウインの夜に作り上げてしまった。それを放置したことは、ポッターが火炙りにされ

ることを許したと同じ事です。もつとも、私達も森番を火炙りにする手伝いをしたわけですが。

ポッターと森番は竜の違法飼育に関わる仲で、その隠蔽まで請け負いました。年度末には亡き父母の写真の入ったアルバムを贈られてもいた様です。その森番が連行され、その窮地を救う手立てがあると
いうなら、それが欺瞞の糸であれ、その輝きに飛びついた事でしょう。

……ああ、分かりました。ロックハートの居所も。彼らと同じでしょう。ポッターは教員を信用せず、級友からも疑われている。ところが、ロックハートは別だ。ロックハートはポッターの事を、自分の添え物の様に扱っていた。あれの無能が分かってはいても、彼にとつては大人でしょう。おだてれば動く肉の壁程度には役に立つと考えたはずです。

私達が失踪の報を受けて一時間半。連中が生きているならば、とうにここで森番の潔白を証明しているのではと思います。そうではないので今頃は腹の中の肉団子でしょう」

ハーマイオニーを通してポッターの置かれた状況は分かる。よくもポッターは精神を病まなかったものだ。あるいは既に病んでいるのか、それとも日頃の寮監による理不尽が精神を強めたのか。

真に蜘蛛の餌食となつているならば一応の同輩として花を贈るくらいはしてやろうとも思ったが、嫌いな相手に贈られたところで侮辱にしか思えないだろうと考え直した。

「マリア、そこまでだ。副校長が心労で倒れる。副校長、彼らが森に向かったとは俺達の推測でしかない。彼らが城のどこかで蜘蛛の巣を破いているだけかもしれない。それはともかくとして、アクロマンチュラは狩つていいだろうか。少年たちが一応は秘密の部屋の解決の為に動いたのだ。騒動の一環として請け負おう。

……改めて状況を整理すれば、頭が震えそうだ。人を容易く殺める危険生物が学び舎の敷地を跋扈しているなど、教員の後頭部に闇の帝王が寄生しているのと同じくらい冗談にしか思えないのだが」

「彼らが無事なら連れ帰りますし、そうでなくても切れ端くらいは拾って帰りますよ。大腿骨や頭蓋骨は硬くて敬遠するでしょうから」

「ヘルマンも止める。副校長に恨みでもあるのか」

「まあ、個人としてどれだけ努力されたのかは知りませんが、ポッター失踪は教職員の怠慢も一因だ。面倒が増えた事は非常に憤っています。ですが、秘密の部屋と森番の罪の秘匿を除いても未だ何か足りない。去年と同様に、裏に校長のポッターへの執着を感じます。」

イングリットも何か言いたげだね」

「校長は大臣達に森番の潔白を訴えていらっしやいましたが、その理由を説明なさらなかった。いえ、「ハグリッドを連れて行ったところ」で事件は解決せんよ」と仰った。無実だとは一言も口にしていらっしやらなかった。

校長は、知っていたのでしよう。森番が50年前から今日まで飼育しているのは、アクロマンチュラであり秘密の部屋の怪物ではないと。

ポッター君達の危機を森番の責に帰すならば、校長も同じだけ罪深いと言えますわ」

蜘蛛狩りに校長の意向も関係ないのだろう。副校長は力なく頷くだけだった。

†

「何故アウレリア様は生かしておいたのでしようね」

ヘルマンが枝を躲しながら口を開いた。

連中は蜘蛛を追う為に徒歩だったのだろう。昼間まで降っていた雪に、城から森に向かう3人分の足跡が残っていた。箒に跨り空から探すにも、鬱蒼とした森は雪を纏い、白い波の様にしか見えなかった。そのため、こうして木々の間をすり抜けて飛行しながら足跡を追っている。

昨日が新月であり、月はほんの僅かな切れ込みの様に空に在り、代わりに星々が月光にかき消される事無くちりばめられ、煌々としている。辺境の地ヤーナムも人の灯りは有り、ここまでの星空は見たことが無かった。

その星明りの下でしていることは、ポッターあるいはポッターの遺体搜索というのはなんとも言い難い感情になる。

「死んだものと思っていたか、あるいはお姉様が殺した後に森番の嘆きに応え、校長が別の個体を用意したか……そもそも、アウレリアお姉様は殺すほどもない、単に大きな蜘蛛としか思っていないかった節もある」

「ロマの頭を砕いて殺すを体現したお方だしな。あの一本気な性格だ。義兄の苦勞が憫ばれる」

「あら、そうでもありませんわ。以前街で見かけたときは、それはもう仲睦まじい様子でしたわ」

お兄様の言葉に、お姉様が弾んだ調子で答える。それでいて、目線は足跡を追っている。聖杯探索に於いて、気がそぞろとなって罨を踏む事はままある。だが、この場に居る狩人達は身内の浮かれた話をしている様で、狩りの意識は抜けていない。

「あのアウレリアお姉様がですか？ 同じ父母の血を継ぐ者として見てみたい様なそうでもない様な」

「やっぱ恋とか愛とかって人を変えるんじゃないですか？ それとも立場でしょうか」

ケントが知った様な事を言うので笑ってしまった。

「いや、成程と思ったぞ。ケントの言う事も馬鹿にしたものじゃない。俺がジェラルドから最上級生の立場を引き継いだことで見えてくるものもあつた。妻となつて得た智慧もあるだろう」

「馬鹿にしたつもりはありませんよ。ケントが恋だとか愛だとか真面目に言うものですから」

「似合いませんか？」

「へい！ なんか来るよ！」

先行していたドロテアが急停止したので続く。並ぶと、確かに視界の奥で何かが光っている。

「ランタンか松明？ 魔術の光じゃないね」

「それにしても大きすぎる。指向性も強いみたいだ」

葉から舞い落ちる雪の華が、光の輪郭を浮かび上がらせている。2
条の光が森の奥で激しく上下していた。

「あ、分かった！ 車だ！」

城に在る車と言えば、ウィーズリー家の違法改造車だろう。となれば、ウィーズリーが居る可能性はある。空を飛ばないのは、暴れ柳との衝突の影響でその機能が故障しているか、あるいは教員から空を飛ばすことを咎められまいとしているのか。

お兄様を先頭に、光に向かって飛ぶ。車もまた、こちらに向かってきていた。その車の先に、雪を覆う黒い波のうねりが見えた。

蜘蛛の大群である。

「繁殖していたとはな」

「森番に真実薬でも飲ませるべきですね。他に何を飼っているんだか」

「城どころか街一つ食い尽くせそうですわ」

「ヤバすぎでしょ。あのデカイ頭に脳みそは入ってんのかなあ」

車は器用に倒木や木の根を避けながら走っているが、三次元的に追いつがる蜘蛛に距離を詰められている。

「星空の下でドライブとは、ませた少年だな。免許証を拝見したい」

お兄様は車に近付き、運転席のウィーズリーに話しかけた。

「なんなんだアンタ!? 今の状況分かってるのか!」

「口を慎めウィーズリー。少しでもお前達の恐怖を和らげようとするお兄様の気遣いが分からないのか」

「分かるわけないだろう! 馬鹿じゃないのかお前!」

「そうか、済まなかったな。お兄様は猿の言葉には通じていないんだ」
「言ってる場合ですか姫様。それに……それだと姫様は猿と会話できる事になりますよ」

「ポッター君と、後ろは……ワンちゃん? そのままお逃げなさい。後は私達が」

お姉様が「護れ」の一語で障壁を展開し、飛び掛かって来た蜘蛛を押し潰した。

「ロックハートはどこいったー?」

ドロテアが車の屋根に降り立ち、機関銃を取り出しながら訊いた。そのまま彼らの防御に就くつもりなのだろう。

「知らない! 多分死んだよ!」

ロックハートの名を聞いた瞬間、ポッターが肩を震わせた。ずっと押し黙っているのも、それが理由か。

「事情は後で聞こう。ドロテア、守護を任せた」「りよーかい、でつす！」

射線を開くと、電動鋸の様な銃声が後ろから轟く。銃弾を受けた蜘蛛達は、破孔から血と内臓の破片を噴き散らして絶命した。

ドロテアの作った足場に降下し、箒を鞆に突っ込み、代わりに引き出すのは獣肉断ち。己の筋力を恃む狩人にとって、周りを囲む敵を駆逐するには最も信頼できる武器である。古く、洗練されていないとする狩人も居るが、素早い棍棒であり、良く伸びる鞭剣であり、そしてそのいずれの形態であれ鋸歯を伴った重い一撃を繰り出すこの武器に、果たして洗練という概念が必要であろうか。

振るえば、車を追っていた幾つもの蜘蛛が千切れた肉片となった。

「何だ。大して蜘蛛と変わらんな」

「血が有効ではない事だけお気をつけください」

お兄様は斧を振り回し、蜘蛛を断ち切りながら吹き飛ばした。お姉様はレイテルパラッシュから水銀弾を撃ち込んだが、聖杯の蜘蛛の様に引き攣れを起こす事も無く、怒りに牙を打ち鳴らすだけだったので、その口に剣先を差し込んでいた。

「もう秘儀を使いたくないので僕は杖で良いですか？」

「ああ、俺ももう2週間は月光剣を振るいたくない」

魔力こそ輸血液で回復しているとはいえ辟易しているのだろう。ヘルマンは仕込み杖を振るい、器用に蜘蛛の脚の関節を切り刻んでいた。そこにケントが近づき、鋸槍で頭を切り裂いた。

「あ、すみません。森の灯りってどちらに在るんでしょう」

「ここから……いや分かんないな。泉の近くにある」

「飛んだ感じ、そう遠くはないはずです。帰りに寄っていきましょう」「ありがとうございます。」

……今更な疑問なんですけど、先輩方が探索している時、どうして襲ってこなかったんでしょう。今まで蜘蛛を見かけたのはアウレリア様だけですよね？ 50年前からここで繁殖しているなら、ヤーナ

ム出身で見かける人なんていくらでも居るはずですけど」

「余程お姉様が深くまで進んだのかしら」

確かに襲われた記憶はない。ケンタウロスから退去を求められた事はあるが、こうした蜘蛛を見たことはない。これだけ大型で牙も毒もある蜘蛛であるから巣を作る生態が有るかは分からないが、仮にこれだけの数が営巣していたならば、イズの天井を覆うそれよりも目立ったことだろう。

「しかしここまで多いと殲滅出来るのか不安になってきたな。さつきから何匹か逃げ出そうとしている。あるいは後方への伝令か？ 人語を解し、社会を築くらしいからな。群れの長は今頃逃げ出しているかもな」

「もう森を焼く位しか方法は無いんじゃないですか？ 蜘蛛を殺しても卵がどうしても残るでしょう」

「ケンタウロスから猛抗議されるな。城に火矢を放ちかねん」

「あの連中はこいつらと縄張り争いとかしないんでしょうか」

お兄様は走り寄るのも面倒になったのか、近づく蜘蛛の頭を斧で叩き割るだけになっている。そこから折り取った牙を、逃げようとする蜘蛛の背に投げつけていた。ヘルマンに至っては、使い慣れていないはずの回転鋸を起動して突っ立っている。

暫くそうして骸の山を築いていると、急に蜘蛛の群れが攻撃を止め、一斉に距離を取り始めた。

「白旗でもあげるつもりか？」

「虫如きに白旗という概念があるのかしら」

「森番が教えてるんじゃないか。アルファベットとマザーグースも愛情を込めて教えてるんだらう」

「……と、何か来ましたね」

蜘蛛の海が割れ、その奥にはどの蜘蛛よりも大きな個体が居た。群れの長だろう。

「よくもやってくれた喃。穢れた血狂い、冒瀆的殺戮者どもめ」

「ほう、これはこれは流暢な英語だ」

「儂らの住処を暴かれ、儂の子等を殺されてから20年………忘れたと

は言わさんぞ」

「忘れた？ 俺達は知らん」

「嘘を吐け！」

長は牙を鋏の様に打ち鳴らし叫ぶが、虚勢だろう。覇気を感じられないのは骸の山を築かれたせいだ。

「知らぬ？ 同じ匂いがする……甘い、苛烈な程に甘い血の匂いだ。縄張りに入り込んだその女が、儂らの姿を見た途端、儂の子等を引き裂きおった。儂も稻妻を纏った棍棒に打たれ、盲となった。儂は無様にも子等の骸の山に潜り、死を免れるしかなかった。その女が去り、子等の骸を食べた時の味は忘れもせん。そして僅かに残った卵を孵し、ここまで増えたのだ。それをまたしても殺しに来たか」

「ああ、アウレリアお姉様だな。同じ匂いとは私の事か」

やはり、アウレリアお姉様は森の奥深くまで進んだのだろう。それまでヤーナムの民が立ち入らなかった程の奥部か、あるいは群れの規模が拡大し、その縄張りも大きくなっていったのか。そしてお姉様は殺し尽くしたと考え、お父様には森に大きな蜘蛛が居たとだけお話をされた。蜘蛛はヤーナムの民の血を恐れ、再び森の奥に潜む様になった。

「匂いがどうか気持ち悪いですね。死ね」

急に激したケントが長に向かって全力でナイフを投げつけるが、蜘蛛が跳んでその射線を遮り、死んでいった。

「血の臭い……また殺したのか！」

「私ではないし、そも、貴公らが縄張りとしている事の方がおかしい。ここは学び舎だ。ボルネオに帰れ。さもなくば死ね。その許可は副校長から頂いている」

「約定を違えるのか！ ハグリッドは儂に安息を約束し、儂に妻を与え、血を増やした。見るがいい、ここに並ぶ勇士達を。全てはハグリッドが与えた。だからこそ、儂はハグリッドとの約定によって、ヒトを襲わなかった。儂の子等にもそう教え込んだ。

それを反故にしたのはお前達だ血狂い共め！」

お姉様はおそらく、聖杯の経験から蜘蛛を見た為に真っ先に殺そう

としたのだろう。悪夢の内にある蜘蛛でなくとも、この連中は危険生物である。森番が違法飼育した事に端を発するとはいえ、ここに居る事それだけで、殺害される理由にはなる。

森番の撒いた罪の重さに頭痛がしているのは誰も同じだろう。お姉様の手からは、血が滴り始めている。

お兄様が頭を抑えながら、口を開いた。

「あー……文化が違う様だが、まず1つ。貴公がハグリッドと呼ぶ人間は、学校に於いても人間社会に於いても、貴公らを飼育する権限は無い。当時は法整備が無かったが、現在もそうした関係があるのならば十分に違法だ」

「飼育だと!? 飼育! 儂らを毛のないひ弱な猿如きが飼育するだど!」

「次に、貴公がそう俺達を罵倒する様に、一般的なヒトにとって貴公らは重大な脅威だ。つまり、先に述べた通り、森番個人と結ばれた約定はヒトの社会にとって何ら意味はなく、貴公らは非常に危険な駆除対象である。」

そして20年前の者も、俺達も、貴公ら程度に殺される脆弱な存在ではない。それだけの事だ。

それだけの、事だった」

「戯言を! 儂らを殺す事が道理であると言うのか! 道義によってヒトを殺さなかった儂らを殺す事が!」

「そうだ。20年前はともあれ、先程少年達を襲っていただろう。貴公らの言い分は有るだろうが、俺達の社会に於いては、貴公らは最早生きる事を赦されない存在だ」

「僕からも。マリアはボルネオに帰れと言いましたが、ヒトを襲う事を覚えた生き物を野放しには出来ない。ここで死んでもらいます」

ヘルマンが言い終えた直後、お姉様の焰が黒い海を緋色に変えた。

悲鳴を上げる暇もないまま、蜘蛛達は物言わぬ骸となった。

「イングリット、済まなかったな」

「いいえ。言葉を交わしたお兄様やヘルマンの方が辛いでしよう。マリアも」

「私は特に。あ、いえ……アウレリアお姉様が雑魚だから見逃したのではなかったと知れて良かったと思いました。自分にとって脅威ではないから、人にとつてもそうではない。そういうわけで生かしておいたのではなかったと。」

……そうであれば、森番と同じですから」

「あの方は孤独を好み、己の力を最も信じるが、他者への慈しみが無いわけではない。俺も狩りに同道したのは僅かしか無いが、優しい異母姉だ。多少思い込みの激しいところはあるがな。だからこそ、背中を預けて良いと思える男に逢えたのは幸せだろう」

「本人にそう言えば無言で殴られそうですけれどね」

アウレリアお姉様は無口で、偶に口を開けば突拍子もないことを言う怖い姉という印象はあったが、今度お話を伺いたくなくなった。

「ボーン家の心温まる話とはかく、このままじゃ木に延焼します。ポッターも気になりますが、まずは消火を」

「骸はそのまま燃やしてやろう。素材として剥げば金には成るだろうが……」

「そうですね。それに、埋めても森が毒で冒されるでしょう。僻墓をここに作りたくはありません」

危険生物であれ、知性があった。それを個人の欲望で育て、人の都合で殺したのだ。その骸さえ金に変えるというならば、どちらが獣か分かったものではない。

「それと、魔法省に通報しましょう。森番は収監されるべきだ。それに、危惧した通り卵はどこかに残っているはず。討ち漏らしも居るでしょう。まあ、結局は僕らに駆除依頼が下りてくるでしょうが。その時にケントの使者に灯しましょう。今日は流石に遅くなる。まだ宴は終わってないはずだ」

「秘密の部屋が終わっても、俺達に暇は無いな。ケント、勉強がしたいなら聖杯に籠ってする様に。時間がいくらあっても足らんぞ」

「はい、デイルク様」

+

「だーかーらー！ あんたらがウチの寮嫌いなのは知ってるけどさ！

飛んでるブラッジャー弄るなんてフーチ教官でも無理だってば！
ハーマイオニーちゃんから聞いたけど、妖精がやったんでしょ!?」
「じゃあ飛んでない時に細工したかもしれないじゃないか！ それに
どうやって妖精がやったって証拠だよ!? お前らが妖精送り込んで
きたっておかしくないだろ！」

「はああああ？ なら教官が気付くでしょ！ あんな蛇察みんな死ね
なんて空気で不正なんて見逃すはずないっしょ!? あたしら憎さに
頭も言葉もおかしくなってるんじゃない！ 第一ブラッジャーに不正す
るなんて面倒な事しなくて済んでジョーダンぶち抜いたでしょ!?!」

「ほうらやっぱブラッジャーで攻撃したのバ！ レ！ バ！ レ！」
「くっそがああああ！」

森を抜けると、ドロテアと赤毛が火を囲み、口論していた。

自身が腕を砕かれた試合の事だろうに、ポッターは虚ろだった。尻
が濡れるのも気にならないのか、雪の上に座っている。その隣に森番
の愛犬が寄り添う様に伏せていた。

轍はうねり、森に消えている。乗客を降ろした後は森に帰ったのだ
ろう。

「おっかえりー。火柱がここからも見えたよ。大分やれた？」

集めきった骸に、再び火を放ち、完全に灰にした。お姉様の様に血
に優れる狩人でなくとも、大抵の狩人は魔術の焰をビルゲンワースで
習得している。魔術に優れなければ、油壺と松明が有れば事足りる。
手段はどうあれ、目的を達成する事が狩人にとっては重要なのだ。獣
に弓で立ち向かおうと、剣を持って屠られるよりは余程狩人としてま
ともである。

「ええ。あの場に居た個体は全て。残りの駆除はいずれ」

「そんな……ハグリッドの友達だったんだよ!?!」

クイディッチ談議にも加わらずに塞ぎ込んでいたポッターが、唐突
に立ち上がり、叫んだ。

「あんたさ、あれに襲われたんでしょ？ 他人が誰を友達にするなん
て口を挟む事じゃないけどさ、ヒトを襲う生き物を喜んで育てるって
意味分かる？」

ドロテアが舌打ち混じりに答えた。相当苛立っていたのだろう。ドロテアの怒気を受けたポッターは唇を噛みしめ、押し黙った。ウィーズリーはドロテアに同意し、首を自分で折ろうとしているかの様に幾度も頷いていた。普段であれば蛇寮生への敵愾心が優りそうなものだが、余程蜘蛛か森番に対する嫌悪が強いのだろう。

「だからハグリッドはダメなのさ！ 怪物はどうしたって怪物だよ！ だってのにみんなが怪物を患者にしたんだと思ってる！ それで牢屋に入れられたって誰にも文句言えないだろ！」

赤毛の言葉に、恐ろしい獣とデュラの言葉を思い出す。人は皆獣であり、獣はやはり人なのだと言う。赤毛は蜘蛛を怪物と断じたが、欲望に突き動かされ、他人を害する事に躊躇のない自身の妹をどの様に受け止めるのだろうか。

「姫様」

「ん？」

「ドロテア先輩が呼んでます」

呆けていた間に、ドロテアを中心にポッター達から少し離れたところに狩人が集まっている。

「さっきからブツブツブツブツ」僕が殺した……とか凹んでるし、もう片っぽは「スリザリンが助けに来るはずなんてない」とか言ってるからさ、おねーさんとしてクイディッチで話逸らしてたわけ。助けてあげたなんて言うつもりはないけどさ、まるであたしらが悪いことしたみたいと言われたらムカつくでしょ。

それは置いといて、あれの妹の事は話してない。秘密の部屋は解決したとだけ。ドーセ城に戻ったら校長がテキトーに都合が良いこと言うんだろうし、「あんたらの恩人置き去りにして城で食べるご馳走はどんな味だろうね」ってここに置いといた。

森の火を見て副校長の猫がさつき来たし、聞きたい事があるなら今のうちに」

副校長の猫とは、クイレルを狩った夜に遣わされた守護霊だろう。毛艶良く、しなやかに宙を駆ける姿は美しく思えた。

「ロックハートの顛末は聞きたいが、今は心を壊しかねんな。ひとま

ず心を落ち着かせる。それでいいか？」

「異議なし」「ええ」「あたしも」「私もありません」「僕もです」

ポッター達は密談が気になっていた様だが、近づくのは恐ろしい様だった。

「じゃあ帰るか。この時間ならまだ飯は残っているだろう」

お兄様がポッター達の服にこびりついてた泥を清めた。蜘蛛に車から引きずり降ろされたのか、あるいは蜘蛛に襲われていたところを、車が助けに来たのか。

しかしあの車の給油や整備はどの様に為されているのだろうか。

「なんでアンタらが来たんだ？」

「副校長の依頼だな。厳密に言えば君達の救出ではなく、危険生物の駆除任務だ。」

……心配していらした。説教は覚悟しておけ」

赤毛はお兄様に噛みつくが、お兄様は反応を予想していたのだろう。淀む事無く答えた。更に反撃が来るとでも思っていたのか、ウィーズリーは身構えていたが、お兄様が何も言わず歩みを進めた為に拍子抜けしていた。

「危険生物……ハグリッドはどうして僕らを行かせたんだろう」

「貴方に信じてもらいたかったのでしょね。自分は50年前、人を殺していないと」

「何が殺してない、だ！ 僕らが死んでたら殺害数2人と1匹だぞ！

秘密の部屋の怪物が居るんなら、アイツはホグワーツの怪物じゃないか！」

「僕らは生きているけど、少なくとも1は確定だよ。ロックハート先生だ」

「あれは人じゃない。人の皮を被ったイカレだ」

ウィーズリーは吐き捨てたが、ポッターは首を横に振った。

「……少年。」

考えさせたくは無かったが、気に病む様であれば仕方ない。自らの裡に秘めてもいい。全て吐き出してしまうのもいい。都合の良い、話したいことだけを話してもいい。校長に話したくない事があるなら、

俺で良ければ聞くぞ。校長と俺達の軋轢は知っているだろう」

「そりゃ、嫌という程にね。おかげで僕らは寮杯を——」

「ロン。黙っててくれ」

ポッターはウィーズリーに森番を貶められた事に気が立っているのか、あるいは本当にお兄様に話したい事があるのか。

「アラゴグ。あの蜘蛛の群れの長の名前です。ハグリッドがそう名付けたと言っていました。彼は秘密の部屋の怪物ではなくて、ハグリッドは冤罪で退校処分になったって。じゃあ、どうしてハグリッドはあの時そう言わなかったんだろう。自分が何一つ悪い事をしていない、そう思えるなら、胸を張ってそう言えればいい。なのに、そうしなかった。」

だから、ハグリッドは分かっていたんだ。自分のしていることが良くない事だつて。なのに、それは止められなかった。ハグリッド以外には襲いかかる怪物があんなに増えているても、50年間何もしなかった。

僕はハグリッドをどういう人だと思えばいいんでしょう」

白い息と共にポッターの心が吐き出される。雪を踏みしめる音と、ポッターの途切れ途切れの声が、冷えた夜気に吸い込まれていく。

「マリアの話では、森番は君の友人で、君に家族の想い出を贈った人物だという。それが悪性を持っていた事に、君は衝撃を受けている。そして、君は森番に疑いを持っていることに背徳感を持った。そういう事かな」

「多分、そうだと思います」

「どう思えばいいか、それは君自身が決める事だ。君にとっての森番の価値は君にとってのみ作用する。俺達にとっては間違ひなく悪であり、今までは幸いにして人が死ななかつただけに過ぎない。それは森番に備わるある種の善性がそうさせていたのかもしれないし、校長や他の教員が何か手を打っていたのかもしれない。しかし、理由がどうあれ森番の行いは赦されるものとは思えない。」

だが、俺達にとってそうであるからといって、君にとっての森番がどういふ人物であるかは関わりが無いことであり、森番の本質もまた

関わりの無いことだ」

ポッターが森番とどの様な関係であれ、それは両者以外には何ら意味のないことだ。

あれのした事は何一つ擁護出来ない。己が欲求のままに力を振るい、他者を弄ぶ。それは、継承者となつたジネブラ・ウィーズリーと同じである。それはまた、人の進化を謳い、その実探求の熱に溺れただけの墓暴きや実験棟の研究者とも等しい。

「本質？」

「君達獅子寮生は、俺達蛇寮生を悪しき魔術師の巣窟であると思つて
いるだろう。だが、蛇寮生という属性を外した時、そこには何が残る。
君達は蛇寮生だと思つていた者の内面をどれだけ知つている？ マ
リアもそうだ。血塗れ女帝やら、トロール・イーターやら大層な二つ
名を付けられているが、俺にとっては愛しい妹でしかない。

同じ様に、君の知つている森番は君の知り得る限りの森番でしか
ない。それは森番の本質と言えるだろうか。見たいものを見たい様に
見る限り、それは見えてこないものだ。そして、人は他者に自分を見
せたい様に見せている。50年前の継承者はその本質を隠す才に優
れていた。あるいは、ロックハートもそうだろう。

君が今夜知つた森番の在り方は、森番の一面にしか過ぎない。それ
は氷山の一角かもしれないし、あるいは聖書の内のほんの僅かな誤植
かもしれない。君が森番を信じるならば、より深く知るべきである
し、最早信じるに値しないと思うのであればそれもいい。

まあ、俺は本質がどうあれ罪は贖うべきだと思ふがな。俺達の手
は、あれが育てた蜘蛛の血で染まっている」

「最後で台無しですよ、デイルク。せつかく先輩らしい事を言つてい
たのに。」

さて、ミスター・ポッター、あるいはミスター・ウィーズリー。心
の整理は付かないだろうけど、ロックハートについて教えてくれ。た
だの無能ではなく、人面獣心だったと知つたその顛末を」

台無しにしたのはヘルマンである様にも思うが、やはりロックハ
トは気になる。あの本を小ウィーズリーに与えた者は誰であるのか

分かっていない。ロックハートが単なる無能ではなく悪人だとして、あの自己顕示欲やポッターへの執着とを組み合わせれば、奴が本の持ち主であったと推測することも出来る。

「アイツは忘却術師だった。それも、パパの職場に居る人達よりも上手いくらいだと思う。アイツの書いてきた本は、みんな本当にそれを経験した人達から話を聞いて、それから全部を忘れさせて出来たものだった。」

それでマーリン賞貰えるってんだから、マー髭さ」

「……つまり、森の奥で君達は忘却術を掛けられそうになり、それを辛くも逃れて来た？」

「半分正解。ハリーがハグリッドの言葉を思い出して、一緒に透明マントを使って蜘蛛を探し回った。怪物や継承者が居るかもしれないからね。それで、蜘蛛の群れが一行になって、森へ向かっていくのが分かった。」

先生たちは僕やハリーの言う事なんか聞いちゃくれない。アンタらがハリーを継承者だって決めつけて殺しに来なかつたのが不思議だよ。先生でさえハリーにビクついて、目も合わせなかつたんだぜ。

けど、ロックハートは別だ。あいつは馬鹿だから、秘密の部屋の手掛かりを見つけたって言えば、喜んでついてくるだろうと思っただけ、話をしたら飛んでいきそうなくらい喜んだよ」

想像通り、ロックハートを頼つたらしい。奴からすれば、失踪したはずのポッターとウィーズリーが現れ、自身や小ウィーズリーが搜索されていることを知らない。何も知らない馬鹿なガキ2人が秘密の部屋の手掛かりまで持つてきた……そう心中で狂喜乱舞しただろう。

「森に入って少ししたら、アイツがハリーに杖を向けたんだ。無能っぷりは知ってたから、別に怖くは無かつたさ。それで何が出来るとかって訊いたら、アイツの悪行をペラペラと喋ったよ。」

しまいには「可哀想な事に、森に棲んでいた怪物への恐怖で彼らはおかしくなってしまうた——そう、世間は納得するだろう。ダンブルドアの下で悲惨な事故が起きるはずはない——ですが、無謀にも夜の

森に踏み込んだ者にさえダンブルドアの目が行き届くとは限らない。私は君達の捜索を行い、森の中で心が壊れていた君達を見つけ——救い出した」なんて、溜めに溜めるいつもの調子だった。

ゾットとしたよ。フレッドとジョージが冗談を言うみたいなきげさで、僕らの頭をどうにかするなんて言うんだ。

蜘蛛がそこに来たのはツイてたかもしれない。蜘蛛はまずヘラヘラ笑ってたアイツに飛び掛かって、それから僕らだった。僕らは逆さ吊りにされて奴らの巣まで連れていかれた。それでハリーと蜘蛛が話をした。ハグリッドがどうか、秘密の部屋の怪物がどうか話をしていたら、アイツがハリーに向かって「全てを忘れよ」ってね。逃げるための囮にするつもりだったんだ。ハリーは避けたけど、その先に居た子蜘蛛に当たって……多分、呼吸の仕方を忘れたんだろうな。ぴくぴくもがいて死んだよ。そりゃ蜘蛛もカンカンさ。

で、ハグリッドのせいで死ぬんだなって思ってたら、パパの車が来てくれたってわけさ」

ロックハートは単なる作家であり、ロックハートという看板を用いた制作者集団である。その予想は、最悪に近い形で中していた。

「成程。ロックハートは無能ではなかった。書籍化出来る程の体験をした不世出の者を探し出し、その者から必要な情報を聞き出した後、忘却術で始末していた。その後、聞き出した話を自分に合わせて改変し、世に送り出した。娯楽に係る功績を讃えた勲章とはいえ、叙勲される程にその虚像は大きくなった。

世が世なら、密偵として身を立てられた事だろうな」

「ええ。何よりも、人を殺す事を躊躇わず、殺しても何ら傷を負わない精神性。大義の下に行うならば、英雄にもなれたでしょう。我欲……それも、虚栄心を満たす、それだけの為にそれを行ったのだから、邪悪としか言い様がありませんが」

そう、ヘルマンの言う通り、ロックハートとは殺人者である。たとえ、それが人の理性を全て消し去る様なものでは無かったとして、その者の現在を形作る過去を抹殺することは、部分的ではあれ殺人である。

英国の魔法族は非魔法族について火を用いる野蛮な猿程度にしか考えていないが、その倫理はその猿から遙かに劣後する。死と服従と拷問の術を殊更に穢れた闇の魔術として恐れ、その他の呪詛で如何なる苦痛を与えようと、闇の魔術とやらでなければ忌むべき暴力ではないとする。

ロックハートは偉大な冒険者の精神を殺めても、心臓が動いてさえいれば、その心に些かの疚しさも無かつたのだろう。

「やったことつてヴォルデモートと同じでしょ。結局、あの連中の言つてたことつて「まほうぞくのぼくはすごいんだぞー」つて思わせたかっただけ。ロックハートも「ぼくはすごいんだ！ もっとぼくをみて！」つてわけ。あー吐きそ」

ドロテアがヴォルデモートの名を出したことにウィーズリーは顔を青くしたが、ポッターはそれよりも暗い表情だった。

犬を森番の小屋に押し込み、城へ向かう。

「その邪悪を強く望み、教員として招いた校長は、いったいどういうお考えなのかしら。これこそヘルマンの言つた校長の裏なのではなくて？」

「おそらくは。ミスター・ポッター、何の根拠もないただの推測だけど、伝えておくよ。ああ、心に秘めなくてもいい。校長は心を読むからね。君が校長を信じようと、僕の言葉をそこに垂らす毒の様に感じても、それは校長の手の内に在る。

校長にとって、君は特別だ。それは自明の事だ。君の輝かしい冒険譚の為に、犯罪者を泳がせ、その犯罪者が狙う財物を学び舎の中に置き、君と君の周りの者が秀でる事に合わせた護りを施したのだからね。

君が望むと望まざるに関わらず、君は世間で英雄として扱われている。ダンブルドアとポッター、その両者とも知らないという魔法族は英国には居ない。ロックハートという歪んだ自己愛を持つ者にとつて、君の存在は殺したいほど妬ましく、黄金で出来た踏み台だ。君の体験を自分のものにして、ヴォルデモートは実は自分が殺した、そう言えたらどんなにか幸福なことだろう。それが全くの出鱈目でもな

「事は、先程杖を向けられた時に良く分かったはずだ」

ポッターは望まざりして、父母を失つて勝手に付けられた英雄という称号に振り回された。すれ違ふ者は額を覗き込み、英雄である事を期待した。唯一得意とする箒では、副校長の私欲により競技場に引きずり出された。森番と友誼を育み、夜間外出による減点でその名は地に墮ちた。そしてある日、学び舎に持ち込まれた賢者の石を護る為に、番犬の護る冥府に下った。

そして、その1年の全ては、ポッターを本当の英雄にするための校長による策謀だった。

それに付き合わされたハーマイオニーの心痛は良く知っている。理性と校長の言葉がせめぎ合い、屈した。寮を超えて結ばれた友人を、危険と分かっている道に連れ込まなければならなかった。故にその夜明けには、より深い縁が結ばれることとなった。

では、ウィーズリーはどうだろうか。ポッターは結局、英雄に成り損ねた。その茶番に巻き込まれたウィーズリーにとって、昨年度に得たものは何だったのだろうか。

「では、何故校長は他でもないミスター・ポッターに執着するだろう人物を、教員に招いたのだろう。それは、それが君の為になると考えたからだ。校長は知っていたはずだ。かつて学び舎に在りし日、ロックハートに魔術の才がろくになかった事も、今や人の記憶を篡奪して回る殺人鬼である事も。何せ、心が読めるからね。」

ロックハートを通じて君が何か……ああは成るまいとする意志かもしれないし、あるいは自分の見せ方かもしれない。君は他者にとつて自分がどういう者であるかを気にするが、他者にどう見せるかは恐ろしく下手だ。それは純真さや誠実さかもしれないし、肩書のない本来の自分が愛されることへの欲求かもしれないが、何が君をそうしたのかは分からないから断言はしない。

いずれにしても、ドロテアが言った通り、ロックハートはヴォルデモートに近い精神構造をした者だ。

つまり、校長がロックハートを招いたのは、君がロックハートの真実を暴く事を期待していたのだらうと思う。ロックハートは、今年の実

君に与えられた冒険なんだ。僕はそう思う」

ポッターが身体を折り、えずいた。昼食から大分時間が経っているせいで、石畳に広がるのは胃液だけだった。お兄様が無言で手を振り、それを消した。

「僕に害意があるわけじゃない。僕にとって君は同じ場所に居るだけの他人でしかない。だが敢えて君にこれを伝えたのは、君には君に降りかかる理不尽に憤る権利がある事を知ってもらいたかった。君は君を取り巻くものに流され、身を委ねてきた。ご両親の事もそうだろう。昨年度全てもそうだ。君は確かに箒の才に優れている。それは曲がりなりにも選手としてやってきている僕から、偽りなく賞賛しよう。だが、その箒さえも副校長の我欲から与えられた翼だ。

不憫だと思う。けれど、そのせいで君は君の意思と行いに対する責任を取る事を知らない。だからこうして、今夜も友人と犬と殺人鬼と共に、秘密の部屋の怪物が居るかもしれない森の中へ進んでしまった。「僕が殺した」と、そう言っていたね。そうだ。ポッター、君が殺した。ロックハートは悪人で、死を以って贖うべき罪人だろう。けれど、その断罪でもなく、葬送でもなく、その罪とは何も関係がない、森の言葉に突き動かされた結果の死だ。君がロックハートの死だった」

「止めるよー！」

ウィーズリーがヘルマンの胸倉を掴んだ。

「ハリーが可哀想って言うんなら、どうしてそうやって追い込むんだよ。どいつもこいつも、ハリーに何をさせたかって言うんだ。ダンブルドアが何考えてるかなんて知るもんか！ 結局ハリーを傷付けてんだから、アンタもダンブルドアと変わらない。ネチネチとハリーに嫌味を言ってるだけじゃないか！」

「それを受け容れてきたのが彼だ。怒りと癩癩は違う。自分が何故今そう在るのかを考えないまま、都合のいい言葉や状況に踊らされた結果が今だ。怒りは理不尽を覆そうとする意志の力だ。ただ蜘蛛の巣に引っかかってもがくこととは違う」

「通訳すると、そうやって自分が理不尽に巻き込まれた事を、理不尽だ

なって思うだけで受け容れちゃってるから、結局は何でも自分のせいじゃないって思う様になっちゃったでしょってコト。だから、ロックハートを連れ出して、ロックハートが多分死んだ今になって、自分の選択ってやつと責任とかその重みを初めて実感したわけ。別にあんたが直接殺したわけでもないのに、自分が関わったって事の重みに耐えられなくなつて、凹みまくってる。

でも、いい勉強になって良かったね。これが去年、ハーマイオニーちゃんがトロールに殺されて、それが全部クイレルを野放しにした校長のせいだなんて言つてたら、マリアはあんた達殺してたよ。それこそ、断罪でも葬送でもなく、自分の為だね。あの時はもうダフネちゃんの友達だったし、マリアだって友達とは言つてなかつたけど、気に掛けてたから。

あたしらがこうやって落ち着いてられるのも、ロックハートだから。死んでもいい奴が死んだところで、まあいいやつて思うだけだし」

ヘルマンよりも直接的なドロテアの言葉は、より深く心に刺さった様だった。

「そう厳しく言つてやるな。少年達には少年達なりに、教員を信用出来なかつた理由はあつた。それに、自分にさえ分からない蛇語の力など、最早誰に縋ればよいのかも分からなかつただろう。ああ、蛇語を話すからといって、俺達が君をどうこう思う事も無い。多少、世界が広がるだろうと思うだけだ。そのケントなど、英語、独語、日本語の三カ国語話者だ。君の1.5倍、語学に優れる。

赤毛の少年。ヘルマンもな、言葉通り、君達に害意があるわけではない。見ていて忍びないのだ。こうも校長に良い様に振り回され、自らの意志を失い、校長が望む君達に作り替えられていくのを見ているのはな。もつとも、俺達がこうして話していることもまた、君達にとつては同じ事だろう。反校長思想を植え付けたいというつもりも無いし、そもそも俺達は校長と結果的に反目しているだけであつてそれを望んだわけではない。

ただ、君達には思考の自由を与えたい。校長は君達の生存と無事を

喜ぶだろう。校長の心地よい言葉に心を委ねる前に、それに従うか否かを思考するべきだ。そうヘルマンは言っている。分かったら手を放してやってくれ」

ウィーズリーは手を放し、ヘルマンに背を向けた。

「どうして、僕なんだろう」

ポッターの呟きが、廊下の冷たい石壁に弾けた。

靴下

職員室は歓声に沸いた。温かな拍手がポッターとウィーズリーに向けられた。狩人もまた同様に。

だが、その拍手の中に、猛然と走り寄る女性の姿があった。

「あの赤毛……ウィーズリー家でしようね」

「ああ。面倒だな」

ヘルマンがお兄様に耳打ちする。

ウィーズリー夫人はポッターとウィーズリーの背骨を折る様に抱きすくめた後、こちらに向き直り、叫んだ。

「アンタ達が娘を！」

「止めないかモリー！」

「ヘルマン、よせ」

お兄様に杖が向けられた瞬間、職員室の奥から頭髮の薄い中年男性が制止の声を上げた。お兄様がヘルマンを止めたのは、ヘルマンの刃鞭がウィーズリー夫人の杖腕を絡め、切断する寸前だった。

「ダンブルドアに言われただろう！ 彼らはジニーを救ったんだ！

秘密の部屋から！」

「どういうこと？」

赤毛が狩人を睨む。

「君達に加え、ジネブラ・ウィーズリーも失踪した事になっていた。継承者に拉致され、秘密の部屋の床に骸となつて横たわっていると。秘密の部屋の怪物を殺し、騒動を解決したのはドロテアから伝えられているだろう。ジネブラ・ウィーズリーは秘密の部屋に居た」

「アンタ、さつきはジニーの事を何も言わなかった！ 何か隠しているんだろう！ だから僕らに何も言えなかった！ そうだろう！」

「黙れ。お兄様に唾を飛ばすな。そうやって吠えるのが面倒だから伝えなかつただけだ。それに、私達はそれと言葉を交わしていない。意識が明瞭でない以上、無事だとは言えないからな。何かの呪詛が残っているかもしれないし、あるいは錯乱しているかもしれない。

そう聞いて、貴公は私達の話を聞くか？ どうせ貴公の母親の様

に、私達がそうしたと噛みついてくるだけだろう。そのまともではない杖を使つてな。またナメクジを味わいたいなら勝手にすればいいが」

「止められはしましたが、杖に魔力を流せば即座に切り落とします。下手なことは考えないでください」

ウィーズリーの狂犬の様な性質は母親から継いだものなのだろう。ヘルマンは姿勢を崩していなかった。ケントもまた鯉口を切っており、ドロテアも投げナイフを握っている。

「よせ、ヘルマン。この距離で俺は当たらん。マリアも獲物を下ろせ。慈悲の刃とて只人なら即死だぞ」

「撃たせる方が間違いだ。ウィーズリー！ 見えているよ。そこを動くな。母親の腕が無くなるぞ」

「いいから解放してやれ」

「後悔はしたくない。急に訳も分からず杖を向ける様な人間が、理性的な判断が出来るとは思えない。完全に戦意を失うまで拘束するべきだ」

「2人も手を掛けられて気が立っているのは分かるが、貴公がそこまですで俺を想っていたとは驚きだぞ」

「先輩であり、友人であり、兄ですからね」

ウィーズリー夫人はどう見ても、ヘルマンが拘束を解けば即座に杖をお兄様に向け直し、呪詛を放つとしか思えない。それでもお兄様がヘルマンに解放させようとするのは夫人の気を晴らすためか、あるいは。

「撃つてもいい。だが、その報いは必ず与える。誤解であろうが、やり場のない怒りからであろうが、撃てば敵とみなす。命があると思うな。夫が妻を失い、子が母を失った復讐に走れば当然殺す。出来ないと思うか？ 我等は秘密の部屋に住まうバジリスクを300余り、森に住まうアクロマンチュラを数え切れぬ程殺した。たかが魔術を使えるだけのヒトなど、殺すのに手間は無い。

「選べ」

お兄様は娘を想う母を慈しみ、ヘルマンに解放を命じたわけではな

かった。理性と感情のどちらを取るのか、選ばせただけであった。

ヘルマンが手首を僅かに上に動かすと、鞭は夫人の腕を僅かにも傷付けずにヘルマンの手元に戻り、杖となった。

「モリー。落ち着いてくれ。君達も」

「我らは特に。ご夫人の選択次第だ。杖を向けられ、警告までしている。それで撃たれたというならば、殺めたとて何の痛痒もない」

「子供の口から殺すだのなんだの、そういう言葉は聞きたくない。妻の非礼は詫びる。どうか怒りを鎮めてくれないか」

「もう成人している、とは子供じみた反駁か。これから怒りを滾らせるかどうかはご夫人次第だ」

ウィーズリー氏が夫人の肩を抱き、その手から杖を剥ぎ取ったのを見て、ヘルマンも警戒を解いた。視界の端で、フリットウィック教授が杖をさりげなくローブの中に仕舞い込んでいた。決闘の名手という噂は真実らしい。

「アンタらおかしいよー!」

「獅子寮の中ではこれが親愛表現なのか? 蛇寮の中でこんなことがあれば、家を巻き込んだ戦争だぞ。これに懲りたら、蛇寮生だからと呪いをかけるのは止めることだな。私が腕を砕いただけで済ませた学徒は幸運だったと知るが良い。未熟な呪詛とて、階段で受けければ転げて死ぬこともあるだろう。そんなつもりではなかった、相手の遺族にそう言えるのか。」

それより、妹が起きたのだろうか。そして、私達のせいだと妄言を垂れたか」

「校長が僕らを擁護するとは驚きですね。まあどうあれ、あそこに放置されれば死んでいたでしょうから、救出したのは事実ですが」

ケントはとぼけた言葉を紡ぎながらも、未だに刀を直ぐに抜ける様に構えていたが、お兄様がその肩を軽く叩いた。

「さて……随分とご機嫌だな、校長。森の中の蜘蛛共が灰になったのが嬉しいか。卵も有るだろうし、残党も居るだろう。森から逃げられ、ホグズミードを襲撃されては適わん。早急に、徹底的に駆除するべきだ」

入口に校長が佇んでいた。その表情は好々爺の様であり、その目は冷徹な青をしていた。目を合わせれば、やはり頭の中で僅かなざわめきがした。

「何の事かの。わしはただ、皆が無事であったことを喜んでいるだけじゃよ。皆は広間で腹いっぱいにご馳走をかつこんでおる。それも君達のお蔭じゃよ」

「そう言う他ないだろうな。して、少女は」

「マダム・ポンフリーによれば、ようやく目を覚ましたところじゃよ。君達に手荒な事をされると怯えておったそうじゃ。その様子を見たモリーが君達に杖を向けたのじゃ」

「親御の前で口にしたくはないが、されて当然だろう。こちらは2人も死にかけた。文字通りな」

お姉様にせよドロテアにせよ、今こうして隣に立っているのは幸運なことだ。その幸運が、継承者を打ち破る手掛かりとなった。

「一体どういうことです、ダブルドア。娘が何をしたと」

「アーサー。あの子に起こった事を解き明かすには、話は長くなるのう。ひとまず食事にしよう。先生方も皆腹ペコじゃ」

「今伺いたい。娘の身に何かあって、それを置いたまま食事など。上の息子たちだって何が有ったか知りたいと思うだろう」

「ふむ……マクゴナガル先生。パーシーと双子の兄弟を医務室に呼んできてくれるかの。辛い話にはなるじやろうが、何も知らぬわけにはいくまい。」

ポッター君、君達もじゃ。ついてきなさい」

「当然、俺達も同席する」

お兄様が差し込むように言葉を放った。甘味は気になるところだが、それ以上に見届けなければならぬものがある。

「遠慮願いたいところじゃが」

「蛇を殺し、継承者を終わらせたのは僕たちだ。それを抜きにして何を解き明かすと？ それとも、この騒動は全て校長の掌にあったのですか？ 成程、学徒を帰らせる事もなく、警告もせず、解決にも動かず、ミスター・ポッターの疑いを晴らす事も無かったのはそう言う事

か。流石今世紀で最も偉大な魔術師。学徒が何人犠牲になろうと、僕の同胞が死に瀕しよう、より大いなる善の為には些事に過ぎないと」

ヘルマンは皮肉屋ではあるが自分の功績をひけらかす様な人物ではない。そう在りながらこの様な言葉が飛び出しているのは、腹に据えかねた心情の吐露といった所だろうか。

怒りは理不尽に抗う為に有るとして、苛立ちという感情がないはずもない。

「私からもお願いしたい。娘が君達と関わり、娘の様子を知った妻がこうまでも怒るなら……その理由は私も親として知らなければならぬと思う」

†

校長とウィーズリー夫妻、ウィーズリー兄弟、ポッター。その後、狩人と寮監と副校長が続く。寮監がこの列に加わる理由は、寮監の立場とも狩人への依頼者である事とも無関係だろう。最初の血文字が描かれた時、校長が寮監を伴った様に、寮監には薬学以外に校長が恃む特別な智慧があるのだろう。

さしもの双子も普段の軽妙な笑顔は無く、狩人に対して複雑な感情を隠しきれない様だった。もつとも、犠牲となったはずの妹が生きていたと喜んでいたところに、神妙な顔の副校長に呼び出されれば、何か有ったと気付くだろう。それで笑っている様であれば歪な家族関係だと思える。

「具合はどうかの」

「ひっ」

校長の顔を見るなり、小ウィーズリーは悲鳴を上げた。

「ああ……ああ……あたし、退校になるのね!? そうなんでしよう校長先生!」

退校と言ったか。

これだけの事をした。そして、真っ先に出た言葉が退校処分を恐れるものだ。余りの言葉に、怖気がした。

自らの罪を自覚しているのだからこそ、罰を恐れた。その罰が退校

で贖われるものだと思っっている事も、その罪を贖おうとするでもなく、ひたすらに罰を恐れる事も、その在り方全てが恐ろしかった。人とは、子供にしてここまで醜い獣に成れるのか。

子供故に罪の大きさを知らないとしても、訳の分からぬままであれ、「ごめんなさい」と赦しを乞う言葉は有るだろう。だが、眼前に在るのは手負いの獣の如き狂態を晒す、赤毛の少女だけである。

「それは未だ分からの。それを判断するための話を、わしは未だ何一つ君から聞いておらん。君が恐れる、この子等からも」

「そいつらの話なんて全部でたらめです！ 聞く必要なんてない！」

手荒な事をされるとは、暴力による報復だけを指すものではないのだろう。狩人が知った此度の事件の全てを詳らかにされる事。それは、泣き叫ぶ少女にとつて致命的な破滅を意味する。

ウィーズリー夫人は娘に駆け寄り、その手を握った。

「大丈夫。大丈夫だから落ち着きなさい。ママがついていますからね。この人達には何一つさせないから」

刺し違えてでも、という覚悟をその目に浮かばせていたが、お姉様は冷たく微笑みを返した。星は赤く滾るものよりも、白く静かに瞬く方が遥かに高い温度で燃えている事に似る。

「その振る舞いは、トム・マールヴオロ・リドルから習ったのかしら。それとも、家の中で自然と身に着いたのかしら。マリアもこれくらい子供の顔と女の顔の使い分けができるの良いのだけけれど」

「そうなつては困るな。怖い妹が2人になる」

「まあお兄様つたら。ドロテアだつてやるときはやりませう」

「その時はヘルマンに相手をしてもらおう」

お姉様とお兄様のやり取りの傍で、ドロテアは無言で先程口を付けていた鎮静剤の残りを飲み干していた。ドロテアもお姉様程器用に感情を表せるわけではない。自分と親友を傷付けられ、その発端は慕情とも言えぬ歪んだ所有欲で、それが都合の良い様に子供じみた泣き声を上げている。その者に向ける感情に名を付けるとすれば、どの様なものになるだろうか。その感情を暴力として表わすよりは、たとえ薬に頼れども鎮めてしまった方が良いとドロテアは考えたのだろう。

「やはり……そうじゃったか」

「リドルは言っていましたわ。あの時に自分を疑ったのは貴方だけだったと。そして、その貴方が何も動かなかったから、この子は増長していったとも。それ程までに森番は貴方にとって大切な存在でいらして？」

校長は何も言わなかった。胸中に有るのは、英国を震撼させた闇の帝王となる前に、その牙を砕いておくべきだったという後悔だろうか。少なくとも、森番の罪を秘匿したいが故に何者をも城内に踏み込ませなかった、その不作為の後悔ではないだろう。

「……ダンブルドア、リドルとは誰です」

「ヴォルデモートの真の名じやよ」

部屋の中で幾人もが顔を顰めたが、校長は淀みなく言葉が続けた。「あの者はホグワーツ創立以来、最も優秀な生徒だったと言えよう。誰よりも深く魔法を知ろうとし、確かに多くの学びを得ておった。しかし、彼は終ぞ魔法の神髄を知ることなく、冷たく、暗い淀みに在るものこそ、力のある魔法と考える様になった。彼が卒業後、校長となったわしの前に姿を現した時にはもう、人を惹きつける容姿と才知を持った優秀な首席生徒の面影は無くなっておった。そして、人々はあやつの悪名が蔓延るにつれ、奴がかつて何者であったのかを忘れようとした。今ではその悪名すら忘れたいと願い、名前を言うてはならないあの人と呼ぶようになったのじや。

では、その悪しき魔法使いの卵が、何故入学したての女の子と繋がりを持っていたのじやろうか」

「日記！ リドルの日記があたしにそうさせたの！」

黒く、古ぼけた本としか思わなかったが、どうやら日記であったらしい。何が書かれていたのかは分からないが、今やインクの血に塗れたそれからは何も読み解くことは出来ないだろう。

「俺が持っている。そうか、これは日記だったのか」

お兄様が袖口から日記を取り出し、校長に差し出した。校長はそれを受け取らず、杖を抜いた。

「何を！」

「いい、マリア。校長、この日記に何が仕込まれているのか、それとも俺が操られているのか警戒するのも分かるが、敵意が無いならば杖を抜く前にそう言ってもらいたいものだ。皆がその手首を切り落としかねない」

「すまんの。しかし、それを言っただけでは君の中に居るかもしれないドルが暴れ出すかもしれんしの。」

現れよ」

校長はその言葉とは真逆に、一切悪びれもせず杖で日記を撫ぜた。特に何が起きる事も無く、僅かな擦過音がただけだった。

「今はただの小汚い紙束でしかないが、確かに魔術はかけられていた。奴は50年前に自ら秘密の部屋を閉じ、いずれの日にか再び開かんと、志半ばにして封印せざるを得なかった無念と共に、自身の人格を日記に転写していた。その詳細については今話すべきことでもないだろう。改めて時間を頂きたい。校長ではなく、かつて闇の帝王と戦った者として。」

平易に言えば、これは憂いの篩の様なものだ。その中で継承者から聞き、俺の口から言えるのはこれだけだ。この日記に人を操る力などなく、そしてその少女は全ての記憶を持っている。疑うのであれば……寮監、真実薬を頂けますか」

「先の言葉を忘れたのかね。学生に投与することは禁じられている」
「投与するのであればその通りでしょう。しかし自発的に飲む事を禁ずる法はないはずです。自身の潔白を証明する手段がそれしかないのであれば、誰もが喜んで飲み干すはず。ただ一人、罪を犯した者以外は」

「それが本当だとして…娘がどうしてそんなものを？ いや、そんなことなんてどうでもいい！ ジニーは無事なのか!?!」

ウィーズリー氏が叫ぶが、それも道理の事である。惨劇を引き起こしたとされる呪具が愛娘の手元にあり、それを持ち続けたときにどうなるか。氏の職業柄、その顛末は知っているだろう。狩人にとっては薄ら寒い母親の盲信とは別に、父親は未だ幾らかの理性を残している様に思える。

「おそろくは。精神や肉体を冒す様な呪詛はありませんでした。先程まで目を覚まさなかつたのも、蛇語の知識を得る為に接続し続け、魔力を消耗したからです。お蔭で数多のバジリスクを屠ることになった。

傷はない。故にこそ、問題なのです。彼女は自らの意思で此度の惨劇を生み出した。唆されたという事は言えましようが、手を動かしたのはご息女自身です」

「違う！ あたしはそんなこと知らない！ パパ！ スリザリン生の言う事なんか信じないで！」

「それを証明するならば、真実薬を飲む事だな。君が飲むのならば俺も飲む。必要であれば、俺達全員が飲んでもいい」

「いや……しかし……だが、余りにも君の説明は抽象的じゃないか」「経緯をこの場で詳細に語れば、傷付くべき者でない者も傷付ける事になりますので。ご息女が口にした様に、日記こそが全ての鍵なのです。俺達が聞きたいのは、どの様にしてその日記を得たのか、それだけだ」

意外にも、校長はお兄様を止めなかった。校長の知っていることは、森番が蜘蛛を森の中で繁殖させた事だけであろう。故に、校長にとってお兄様は泣き叫ぶ少女を詰る悪漢であるはずだが、さして気にした風もなく、ポッターを一瞥しただけだった。お兄様の言う、傷付くべきでない者が誰か分かったらしい。

「赤毛の兄弟達よ。彼女がその日記を持っている姿を目にした事は？」

「いや……僕は知らない。お前達は？」

「夏頃に見たぜ」

「は!?!」

双子の重なり合う答えに、監督生のウィーズリーと小型犬のウィーズリーが重ねて吠えた。

「ハリーが家に来て少し経ってからかな」「そう、あれは僕らが未だ若かった頃」「あの庭小人との激闘の日々」「忘れもしない、照りつける灼熱の太陽」「草むらを揺らす夏風」「迸る若さ」「ライ麦畑には愛が満

ちていた」

「軽口は挟まずに話してくれ」

「真面目に話すには重過ぎるだろ」

軽い口調でありながら、鉛の秘薬を飲んだが如く、双子の手振りは重々しかった。

「……それで？」

「ハリーと一言二言喋ったら、直ぐにどっかに消えるもんだからさ」「その内に緊張し過ぎてブツ倒れるんじゃないかって」「それで後を着けたら」「一心不乱に何かを書いていた。多分それがその日記じゃないか」

「随分と冷静に語るものだな。同じく妹を持つ者としては、気が触れそうな程に心配すると思うのだが。日記に執着している事も、日に日に様子がおかしくなっていた事も。同学年のケントは、ハロウインの夜からその少女が憔悴していったと言っていたぞ」

「そりや、様子がおかしいって事は分かってたからさ」「ジニーは秘密の部屋がどうこうって、それでビビってる様な子じゃない」「何か知ってはならない事を知ったんだと思っただよ」「例えば、知り合いの誰かが継承者だとかね」「パースを避けまくってたのもお監督生様に知られちゃまずいんだろうなって」「でも、日記に操られてたって言うなら成程そりやそうかって」「アンタの言う事を全部信用してるわけじゃないけど」「普段通りじゃないジニーと普段通りのアンタなら、どっちの言う事を聞くべきかって」

リドルの記憶は言っていた。兄達が探りを入れてくることが腹立たしいと書き込んだと。妹の身を案じる言葉を被害妄想で曲解したのではなく、事実としてそうだったのだ。

「……重過ぎだよ。ジニーがほんとにこれをやったってんならね」「多くの善良な魔法使いでさえ、ヴォルデモートの言葉に誑かされ、貶められてきたのじゃ。殊更にこの子が悪いとは言えんじやろう」

「そんな！ あなたは娘を信じていないのですか!? 娘がそんな恐ろしいことを、本当にやったとお考えですか!?!」

ジネブラ・ウィーズリーの手は強く結ばれている。爪は掌に食い込

んでいるのか、血の匂いがした。母親はその手を包み込み、庇護者であると信じていた校長に叫んだ。

「そうであると疑う根拠も、そうではないと信じる根拠もある。モリー、先程君に刃を向けた様に、この子等は過激じゃが、彼らの道理に従ってはいらぬ。訳も無く幼子を貶める事を恥と思う事は、わしらとも共通しておる。じゃが、アーサーの言う通り、些か話の筋が曖昧であるとも言える。

わしが今大切に思うのは誰が悪いではなく、何故こうなったかじゃ。ジニーが本当に自分の意思で秘密の部屋を開いたのであれ、操られていたのであれ、その原因は日記じゃろう。では、真の悪はその日記をどの様にしてジニーに届けたのじゃろうか。

ジニー、教えてはくれんかの」

校長は語りかけている様で、心を暴いていた。その目はジネブラ・ウィーズリーの目に注がれている。心を見透かす力がありながら言葉で問うことは、ある種の様式にこだわったものか、あるいは見えた心と聞いた言葉との整合性を測る冷徹な思考か。

「知らない……ママが用意してくれた本の中にそれがあつたの……日記まで誰かのおさがりなんだって思った……試しに書き込んだら、リドルが応えたの」

「そんな……そんな……ジニー！　パパはいつも言い聞かせただろう！　どこに脳みそがあるか分からないのに勝手に考えるものは信用しちやいけないと！　そんなもの、闇の魔術がたっぷり詰まってるに決まってるだろう！　どうしてパパやママに言わなかつたんだ！」

「じゃあ言つたら新品の日記を買つてくれたの!?　制服さえおさがりなのに!?　貧乏なのにパパはどこに脳みそがあるか分からないのに勝手に考える車を作つて、ロンがそれを飛ばしたから罰金だつて！」

「ジニーー！」

ウィーズリー夫人は娘の頬を張り飛ばした。感情的ではあれ、母親として娘を護っていたのである。親、あるいは夫を否定されれば、同じ様に感情的に娘に当たるだろう。

「聞くに堪えんな……娘の身を案じる父親にその稼ぎを非難すると

は。男兄弟が多い中で、唯一の子女に使い回せるものは少ないだろう。恥を忍んで知己や同僚に継ることも有っただろう。その苦労と愛情を受けて育った結果が……これか」

「兄よりも特別な扱いを受け、欲が満たされない事に異常なまでの不満を抱く。入学当初に振りまいていた無根拠な優越感は同じ学年だからよく知っています。だからこそ、双子先輩の言う通り、秘密の部屋騒動でこんなにも怯えるとは思えなかった」

「無根拠な誹謗中傷は止めてもらおうか。ジニーが悪いことをしたと言うなら、それは規律に則り、咎められるべきだ。だが、それは行いについてだけだ。性格や素行は関係ないだろう」

監督生の制止の言葉で、ケントが肩を竦めた。

「それに、証拠もない。校長が調べても何一つおかしなところの無い出所不明の日記の残骸と、君達の証言だけだ。秘密の部屋に入り、怪物と渡り合ったという、君達だけの証言だ。なら、君達が妹を部屋に招き、妹を脅している。そう言うことだって出来るだろう」

「物的証拠がないから俺達を疑うというなら、勝手にすればいい。秘密の部屋の仕組みは、そうした証拠を残せないものだからこそ、継承者以外に暴かれる事は無かったのだ。俺達に提示出来る物など何一つない」

「それじゃあダメだ」

不意に、ポッターが口を開いた。その目はベッドの上で震える少女に注がれている。

「僕は、継承者だと疑われた。僕は確かに血文字を最初に見た。僕は確かに皆の前で蛇語を話した。僕を継承者だと言った2人が石になった。物的証拠なんてものではないけれど、誰もが僕を継承者だと思った。僕自身でさえ、僕が何者で、僕が何故グリフィンドールに入ったかも分からない。

「だけど、僕は継承者じゃない。ボーン達が秘密の部屋を解決した……それで誰が納得するんだ。」

疑うなら疑う理由が、信じるなら信じる理由が無きやダメだ。秘密の部屋は、閉じただけじゃ解決しない。50年前から今日までずつ

と、解決なんてしていなかったんだから」

誰しもが口を噤み、その中にすすり泣く声だけが残る。

お姉様とドロテアは狩人だからこそ、死に瀕しても意識は残っていた。では、石になった学徒はどうであろうか。マンドレイクの生育は未だ途上である。目が覚めた時には幾月も経ち、恐ろしいポッターは平然と過ごしている。秘密の部屋は閉じられたとだけ知ったところで、ポッターに対する疑いは消えないだろう。森番がそうであった様に。

「ボーンのお兄さん。教えて欲しい。たとえそれが僕にとって辛いことでも、僕はそれを知らなければならぬ。僕自身が僕を信じる為に」

「……いいだろう。長くなる。俺達が聞きたい事は聞いたことだし、部屋を移そう。俺の言葉を彼女が聞けば暴れ出すだろうしな」

†

校長室に入るのは2度目である。鳥籠の中で、醜い何かが嗄れた鳴き声を上げていた。

お兄様はほぼ全てを語った。秘密の部屋と呼ばれるスリザリンの祭壇の意味と、継承者の殺し方を除いて。

総括すれば、この2か月間に学内を脅かした事件は、継承者の亡霊の語る通り、恋心をこじらせた挙句の果て、盛大な自作自演だったのである。無論、リドルの亡霊がポッターとの邂逅を望んだという事もあるが、それだけでは成立しない。

少女の秘した想いを暴くとは無粋であるなどと誰が咎めるだろうか。そもそもあれは、想いとすら言えるものだろうか。恋などしたことはないが、それが胸の奥を密やかに締め付け、甘やかに掻き乱すものである事は知っている。それは、相手を想うからこそ、相手の一挙一動に一喜一憂し、自分が相手にとって好ましいものに成ろうとする在り方ではなかったか。そう規定すれば、ヘルマンのドロテアへのそれは恋ではなく愛だったのだろう。相手を想うからこそ、ヘルマンの言うところの淫らな装いは止めろとした。

いずれにしても、ジネブラ・ウィーズリーはハリー・ポッターとい

う偶像を欲しただけの事である。童話の中の白馬の王子様に娶られるお姫様に憧れただけの事だ。物語に自分を投影したところで、真に絵本の中の王子様に想いを寄せるはずもない。つまり、ポッターに真の意味で恋をしているわけではない。

「申し訳ない。それしか、私に言える言葉はない。子供達には財産が無い代わりに愛情を注いだつもりだった。あの子には姉が居ない分、寂しくない様にと特別に目をかけた。しかし、それは娘を歪にしてみせた」

「アーサー。改めて言うがの。ヴォルデモートは人の心の弱さを知っている。その弱みにつけ込み、意のままに操る」

「しかし、彼は操られていない」
「どうかの。」

狩人達よ、おぬしらを軽んじるつもりはないのじゃが、聞いて欲しい。イングリット・ボーン嬢とグリム嬢を手に掛けられ、おぬしらの中には怒りがある。その上で、何故継承者の言葉は信用しているのか。それは、リドルの言葉に呑まれたからではないのかの。それはつまり、おぬしらがある意味では操られていると言えるのではないかの」

「この期に及んでふざけた事を言わないで頂けるか。継承者の片方は、俺が殺した。ジネブラ・ウィーズリーに利用されたトムは何と哀れな事だろう……とでも思っている？ 何が真実であるかは、あの娘の様子を視れば一目瞭然だろう。そう、校長が視ればな。」

娘の中身を知って衝撃を受ける父親を慰めたいのは分かるが、そのために俺達を貶めるのはあまりにも不誠実だ。先程も言った通り、俺には真実薬を飲む覚悟がある。余計な御託を並べる前に、より単純でより効果のある方法をとるべきだ」

「いや……濟まない。ダンブルドアも、君達も。ジニーの事は家族でしっかりと考える。それと、遅くなったが、ありがとう。どんな形であれ、どんな結果であれ、少なくともジニーの命を救ってくれた」

ウィーズリー氏は頭を下げ、その薄くなった頂点をこちらに向けた。言葉には感謝があるが、内心は複雑であるだろう。他人への感謝

よりも、親としての自責と娘への後悔と赦し、後は賠償の手立てといった様々な感情が大きく膨れ上がっているはずだ。

「礼の必要はありません。元より僕らは事件の解決を目的としており、部屋の機能の物理的な破壊によってそれが達成できない、かつまた、継承者の拘束が不可能であった場合は殺害を検討していました。彼女が継承者……つまり共犯であることについて、惨劇を防ぐという使命とは全く別に個人的な殺意を抱いているのも事実です。」

そこに居る後輩2名は秘密の部屋の入口が曝露された事で、突発的に思い付いた口封じの為に襲撃されました。

特別な血統魔術によって今は快復していますが、本来であればマンドレイクの治療薬でさえ意味を為さない程に失血し、体内に残る僅かな血さえも毒に蝕まれていました。

獅子寮1名、穴熊寮2名、そして僕らの内2名。それらを殺害したとして、リドルにとって戦略的価値は無い。今までの経緯とリドルの語った内容と、先のご息女の態度から推し図れば、リドルに唆された事が前提としても、やはり彼女が自らの意思で襲撃対象を選定したと考える方が合理的でしょう。

全ての責をご息女に求める事は何ら益の無いことですが、直接的に害意を向けられた分、トム・リドルに対するものよりも強く怒りを感じているのは事実です。だから、僕らに礼を言う必要ありません。偶然にも貴方の息女は僕らに殺されなかっただけの事です」

「……子供が余計な気を回さずともいいんだ。娘の責任は、私の責任だ。それを誰のせいにするわけにもいかない」

ヘルマンの性格を何も知らず聞けば、その言葉は継承者へ募らせる恨みを吐露しただけの事に思えるだろう。だが、ヘルマンの意図は別にある。敢えてウィーズリー氏に狩人を恨ませることで、その感情の置き場を作ろうとしたのだろう。だが、ウィーズリー氏はそれを見抜いた。

「偶然、ね」「なあパイセン、もしかしてそれはあのトイレのせいかな」「好きな様に考えるといい」

「なあーるほど？　僕らがパースのイケてないデートを追っかけて、

パスがアンタらを見つげちまった」「その様子を僕らがジニーに伝えちまった」「それで、ジニーは焦った」

「なあーるほど。ならさ、僕らを殺せよ」

双子がヘルマンに詰め寄った。口調は軽薄だが、その目には髪色よりも赤々と炎が灯っている。

「セカンド・ボーンとグリムがやられた原因は僕らだ」「それでジニーにムカついてるんなら、まず僕らを殺れよ」「あ、でも死にたくはないんだ」「やるんなら生き返れる程度にボコしてくれ」

「お前達何を言ってるんだ!?!」

双子の肩をパスとやらが掴むが、双子はクイディッチのビーターである。容易く振り払われ、倒れた。

「兄貴、パーシー・ハードヘッド・ウィーズリー様のアンタには分かんないだろうけどさ。ジニーは未だ学校に通い始めたばかりの子供なんだ。間違いだっけするさ」「僕らだっけ一年生の頃からクソ爆弾を持ち歩いてたわけじゃない。偉大なる先人が僕らに教えを授けたのさ」「そういう人との繋がりがりってヤツが積み重なって、今の僕らがある」「そりゃ僕らだっけジニーがやった事は、悪戯じゃ済まされないと思ってる」「けど、聞いた限りじゃ、今回の騒動はみんなが少しづつ悪いところがある」「親父殿はユーモア溢れるガラクタに金をつぎ込んでる」「お袋は僕らにばっか怒鳴って、ジニーを我儘お姫様に仕立て上げちまった」「ロンはハリーと友達だっけジニーに自慢しまくった」「アンタはこんな時期に監督生の仕事をほっぽりだしてクリスマスデートにしけこんだ」「僕らはそれをジニーに伝えた」

「偶然が重なり合って、それが犠牲者を生んだ。ジニーが死ぬべきって言うんなら、僕らは僕らの罪を罰してもらうべきだ。全部がジニーのせいじゃない。家族でジニーの罪を分け合うべきなんだ。」

「なんか言えよ、パイセン」

監督生の名は、パーシー・ウィーズリーだったらしい。

詰め寄られたヘルマンは怒りを見せる事もなく、渋面を作った。

元よりヘルマンは殺すつもりもない。ただ殺意が湧く程に怒っているというだけであり、そこに父親からの謝罪が為されたところでそ

れは無為である。同様に妹を想うが故の双子の行動にヘルマンが返せるものもない。

「君達の家族愛は賞賛に値する。だが、知った事じゃない。同様に、僕らの怒りも彼女の処遇に関わる事じゃない。僕は彼女を赦さないし、別段彼女も僕らの赦しを求めてはいないだろう。老人になって、ふとそんなこともあったと思ひ出すだけだろう。僕は彼女を死んでほしい程に憎んでいるし、殺したいほどに怒ってもいる。けれど、それで殺してはならない」

「あー……つまり？」

「別に彼女を殺しはしないし、僕らが処断することでもない。

……君達の言葉で言えばつまり、ムカついているからありがどうもごめんなさいも受け取れない」

「成程」「それはともかくとして今度こそトナカイBBQやろうぜ」「中ボーンとグリムもどうだい」

「まだ言ってるのか」

「遠慮いたしますわ。単純に口に合いませんもの」

「どうか本気で止めた方がいいよ。チョルノビリの事故でトナカイ肉とかもろ直撃だし」

「あーなんかマグルがやらかしたんだっけ」

途端に空気は弛緩し、ウィーズリー氏は椅子にへたり込んだ。その胸中はいかばかりだろうか。娘を想うあまりに娘を怪物にした。一方で、それを庇う息子を育てた。それが生み出すものは、息子らへの誇りか、息子らへの謝意か。

「とにかく、俺達の葬送は殺す事によってしか与えられない救済であり、腹が立ったから殺すわけでもない。殺人を厭う事も無いが、軽々しく殺人を犯す事もない。

法の下に裁き、法の下に刑する。そして、刑に服した者を赦す。それこそが人理であり、獣との違いだ。もつとも、怒りを失ったわけでもないし、感情を別としても殺すべきと思えば殺していただろうかな。考えたくも無いがイングリットとドロテア、いや、他の学徒であつても同じ事だが、襲われた者が死んでいたとして、先程のあの娘

の言葉を聞いていたとすれば、即座に首を刎ねていただろう。自らの欲望で人を殺め、窮すれば弱者を気取るなど、最早それは人ではない。ヒトの形をしただけの、人に仇成す獣だ。

貴公らの兄も融通は利かないのだろうが、何も家族を切り捨てる様な冷血の持ち主でもあるまい。家族を慈しむ心と同じ様に、規に適わんとする心もまた人の在り方だ」

「どうだか。ウチの中で規律や節制やらうるさいのはパースだけだぜ」「それじゃなんだい、僕らの家にはヒト一人と6人の庭小人が済んでいるってのかい?」「お我が宿よ!」

「分かっているだろう? 物的証拠が無い故に俺達が継承者だなどと無理筋をぶち上げたんだ。家族に何も感じない、ただの律法学者や祭司であればその様な事はしない」

「うむ。素晴らしいものを見せてくれた。まこと……まこと、家族を想う心とは善き力じゃ。アーサー、お主は父として彼らを誇るべきじゃの」

校長は涙を流していた。普段の薄絹を掛けた様な、何かを秘した様子はなかった。

だが、結局はこれも茶番に思えてならない。無論、双子の兄弟が家族を想う心は真なるものなのだろう。しかし、それによって救われる者は彼の家族だけであり、ポッターにせよ今も石となつている者達にせよ、被つた不利益に対して何ら救済はされていない。事実、ポッターの表情は形容し難いものになつていた。ウィーズリーも思うところは別だろうが、無表情だった。

「彼女の犯した事をなかつたことには出来ん。じゃが、彼女は悪人であろうか。わしはそうは思えん。悪とは、罪を罪と知りながら己の欲望に任せることじゃ。罪を罪と思わぬ子を裁くのは、人には出来ぬことじゃろうと思う」

「世迷言を。それに巻き込まれた者は不運だつたで済まそうと言うのか。ならば私はあんまりじゃあないか。昨年につき今年も友人と姉を傷付けられ、悪意がないから赦せと? いや、悪意ならあつたはずだ。そしてその罪から目を背けたいからこそ、ああして心を壊して罪

から逃れようとした」

「赦せとは言っておらん。罪を知らぬ赤子に手を掛ける事は正しいのかと問うておる。あの子が犯した事を裁くならば、あの子自身がそれを心の底から罪であると悔い、赦しを求めてからでなければ、わしらも同じ様に罪人じやろう。然らば、アーサー。わしはあの子を退校処分にはせん。

人は話すものじゃ。あの子が継承者であったことは、その内に皆が気付くじやろう。あの子がその茨に刺され、罪を知る道を選ぶか、あるいは温かい家族に囲まれて無垢のままに過ごすべきか。それはおぬしらが考えるとよい」

到底納得は出来ない。それによって森番は何ら変わる事は無かった。50年前に継承者でなかったとはいえ、人に仇成す害虫を育て上げたのは無垢の罪である。その咎人はそれを省みる事無く、害虫の楽園を森に築いてしまった。

「第二の帝王を生まない事を願うばかりですわ。50年前、校長はトム・リドルに罪を罪と教える事が出来なかった。彼の才能に目が眩んだ大人は数多くいたことでしょう。なればこそ、その闇に気付いていながらにして、その悪の芽を摘めなかった貴方には大人として……教育者としてより大きな罪があると思います。」

あの子の処遇は帝王と森番を生んでしまったことへの贖罪……あるいは慰めのつもりではなくて？」

暫く黙っていたお姉様が口を開いた。

「被害者として殊更に報いを与えたいわけでもありません。罪を罪と思ひ知らせる事も大切な事でしょう。ですが、校長は余りに人の善性に期待をかけている様に思えますわ。 齡11にして己が欲望の為に人を害することを悪と思えない人間が、あと6年と半年で何になりましょうか。」

自らの行いが全て白日の下に晒されたと知ってなお赦しを乞うでもなく、法の裁きを恐れるでもなく、退校処分を恐れる様な子に何様の様に教えるつもりでいらっしやるのでしょうか。

処分を受けなかったことで、赦されたと思うだけではありません

か」

「あたしも同感。結局それって生徒任せって事でしょ。まともな騷もしないなら、出来るのはヒトの言葉を話すペット以下じゃん。馬を放っておいたら勝手に車を牽き始めるなんてあるはずないでしょ」「では君達は何が獣を人にすると言うのかの。人の中で過ごす事こそ、人を知る術であるとわしはそう信じておる」

校長の言葉で、お父様の言葉の意味を理解した。

ビルゲンワースではなく、ホグワーツで学ぶ意味。

多くの異なる考えを知る事で、より深く人を知る。人を知る事で己の獣を剋せよと。

今のところは人の悪性ばかりが目につくが、ヤーナムの中だけでは決して得られなかった代えがたい友を得た。

ただ獣と向き合い、獣となった者に安らぎを与える。それは狩りではあれ、狩人による狩りではないのだ。人故に人を慈しみ、人と獣となった人とを護る為に武器を握ることこそ、狩人の狩りなのだろう。「単純な事ですわ。ジネブラ・ウィーズリーの所業を詳らかにすればよろしいのです。ポッター君は教員達の不作為と生徒達の憶測で辱められたのです。生徒達は石を投げつけるに相応しい者を知れば、無実の者を黜った罪悪感と、理不尽な恐怖に晒された怒りであの子を苛むでしょう。そうしてあの子は知ることになります。自分が何をしたのか……自分の想い人に何をしてしまったのか」

お姉様の笑みを向けられ、ポッターは目を逸らした。柔らかな口調ではあったが、その笑みは酷薄だった。

お姉様は優しい。それは間違いない事だ。だが、誰にでもその優しさを振りまくわけではない。火は人を照らし、獣と隔する霊長としたが、敵に向けられたときには破壊の権化となる。

「……ふむ。ミネルバとも相談してみようかの。それで、ルシウス。おぬしを招いたつもりはないのじゃが」

「私も足繁く通う御用聞きではないつもりだ」

校長室の扉が開き、マルフォイ氏が現れた。傍には屋敷妖精が侍っている。理事ともなれば符牒は伝えられているのか、あるいは教員か

ら聞き出したのか。

マルフォイ氏は憔悴したウィーズリー氏といきり立っているその子供たちを睥睨し、鼻で笑った。

「やはりダンブルドア、貴方を停職させるという事で決まりましたな。存分に化物狩りに励んでもらおう、そう伝えに来てみれば……騒動はもう解決したと。それならばと顛末を伺おうと思いましたが」

「もちろんじゃ。下手人はヴォルデモートじゃよ。この日記を使って人を操り、秘密の部屋を開いた」

「ほう……」

マルフォイ氏は校長の差し出したリドルの日記を眺め、腕を組み、首を傾げた。

その後ろで屋敷妖精がポッターに向かって身振りで何かを訴えている。おそらくはこの妖精がポッターの前に表れたというドビーだろう。

「ここに居る者を見る限り……ウィーズリー。貴方の娘があの人に唆されたという事か。言われても嬉しくはないだろうがね、お気の毒に」

あまりにも露骨な嘲弄だったが、ウィーズリー氏は何も返さなかった。返せる言葉も無いだろう。官僚に顔の効く貴族であり、この学校の理事である。娘が犯した事とはいえ、ウィーズリー氏の立場はマルフォイ氏の言葉一つで崩れるのだ。

「そう、実に気の毒な事じゃ。最も著名なマグルに親しい純血の一族の娘が、最も著名な闇の魔法使いに所縁のある品を手に入れ、それに誑かされた。ウィーズリー家は闇の魔法使いを生んだ家として汚名を受け、それだけではなく危うく愛娘を喪うところじゃった。その父親が制定したマグル保護法も廃止され、魔法界に再び混乱をもたらすやもしれん、非常に不幸な事件じゃった。どうしてそんなものが、あの子の手に渡ったのか、今でもわしは分からずにいる……ルシウス、君はどう思うかね」

「さて。どこかからか車を手に入れ、それを違法に改造する父親を見て育ったのだ。泉の妖精から貰ったと聞いても私は驚かないがね。

あるいは、あの人が小娘を誑かしたと言うならば、あの人に聞いてみればよろしいのでは」

「そうしたいのは山々じゃが、生憎この日記の魔法は消え失せてしまった。最早これはただのインクで汚れた紙きれに過ぎん。誰の証言も追って証明することは出来んのじゃ」

校長はマルフォイ氏に語る様でいて、狩人を牽制していた。結局のところ、小ウィーズリーを咎人として扱うつもりはないらしい。お兄様が小さく溜息を吐いた。

「僕は知っています」

ポッターがマルフォイ氏に一步踏みよった。

その緑の瞳には怒りが燃え、双眸の間に流れる黒髪がうねる蛇を思わせる。何をやらかすのかは気になるが、お兄様も校長もポッターを止める事は無かった。

「……ふむ？」

「校長先生の言った通りだ。高貴な純血様は穢れた血と仲の良い純血の一族なんて嫌いに決まってる。ダイアゴン横丁の乱闘で、貴方は日記をウィーズリー家に潜ませたんだ」

「私が秘密の部屋を開いた、君はそう言いたいのかね。既に零落している家を貶める為に、わざわざそんな呪具を用いたと？ 子供の想像力は豊かさには驚くが、子供としても分別に欠ける」

「証拠はないけれど、疑うには十分です。それに、証人もいる」

妖精は身じろぎした。星の子が痙攣し、絶命する様を思い出す。

先程マルフォイ氏を指し示した様子とは反対に、自分の名が挙がる事を恐れている様だった。

「ふむ。中々大きく出たものだ。法廷で会うのが楽しみだ。もっとも、私が出廷するのは君が私を侮辱した事についてだ」

「根拠がないわけじゃありません。少なくとも、僕が疑われるよりはよっぽどまともな根拠だ」

「君が継承者であるという噂は聞いていたが……君が疑われる様に仕向けたのも私だと思っているのかね。それも違う。あの時代……あの人が英国に混乱をもたらした時、秘密の部屋は開かれなかった。そ

して君はその人を打ち破った者だ。

つまり……君は闇の帝王以上に、闇に近しい者であると考えても道理は通るだろう。

子供から貰った手紙からそう考える親も多いはずだ。そして子供にミスター・ポッターには近づくなと伝える親も多かったことだろう。

君があの人に勝った理由を、我々は未だに何一つ知らないのだよ」ポッターから確信に満ちた眼差しは消え、唇を噛みしめた。お兄様に語った通り、ポッターは自分が何者であるのかを自分でも分かっていないのだろう。継承者ではなくとも、一般に魔法界で特異なものとされる蛇語を話す能力を持っていたのだ。小ウィーズリーが借り物の力で蛇語を話した事を鑑みれば、自身が母語を話す様に蛇語を用いた事実は相当な衝撃だろう。

「若者をいたぶるのはあまり趣味が良いとは言えんもう」

「向こう見ずな若者に嫉をするのも大人の役目では？」

顛末を聞こうと思えば、寝言を聞かされるとは思わなかった。生徒にせよ、貴方にせよ、どうやら連日の騒動でお疲れの様だ。改めて書面で説明を願いたいものですな。もちろん、その手紙が何らかの訴訟に用いられることも考えてからお書きになった方が良いと忠告申し上げます。

それと、セブルス。引き続き息子を頼んだ。親の目を離れば何をしているか分かったものではない。

ドビー、行くぞ」

マルフォイ氏は背を向け、扉を押し開いた。

双子たちはその姿に中指を突き立てていたが、ウィーズリー氏はそれを咎めなかった。

扉が閉じられると、鈍い音の後から妖精の甲高い悲鳴が階下に落ちて行った。

「マリア、ケント」

「お兄様？」

「マルフォイ氏をお送りして差し上げろ」

当然、マルフォイ氏に向ける疑いが晴れたわけでもない。それを問
い質せとお兄様は仰せである。

校長が仄めかしたマルフォイ氏のウィーズリー家に対する策謀の
真偽は明らかになっていない。家と家の対立など知った事ではない
が、仮にマルフォイ氏が継承者の頒布元であれば、個人的にもヤーナ
ムの民としてもその報いは受けてもらわねばならない。

ハーマイオニーから聞いたとある楽しい夏休みの一日の様に、顔を
合わせれば乱闘にまで発展させる様な者が、英国政財界を牛耳る一族
の長で在り続けられるだろうか。あの風見鶏大臣の方が余程そうし
た社交性を身に着けている様に思える。そう考えると、ウィーズリー
氏との間に生じた殴り合いは突発的な物ではなく、その日限りに仕掛
けたものであったとするのも理解出来る。だが、その息子の様子か
ら、ウィーズリー家との確執は利害を超越した根深いものであるとも
考えられる。

「それは……私なりの方法でしょうか。それとも、極めて淑女らしく、
でしょうか」

「淑女らしさを求めるならイングリットを行かせる。お前とケントで
ある理由を考えろ」

お姉様は森番の連行について周りを言いくるめていた。それに比
して、自分やケントの低身長で幼い顔立ちはマルフォイ氏にとって御
しやすいと思わせるだろう。

「はっ。一所懸命に姫様を守護仕ります」

「ケントもケントで心配になるが……まあ行ってこい。あの御仁は誰
にも話を聞いてもらえず鬱憤は溜まっているだろう。きっと面白い
話をしてくださるに違いない」

「では行って参ります」

「俺達はこの蜘蛛とロックハートの話でもしていよう。あれについ
て、少年も話し足りないだろうか？」

お兄様の視線を受けたウィーズリーが何度も首を縦に振っていた。

扉を開け、螺旋階段を駆け下りる。廊下に出ると夜気が身体を覆
い、寒暖差で鼻の奥がむず痒くなった。蜘蛛の掃討から大分時間が

経った様に思えたが、窓から覗く星座は大して位置を変えていなかった。

左右を見回すと、マルフォイ氏の髪が右手側に煌めいていた。

「マルフォイ様。お話を伺いたいのですが」

駆け寄った足音に気付いたのか、振り返って立ち止まっていた。無視してもよさそうなものだが、お兄様の言葉通り、言いたい事はあるのだろう。

「森番の小屋でも君達を見た……息子から名を聞いたな。ミス・ポーンとは君の事だろう。昨年我が家に来た子女達も口にしていたな」

「我が名がマルフォイ邸で挙がるとは光栄です。」

それで、真実は如何なるものでしょうか。私の姉と友人は怪物の凶刃に一度は倒れました。校長の言が真とすれば、我らは貴公を殺さなければなりません。

我ら同胞に刃を向けた者は、同胞全てが一つとなって、討つ」

マルフォイ氏は鼻で笑ったが、その目に一瞬だけこちらを探る光があった。ポッターの様に頭に血が昇った子供と軽んじるか、あるいは言葉を交わすに値するか見定めようとしたのだろう。

「近頃の若者は出来もしない大言壮語を吐くのが流行なのかね？ 大人としての忠告だ。言葉には気をつけたまえ。君の姉君の様に歳に合わない色香を振りまく事も、君の様に大人ぶった話し方も、本当の大人からしてみれば滑稽でしかない。」

そう身構えなくてもいい。杖を出すつもりはない。話は長くなりそうなので煙を失礼」

マルフォイ氏は懐からシガリロを取り出し、火を着けた。

どうやら一応は話が出来ると裁定されたらしい。

「ふむ。確かに原因は私の持ち物だろう。だが、断じて、学徒に危害を加えるつもりはなかった。ウィーズリー家を貶めるつもりもなかった。単に、我が家に在るべきではない品が我が家に在り、在るべきところ、即ちこのホグワーツに還すべきと思つたまで。闇の帝王となつた旧き優等生の品だ、寄贈してもおかしくはあるまい。」

あの日記が秘密の部屋を開く鍵となる？ 知っていたとも。だが、

秘密の部屋は継承者によってしか開かれないとされていた。今の魔法界に50年前と志を同じくする者は居るのかね。闇の帝王の時代でさえ開かれなかったのだよ。存在するとして、その者は忌々しいあのダンブルドアの下で部屋を開こうと考えるのかね。

結果的には開かれたのだがね。

そもそもだ、私が理事を務め、息子が過ごす学び舎でその様な化物が跳梁跋扈する事態を、私が望むと思うかね。伝説の秘密の部屋なるものが開かれ、マグル生まれが死のうと知ったことではないが、喜び勇んで殺すつもりもない。魔術を教える学び舎にマグル生まれは在るべきではないとは思っているがね。

君の様な年若い子供には分からないと思うが……道理の分からぬ小役人にあれこれと詮索を受けるのは、大変に面倒な事なのだ。私はあの日記を家に置かずに持ち歩いていたが、どこかで失い、かといってそれがどこにあるかは調べようもなかった。新聞に「闇の帝王の日記の所在求む」などと広告を打つかね。魔法省の友人を頼るかね。いずれにしても、若い時分に求めた蒐集品だ。失ったところで僅かな感傷を覚えるだけで、どうということはない。

ところがだ。愚息が誇らしげに語るには、秘密の部屋が開かれたと言う。どの様な形かは知れぬが、日記は学校に流れ着いたのだろう。私の知り得ない方法でダンブルドアの下に渡ったのであれば、あれから私に繋がる様な事もない。放っておけばダンブルドアが何か手を打つだろうと思ってみれば、何の解決も見ず、生徒が次々と襲われ、それにも関わらず魔法省にも我ら理事にも何らまともな報告は伝えられなかった。

認めよう。焦ったと。数十年前にたった一度開かれた秘密の部屋、そこに棲む怪物とやらが、一々生徒の家名を聞いてから襲い掛かると思うかね。息子や知己の子が絶対に安全だとして言い切れようか。理事の中にも在校生を持つ者が居る。一部の者はダンブルドアと対立している私を旗頭にし、校長解任の機運を高めた。彼らは元より分別なくマグル生まれをも迎え入れる方針には反対していたのである。

マグル生まれの犯罪率を知っているかね。魔術師は一代にして大成せず、元の世界に戻るには学も無い。そうした輩は、無知で馬鹿なマグルに杖を向ける事で金を啜る卑しい犯罪者になるしかない。結局、マグル生まれに教育を施したところで、どちらにも成れない薄汚い蝙蝠が出来上がるだけなのだよ。

理事会はそうした教育の現状を憂いている。もともと、そうしたご立派な大義ではなく、単なる保身の為に声を上げた者も居るがね。幸い、私には魔法省の友人が多い。校長を排せば魔法省の手練れが大挙して解決に臨んだだろう。その手筈を調べようとした様は君も見ていたはずだ。

さて、校長の話と言っていたが、あれは全て校長にとって都合の良い妄想だ。恥ずかしながら、私が紛失したという落ち度はあれど、私有家名を貶める様な真似をするわけもない。ウィーズリー家を貶めたいのであれば、わざわざ私が何かをするまでもない。我が家名に阿る者たちは、私が何を言わずとも私に利する様に振る舞っている。そもそも、ウィーズリー自身が自らを貶めたではないか。自らの立場を利用して法を歪め、魔法界に危機をもたらした。あれによって様々な法規が見直される事になる。薄給の小役人達が、手当ても貰えずに日夜を問わず、羊皮紙を束ねる赤い紐を一つ一つ解いていくのだ。たった一人の私心によって崩された秩序を取り戻すために。

加えて言えば、ウィーズリーの小娘がおかしいのだ。私はあれについて闇の帝王の所縁の品で、秘密の部屋に関わるといふ事しか知らぬ。校長が言うには、あの日記によって狂い、マグル生まれを殺そうとしたという事だが、それではこれを所持していた私の方がより強く、マグル生まれを殺そうとしているはずではないのか。私は理事であり、いつでもここに立ち入る事が出来る。ならば、とうの昔に秘密の部屋を開いていたはずであろう。だが、現実として私も家の者も狂ってもいないし、秘密の部屋の開け方やそこに封じられた怪物とやらも知らん。これについては、真実薬でも開心術でも受け容れよう。

「気は済んだかね、お嬢さん」

子供への溺愛ぶりは、マルフォイ氏からも息子からも感じ取れる。

マルフォイ氏にはさらに加えて家名の矜持というものがあるのだろうが、いずれにしても自らの子供の安全さえ危ぶまれる様な手段を以って零落した純血の一族を更に追い落とそうとはしないだろう。森番の件で目にした様に、大臣を連れ出せる程であるのだから、ウィーズリー家に手を下すまでもないとする話は疑うまでもない。

ケントも特に反応無く聞いている辺り、矛盾は無いという判断だろう。

「筋は通っているでしょう。貴公が元死喰い人であるというまことしやかにささやかれる噂が真実であると仮定すれば、なおの事。」

学生の戯言として扱われている、彼の者が再び現れ、再び滅せられたとする言説が事実だとすれば、貴公にはそれに纏わる品を持ち続ける理由が無い。ましてや、今更それで一旗揚げようとする愚か者もないでしょう。昨今、いわくつきの呪具が市場に流れ始めているのも、複数の人間が同じ考えに至っているのではないかと察せられる。ですが、足りません。その屋敷妖精の奇行は秘密の部屋が開かれる前から起きていた。そう聞いております」

ノクターン横丁に流れ出した呪具や闇の帝王所縁の品は、おそらくマルフォイ氏同様に帝王の死を聞きつけた者が放出したものだろう。

だが、明らかにそういった輩とマルフォイ家が異なる事柄。ポッターがあれ程までに強気に出た理由。それは屋敷妖精である。ハーマイオニーから聞く限り、ポッターがウィーズリー家に滞在することになった事も、キングスクロスが閉じられた事も、全てはマルフォイ氏の隣で震えている妖精が原因である。

「ふむ。おそらくその契機となったものに心当たりはある。ミスター・ポッターによって闇の帝王が再び倒れたと聞き、私は蒐集品の幾つかを処分しなければと独り言ちた。正確な文言は覚えていないがね。それがこれにはポッターを処分しなければと聞こえたのだろう。」

それにしても……死喰い人か。随分と噂話を好むお嬢さんだ。だが、民衆は闇の帝王に服従していたという言葉は信じないと言うのに、小娘は日記に踊らされたと思えるのだろう。そうした蒙昧な連中

には氣を付けるといい。ダンブルドアを盲信している輩と、闇の帝王を信奉した者とは立場が違うだけなのだから。あの少年の様に、篝火に集う蛾が正義を謳って毒の粉を撒き散らす」

マルフォイ氏が顎で示した先には、廊下を駆けてくるポッターが居た。その手には布、否、靴下に包まれた何かがあった。大きさからするに、継承者の日記だろう。

「マルフォイさん、僕、あなたに差し上げるものがあります」

息を切らせながら、ポッターは靴下ごとマルフォイ氏に押し付けた。心底不愉快そうに靴下から日記を引きずり出すと、靴下を投げ捨てた。雪の中を歩くうちに濡れたのだろう、靴下は妖精の頭に叩きつけられ、湿った音を立てた。

「やがて君も親と同じく不幸に遭うだろう、ハリー・ポッター。連中も偽善者の愚物だった」

余計な事に首を突っ込むなど言いたいのだろう。

汚れた靴下で包んでものを渡す等、侮辱としても最大級の事をして構わないなどと考える程度には、ポッターはマルフォイ氏を悪と信じて行動している。

先程の説明が全て真実である確証はないが、虚実であればマルフォイ氏は周到な計画を以って今年の惨事を引き起こしたことになる。

既に周囲の讒言によって貧困に陥っている家庭を貶めることを大目標とし、生徒を殺害することを小目標と定め、秘密の部屋の怪物という自身では実在を確認もしていない Hogwartz 城の伝説を用いるという、意味不明な計画である。これを実行したとすれば、狂人ではないか。

リドルの亡霊がそう語り、小ウィーズリーの様子から窺い知れる様に、あの日記を持つだけでは狂気に陥る事は無い。あの継承者が行った事は、言葉で相手の狂気を煽り立てるだけである。お兄様に成り代わろうとしたことも末期の力を使った賭けであり、それが自由に出来るのであればとうにポッターとの対話を終えていただろう。

「行くぞ、ドドビー」

妖精は動かなかった。その手には、マルフォイ氏が投げ捨てた靴下

が握られていた。

「ご主人様が投げた服を、ドビーは受け取った。ご主人様は、ドビーに服を与えた」

「何を言っている?」

「ドビーは……ドビーは自由だあああああ!」

妖精は靴下を高らかに掲げ、歓喜の叫びを上げた。頭骨に比べ大きすぎる双眸からは、涙が湧き出ている。

「小僧、よくも愚弄してくれたな」

ポッターが靴下で包んで渡したのは、侮辱以上にマルフォイ家からこの屋敷妖精の所有権を失わせるという目的であつた様だ。ポッターは満面の笑みで妖精を見つめている。

屋敷妖精は家の財産である。謀られ、それを失うのは子供の悪戯で済むものではない。マルフォイ氏は顔を赤く染め上げ、憤怒を表した。先程までは病的に白い肌であつたものを、ここまで豹変する様子に息子との強い血の繋がりを感じた。

「マルフォイ様。僭越ながら申し上げますが、それが申したのは怒るべき道理もない、無茶な理屈でしょう」

夜気よりも冷えた声が、赤熱するマルフォイ氏と妖精の興奮に差し込まれた。

「……何だね君は」

「ケント・ヤマムラと申します。こちらのマリア・アイリーン・ボーン
の従者とでもお考えください」

「ふむ。して、何か?」

先程から黙って控えていたケントだが、ポッターが来てからは扇を弄んでいた。

「マルフォイ家の屋敷妖精に伝わるしきたりがあるのかは知りませんが、マルフォイ様はそれを投げ捨てただけ。主君が「捨てた」ものを拾えば、「与えた」事になるとするのは些か無茶があると思うのですが。例えば、暑い日に脱ぎ捨てたシャツを屋敷妖精に拾われたらそれは解雇を意味するのですか? 使い古した衣服を捨て、それを屋敷妖精が拾えば解雇になるのですか?」

先程から見ていましたが、マルフォイ様はそれを与えると仰つては
いないでしょう」

「まあそうだな。そもそも屋敷妖精に洗濯を頼んだ時点で与えたとなつては困る……いや？ ホグワーツの屋敷妖精は校長の下に就くのか？ ならば校長は自分で洗濯しているのかもしれないな」

「話がややこしくなるので姫様は黙っていてください。ともかく、屋敷妖精は未だマルフォイ家に所属しているとするのが道理ではないかと思えます。その上でマルフォイ様に申し上げますが、この屋敷妖精は置くべきではないと思います」

「……ふむっ…」

「ドビー。お前は自分の主に疑いが向けられたというのに、何故何も反応しなかった？ 僕なら刀に手をかけるだろう。お前はただ、見ていただけだ。日記と言う言葉に一々震えながらな」

「成程よく見ている。」

そうだ、この屋敷妖精は我が家に仕えていながらにして、家に背く。自らを罰することで、それをしても良いと考えている。贖いさえあれば罪を犯してもよいと考えているのだ。この汚い体に巻かれた包帯も、自傷によるものだ。仕える家を貶める行為だと理解していて、それを行ったが故に自らの身体に火鎧を当てた。我が家にはこれ以外にも多くの屋敷妖精が居るが、この様な醜い傷だらけの者はこれだけだ」

マルフォイ氏は短くなったシガリロを床に捨て、ステツキで小突いて消失させた。あのステツキは中にワンドを仕込んでいるのだろう。

話を終わらせるのかと思えば、2本目のシガリロに火を着けた。

「だが何故、それを分かって居ながらこやつを手元に置いていると思う。」

口封じかね？ 殺してしまえばよいだけの事。

労働力かね？ こやつは意に反することがあると、従っている振りをしてわざと過ちを犯す。そんなものを何故勘定に入れなければならない。

答えは、これさえもマルフォイ家だからだ。どうやら君たちには身

近に屋敷妖精がない様だが、屋敷妖精の「仕える」とは、雇用ではない。一生の主従関係を結ぶことだ。仕える家が途絶えるか、主が衣服を賜すことよってのみ、その関係は崩れ去る。衣服を与えられるとは、屋敷妖精にとって死に等しい恥辱だ。衣服を与えられた妖精を受け容れる家もあるまいが、それを手元に置いていた家もまた、恥辱を被る。故に、私もマルフォイ家として、こやつを召し抱えてきた。自由……か。私とて、社交界ではルシウスではなくマルフォイとして振る舞わねばならない。その重責を怖れる事がないとは言えん。だが、マルフォイ家に仕えていながら、その榮譽を束縛として捉えるか。

もう良い。お前は我が家にとっての敵だ。何処へなりとも行くがよい。尤も、尽くさぬ下僕を受け容れる家も、同胞もあり得ざるものだろう。抛り所のない屋敷妖精は、ただの魔法生物として魔法省に処断される。ましてやそれが元マルフォイ家のものとなれば、より迅速になる事だろう。

その汚らわしい布切れを握り、疾く去ね」

疲れたとでも言いたげに煙を吐き出す様は、虚実であるとは思えなかった。日記にまつわる一連の流れも、先ほど語った通りであるのかもしれない。だとすれば、この場でマルフォイ氏を断罪する権利など誰が持つのだろうか。

「どうか、どうかご主人様。お赦しを」

「赦しを得る機会には既に与えた。そして、潰えた。お前自身の行いによつて。

お前が度々姿をくらませていたことも。

何者かの手紙を隠し持っていたことも。

いずこから戻ってくれば、マグルの下劣な甘味の腐臭を振りまいていたことも。

姿をくらませた直後に、ロンドンの上空を古びた車が飛んでいたことも。

神聖なるクイディッチの試合で何者かが小細工を弄したことも。

私は何も言わなかった。

気付いていないとでも思ったか。我が名はルシウス・マルフォイ。マルフォイ家の全てを掌る者だ。その全ては脈々と継がれたマルフォイ家に捧げるためにある。下僕たちはお前が事をしでかす度に、お前の不義を詳らかに私に伝えた。同胞が主を裏切った事を罰する様、乞いながら」

妖精は震えながら、何か言葉にならない呻きを漏らしていた。老いた赤子、そう表すに相応しい醜さである。

「何か面白い弁明でもあるかと思えば、泣くばかりか。下僕たちからは聞いているぞ。ポッター少年の為にしたことであると。呆れて何も言えんな。」

どうだねポッター君。君はマグルの家で暮らしているのだろうか。これを持ち帰ることは出来まい。魔法省屋敷妖精転勤室？ あんな閑職に追いやられた連中がマルフォイ家の敵に利するかね。ではかの有名なポッターの名を使つて、これの新たな主になる様に魔法界に呼び掛けるかね。そうなれば私は全力で引き取った家を追い落とす」「ふざけるな！　なんて卑怯なことを！」

「卑怯と言うならば、そもそも主を裏切ったそれでしょう」

吼えたポッターに対し、ケントは冷ややかだった。マルフォイ家の名声だの、屋敷妖精のしきたりだのと云ったところで、マルフォイ氏の主張は少なくともボーン家からすれば常軌を逸している。そもそも背反される様な事をしている主にも問題がありそうなものだが、ケントはゴミを見る様に妖精を見た。

「鞍替え、裏切りは世の常でしょう。しかし、それには作法が必要です。主を背中から刺す事は、たとえ動機がどうあれ手法は卑劣としか言いようがない。」

そもそも、家に忠を誓っているからこそ、自罰に至ったのでしよう。つまり心はマルフォイ家に仕えながらも、自分の行いは家への裏切りである事を理解していた。事が露見してなおその主に赦しを求めるとは度し難い浅ましさです。それでもなお、赦しを求められるのであれば、自害を命じてはいかがでしょうか。

応じる様であれば、最期には忠誠を示したとして名誉の中で死ねま

す。応じなければいずれまた主に背くでしょうから放逐して、どこかで野垂れ死ぬ。いずれにしても、マルフォイ様は手元にこれをもう置いておく気はないでしょうから、死ぬのが今か少し後かというだけです」

「お前は悪魔か!?!」

「主に背きながらも忠を訴え、主に赦されるのであれば、僕なら腹を召しますよ。よく勘違いされるんですが、切腹とは名誉の死です。ポッター先輩の為に裏切り、少なくともその日記に関する事柄は解決したのです。恥と知りながら裏切り、そしてそれが果たされたのであれば、自裁するのが必定でしょう。」

僕の姫様への想いを証明しろと言うなら、今すぐ指を詰めますよ。刀を握れないのは困るのでしばらくしたら治療はしますが、痛いものは痛いですし」

ケントは薬学で用いる小刀を袖から取り出した。よく研がれ、怜悧に輝くそれを見て、妖精は呻いた。無理もない。ケントの眼には一切の偽りがなく、口からは恐ろしいまでの忠誠心を吐き出している。

「ケント。私はそれを命じるつもりはないし、我が家にしてもそうだ。お父様は貴公らに仰がれるだけで、貴公らを従者として傳かせるつもりもない。狩人は対等だ。ボーン家とは、夜明けをもたらした狩人が居て、その家にやたら大きい聖堂がくつついているだけだ。私が散々我儘を言っているのは貴公に甘えているだけだが」

「そういう心構えがある、という話ですよ。」

ではマルフォイ様、いかがなさいますか?」

「……もうどうでもよい。死ぬなら目のつかぬところで、その靴下でも自らの衣でもよい。それで自らの首を絞めよ。二度とマルフォイ家に近づくな」

マルフォイ氏は屋敷妖精を視界に入れることなく告げた後、立ち去った。

星明りの射し込む廊下には、梟の鳴き声と、妖精の泣き声が響いた。「……ポッター。これの為を思ってしまったことなのだろうが、それはこれの行いもそうだ。お前にとって、良かれとしてやったこれの所業は

悉くお前の不利益となっただろう」

「言わないでくれ。僕はこんなつもりじゃなかった」

「これもそう思っているでしょうね。ただポッター先輩を助けただけで、家から放逐されるとも思ってたでしょうし、単に罰を受ければいいとも思っていたんでしよう。」

恥知らずが。いつまで泣いているんだ。お前の場所はここではないだろう」

この数か月を見てきて、ケントがこうまで言葉を荒げるのは珍しい。自ら定めた従者という在り方に沿わないのだろう。指を切り落とす時まで語った目は狂気ではなく虹の光を放っていた。独善と評すべきものだろうが、一方でポッターの行いも独善によるものだ。

「……ボーン、君の家で——」

「ダメだ。お前の責任だ。これが我が家を裏切ったとき、お前はこれを殺せるのか。それとも代わりに死ぬのか。これはマルフォイ家で虐げられていたのだろうとは思う。だが、裏切りの味を知っている者を、同情だけで易々と受け容れる程、我が家もヤーナムも甘くはない」

「ポッター先輩、蜘蛛の毒でも頭に回りました？ マルフォイ家が何をやったのかは実際のところ分かりませんが、他人を巻き込むって事なら貴方も変わりませんよ。思い付きでマルフォイ家に喧嘩を売って、手に負えないからって他家を巻き込む？ 何考えて……いや、考えてないからこうなるのか。」

先輩のしたことって、他家の家具を壊そうとした様なものですよ。結果的にマルフォイ氏も納得していた様なので何ともないでしょうけど、普通なら訴訟ものですよ。貴方、そうなったときに何をしますか？ そんなつもりじゃなかったと釈明するんですか？ そういう責任を学生だからって気軽に頼むのはどうかしてるんじゃないですか」

「止めるケント。そこまでだ。別にポッターの肩を持つわけでもない。お前が何故怒るのかも分かる。だが、鞭を打ってもいいとは思わない。去年それで私は痛い目を見たからな」

「姫様がそう仰せならば。けれど、僕の主を気軽に面倒事を頼める気

安い同級生と見くびられたこと、僕は忘れませんからね」

「行くぞケント。腹が減った。ポッター、お前も同じだろう。」

それとな、校長にでも訊いたらどうだ。それを受け容れる様な場所はあるかと。今世紀で最も偉大な魔法使いとやらであれば、何かしらの智慧もあるだろうさ」

校長の入れ知恵か、ポッターの思い付きかは知らないが、校長はポッターを止めなかったのだ。ただの残骸でしかなくとも、保管すべき呪具の残骸である。それを持ち出してしまうなど、ポッターが出来るはずもない。ならば、妖精の追放にせよ、ポッターの失意にせよ、責任は校長が負うべきものだ。

うなだれたままのポッターを残し、校長室へ向かう。

宴は終わったのだろう、星見台のある驚寮棟の窓から光が漏れている。

「姫様。良かったんですか、アレで。多分校長はここで匿うでしょう」
「それもまた針の筵だろう。主を裏切った屋敷妖精が、屋敷妖精達の世界でどう扱われるか。それを戒めとして校長に尽くすか、あるいはそれに耐えきれずまたも裏切るか」

「まさしく呪いは軛だと。軛を失えば、車を牽く事もないただの獣ですからね。それと、ポッター先輩の事も。随分と甘いじゃないですか」

「あいつも今年はただの被害者だ。森番の件にしても、去年と異なり、英雄願望による愚行ではなかった。殊更に責め立てる気には成らないさ。」

なのに、これからあいつはまた同輩達に裏切られるぞ。あれだけ継承者扱いされていて、後数時間もすれば仲良しこよしだ。反吐が出るな。石を投げつける群衆の一人にはなりたくない。

それと……一番は後輩に同じ想いをしてほしくないだけさ。お前があいつを追い詰め、自傷でもされてみる。お前はそれを悔やむ事になるぞ」

「悔やむ？ 自業自得じゃないですか。ロックハートと同じでしょう」

「……なってみないと分からないものかもしれないな」

クイレル・クイリナス。

いかな奴が悪人であれ、それが最後の一撃であれ、言葉によってクイレルの心を壊した。ただ怒りに任せた結果は、明確な殺意を以って獣を狩るそれとは異なる。覚悟なき攻撃は自らをも傷つける。名聲の為に幾人もの記憶を奪い、それでいて何も感じない精神異常者とは違うのだ。

この5か月を共に過ごしてみて、ケントはそうではないと知っている。だからこそ、その傷を負って欲しくはない。

ヘルマンからしてみれば、先輩面をするなど笑うだろうか。

ロスマリヌス

聖歌隊の聖歌隊と聞いて、ハーマイオニーは何を想うだろうか。ヘルマンはその聖歌隊の聖歌隊である。ヤーナムの伝統的な聖歌もロスマリヌスの奏でる旋律もグレゴリオ聖歌とほぼ同様であり、血への欲求と悍ましい狂気に冒されていたとして、美は普遍的なものなのだろう。

新年には聖歌隊の歌声がロスマリヌスの霧に包まれた大聖堂から街に響く。その後には、お父様からのお言葉がある。

お父様は「俺には民衆の為になる話なんか出来ないよ。アンナリゼ女王の方が威厳あっていいじゃないか」と、この行事を嫌がっているが、夜明け以来の伝統となつていられない。お言葉と言つても短いものだが、それでも街の者は「お言葉がなけりや新年つて感じはないからね」とありがたがっている。

「ヤーナムの皆さん。新年明けましておめでとうございます。今年も子供達が健やかに育つ様に、大人達は励みましよう。子供達はその姿を見て、健やかに育ちましよう。

今年を迎えられたことを先人に感謝し、今年生まれる命を祝い、ヤーナムの皆で育みましょう。皆に遺志の加護と祝福があります様に。

えー……毎年の様に手短に済ませたかったです、今年も業務連絡もあります。ホグワーツ魔法魔術学校の森でアクロマンチュラの群れが確認されました。英国魔法省からの要請に基づいて、既に数名はホグズミード村の警備に当たってもらっていますが、近く森を掃討する事になります。参加したい方はビルゲンワースに詳細を聞いてください。ちよつとした小遣い稼ぎにはなると思いますので、俺も行けるなら行きたいです。長老方からダメって言われました。残念です」
狩人にとっては単に大きな蜘蛛でしかなかったが、魔法省により最大級の危険と認定されている生物である。当然魔法省だけで対処できるはずも無く、ヤーナムに悲鳴の様な駆除依頼が届いている。

お姉様とドロテアの負傷を隠蔽した事について散々なお説教を頂

いてからホグワーツに戻ると、休み明けに催される祝宴の準備が進められていた。犠牲者たちは未だ石のままであるが、騒動は一応解決しており、今年は盛大な宴となるだろう。

「君への手紙だ」

談話室でケントが茶を淹れるのを待っていると、寮監が現れた。ケントがもう一つ器を用意したのを見て、寮監は「不要だ」と告げた。

寮監から手渡されたのは、銀の装飾があしらわれた黒い封筒だった。黒い手紙となると不吉さを思わせるが、滑らかに処理された重厚な羊皮紙はそれが高価なものであることが分かる。

朝食はヤーナムで摂ったため、梟が寮監に届けたのだろう。知恵の女神の使いとはいえ、鳥とは思えない知性である。

「マルフォイ家のものだ」

「私に？ あ、いえ、まずは挨拶を。明けましておめでとうございませう」

「おめでどう。君は理事の眼鏡に合った様だな。吾輩には校長の憶測をそのままにした事への恨みが綴られていた」

何がめでたいのかと言わんばかりの寮監だったが、一応は返礼があった。寮監とマルフォイ氏は旧友であり、両者ともに元死喰い人であったという噂である。マルフォイ氏からしてみれば裏切られたと感じるのも無理からぬことだろう。

マルフォイ氏から聞いたことは、その後に校長室で語って聞かせた。ウィーズリー家は訝しんでいたが、校長はマルフォイ氏の思惑とは別に何かを納得した様だった。

「ああ、やはりその通りです。感謝状でした。あと小切手ですね。頂いて良いものなのでしょうか」

額は3,000ガリオンだった。狩人一人当たり500ガリオンの計算だろう。狩人からしてみればさしたる金額でもなく、蜘蛛狩りに参加すれば文字通り片手間で得られる額であろうが、一般的には相当な大金である。様々な思惑があるのだろう。

「額は知らないが、マルフォイ家にとってみれば大したことでもなからう。諸君の働きは吾輩のたった50ガリオンで贖われるもので

もあるまい」

「……光栄です」

そもそも寮監の私財から支払われる事の方が異常である。あの夜、わざわざ校長室でお兄様に報酬を支払ったのは校長とウィーズリー氏への当てつけだろう。校長の思惑は狩人に依頼でも使命でもなく自らの意思によって事件解決に当たって欲しいといったところだろうが、力あるものの責務とは無償の奉仕ではない。

寮監もまた無償で解呪薬の作成を強いられているのだろうと考えると、この500ガリオンの内から幾らかを寮監への贈り物に充てるべきだろうか。あまり喜んでは頂けないだろうが。

「それと、伝えることがある。森番は収監される事になった。杖の不法所持、魔法生物の違法飼育と公務執行妨害の咎でな」

「公妨？」

「左様。アクロマンチュラの駆除を聞き、激昂して暴れたそうだ。流石に校長も庇いきれん」

「校長と言えば、停職はどうなるのです。後任は副校長の繰り上げ人事でしょうか？ 少しはまともになると期待したいところですが」

「停職は解除された。蜘蛛の繁殖の報を聞き、理事会が撤回したのだ。他にどの様な爆弾が城に埋もれているか、吾輩にも分からぬ。校長に据えておいた方が自分達の責任は軽くなると考えたのだろう」

「賢いことで」

「見習いたまえ。力は万能だが全能ではない」

「心がけましょう」

「よろしい」

†

騒動の解決が為されない限りは子供を休学させるつもりだという家も多かったが、大抵の子供がホグワーツに戻ってきていた。秘密の部屋は解決したとだけ伝えられても納得は出来なかっただろうが、詳細なバジリスクの説明が説得力を補強した。依然として誰が継承者であったのかは説明が無かったが、少なくとも凶器が見つかり、それを封じたという事で安心は得られたのだろう。

戻って来なかったのは、非魔法族生まれの者だった。魔法界では魔法至上主義者によって度々騒乱が起きた事や、学校にその思想に基づく怪物が潜んでいることなど、入学時に説明されていないだろう。まともな親であれば、事実を知って子供をその様などころに行かせるはずもない。

ではグレンジャー夫妻はまともではないのかと問われれば答えに窮する。ハーマイオニーは休みが明けるなり図書館からバジリスクの資料を軒並み持ち出し、それを狩人の前に並べた。

「学校の説明は欺瞞ですよ？ 本当にバジリスクだとして、何も食わずにずっと生きていられるわけありませんし、何の痕跡もないなんておかしいですよ。それに、蛇が襲ったと言うなら、蛇と話せるハリーが疑われたままじゃありませんか。

……それとも、ハリーが無自覚なだけで、継承者は本当にハリーだったとか？」

「グレンジャー嬢、君の知性には心底感服する」

バジリスクの説明を始めるハーマイオニーに、お兄様が苦笑しながら拍手を贈った。

「マリアが説明しただろうと思っていたんだが」

「明けましておめでとう。秘密の部屋は解決した」とだけ書かれた手紙を頂きました。お兄さん、図書館に行けない事をどれ程もどかしく思ったか分かりますか？」

「俺に似て筆不精だからな。赦してやってくれ」

ハーマイオニーが睨んでくるが、本気で不愉快になったわけでもないだろう。

「お茶をどうぞ。あー……お菓子は姫様がパーキンソン家から頂いたものしかないんですが」

「ありがとうケント君。お茶だけ頂くわ」

ハーマイオニーとパンジーが犬猿の仲である事はケントも知っている。

ケントは水筒からティーバッグの入ったカップに湯を注いだ。談話室であればまともな物が出せるが、獅子寮生を蛇寮に入れるなど出

来るはずもない。

「グレンジャー、君のご賢察の通りさ。秘密の部屋の怪物は、バジリスクではあるがバジリスクではない。バジリスクの性質を持たせた魔力の塊だ」

「ツァイス先輩が仰るならそうでしょうとも。ですがそんな事が出来るなら、死の呪詛で事足りるはずですよ。何故そんな事を？」

「思想に拘る人間は、様式にも拘るといっただけの事さ。ダイエツトコーラとパインを載せたピザで聖餐をする教会が有るなら見てみたいね。もつとも、継承者がその思想をどこまで理解していたのか分からない。」

秘密の部屋とは、外敵への防衛や非魔法族の排斥……そんな事の為に使う施設じゃなかったのさ。その根底となる思想は未だ未解明だけれども、魔法生物の死骸から魔力を抽出するための祭壇が有った。あれは、聖堂であり、霊廟だったのさ。その魔力から怪物を生み出すための術式を誰かが書き加えた。それが秘密の部屋の興りだ」

ハーマイオニーは茶を一口含むと目を閉じ、何度か頷いた。茶の味を楽しんでいるわけではなく、ヘルマンの言葉を反芻しているのだろう。2年生でこれを理解しようと思えるものがどれ程いるだろうか。

「そんな事を可能にする程の死骸なんてどこに……」

「君は歯科医の娘だったね。歯垢とか舌苔と言えば分かるかな」

「つまり、細胞程度の死骸……魔法使いの……その……排泄物が魔力の源という事ですか？」

「大正解だ。もつとも、トイレがこの城に作られたのは18世紀。蛇の術式とは年代が合わないから、最初に歪んだ純血主義思想に被れた継承者は、殺した非魔法族生まれの死体を再利用しようとしていたのだらうね。それが18世紀になって、その時代の継承者がより効率的な方法を考案した。」

その思想の善悪はともかく、非常に優れた魔術師だよ」

ヘルマンとドロテアは幾度となく祭壇を調べ、ビルゲンワースに報告していたが、結局どこにもスリザリンの聖堂を秘密の部屋に変えた者の痕跡は見つからなかったという。闇の帝王がその名を以って支

配しようとした事を考えれば、秘密の部屋を作り出した「偉業」を知らしめようとするのはおかしいと2人は言った。だが、お兄様とお姉様は「スリザリンの偉業」に自身の名を書き加える事を冒瀆と考えたのだろうかと言った。崇敬していればこそ、ロックハートと同じ事はしないだろうというケントの言葉が決め手となった。

「……そんな事が出来るからこそ、魔法の力を絶対視して、非魔法的なモノを軽んじたのかもしれないね」

「絶対か。今や遺骨から永遠の輝きを作り出せる時代だ。人の思索に絶対はないな」

「遺体を焼いて、その遺骨を蒸し焼きにして故人を偲ぶ。彼の大工も人々の罪を水に流せと父に頼むでしょうね」

「レバノン杉が高騰するな。方舟にするなら縁起がいいものの方が良いだろう」

「罪の赦しを金で買う。神も共産主義を信奉したくなるでしょうね」

ハーマイオニーが顔を顰めた。

「貴公を揶揄ってるわけじゃない。お兄様とヘルマンなりの人間賛歌だ。人に及ばぬ智慧を冒し、暴き、我が物にする。未知、秘密……神秘の冒瀆こそヒトが人となった理由だよ」

「理解、分析、倫理、判断、解剖。それらの言葉を日本語で表して、それらを文字毎にバラバラにして意味を整理すると、全て「バラバラにする」という意味を持ちます。ああ、整理もそうですね。分かつ事は、理解なんです。」

グレンジャー先輩、貴女は神を信じますか？」

「唐突ね。ヒトはサルが進化したものとは思っているけれど、宇宙は神が創ったものだとも思っているわ。別にそれが偉大なる知性と呼ばれるものでもいいけれど」

「最近は見えざるピンクのユニコーンなんて神もいるらしいですね。」

取りて食べよ、これは我が肉なり……聖餐の秘儀とは神の理解です。理解し、取り込む事で教えを継承する儀式なんですよ」

獣喰らいのヴァルトールが教えられることも無く、神の声も聞かず、血の本質である虫を見る事が出来た理由は、理解しようとしな

かったからだろう。神の奇跡は信じる者にしか現れず、神を信じるには神の奇跡を見る他ない。獣狩りが葬送であるなど、彼にとつては奇習にしか見えなかっただろう。故にヤーナムの民の信仰とはただの血液を媒介する寄生虫感染症であるとみなしていた。

だが、獣を狩り続け、血を浴びる事で、彼はいつしか人を獣にさせる血の力を信じてしまった。自らを辱めたローマの百卒長にも奇跡が現れた様に。

「つまり？」

「未知を暴いて智慧として、それを継承するのが人なんです。神を神として崇めるだけでは、人ではありません。そういう意味では、祭壇を秘密の部屋に変えた継承者は、秘密の部屋をただの伝説としていた者達よりも、遥かに人らしかった。その様な者は、魔術の力を絶対のものとして安穩とすることは無かったでしょう。だから、非魔法族を恐れ、それらを排撃するための備えを作ったんです」

「空には人工衛星が飛び交い、深海を探查艇が照らす。地中に行けずともゼノリスと電磁波が地底世界などない事を教えてくれる。ところがグリンデルバルドの警句を忘れた魔法族は、未だに杖が使えないから非魔法族を猿だと思っている。いつしか魔法界の秘匿も破られるだろう」

「レコードはカセットテープに代わって、もつと軽くて薄い円盤に650MBが収まるんだから、あたしの掌よりも小さな機械に図書館中の本をかき集めても足りないくらい、ぎっしりと文字が詰まっている時代がきつと来るよ。機械が人と同じ様に思考する時代もきつと。そんな時代に、魔法が魔法であり続けられるかな」

「高度に発達した科学は魔法と区別がつかない、ですか？」

「その通り。そして継承者達はスリザリンを信奉するが故に、スリザリンの偉業を更新して、スリザリンの名を永遠にして絶対にしたかったんだらうね。それに比べて、当代の継承者はただの墓暴きだ。敬意も理解も無く、ただ利用しようとしたんだ」

「ツァイス先輩は焦らすのが上手いですね。恋人は相当怒ってらっしゃるんじゃない？ 継承者は誰だったんですか？」

ハーマイオニーはドロテアを見ながら言った。正式に付き合い始めたのかは未だに聞いていないが、ここ数日はドロテアがヘルマンに突っかかっているところを見ていない。

「前者の質問は無回答。恋人がいないからね。後者は幼き日のヴォルデモート卿とジネブラ・ウィーズリーだ」

「……そう、ですか」

「驚かないのか」

「驚いてはいるわ。けど、納得も同じだけ。あの子、ハリーと一緒にいる私に嫉妬してたもの。私にそんな気は一切ないのに。あんな目、1歳が出来るなんて思わなかった。マリアが本当に怒っている時は瞳が虹色に光るけど、彼女が私を見る目には暗くて底冷えする様な憎しみを感じたわ」

「その憎しみがトム・リドルと同調した。ヴ卿は本名をトム・マールヴォロ・リドルという。50年前、彼は秘密の部屋を開き、そして永遠に継承者であり続けるために、自身の記憶を自分の日記に封じた。その日記が巡り巡って小ウィーズリーの元に流れ着き、そして小ウィーズリーはリドルの記憶から秘密の部屋の知識と蛇語の能力を得た。ハロウインの夜は唆された様だったが……その後、借り物の力に溺れ、自身の欲望のままに振る舞う様になった。」

ハーマイオニーの感じたあれの憎しみは本物だ。あれは貴公を本気で殺すつもりだったと、リドルの亡霊は語ったよ」

ハーマイオニーはカップを両手で包み、僅かでも多くその温もりを得ようとした。夏にお父様から聞いた言葉の通り、普通の子供は自身に悪意が向けられることに慣れていない。ポッターが吐いた理由も、校長から理由の分からない試練を与えられた事に、恐怖を覚えたせいだろう。

「それで彼女は？ それに、ハリーに疑いが残ったままじゃない」

「小ウィーズリーはしばらく医務室で静養だそうだ。全ては闇の帝王のせい、子供はその口先で踊らされただけ……お咎め無しとのことだ。物証がないのだから追及も出来ない。もつとも、あの様子を見た者であれば、彼女が継承者である事は間違いないのだが。どうあれ、

法的な裁きは与えられない。校長曰く、学徒との交流で自らの罪を知り、更生するだろうと。私は自分が少年院に通っているとは思いませんでした」

「蛇寮は監獄ですけどね。ポッター先輩についてはその内忘れられるでしょう。グレンジャー先輩が戻って来られるまでに、疑って悪かったなんて軽々しい謝罪をポッター先輩が受け容れる姿を何度か目にしています。だからでしょうか、ポッター先輩に掛けられた疑いについて教員達は何も言っていない。それこそがポッター先輩が疑われる理由になったというのに」

寮生や卒業生の金によって美麗に整えられているために普段意識することは無いが、そもそも蛇寮に組分けられたからと地下牢に居住させるといふ発想は差別主義ではないのか。他寮の内装を見たことは無いが、星見塔と地下牢のどちらで過ごしたいかと聞かれて後者を選ぶ子供はそう多くはないだろう。

「……そう。魔法界に未成年の更生施設は無いの？」

「無い。そもそも魔法界の監獄は刑務所の様な更生を目的としていない。重犯罪者は杖を折って放逐されるか、監獄で気が狂うのを待つか。一般的な魔術師にとって杖は生命線。杖を失えばただの非魔法族と変わらない、だから魔術師に危害を加えることは出来ない。後はどこでなりとも野垂れ死ねということ。監獄で思い出したが、森番は杖を折られた上で放校処分だったらしいが、杖の不法所持、危険生物の違法飼育の咎で収監されたよ」

「竜の件かしら？ 今更？」

「アクロマンチュラ……人肉を好む大きな蜘蛛だ。50年前に森番はそれを孵化させ、それが秘密の部屋の怪物だとされて放校処分となった」

「冤罪じゃない」

「当時はな。どこから番の個体を手に入れて来たのか、今や森で大繁殖している。当時はともかく、現行法では違法飼育にあたる。今日から私達もその駆除に駆り出される事になっていてな。森から爆音が聞こえたり、火柱を見たりしても気にしないでくれ」

ビルゲンワース先遣隊からは既に森を焼き払いたいと嘆きの声が上がっている。春になり雪と寒気が過ぎ去れば蜘蛛は活発になり、駆逐することは不可能になるだろう。取りこぼせば森の外で卵が孵り、その先の予測は付かないとされている。

「なんでそんなものを育てようとしたのかしら」

「さて……ナイフや銃に憧れるのと同じか？ ツァイス教授の見解は？」

「自分が殺してしまわない程度の強度が有るペットが欲しいのさ。非魔法族を見下す傾向もあるし、本質的には支配願望が強い。法や権威、それに加えて人倫に対しては反抗的あるいは無関心だが、信奉する校長には忠実。社会よりもごく身近な関係性を重視する傾向。父母のどちらかが暴力的で虐待を受けていたんだろう。犯罪の因子は遺伝するという言説もあるけれど、幼少期の経験がより大きく影響する」という説が支配的だね」

「精神科医か何かですか？ それとも、ハンニバル・レクター？」

「一応は医療者の端くれだけれど、何の根拠もなくそれっぽいことを言っただけさ。楽しんでもらえたかい？」

「呆れた。悪趣味過ぎます」

「それは話を振ったマリアに言ってくれ」

ハーマイオニーの軽蔑にヘルマンが肩を竦めた。冗談ではなく本当に意見を聞いたというのに、それを曲解したのはヘルマンが悪い。「とにかく、グレンジャーさん。ひとまずは安心していいわ。蛇に襲われる事は無いでしょう。その代わり、元継承者には気を付けてね。これからもポッター君の傍に居るのなら、尚更に」

「その彼ですが、むしろ休み前よりも顔色が悪いんです。それで、マリア。貴女と話がしたいって」

「私？」

お互い嫌い合っている上に、屋敷妖精の件もある。恨みごとを聞かされるのならば分かるが、それでは顔色が悪いという話と辻褃が合わない。

「姫様にまたふざけた事をする様なら本気で身の程を分からせます

が

「あれ如きにどうこうされる様なかわいお姫様じゃないさ」

「お姫様なのは否定しないのね……何かあったの？」

「別に暴力を交えたわけでもないが、友好的ではなかったとだけ。つまり、このかわいいい後輩にとっては刺激的な彼との日常だな」

「なんだか卑猥な言い方ね」

「妬けるか？」

「胸焼けがするわ。休みの間は映画漬け？ さつきから変な言い回しばっかり」

「私達はパニック・ミステリー・アクション映画の主役だったよ。アクション映画の良さは最終的に暴力で解決出来るところだな」

リドルの亡霊はお兄様が殺し、もう一人の継承者は心を塞ぎ、蜘蛛は目下駆除中である。結局のところ、「わるいまほうつかいはかいしんして、みんななかよくなりました。めでたしめでたし」とはなっていない。それが良い結末だとも思えないが。

†

蜘蛛狩りの夜がやってきた。

お兄様から「少年の為に」と留守番を命じられ、森の傍で焚火を眺めていると、ハーマイオニーが現れた。その隣に、足跡だけが刻まれている。

「素敵な服ね」

「かつて聖歌隊という派閥が用いていたものだ。今日ではそう明確な区別も無いがな。華美でなく、ゆったりとしていて、何より色が良い。雪に紛れるなら最適だ。紛れると言えば、ポッター。次に透明マントを使うときには、足音にも気を付けろ。特にこうして足元に雪や泥がある時はな。私も何度かそれで痛い目を見たことがある」

「忠告を活かす機会が来ない事を願うよ」

「で？ 私に話とは？ いや、まずはこれを飲め」

ポッターがマントを脱いだので、生姜湯を2人に渡す。風雪は無いが、身体を冷やしては風邪もひきやすいだろう。

「ククサなんて持ってたの？」

「一昨年ドロテアに習って作った。欲しければご両親の分も合わせて作るが？」

「じゃあ夏にお願い出来る？ お母さんが北欧家具を揃え始めたから喜ぶわ。」

あ、美味しい」

「何よりだ」

「あー……まずは、遅くなったけど、ありがとう。お蔭で僕があれこれ言われることは少なくなったし、蜘蛛から生き残れた。それと、ドビーは旅に出るって言ってたよ」

「そうか。災難だったな」

「あら、いつの間にか休戦したの？」

「今回は被害者だからな。蜘蛛の件も元を辿れば森番と校長の咎だ。素直に同情するさ。それで要件は何だ？ 人生相談ならお兄様やヘルマンの方が親身に聞いてくれるぞ。同性だから共感できる事も多いだろう」

ポッターの性格からして、蛇寮の人間に何かを頼むという事は余程の覚悟があるのだろう。それをただ嫌いだからという理由で撥ねつける事は、お子様のお言葉に反するはずだ。

「ロックハートは……見つかった？」

「いや？ 案外逃げのびているのかもな。記憶に忍び込み、掠め取る事で名声を得た男だ。逃げるのも上手いと言われれば納得も出来る」
「それは無いよ。ロンは運転してたから分からないだろうけど、あいつの背中に牙が刺さる瞬間を僕は見た」

「そうか。なら地獄の住人が1人増えたな」

「ちよつと……ちよつと待って。2人で納得してないで、説明してくださいさる？ さっきのパーティーで離任されたって校長が仰ったけど、亡くなられたの？」

新年会と秘密の部屋の解決を祝して盛大な宴が催された。その初めにロックハートの離任と森に絶対に近付いてはならないとの言葉もあったが、大抵の学徒は聞き流していた。

「端的に言えば、ロックハートは殺人鬼だった。偉業を成しながらも

不世出の人物からその顛末を聞き、その者の記憶を消し去って自分のものとしていた。経緯を省くと、この森でポッターとウィーズリーを廃人にしかけたが、アクロマンチュラの餌食になった。

ああ、ちなみに蜘蛛の実物だが」

火掻き棒を森に投げ込む。甲高い悲鳴が聞こえ、引き寄せるとティンパ二程の大きさの蜘蛛が飛んできた。絶命はしておらず、胴を貫かれた痛みには悶えていた。突き刺さった火掻き棒を抜き、改めて頭に刺して楽にしてやると、一瞬痙攣してから脚が折り畳まれた。その脚の1本を掴み、ハーマイオニー達から離れたところまで死骸を運ぶ。

油を注いで燃やせば、蛋白質と脂肪の焼ける臭いがした。

「これでも幼体だな。もし死骸を見かけても迂闊に触るなよ。毒で手が腐る」

「私に見せる意図を教えてくださいませんか」

「良い学習教材になるかと。純血の一族でもそう見る事はないぞ」

「お気遣いどうも」

ハーマイオニーからは感謝の気配が全く感じられない。死骸の燃える臭いが気になった様で、杯に鼻を近づけ、生姜と蜂蜜の匂いに集中しようとしていた。

「礼には及ばないさ。それでポッター、貴公の悩みとはロックハートか？」

ポッターは生姜湯を一口啜り、深く息を吐いた後、こちらを見た。

「そうだ。あいつは僕の目を見て、僕に手を伸ばしていた。僕は助けに行くべきだったのかな。君の先輩が言った通り、僕が巻き込んだ。僕が余計な事をしたせいだ。それで僕は見捨てて逃げた。」

あいつのやってきた事を考えれば、あいつは死んで当然だと思う。

……なのに、あいつの目がいつも僕を見ているんだ。あいつの声も聞こえる。こつちを見てくれ、置いていかないでくれって」

「助けに行くべきだったかと聞かれれば、それは否だ。貴公には何も出来ない。死体が増え……いや、今も死体は見つかっていないか。死者が増えただけだ。赤毛の話では、貴公がしたことはあれの忘却術を避けただけ。それ以上にその場で出来る事は無かっただろうし、それ

さえも幸運だったと言えるだろう。

次に、あれの幻影に苛まれるのは、私には何も言えない。意図せずして死に関わった事や、死にゆく者に助けを乞われた経験がないからな。人並みな助言としては、精神科医に相談することだな。そうした体験の後遺症は、警官や軍人……他には被災者にとつて別に珍しいことでもないしな。あるいは、貴公は魔法界に居る。忘却術で忘れられるという選択肢もある。それで殺されかけたのと言う嫌悪感も分らないではないが」

ポッターの行動が関わった死は、2つある。

クイレルの顔を焼いたことは恐慌の内に在って仕方のないことだったとも言えるだろうし、そもそも不可解な頭痛に苛まれていたポッターの中には意思など無かったのかもしれない。

だが、ヘルマンが突き付けた様に、ロックハートはポッターの意思で巻き込まれた。自分の意思が他者の死の遠因になったことを自覚することは、相当な心理的負担になるだろう。

「それで、気付いたという訳だ。ハロウインの罪も、賢者の石を巡る冒険の罪も。私とダフネが貴公とウィーズリーを嫌う理由も」

「ハリーの事は今年の夏に赦す気になったわ」

「そうなのか。まあだからといって私がクソガキ共を嫌うことは変わらないが」

「僕も君が嫌いだよ」

「そうか。驚くほど何の感慨も無いな」

「2人とも止めて。ねえマリア。ハリーは今年の夏をウィーズリー家で過ごしたの。どうしてだと思っ？」

「話が合う方が面白いだろう？ 特に詳しいわけでもないが、非魔法族が養親なのだろう？ 魔術学校がどうこうと話したところで、アポロ計画陰謀論を聞くのと大差ない反応だと思っが」

「虐待されてたのよ。日常的な暴力、暴言、嫌がらせ、実子との差別的な扱い……性的なものを除けば、児童虐待に相当するものはすべて。児童保護機関に通報したら、直ぐに児童福祉司がやってくるはずよ。学校だって把握できるはずなのに何もされていないのは富裕層だか

ら。

ドビーが現れて、ハリーにホグワーツに行くなど警告したのは伝え
たわね。その時、ドビーは養親の経営する会社の大口顧客の頭に、
ケーキを落としたの。それで監禁されて、餓死しかけたところに双子
とロンが救出に來たの」

「冗談……ではないのだろうか」

昨年、ポッターの嫌がらせへの耐性について虐待を疑ったことがあ
る。その時は馬鹿馬鹿しいとその考えを捨てたが、事実だったとは。

冬の夜の寒さとは違う、臟腑をむしり取られた様な痛みと寒さが襲
い來る。

父母を失った赤子をその様な環境に放り込んだのか。闇の帝王が
滅んだと喜び、そして夫妻の知己は誰も幸せを与えようとしなかつ
た。

魔術から遠ざけたのは、魔術で肉親と死別した子への配慮などでは
なかった。ただの、無関心の結果だった。

その子供が11歳になると、魔法界は英雄と讃えたのか。

そして校長はその子供を本当に英雄にする為に、災厄を叩きつけた
のか。何と残酷な獣であろうか。

「……貴公を嫌いな事は変わりないが、事情は理解した。屋敷妖精の
事も、虐げられた自分を重ねたのか」

「結局、誰の為にもならなかったけれどね。ボーン、泣かないでくれ。
嫌いな奴に泣いて憐れまれても困る。君を嫌いになれなくなりそう
だ」

「家を出ろ、ポッター。父母が健在で、愛を受けている私が言っても響
きはしないだろうが、家族とは血の繋がりでない。私はヘルマンを
兄と、ドロテアを姉と、ケントを弟の様に感じている。家とは寢床で
はない。家族の在るところだ。貴公は学校に留まるべきだ。少なく
とも、養親の下に居るよりは人間でいられるだろう」

「そうできればいいんだけどね。それと、今これを言うのは卑怯だけ
れど、ハグリッドは僕が生まれて初めて優しくしてくれた大人なん
だ。だからハグリッドの大切な友人達を、たとえ僕らにとって危険な

害虫だとしても、敬意を以って……駆除して欲しい。そう君の家族に伝えてくれないかな」

「元より人の都合で殺される事に憐れんではいるが、貴公の分も上乘せる様に伝えよう」

生姜湯を一気に喉に流し込む。先程よりほんの僅かに塩気が増していた。

目を閉じると、爆轟が木々をなぎ倒す音が風に乗って耳に届いた。その中に、蜘蛛達の叫びが幽かに含まれていた。

ヘルマンの言う、理不尽を理不尽のままに受け容れてしまうポッターの性質は、そうしないと生きていけなかったから。反抗すればより酷い暴虐が襲い来る。いつしか何をしても無駄だと諦め、ただ嵐が過ぎ去るのを待っただけになった。

そう仮定すると、理解できるものは多い。だが、マルフォイに対峙したときやクイディッチで時折見せる衝動的で激烈な怒りはどこから来るのだろうか。

「……先程も言った通り、ロックハートについて貴公が望む様な事は言えない。自分で納得する方法をとるしかない。治療を受けず、自分でケリをつけるのも選択肢の一つだ。悪人だから死んで当然だと思いつい込むのも良い。あるいは戒めとして心に留め続けるのも良い。

結局は選択の問題だ。その問題について、自分がどう向き合うのか。治療と同じだ。病巣を切除するのか、投薬治療するのか、あるいは疑似科学や民間療法でもいい。医者に言われるがままに治療されるのと、医者に提示された治療方法を選ぶのでは、その結果に対する納得が違う。

お兄様やヘルマンにも諭されていたが、敢えて嫌いな相手に話を聞いてもらいたいと思う理由をご説明頂けるかな？」

「揶揄うつもりはないけど、君達ヤーナムの人は暴力的だ。それでも悪人ではないから、僕を騙して罠に嵌めたりしないで、助言をくれた。包み隠さず、僕やダンブルドアを残酷に責めながらね。

それで、君は僕を嫌っていて、お兄さん達よりずっと子供だ。だから、直接的で簡単な方法を教えてくれるんじゃないかって」

「やっぱり私は貴公が嫌いだよ。」

貴公にとつてそうした短絡的で都合のいい助言がお望みなら、私が言えることは簡単だ。校長を殴れ。貴公への思惑がどうであれ、ロックハートを引き込んだのは校長だ。今年の防衛術の教員がまともであれば、貴公が教員を頼ることなく、森で死んでいただろう。そうすれば、傲慢な感傷に浸る事も無かつただらうさ」

「傲慢？」

ポッターが気色ばむが、ハーマイオニーが手で制した。

カップにたっぷり蜂蜜を入れ、再び湯を注ぐ。2人に視線を向けると、両者がカップを差し出してきた。

ハーマイオニーは「蜂蜜少な目で」と注文を付ける。親からこの時間に甘い物は良くないと言われているのだろう。

「傲慢だ。貴公が殺した、それは間違いない。だが、ロックハートの死を俯瞰してみれば、貴公の役割はこの一匙の蜂蜜にも満たない。貴公が直接殺したわけでもないし、殺すために誘い込んだわけでもない。あの場で貴公に出来る事も無かつた。」

反省と自傷は違う。何もかもを自分のせいだと責めるだけでは、結局は何も見えていないのと同じだ。もっともこれは去年私が言われた事だがな。

ロックハートは貴公を利用して自分の名声を高めようとした。その選択の末路が死だった。貴公はその路に立っていただけで、その路を行くことを選んだのはあれ自身だ。貴公やウィーズリーによって心を頑なにさせられたわけでもない。強いて言えば、その路を敷いたのは校長と森番だ。校長を憎み、全てが校長のせいだと考えれば自分の中の罪悪感は薄れるだらうさ」

昨夏の校長はまさに神を気取る狂人だった。

神は自らの名を知らしめるために、民を虐げる圧政者の心を冒し、頑なにさせ、更に罪を重ねさせた。神学者によれば、その自作自演は罪人に罰を与え赦すためだったというが、ロックハートに与えられる赦しが何であるのかは分からない。

「そうすれば、ジニーと同じだって言いたいんだらう」

「そこまで悪し様には言わないが、貴公らが一昨年ハロウインの夜の罪から目を逸らしたことと同じだろう。少なくとも心は軽くなるだろうさ。全ては偶然の産物で、全てを他人のせいにして、罪のない楽園に居られる。心貧しき者の為に神の国はある。罪を知らぬ者は罪を負う事もないからな。精神の豊かさは苦悩の深さだ。智慧の実を食べなかつた白痴の獣の方が幸いとは、随分と楽園は刺激的なところだ。今頃ヴォルデモートは川辺で神と並んで魚でも釣っているか、仔羊の串焼きを齧りながらポーカーに興じているだろう」

「マリア。心が貧しき者っていうのは愛されていないと思っっている人の事よ」

「愛をどの様に数値化するのかは知らないが、経済状況と知能指数と犯罪率は多くの場合比例する。富める者こそ心が貧しいと言うなら、今頃ウエストミンスター寺院はスプレーアートだらけだろうし、それを取り囲む邸宅は火に包まれ塩の柱が立ち並ぶ。逆にイーストエンドは乳と蜜の流れるテムズ川に覆われた約束の地か？」

「ああ言えばこう言う……」

「僕にはマルフォイの方が豊かで、ロンの方が貧しいなんて思えないけど」

「私からしてみればどちらも変わらない。犬2匹を並べてどちらの鳴き声がるさいかと言われても、伏して黙れとしか言い様がないだろう。毛並みはマルフォイの方が良い様だが。」

話は済んだか、ポッター。城に戻るなら、振り返らず、マントも使わず、全力で走って戻れ。蜘蛛にも復讐という概念はあるらしい」

森の端で、梢から雪が不自然に落ちた。クリスマスと異なり、月が明るく城を照らしている。ただ憎悪に駆られ、遮蔽物も無いままに突撃を目論むのは、狩りを教わって間もない幼体の群れだろう。

あれらの復讐は正しい。人の都合で持ち込まれ、人間の都合など知る由もなく森に満ち、狩人によって殺戮される。それは何かを食べなければ生きていけない生きとし生ける者の原罪と違い、押し付けられた理不尽である。

お兄様は法に則る事こそ人理と仰ったが、人と蜘蛛とを仲立つ法は

ない。そうした意味では、森番と亡き蜘蛛の長との約定は尊いものなのだろう。

「……僕にはこれを見届ける義務がある。僕が森の奥に行かなければ、少なくともハグリッドが元気な内は、アラゴグ達はヒトを襲わなかったはずだ」

「そうか。また夜間外出で減点されても後悔するなよ。ハーマイオニーも残るか？」

「もちろん。ちなみに副校長から夜間外出の許可を特別に頂いているわ。ハリーが透明マントを使っていたのはその……前みたいに噂されるでしょ」

「成程。ポッター、友人は選べ。貴公が継承者ではないと私達が考えていたのは、貴公がそんな事を出来るはずもないと考えていたこともあるが、ハーマイオニーが貴公の様子を事細かに伝えてくれていたからだ。」

額の傷に群がり、蛇語を話せば遠ざかった連中の中に、友人だと思っていた獅子寮生はどれ程いる？ 疑って済まなかったと笑いながら謝罪した者は？

これからも校長から何かを押し付けられるかもしれない。その度に、貴公はその連中に傷付けられる」

「君に言われなくても自分で選べる。入学して直ぐ、マルフォイにもそう言ったよ」

「初対面がどうだったか知らないが、貴公はあれと友人になる路もあつたはずだ。あれは少なくとも身内には寛大だし、額の傷も気にしない。自分の家と自分が一番だと思っているからな」

「マリヤもそうでしょ」

「私はこいつと友人になるつもりはない。同情はするが、失望させられることが多いだろうからな」

一度は期待した。ポッター達は一昨年ハロウィンの夜、ハーマイオニーを殺しかけたと知り、己の罪を知り、それをハーマイオニーに秘匿され、教員から咎められる事も無かった。その彼女の心に触れ、クソガキは己を知るだろうと期待した。

だが、その罪の重さに耐えきれず、自分達が彼女を助けようとしたなどと心に覆いを掛けた。それが虐待に因るものだとしても、その覆い隠しきれない腐臭には吐き気がする。

そのクソガキが、普通の子供になるまでに幾つの汚物を見せつけられるのか。それを傍に立って見続けられる程、自分は出来た子供ではない。早くお兄様やお姉様に並び立てる様に走り続けるだけで精一杯だ。

「見えるか？ あの朽ちた松の右だ。影が動いているだろう。そこから更に少し右、ヤドリギだらけの櫓の裏からも来る。この距離なら銃を撃てば済む話だが……ポッターのお望み通り、敬意を払おう」

袖から引き出すは、葬送の刃。

「鎌？」

「我らが業の祖。我等が武器の元型。

大型の武器故に動作は重く、間合いを覚え、然るべき時に踏み込まねば逆に痛手を負う。その死闘による葬送こそが、生きる感覚を狩人にもたらず。今でこそ、それを教える役割は鉈と杖と斧の3種に分かたれているが、狩りとは本来これの事だ。命を刈り取る、葬送の儀。死を以って生を感じ、遺志を継ぐ。

拙いながらも、私の狩りを御覧じろ」

木陰から現れた1匹の蜘蛛が牙を打ち鳴らしながら雪上を走る。それに駆け寄り、縦に鎌を振り下ろす。刃は蜘蛛の尖兵を両断し、雪に覆われ凍った土を弾き飛ばした。

柄を左脚で軽く蹴り、土から引き抜いたその勢いに任せ、柄を背に回す。魔力を込めながら待ち、同時に飛び掛かって来た3体を薙ぐ。巨躯の守り人でさえ弾き飛ばす一撃は、蜘蛛に悲鳴さえ上げさせない。

更に一振りして血を払い、後ろに跳び退くと、次の蜘蛛の脚が遅れて地面に突き刺さった。右半身を前に出し、その蜘蛛の頭に刃を掛け、刎ねる。宙に浮く牙と刃が擦れあい、金属音を立てながら火花が散った。耐久性の代わりに威力を上げる血晶を振じ込んでいるが、流石にこの程度で壊れる様なつくりではない。

流れるままに左肩まで振り上げ、柄を捻って刃を反転させる。武器の変形機構を作動させながら、まごついて群れに大振りの一撃を加えた。仕掛け武器の神髄はその変形機構にある。血に因つて変態する狩人の業は、武器にも同じ事が言える。その変形の力を攻撃に用いた時、それは尋常ならざる威力となる。

柄が外れ、曲刀となる。最後の一匹が飛び込んできた瞬間に合わせ、飛び込み、両断した。

雪原から蜘蛛の気配は消え失せ、葉擦れと己の息遣いだけが残った。

「精進が足りないな。辛うじてハーマイオニーに無様は晒さなかったが……疲れた」

傷は負わなかった。だが、持久力が足りない。結局、どんなに筋力や技術を身につけたところで、武器を振るう度に疲弊しては闘えない。葬送の刃は特に持久力を奪われる武器である。疲労感が増す代わりに効果の高まる血晶は珍重されるが、その理由は戦闘に与える影響が少ないからである。しかしこの武器は、その僅かな影響でさえ致命的となり得る程に消耗する。老体でありながら加速の業を用い、月光を放ち、この武器を振るうゲールマンは、やはり祖となるべくにしてなつた狩人なのだろう。

息を整え、返り血を清めてからハーマイオニーの元に向かうと、ポッターは顔を顰めた。

「何だ？」

「君のお姉さん達は君よりも強いんだろう？」

「ああ。一撃を入れるどころか近づく前にやられる事もある」

「そんなお姉さん達を倒す程の怪物を、ジニーは操った。そんなにあの子が強いなら、誰があの子を変えられるって言うんだろう」

「お姉様とドロテアの名誉の為に言うが、熊を殺す程の銃であれ、引き金を引くだけなら10に満たない子供にでも出来る。子供が銃を撃つたら熊が死んだ。だからその子供は熊より強い、そう言えるか？」

もつとも、私達は熊を殺すのに仕掛け武器も銃も必要ないが……いや、話が逸れた。重要なのは、力の大きさではなく力の使い方を知る

事だ。お兄様はそれに優れるからこそ、私より腕力が無くとも、お姉様より魔力が無くとも、遙か高みにいる。

あれの手元に最早銃は無いのだから、あれはただの恥知らずな1年生に過ぎない」

一度とて、お兄様に勝てた事は無い。未来が見えるかの様に、踏み込んだ先には剣が振るわれ、避けた先には月光波が放たれ、輸血しようとするれば銃弾を撃ち込まれる。遙か遠く感じる、狩人に成りたての頃。度重なる敗北に拗ね、勝てなければ泣き、手加減されれば怒る、面倒な妹だっただろうと思う。

「クリスマス以来、僕はジニーと話してないから本当の事は分からない。けれど、君のお兄さんの言った通りなら、その銃を握ったのは僕のせいだ」

「動機がどうあれ、貴公の責任だとは言っていない。お姉様もドロテアも、貴公を憐れみこそすれ、恨みなど持っていない。改めて言うが、継承者騒動について、ハリー・ポッターは馬鹿げた英雄願望に突き動かされたクソガキでもなく、継承者でもなく、純粹な被害者だ。ジネブラ・ウィーズリーは形式的には継承者であり、本質的にはただのストーカーだ。偏執によって突き動かされ、それが何をもたらすかを理解しながらにして、暴虐を振りまいた邪悪だ。

いいか？ 銃はそこにあつたが、引き金を引いたのは奴だ。貴公が奴の耳元で敵を撃てと囁いたのか？ 違うだろう」

「フレッドとジョージが言ってたじゃないか。いくつもの偶然が重なったからそうなったって。ハグリッドだってそうだ。冤罪で退学にならずに、きちんと学校に通つていれば、もしかしたら竜を孵化させたり蜘蛛を育てたりしなかったかもしれない。ジニーを悪く言うて何かが良くなるとは思えないよ」

一応は慰めたつもりだったが、ポッターは早口で反駁した。否、反駁と言うには的を外している。未だ収監されている森番への想いが、そうはならなかったで終わる話をこじらせている。

校長は無罪と信じたハグリッドを森番に据え、蜘蛛の繁殖を黙認してきたのだ。時を移してあの少女を照らしてみれば、何ら処罰も処置

もされることなく、放置されているだけである。校長は周りの人間があの獣を躡けてくれるだろうと期待して、予防注射もせず、首輪も着けず、狂犬を放し飼いにしている。その行く末が明るいものでは無いことは、誰しもが分かる事だろう。

ハーマイオニーはポッターに憐憫の目を向けて、肩を叩いた。

「ハリー。あなたはロックハートの事で自分を責めすぎてる。だから何でも自分のせいだと思って、自分を傷付けて赦されたいと思ってるのよ。あなたはあなたでしかないし、あなたの手の届くところにか、あなたの責任は無いの。あの子がああなったことはあなたのせいじゃないし、あの子がどうなるのかもあなたの責任じゃないの。」

殺されるかもしれない私にとってみれば、あなたの言う事は正直不愉快だわ。私があの子に恨まれるのは、私が悪いって事？ 原因や動機となったことと責任とは必ずしも同じじゃないわ。蒸し返す様で悪いけれど、私がガリ勉のぼっちだからトロールとトイレに閉じ込められた、だから自業自得って言うの？ それは原因の内の1つだとは思うけれど、私のせいだと言われたくないわ」

「ごめん。あの時の事も、今言った事も。でも、そういうつもりじゃないんだ。ただ……なんて言ったらいいのかわからないけれど、今のままジニーが悪いで終わらせるだけじゃ、僕や他の誰にとっても良くない事になると思うんだ」

ハーマイオニーは社交性の無さが自分を陥れる事となったと校長に言われ、ポッター達と仮初の友人関係を作る事となった。その結果、ポッター英雄化計画の駒に組み込まれたのだ。それを彼女の悪だとするならば、全き善人はどこに居るのだろうか。

「こうした事はやはりお兄様やヘルマンが適任なんだが……ポッター、貴公の言葉に出来ていない漠然とした不安や怒りは、自分がそうであったかもしれない、自分がそうなるかもしれない、という恐れだろう。

その恐れは正しい。私もそうであり、ハーマイオニーもそうであり、お兄様やお姉様もそうだ。人は変わるし、善人が悪行を為す事も、悪人が善行を為す事もあるだろう。

何故獅子寮に入れられたかも分からない。あの夜にそう言っていたな。正解は簡単だ。貴公が選んだからだ。私が同胞たちと同じ寮を望んだから蛇寮に入ったのと同じ様に。

智慧を求め、忍耐強く、勇敢で、手段を選ばずに答えを求める。組分け帽子はヤーナムの民をそう評したが、ではそうではない人間はいるのか？ 愚昧で懦弱で臆病で無為な者になりたい者がいるのか？

自分が何者であるのかは、何を自分の意志とするのかだ。私は狩人であろうとするから狩人であるし、私はマリア・アイリーン・ボーンであるろうとするからマリア・アイリーン・ボーンだ。もちろん、他者との関わりによってあるべき私は変質していくだろうが、少なくとも歪んだ所有欲の為に他者を傷付けたいとは思わないだろう。今はそれで十分だ」

何者であったかはどうあれ、何者にならんとするかは選べるのだ。森番は欲望に忠実であったから収監され、ロックハートは欲望に忠実であったから蜘蛛の牙に倒れ、小ウィーズリーは欲望に忠実であったから継承者となった。理性ではなく欲望に忠実な獣である事を選んだのだ。

「重ねて言うが、自分が悪になるかもしれないと恐れる事は正しい。残酷だが、虐待を受けて育った人間は虐待をする傾向が強い。これは偏見でもない、統計的な事実だ。愛情や感情の表現方法を、そういうものだと思いが歪まされているからだ。だが、それを悪だと思おうのであれば、それを悪と思いつける意志を持つ。

その意志こそが、貴公の導きになる」

それが欺瞞であれ、導きの光を見ていた時には、月光の狩人は醜い獣ではなく人であった。人々に嘲られ、詰られながらも、彼は狩りの中に見えた光を人のよすがとした。

「私から言える事はそれだけだ。ロックハートの事をどう納得するかは自分で選べ。それさえも他人の選択に任せる様なら、最早人とは言えない。さあ、城に戻って寝床に入れ。ハーマイオニーが冷える」

「……ありがとう」

「いや、前言撤回だ。少し待て。殊勝な態度に、良いものを見せてやる

う」

浮遊術で子蜘蛛の死骸を集め、山とする。そこにロスマリヌスの霧を噴き付けた。

「………凄いな」

「綺麗ね」

「見るだけにしてくれ。触れば指が骨も残らず消し飛ぶぞ」

噴気によって起きる駆動音は歌声を模したものである。銀の霞は風に流される事無く留まり、地に星界を顕現させる。星の娘と共に在り、宇宙を感じとらんとした聖歌隊にとって、狩りとは葬送でも医療でもなく、交信であったのだろう。

結局、聖歌隊としての試みは失敗したのだが。

処刑隊に狩られ、連れ去られたカインハーストの子等は、ビルゲンワースの思索を継いだ医療者となり、交信を試みた。そしてそれは悉く失敗し、血の薄い者は罹患し、カインハーストの血を色濃く継いだ者だけが生き延びた。学術者でもあった聖歌隊にとって、意志や思索ではなく生来の血によって上位者に見えたという結末は、対立するメンシス学派への敗北である。

現代の聖歌隊にとって幸いであったのは、ユリエが聖歌隊とビルゲンワース両者の教えを継いでいたことだろう。お父様曰く「夜が明けたのに問答無用で彼方してきたのには参ったね。まあ実家がああなって、寝食を共にした友人が狂人だと知ったなら誰も彼もが疑わしく想えるのは仕方ないことかもしれないけどさ」とのことだったが。

何度か掌を切って血を吸わせ、ロスマリヌスを作動させ続けること5分。蜘蛛の骸は霧の見せる星々の一部となって、消えた。

「この武器はロスマリヌスと言う。薬草のローズマリーと同じく、原義は海の雫だ。呪いと海に底は無く、故にすべてを受け容れる。同胞を殺された恨みも、ヒトへの憎悪も、全ては星の海に還り、やがて別の命の糧となるだろう。そうして命は継承される。本来、秘密の部屋とはそういう儀式の為の静謐な聖堂だった。美しい霧を生み出すこんな薬草も、究極的には相手を殺める武器だ。それが今では典礼のラップやバグパイプ代わりに使われている。」

分かるか？ どう在ったかと、どう在ろうとするかは大きく違う。だからこそ、お兄様もヘルマンも貴公に言葉を受けた。世に流される芥でもなく、校長の傀儡でもなく、人で在れど。そう在ろうとした結果が妖精の事だとして、その結果がああであれ、悪ではない。誤っただけだ。過ちを犯さぬ者は死人だけだ。生者であれば過ちから学ぶ事もあるだろう」

ポッターは黙って目を瞑り、幾度か頷いた。

嫌いな相手に助言をもらったとて、直ぐに受容することは出来ない。出来ていれば、ポッターの薬学の成績は惨憺たるものでは無いだろう。

暫く待つと、ポッターが口を開いた。

「なら、君はジニーにもそう言える？」

「継承者だと貶められた原因だというのに、随分気に掛けるな。惚れたか？」

「茶化さないでくれ。ロンの妹なんだ。気にするのは普通だろ」

ウィーズリーはポッターを裏切らなかつた数少ない人間である。そこにポッターが抱くものは感謝か依存かは分からない。

いつまでウィーズリーがポッターの友人であり続けられるかも分からない。それを断ち切つて弄ぶ様な事はしたくないが、とはいえ甘ったるい嘘で飾り立てる事は誠実ではないだろう。

「少なくとも、今は言えない。石になっている者に対してならばともかく、壮健であるお姉様やドロテアに詫びの一つもない。報復を恐れているわけでもない。自分に裁かれるべき罪は無いと信じたいからだ。」

校長は学徒の交わりに人の導きを見出すと期待しているようだが、あれはどこにも進もうとせず、罪から目を背け、自分だけの穢れなき樂園を探している。それが表すのは死だ。暗く、冷たい棺の中には敵も無く安息だろう。死のアルカナも停止を表わしているんだっただか。ト占は興味がないから詳しくは知らないが。

ああ、間違つても貴公が導こうなどと思うなよ。ろくなことにならないというのもあるが、一応の乙女として、それがどれほど残酷な拷

問であるかは忠告しておこう」

「乙女？ 残酷？ 忠告はありがたいけど意味が分からないよ」

「ハリー、マリアは冗談で言ってるわけじゃないわ」

「己が恋だと思ってる感情が、それを向ける相手を貶め、傷付けた。罪を自覚すればする程に、その手に染み付いた汚れを知る。自らが傷付けた者から笑顔を向けられて、汚れた身を晒そうと思えるか？」

焦がれる様な妄執の炎は、ポッターが近寄る事でいずれ身を焼き尽くす業火となるだろう。盛り合い焼け死ぬのは勝手だが、それで再び災禍を振りまかれる事は迷惑だ。

「知恵の実だ。罪を犯さねば恥を恥とも思わない。しかしその智慧により神の大きさを知り、故にこそ神に背いた罪の深さを知る。貴公が神とは言わないが、奴にしてみれば神にも等しい上位者だろう」

神が与えなかったものをその手に収めんとし、その冒瀆の罪は呪いとして報われる。事物を神ではなく人の善悪によって判断する様になってしまったことこそ罪だと言うが、神に全てを委ねて生きる肉人形のままに在る事は正しいとは思えない。神が全知全能であり、唯一にして絶対で在るならば、自らの似姿はおろか、天と地さえも作る必要はない。

しかし、それが世の始まりであれ、ヤーナムであれ、ホグワーツであれ、篡奪は罪である事に変わりはない。寛大な神であれば、願えば与えられただろう。たとえ悪夢の内であれ、願いに応えて瞳を持った脳は与えられたのだ。

トム・マールヴオロ・リドルという蛇に唆され、継承者の知識を齧つたとして、その罪から目を背け続けるならば、それは畜生以下である。殺める事の意味を忘れ、暴く事の罪を知らぬ者。その末路に至る、罪なき者の楽園が狩人の悪夢である。狩人を止め、人を止め、獣にすら成り下がれず、ただ夢幻の内ですら永劫の殺戮にのみ生を得る、憐れで呪われた咎人の楽園である。

「食べたのは毒林檎だったけど、白馬の王子様は現れなかったのね」
「お姉様とドロテアは蛇に襲われ、一度は石になった。キスで目覚めるなら苦勞はしないとヘルマンは言っていたよ。愛だけで満たされ

るのは物語の中だけだ。私達は物語の中に生きてはいない。

蛇と言葉を交わし、林檎を齧ったとて失われる楽園は無いし、齧らなかつたとして与えられる楽園も無い。昔はどうだか知らないが、罪を代わりに背負い死んでくれる都合のいい救い主などいない。そして貴公が茨の冠を戴く必要もない。あれは石打ちに処されるべき女であり、秘密の部屋の騒動に限れば貴公は誰に石を投げようと赦される存在だ。どこに投げてもストライク判定だ。MLBで最優秀投手に成れるだろうさ。

さあ、城に帰れ。明日から授業だろう」

「……ありがとう、ボーン」

「礼なら連れ出したハーマイオニーに言え。私の言葉はお兄様達の受け売りでしかない」

ハーマイオニーが城の中に消えるまで眺めた後に、森に視線を戻す。

森の奥深くから、天を焦がす様な火柱が上がっていた。遺骸の灰は塵に、塵は土に、そして海へと流れていくだろう。

マント

『私は誰?』という書籍が書店に並んだのは、雪が融け、新芽が綻ぶ頃だった。カインハースト出版という発行元を知る読者は僅かだっただろう。銀の縁取りが施された鮮烈な紅の表紙を捲ると現れる献辞は英国中に広まった。

「故ギルデロイ・ロックハートに奪われた者達に献じる。」最近授業を欠席してゐるって聞きましたけど、取材旅行だったんですか?」

談話室で立体パズルに興じているヘルマンの前に、ダフネが本を持って現れた。

「中々骨が折れたよ。まさか被害者の親族や友人まで手にかけていたなんてね。薔薇がよく手入れされたいつから在るのか分からない無人の隣家が有って、そこで撮られた自分と誰かの写真がアルバムに収められている。気味が悪いとは思うけれど捨てられない大切なものだと答えた人もいた。」

ロックハートは本人の記憶を消すどころか、存在すら消し去っていた。あれの罪を雪ぐには、地獄の業火でさえ生温い」

薔薇園は手を抜けばすぐに荒れる。故に、手入れされた無人の庭園などあり得ない事だ。

著者はジョン・ドウという明らかな偽名だったが、ダフネがその本名をヘルマン・ツァイスだと見抜いた事に驚きはない。あるいは、その偽名さえ、名を奪われた死者を表わしているのかもしれない。皮肉と修辞に塗れ、ロックハートの罪業を暴力的な説得力で暴露していく書き振りに、校長の秘した計画を暴いたあの夜を思い出す者は多いだろう。

「故人って事はもう遺体が見つかったんですか? マリアから「多分死んでいるだろうさ」と聞いてはいましたけど」

「死体は見つからずじまいだったけれど、血に染まった紫のマントの切れ端が見つかったね。僕らはそうした死者の血から魔力を感じ取る事が出来る。余りに古いと揮発してしまうけれどね」

蜘蛛の掃討作戦は赤目犬を総動員した事で遂に終わりを迎えた。

卵も遺骸も全てが灰となり、雪と共に春の空に消えていった。その魔力は森に満ち、命を育むだろう。

「カインハーストってというのは？　ヘルマンは聖歌隊っていうところでしたよね？」

「カインハーストはヤーナムを統治する者の事だ。街はボーン家とビルゲンワースという組織の合議体で運営されているが、建前上はカインハーストという王から委託されている事になっている」

ソファでくつろいでいたお兄様がダフネに説明する。他の7年生はイモリ試験に頭を震わせていたが、狩人として生きるにあたり試験成績など関係ない上に、家業を継ぐにしても魔術ではなく法律や会計を修めることになる。そもそもこれといって試験対策を要さない程にお兄様の成績は良い。最初こそ「同輩に悪いからな」と、だらけた姿は見せない様にしていたが、机に向かえば「嫌味か貴様」と言われ、遊んでいれば「楽しそうで何より」と嫌味を言われ、最早どうしようもなく開き直ってしまったている。

「もう1つ質問があるんですけど。ドロテア先輩とどこまで行きましたか？」

「……君もか」

ダフネは何事も無い様に振舞おうとしていたが、陰険眼鏡の恋愛事情への関心は隠しきれていない。同じ寮であるのだから本について問い質すなら機会は他にもあっただろうに、お姉様とドロテアが授業中で、ヘルマンが空きの時間を狙ったのだから本当に聞きたい事はそれだろう。

「何か誤解している様だけど、ドロテアを連れ出したのは彼女が居ると取材の時に便利だからだ。僕だけだと警戒されるけれど、彼女の明るさは人の心と口を軽くするからね。」

それに、冷静に考えてみて欲しい。誰が犯罪被害者への取材をそうした色事に使おうとするんだ。本人も嫌だろうし、被害者達にも無礼だろう」

「そうした関係にあるのは否定しないんですね」

「それならドロテアが黙ってられるはずもないだろう？　そういう関

係になったら君にも触れ回ってるだろうさ」

事実、ヘルマンは書籍によって得た利益を被害者の遺族に渡していた。見ず知らずの他人の遺族とされたところで痛む心も無いと突き返される事もあった様だが、その分を他の遺族に上乘せして渡していた。ポッターとウィーズリーにもロックハートの死について情報料として支払っており、ウィーズリーは新しい杖を購入していた。

ドロテアが取材旅行に赴く際に「ヘルマンから頼まれちゃってさー」と、満更でもなさそうにしていたのも事実だが。その旅行について、ドロテアがケントに対してヘルマンの男子寮での言動を報告する様に先輩命令を出しているのも知っている。守秘義務はないのかとケントに問えば「別にボーン家の秘密とかじゃありませんし、あの2人のことは姫様も気になってるみたいですし」と、気軽に先輩を売っていた。加えて、ヘルマンが普段通りだったという報告に対してドロテアが不機嫌になったという密告も受けた。ケントへの信頼が少し揺らいだ。

「そうですね。お似合いだと思いますけどね」

「就学前からの長い付き合いだからね。相性が良くなければこんなにも長くはやってられないさ。僕自身、僕の性格が万人受けするものではない事は分かっているし、デイルクとは未だに殴り合いの喧嘩もする。ケントは手のかからない弟みたいなものだから別だけれど」

「そう言われると俺が手のかかる兄の様に聞こえるんだが」

「そう言ったつもりですが」

お兄様が本に目を向けたまま呪詛を放るが、ヘルマンも茶を飲みながら同量の魔力を放って消滅させた。他の寮生が見物の為に集ってきたため、霧の結界を張り、目と耳を塞ぐ。お兄様とヘルマンのしていることは芸術とも言えるものだが、原因が原因だけに見せられたものではない。

「兄弟喧嘩くらいでそんな無杖無言の決闘なんて見せつけないでください」

「アストリアとはどういう喧嘩をするんだ？」

「そもそも喧嘩しないもの。ここ何年かは我儘や癩癩もなかったし

……」

「あの子はいいい子だしな。来年から1年生か。悪い虫の付かない様に見守ってやらなくてはな」

入学時、お兄様とお姉様は周囲に威嚇していたのを見て妹離れして欲しいと思ったものが、いざ自分が後輩を迎えらるとなると気持ちがかかる。この様な魔境では心配するのも道理である。導いてやろうなどという傲慢は無いつもりだが、学閥抗争とも血の濃さとも関わりが無い健全な学生生活を送らせてやりたいと思う。

「僕にもそう思ってたんですか？」

ケントは靄を抜けてくるなり、文字通り火花を散らし合っているお兄様とヘルマンに呆れた顔をした。

「いや？ 後輩として可愛がるつもりではあったが。それにしても早いな」

「薬学でしたけど事故が起きて終わりました。蒸気を吸い込むと頭部が肥大する土留色の液体を作り出した学徒がいます。大鍋から泉の様に湧き出ましたよ。患者達は医務室で寝台に縛り付けられます」

海水に満ち、腐った果実の様になったわけでもあるまいが、頭部が肥大したと聞いて思い出すのは実験棟である。あの暗がりですべてくれと哀願する患者達は狩人達の心に大きな傷をつけている。時計塔のマリアは、何を想ってあの狂気の中に身を置き、患者達に施しを与えていたのだろうか。

「貴公は？」

「血が薄いとはいえ狩人ですから。ちよつと瀉血すれば何ともありません。むしろ只人で影響がないなんて寮監はどうかしていますね。

それより、この喧嘩の原因は何です？」

「ヘルマンとドロテアの仲の良さかな。ヘルマンにとって貴公は手のかからない弟で、お兄様は手のかかる兄だそうだ」

「ドロテア先輩は手のかかる妹だと。いつまでそれで逃げてるんだか」

誰がと言わない辺り、ヘルマンとドロテアのどちらにも掛かってい

るのだろう。ケントはダフネに同意を求めたが、ダフネは遠い目をして喧嘩を眺めていた。姉妹で喧嘩は無いと言うが、珍しい物を見たという反応でもない。そもそもお兄様とヘルマンの殴り合いは今期になつて幾度となく目に行っているはずである。

「ダフネ？」

「え？」

「いや、いつまで兄妹のつもりなんだろうかとケントが」

「マリアとケント君が？ 付き合ってたの？」

「違います。ヘルマンとドロテア先輩です」

「ああ……うん、ごめん。聞いてなかった」

そう見えるのかと訊きたくもあつたが、それ以上にダフネの様子が気になつた。お兄様達も同様で、休戦してダフネをじつと見ていた。

「お茶淹れますか？」

「ありがたいが、ケントの次の授業はいいのか？」

「同学年みんな倒れてますから授業はありませんよ。姫様とダフネ様は？」

「次は防衛術だから実質休講だ」

防衛術の後任は決まらず、重要な試験の有る5年生と7年生にのみ寮監が臨時で教鞭を執り、他は自習となつている。今まで教わつた事が無い言葉が頻出する嫌がらせだという評判だが、教科書を普通に読んでいれば理解できる内容でもあるというのが蛇寮の一部と驚寮生全体からの評価である。それだけ今までの防衛術教育は杜撰だったのだろう。寮監がそのまま兼任した方が学徒の為ではないだろうか。

ケントは平鍋に茶葉を流し込み、そのまま火にかけ始めた。

「チャイか？ 食堂から牛乳を貰ってくるか？」

「いえ、ホウジチャというものです。茶葉を炒つて香ばしさを加える淹れ方で、苦味が減つて口当たりはあつさりします。ヘルマン、すみませんが皆さんにこれを配ってください。干し柿は以前お渡しした事がありましたよね」

「ああ。最初は白カビが着いているのかと思つたよ」

「糖の結晶ですつて説明しても警戒されたのは参りましたよ。貴腐ワ

インみたいにそうして乾燥を早める製法もあるみたいですけどね」

ケントが平鍋を揺するにつれ、香気が部屋に満ちていった。湯呑に注がれた茶は澄んだ琥珀色で、紅茶とも異なる。

「良い香りだ」

「珈琲とは違って焙煎したての方が香りを出しやすいですからね。お代わりも直ぐ出せますので、熱いうちにどうぞ」

一口含むと、湯の色からは想像出来なかったあっさりとした味わいがあり、仄かな甘みが舌に残った。干し柿の甘さを塗り潰すではなく、その隙間に染み渡る様な香気と甘みである。

しばし言葉も無く賞味していると、知らずと2杯目をケントに注いでもらっていた。

ダフネも茶を愉しみ、幾分か落ち着いていた。それを狙ったの選択だろうが、カモミールやエルダーフラワーといったあからさまな鎮静作用のあるものを選ばない辺り、ケントの気遣いを感じ取れる。

「ありがとうケント君。おいしいわ」

「お粗末様です」

ケントは再び鍋を揺すり始め、ヘルマンはその所作をしげしげと眺めている。

「それで？」

「……妹の事で。マリアは会ったとき、どう思った？」

「快活だったな。絵画に親しんでいたことは雰囲気には合わないとも思ったが、力強さがあった。次の夏にまた見せてもらいたいものだ」

別段ヤーナムの外の子供を知るわけでもないが、父母や友人ではなく風景画を描き、その題材も静かな朝というところは気になった。だが、その中で力強い生命の息吹は感じ取れた。

「本当にそう思う？」

「ああ」

「グリーングラス家の血は呪われているの」

「何かの比喩か、それとも字義通りか？」

「血の呪いよ。聞いたことはあるでしょう？」

血の呪い。

獸の病が血液感染する呪詛であるならば、血の呪いは遺伝性疾患である。

「あの子は明るいわけじゃなくて、家族を落ち込ませない様に明るく振る舞ってるだけ。絵が趣味なんじゃなくて、家族を心配させない様に外を出歩かないだけ」

名家の血が呪われている。それが信憑性の無い噂だとしても忌避する者は多いだろうに、次期当主がそれを認めてしまっている。軽々に口に出していい事ではないだろう。故に、それを口に出してしまう事は、ダフネの精神の疲弊を表わす。

「つまり、兄弟喧嘩を見て妹を想ったと。しかし何故それを今になつて？ 俺とヘルマンの殴り合いなんてよく見ているだろう？」

「第一、僕らに聞かせていい話でもないだろう。もちろん、僕らが血の呪いを聞いたからといって君への態度を変える事は無い。多くは語れないけれど、僕らもまた呪われた存在だからね。だが、君の中では大きな葛藤があったはずだ。同情を引こうとするつもりなら止めておくといい。助けてくれと言われたら可能な限り助けるけれど、助けてやろうと傲慢な事を言うつもりはないよ」

「ヘルマン。加減しろ莫迦」

お兄様がヘルマンを黙らせた。ヘルマンの言葉に苛立ちはあるが、筋は違えていない。助けてくれと鐘を鳴らされたならば助けるが、勝手に事情に立ち入る者は侵入者である。

「クリスマスに家に帰った後、父がアストリアを学校に通わせないと決めました。継承者の敵が本当に純血を狙わないという保証もありません。血の呪いを受けている者なら尚更に。そしてこの事件によつて、反純血の気風は更に勢いを増すでしょう。あの子を心配されている母を想つての事でした。」

あの子はここ数年で久しぶりに大泣きしたんです。

私は学校に通えるのにずるいと。顔も見たことも無い遠い先祖が受けた呪いを、何故子が受けなければならないのかと。私がどこから媚を貰つて子を成す頃には、自分は死んでいるのだろうと。こんな想いをするくらいなら生まれたくなかつたと。血を継ぐためだけに

子供を作つて、その子供に呪いを継がせて何がしたいのかと。

私も両親も何も言えませんでした。使用人だけが、あの子を抱きしめて一緒に泣いていました。あの子に何も言えないまま、私は学校に戻りました。

これからウィーズリーの子が継承者だったと皆が知れば、より反純血主義は強まるでしょう。純血なんて悪の枢軸でもなくて、ただその様に生まれたただけなのに、石を投げつけてもいい存在になる。そうならば、私もここにはいらなくなるでしょう。あの子の嘆きを受け止められないまま、私も死の影に怯えながら、あの子を看取ることになる。

お父様とお母様は、初まりこそ家の事情でしたが、私と妹を愛しています。2人が愛し合ったからこそ私達が居るのに、それをあの子にデイルク先輩とヘルマンの様な喧嘩をして教える事は、私には無理だったんです。

……私もこの血を恨んでいますから」

ダフネは目を見開きながらも涙を頬に伝わせている。

ダフネとアストリアの嘆きを、小ウィーズリーが親を詰つたものと同じとは言いたくはない。

友人ではあるが、出来る事など何も無い。その痛みに共感する事で呪いが解ける事は無く、かといって鼓舞する言葉も見つからない。ダフネと笑い合う日々の中で、その呪いの影を知らずにいた自分が何を言えようか。

ヤーナムは医療の街ではあるが、血の呪いを解呪したという研究報告は無い。ヤーナムに限って言えば、世で言われる血の呪いの罹患者は皆無である。それは漁村民が願い、ゴースが与えた呪いの方がより強く発現しているのか、あるいは単純に呪いを受けた血脈が無いのかは定かではない。

「……夏の間には錬金術を学び始めたというのは、賢者の石に希望を見出したか。元は驚察に入りたかつたとも、薬学に興味があるということも、マリアから聞いている。全てはその治療を志してか」

「はい。でも、浅はかでした。何世代もその呪いに怯えているのに、賢

者の石を知らないはずもありません。結局、あの霊薬に解呪の力は無いと、4世紀前の祖先の手記に遺されていました。それに……」

「ヴォルデモート以前の大犯罪者達が狙わないはずもないですよ。フラメル氏が真つ当な医療者で、霊薬が不老不死の肉を作り出すなら、今頃医術なんて概念は無いでしょうし。多分、死に瀕した者にだけ、ほんの僅かな延命をさせるんでしょう。」

姫様の狩った獣は、獣になった事で霊薬が真に霊薬としての力を現したのか、それが啜った一角獣の血の力か、元々軟い骨肉の代わりに回復力に優れる獣に変態したのか」

ケントがダフネの湯呑にお代わりを注いだ。

殉教者の獣、クイレル。その特性は既にビルゲンワースの知識に組み込まれている。お父様の言葉を受け、ある種の恥とも感じたせい、ケントに詳らかに語った事はない。ケントはビルゲンワースを参照したのだろう。

「父母もヤーナムという街の名を知っていました。いずこかに消えてしまった医療の街と。私に言われてから、ドイツ系の名前を持つ同輩を思い出した様ですが、そうした術を掛けているんですか？ 卒業したら、私も皆さんを忘れてしまうのでしょうか」

「いや。単純に当時の狩人が目立たなかったというだけだろう。そもそも僕らは闇に紛れて獣を狩る者。魔法省でも僕らの実態を知る者は限られている。こうして石や蛇の騒動に関わる事は異例だ。御当主様にしても、ビルゲンワースにしても、蛇狩りに狩人として関与していると言われるとは思わなかった」

確かにポーン家は長命であるが故に、特殊な化粧や魔術によって老化している様に見せたり、その子供を装ったりして旧友と逢う者も居る。あるいは接触を断つ者も居る。それ以外の狩人は地底人と呼ばれる様な者でなければ只人と同じ様に歳を重ねる。それでいてヤーナムの名が然程知られていないのは、かつて狩人とは何者であるのかを知られない様にしてきたからである。

今でこそ、血統魔術を継ぐ者であるという程度は語ってもよいことになっているが、幾つかの知識は街の外に持ち出してはならないと就

学前に教わる。もつとも、宇宙は空にある、脳に瞳を得るなどという言葉で只人が何をか理解できようか。

「僕らがどうあれ、問題なのはグリーングラス家の血の話だ。結局のところ、肝心な話を聞いていない。君はどうしたいのか」

ヘルマンの言葉はヤーナムの民から話題を逸らすためのものではない。つまるところ、いつもと同じ意志の話である。

「……分かりません。死は恐ろしいけれど、それを恐れて何もかもから目を背ける事が正しいとは思えません。妹にも、心から笑って欲しい。助けて頂けるなら、助けて頂きたいです。けれど、もうグリーングラス家は幽かな希望に縋る事に疲れてしまっています。友人という立場を使ってヤーナムの力を借りる様な事もしたくはありません。結局助からなかったとき、マリアや皆さんと変わらず友人としてられるか、私には分かりませんから。」

でも……やっぱり、辛いです」

見えた希望が偽りであったと知ったとき、ルドウィークは人を失った。狩人は偽りの輝きを追い、谷底に突き落とされる。それを知っているからこそ、軽々しく慰めの言葉を紡ぐことは出来ない。

だが、ダフネの嘆きに「分かるよ」とも「聞けて良かった」とも、知った様な言葉で共感したつもりになる事は、友人ではない。

昨夏は狩人としてではなく、只の友人としてハーマイオニーと共に行き、クイレルを殺したのだ。だが、ダフネはそれを止めた。友であるからと、易く狩人の力を求める事は違うと。

違うのだ。友であるからこそ、側に在りたいのだ。狩人としてではない、マリア・アイリーン・ボーンとして、ダフネ・グリーングラスと共に在りたいのだ。

「O Freunde, nicht diese T·ne. S
ondern la·t uns angenehme an
stimmen und freudenvollere。」

「……なんて?」

「ああ友よ、この様な調べではない。心地よく、喜びに満ちた歌を始めよう。意識すると、友人なのだから、哀切極まる祈りではなく、共に

在る様に笑ってくれといったところでしょいか。

姫様の不安の表れです。聞かされていなかったとはいえ、一年半も共に過ごしてきて何一つ気付けなかったのに友人でいていいのかと。

僕としてもそんなギクシヤクする先輩と姫様を見たくはないので、お二人とも素直になつてください」

ケントに解説されるうちに、こうして誤魔化す事でしか心を伝えられない事に羞恥が込み上げてきた。

「うるさいだまれ」

「まあ……マリアの言う事ももつともだね。マリアがグリーングラス家の事をどうにか出来るとは言わないけれど、このままではどうにもならないと分かってしまったことを、傍で見えていなければならぬ痛みは分かるだろう。その痛みを与えたいわけでもないだろう？」

君の葛藤も分かるさ。去年、石の護りにマリアが挑もうとした時、止めただろう。マリアとグレンジャーを待ちながら、泣いていただろう。それを今になって狩人に助けてくれとは言いたくは無いだろうし」

「無論マリアだけではない。俺もまた、後輩の苦しむ姿を座して眺める様な事はしたくはない。助けるとは確約しないが、助けになる様に精励することは確約しよう。」

経緯がどうあれ、教会の教えを継ぐ狩人は医療者だ。血の呪いを病と捉えれば、それを剋する事に狩人としての在り方は揺るがない」

「絶望に苛まれて獣になられても困りますしね。いや、あるいは本当に狩った記録もあるかもしれないよ。名家の力ある血です。その絶望にくべられる祈りも大きいでしょう。それに、獣となったグリーングラスを狩った時、マリアもまた獣に成るかもしれない。」

……建前としてはこんなところでいいでしょうか」

ヘルマンもまた、ダフネに名前前で呼ぶことを許す程度には彼女を好意的に見ている。しかし、それ故にヤーナムの力を使う事は摂理に反すると考えている様だった。

今日のヤーナムは人にして上位者たるボーンの血族を擁し、惨劇から湧き上がる獣の病を根絶せんが為に在る。だが、世界中の戦争を終

結させ、貧困と飢餓を失くすわけではない。人の世が起こす事は人が解決するべきであるからだ。悪夢から人の世に零れた血の飛沫を拭い去る事がヤーナムの使命であり、上位者の血を以って現実を好き勝手に塗り替える事は赦されない。

そして、アメンドーズの様に長い腕を幾本も持つわけではない。救える人の数は少なく、水を掬ぶ様にその指先から零れる事もある。その現実を前にして、自らの友であるからと救う事は少なくともヘルマンにとっては不誠実なのだろう。

「貴公も不器用だな」

「線引きは必要ですからね。英国魔法界の成人は17歳ですが、17年と16年364日とではどれ程違うのか。では364日と363日とではどう違うのか。363日と362日では？ それを繰り返せば、生後1秒でも成人ですよ。それが実際にどういうものであれ、そうだと決める事が重要なんです」

「何とどう向き合うかを決める事は、自分が何者であるかを決めるという事ですか。じゃあドロテア先輩にはどう向き合うつもりなんです?」

「五月蠅い黙れ」

ヘルマンはケントを睨むが、ケントは目も合わせずに給仕を続けた。

「何だ？ 僕がそんなに嫌いなのか?」

「いえ？ 普通に尊敬してますよ」

「なら「敬愛するツアイス先輩」と言ってみろ」

「Ch o s u g o i Z e i s s d a i s e n p a i w o m
a j i d e s o n k e i s h i t e i m a s u」

「英語で言えよ」

「あい かーんと すぴーく いんぐりっしゅ」

「マリア。先輩として言う。コイツを躡けてくれ」

「よしよし、良い子だ」

猟犬にそうする様にケントの頬を撫でてやると、ケントはもう一つ干し柿を出してくれた。汝右の頬を撫ぜられれば左の頬も撫ぜられ

るが為に菓子を差し出せ。気の利く後輩である限りは今後も撫でてやろうと思う。

ダフネの涙が失せ、自然に笑える様になった頃、お姉様とドロテアが帰ってきた。談話室の一角を占領する靄の結界に驚くかと思えば「また喧嘩？ 飽きないねー」というドロテアの言葉にダフネがまた笑った。結界を解くと、泣き疲れたのだろうダフネは部屋で午睡を取ると言う。天文学の時間までには目の腫れもひくだろう。

ダフネが女子房に入ってから、ヘルマンが口を開いた。

「よくやったケント。僕はこういう事に不慣れだからね」

「いえ、ヘルマンの援護のお蔭です。デイルク様や姫様をダシにしてダフネ様を笑わせるわけにはいきませんからね」

「私の友人の為なのだから、別に気にせずとも良いのだが」

「僕自身が姫様を小道具の様に扱うのは嫌ですから。それと、ヘルマン。一応誤解の無い様に言っておきますけど、尊敬しているのは本当ですから」

「少し疑ったよ」

「何があったん？」

ドロテアが小首を傾げながらヘルマンに問う。お姉様は干し柿をナイフで切り分けていた。

「グリーングラス家は痛っ！ いや、すまない。今のは僕が悪かった。血の呪いの罹患者だそうだ。噂は聞いていたけれど、やはりね。」

で、黙ってますが……デイルクは何か思いついたんですか？」

ヘルマンは周囲の寮生に聞かれない様に、ドロテアに囁いた。耳元に吐息が当たったのか、ドロテアは肩を跳ねさせ、ヘルマンの顎を打った。

お兄様は目を瞑り、眉根を揉んでいる。

「白い丸薬は論外だな。血に潜む虫は呪われている状態こそ正常なものとして捉えているのだろう。グリーングラス家の先祖が賢者の石による霊薬を取り込んだとして、解呪に至らなかった理由をそこに求める事も出来る。輸血液は誓約を結んだ狩人でなければ意味が無く、ダフネ嬢にしてもアストリア嬢にしても下手をすれば内在闘争によ

る獸化の危険性がある。瀉血をするにしても、血の全てが呪われているとすれば行き着く先は木乃伊だ。では白血病の様に造血器官の移植ではどうかと考えれば、それも結局呪われている部位はどこか、移植したとてそれさえも呪われるのではないかという話になる。

では血の呪いとは何故発現するのか？ 全てのグリーングラス家の血族が呪いを発現させるならば、とうに血は絶えているはずだ。

そこに手掛かりがある様に思う。星の子等が成長すれば星の娘に成るのかどうかは分からないが、成ると仮定しよう。では、あれらが加齢によつて変態するのであれば、イズは暴かれていなかっただろう。野良エーブリエタースの大群に囲まれたレバーなど考えたくもない」

「驚いた。本当に真面目に考えてる。

まあ、イソギンチャクの砲台でさえ苦労しますからね。それで得られるのが玩具みたいな傾神秘の結晶ですが、あれ悪意の塊にしか思えませんよ。

ボーンの血族は肉体の全盛期までは成長しますけど、別に変態するわけじゃありませんしね。それとも、何かがあれば新しい腕や尻尾が生えるんですか？」

ヘルマンは事も無げに言うが、いつかは老いたヘルマンやドロテアを看取る時が来る。老婆となつた狩人の葬儀で、若いままの姉達が静かに佇み涙を流していた事を思い出す。彼女らにも、お兄様とヘルマンの様に殴り合い笑い合う日々があったのだろう。

「知らんのか。兄が言うには、父上は酔つて蛞蝓になつた事があつたそうだよ。冗談か何かの比喩かは知らんが、人形に訊けばクスクス笑っていたのが不気味だったな」

今日に於いて交通の要衝たる狩人の古工房であるが、人形が未だなお安置されている。誓約を結び、狩人となつた者には、彼女が動き、庭園を掃き清める姿を見る事も出来る。寒い日には茶と菓子を出してくるなど、夢幻の内にあるヤーナムでは決まりきつた事しか語らない彼女に比べれば些かの人間味を見せるが、それがかえつて不気味でもある。

「ただひたすらに血を啜り、遺志を貯め込んだところで何者にも成り得ないのだろう。その手段によってアンナリーゼ女王が不死となった事は驚嘆する他無いが、女王は上位者ではない。あのお方自身には神秘の業や血の力を扱う術がないからな」

「殺しても死なないというのはある意味どの上位者よりも優れた者ですけれどね。その肉片をその加害者の眼前で拾ったという御当主様はどの様なお考えだったのか……」

「訳も分からず獣狩りの夜に巻き込まれたのです。事前知識の有る私達ではその恐怖や困惑は計り知れませんが、何がまともで何が狂っていたのかなど、私達が断ずる事は出来ないわ。臍の緒と呼ばれた寄生虫の血を啜った理由も、それこそ天啓としか言えないでしょう」

女王の血を啜り、臍帯血によつて上位者に至り、そして望んだ女を孕ませた事で夜を明かした。改めて整理すると、お父様の行いは意味不明である。

肉片を持ち運び、それをふと思い立つて祭壇に捧げる事で復活させるという意味不明さはどうかしていたと、お父様自身が語った。

正史となっている最後の夜では、お父様はアルフレートに招待状を渡さなかった。夜が明け、医療教会の欺瞞と処刑隊の末路を懇々と説き、共に血と瓦礫の散乱する街を清潔にしたという。ジェラルドの様に処刑隊の遺志を継ぐ者は、今日ではヤーナムの治安を担う者となっている。

「妻達の尻に敷かれ、上位者になってなお女王に傳くとはつくづく女は恐ろしいものだ。アンナリーゼ女王がその気になっていれば俺の母親は4人いたかもしれないな。いや、あるいは既に俺の知らない異母兄弟がいるかもしれない。英雄色を好むと好まざるとに関わらず、胤を請われる事は有るだろうからな。」

……話を戻そう。血の呪いとは、何かによつて発現するものだとみていいだろう。因子こそ継がれるが、発現するかは別なのだろう」

「無能者と同じ。血中に虫がいたとして、それが魔力を生じるかどうかは別の問題。無能者同士の子であっても、魔力を発現させる者も居

る。そういう事かしら」

「逆でもあり得るんじゃない？ 何かの作用で本来発現するはずの呪いが抑制されているとか。どっちにしたって、何か切っ掛けになつてゐるのはデイルク先輩にさんせー。」

ケント、お代わりちよーだい」

「はい喜んで」

夏にグリーングラス邸を訪問するまで、ダフネに妹が居る事は知っていたが、どの様な子であるのかは知らなかった。ダフネからもこれといって伝えられることも無く、夏になりようやくその人となりを知ったつもりでいた。

ダフネとアストリアの違いとは何であろうか。知ったつもりであつたアストリアは向日葵を思わせる明るい少女だったが、それは擬態であるということだつた。目を追う様に笑顔を見せているだけで、実際は硬い殻を纏っている。

あるいは、ダフネもそうなのだろうか。慈愛を以って接している様で、その中の昏い怯えを覆い隠していた。それは、ダフネからの信頼を得ていないということだろうか。

「マリア。また悩んだ顔をしているわね。ダフネから嫌われていたんじゃないかって心配しているのでしょう？」

お姉様が湯呑を置いて、嘆息した。開心術を使うまでも無く心を見透かされていた。

「それは違うわ。友達だからこそ、言いたくない事もあるでしょう。友達という立場に甘える事を恥じて、友達では無くなってしまう事を恐れて、余計に言えなかったのよ。クリスマスに妹さんの事があつて堤が破れてしまっただけで、いつかきつと話すつもりだつたと思うわ。」

だつて、いつ急にお別れを言う事になるのか分らないと思えば、そちらの方が恐ろしいもの。マリアもいつか血に吞まれてダフネを殺める事になるかもしれないなんて、ダフネに伝えた事はあつて？

第一、嫌っているのなら同じ寝室を使うはずもないでしょう？

それに、無二の友と思うのなら、たとえ与えてもらわなかつたとし

ても与えなさい。与えられたから応えるのでは、ただの商売相手でしょう。愛とは見返りを期待しない事、与えられずとも変わらなく想い続ける事よ」

「……心得ました」

お姉様は親しまれているが、特に親しい友はいないと、ドロテアが言った事がある。曰く「イングリットはね、友達の基準がキビしいんだよ。それに卒業したら会わなくなるだろう人間とそんなに関わってたら、後で辛くなるしね。誰にでもあらあらうふふって愛想振りまいてるのも、逆に近寄らせない為のシヨセージュツってワケ。なのに勘違いした男子が言い寄ってくるって嘆いてんだから若干アホだねー」とのことだった。

阿呆呼ばわりには同意しかねるが、お姉様の人との距離感が独特である事は分かる。そんなお姉様だからこそ、ダフネを想う気持ちに嘘は無いのだろう。

「さて、今日明日でどうにかなるものでもないだろうが、教室棟、実験棟、メルゴーの高楼、それらしきところは探してみよう。狩りではなく、学ぶとあらば久しぶりに学徒の正装に身を包むことになりそうだな」

「マントの有無は？」

「無くていいだろう。ミコラーシユに同族と思われても腹が立つ」

狂人ミコラーシユ。装いこそビルゲンワースの学徒のものであれ、その思想はかけ離れている。脳に瞳を得るといふ、即ち蒙を開くといふ言葉を、物理的に実行しようとした連中の首魁である。確かにあれらが行った儀式は月を呼び、上位者に見えた。しかし、その上位者の名も知らず、その上位者から与えられた慈悲は、文字通りに瞳を得た脳だけであった。

肉体を木乃伊にやつしてなお、悪夢の中で上位者との語らいを求め、それが身にまとうマント。それは、在りし日への追憶を意味するのだろうか。

ゲールマン翁は MARIA への想いを人形に込め、そして捨てた。ミコラーシユが操る傀儡人形には、何が宿るのだろうか。

鋏

森に緑が萌す頃、遂にマンドレイクが成熟の時を迎えた。もつとも、ここから工程を経て、薬となるにはさらに時間がかかるという。寮監の助手としての任は終えたが、何かできる事が有れば手伝いたい。

「上級生が既に危険な収穫を終えてくれますので、今日の授業では植え付けを行います」

スプラウト教授が説明を行っているが、学徒は一樣に教授ではなく吊られたマンドレイク達に目を向けていた。首の部分が括られ、壁際に張られた縄に結ばれている。どう見ても絞首刑のそれであった。

「薬になるのは、この頭とお腹の部分です。精製の際には、皮は邪魔になります。腕や脚は皮を剥くにも、煎じたり刻んだりする時にも手間ですし、そうした手間に対して得られる可用部が少ないのです。ですから、こうして――」

教授は園芸鋏でマンドレイクの腕や脚を断ち切った。マンドレイクは悲鳴を上げているが、血のざわめきは無い。鋏の音と絶叫が上がる度に学徒は肩を跳ねさせ、目を背けていく。

「切除して、種にします。受粉でも増やす事が出来ませんが、こうする事で無駄がありません。さ、皆さん鋏を持ってこちらに来てください」
誰も動かなかった。

「何しているんですか。もう乾き始めていますから耳当ては要りませんよ」

「先生……その……」

「叫んでいたヒトっぽいものの手足を切るって言うのは……」

「残酷」

教授の受け持つ穴熊寮の女子から声が上がる。

「は？ 何を言っているんですか。植物に手や脚が有るはずもないでしょう」

「さつき頭とかお腹とか言ってたじゃないですか」

「そう見える部分と言うだけです。良いですか？ オジギソウは意思

があつて葉を閉じているわけではありません。刺激を受けると水分が移動して、その圧力で葉が動くだけです。マンドレイクも痛くて叫んでいるわけではありません。

さ、皆さんが石になつてしまつた子を助けるんですよ。早くなさい」

博愛の寮とされる穴熊寮の寮監は、もう一つの特徴である忍耐を学徒に強いた。

「マリア」

「何だ」

「無理。やつて」

「私だつて思うところがないではないが。グリーンガラス邸に咲く薔薇の剪定にしたつて、私達が知らないだけで植物なりに切らないでくれと哀願しているかもしれないだろう？」

いや、そもそも普段食べている魚や家畜も、殺さないでくれとそれぞれの言葉で叫んでいる。その死体を好き勝手に切り刻み、焼き、煮て、揚げ、調味した結果が食卓に並んでいる。食べるとは生きとし生ける者全てが背負う原罪だが、己の嗜好に合わせて死体を冒瀆するのはなんと罪深いことか。フオークを口に運び、その味を愉しむ度に死を想え。日々の糧は神ではなく食材となつた生命に祈るべきだな」

「止めて。本当に、止めて。もう食欲なくなつてきた」

「自分が忌避することを私に押し付けた事を反省するんだ。まあいい、ミリセントとパンジーの分もやつて差し上げようか？」

「よくもそんな話を聞かせて恩着せがましい事が言えるわね。やつて頂戴」

「パンジーに同じく。よろしく」

そういうことになつたので、努めて感情を殺して鋏を動かすと獅子寮生達が囁し立てた。

「流石血塗れ女帝。躊躇が無いな」

「見ろよあの冷たい目つき。人の腕でも同じなんだろうぜ」

「同じだった。自分の名前の綴りを間違えない位に当たり前つて顔だった」

「腕砕かれた奴が言うとは違うな」

言われてみれば、悪夢の中とはいえ確かに獣化した者の手足を斬り、殺めている。そう考えると余計に感情が冷えていく。

「早くなつた!」

「あいつヤバイ」

「今更過ぎるだろう!」

まともに取り合うのも馬鹿らしい。自分の分とお嬢様方の分を処理し終わると、教授が近寄っていた。

「手早いのは結構ですが、もう少し愛情が必要ですね。この断面を見てください。硬い部分を力任せに断ち切ったから、端が少し潰れてしまっているでしょう? そうするとここの生育が少し遅れて、歪な形になる事があります。あんな風に」

教授が3つ足のマンドレイクを指し示した。

植物に意思は無いと言ったり愛情を注げと言ったりどうにも精神構造が理解できない。植物学の権威であるからこそ余人とは異なる植物への視点が有るのだろうが、興味が無ければクイディキチと大差ない歪みである。

「ですが真つ先に取り掛かった事からスリザリンに5点! それと切る部位が適切でしたので更に5点です。上出来ですよ、ミス・ポーン」

「はあ……ありがとうございます」

「さ、皆さんも!」

誰も動かなかつた。

「どうしたんです皆さん! 授業放棄ですか!? なら、皆さんの分をミス・ポーンにしてもらう代わりに、一人当たり10点をスリザリンに与えますよ!」

「私がする事は確定なのですな」

帝王の最盛期に生まれた学年であり、他の学年に比べればその数は少ないにせよ、本当に加点されるとすればどうあがいても蛇寮の首位は揺らがなくなる。それに、これはただの授業ではなく、石化した学徒を救う事にも繋がるのだ。

誰かが一步踏み出そうとしたとき、吊るされていたマンドレイクが

呻き声を上げて痙攣した。

「ぼつ、僕がやります」

「あらミスター・ロングボトム。こっちに来てください」

「ほうっ？」

昨年はロングボトムの為に石の護りとして悪魔の罟が用意された様に、薬草学に関しては確かに成績が伸び始めている。しかしこれは学力よりも感性の問題である。ピクシーの件で気を失わないだけの胆力は見せられたが、この作業に向いているかどうかで言えば絶望的である。

「この部分です。鋏は力任せではなく、まず硬い皮だけを剥がす様に刃を入れます。それから一息に、バチンと」

ロングボトムに脚を落とされたマンドレイクは絶叫し、暴れ始める。

「はい、次も手早く。暴れるとそれだけ栄養が逃げていきますからね」
人の心は無いのか。

ロングボトムは既に浅く早い息遣いとなり、鋏を持つ手は震え、唇は青い。

「教授。ロングボトムの様子が尋常ではない様に思いますが」

「大勢に見つめられては緊張もするでしょう。時間は掛かっています
が貴女より上手く出来ていますよ。さ、今度は腕です」

右腕を切り落としたところで、遂にロングボトムは倒れ、悶え始めた。喉を抑えて口を開けたり閉じたりしているが、息は荒くなる一方だった。同様に、左腕だけが残ったマンドレイクも陸に上がった魚の様に震え、その振動は縄を伝って他のマンドレイクにも刺激を与え、絶叫の合唱となっている。

「どうしたんです！」

「過呼吸です。ロングボトム、私を見る。苦しいだろうが、ゆつくりと息を吐け。ひとつ、ふたつ、みつっ……そうだ、吸おうとするな。まずは息を吐くんだ。やつっ、こここのつ、とお、では吸え。そうだ。また10数えながら吐け。」

「トーマス、着いていてやれ。落ち着いたら医務室に連れていけ」

ロングボトムに連れ添うという口実で、何人かが蒼褪めた顔をして温室を出て行った。ロングボトムの方が上手いとされたままであることは癪なので、これだけ練習台が有る事はかえって都合が良い。

「ああ、そもそも鋏の切れ味が悪いのか。なら私の道具を使った方が――」

「君はいつも通りだな」

ロングボトムが蛇寮生に勇を見せたのだ、それに当てられた獅子寮生の男子は多かった。蛇寮生男子もまた、ロングボトムより気概がないとされることは屈辱だったのだろう。齒を食いしぼり、目を閉じながらマンドレイクに鋏を入れていた。

とはいえ、案の定マルフォイやザビニの様な貴族はロングボトムに連れ添うでもなく温室を出て行っていた。その中で、ノットが端正な顔を僅かに歪めながら鋏を握っているのは意外だった。

「貴公、意外だな」

「そうかな。ずば抜けた優等生ではないけれど、不良でもないつもりだけど」

「純血のお坊ちゃんが拷問じみた土弄りとは、それこそ拷問だと思うが」

「ダフネに君がしていた嫌がらせは違うのかい？ けれど、拷問。ロングボトムにとっては何よりも優る拷問だったと思うよ」

「薬草学で失敗する事がか？ 過呼吸を起こしたとはいえ、私より上手いと褒められていただろう」

「違うよ。あいつの親は闇祓いで、死喰い人に磔の呪いを受けて廃人になった。血は出ないけれど痛みに悶える様子は、全くその通りだろう？ 見てみなよ、スプラウトは自分が何をしてしまったのかと気付いた」

教授は脚立に腰かけ、土で汚れた軍手で顔を覆っていた。その涙は土を泥に変えるだろう。

「……分からないな。何故進んで自らの傷を抉る様な真似を」

「君に抉られたからさ」

「私？」

「君は獅子殺しなんて言われているけれど、蛇寮生らしくもない。マグル生まれとも仲がいいし、ロングボトムを野次る事も無いだろう？ピクシーの時だってそうだ。ロングボトムを助けていただろう。ロングボトムにとっては……くっくっ……もしかしたら、君は好意を抱く対象なのかもしれない」

「お生憎だがそうした話はマルフォイとでもしてくれ。パンジーがマルフォイとの距離を詰められないとうるさいんだ。後押ししてやってくれ」

「別に俺は彼とそんなに仲がいいわけじゃない。家同士の付き合いがあるってだけだから。」

ま、ロングボトムにとって君は蛇寮の光というわけさ。邪悪な蛇の巢の中の、善き女生徒であると。それが両親を壊した拷問と似た様な事を、普段と変わりなくこなした。あれにとっては信じた光が汚れて見えただろ。

だから、これは拷問なんかじゃない、ただの薬草学の授業の一環と思い込みたかったのさ」

好意云々はノットの悪ふざけだとは思いますが、それを別にしてもノットの話が真実ならば面倒な話である。ロングボトムに勝手な偶像を与えられ、それと異なるからと衝撃を受けられても知った事ではない。両親が遠いところに行っているというロングボトムの言とも符合するので、全てが憶測と片づけるわけにもいかないだろう。

「で？ 私にそんな話をする為にわざわざ温室に残ったのか？」

「いや。普段と変わらない様に見えて、君は何を思っていたのかと気になってさ。こんな惨状の後に談話室でそんなことを訊こうものなら、慰めているフリをして口説いているのかと勘違いされそうだし、食事時にしたい話でもないし」

「口説いても良いがお兄様に目を付けられるし、私の答えは「すまない」だな。顔が良くて上品な貴族の子としか印象が無い」

「付き合い始めてから印象が変わるかもしれないだろ。君から顔が良いと言われるのは何かの皮肉かい？ けど、口説いても無いのにフラれたのは初めてだよ。残念」

ノットは別に残念でもなさそうに笑った。

「つまり私が貴公の初めての女か……いや、忘れてくれ。一応恥じらひは有るからな。吹聴したら記憶を失うまで殴るぞ。」

ダフネを見る……気付いて目を逸らしたな。後で揶揄われるな。「セオと何話してたの?」「ただの世間話だが」「恥ずかしがらなくてもいいのに」予言者でなくてもそんな未来が見える。

何を思っていたか……そうだな、別に何も、だ。教授の言う通り、意思がないのであればただの作業でしかないし、そうする必要はあるからしたと言うだけだ。トロール殺しに蛇殺し、殺しには慣れているしな。強いて言えば感謝か。食材の話と同じだよ。意思があるかどうかはともかく、少なくともその命がヒトを癒す薬になるんだからな」「ふうん?」成程。為になったよ」

「何の為だ?」

「後学の為さ。ありがとう」

+

結局、退室した学徒の分の加点はされなかった。それどころか、副校長の猫がやってきて、スプラウト教授と共に副校長室にまで来いと言う。

泣き崩れている教授の代わりに「先生の教えとは違って小刀を使っているけど、何か魔術的な意味があるの?」例えば銀が不浄を祓うとされているみたいに。そういえば銀には抗菌作用があるけれどそれが魔法界でも同じ様に考えられているのは興味深いわね。いえ、むしろ魔法界が先に銀の利用を思いついたのかしら。それから後世になって科学が銀の性質を解明した?　つまりツァイス先輩の仰った様に元々美意識や格付けの為に用いられていたところから、遂に非魔法的な価値を見出した……金本位制が管理通貨制度に代わったのは金の持つある種の魔力からの脱却なのかもしれないわ。ああ、これだけで魔法史の論文が書けそう! 『魔法界と非魔法界に共通する貴金屬及び貴石の価値の変遷に関する考察』なんてマリアはどう思う?」「皮を剥ぐ様になって表現が分からないんだけど、環状除皮のこと?」

細胞を傷付けない様にする意図とその後の生育の為としても、根にあ

たる部分でそれを行う事がどれだけ重要なのかしら。いえ、外皮という保護を敢えて傷付ける事で毒素を産生して土中の菌に対抗させるのかもしれないわね。ブドウやナスも傷の周辺にはポリフェノールが多いみたいだし。ジャガイモも種芋の切断面に灰をまぶすけれど、そうした処理よりも自然に任せただ方が腐敗が少ないって聞くわ。生命の力って事かしら」「それよりネビルは大丈夫なの？ 薬学の授業でもあんなに緊張する事は無かったじゃない。秘密の部屋とはまた別の事件が有るのかしら。見ていたけど誰もネビルを呪ってなんかいなかったわ」と、「知らん」の一言で済ませたくなるハーマイオニーの質問攻めを受けていたので都合が良くもあつたが、教授だけならず自分までもが召喚される理由は分からない。

それよりも以前と異なり、こうして機関銃の様に浴びせられる質問の中でもハーマイオニーが他人を気遣った事に驚かされた。彼女もまた、欲求に従うだけの獣ではなくなっていたのだ。親しくも無いロングボトム的事ではあるが、友人として嬉しく思う。

「失礼します」

「ああ、ミス・ボーン。ミスター・ロングボトムの事をありがとうございます
いました」

「お言葉ありがとうございますが、別段礼を言われる程の事でも。運動や吹奏楽に親しむ非魔法族であれば対処法を知る者もいるでしょう。それで何故私まで？ スプラウト教授に落ち度が有る様な気がしますし無いと言えば無い事故でしたが」

ロングボトムの事情に思い至っていればああも事務的に処理を進める事は無かつただろうし、魔法界に過呼吸という概念が無くとも、さっさと医務室に連れて行けば何かしらの処置はされていただろう。責めたつもりも無いが、教授は肩を震わせた。

「いいえ。こうして直接お礼を言いたかつたのです。秘密の部屋の様
な大事でなくとも、他寮の生徒の事も気に掛けていた。校長のお考えは私には分かりませんが……貴女方は立派にホグワーツの一員でしょう」

「地獄の住人の一員とされても……。それに、とある学徒によれば、口

ングボトムがああなった原因は私だとか。蛇寮生らしからぬ女子が残酷な行為を無感情に処理していたから、彼はそれに衝撃を受けたと。蛇寮生ではない蛇寮生ならホグワーツ在校生らしくもないと聞いたところでしょうか」

「誰がそんなことを。まさか獅子寮生ですか!? ミスター・ロングボトムを助けたのは貴女だと言うのに、貴女にそんな心無い言葉を投げかけたと言うのですか!？」

副校長は誤解をしているが、ノットは嫌がらせの為に言葉を寄越したつもりも無い様であったし、面倒だとは思ったが不快になつたわけでもない。

「獅子寮生ではありません。どこの寮生であれ、咎めるべき話でもないでしょう。私も特に改める気はありませんし、本人に悪意は感じませんでした。むしろ、私もロングボトムがああなった理由は気になりましたので。」

あのマンドレイクの絶叫の中で、ロングボトムは闇祓いの両親を想つたとか?」

スプラウト教授が嗚咽を漏らした。

「貴女も知っているのですね……。だからミスター・ロングボトムを気に掛けていたと。貴女がどう接しているかは知りませんが、ピクシーの件ではうなされながら貴女に感謝していましたよ」

「いえ全く。彼のご両親は高名な闇祓いだという事は知っていました。拷問を受けて心が壊れたなどは知りもしませんでした。いえ、先程の学徒からその様に聞いただけで、事実そうであるかは知りませんが。」

ロングボトムを殊更気に掛けたつもりもありません。確かにピクシーの件では、シャンデリアに脚の骨を砕かれながらも意識を失わなかった事を讃えはしましたが、そもそもピクシー如きに吊り上げられる前に握り潰せば良かっただけの事。赤毛でさえ教科書で撲殺していましたので、情けなくは無いが弱い男子と思う程度の事です」

教授陣の反応を見るに両親の件は事実らしい。それを知るとマルフォイの彼への態度は些か不愉快ではあるが、マルフォイはポッター

にせよロングボトムにせよ、親の死を利用して貶める事はしていない。その一線は弁えているのだろう。

「そう頑なにならずとも、感謝は受け取っておくものですよ。あの年頃の男の子はそうした気持ちを女の子に伝える事は難しいかもしれませんが」

「私の偶像を崇められても私からは何とも言えません。蛇寮に犯罪者養成課程という偶像を押し付けられているのと大差ありません。私は私ですから。ポッターが英雄や生き残った赤子である前にポッターでしか無い様に」

「ああ、それもありましたね。ミス・グレンジャーから聞いています。ミスター・ポッターに助言をしてくださいったとか」

「あれに伝えた様に、単に兄達の受け売りです。ロックハートの事を気に病むなら校長を殴れというのは、私の言葉ですが」

「……そうなる前に、まずは私が彼の涙を拭いてあげるべきですね。彼が心の中身を打ち明けられる大人は、ハグリッドだけでしたから」
「私も同じ子供として、生まれた時から利用され続け、頼れる大人は危険生物の違法飼育に手を染めていた犯罪者だけであるなど、見るに忍びありません。嫌いな者であれ、理不尽に弄ばれていることの方が不愉快です。」

「ハーマイオニーから聞き、本人も否定しませんでした。養親の下で犯罪としか言い様のない虐待を受けている様です。昨夏は独善的な屋敷妖精のせいで餓死しかけたとか。もっとも、元を辿れば闇の帝王のせいですが。」

「リドルの亡霊が言うには、ポッターが死の呪詛を生き延びたのは彼の母が命をなげうって彼を護ったからだ。帝王の呪詛より、伯母夫妻の方が魔法界にとつては脅威なのでしょうか。」

「私はそうしないしする義理も無いため、救えなどとは申しませんが、大人として、教育者として、子供に希望を持たせてやって欲しいものです。箒だけではなく」

「無責任で卑怯な言い草だが、別の養親や養護施設を探す事は出来るだろう。かの英雄ポッターの引き取り手など、それが売名目的であれ

いくらでもいるだろう。むしろ売名が目的であれば、ポッターを粗雑に扱う事はしないはずだ。

「お話が私への謝意だけであれば、私はここで失礼しますが」

「……ええ。結構です。それと、貴女方や校長のお考えがどうあれ、貴女方はホグワーツを救ったのです。それを私が個人的に讃える事は出来ませんが……今日の行いは素晴らしいものでした。寮を超え、同輩を想う心と行いに、50点を差し上げます」

「わ、わたっ、私からも、スリザリンに50点」

随分と多いが、それはロングボトムの事ではなく継承者騒動の事なのだろう。であれば、ダフネやハーマイオニーの為に武器を振るった事の価値があるというものだ。

「何よりです。私が顔を出せばまた発作が起きそうですから見舞いには行きませんが、薄情だとは思わないで頂きたい」

継承

蛇寮対獅子寮最終戦。

競技場を満たすのは、罵声の嵐である。それに手を挙げて応えてやれば、実況席からおよそ人のものとは思えない汚言が飛んできた。

その理由も理解出来ないではない。既に今期は寮杯もクイディッチ・リーグも蛇寮の優勝が決まっていたが、だからといって手を抜かない者が蛇寮と獅子寮の主将である。獅子寮は昨季のポッター護送船団を改め、例年通りのチェイサー主体の攻撃偏重戦術をとっていた。一方で、蛇寮の戦術はドロテア発案によるブラッジャー砲戦術が引き続き猛威を奮った。

ビーターであるウィーズリースは無能ではない。だが、一人のプレイヤーの防御に就いたのであれば他のプレイヤーを狙うだけの事であり、戦場全域を護るには筈の性能が絶望的に不足していた。

最後のチェイサーを撃ち抜かれ、獅子寮の勝利はポッターがいかに早くスニッチを獲るかに掛かっていたが、フロントキャプテンはチェイサーとしての役割を捨て、ポッターの進路妨害に終始していた。最早護るべきものも無いケントもそれに加わっている。その庇護の下、マルフォイが悠々とスニッチを探していた。

お兄様が7回目のゴールを決めたところで笛が鳴った。何か反則行為が有ったかと思えば、ヘルマンが空に上がってきた。

「マリア、交代だ。僕が出る」

「最終戦くらいはやる気が出たのか」

「否定はしないさ。デイルクとやるのもこれが最後だしね。それに、チェイサーを落とし切ったから君の役割は終わりだ」

ウッド先輩にブラッジャーを撃ち込んだが、受け止められてしまっている。双子は棍棒を持っているため自衛が可能であり、ポッターに撃ち込めば包囲網を崩してしまう。最早砲台の優位性は無いという事だ。

「そうか。後は頼んだ」

ヘルマンは片手を挙げて応え、飛び去った。来期はヘルマンが最終

学年である。やはり別段クイディッチに興味は持てなかったが、同胞と飛ぶ事は続けようと思う。ドロテアの弁解じみた言葉ではなく、ヘルマンもまた兄の様なものだ。

ベンチに戻れば、そこにはジェラルドが居た。

「ジェラルド。久しいな。蜘蛛狩りにも来ていたはずだろう」

「申し訳ございません。卒業した先輩が顔を出すのは中々恥ずかしいものがあります。それに、ディルク様が率いていらっしやるのに、私が出張るのは礼を失する事になりますので」

「分からないでもないが、なら何故今日は顔を見せた？」

「御当主様からディルク様の最後の出場と伺ったので、馳せ参じた次第です」

「お兄様も喜ぶだろう。ヘルマンとは話したのか？」

「来期は最年長として務めを果たす様にと幾つか説教をしていたら、ビッチに出て行きましたね」

ヘルマンはもつともらしい理屈をつけて、実は説教から逃れる為に選手交代となった様だった。お兄様と飛びたいと言葉の全てが方便ではないと思いたい。

「マリア様も箒の扱いが上手くなられた」

「世辞は要らないさ。狩人の力に頼り切って、選手としては二流以下だと分かっているからな」

「ご謙遜を。不安定な箒の上で棍棒を振り抜く技量は、ビーターとしては必須であり神髄です。あのブラッジャー砲台は狩人の力だけで為せるものではありません」

「そう褒められてもな」

あの試合以来、ヘルマンの言葉通り血塗れ女帝の名は確たるものとなり、獅子殺しという二つ名まで戴くこととなった。獅子寮生から恨まれようともいいが、蛇寮生からも謎の期待を寄せられているのは困る。蛇寮への帰属意識は有るが、学閥抗争に名を連ねる気は全く無い。

「狩人の力と言えば、アウレリア様はブラッジャーを掴んで、それで相手を殴り倒して回っていたとか」

「よく死人が出なかつたな。いや、それよりも何故私の姉の話を貴公の方が詳しく知っているんだ」

「出場したのは一試合だけ、それ以後は永久出場停止だったそうです。家族に話すには恥ずかしく感じていらつしやるのでは」

「それを私に話していいのか」

「ご本人がどう思っているかとはともかく、私共ヤーナムの民にとってみればそれもまたボーン家のご活躍です」

迷惑な話だ。

ケントもまた何かを語り継いでいくのかと思うと、恥ずかしいところは見せられないと身の締まる思いがした。

「それにしても、秘密の部屋とは。昨年度に続き波乱でしたね。イングリット様とドロテアが傷付けられたと聞き、何故あと一年遅く生まれなかつたのかと自らの出生を恨んだものです」

「私が言えたことではないが、お兄様もヘルマンも動転していたな。狩人である以上、死は身近なものであるはずだが、所詮は学校の中と高を括っていた。ホグワーツは地獄だという事を忘れていたよ」

「ヤマムラの子はどうなのです」

「冷静だったさ。少なくとも表面上はな。私も焦ったが、彼の言葉で自分を取り戻した。先輩として恥ずかしい限りだ」

「マリア様も後輩を持つてお変わりになられた。不肖ジェラルド・シユミット、感激の極み」

「止める恥ずかしい」

「ヘルマンに最上級としての振る舞いを心掛ける様に言えば、「先に生まれたからってあれこれと押し付けられるのは嫌ですよ面倒臭い」と。

先輩としての自覚を持って事にあたらうとされるマリア様のお言葉はヤーナムを導くボーン家に相応しいものです」

「貴公、ボーン家の威光で目が眩んではいまいか」

ジェラルドに限らず、ケントは分かりやすく、ドロテアも時折ボーン家への忠誠じみたものを見せる。お兄様とお姉様が良き狩人である事は疑うべくもないが、今のヤーナムはお父様や先人が紡いできた

ものだ。その民にボーン家の血だからと尊ばれるのは何かが違う様に思う。

「はい。ボーン家のもたらした夜明けの光は今もなおヤーナムを照らしております。ですから、ヘルマンもまた照らして頂きたいのです。彼は恐れております。ドロテアを喪いかけ、ボーン家の中でも特に力のあるイングリット様を傷付けられ、そんな場所で最年長としての責任を果たせるのかと。

デイルク様も同じ様に、校長の策謀が渦巻くところで皆を護れるだろうかと夏に零していらっしやった。あのお方の事ですから、普段通り、飄々としている様に振舞っていた事でしょう。それでいて、誰よりも自分を盾に皆を護っていらっしやったはずです。ですが、狩人が2人も倒れた。

ヘルマンのあの弁舌や振る舞いは、支えられているからこそ出来るものです。一步退いて、見極めながら的確に急所を突く。彼の狩りと同じです。それは彼も分かっているでしょう。ですから、本を上梓したり、近接戦の訓練を再び始めたりと、一步前に入る術を学ぼうとしているのです。

ですが、分かっている。先輩に成るとは、後に続く者を、支えてくれる者を信じる事も必要なのです。デイルク様はイングリット様やヘルマン、それにドロテアに何かを任せる事が多かったのではないのでしょうか」

ジェラルドの先輩としての姿は、お兄様を仰ぎ、お兄様を輝かせる照明係だった。それもまた、支え、支えられる関係だったのだろう。

今年度のお兄様の姿を思い返してみれば、調査では皆の発言を促し、戦闘では補助に回る事が多かった。だが、祭壇の間に進む時はお兄様が先頭に立ち、継承者の日記を手を取ったのもお兄様だった。

「ヘルマンは自らが全てを背負う事で、最上級生となろうとしています。自分がデイルク様に支えてもらったから、今度は自分が皆の全てを支えねばと……ですがデイルク様でさえ護り切れなかったと、案じているのです。ああ見えて、彼は人一倍人恋しいのです。どうか彼を、孤独にさせないで頂けませんか」

「分かっているさ。貴公とヘルマンもまた、兄だからな。

それより、一歩進もうと言うならドロテアとの関係もさつさと進めてもらいたいものだが。そちらの方が余程心配だし面倒さ」

「違いありませんね」

滅多に聞かないジェラルドの笑い声は、夏の日差しに良く似合う。その空で、ビーターのヘルマンとチェイサーのお兄様が連携してクアツフルをゴールに叩き込んでいた。

来季はヘルマンがお兄様を継ぎ、チェイサーに成るだろう。自分はヘルマンを継ぎ、ビーターとしてドロテアと組むだろう。

先輩と後輩とは、まさに継承の表れである。